牛頸土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

牛頸日ノ浦遺跡群

大野城市文化財調査報告書
第42集

1994

大野城市教育委員会

牛頸日ノ浦遺跡群（大野城市文化財調査報告書第42集）正誤表

下記のとおり誤りがありましたので、訂正をお願いします。

頁	行	誤	正
10	12	竪穴状遺跡４基	竪穴状遺構４基
30	第28図	７号住居跡実測	７号住居跡実測図
184	33	時期を例記する	時期を列記する
190	4	（第199図参照）	（第197図参照）
〃	22		註２の1977を削除
191	7	前掲註９他、	前掲註８他、

牛頸土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

牛頸日ノ浦（ひのうら）遺跡群

大野城市文化財調査報告書
第42集

1994

大野城市教育委員会



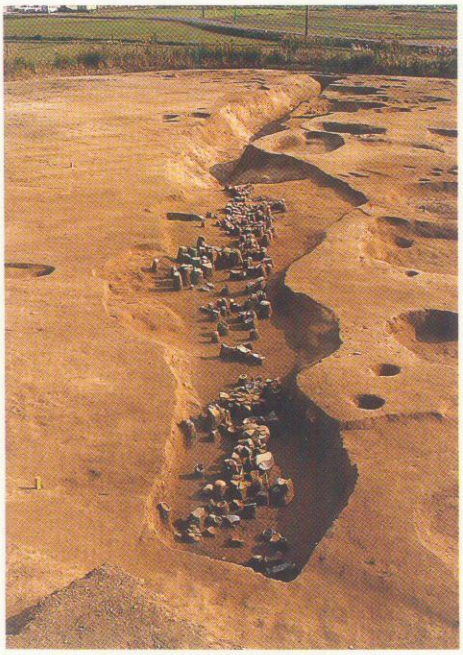
１．SK20出土土器



2．日ノ浦遺跡北半部全景



3．日ノ浦遺跡南半部全景



4．日ノ浦遺跡大溝



5．日ノ浦遺跡SK20

序

一昨年、昨年に続きまして、本年も牛頸土地区画整理に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書を刊行することができました。これまでの4冊が窯跡または古墳の調査報告書だったのに対して、今回は主に集落跡の報告となりました。

本市南部の牛頸、上大利地区には須恵器を焼いた窯跡が数多くあり、牛頸窯跡群として有名です。今回報告する日ノ浦、日ノ浦II遺跡ともにこの牛頸窯跡群の中にあり、須恵器を焼いていた人々に関係の深い場所だと考えられます。また、弥生時代や縄文時代の遺構も見つかり、牛頸地区にはこれまで考えていたよりもずっと前から人々が暮らしていたこともわかりました。今では遺跡は両方とも住宅や道路の下になり、その姿を見ることはできませんが、本報告書によって牛頸地区、ひいては北部九州の歴史の一端が明らかになれば幸いです。

最後になりましたが、調査費の負担をはじめとして終始多大なご協力を賜りました牛頸土地区画整理組合、地元牛頸区の皆さん、種々のご協力をいただいた工事関係者の皆さん、指導・助言をいただいた関係者各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成6年3月31日

大野城市教育委員会

教育長　久野英彦

例　　言

1．本書は、大野城市牛頸土地区画整理組合（理事長　戸渡朋來）より委託を受けて福岡県大野城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。

3．遺物実測は秀嶋和子、岩本真裕美、藤田展格、今芳也、中村幸弘、高橋智也、舟山良一、大谷女子大学考古学研究室が、製図は秀嶋と河鍋洋子が、拓本は井手美智子と牟田昌子が担当した。

4．遺物法量表は秀嶋が担当した。

5．出土遺物については、小破片であったり風化の著しいものは図示しなかった。

6．本書の執筆は、Ⅲ－２－(2)の一部、Ⅲ－３－(2)の一部とⅣ－２を舟山が、Ⅲ－３－(1)を向直也が、その他ならびに編集を徳本洋一が担当した。

7．本書に掲載した地形図には建設省国土地理院発行の2.5万分の１『福岡南部』・『不入道』を使用した。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1
(1)報告に際して……1
(2)調査の経過……2
Ⅱ．位置と環境……6
Ⅲ．調査の結果……10
1．調査概要……10
2．日ノ浦遺跡……10
(1)　縄文時代の遺構と遺物……10
(2)　古墳時代以降の遺構と遺物……15
(3)　その他の遺物 ……171
3．日ノ浦Ⅱ遺跡 ……171
(1)　弥生時代の遺構と遺物 ……173
(2)　古墳時代以降の遺構と遺物 ……177
(3)　その他の遺物 ……181
Ⅳ．まとめ
1．各遺構の時期について ……182
2．廃棄土坑（ＳＫ）出土土器について ……187
3．日ノ浦遺跡の変遷について ……192

表　目　次

表１．牛頸土地区画整理事業地内遺跡地名表……3
表２．牛頸周辺遺跡地名表……7

図　版　目　次

図版 1　(1)　日ノ浦遺跡調査区北半部全景（航空写真）
　　(2)　日ノ浦遺跡調査区南半部全景（航空写真）
図版 2　(1)　調査区北半部近景①
　　(2)　調査区北半部近景②
図版 3　(1)　調査区北半部近景③
　　(2)　調査区南半部近景①
図版 4　(1)　調査区南半部近景②
　　(2)　調査区南半部近景③
図版 5　(1)　1 号住居跡
　　(2)　2 号住居跡
図版 6　(1)　2 号住居跡竈
　　(2)　3 号住居跡
図版 7　(1)　4 ・ 5 号住居跡
　　(2)　6 号住居跡
図版 8　(1)　7 号住居跡
　　(2)　8 号住居跡
図版 9　(1)　9 号住居跡
　　(2)　10号住居跡遺物出土状況
図版10　(1)　11号住居跡
　　(2)　13・16号住居跡
図版11　(1)　14号住居跡
　　(2)　15号住居跡
図版12　(1)　17号住居跡遺物出土状況
　　(2)　18号住居跡
図版13　(1)　19号住居跡遺物出土状況
　　(2)　20号住居跡遺物出土状況
図版14　(1)　20号住居跡竈
　　(2)　21号住居跡
図版15　(1)　22号住居跡
　　(2)　SK01遺物出土状況

図版16 (1) SK02遺物出土状況
(2) SK03遺物出土状況
図版17 (1) SK04遺物出土状況
(2) SK05（部分）
図版18 (1) SK06遺物出土状況
(2) SK07遺物出土状況
図版19 (1) SK08遺物出土状況
(2) SK09遺物出土状況
図版20 (1) SK10遺物出土状況
(2) SK13遺物出土状況
図版21 (1) SK15遺物出土状況（部分）
(2) SK16遺物出土状況
図版22 (1) SK16遺物出土状況（部分）
(2) SK17遺物出土状況
図版23 (1) SK18遺物出土状況
(2) SK19遺物出土状況
図版24 (1) SK20遺物出土状況
(2) SK21遺物出土状況
図版25 (1) SK22遺物出土状況
(2) 4号土坑遺物出土状況
図版26 (1) 11号土坑
(2) 12号土坑遺物出土状況
図版27 (1) 14号土坑
(2) 17号土坑遺物出土状況
図版28 (1) 1号竪穴状遺構遺物出土状況
(2) 大溝内遺物出土状況①
図版29 (1) 大溝内遺物出土状況②
(2) 大溝内遺物出土状況③
図版30 (1) 大溝内遺物出土状況④
(2) 大溝内遺物出土状況⑤
図版31 (1) 日ノ浦II遺跡A地区1号墳周溝完掘状況
(2) A地区日ノ浦1号墳
図版32 (1) A地区日ノ浦1号墳

(2)　A地区日ノ浦1号墳天井石
図版33　(1)　A地区日ノ浦1号墳天井石
(2)　B地区東半部
図版34　(1)　B地区西半部
(2)　C地区東半部
図版35　(1)　C地区西半部
(2)　C地区土坑墓、甕棺墓
図版36　(1)　C地区1号甕棺墓
(2)　C地区2号甕棺墓
図版37　(1)　C地区1号土坑
(2)　C地区2号土坑
図版38　(1)　D地区東半部
(2)　D地区西半部
図版39　(1)　E地区北半部
(2)　E地区南半部
図版40　1号住居跡出土土器
図版41　1号・2号住居跡出土土器
図版42　2号・3号・4号・5号・7号住居跡出土土器
図版43　7号・9号・10号・11号・14号住居跡出土土器
図版44　17号・18号住居跡出土土器
図版45　18号・19号住居跡出土土器
図版46　20号・21号住居跡出土土器
図版47　SK01・SK02出土土器
図版48　SK02・SK03・SK04出土土器
図版49　SK04出土土器
図版50　SK05・SK06・SK07出土土器
図版51　SK07出土土器
図版52　SK07出土土器
図版53　SK07・SK09・SK10・SK13出土土器
図版54　SK13出土土器
図版55　SK13・SK14出土土器
図版56　SK14・SK15・SK16出土土器
図版57　SK17出土土器

図版58　SK17出土土器
図版59　SK17・SK18出土土器
図版60　SK18・SK19出土土器
図版61　SK19出土土器
図版62　SK19・SK20出土土器
図版63　SK20出土土器
図版64　SK20出土土器
図版65　SK20出土土器
図版66　SK20出土土器
図版67　SK20・SK21出土土器
図版68　SK21・SK22出土土器
図版69　大溝内出土土器
図版70　大溝内出土土器
図版71　大溝内出土土器
図版72　大溝内出土土器
図版73　大溝内出土土器
図版74　大溝内出土土器
図版75　大溝内出土土器
図版76　大溝内出土土器、１号竪穴状遺構出土土器
図版77　２号・４号竪穴状遺構出土土器、10号・11号土坑出土土器
図版78　７号・16号土坑出土土器・竈、ピット出土土製品
図版79　ＳＫ19出土土製品
　　ＳＫ04・ＳＫ05・ＳＫ11・ＳＫ16・ＳＫ17・ＳＫ21、１号竪穴状遺構出土土製品
図版80　ＳＫ21出土石製品、大溝出土土製品・石製品
図版81　１号住居跡、ＳＫ04出土鉄器
図版82　20号住居跡、ＳＫ02・ＳＫ05・ＳＫ06・ＳＫ07、ピット出土鉄器
図版83　17号住居跡、ＳＫ01出土瓦
図版84　ＳＫ02・ＳＫ16出土瓦
図版85　１号・２号土坑墓、１号墳、１号土坑出土土器
図版86　１号土坑出土土器、１号墳出土石器、南西隅出土鉄器
図版87　１号墳出土土器

挿　図　目　次

第１図　牛頸土地区画整理事業地内遺跡分布図（１／１万）……折り込み
第２図　牛頸周辺遺跡分布図（１／2.5万）……折り込み
第３図　位置図（１／１万）……折り込み
第４図　日ノ浦遺跡遺構配置図（１／300）……折り込み
第５図　13号住居跡実測図（１／60）……11
第６図　13号住居跡出土土器実測図（１／３）……12
第７図　16号住居跡実測図（１／60）……13
第８図　16号住居跡出土土器実測図（１／３）……13
第９図　１号不整形遺構実測図（１／60）……14
第10図　１号不整形遺構、６号土坑出土土器実測図（１／３）……15
第11図　６号土坑実測図（１／60）……15
第12図　１号住居跡実測図（１／60）……16
第13図　１号住居跡出土土器実測図①（１／３）……17
第14図　１号住居跡出土土器実測図②（１／３）……19
第15図　１号住居跡出土土製品実測図（１／２）……19
第16図　１号住居跡出土鉄器実測図（１／２）……20
第17図　２号住居跡実測図（１／60）……21
第18図　２号住居跡竈実測図（１／30）……22
第19図　２号住居跡出土土器実測図（１／３）……23
第20図　３号住居跡実測図（１／60）……24
第21図　３号住居跡出土土器実測図（１／３）……24
第22図　４号・５号住居跡実測図（１／60）……25
第23図　４号住居跡出土土器実測図（１／３）……26
第24図　５号住居跡出土土器実測図（１／３）……27
第25図　６号住居跡実測図（１／60）……28
第26図　６号住居跡出土土器実測図（１／３）……28
第27図　７号住居跡実測図（１／60）……29
第28図　７号住居跡出土土器実測図（１／３）……30
第29図　８号住居跡実測図（１／60）……31
第30図　８号住居跡出土土器実測図（１／３）……31

第31図　9号住居跡実測図（1／60）……32
第32図　9号住居跡出土土器実測図（1／3）……32
第33図　10号住居跡実測図（1／60）……33
第34図　10号住居跡出土土器・竈実測図（1／3）……35
第35図　11号住居跡実測図（1／60）……36
第36図　11号住居跡出土土器実測図（1／3）……36
第37図　12号住居跡実測図（1／60）……37
第38図　12号住居跡出土土器実測図（1／3）……38
第39図　14号住居跡実測図（1／60）……39
第40図　14号住居跡出土土器実測図（1／3）……40
第41図　15号住居跡実測図（1／60）……41
第42図　15号住居跡出土土器実測図（1／3）……41
第43図　17号住居跡実測図（1／60）……42
第44図　17号住居跡出土土器実測図①（1／3）……43
第45図　17号住居跡出土土器実測図②（1／3）……43
第46図　18号住居跡出土土器実測図（1／3）……44
第47図　18号住居跡実測図（1／60）……折り込み
第48図　19号住居跡実測図（1／60）……45
第49図　19号住居跡出土土器実測図（1／3）……46
第50図　19号住居跡出土土製品実測図（1／2）……47
第51図　20号住居跡実測図（1／60）……47
第52図　20号住居跡竈実測図（1／30）……48
第53図　20号住居跡出土土器実測図①（1／3）……49
第54図　20号住居跡出土土器実測図②（1／3）……50
第55図　20号住居跡出土石製品実測図（1／2）……50
第56図　20号住居跡出土鉄器実測図（1／2）……50
第57図　21号住居跡実測図（1／60）……51
第58図　21号住居跡出土土器実測図（1／3）……52
第59図　22号住居跡実測図（1／60）……53
第60図　23号住居跡実測図（1／60）……54
第61図　住居跡出土瓦実測図（1／4）……折り込み
第62図　SK01実測図（1／30）……56
第63図　SK01出土土器実測図①（1／3）……57

第64図　SK01出土土器実測図②（1／3）……58
第65図　SK02実測図（1／30）……59
第66図　SK02出土土器実測図（1／3）……60
第67図　SK03実測図（1／30）……61
第68図　SK03出土土器実測図（1／3）……61
第69図　SK04実測図（1／30）……62
第70図　SK04出土土器実測図①（1／3）……63
第71図　SK04出土土器実測図②（1／3）……64
第72図　SK04出土土器実測図③（1／3）……65
第73図　SK04出土鉄器実測図（1／2）……66
第74図　SK05実測図（1／60）……67
第75図　SK05出土土器実測図（1／3）……67
第76図　SK06実測図（1／30）……68
第77図　SK06出土土器実測図（1／3）……69
第78図　SK07実測図（1／30）……70
第79図　SK07出土土器実測図①（1／3）……71
第80図　SK07出土土器実測図②（1／3）……72
第81図　SK07出土土器実測図③（1／3）……73
第82図　SK08実測図（1／60）……75
第83図　SK08出土土器実測図（1／3）……76
第84図　SK09実測図（1／30）……77
第85図　SK09出土土器実測図①（1／3）……78
第86図　SK09出土土器実測図②（1／3）……79
第87図　SK10実測図（1／30）……80
第88図　SK10出土土器実測図（1／3）……81
第89図　SK13実測図（1／30）……82
第90図　SK13出土土器実測図①（1／3）……83
第91図　SK13出土土器実測図②（1／3）……84
第92図　SK13出土土器実測図③（1／3）……85
第93図　SK14実測図（1／60）……86
第94図　SK14出土土器実測図（1／3）……87
第95図　SK15実測図（1／30）……88
第96図　SK15出土土器実測図（1／3）……89

第97図　SK16実測図（1／30）……90
第98図　SK16出土土器実測図①（1／3）……91
第99図　SK16出土土器実測図②（1／3）……92
第100図 SK17実測図（1／30）……93
第101図 SK17出土土器実測図①（1／3）……94
第102図 SK17出土土器実測図②（1／3）……95
第103図 SK17出土土器実測図③（1／3）……96
第104図 SK18実測図（1／60）……97
第105図 SK18出土土器実測図①（1／3）……98
第106図 SK18出土土器実測図②（1／3）……99
第107図 SK18出土土器実測図③（1／3）……100
第108図 SK18出土土器実測図④（1／3）……101
第109図 SK19実測図（1／30）……102
第110図 SK19出土土器実測図①（1／3）……103
第111図 SK19出土土器実測図②（1／3）……104
第112図 SK19出土土製品実測図（1／2）……104
第113図 SK20実測図（1／30）……105
第114図 SK20出土土器実測図①（1／3）……106
第115図 SK20出土土器実測図②（1／3）……107
第116図 SK20出土土器実測図③（1／3）……108
第117図 SK20出土土器実測図④（1／3）……109
第118図 SK20出土土器実測図⑤（1／3）……110
第119図 SK20出土土器実測図⑥（1／3）……111
第120図 SK20出土土器実測図⑦（1／3）……112
第121図 SK20出土土器実測図⑧（1／3）……113
第122図 SK20出土土器実測図⑨（1／3）……114
第123図 SK20出土土器実測図⑩（1／3）……115
第124図 SK20出土土器実測図⑪（1／3）……116
第125図 SK21実測図（1／30）……117
第126図 SK21出土土器実測図（1／3）……118
第127図 SK22実測図（1／30）……119
第128図 SK22出土土器実測図（1／3）……119
第129図 SK・竪穴状遺構出土石製品実測図（1／2）……120

第130図 SK出土鉄器実測図（１／２）……121
第131図 SK出土瓦実測図①（１／４）……折り込み
第132図 SK出土瓦実測図②（１／４）……折り込み
第133図 大溝遺物出土状況実測図①（１／60）……折り込み
第134図 大溝遺物出土状況実測図②（１／60）……折り込み
第135図 大溝出土土器実測図①（１／３）……123
第136図 大溝出土土器実測図②（１／３）……124
第137図 大溝出土土器実測図③（１／３）……125
第138図 大溝出土土器実測図④（１／３）……126
第139図 大溝出土土器実測図⑤（１／３）……127
第140図 大溝出土土器実測図⑥（１／３）……128
第141図 大溝出土土器実測図⑦（１／３）……131
第142図 大溝出土土器実測図⑧（１／３）……131
第143図 大溝出土土器実測図⑨（１／３）……132
第144図 大溝出土土器実測図⑩（１／３）……133
第145図 大溝出土土器実測図⑪（１／３）……134
第146図 大溝出土土器実測図⑫（１／３）……137
第147図 大溝出土土器実測図⑬（１／３）……138
第148図 大溝出土土器実測図⑭（１／３）……139
第149図 大溝出土土器実測図⑮（１／３）……140
第150図 大溝出土土器実測図⑯（１／３）……141
第151図 大溝出土土器実測図⑰（１／３）……142
第152図 大溝出土土器実測図⑱（１／６）……143
第153図 大溝出土土器実測図⑲（１／６）……144
第154図 大溝出土土器実測図⑳（１／６）……折り込み
第155図 大溝出土土器実測図㉑（１／６）……折り込み
第156図 大溝出土土器実測図㉒（１／３）……147
第157図 大溝出土土器実測図㉓（１／３）……148
第158図 大溝出土土器実測図㉔（１／３）……149
第159図 大溝出土土器実測図㉕（１／４）……150
第160図 大溝出土土製品・石製品実測図（１／２）……151
第161図 １号竪穴状遺構実測図（１／60）……152
第162図 １号竪穴状遺構出土土器実測図①（１／３）……153

第163図　1号竪穴状遺構出土土器実測図②（1／3）……154
第164図　2号竪穴状遺構実測図（1／60）……折り込み
第165図　2号竪穴状遺構出土土器実測図（1／3）……155
第166図　3号竪穴状遺構実測図（1／60）……156
第167図　3号竪穴状遺構出土土器実測図（1／3）……157
第168図　4号竪穴状遺構実測図（1／60）……157
第169図　4号竪穴状遺構出土土器実測図（1／3）……158
第170図　3号土坑実測図（1／30）……159
第171図　10号土坑実測図（1／30）……160
第172図　11号土坑実測図（1／60）……160
第173図　13号土坑実測図（1／30）……161
第174図　16号土坑実測図（1／30）……162
第175図　3号、10号、11号土坑出土土器実測図（1／3）……163
第176図　13号、16号土坑出土土器実測図（1／3）……164
第177図　1号、2号、8号土坑実測図（1／60）……165
第178図　4号、7号、9号、12号、14号、15号土坑実測図（1／60）……166
第179図　5号、17号土坑実測図（1／60）……167
第180図　7号、14号、15号土坑出土土器実測図（1／3）……168
第181図　7号土坑出土竈実測図（1／3）……169
第182図　ピット出土土製品、鉄器実測図（1／2）……170
第183図　日ノ浦II遺跡遺構配置図（1／300）……折り込み
第184図　1号、2号甕棺墓実測図（1／30）……171
第185図　1号、2号土坑墓実測図（1／30）……172
第186図　1号甕棺、1号・2号土坑墓出土土器実測図（1／3、1／6）……173
第187図　日ノ浦1号墳実測図（1／60）……折り込み
第188図　日ノ浦1号墳出土土器実測図①（1／3・1／6）……175
第189図　日ノ浦1号墳出土土器実測図②（1／6）……176
第190図　日ノ浦1号墳出土土器実測図③（1／6）……177
第191図　日ノ浦1号墳出土石器実測図（1／2）……178
第192図　1号土坑・2号土坑実測図（1／30）……180
第193図　1号土坑出土土器実測図（1／3）……180
第194図　2号土坑出土土器実測図（1／3）……181
第195図　B区南西隅出土白磁実測図（1／3）……181

第196図　Ｂ区南西隅出土鉄器実測図（１／２）　……181
第197図　大宰府史跡出土土器実測図（１／６）　……191
第198図　時期別遺構配置図①（１／600）……193
第199図　時期別遺構配置図②（１／600）……194

Ⅰ．はじめに

1．報告に際して

本書は、牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書の第6集である。これまで第1集；後田窯跡群、第2集；小田浦窯跡群、第3集；後田・小田浦古墳群、第4集；胴ノ元古墳、第5集；月ノ浦窯跡群と、窯跡群と古墳群の調査報告を行ってきた。日ノ浦II遺跡では牛頸地区では初めて弥生時代前期の土坑墓と甕棺墓が確認された。

牛頸土地区画整理事業は、総面積101.2haに及ぶ大規模な事業で、昭和58年に組合が設立され、翌昭和59年10月27日に起工式がとり行われた。現在、事業は終盤を迎えており、かって山林であったところに道路が敷設され、住宅や店舗が次々と建ち並び、新しい街が生まれつつある。

この区画整理事業に伴う発掘調査は昭和57年（1982年）5月の月ノ浦窯跡群の調査をもって始まり、平成3年（1991年）胴ノ元古墳まで9年間を要した。今回報告する日ノ浦、日ノ浦II遺跡は、いずれも昭和63年度（1988年度）に第1次調査を行い、翌平成元年度（1989年度）に第2次調査を行った。

調査に際しては、事業主体者である牛頸土地区画整理組合、工事施工者の皆様、大野城市区画整理課、地元牛頸区の皆様から多大なご協力を頂いた。また、関係各位からは多くの指導・助言を頂いた。ここに厚く感謝の意を表したい。

本市教育委員会歴代の調査体制は以下の通りである。

教育長	二宮親卯
	久野英彦
教育部長	後藤幹生
	村上信幸
	池田嘉門
	助村浩靖
	末増治
社会教育課長	井原信一
	船越美直
	岡部弥之助
	關隆昭
社会教育課長補佐・係長	赤星健彦

		安垣巧高
		青木克正
		白水岩人
		中村　茂
庶務担当主査・主事		後藤秀規
		高橋裕司
		浦山敏弘
調査担当技師		舟山良一
		向　直也
		徳本洋一
同	嘱託	秀嶋和子
		横大路俊明
		下村精一
同	補助員	上野智裕（現稲築町教育委員会）

2．調査の経過

各年度の調査経緯は次のとおりである。

○昭和57年度（1982年度）の調査

1．月ノ浦Ⅰ号窯跡（27地点）　5～6月

2．分布調査　10～11月

3．後田古墳群（2～4号）（42・43地点）　11～翌年2月

○昭和58年度（1983年度）の調査

1．小田浦窯跡群（31～34地点）　11～翌年2月

○昭和59年度（1984年度）の調査

1．下ノ原遺跡（20・24・25地点）　8月

2．小田浦窯跡群（50・51地点）　11～翌年2月

○昭和60年度（1985年度）の調査

1．小田浦窯跡群（37・40・57地点）　10～翌年2月

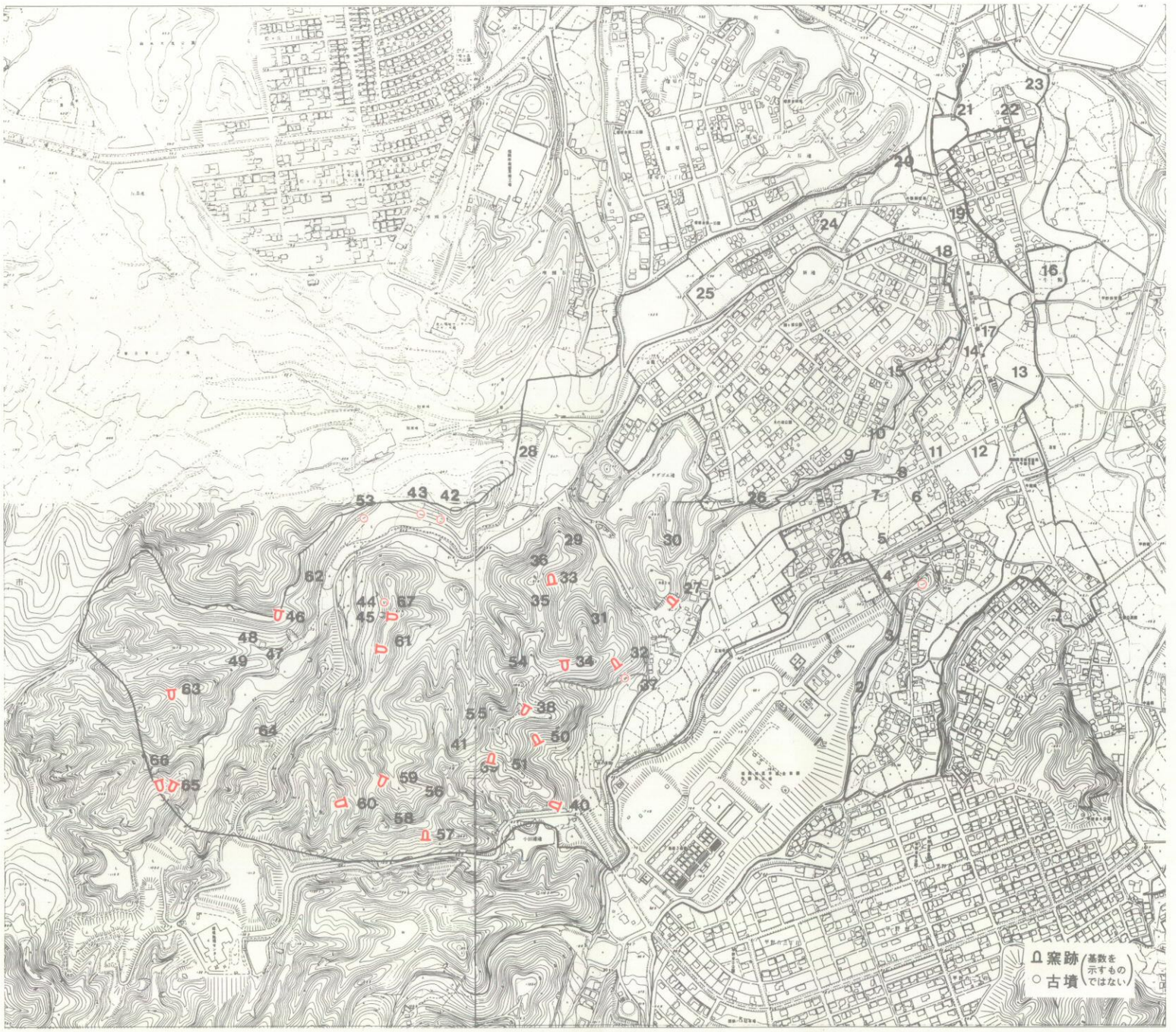
2．後田窯跡群（59・60・63地点）　2～3月

○昭和61年度（1986年度）の調査

1．後田窯跡群（61・65・66・45・46地点）　4～10月

2．小田浦窯跡群（28地点）　10月

3．後田古墳群（44・42・43・53地点）　10～2月



第１図　牛頸土地区画整理事業地内遺跡分布図（１/１万）

4．小田浦古墳群（37地点）　2～3月

○昭和62年度（1987年度）の調査

1．塚原遺跡群（13地点）　4～翌年3月

2．畑ヶ坂遺跡（14地点）　6月

○昭和63年度（1988年度）の調査

1．塚原遺跡群（13地点）　4～5月、8月

2．畑ヶ坂遺跡（14地点）　5～8月

3．日ノ浦遺跡（16地点）　9～翌年2月

4．日ノ浦II遺跡（22地点）　11月、翌年3月

5．塚原遺跡（12地点）　2月

○平成元年度（1989年度）の調査

1．塚原遺跡（12地点）　4月

2．日ノ浦II遺跡（22地点）　5～6月

3．日ノ浦遺跡（16地点）　6～翌年3月

○平成2年度（1990年度）の調査

1．塚原遺跡群（13地点）　7～12月

2．胴ノ元古墳（1地点）　翌年1～3月

表1　牛頸土地区画整理事業地内遺跡地名表

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容	備考
1	胴ノ元古墳	1990（H．2）	円墳1基（横穴式石室）（古）	『牛頸胴ノ元古墳』所収
2	胴ノ元窯跡群		須恵器窯跡1基以上、未確認（古）	
3	胴ノ元遺跡		散布地、未確認（縄）	
4	正楽寺遺跡	1990（H．2）	試掘調査で確認できず	
5		1988（S．63）	〃	
6		1988（S．63）	〃	
7		1988（S．63）	〃	
8		1988（S．63）	〃	
9	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡　窯体確認できず（奈）	
10	〃		〃（奈）	
11		1988（S．63）	試掘調査で確認できず	
12	塚原遺跡	1988・89（S．63・H．1）	集落跡（平～鎌）	

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容	備考
13	塚原遺跡	1987・88（S．62・63）	集落跡（住居跡26軒）古墳（24基）（古～奈）	
14	畑ヶ坂遺跡	1988（S．63）	集落跡（住居跡４軒）（古～奈）	
15	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡　窯体確認できず（奈）	
16	日ノ浦遺跡	1988・89（S．63・H．１）	集落跡（住居跡22軒）（古～奈）	
17	畑ヶ坂遺跡	1987（S．62）	集落跡	
18	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡確認できず	
19	日ノ浦遺跡			
20	下ノ原遺跡	1984（S．59）	試掘調査で確認できず	
21	日ノ浦II遺跡	1986	〃	
22	〃	1988・89（S．63・H．１）	甕棺墓、土坑墓、古墳（弥～古）	
23	〃		流れ込みの土器多数出土（平）	
24	下ノ原遺跡	1984（S．59）	試掘調査で確認できず	
25	〃	〃	〃	
26	月ノ浦古墳		円墳１基（横穴式石室）1979（S．54）調査（古）	『牛頸中通遺跡群II』所収
27	月ノ浦窯跡	1982（S．57）	窯体削平、灰原から須恵器、軒丸瓦、平瓦、鴟尾（古）	
28	後田窯跡	1986（S．61）	灰原のみ、須恵器、瓦	
29	柳ヶ原古墳群	1983（S．58）	確認できず、尾根の凹凸の見誤りと思われる	
30	後田窯跡群			
31		1983（S．58）	試掘調査で確認できず	
32		〃	試掘調査で確認できず、弥生土器散布	
33	小田浦窯跡群	〃	須恵器窯跡１（古）	『牛頸小田浦窯跡群』所収
34	〃	〃	須恵器窯跡１、（窯体ほとんど流失）（古）	〃
35	柳ヶ原古墳群	1983（S．58）	確認できず	
36	〃	〃	〃	
37	小田浦古墳群・窯跡群	1985・86（S．60・61）	円墳３基（横穴式石室）、須恵器窯跡２基（古）	『牛頸後田・小田浦古墳群』所収
38	小田浦窯跡群		須恵器窯跡２基、1976（S．51）立正大学調査（古）	
39	〃		須恵器窯跡２基、1976（S．51）立正大学調査（古～奈）	
40	〃	1986（S．61）	須恵器窯跡２基、１基は未操業（古）	〃

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容	備考
41	小田浦窯跡群	1986（S．61）	試掘調査で確認できず	
42	後田古墳群	1982（S．57）		『牛頸後田・小田浦古墳群』所収
43	〃	1986（S．61）	円墳10基（横穴式石室７、小石室３）（古）	〃
44	〃	〃		〃
45	後田窯跡群	1986（S．61）	須恵器窯跡２基（古～奈）	『牛頸後田窯跡群』所収
46	〃	1986（S．61）	〃　１基（灰原のみ）（古）	〃
47		1985（S．60）		
48		〃	試掘調査で確認できず、窯体と見えたのは炭焼窯らしきもの	
49		〃		
50	小田浦窯跡群	1984（S．59）	須恵器窯跡２基（古）	『牛頸小田浦窯跡群』所収
51	〃	1984（S．59）	窯体流失か	
52		1986（S．61）	試掘調査で確認できず	
53	後田古墳群	〃	円墳１基（横穴式石室）	『牛頸後田・小田浦古墳群』所収
54		〃	試掘調査で確認できず	
55		〃	〃	
56		〃	〃	
57	小田浦窯跡群	〃	須恵器窯跡１基（ほとんど流失）（奈）	『牛頸小田浦窯跡群』所収
58		〃	試掘調査で確認できず	
59	後田窯跡群	〃	須恵器窯跡３基（奈）	『牛頸後田窯跡群』所収
60	〃	〃	〃　１基（古）	〃
61	〃	1987（S．62）	〃　５基（古～奈）	〃
62		1986（S．61）	試掘調査で確認できず	
63	後田窯跡群	〃	須恵器窯跡２基（古～奈）	〃
64		〃	試掘調査で確認できず	
65	後田窯跡群	1987（S．62）	須恵器窯跡１基（古）	〃
66	〃	〃	〃（奈）	〃
67		1986（S61）	試掘調査で確認できず	

（S）：昭和、（H）：平成
（縄）：縄文時代、（弥）：弥生時代、（古）：古墳時代、（奈）：奈良時代
（平）：平安時代、（鎌）：鎌倉時代

II. 位置と環境

日ノ浦遺跡は大野城市大字牛頸1644番外に、日ノ浦II遺跡はそこから直線距離で約250m北へ上った大字牛頸1603－1外に所在する。この位置は、直線距離にして博多湾から約12km、大宰府政庁跡から約4.5kmを測り、九州最大規模の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群の範囲内に含まれる。牛頸窯跡群は、大野城市大字牛頸、上大利を中心に北は春日市、東は太宰府市の一部を含む東西4km、南北4.6kmの範囲を持つ大窯跡群で、窯跡の総数は300基以上とも言われている。これまでに200基以上の発掘調査が行われ、その操業期間は6世紀中頃から9世紀初頭にかけてであったと考えられている。

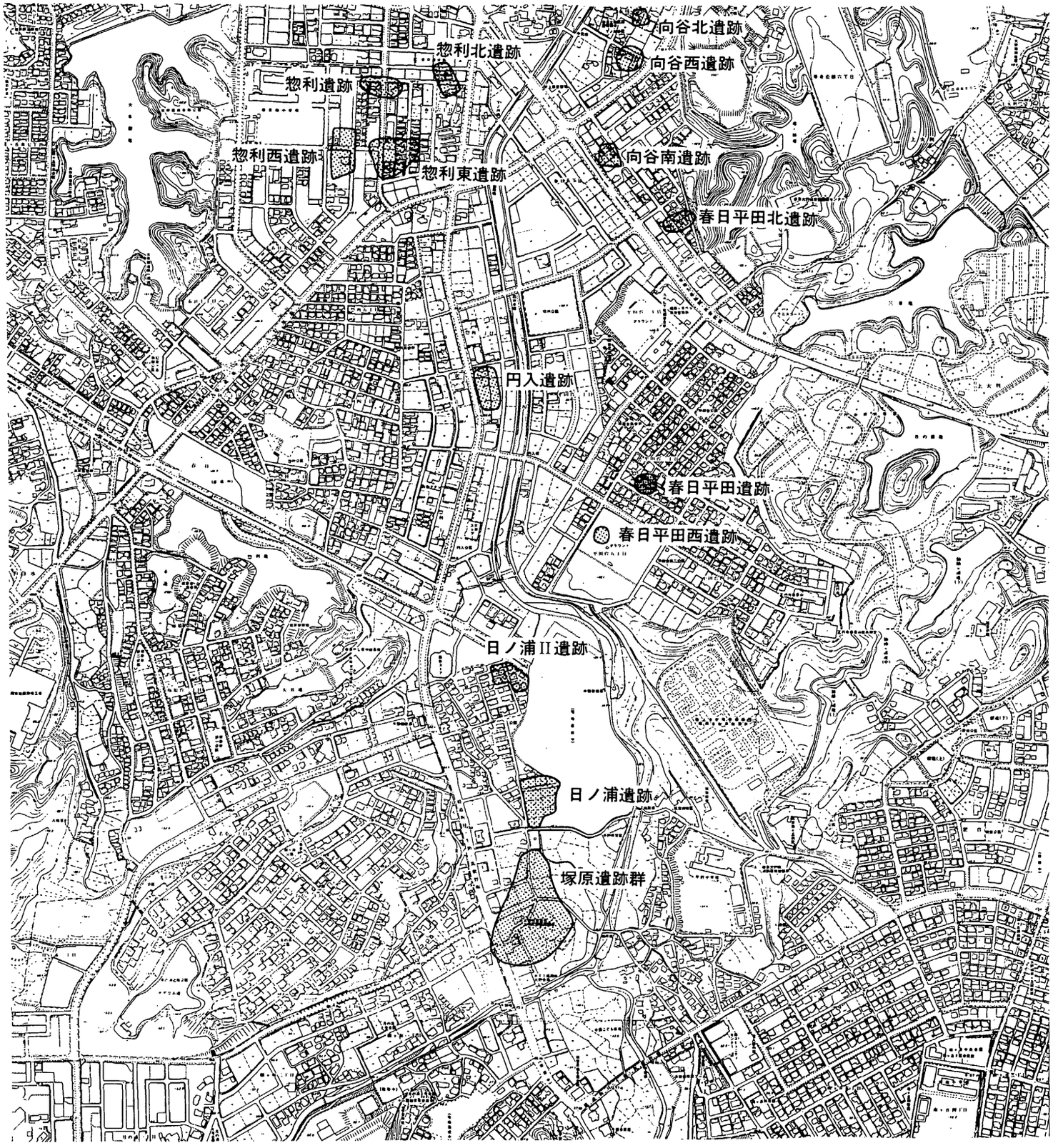
このように、牛頸地区においては窯跡の調査が先行したが、近年の大規模開発に伴う発掘調査の結果、他の遺跡の実態も明らかになってきた。

集落については、主なものは6世紀半ば以降に営まれたことがわかっている。惣利遺跡〈註1〉（第2図・9、第3図）、惣利北遺跡〈註2〉（第2図・9、第3図）、塚原遺跡（第2図・51、第3図）などがこの時期に当たる。いずれも須恵器生産と関係のあった遺跡と考えられている。しかし、最近は須恵器生産が開始される以前の様相が少しずつ明らかになってきた。円入遺跡〈註3〉（第2図・41、第3図）は5世紀半ばから6世紀初頭にかけて営まれた集落であり、惣利東遺跡〈註4〉（第2図・9、第3図）では弥生時代前期から中期初頭にかけての貯蔵穴や竪穴住居跡などが見つかった。また、塚原遺跡では縄文時代晩期の遺構、遺物が検出されており、牛頸地区には6世紀半ば以降に破壊された縄文時代の集落が存在していた可能性が高くなってきた。

古墳について言えば、現在のところ当地で最古のものは向谷1号墳〈註5〉（第2図・10）で4世紀末から5世紀初頭にかけての築造と考えられている。これに続くものとして平田北1・2号墳〈註6〉（第2図・10）、塚原古墳群（第2図・51）、向谷2・3号墳（第2図・10）がある。これらはいずれも6世紀半ば以前に築造されたものである。しかし、当地域の古墳のほとんどは6世紀後半から7世紀後半にかけて築造されたもので、比較的小規模な群集墳を形成している。主なものを列挙すると、中通古墳群〈註7〉（第2図・33）、後田古墳群〈註8〉（第2図・61）、小田浦古墳群〈註9〉（第2図・63）、大堤古墳群（第2図・56）、イケ谷古墳群（第2図・57）、西浦古墳群（第2図・6）などである。

〈註1〉『春日地区遺跡群II』春日市教育委員会　1983
〈註2〉『春日地区遺跡群IV』春日市教育委員会　1986
〈註3〉註2に同じ。
〈註4〉註1に同じ。
〈註5〉『春日地区遺跡群V』春日市教育委員会　1987
〈註6〉春日市教育委員会丸山康晴、平田定幸氏のご教示による。
〈註7〉『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会　1980　『牛頸中通遺跡群II』大野城市教育委員会　1982
〈註8〉『牛頸後田・小田浦古墳群』大野城市教育委員会　1992
〈註9〉註8に同じ。


牛頸
横峰
春日原ゴルフ場
大佐野
大野城市
春日市
筑紫野市
平田団地
大佐野団地
平野台
紫台
南ヶ丘
青葉台
平野台一丁目
平野台二丁目
平野台三丁目
平野台四丁目
平野台五丁目
平野台六丁目
平野台七丁目
南ヶ丘二丁目
南ヶ丘三丁目
南ヶ丘四丁目
南ヶ丘五丁目
南ヶ丘六丁目
南ヶ丘七丁目
南ヶ丘八丁目
青葉台一丁目
青葉台二丁目
青葉台三丁目
青葉台四丁目
青葉台五丁目
青葉台六丁目
青葉台七丁目
下大利一丁目
下大利二丁目
下大利三丁目
下大利四丁目
下大利五丁目
下大利団地
東大利二丁目
大利一丁目
大利二丁目
大利三丁目
大利四丁目
大利五丁目
大利六丁目
大利七丁目
大利八丁目
大利九丁目
大利十丁目
大利十一丁目
大利十二丁目
大利十三丁目
大利十四丁目
大利十五丁目
大利十六丁目
大利十七丁目
大利十八丁目
大利十九丁目
大利二十丁目
大利二十一丁目
大利二十二丁目
大利二十三丁目
大利二十四丁目
大利二十五丁目
大利二十六丁目
大利二十七丁目
大利二十八丁目
大利二十九丁目
大利三十丁目
大利三十一丁目
大利三十二丁目
大利三十三丁目
大利三十四丁目
大利三十五丁目
大利三十六丁目
大利三十七丁目
大利三十八丁目
大利三十九丁目
大利四十丁目
大利四十一丁目
大利四十二丁目
大利四十三丁目
大利四十四丁目
大利四十五丁目
大利四十六丁目
大利四十七丁目
大利四十八丁目
大利四十九丁目
大利五十丁目
大利五十一丁目
大利五十二丁目
大利五十三丁目
大利五十四丁目
大利五十五丁目
大利五十六丁目
大利五十七丁目
大利五十八丁目
大利五十九丁目
大利六十丁目
大利六十一丁目
大利六十二丁目
大利六十三丁目
大利六十四丁目
大利六十五丁目
大利六十六丁目
大利六十七丁目
大利六十八丁目
大利六十九丁目
大利七十丁目
大利七十一丁目
大利七十二丁目
大利七十三丁目
大利七十四丁目
大利七十五丁目
大利七十六丁目
大利七十七丁目
大利七十八丁目
大利七十九丁目
大利八十丁目
大利八十一丁目
大利八十二丁目
大利八十三丁目
大利八十四丁目
大利八十五丁目
大利八十六丁目
大利八十七丁目
大利八十八丁目
大利八十九丁目
大利九十丁目
大利九十一丁目
大利九十二丁目
大利九十三丁目
大利九十四丁目
大利九十五丁目
大利九十六丁目
大利九十七丁目
大利九十八丁目
大利九十九丁目
大利百丁目
大利百一丁目
大利百二丁目
大利百三丁目
大利百四丁目
大利百五丁目
大利百六丁目
大利百七丁目
大利百八丁目
大利百九丁目
大利百十丁目
大利百十一丁目
大利百十二丁目
大利百十三丁目
大利百十四丁目
大利百十五丁目
大利百十六丁目
大利百十七丁目
大利百十八丁目
大利百十九丁目
大利百二十丁目
大利百二十一丁目
大利百二十二丁目
大利百二十三丁目
大利百二十四丁目
大利百二十五丁目
大利百二十六丁目
大利百二十七丁目
大利百二十八丁目
大利百二十九丁目
大利百三十丁目
大利百三十一丁目
大利百三十二丁目
大利百三十三丁目
大利百三十四丁目
大利百三十五丁目
大利百三十六丁目
大利百三十七丁目
大利百三十八丁目
大利百三十九丁目
大利百四十丁目
大利百四十一丁目
大利百四十二丁目
大利百四十三丁目
大利百四十四丁目
大利百四十五丁目
大利百四十六丁目
大利百四十七丁目
大利百四十八丁目
大利百四十九丁目
大利百五十丁目
大利百五十一丁目
大利百五十二丁目
大利百五十三丁目
大利百五十四丁目
大利百五十五丁目
大利百五十六丁目
大利百五十七丁目
大利百五十八丁目
大利百五十九丁目
大利百六十丁目
大利百六十一丁目
大利百六十二丁目
大利百六十三丁目
大利百六十四丁目
大利百六十五丁目
大利百六十六丁目
大利百六十七丁目
大利百六十八丁目
大利百六十九丁目
大利百七十丁目
大利百七十一丁目
大利百七十二丁目
大利百七十三丁目
大利百七十四丁目
大利百七十五丁目
大利百七十六丁目
大利百七十七丁目
大利百七十八丁目
大利百七十九丁目
大利百八十丁目
大利百八十一丁目
大利百八十二丁目
大利百八十三丁目
大利百八十四丁目
大利百八十五丁目
大利百八十六丁目
大利百八十七丁目
大利百八十八丁目
大利百八十九丁目
大利百九十丁目
大利百九十一丁目
大利百九十二丁目
大利百九十三丁目
大利百九十四丁目
大利百九十五丁目
大利百九十六丁目
大利百九十七丁目
大利百九十八丁目
大利百九十九丁目
大利二百丁目
大利二百一丁目
大利二百二丁目
大利二百三丁目
大利二百四丁目
大利二百五丁目
大利二百六丁目
大利二百七丁目
大利二百八丁目
大利二百九丁目
大利二百十丁目
大利二百十一丁目
大利二百十二丁目
大利二百十三丁目
大利二百十四丁目
大利二百十五丁目
大利二百十六丁目
大利二百十七丁目
大利二百十八丁目
大利二百十九丁目
大利二百二十丁目
大利二百二十一丁目
大利二百二十二丁目
大利二百二十三丁目
大利二百二十四丁目
大利二百二十五丁目
大利二百二十六丁目
大利二百二十七丁目
大利二百二十八丁目
大利二百二十九丁目
大利二百三十丁目
大利二百三十一丁目
大利二百三十二丁目
大利二百三十三丁目
大利二百三十四丁目
大利二百三十五丁目
大利二百三十六丁目
大利二百三十七丁目
大利二百三十八丁目
大利二百三十九丁目
大利二百四十丁目
大利二百四十一丁目
大利二百四十二丁目
大利二百四十三丁目
大利二百四十四丁目
大利二百四十五丁目
大利二百四十六丁目
大利二百四十七丁目
大利二百四十八丁目
大利二百四十九丁目
大利二百五十丁目
大利二百五十一丁目
大利二百五十二丁目
大利二百五十三丁目
大利二百五十四丁目
大利二百五十五丁目
大利二百五十六丁目
大利二百五十七丁目
大利二百五十八丁目
大利二百五十九丁目
大利二百六十丁目
大利二百六十一丁目
大利二百六十二丁目
大利二百六十三丁目
大利二百六十四丁目
大利二百六十五丁目
大利二百六十六丁目
大利二百六十七丁目
大利二百六十八丁目
大利二百六十九丁目
大利二百七十丁目
大利二百七十一丁目
大利二百七十二丁目
大利二百七十三丁目
大利二百七十四丁目
大利二百七十五丁目
大利二百七十六丁目
大利二百七十七丁目
大利二百七十八丁目
大利二百七十九丁目
大利二百八十丁目
大利二百八十一丁目
大利二百八十二丁目
大利二百八十三丁目
大利二百八十四丁目
大利二百八十五丁目
大利二百八十六丁目
大利二百八十七丁目
大利二百八十八丁目
大利二百八十九丁目
大利二百九十丁目
大利二百九十一丁目
大利二百九十二丁目
大利二百九十三丁目
大利二百九十四丁目
大利二百九十五丁目
大利二百九十六丁目
大利二百九十七丁目
大利二百九十八丁目
大利二百九十九丁目
大利三百丁目
大利三百一丁目
大利三百二丁目
大利三百三丁目
大利三百四丁目
大利三百五丁目
大利三百六丁目
大利三百七丁目
大利三百八丁目
大利三百九丁目
大利三百十丁目
大利三百十一丁目
大利三百十二丁目
大利三百十三丁目
大利三百十四丁目
大利三百十五丁目
大利三百十六丁目
大利三百十七丁目
大利三百十八丁目
大利三百十九丁目
大利三百二十丁目
大利三百二十一丁目
大利三百二十二丁目
大利三百二十三丁目
大利三百二十四丁目
大利三百二十五丁目
大利三百二十六丁目
大利三百二十七丁目
大利三百二十八丁目
大利三百二十九丁目
大利三百三十丁目
大利三百三十一丁目
大利三百三十二丁目
大利三百三十三丁目
大利三百三十四丁目
大利三百三十五丁目
大利三百三十六丁目
大利三百三十七丁目
大利三百三十八丁目
大利三百三十九丁目
大利三百四十丁目
大利三百四十一丁目
大利三百四十二丁目
大利三百四十三丁目
大利三百四十四丁目
大利三百四十五丁目
大利三百四十六丁目
大利三百四十七丁目
大利三百四十八丁目
大利三百四十九丁目
大利三百五十丁目
大利三百五十一丁目
大利三百五十二丁目
大利三百五十三丁目
大利三百五十四丁目
大利三百五十五丁目
大利三百五十六丁目
大利三百五十七丁目
大利三百五十八丁目
大利三百五十九丁目
大利三百六十丁目
大利三百六十一丁目
大利三百六十二丁目
大利三百六十三丁目
大利三百六十四丁目
大利三百六十五丁目
大利三百六十六丁目
大利三百六十七丁目
大利三百六十八丁目
大利三百六十九丁目
大利三百七十丁目
大利三百七十一丁目
大利三百七十二丁目
大利三百七十三丁目
大利三百七十四丁目
大利三百七十五丁目
大利三百七十六丁目
大利三百七十七丁目
大利三百七十八丁目
大利三百七十九丁目
大利三百八十丁目
大利三百八十一丁目
大利三百八十二丁目
大利三百八十三丁目
大利三百八十四丁目
大利三百八十五丁目
大利三百八十六丁目
大利三百八十七丁目
大利三百八十八丁目
大利三百八十九丁目
大利三百九十丁目
大利三百九十一丁目
大利三百九十二丁目
大利三百九十三丁目
大利三百九十四丁目
大利三百九十五丁目
大利三百九十六丁目
大利三百九十七丁目
大利三百九十八丁目
大利三百九十九丁目
大利四百丁目
大利四百一丁目
大利四百二丁目
大利四百三丁目
大利四百四丁目
大利四百五丁目
大利四百六丁目
大利四百七丁目
大利四百八丁目
大利四百九丁目
大利四百十丁目
大利四百十一丁目
大利四百十二丁目
大利四百十三丁目
大利四百十四丁目
大利四百十五丁目
大利四百十六丁目
大利四百十七丁目
大利四百十八丁目
大利四百十九丁目
大利四百二十丁目
大利四百二十一丁目
大利四百二十二丁目
大利四百二十三丁目
大利四百二十四丁目
大利四百二十五丁目
大利四百二十六丁目
大利四百二十七丁目
大利四百二十八丁目
大利四百二十九丁目
大利四百三十丁目
大利四百三十一丁目
大利四百三十二丁目
大利四百三十三丁目
大利四百三十四丁目
大利四百三十五丁目
大利四百三十六丁目
大利四百三十七丁目
大利四百三十八丁目
大利四百三十九丁目
大利四百四十丁目
大利四百四十一丁目
大利四百四十二丁目
大利四百四十三丁目
大利四百四十四丁目
大利四百四十五丁目
大利四百四十六丁目
大利四百四十七丁目
大利四百四十八丁目
大利四百四十九丁目
大利四百五十丁目
大利四百五十一丁目
大利四百五十二丁目
大利四百五十三丁目
大利四百五十四丁目
大利四百五十五丁目
大利四百五十六丁目
大利四百五十七丁目
大利四百五十八丁目
大利四百五十九丁目
大利四百六十丁目
大利四百六十一丁目
大利四百六十二丁目
大利四百六十三丁目
大利四百六十四丁目
大利四百六十五丁目
大利四百六十六丁目
大利四百六十七丁目
大利四百六十八丁目
大利四百六十九丁目
大利四百七十丁目
大利四百七十一丁目
大利四百七十二丁目
大利四百七十三丁目
大利四百七十四丁目
大利四百七十五丁目
大利四百七十六丁目
大利四百七十七丁目
大利四百七十八丁目
大利四百七十九丁目
大利四百八十丁目
大利四百八十一丁目
大利四百八十二丁目
大利四百八十三丁目
大利四百八十四丁目
大利四百八十五丁目
大利四百八十六丁目
大利四百八十七丁目
大利四百八十八丁目
大利四百八十九丁目
大利四百九十丁目
大利四百九十一丁目
大利四百九十二丁目
大利四百九十三丁目
大利四百九十四丁目
大利四百九十五丁目
大利四百九十六丁目
大利四百九十七丁目
大利四百九十八丁目
大利四百九十九丁目
大利五百丁目
大利五百一丁目
大利五百二丁目
大利五百三丁目
大利五百四丁目
大利五百五丁目
大利五百六丁目
大利五百七丁目
大利五百八丁目
大利五百九丁目
大利五百十丁目
大利五百十一丁目
大利五百十二丁目
大利五百十三丁目
大利五百十四丁目
大利五百十五丁目
大利五百十六丁目
大利五百十七丁目
大利五百十八丁目
大利五百十九丁目
大利五百二十丁目
大利五百二十一丁目
大利五百二十二丁目
大利五百二十三丁目
大利五百二十四丁目
大利五百二十五丁目
大利五百二十六丁目
大利五百二十七丁目
大利五百二十八丁目
大利五百二十九丁目
大利五百三十丁目
大利五百三十一丁目
大利五百三十二丁目
大利五百三十三丁目
大利五百三十四丁目
大利五百三十五丁目
大利五百三十六丁目
大利五百三十七丁目
大利五百三十八丁目
大利五百三十九丁目
大利五百四十丁目
大利五百四十一丁目
大利五百四十二丁目
大利五百四十三丁目
大利五百四十四丁目
大利五百四十五丁目
大利五百四十六丁目
大利五百四十七丁目
大利五百四十八丁目
大利五百四十九丁目
大利五百五十丁目
大利五百五十一丁目
大利五百五十二丁目
大利五百五十三丁目
大利五百五十四丁目
大利五百五十五丁目
大利五百五十六丁目
大利五百五十七丁目
大利五百五十八丁目
大利五百五十九丁目
大利五百六十丁目
大利五百六十一丁目
大利五百六十二丁目
大利五百六十三丁目
大利五百六十四丁目
大利五百六十五丁目
大利五百六十六丁目
大利五百六十七丁目
大利五百六十八丁目
大利五百六十九丁目
大利五百七十丁目
大利五百七十一丁目
大利五百七十二丁目
大利五百七十三丁目
大利五百七十四丁目
大利五百七十五丁目
大利五百七十六丁目
大利五百七十七丁目
大利五百七十八丁目
大利五百七十九丁目
大利五百八十丁目
大利五百八十一丁目
大利五百八十二丁目
大利五百八十三丁目
大利五百八十四丁目
大利五百八十五丁目
大利五百八十六丁目
大利五百八十七丁目
大利五百八十八丁目
大利五百八十九丁目
大利五百九十丁目
大利五百九十一丁目
大利五百九十二丁目
大利五百九十三丁目
大利五百九十四丁目
大利五百九十五丁目
大利五百九十六丁目
大利五百九十七丁目
大利五百九十八丁目
大利五百九十九丁目
大利六百丁目
大利六百一丁目
大利六百二丁目
大利六百三丁目
大利六百四丁目
大利六百五丁目
大利六百六丁目
大利六百七丁目
大利六百八丁目
大利六百九丁目
大利六百十丁目
大利六百十一丁目
大利六百十二丁目
大利六百十三丁目
大利六百十四丁目
大利六百十五丁目
大利六百十六丁目
大利六百十七丁目
大利六百十八丁目
大利六百十九丁目
大利六百二十丁目
大利六百二十一丁目
大利六百二十二丁目
大利六百二十三丁目
大利六百二十四丁目
大利六百二十五丁目
大利六百二十六丁目
大利六百二十七丁目
大利六百二十八丁目
大利六百二十九丁目
大利六百三十丁目
大利六百三十一丁目
大利六百三十二丁目
大利六百三十三丁目
大利六百三十四丁目
大利六百三十五丁目
大利六百三十六丁目
大利六百三十七丁目
大利六百三十八丁目
大利六百三十九丁目
大利六百四十丁目
大利六百四十一丁目
大利六百四十二丁目
大利六百四十三丁目
大利六百四十四丁目
大利六百四十五丁目
大利六百四十六丁目
大利六百四十七丁目
大利六百四十八丁目
大利六百四十九丁目
大利六百五十丁目
大利六百五十一丁目
大利六百五十二丁目
大利六百五十三丁目
大利六百五十四丁目
大利六百五十五丁目
大利六百五十六丁目
大利六百五十七丁目
大利六百五十八丁目
大利六百五十九丁目
大利六百六十丁目
大利六百六十一丁目
大利六百六十二丁目
大利六百六十三丁目
大利六百六十四丁目
大利六百六十五丁目
大利六百六十六丁目
大利六百六十七丁目
大利六百六十八丁目
大利六百六十九丁目
大利六百七十丁目
大利六百七十一丁目
大利六百七十二丁目
大利六百七十三丁目
大利六百七十四丁目
大利六百七十五丁目
大利六百七十六丁目
大利六百七十七丁目
大利六百七十八丁目
大利六百七十九丁目
大利六百八十丁目
大利六百八十一丁目
大利六百八十二丁目
大利六百八十三丁目
大利六百八十四丁目
大利六百八十五丁目
大利六百八十六丁目
大利六百八十七丁目
大利六百八十八丁目
大利六百八十九丁目
大利六百九十丁目
大利六百九十一丁目
大利六百九十二丁目
大利六百九十三丁目
大利六百九十四丁目
大利六百九十五丁目
大利六百九十六丁目
大利六百九十七丁目
大利六百九十八丁目
大利六百九十九丁目
大利七百丁目
大利七百一丁目
大利七百二丁目
大利七百三丁目
大利七百四丁目
大利七百五丁目
大利七百六丁目
大利七百七丁目
大利七百八丁目
大利七百九丁目
大利七百十丁目
大利七百十一丁目
大利七百十二丁目
大利七百十三丁目
大利七百十四丁目
大利七百十五丁目
大利七百十六丁目
大利七百十七丁目
大利七百十八丁目
大利七百十九丁目
大利七百二十丁目
大利七百二十一丁目
大利七百二十二丁目
大利七百二十三丁目
大利七百二十四丁目
大利七百二十五丁目
大利七百二十六丁目
大利七百二十七丁目
大利七百二十八丁目
大利七百二十九丁目
大利七百三十丁目
大利七百三十一丁目
大利七百三十二丁目
大利七百三十三丁目
大利七百三十四丁目
大利七百三十五丁目
大利七百三十六丁目
大利七百三十七丁目
大利七百三十八丁目
大利七百三十九丁目
大利七百四十丁目
大利七百四十一丁目
大利七百四十二丁目
大利七百四十三丁目
大利七百四十四丁目
大利七百四十五丁目
大利七百四十六丁目
大利七百四十七丁目
大利七百四十八丁目
大利七百四十九丁目
大利七百五十丁目
大利七百五十一丁目
大利七百五十二丁目
大利七百五十三丁目
大利七百五十四丁目
大利七百五十五丁目
大利七百五十六丁目
大利七百五十七丁目
大利七百五十八丁目
大利七百五十九丁目
大利七百六十丁目
大利七百六十一丁目
大利七百六十二丁目
大利七百六十三丁目
大利七百六十四丁目
大利七百六十五丁目
大利七百六十六丁目
大利七百六十七丁目
大利七百六十八丁目
大利七百六十九丁目
大利七百七十丁目
大利七百七十一丁目
大利七百七十二丁目
大利七百七十三丁目
大利七百七十四丁目
大利七百七十五丁目
大利七百七十六丁目
大利七百七十七丁目
大利七百七十八丁目
大利七百七十九丁目
大利七百八十丁目
大利七百八十一丁目
大利七百八十二丁目
大利七百八十三丁目
大利七百八十四丁目
大利七百八十五丁目
大利七百八十六丁目
大利七百八十七丁目
大利七百八十八丁目
大利七百八十九丁目
大利七百九十丁目
大利七百九十一丁目
大利七百九十二丁目
大利七百九十三丁目
大利七百九十四丁目
大利七百九十五丁目
大利七百九十六丁目
大利七百九十七丁目
大利七百九十八丁目
大利七百九十九丁目
大利八百丁目
大利八百一丁目
大利八百二丁目
大利八百三丁目
大利八百四丁目
大利八百五丁目
大利八百六丁目
大利八百七丁目
大利八百八丁目
大利八百九丁目
大利八百十丁目
大利八百十一丁目
大利八百十二丁目
大利八百十三丁目
大利八百十四丁目
大利八百十五丁目
大利八百十六丁目
大利八百十七丁目
大利八百十八丁目
大利八百十九丁目
大利八百二十丁目
大利八百二十一丁目
大利八百二十二丁目
大利八百二十三丁目
大利八百二十四丁目
大利八百二十五丁目
大利八百二十六丁目
大利八百二十七丁目
大利八百二十八丁目
大利八百二十九丁目
大利八百三十丁目
大利八百三十一丁目
大利八百三十二丁目
大利八百三十三丁目
大利八百三十四丁目
大利八百三十五丁目
大利八百三十六丁目
大利八百三十七丁目
大利八百三十八丁目
大利八百三十九丁目
大利八百四十丁目
大利八百四十一丁目
大利八百四十二丁目
大利八百四十三丁目
大利八百四十四丁目
大利八百四十五丁目
大利八百四十六丁目
大利八百四十七丁目
大利八百四十八丁目
大利八百四十九丁目
大利八百五十丁目
大利八百五十一丁目
大利八百五十二丁目
大利八百五十三丁目
大利八百五十四丁目
大利八百五十五丁目
大利八百五十六丁目
大利八百五十七丁目
大利八百五十八丁目
大利八百五十九丁目
大利八百六十丁目
大利八百六十一丁目
大利八百六十二丁目
大利八百六十三丁目
大利八百六十四丁目
大利八百六十五丁目
大利八百六十六丁目
大利八百六十七丁目
大利八百六十八丁目
大利八百六十九丁目
大利八百七十丁目
大利八百七十一丁目
大利八百七十二丁目
大利八百七十三丁目
大利八百七十四丁目
大利八百七十五丁目
大利八百七十六丁目
大利八百七十七丁目
大利八百七十八丁目
大利八百七十九丁目
大利八百八十丁目
大利八百八十一丁目
大利八百八十二丁目
大利八百八十三丁目
大利八百八十四丁目
大利八百八十五丁目
大利八百八十六丁目
大利八百八十七丁目
大利八百八十八丁目
大利八百八十九丁目
大利八百九十丁目
大利八百九十一丁目
大利八百九十二丁目
大利八百九十三丁目
大利八百九十四丁目
大利八百九十五丁目
大利八百九十六丁目
大利八百九十七丁目
大利八百九十八丁目
大利八百九十九丁目
大利九百丁目
大利九百一丁目
大利九百二丁目
大利九百三丁目
大利九百四丁目
大利九百五丁目
大利九百六丁目
大利九百七丁目
大利九百八丁目
大利九百九丁目
大利九百十丁目
大利九百十一丁目
大利九百十二丁目
大利九百十三丁目
大利九百十四丁目
大利九百十五丁目
大利九百十六丁目
大利九百十七丁目
大利九百十八丁目
大利九百十九丁目
大利九百二十丁目
大利九百二十一丁目
大利九百二十二丁目
大利九百二十三丁目
大利九百二十四丁目
大利九百二十五丁目
大利九百二十六丁目
大利九百二十七丁目
大利九百二十八丁目
大利九百二十九丁目
大利九百三十丁目
大利九百三十一丁目
大利九百三十二丁目
大利九百三十三丁目
大利九百三十四丁目
大利九百三十五丁目
大利九百三十六丁目
大利九百三十七丁目
大利九百三十八丁目
大利九百三十九丁目
大利九百四十丁目
大利九百四十一丁目
大利九百四十二丁目
大利九百四十三丁目
大利九百四十四丁目
大利九百四十五丁目
大利九百四十六丁目
大利九百四十七丁目
大利九百四十八丁目
大利九百四十九丁目
大利九百五十丁目
大利九百五十一丁目
大利九百五十二丁目
大利九百五十三丁目
大利九百五十四丁目
大利九百五十五丁目
大利九百五十六丁目
大利九百五十七丁目
大利九百五十八丁目
大利九百五十九丁目
大利九百六十丁目
大利九百六十一丁目
大利九百六十二丁目
大利九百六十三丁目
大利九百六十四丁目
大利九百六十五丁目
大利九百六十六丁目
大利九百六十七丁目
大利九百六十八丁目
大利九百六十九丁目
大利九百七十丁目
大利九百七十一丁目
大利九百七十二丁目
大利九百七十三丁目
大利九百七十四丁目
大利九百七十五丁目
大利九百七十六丁目
大利九百七十七丁目
大利九百七十八丁目
大利九百七十九丁目
大利九百八十丁目
大利九百八十一丁目
大利九百八十二丁目
大利九百八十三丁目
大利九百八十四丁目
大利九百八十五丁目
大利九百八十六丁目
大利九百八十七丁目
大利九百八十八丁目
大利九百八十九丁目
大利九百九十丁目
大利九百九十一丁目
大利九百九十二丁目
大利九百九十三丁目
大利九百九十四丁目
大利九百九十五丁目
大利九百九十六丁目
大利九百九十七丁目
大利九百九十八丁目
大利九百九十九丁目
大利千丁目
大利千一丁目
大利千二丁目
大利千三丁目
大利千四丁目
大利千五丁目
大利千六丁目
大利千七丁目
大利千八丁目
大利千九丁目
大利千十丁目
大利千十一丁目
大利千十二丁目
大利千十三丁目
大利千十四丁目
大利千十五丁目
大利千十六丁目
大利千十七丁目
大利千十八丁目
大利千十九丁目
大利千二十丁目
大利千二十一丁目
大利千二十二丁目
大利千二十三丁目
大利千二十四丁目
大利千二十五丁目
大利千二十六丁目
大利千二十七丁目
大利千二十八丁目
大利千二十九丁目
大利千三十丁目
大利千三十一丁目
大利千三十二丁目
大利千三十三丁目
大利千三十四丁目
大利千三十五丁目
大利千三十六丁目
大利千三十七丁目
大利千三十八丁目
大利千三十九丁目
大利千四十丁目
大利千四十一丁目
大利千四十二丁目
大利千四十三丁目
大利千四十四丁目
大利千四十五丁目
大利千四十六丁目
大利千四十七丁目
大利千四十八丁目
大利千四十九丁目
大利千五十丁目
大利千五十一丁目
大利千五十二丁目
大利千五十三丁目
大利千五十四丁目
大利千五十五丁目
大利千五十六丁目
大利千五十七丁目
大利千五十八丁目
大利千五十九丁目
大利千六十丁目
大利千六十一丁目
大利千六十二丁目
大利千六十三丁目
大利千六十四丁目
大利千六十五丁目
大利千六十六丁目
大利千六十七丁目
大利千六十八丁目
大利千六十九丁目
大利千七十丁目
大利千七十一丁目
大利千七十二丁目
大利千七十三丁目
大利千七十四丁目
大利千七十五丁目
大利千七十六丁目
大利千七十七丁目
大利千七十八丁目
大利千七十九丁目
大利千八十丁目
大利千八十一丁目
大利千八十二丁目
大利千八十三丁目
大利千八十四丁目
大利千八十五丁目
大利千八十六丁目
大利千八十七丁目
大利千八十八丁目
大利千八十九丁目
大利千九十丁目
大利千九十一丁目
大利千九十二丁目
大利千九十三丁目
大利千九十四丁目
大利千九十五丁目
大利千九十六丁目
大利千九十七丁目
大利千九十八丁目
大利千九十九丁目
大利千百丁目
大利千百一丁目
大利千百二丁目
大利千百三丁目
大利千百四丁目
大利千百五丁目
大利千百六丁目
大利千百七丁目
大利千百八丁目
大利千百九丁目
大利千百十丁目
大利千百十一丁目
大利千百十二丁目
大利千百十三丁目
大利千百十四丁目
大利千百十五丁目
大利千百十六丁目
大利千百十七丁目
大利千百十八丁目
大利千百十九丁目
大利千百二十丁目
大利千百二十一丁目
大利千百二十二丁目
大利千百二十三丁目
大利千百二十四丁目
大利千百二十五丁目
大利千百二十六丁目
大利千百二十七丁目
大利千百二十八丁目
大利千百二十九丁目
大利千百三十丁目
大利千百三十一丁目
大利千百三十二丁目
大利千百三十三丁目
大利千百三十四丁目
大利千百三十五丁目
大利千百三十六丁目
大利千百三十七丁目
大利千百三十八丁目
大利千百三十九丁目
大利千百四十丁目
大利千百四十一丁目
大利千百四十二丁目
大利千百四十三丁目
大利千百四十四丁目
大利千百四十五丁目
大利千百四十六丁目
大利千百四十七丁目
大利千百四十八丁目
大利千百四十九丁目
大利千百五十丁目
大利千百五十一丁目
大利千百五十二丁目
大利千百五十三丁目
大利千百五十四丁目
大利千百五十五丁目
大利千百五十六丁目
大利千百五十七丁目
大利千百五十八丁目
大利千百五十九丁目
大利千百六十丁目
大利千百六十一丁目
大利千百六十二丁目
大利千百六十三丁目
大利千百六十四丁目
大利千百六十五丁目
大利千百六十六丁目
大利千百六十七丁目
大利千百六十八丁目
大利千百六十九丁目
大利千百七十丁目
大利千百七十一丁目
大利千百七十二丁目
大利千百七十三丁目
大利千百七十四丁目
大利千百七十五丁目
大利千百七十六丁目
大利千百七十七丁目
大利千百七十八丁目
大利千百七十九丁目
大利千百八十丁目
大利千百八十一丁目
大利千百八十二丁目
大利千百八十三丁目
大利千百八十四丁目
大利千百八十五丁目
大利千百八十六丁目
大利千百八十七丁目
大利千百八十八丁目
大利千百八十九丁目
大利千百九十丁目
大利千百九十一丁目
大利千百九十二丁目
大利千百九十三丁目
大利千百九十四丁目
大利千百九十五丁目
大利千百九十六丁目
大利千百九十七丁目
大利千百九十八丁目
大利千百九十九丁目
大利千二百丁目
大利千二百一丁目
大利千二百二丁目
大利千二百三丁目
大利千二百四丁目
大利千二百五丁目
大利千二百六丁目
大利千二百七丁目
大利千二百八丁目
大利千二百九丁目
大利千二百十丁目
大利千二百十一丁目
大利千二百十二丁目
大利千二百十三丁目
大利千二百十四丁目
大利千二百十五丁目
大利千二百十六丁目
大利千二百十七丁目
大利千二百十八丁目
大利千二百十九丁目
大利千二百二十丁目
大利千二百二十一丁目
大利千二百二十二丁目
大利千二百二十三丁目
大利千二百二十四丁目
大利千二百二十五丁目
大利千二百二十六丁目
大利千二百二十七丁目
大利千二百二十八丁目
大利千二百二十九丁目
大利千二百三十丁目
大利千二百三十一丁目
大利千二百三十二丁目
大利千二百三十三丁目
大利千二百三十四丁目
大利千二百三十五丁目
大利千二百三十六丁目
大利千二百三十七丁目
大利千二百三十八丁目
大利千二百三十九丁目
大利千二百四十丁目
大利千二百四十一丁目
大利千二百四十二丁目
大利千二百四十三丁目
大利千二百四十四丁目
大利千二百四十五丁目
大利千二百四十六丁目
大利千二百四十七丁目
大利千二百四十八丁目
大利千二百四十九丁目
大利千二百五十丁目
大利千二百五十一丁目
大利千二百五十二丁目
大利千二百五十三丁目
大利千二百五十四丁目
大利千二百五十五丁目
大利千二百五十六丁目
大利千二百五十七丁目
大利千二百五十八丁目
大利千二百五十九丁目
大利千二百六十丁目
大利千二百六十一丁目
大利千二百六十二丁目
大利千二百六十三丁目
大利千二百六十四丁目
大利千二百六十五丁目
大利千二百六十六丁目
大利千二百六十七丁目
大利千二百六十八丁目
大利千二百六十九丁目
大利千二百七十丁目
大利千二百七十一丁目
大利千二百七十二丁目
大利千二百七十三丁目
大利千二百七十四丁目
大利千二百七十五丁目
大利千二百七十六丁目
大利千二百七十七丁目
大利千二百七十八丁目
大利千二百七十九丁目
大利千二百八十丁目
大利千二百八十一丁目
大利千二百八十二丁目
大利千二百八十三丁目
大利千二百八十四丁目
大利千二百八十五丁目
大利千二百八十六丁目
大利千二百八十七丁目
大利千二百八十八丁目
大利千二百八十九丁目
大利千二百九十丁目
大利千二百九十一丁目
大利千二百九十二丁目
大利千二百九十三丁目
大利千二百九十四丁目
大利千二百九十五丁目
大利千二百九十六丁目
大利千二百九十七丁目
大利千二百九十八丁目
大利千二百九十九丁目
大利千三百丁目
大利千三百一丁目
大利千三百二丁目
大利千三百三丁目
大利千三百四丁目
大利千三百五丁目
大利千三百六丁目
大利千三百七丁目
大利千三百八丁目
大利千三百九丁目
大利千三百十丁目
大利千三百十一丁目
大利千三百十二丁目
大利千三百十三丁目
大利千三百十四丁目
大利千三百十五丁目
大利千三百十六丁目
大利千三百十七丁目
大利千三百十八丁目
大利千三百十九丁目
大利千三百二十丁目
大利千三百二十一丁目
大利千三百二十二丁目
大利千三百二十三丁目
大利千三百二十四丁目
大利千三百二十五丁目
大利千三百二十六丁目
大利千三百二十七丁目
大利千三百二十八丁目
大利千三百二十九丁目
大利千三百三十丁目
大利千三百三十一丁目
大利千三百三十二丁目
大利千三百三十三丁目
大利千三百三十四丁目
大利千三百三十五丁目
大利千三百三十六丁目
大利千三百三十七丁目
大利千三百三十八丁目
大利千三百三十九丁目
大利千三百四十丁目
大利千三百四十一丁目
大利千三百四十二丁目
大利千三百四十三丁目
大利千三百四十四丁目
大利千三百四十五丁目
大利千三百四十六丁目
大利千三百四十七丁目
大利千三百四十八丁目
大利千三百四十九丁目
大利千三百五十丁目
大利千三百五十一丁目
大利千三百五十二丁目
大利千三百五十三丁目
大利千三百五十四丁目
大利千三百五十五丁目
大利千三百五十六丁目
大利千三百五十七丁目
大利千三百五十八丁目
大利千三百五十九丁目
大利千三百六十丁目
大利千三百六十一丁目
大利千三百六十二丁目
大利千三百六十三丁目
大利千三百六十四丁目
大利千三百六十五丁目
大利千三百六十六丁目
大利千三百六十七丁目
大利千三百六十八丁目
大利千三百六十九丁目
大利千三百七十丁目
大利千三百七十一丁目
大利千三百七十二丁目
大利千三百七十三丁目
大利千三百七十四丁目
大利千三百七十五丁目
大利千三百七十六丁目
大利千三百七十七丁目
大利千三百七十八丁目
大利千三百七十九丁目
大利千三百八十丁目
大利千三百八十一丁目
大利千三百八十二丁目
大利千三百八十三丁目
大利千三百八十四丁目
大利千三百八十五丁目
大利千三百八十六丁目
大利千三百八十七丁目
大利千三百八十八丁目
大利千三百八十九丁目
大利千三百九十丁目
大利千三百九十一丁目
大利千三百九十二丁目
大利千三百九十三丁目
大利千三百九十四丁目
大利千三百九十五丁目
大利千三百九十六丁目
大利千三百九十七丁目
大利千三百九十八丁目
大利千三百九十九丁目
大利千四百丁目
大利千四百一丁目
大利千四百二丁目
大利千四百三丁目
大利千四百四丁目
大利千四百五丁目
大利千四百六丁目
大利千四百七丁目
大利千四百八丁目
大利千四百九丁目
大利千四百十丁目
大利千四百十一丁目
大利千四百十二丁目
大利千四百十三丁目
大利千四百十四丁目
大利千四百十五丁目
大利千四百十六丁目
大利千四百十七丁目
大利千四百十八丁目
大利千四百十九丁目
大利千四百二十丁目
大利千四百二十一丁目
大利千四百二十二丁目
大利千四百二十三丁目
大利千四百二十四丁目
大利千四百二十五丁目
大利千四百二十六丁目
大利千四百二十七丁目
大利千四百二十八丁目
大利千四百二十九丁目
大利千四百三十丁目
大利千四百三十一丁目
大利千四百三十二丁目
大利千四百三十三丁目
大利千四百三十四丁目
大利千四百三十五丁目
大利千四百三十六丁目
大利千四百三十七丁目
大利千四百三十八丁目
大利千四百三十九丁目
大利千四百四十丁目
大利千四百四十一丁目
大利千四百四十二丁目
大利千四百四十三丁目
大利千四百四十四丁目
大利千四百四十五丁目
大利千四百四十六丁目
大利千四百四十七丁目
大利千四百四十八丁目
大利千四百四十九丁目
大利千四百五十丁目
大利千四百五十一丁目
大利千四百五十二丁目
大利千四百五十三丁目
大利千四百五十四丁目
大利千四百五十五丁目
大利千四百五十六丁目
大利千四百五十七丁目
大利千四百五十八丁目
大利千四百五十九丁目
大利千四百六十丁目
大利千四百六十一丁目
大利千四百六十二丁目
大利千四百六十三丁目
大利千四百六十四丁目
大利千四百六十五丁目
大利千四百六十六丁目
大利千四百六十七丁目
大利千四百六十八丁目
大利千四百六十九丁目
大利千四百七十丁目
大利千四百七十一丁目
大利千四百七十二丁目
大利千四百七十三丁目
大利千四百七十四丁目
大利千四百七十五丁目
大利千四百七十六丁目
大利千四百七十七丁目
大利千四百七十八丁目
大利千四百七十九丁目
大利千四百八十丁目
大利千四百八十一丁目
大利千四百八十二丁目
大利千四百八十三丁目
大利千四百八十四丁目


向谷北遺跡
惣利北遺跡
向谷西遺跡
惣利遺跡
惣利西遺跡
惣利東遺跡
向谷南遺跡
春日平田北遺跡
円入遺跡
春日平田遺跡
春日平田西遺跡
日ノ浦II遺跡
日ノ浦遺跡
塚原遺跡群

第3図　位置図（1/1万）



第4図　日ノ浦遺跡遺構配置図（1/300）

表2　牛頸周辺遺跡地名表

1	天神山古墳群	春日市大字上白水	前方後円墳、円墳	
2	天神山水城	〃　〃	土塁	(国指定史跡)
3	大土居水城跡	〃　〃	土塁	(国指定史跡)
4	ウトグチ窯跡群	〃　〃	窯跡2基以上	1987春日市教委調査（2基)
5	観音山古墳群	那珂川町大字中原他	前方後円墳・円墳260基以上	1972県教委、那珂川町教委調査
6	西浦古墳群	春日市大字上白水	円墳4基	1981春日市教委調査
7	大牟田池窯跡	〃　大字春日	窯跡1基以上	
8	惣利窯跡群	〃　〃	窯跡15基以上	1977～80春日市教委調査（9基)
9	惣利遺跡群	〃　〃	古墳～歴史時代住居跡	1979・80春日市教委調査　縄文～中世
10	向谷遺跡群	春日市大字春日	甕棺・方墳、弥生～歴史時代住居跡	1979～82春日市教委調査
11	春日平田窯跡群	〃　〃	窯跡21基	1982～85春日市教委調査（21基)
12	九州大学筑紫キャンパス内遺跡	春日市・大野城市	集落、溝等、縄文～奈良	1978～九州大学調査
13	梅頭窯跡	大野城市大字上大利	窯跡1基	消滅
14	上園遺跡	〃　〃	住居跡、井戸、弥生～歴史時代	1985～大野城市教委調査
15	出口窯跡	〃　〃	窯跡1基	
16	唐土遺跡	〃　下大利	奈良時代の土器溜め	1989大野城市教委調査
17	谷川遺跡	〃　〃	弥生～古墳時代の溝	1994大野城市教委調査
18	吉松古墳	太宰府市大字吉松	円墳1基	
19	水城	太宰府市・大野城市	土塁	(国指定特別史跡)
20	神ノ前窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡2基	1978太宰府市教委調査（2基)
21	篠振窯跡	〃　〃	窯跡2基	1974・85太宰府市教委調査（2基)
22	尊田窯跡	〃　〃	窯跡	
23	長浦窯跡	〃　大字向佐野	窯跡1基	1972福岡県教委調査（1基)
24	向佐野窯跡群	〃　〃	窯跡3基	同上（3基)
25	宮ノ本窯跡群	〃　〃	窯跡8基	1979・84 太宰府市教委調査(8基)

26	谷蟹窯跡	大野城市大字上大利	窯跡1基	消滅
27	野添窯跡群	〃　〃	窯跡10基以上	1969福岡県教委調査（2基）1986大野城市教委調査（3基）
28	大浦窯跡群	〃　大字牛頸	窯跡5基	1968福岡県教委調査（2基）
29	平田窯跡群	〃　〃	窯跡9基	1972立正大学調査（4基）1979～81大野城市教委調査（4基）
30	東浦窯跡群	〃　〃	窯跡3基	1968国土館大学調査（3基）
31	上平田窯跡群	〃　〃	窯跡4基	1972福岡県教委調査（4基）
32	中通窯跡群	〃　〃	窯跡12基以上	1979・80県教委・大野城市教委調査（6基）
33	中通古墳群	〃　〃	円墳19基	1972・73福岡チブサン会調査(13基) 1975県教委調査（1基） 1979・80県教委・大野城市教委調査（5基）
34	原窯跡群	〃　〃	窯跡3基	土取りで灰原の一部を残すのみ
35	ハセムシ窯跡	〃　〃	窯跡30基以上	1987・88大谷女子大学・大野城市教委調査（15基）
36	井手窯跡群	〃　〃	窯跡39基以上	1982～86 県教委調査（31基）1988大野城市教委調査（3基）
37	道ノ下窯跡群	〃　〃	窯跡10基以上	1982～86県教委調査（10基）
38	足洗川窯跡群	〃　〃	窯跡5基以上	1982～86県教委調査（4基）
39	笹原窯跡群	〃　〃	窯跡4基以上	同上（4基）
40	長者ヶ原窯跡群	〃　〃	窯跡16基	同上（16基）
41	野口窯跡群	太宰府市大字大佐野	窯跡2基以上	
42	円入遺跡	春日市大字春日	古墳時代住居跡	1981春日市教委調査
43	惣利古墳	〃　〃	円墳1基	消滅（横穴式石室・須恵器出土）
44	春日平田遺跡群	〃　〃	弥生～歴史時代住居跡、古墳	
45	華無尾窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡2基	消滅
46	華無尾遺跡	〃　〃	散布地	旧石器～縄文（ナイフ形石器石鏃等出土）
47	塚原古墳群	春日市大字春日	円墳4基	前方後円墳1基・円墳2基か？
48	日ノ浦遺跡	大野城市大字牛頸	縄文～奈良時代住居跡	1987～90大野城市教委調査
49	畑ヶ坂窯跡群	〃　〃	窯跡3基	1基消滅
50	畑ヶ坂古墳	〃　〃	円墳1基	

51	塚原遺跡群	〃　〃	円墳24基以上　古墳時代・奈良時代住居跡	1987～1993大野城市教委調査
52	胴ノ元古墳	〃　〃	円墳1基	1991大野城市教委調査
53	胴ノ元窯跡群	〃　〃	窯跡2基	
54	城ノ山窯跡	〃　〃	窯跡1基以上	窯本体が空洞で露出している
55	楠木遺跡	春日市大字下白水	甕棺墓	弥生（中期）
56	大堤古墳群	〃　大字上白水	円墳3基	（満水時水没）
57	イケ谷古墳群	〃　〃	円墳3基以上	（春日原ゴルフ場内）
58	浦ノ原窯跡群	〃　大字下白水	窯跡10基以上	1978春日市教委調査（8基）
59	浦ノ原遺跡	〃　〃	散布地	土師器・須恵器
60	後田窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡16基以上	1986大野城市教委調査（16基）
61	後田古墳群	〃　〃	円墳11基	1982・86 大野城市教委調査
62	小田浦窯跡群	〃　〃	窯跡13基以上	1976立正大学調査（4基）1982～86大野城市教委調査（9基）
63	小田浦古墳群	〃　〃	円墳3基	1976立正大学調査（1基）1987大野城市教委調査（2基）
64	月ノ浦窯跡群	〃　〃	窯跡2基	1982大野城市教委調査（1基）
65	月ノ浦古墳	〃　〃	円墳1基	消滅（横穴式石室）
66	大谷窯跡群	〃　〃	窯跡12基以上	1971国土館大学調査（4基）
67	石坂窯跡群	〃　〃	窯跡20基以上	1983・89・90大野城市教委調査（7基）
68	足洗川遺跡	〃　〃	散布地	旧石器（石刃出土）
69	上大利水城	〃　上大利	土塁	（国指定特別史跡）
70	出口遺跡	〃　下大利	弥生～奈良の集落跡	1989大野城市教委調査『出口遺跡』

Ⅲ. 調査の結果

1．調査概要

調査の経過のところにも列挙したが、日ノ浦遺跡、日ノ浦II遺跡ともに牛頸土地区画整理事業に伴って昭和63年度と平成元年度とに分けて調査を行ったものである。この両遺跡は、直線距離で南北に約250m離れており(日ノ浦II遺跡の方が北にある)、小字名としてはどちらも「日ノ浦」であるが、調査の便宜上日ノ浦遺跡と日ノ浦II遺跡とに分けた。

日ノ浦遺跡は、牛頸川西岸の段丘上に位置する。牛頸川の西岸には、複雑で急峻な地形が連続しているが、当地では比較的広範囲に平坦な地形が展開しており、日ノ浦II遺跡もこの段丘上に位置する。しかし、日ノ浦遺跡が位置する段丘は全くの平坦地ではなく、北西から南東へ向かって傾斜しており、標高は40.40m～42.20mほどである。特に調査区の南側では傾斜が大きく遺跡の縁辺部を思わせる様相を呈していた。

調査の結果、日ノ浦遺跡では竪穴住居跡23軒、廃棄土坑20基、竪穴状遺跡4基、土坑17基、溝2条、ピット多数が検出された。時期的には、ほとんどの遺構が古墳時代以降のものであるが、縄文時代晩期のものが若干含まれていた。

日ノ浦II遺跡の立地する部分では、段丘はほぼ平坦であり、標高は41m弱である。当地には調査前すでに住宅が建ち並んでいたため、広範囲の調査を行うことができず、結果的に調査区がA～Eの5区に細分されることとなった。

日ノ浦II遺跡での調査の結果、甕棺墓2基、土坑墓2基、古墳1基、土坑2基、ピットが検出された。また、B区の南西隅部では、自然地形に伴う落ち込みが確認された。遺構の時期は、弥生時代前期と古墳時代以降とに大別することができる。これらの遺構はいずれも上部をかなり削平されており、また調査区全域において撹乱も多かった。

2．日ノ浦遺跡

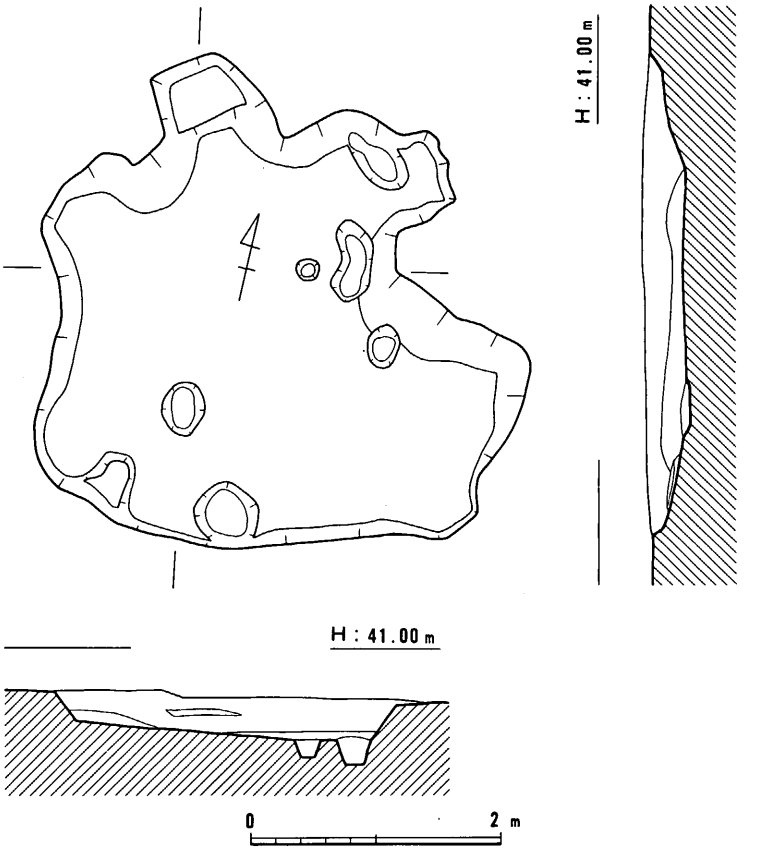
(1) 縄文時代の遺構と遺物

①竪穴住居跡

13号住居跡（第5図、図版10）

前述のように、日ノ浦遺跡では23軒の竪穴住居跡が検出されたが、調査の便宜上、検出した順に号数を付けた。したがって、遺構の時期の新旧と番号順とが必ずしも一致するわけではないが、混乱を避けるためにそのままにしている。

13号住居跡は、調査区の北東隅に近いところで検出された。形状は、北側壁と東側壁の中央部で凹凸があるものの、隅丸で台形に近い形である。壁長は、各コーナー間を直線で測ると、北側壁と東側壁で3.2m、南側壁で3.6m、西側壁で1.8mである。壁高は7cm～30cmと一定していなかった。床面は平坦ではなく、ゆるやかな凹凸が認められた。床面では6個のピットが検出されたが、本住居跡の確実な柱穴を決定することはできなかった。他に炉等の施設は検出できなかった。



第5図　13号住居跡実測図（1/60）

遺物は、埋土中から縄文土器が出土した。いずれも小破片であり、図示できるものは少なかった。

出土遺物（第6図）

縄文土器

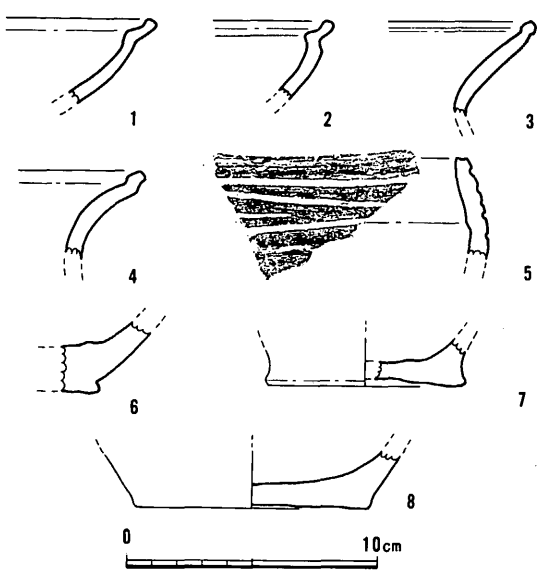
浅鉢（1・2）　1、2とも短い頸部と口縁部を有するが、1の頸部は2に比してゆるやかで幅広である。ともに、胎土中に雲母を含む精製磨研土器である。

深鉢（3～8）　3～5は口縁部破片。3・4は内湾する頸部を介して胴部がふくらむ形。5は口縁部が内傾する形で、外面に沈線をめぐらしている。いずれも胎土中に雲母を含む。

6～8は粗製の底部。8のみ胎土中に雲母を含む。

16号住居跡（第7図、図版10）

16号住居跡は、13号住居跡の南約1.6mのところで検出された。形状は隅丸の台形である。壁



第6図　13号住居跡出土土器実測（1/3）

長は北側壁が5.9m、東側壁4.2m、南側壁3.2m、西側壁4.5mである。壁高は3cm～14cmと、13号住居跡よりも浅い。床面は平坦ではなく、ゆるやかな凹凸が認められた。床面では11個のピットが検出された。これらのうち、P1～P4としたものが柱穴であると考えられる。他に炉等の施設は検出できなかった。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土した。いずれも小破片であり、図示できるものは少なかった。

出土遺物（第8図）

縄文土器

浅鉢（1～3）　いずれも胎土に雲母を含む精製磨研土器である。1は、口縁部、頸部がともにごく短く、口縁部内面の上側に沈線を施したような形状を呈する。2・3は口縁部で丸く屈曲する。

深鉢（4～7）　4、7は「く」字形で口縁部が立ち上がり、内湾する頸部を介して胴部がふくらむ形をとる。4は口縁部がほぼ直立し、内外面に条痕を施す。7の口縁部は外反気味で、内外面にヨコナデを施す。5は、内湾する頸部からそのまま口縁部に移行する形である。内外面とも調整は精良で、口縁部内面に1条の沈線を施す。6は、底部からそのまま直線的に口縁部に移行する形である。外面に条痕、内面にはナデを施す。4～7の土器は、いずれも胎土内に雲母を含む。

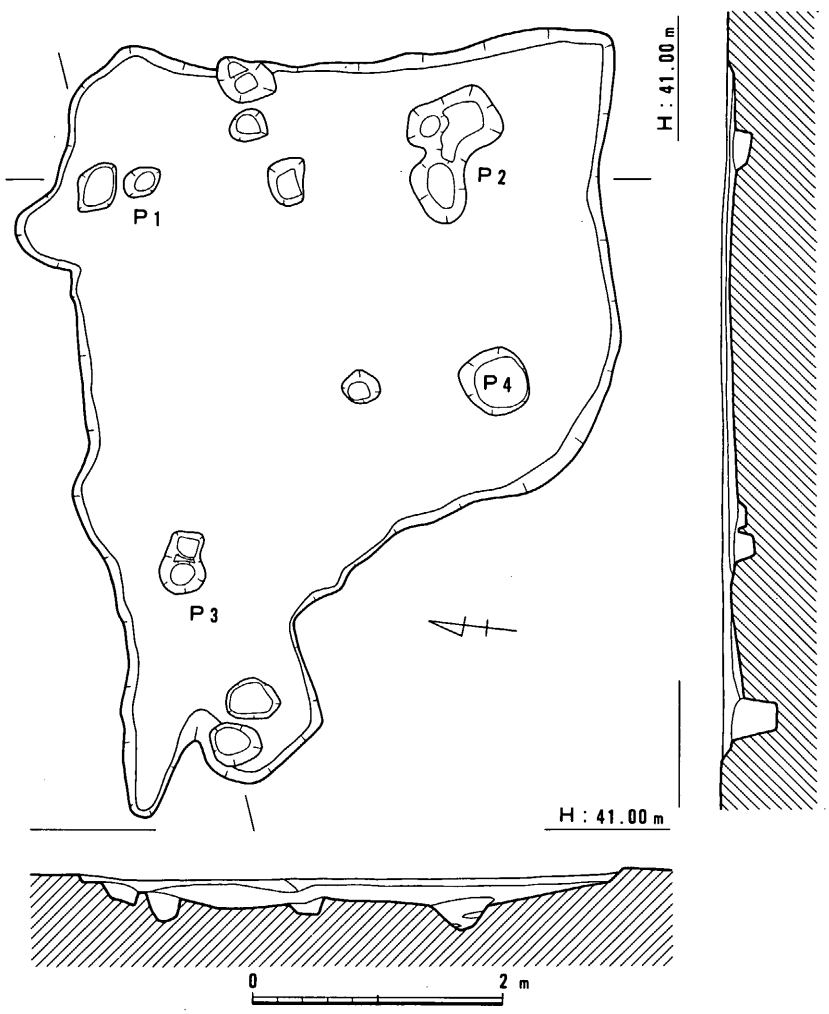
②不整形土坑

平面形、断面形ともに整わないものである。

1号不整形土坑（第9図）

16号住居跡のすぐ南で検出された。最も接近したところでは34cmしか離れていない。形状は長円形の土坑を「L」字形に合わせたような形である。南北方向では長さ約6.4cm、東西方向では約6.6mを測る。幅は約0.9m～約2.8mと一定しない。複雑な断面を呈し、最も浅い部分で約6cm、最も深い部分で約92cmを測る。床面にはピットが5個検出され、それらのうちの一つは二段掘りされている。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土した。



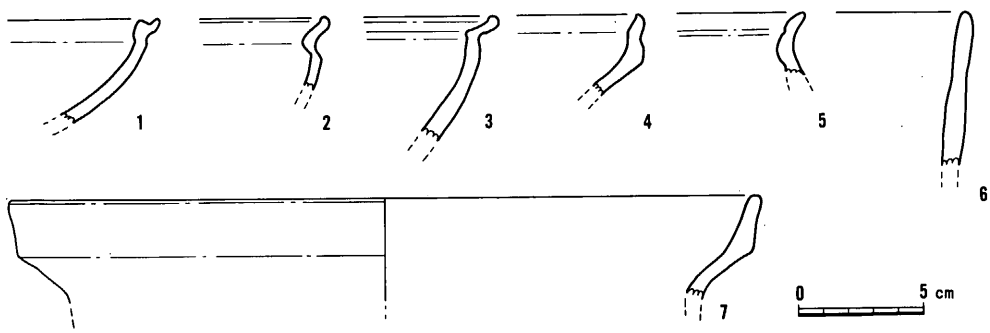
第7図　16号住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第10図）

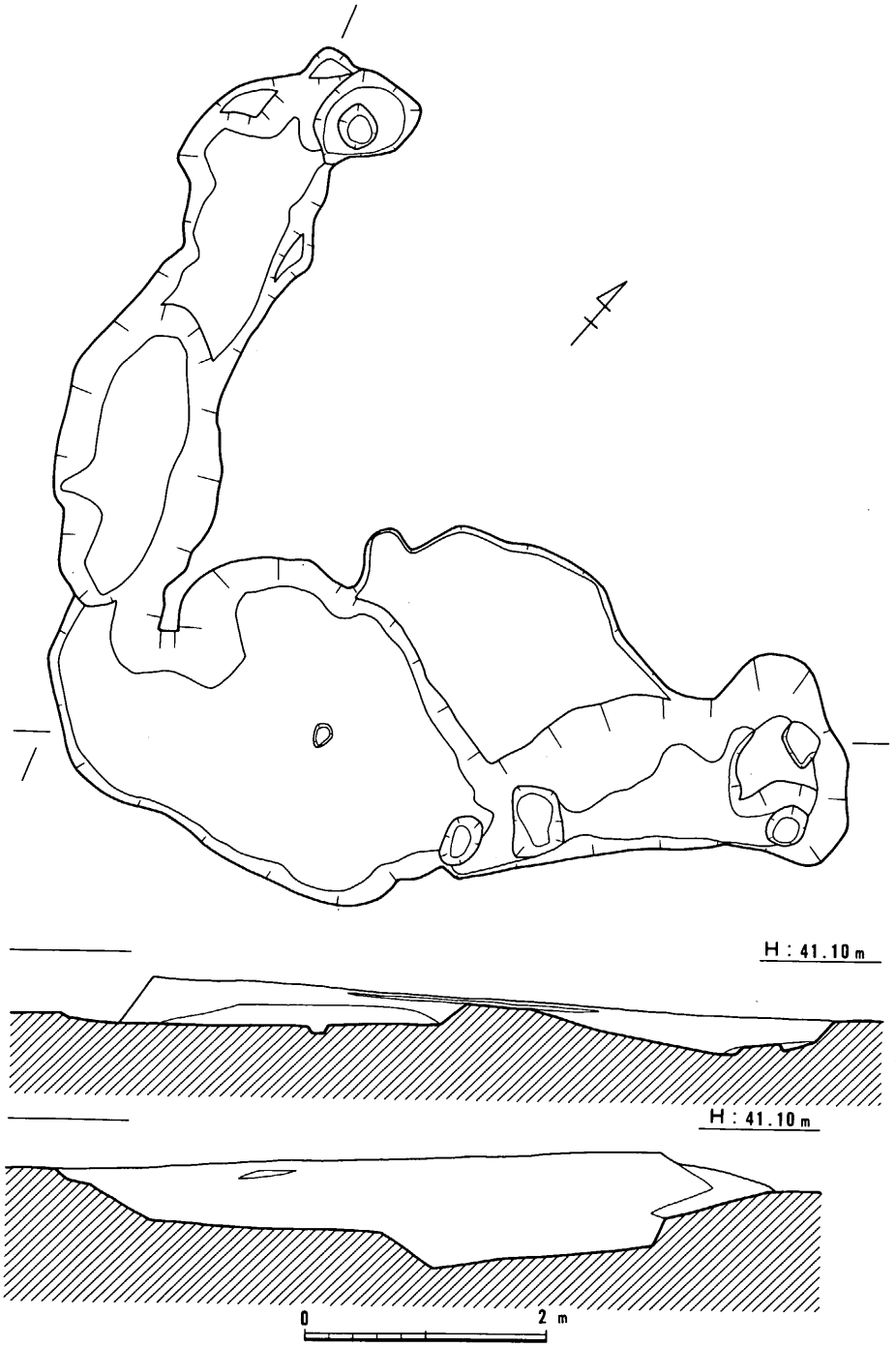
縄文土器

浅鉢（1・2）ともに胎土中に雲母を含む精製磨研土器である。1は、口縁部をわずかにつまみ上げたような形状を呈する。2は、1に比してゆるやかな頸部をもつ。

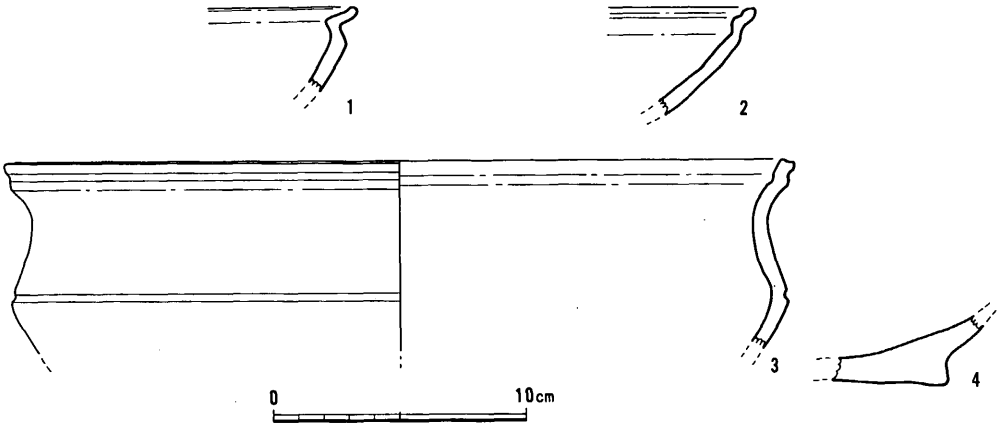
深鉢（3）　口縁部は鈍い稜をもって外傾する。口縁部内外面と肩部に1条の沈線がめぐる。胎土中に雲母を含み、内外面とも調整は精良であ



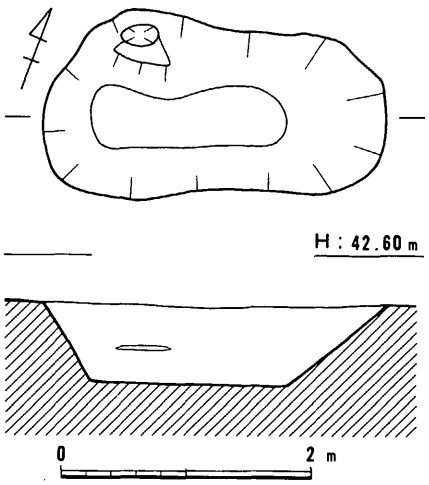
第8図　16号住居跡出土土器実測図（1/3）



第9図　1号不整形土坑実測図（1/60）



第10図　1号不整形遺構（1～3）、6号土坑（4）出土土器実測図（1/3）



第11図　6号土坑実測図（1/60）

る。

③　土坑

6号土坑（第11図）

調査区中央部やや南寄り、大溝に隣接した場所で検出された。上端、下端ともにややゆがんだ楕円形を呈する。規模は、上端で2.74m×1.35m、下端で1.56m×0.42m、深さは約0.62mを測った。埋土中より若干の縄文土器が出土したが、いずれも小片のため1点しか図示することができなかった。

出土遺物（第10図）

縄文土器

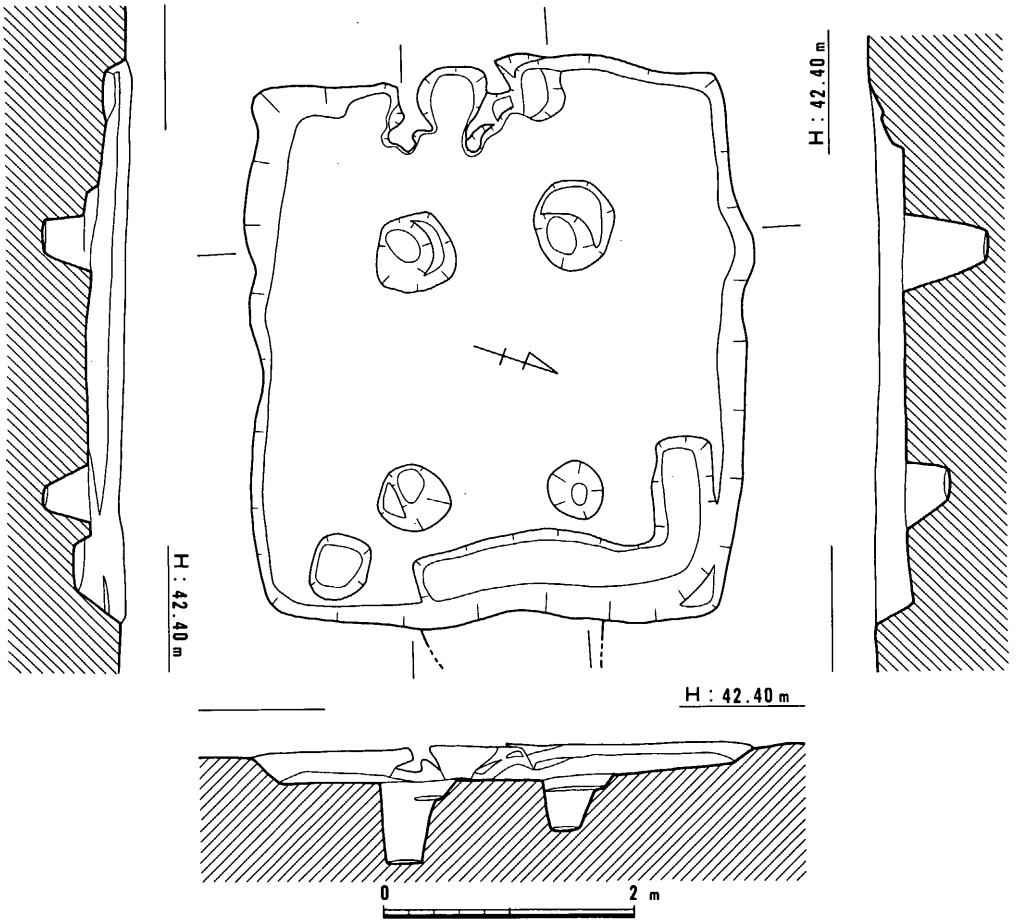
深鉢（4）　底部の小破片である。胎土中に雲母を含む。底部外面の調整は磨滅のため不明であるが、それ以外の部分には内外面ともにナデを施す。

(2)　古墳時代以降の遺構と遺物

①　竪穴住居跡

1号住居跡（第12図、図版5）

調査区の北西部に、大溝に隣接して位置する。形状は東西方向に長い長方形で、北東コーナー部付近に周溝がもうけられている。壁長は、北側壁で4.3m、東側壁で3.5m、壁高は0.15m～0.3mである。床面は平坦であり、4個の柱穴が確認された。柱穴の深さは0.36m～0.68mを測る。



第12図　1号住居跡実測図（1/60）

この他に床面で1個のピットを検出した。西側壁の中央やや南よりの部分に竈を付設しているが、竈内に支脚は見当たらなかった。

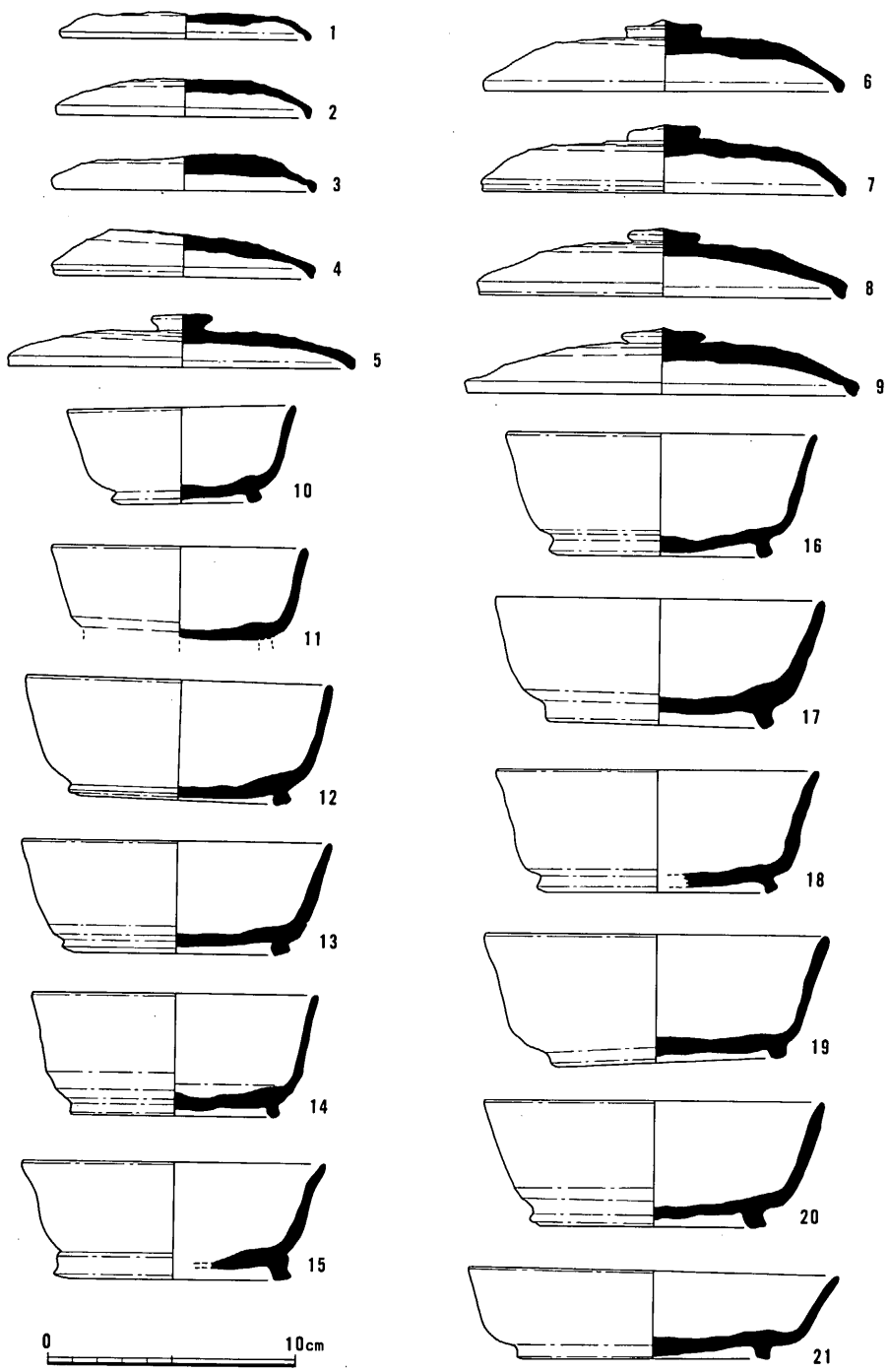
遺物は、埋土中より須恵器、土師器、土製品、鉄器が出土している。

出土遺物（第13・14・15・16図、図版40・41）

須恵器

杯蓋（1～9）　1～4はつまみを持たず天井部が平坦なものである。口縁端部は内傾する。いずれも天井部外面に回転ヘラケズリを行う。5～9は扁平なつまみを持つ。いずれも口縁端部が内傾し、天井部外面には回転ヘラケズリを行う。5の天井部は平坦であるが、6～9の天井部はやや丸味を持つ。

杯身（10～22）　高台の付くもの（10～22）と付かないもの（23）とがある。10、11は口径9.3



第13図　1号住居跡出土土器実測図①（1/3）

cm～10.4cmと小型である。ともに体部に回転ナデを行う。10の底部はヘラ切り後粗いナデ、11の底部は回転ヘラケズリを行うが、中央部のみヘラ切り後ナデた痕が残る。12～20は口径12.4cm～13.7cmを測る。いずれも体部は回転ナデを行い、底部はヘラ切り後粗いナデを行う。15は高台の貼り付け方が粗く、余分な粘土が体部におおいかぶさるような状態になっている。21は口径に比して体部が浅い。体部は回転ナデ、底部はヘラ切り後粗くナデる。22は体部が内湾気味に立ち上がる。体部は回転ナデ、底部はヘラ切り後粗いナデ。23も体部に回転ナデ、底部にヘラ切り後粗いナデを行う。

皿（24）　体部は回転ナデ、底部内面はナデ。底部外面はヘラ切り後粗いナデを行い、板状圧痕を伴う。

鉢（25）　平坦な底部を持ち、胴部は内湾する。胴部外面下半部から底部にかけては回転ヘラケズリを施す。それ以外の胴部は回転ナデ。底部内面はナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ。内外面ともに灰をかぶっており、外面では一部自然釉となっている。

土師器

杯蓋（26）　全体の約５分の１の破片で、つまみが欠損している。天井部は平坦で口縁端部はほぼ垂直に下る。内外面ともにヘラミガキを行う。

皿（27）　中央部を欠損するが、丸味のある底部に続いて稜をもって立ち上がる体部が内傾する。底部外面に手持ちヘラケズリを行い、体部と底部内面は回転ナデで仕上げる。外面は赤褐色、内面は淡橙色を呈する。

鉢（28）　中央部を欠損するが、丸味のある底部に、直線的に外傾する体部が続き、頸部から口縁部にかけてはさらに外に開く。底部外面に手持ちヘラケズリを行い、体部外面は縦方向のヘラケズリの後、同方向のナデを施す。頸部外面には指圧痕が認められる。口縁部は内外面ともに回転ナデ。頸部内面はナデ。体部内面にはヘラケズリを行う。

把手付甕（29）　口縁部から胴部にかけての破片資料である。頸部から口縁部にかけては内外面ヨコナデ。胴部外面はハケ、内面にはヘラケズリを行う。把手は貼り付け後、ナデる。

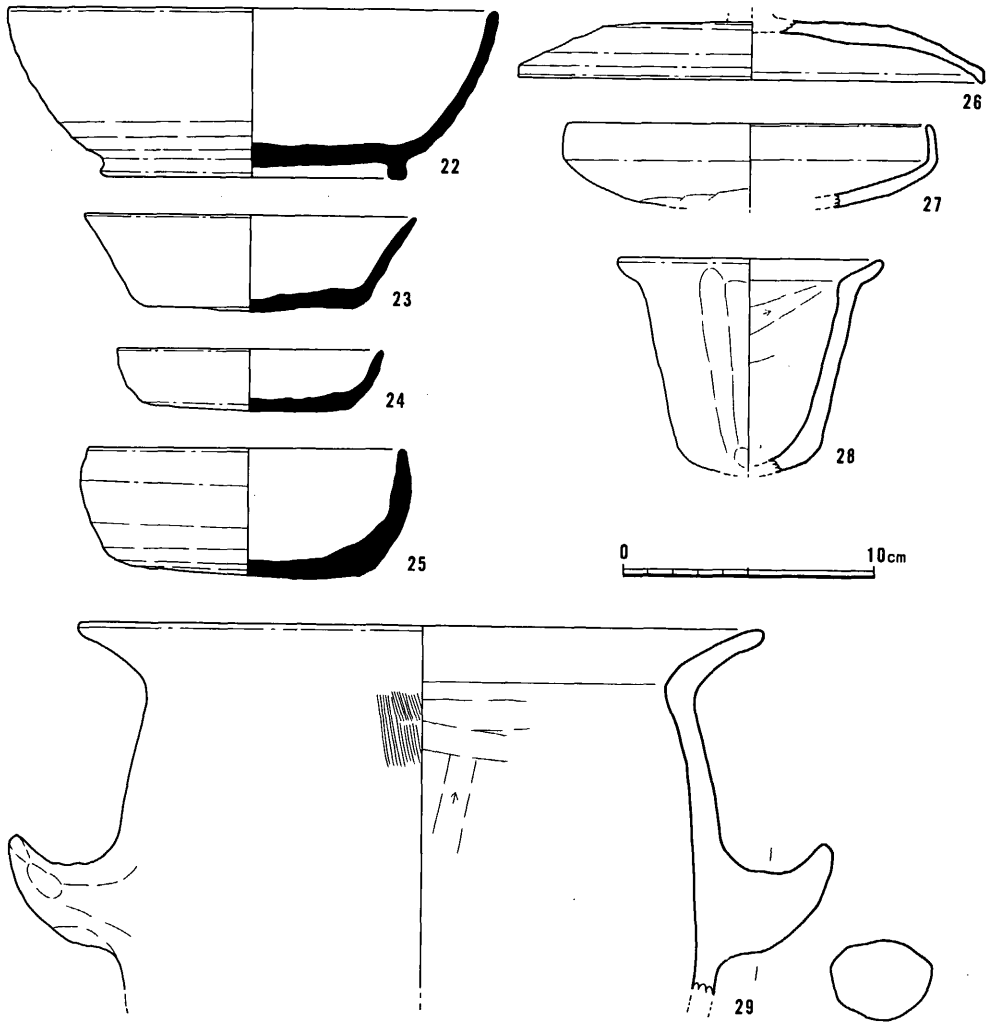
土製品（第15図）

土鈴　上部の把手となる部分のみの破片資料である。残存高2.9cm。斜め方向に穴がうがたれているが、その隣に途中で穿孔を止めたような痕がある。土師質で明褐色を呈する。

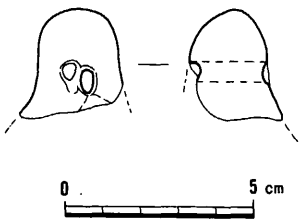
鉄器（第16図、図版81）

鏃（１）　身の下部から篦被にかけての資料である。両者の間に明瞭な関は持たない。篦被は断面長方形を呈する。

刀子（２・３）　ともに身から茎にかけての資料である。２の身の断面は二等辺三角形を呈し、関はやや不明瞭である。３は周溝内から出土した。身の断面は二等辺三角形を呈する。関は刃側で明瞭な段をなす。



第14図　1号住居跡出土土器実測図②（1/3）



第15図　1号住居跡出土土製品実測図(1/2)

糸巻棒（4～7）と**紡錘車**（8）　接合しないが、本来は一体のものであったと思われる。糸巻棒は上部の断面が長方形、紡錘車に近づくにつれて円形を呈する。紡錘車は直径3.9cm、厚さ0.4cmである。

不明鉄器（9・10）　ともに残存資料である。9はL字形に屈曲する形態をとる。屈曲部付近の断面は円形を呈するが、屈曲部から遠ざかるにしたがって正方形を呈するようになる。10もL字形に屈曲するものと思われる。断面は円形だが、屈曲部付近では細く、遠ざかるにしたがって太くなる。

2号住居跡（第17･18図、図版5・6）

1号住居跡の北東方向､約4.8m離れたところに位置する。北東のコーナーにおいてＳＫ03と切り合っているが、新旧関係はＳＫ03の方が新しい。破壊されたこの北東コーナーを補ってみると､一辺約5.3mの方形を呈すると思われる。壁高は8～24cmほどを測る。床面は平坦であり、P1～P3の3個の柱穴が検出された。本来は北東コーナー寄りにもう1個あったものの、ＳＫ03によって破壊されたものと思われる。他に床面から5個のピットを検出した。西側壁中央部に竈を付設している。竈内部には多くの土器片が散乱していたが、中央部から完形の土師器の甕を逆さにした状態で検出した。これは支脚とも考えられるが、強く加熱された痕跡は見受けられないことから祭祀的行為も看過することはできない。

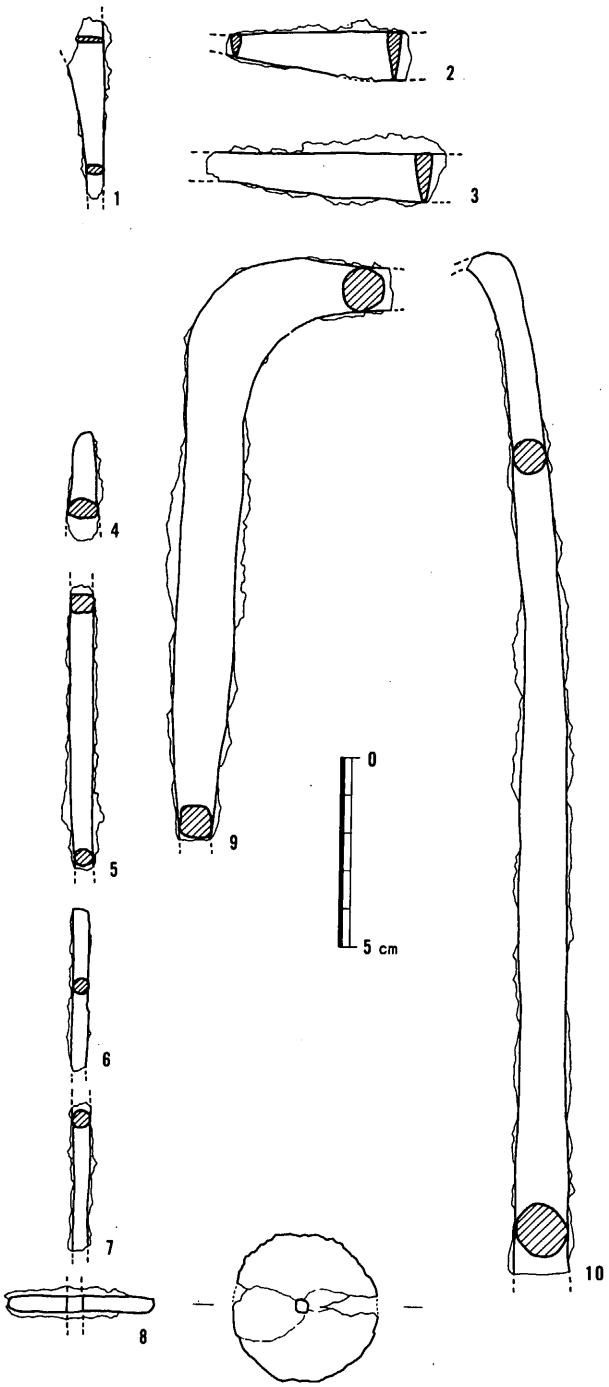
遺物は竈周辺の埋土中および床面からまとまって出土している。

出土遺物（第19図、図版41・42）

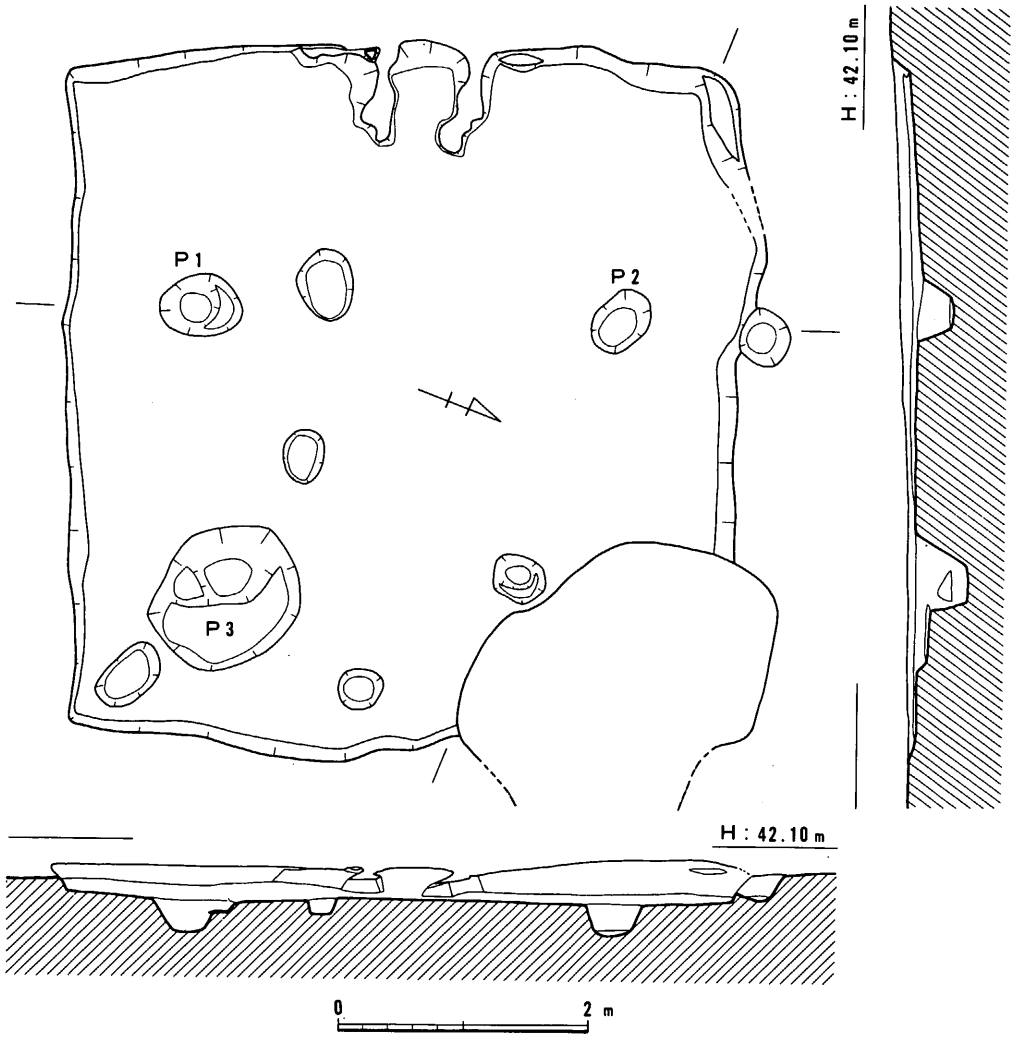
須恵器

杯蓋（1）　天井部は緩く丸味を持ち、天井部と体部の境には沈線がない。天井部外面を回転ヘラケズリし、その他を回転ナデ、ナデで仕上げる。天井部外面にヘラ記号がある。

杯身（2）　ほぼ平坦な底部の外面を回転ヘラケズリし、その他を回転



第16図　1号住居跡出土鉄器実測図（1/2）



第17図　2号住居跡実測図（1/60）

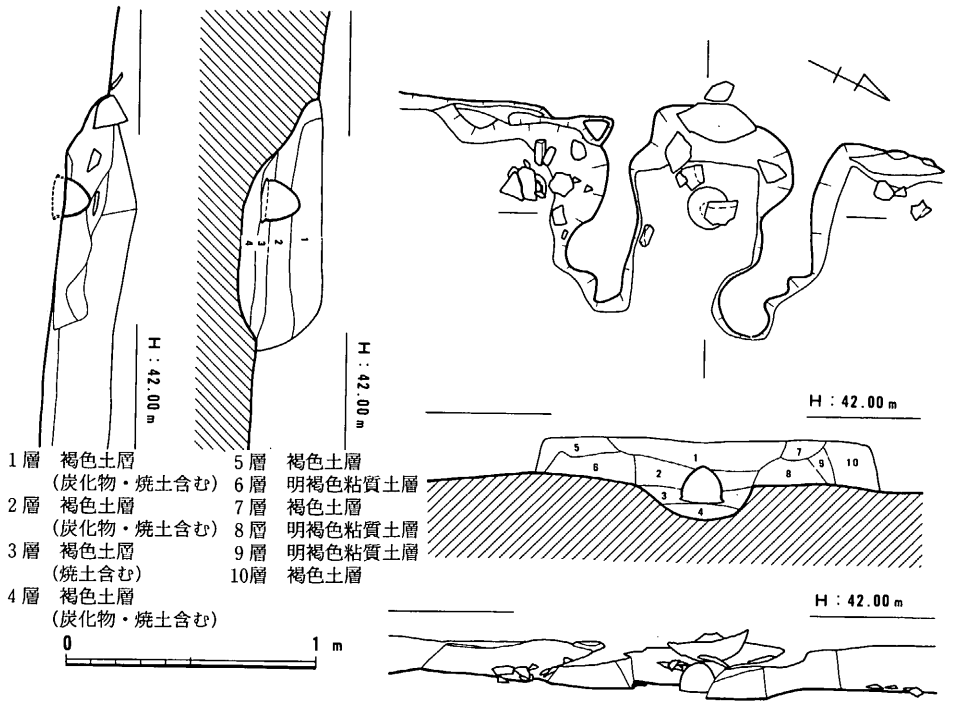
ナデで仕上げる。受部と立ち上がりの境に1条の沈線がめぐる。

鉢（3）　底部の殆どを欠損するが、体部が内湾し底部も丸味を帯びる形である。体部外面に3条の沈線がめぐり、底部から体部上部にかけてカキ目が施されている。その他の部分は回転ナデで仕上げる。

土師器

手捏土器（4）　口径2.9cm、器高1.7cmを測る。内外面ともに淡橙色を呈する。

甕（5～9）　いずれも竈付近から出土したものである。5は、竈中央部から倒立した状態で検出されたもの。口縁部、頸部上位外面、頸部内面は回転ナデ、頸部下位から底部にかけての



第18図　2号住居跡竈実測図（1/30）

外面はハケ、胴部内面はヘラケズリを行う。6・8は磨滅のため外面の調整が不明。内面は、口縁部から頸部にかけて回転ナデ、胴部にはヘラケズリを行う。7は、胴部外面にハケ、頸部内外面と口縁部に回転ナデ、胴部内面にヘラケズリを行う。9は胴部内面にヘラケズリが認められるが、それ以外は磨滅のため調整不明である。

3号住居跡（第20図、図版6）

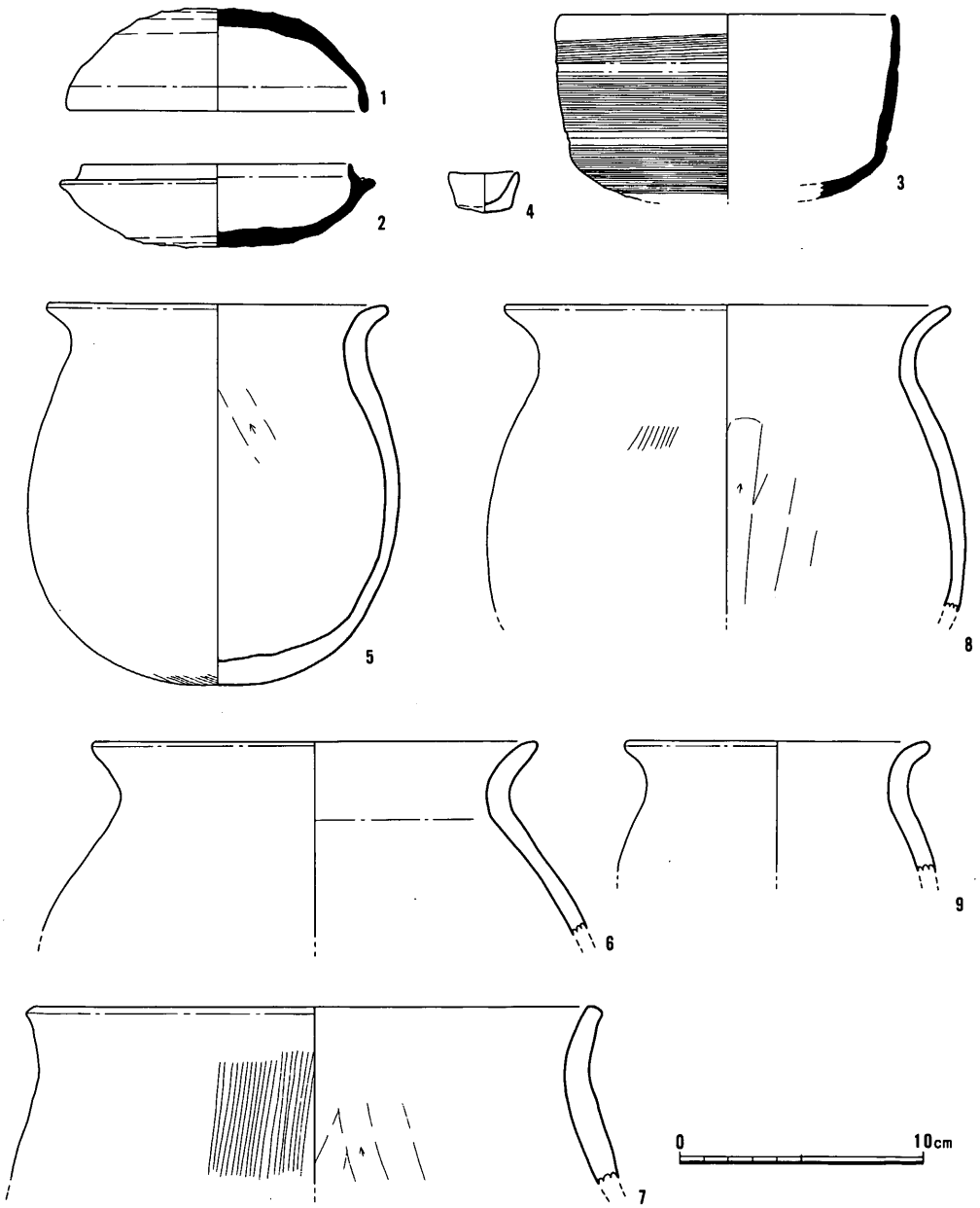
2号住居跡のすぐ南に位置する。最も近いところで約0.9mしか離れていない。SK04と切り合っているが、新旧関係はSK04の方が新しい。形状は方形で、北側壁5.1m、東側壁5.2mを測る。北東コーナー部付近に周溝がもうけられている。壁高は8～20cmを測る。床面は平坦で、12個のピットが検出された。それらのうち、P1～P4とした4個が主柱穴であると思われる。北側壁中央部に竈の痕跡が認められたため精査したが、袖等を検出することはできなかった。

遺物は埋土中より出土したが、量は少なかった。

出土遺物（第21図、図版42）

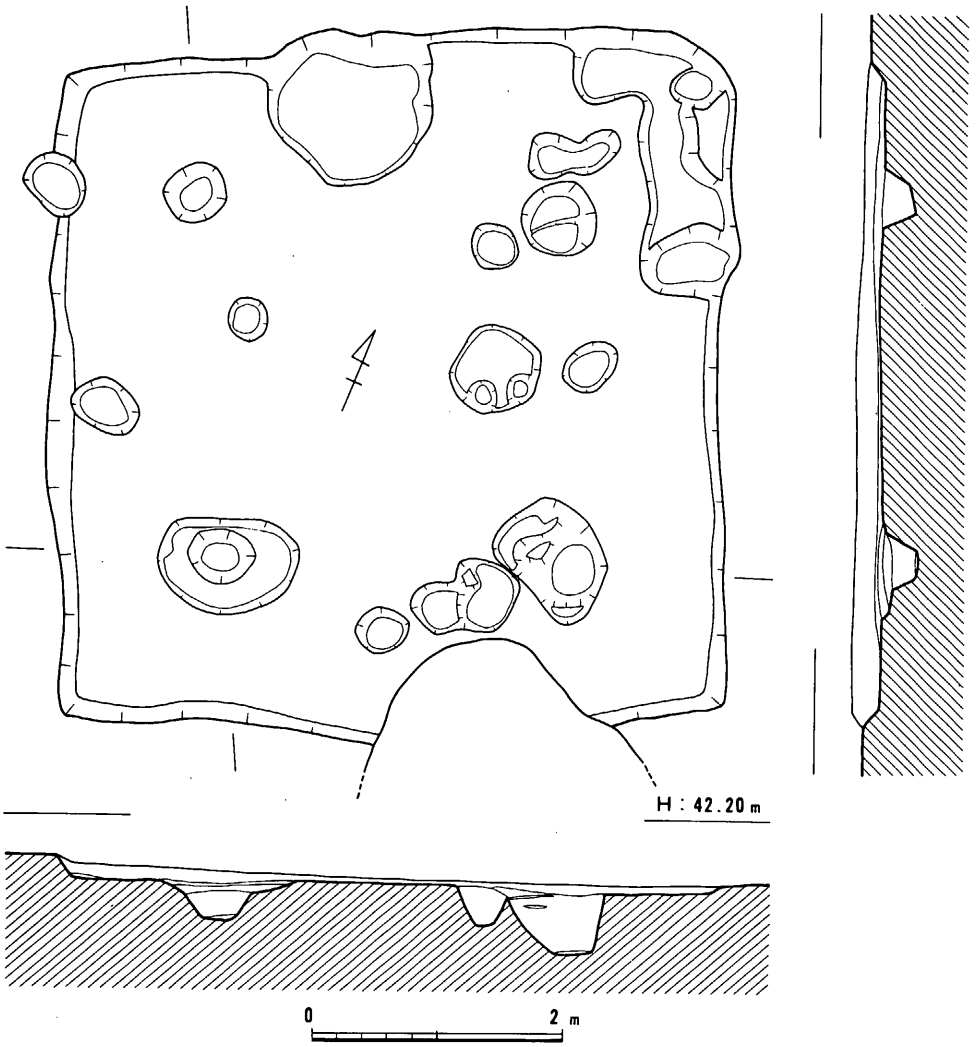
須恵器

杯蓋（1、2）　1の天井部は丸味を持ち、体部との境には沈線がない。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他を回転ナデ、ナデで仕上げる。天井部外面にヘラ記号があり、灰をかぶっている。2の天井部は平坦で、ヘラ切り後板状の工具でナデた後回転ヘラケズリを行う。体部外



第19図　2号住居跡出土土器実測図（1/3）

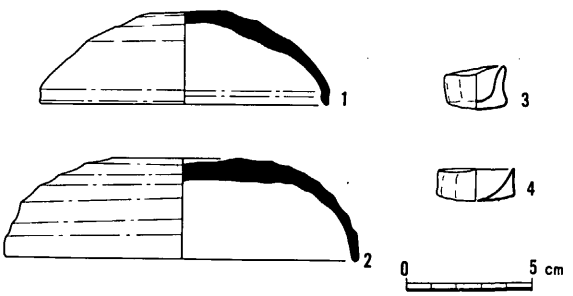
面には回転ナデを行うが、その結果段がついたような形状となっている。特にその最上段にはヘラ状の工具で1条の沈線をめぐらせている。内面は回転ナデとナデで仕上げる。



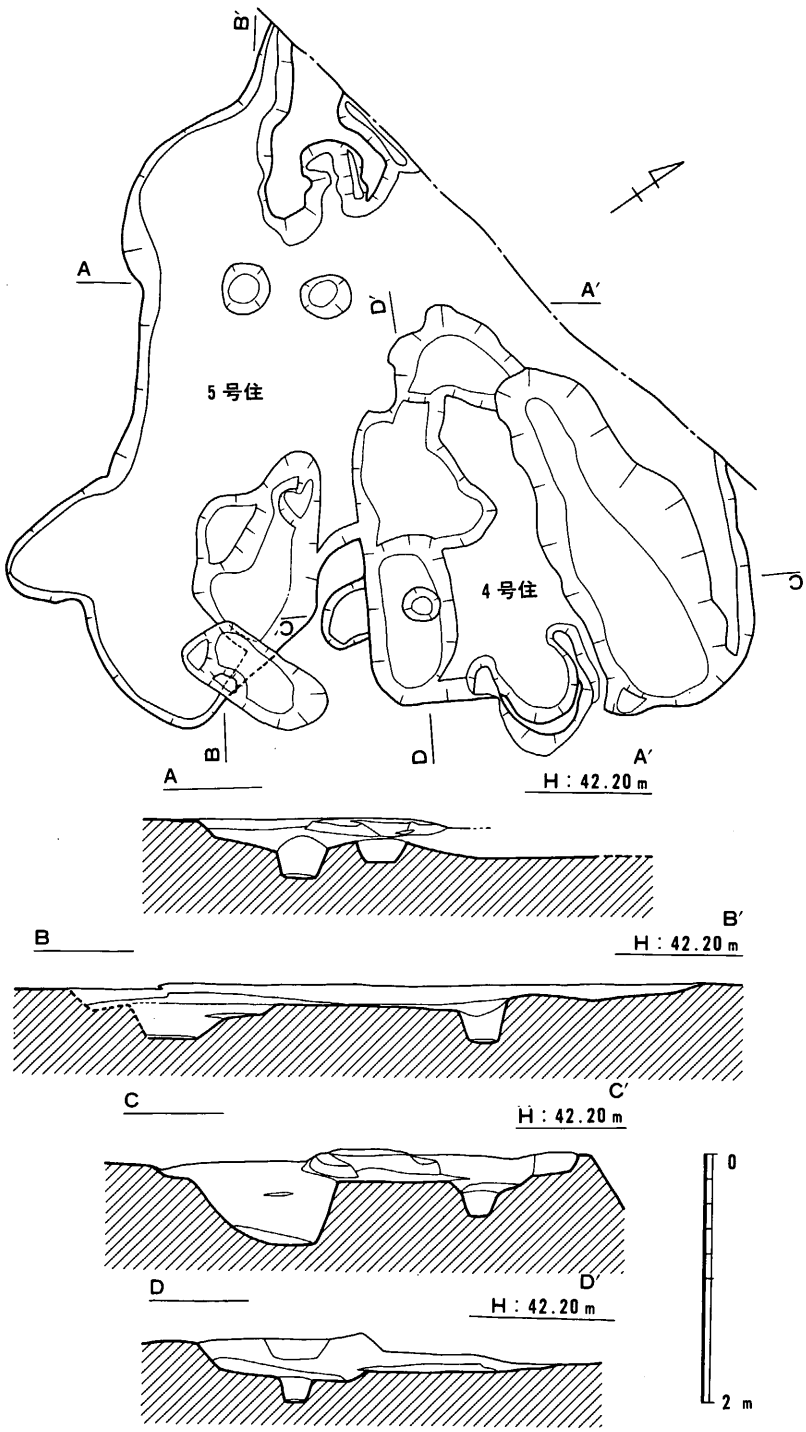
第20図　3号住居跡実測図（1/60）

土師器

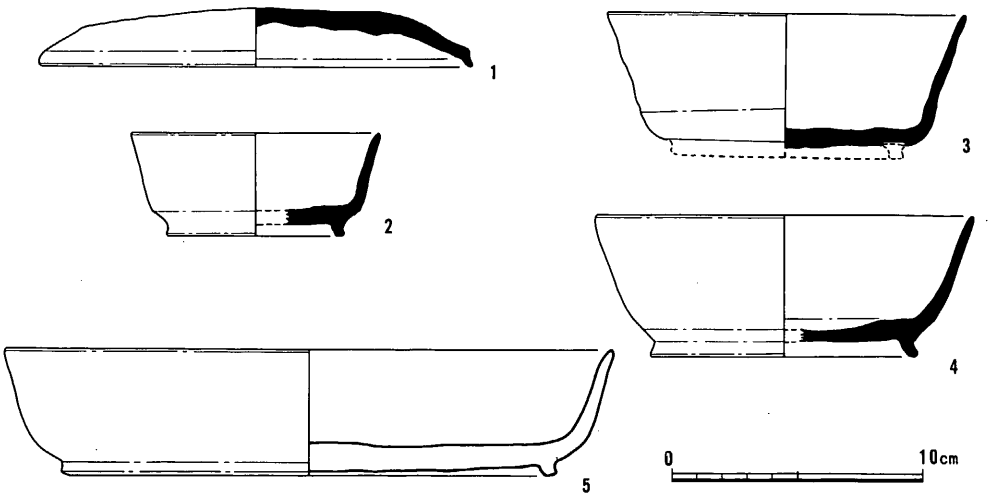
手捏土器（3、4）　3は口径2.5cm、器高1.6cm、4は口径3.0cm、器高1.4cmを測る。ともに明橙色を呈する。4は底部中央が薄くなって小さな穴があいている。



第21図　3号住居跡出土土器実測図（1/3）



第22図　4号・5号住居跡実測図（1/60）



第23図　4号住居跡出土土器実測図（1/3）

4号住居跡（第22図、図版7）

調査区北端部で検出され、北側は調査区外のため未発掘である。5号住居跡と切り合っているが、掘り下げの時点で新旧を明らかにすることはできなかった。竈は南東側壁の中央部にもうけられている。南東壁の長さは2.8m、竈付近での壁高は0.19mを測る。遺物は主に竈付近から出土したが、竈内に支脚等はなかった。

出土遺物（第23図、図版42）

前述のとおり、5号住居跡との新旧関係を明らかにできなかったため、竈付近より出土した遺物だけを図示した。これは5号住居跡出土遺物についても同様である。

須恵器

杯蓋（1）　天井部は平坦でつまみを持たず、口縁部は外傾する。焼成不良のため磨滅がはげしく、内外面ともに調整は不明である。

杯身（2～4）　2は口径10.0cm、器高4.2cmと小型。底部中央部を欠くが、内外面ともに回転ナデを行う。3は高台を欠く。底部外面をヘラ切り後粗いナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。4は底部外面をヘラ切り後粗いナデ、その他を回転ナデとナデで仕上げるが、体部外面の調整がやや粗い。

土師器

皿（5）　磨滅のため調整がやや不明瞭だが、底部外面は回転ヘラケズリ、その他はヘラミガキで仕上げている。

5号住居跡（第22図、図版7）

4号住居跡と切り合っているが、新旧関係を明らかにできなかった。北側は調査区外のため未発掘である。検出された部分のみで、南西側壁の長さは4.9m、壁高は6cm～16cmを測る。調査

区北端部から竈が検出されたが、本住居跡全体のどの部分にあたるのかは不明である。竈内に支脚等はなかった。床面にはやや凹凸があり、ピットが２個検出された。

出土遺物（第24図、図版42）

須恵器

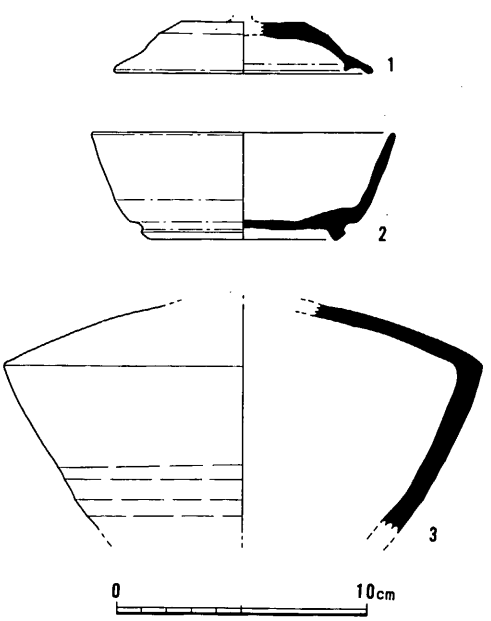
杯蓋（１）　全体の３分の１ほどの破片資料である。つまみを欠損する。平坦な天井部はヘラ切り後粗いナデ、天井部直下の体部には回転ヘラケズリ、その他を回転ナデで仕上げる。かえりは短く、断面三角形を呈する。

杯身（２）　底部外面はヘラ切り後ナデ、その他を回転ナデとナデで仕上げる。高台貼付けの痕が明らかである。

長頸壺（３）　胴部の屈曲部は鋭い稜線を持つ。胴部下部は回転ヘラケズリ、それ以外の部分には回転ナデを行う。内外面ともに青灰色を呈する。

６号住居跡（第25図、図版７）

３号住居跡の約1.9m東に位置する。南側は残存していなかった。ＳＫ10と切り合っており、新旧関係はＳＫ10の方が新しい。形状は方形またはそれに近い形であったものと考えられる。北側壁長は3.7mを測り、中央やや西よりのところに竈がもうけられている。竈内からは支脚等は検出されなかった。壁高は７cm～14cmである。床面は平坦で、２個の柱穴とピットを１個検出した。また、北西コーナー付近に約６cmの浅い掘り込みが認められた。他の住居跡と比して出土遺物の量は少なかった。



第24図　５号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第26図）

図示できるのは小破片３点のみである。３は、出土地点から判断して混入した可能性が大きい。

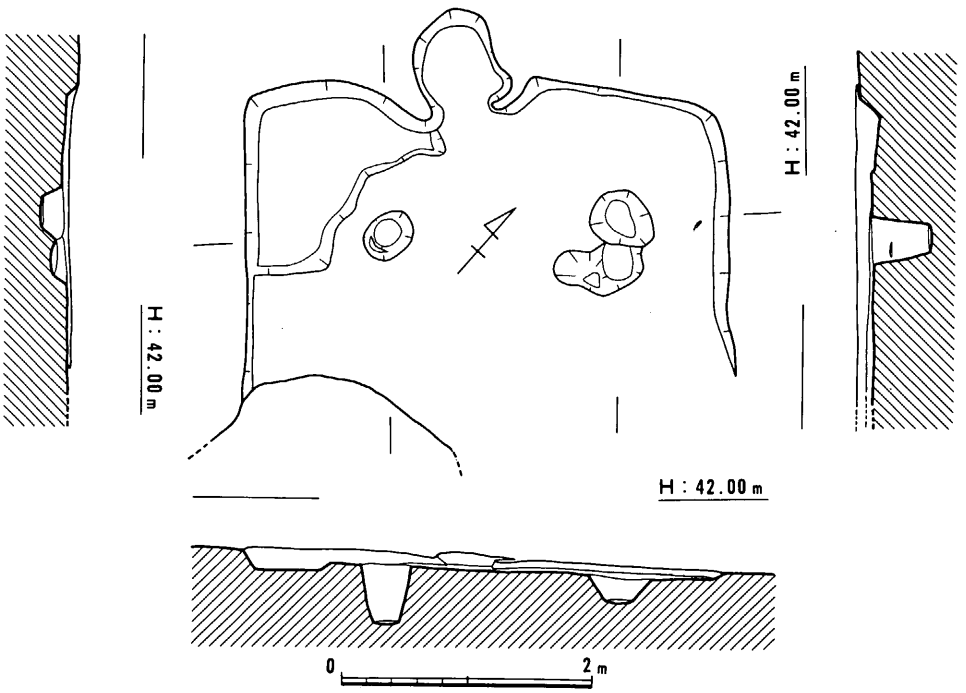
須恵器

杯蓋（１）　天井部を回転ヘラケズリしていたものと考えられる。その他は回転ナデ。

杯身（２、３）　２の立ち上がりは基部が厚く、先端で細くなる。また、直線的に内傾する。３は、底部外面をヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデとナデを行う。

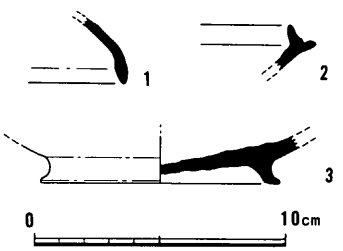
７号住居跡（第27図、図版８）

調査区北部のやや東寄りの場所で検出された。６号住居跡と16号住居跡の間にあり、前者からの距離は約8.4m、後者からは約5.9mである。斜面を切り込むようにつくられており、東側



第25図　6号住居跡実測図（1/60）

の部分は十分に検出することができなかった。西側壁長は4.1mを測り、中央部に竈の痕跡が認められたため精査したが、袖等の施設は検出しなかった。床面は、西側では多少の高低差があるもののほぼ平坦で、柱穴を2個検出した。東側では複雑な様相を呈する。壁高は、竈付近で約0.35mを測る。遺物の出土量は少ないが、特に南西コーナー部分の床面上からまとまって出土した。



第26図　6号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第28図、図版42・43）

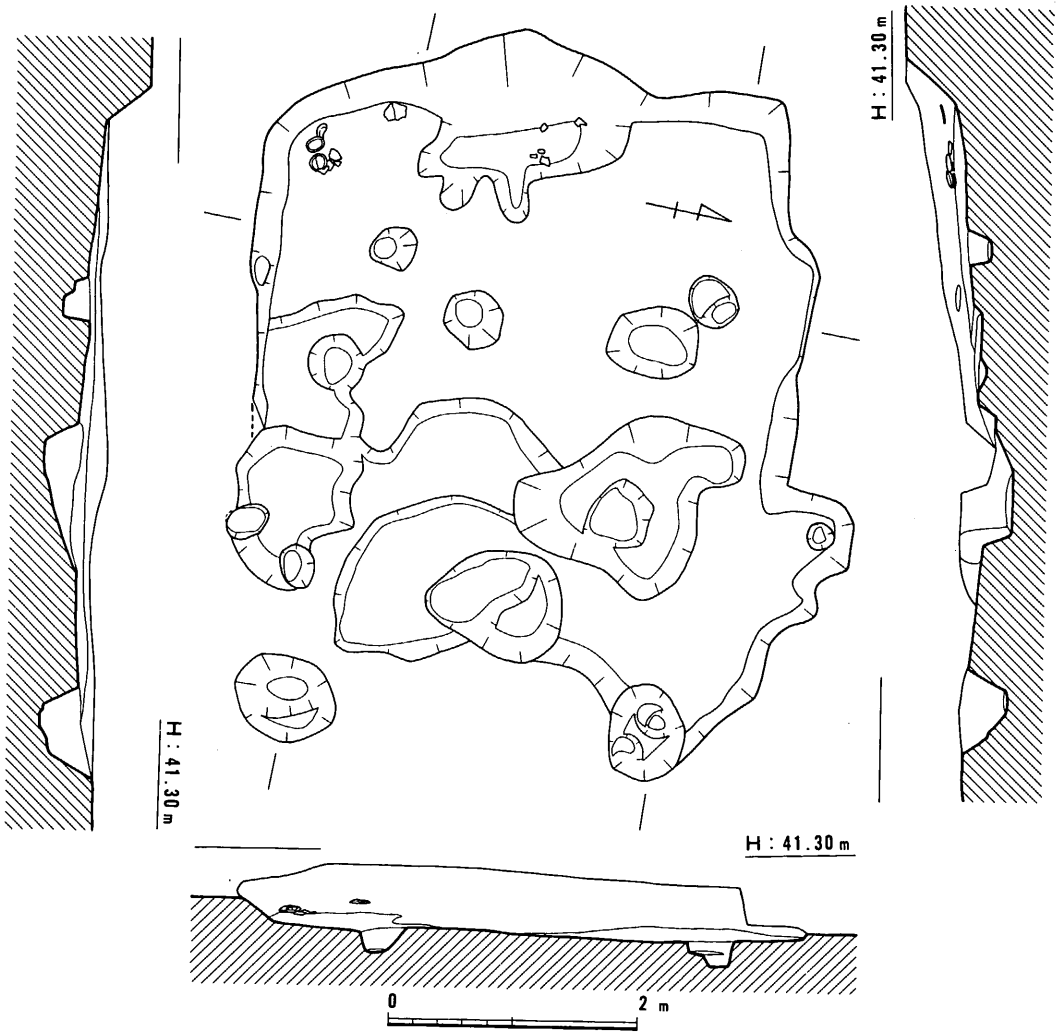
須恵器

杯蓋（1）　丸い天井部に回転ヘラケズリを行い、その他の部分は回転ナデ、ナデで仕上げる。天井部外面にヘラ記号がある。

杯身（2）　底部は平坦で、受部、立ち上がりは短い。底部外面に回転ヘラケズリを行い、その他は回転ナデ、ナデで仕上げる。底部外面にヘラ記号がある。

蓋（3）　口径7.7cm、器高3.4cmと小型である。天井部は丸く、口縁部は平坦である。内外面ともに回転ナデを行う。外面の一部に灰をかぶっている。

甕（4）　胴部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリを行い、その他の部分は回転ナデで仕上げ



第27図　7号住居跡実測図（1/60）

る。肩部に2条の沈線がめぐる。頸部内外面にシボリ痕が認められ、底部外面にはヘラ記号がある。

土師器

甕（5）　口縁部から胴部上位にかけての小破片である。胴部内面をヘラケズリするが、それ以外の部分は磨滅のため調整不明である。

手捏土器（6）　口径3.2cm、器高2.4cmを測る。体部外面に指圧痕が残る。

8号住居跡（第29図、図版8）

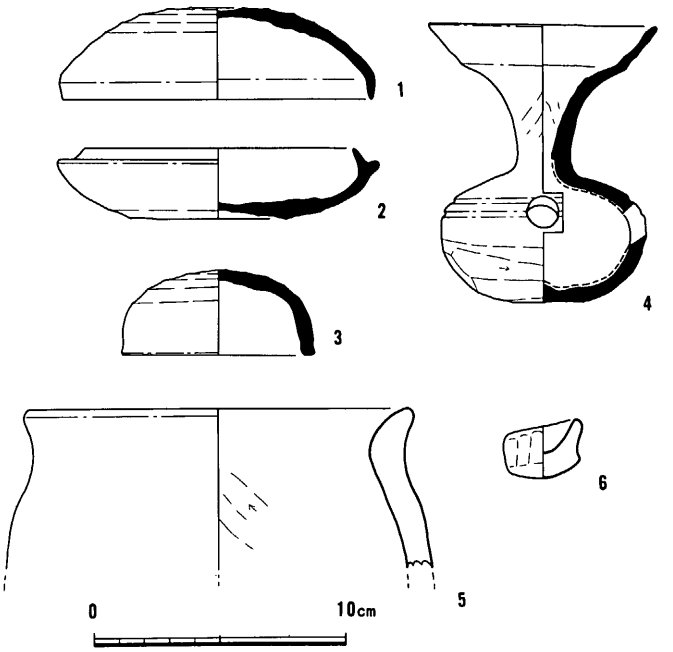
今回の調査区内では最も南に位置する竪穴住居跡である。南東側の壁を検出できなかったが、柱穴の並び方から考えると、本来4.2m×4.9mくらいの長方形を呈していたのではないかと思われる。壁高は北西側で約7cmと浅い。床面は砂質土で平坦である。柱穴はP1～P4とした4本

で、他に4個のピットを検出した。北西側壁沿いの、北コーナーから約2.5m離れた部分を中心に焼土が散っているのを確認し、精査したが、竈の痕跡は検出しなかった。遺物は、小破片が若干出土したが、図示できるのは1点のみである。

出土遺物（第30図）

須恵器

杯身　小片のため口径を復元することができなかった。受け部は短く、立ち上がりは外反する。焼成は不良である。



第28図　7号住居跡出土土器実測（1/3）

9号住居跡（第31図、図版9）

8号住居跡の北、約4.5m離れたところに位置する。東西に長い長方形を呈する。壁長は、北側で4.0m、東側で3.4mを測る。壁高は約6cmと浅いがほぼ一定している。床面は平坦で、11個のピットが検出された。そのうち、P1～P4としたものが主柱穴である。北側壁の中央部で竈の痕跡を認めたためこれを精査したが、袖等の施設は検出しなかった。遺物は、小破片が若干出土したが、図示できるのは1点のみである。

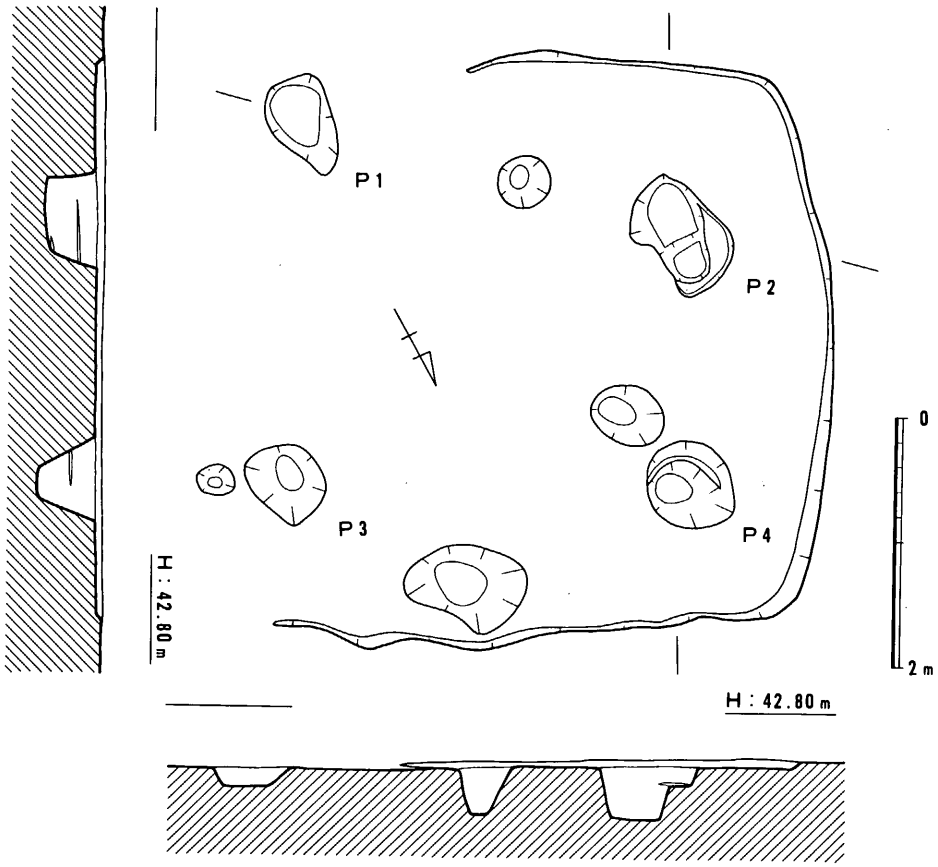
出土遺物（第32図、図版43）

須恵器

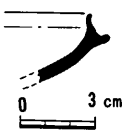
杯蓋　天井部が平坦で、口縁部はやや内傾する。つまみは中央が尖る。焼成不良のため全体に磨滅しており、調整は不明である。

10号住居跡（第33図、図版9）

9号住居跡の北東約4.5mのところに位置する。2号竪穴状遺構と切り合っており、新旧関係は2号竪穴状遺構の方が新しい。2号竪穴状遺構に破壊された部分を補って考えると、本来は台形の形状を呈したものと思われる。壁長は、残存する西側壁で4.7m、北側壁で5.6mを測る。壁高は7cm～11cmである。床面は平坦で4個のピットを検出したが、柱穴かどうかは不明である。西側壁の中央部に竈の痕跡を認めたためこれを精査したが、袖等の施設は検出しなかった。この部分の直下にあたる床面には深さ0.2m～0.4mほどの掘り込みがあり、この埋土中から集中的に遺物が出土した。



第29図　8号住居跡実測図（1/60）



第30図　8号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第34図、図版43）

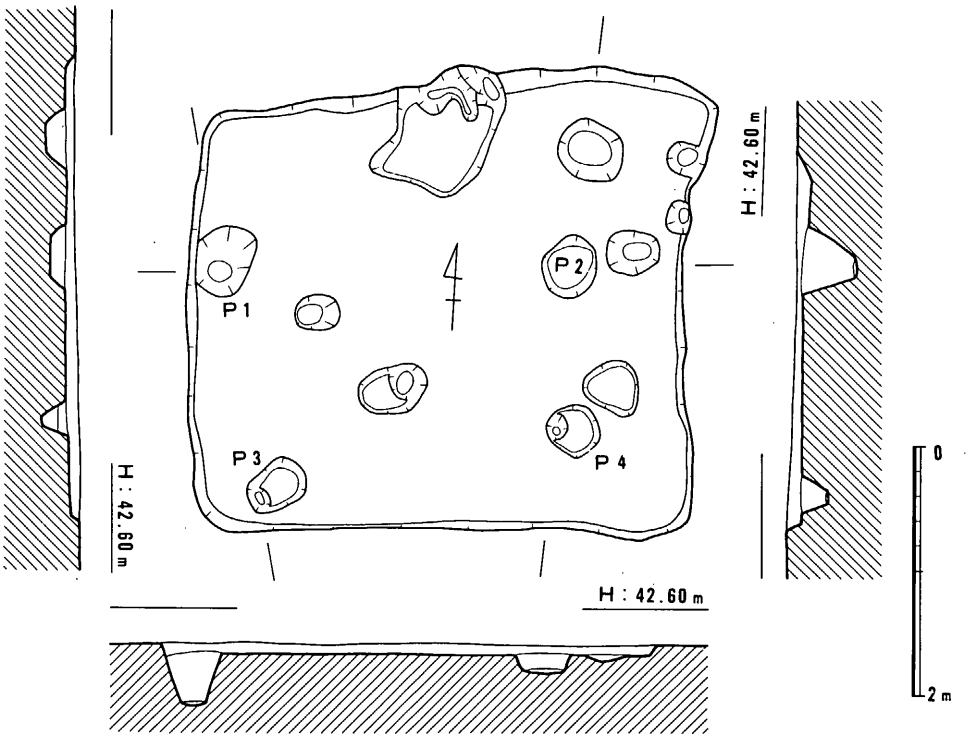
須恵器

杯蓋（1、2）　1は天井部を回転ヘラケズリし、その他を回転ナデ、ナデで仕上げる。口縁部はほぼ垂直に下る。2は扁平なつまみを持ち、口縁端部を折り返さない。焼成不良のため磨滅がはげしく、調整は不明である。

杯身（3、4）　3の底部外面は、ヘラ切りの後ナデる。高台は貼り付けの痕跡が明らかである。体部内外面は回転ナデ、底部内面はナデで仕上げる。4は高台が付かず、体部上位から口縁部にかけて外に開く。調整は、底部外面をヘラ切り後ナデ、底部と体部の境付近を回転ヘラケズリ、体部内外面に回転ナデを行う。底部内面が剝離している。

鉢（5）　底部を欠損する破片資料であるが、内湾する体部を持ち、口縁部は内傾する端部を形成する。体部下位に手持ちヘラケズリを施し、その他の部分は回転ナデで仕上げる。

皿（6）　体部が直線的に外に開く。底部外面回転ヘラケズリ、その他の部分を回転ナデとナ

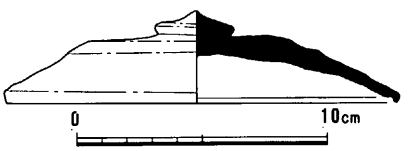


第31図　9号住居跡実測図（1/60）

デで仕上げる。

土師器

高台付皿（7）　底部中央部を欠く。高台は貼り付けの痕跡が明らかである。口縁端部は丸く仕上げている。焼成不良のため全体に磨滅がはげしく、調整は不明である。

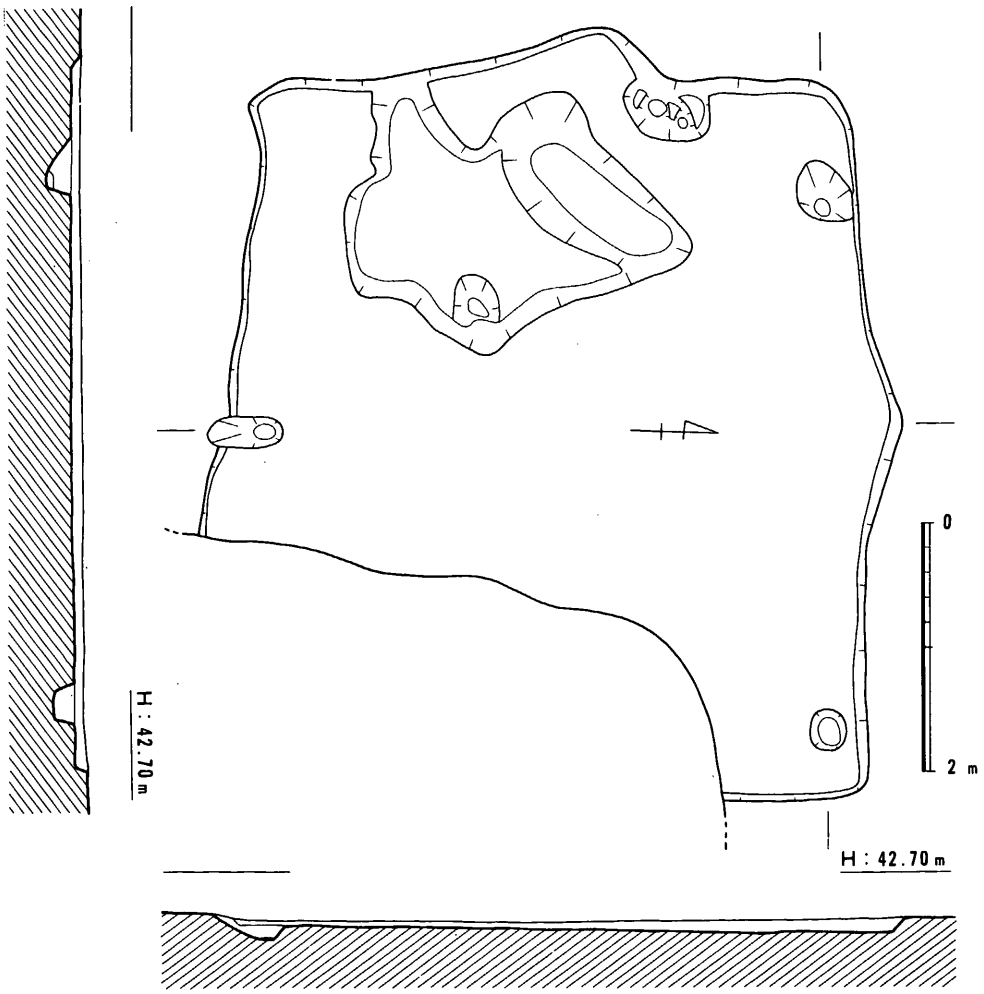


第32図　9号住居跡出土土器実測図（1/3）

椀（8）　平坦な底部に内湾する体部が続き、口縁端部は丸く仕上げる。高台は貼り付けの痕跡が明らかである。調整は、底部外面に回転ヘラケズリ、体部内外面と底部内面にヘラミガキを行う。焼成良好で、内外面ともに明褐色を呈する。

竈（9）　移動式の竈である。全体の5分の1ほどの破片資料で、焚口、庇などの部分は復元することができなかった。上部円孔径23.5cm、脚部最大径49.0cm(いずれも復元径)、器高約28cmを測る。把手は上向きで、断面はほぼ円形を呈する。脚端部は「ハ」字状に開く。調整は外面をハケ、内面は縦方向のヘラケズリを施す。把手は貼り付けた後、接合面を粗くナデて仕上げる。内外面ともに煤の付着や二次焼成による赤変などは見られない。

11号住居跡（第35図、図版10）



第33図　10号住居跡実測図（1/60）

10号住居跡の東、約11.5m離れたところに位置する。調査区全体で言えば、ほぼ中央部の南端に近い場所である。平面形は、ゆがんだ方形を呈し、壁長は東西方向で2.9m～3.2m、南北方向で3.2m～3.5mを測る。壁高は0.1m～0.15m程度である。床面は平坦で、4個の柱穴を検出した。その他に、不整形のピットを1個検出した。南側壁の中央部に竈の痕跡が認められたため、これを精査したが、袖等の施設は検出しなかった。遺物は、竈付近の埋土中を中心に出土したが、いずれも小片のため1点しか図示することができなかった。

出土遺物（第36図、図版43）

須恵器

杯身（1）　体部が屈曲するもので、高台を貼り付けた痕跡が明らかである。調整は、底部外

面をヘラ切り後ナデ、体部下部を回転ヘラケズリ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。焼成が不良なため内外面ともに淡茶灰色を呈する。

12号住居跡（第37図）

10号住居跡と11号住居跡の間にある。前者から約2.5m、後者から約2.9mの距離である。北側で10、11号土坑と、南側で試掘トレンチと切り合っている。新旧関係は、11号土坑→本住居跡→10号土坑の順である。試掘トレンチに破壊されている南西コーナーを補って考えると、北側壁3.9m、東側壁4.1m、南側壁3.5m、西側壁3.9mと、南側壁がやや短い方形を呈するものと思われる。壁高は0.15m～0.25mを測り、床面は平坦である。床面からは不整形のピットが2個、また、北東・北西コーナーで深さ0.12m～0.2mのくぼみが認められた。これらを利用して4本の柱を立てていたものと思われる。南側壁の中央部に焼土が散布していたため、この部分を精査したが、竈の施設は検出しなかった。遺物の出土量は少なかった。

出土遺物（第38図）

須恵器

高杯（1） 杯部の約3分の1の破片資料である。残存高5.0cmを測る。底部外面を回転ヘラケズリし、体部内外面を回転ナデ、底部内面をナデで仕上げる。焼成不良のため内外面ともに茶灰色を呈する。

土師器

甕（2） 底部中央部を欠き、残存高17.2cmほどを測る。調整は、口縁部から頸部外面にかけてヨコナデ、頸部内面を横方向のハケ、胴部外面をハケ、胴部内面をヘラケズリ、胴部下部から底部外面にかけてハケの後ナデ、底部内面をナデで仕上げる。焼成も良好で、比較的ていねいに作られている。

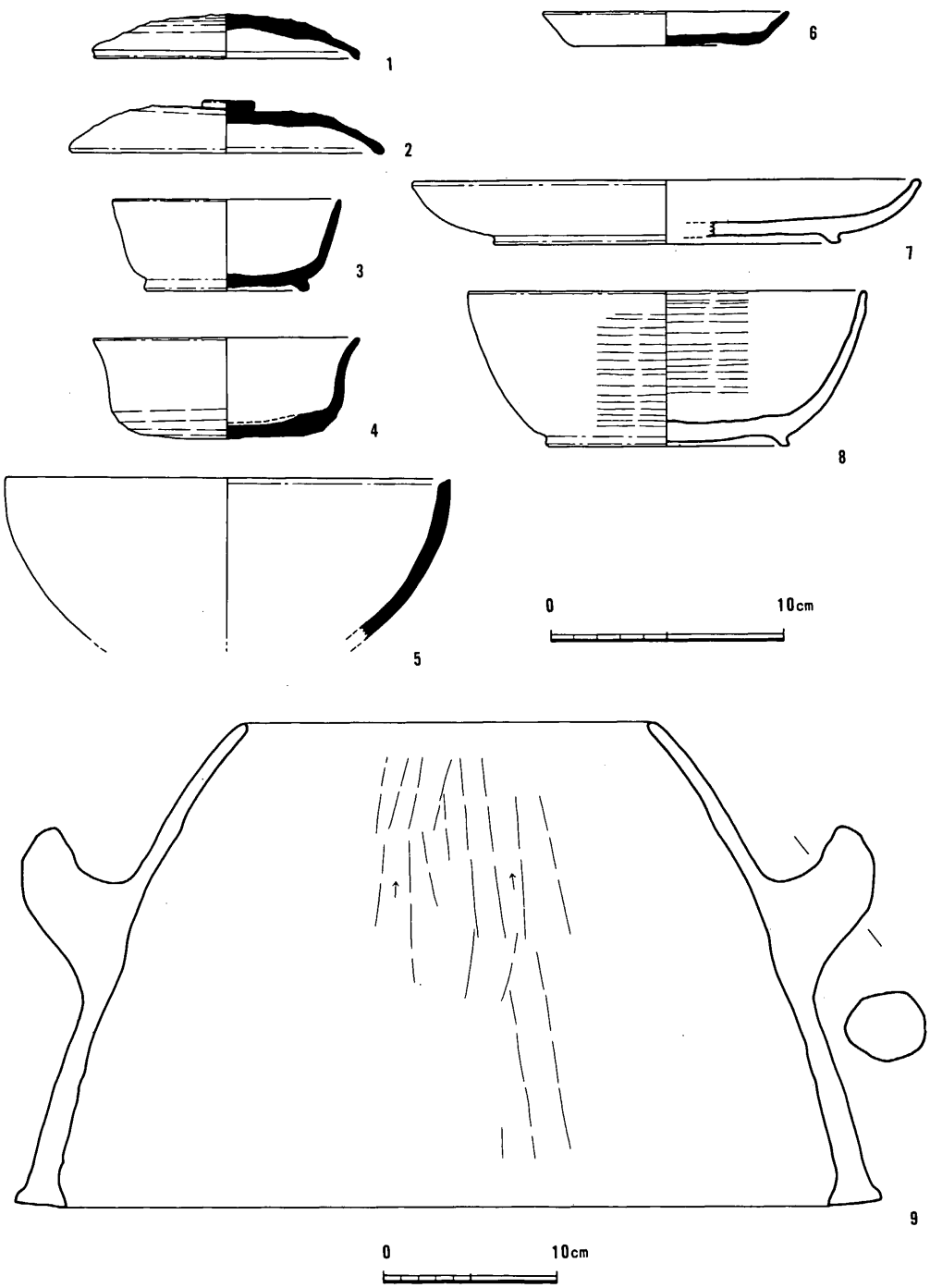
14号住居跡（第39図、図版11）

調査区中央部の西端近くに位置する。西側の部分は検出されなかった。南東コーナーでＳＫ15と切り合っており、新旧関係はＳＫ15の方が新しい。ＳＫ15に切られた部分を補って考えてみると、東側壁は約4.4mの長さであったと思われる。壁高は、この東側壁で0.12mほどを測る。床面は平坦で、3個のピットを検出した。また、南東コーナー付近には不整形のくぼみが認められた。北東コーナー部分において竈の痕跡を認めたためこれを精査したが、袖、支脚等の施設は検出しなかった。遺物は、主に竈の周辺の埋土中より出土した。

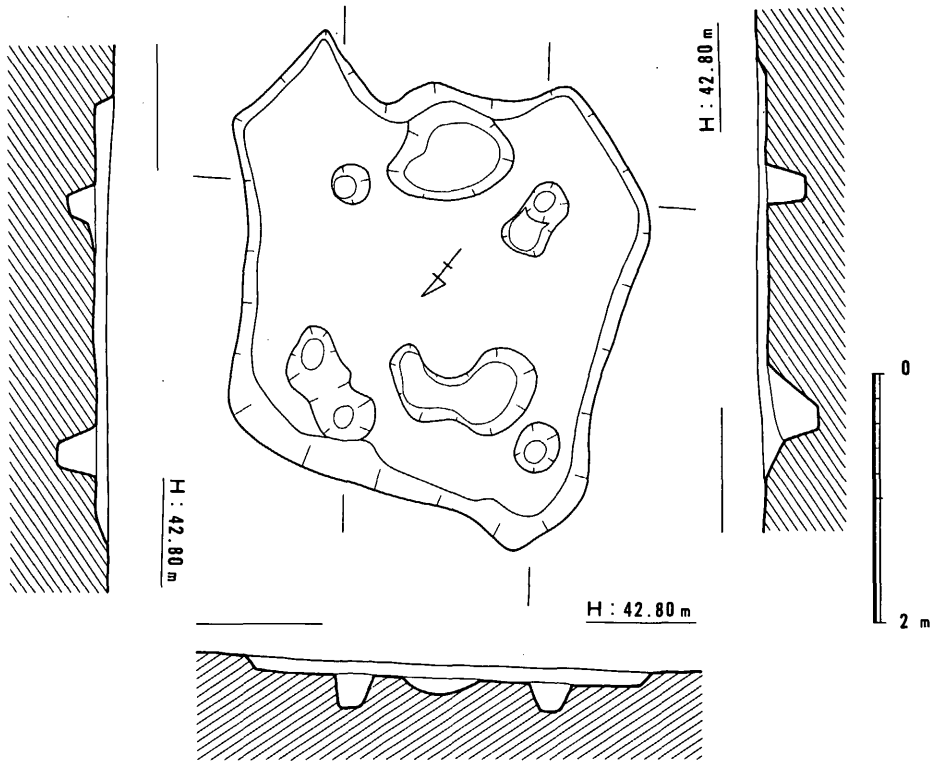
出土遺物（第40図、図版43）

須恵器

杯蓋（1、2） ともにつまみを持たないものである。1は天井部外面にヘラ切り後粗いナデ、その他に回転ナデとナデを行う。2のかえりは短く、断面三角形を呈する。天井部外面をヘラ切り後粗いナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

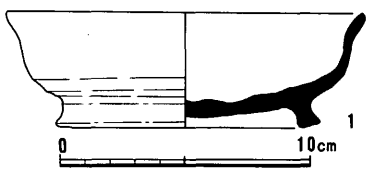


第34図　10号住居跡出土土器（１～８）・竈（９）実測図（１～８は1/3、９は1/4）



第35図　11号住居跡実測図（1/60）

蓋（3）　つまみを欠損している。かえりは短く、口縁部よりも下がらない。丸味を持つ天井部は、回転ヘラケズリを行う。その他を回転ナデ、ナデで仕上げる。



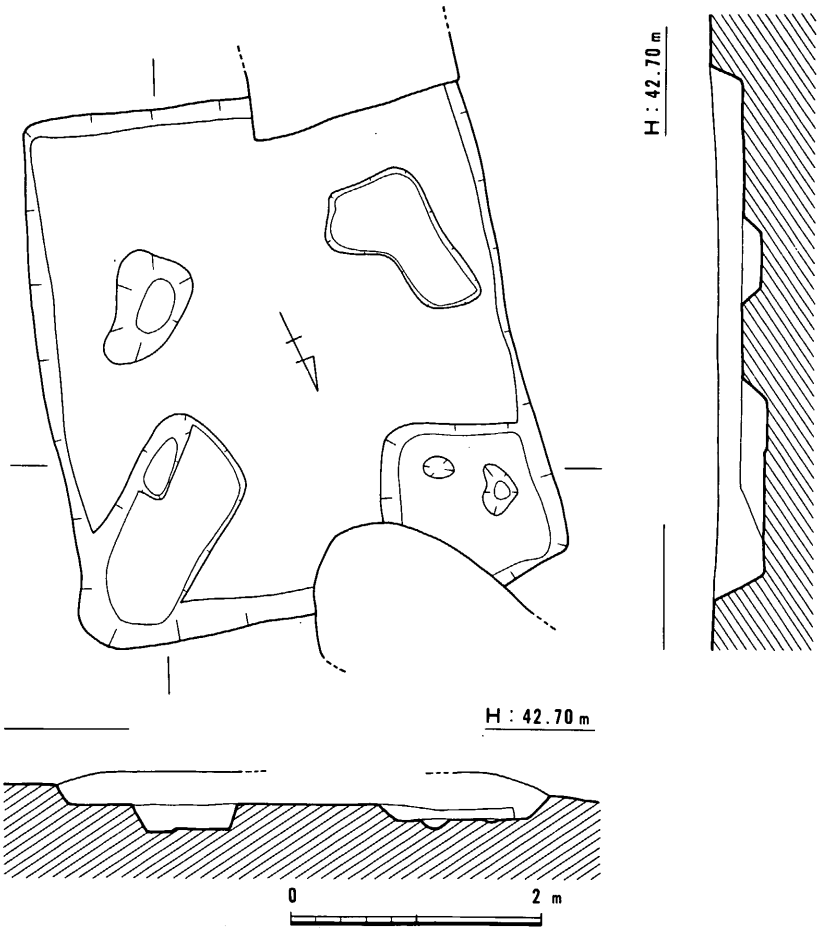
第36図　11号住居跡出土土器実測図（1/3）

杯身（4、5）　ともに高台が外にふんばる形のものである。4の体部は内湾気味に伸び、口縁部が短く外反する。底部外面はヘラ切り後粗くナデ、体部との境付近は回転ヘラケズリを行う。体部内外面は回転ナデ、底部内面はナデで仕上げる。高台を貼り付けた痕跡が明らかである。5の体部は緩く屈曲する。調整は、底部外面をヘラ切り後ナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

口頸部（7）　平瓶の口頸部と思われる。外面の頸部上位に1条の沈線がめぐる。調整は内外面ともに回転ナデである。

高杯（6）　脚部のみの残存資料である。脚端部を折り曲げて外傾させている。調整は、脚部内外面ともに回転ナデ、杯部の底部内面はナデである。

15号住居跡（第41図、図版11）



第37図　12号住居跡実測図（1/60）

14号住居跡の北西、約６m離れたところに位置する。西側は調査区域外のため未発掘である。北東側壁は長さ3.6m、壁高0.2mを測る。床面には多少の高低差が認められた。床面から12個のピットを検出したが、柱穴を確定するには至らなかった。南東側壁のほぼ中央部に竈の痕跡を認めたためこれを精査したが、袖、支脚等の施設は検出しなかった。遺物は、埋土中から小破片が１点出土したのみである。

出土遺物（第42図）

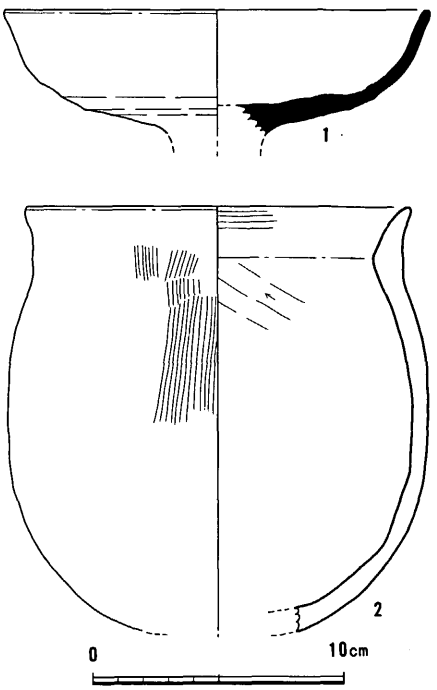
須恵器

杯身（１）　あまりに小片のため口径を復元することができなかった。残存高3.5cm。内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で内外面とも暗灰色を呈する。

17号住居跡（第43図、図版12）

14号住居跡の東、約2.6m離れたところに位置する。北東側の壁の一部を検出できなかった

が、北西側壁4.7m、北東側壁6.0m、南東側壁4.8m、南西側壁6.0mと、南北に長い長方形を呈する。壁高は0.15m程度である。北東側壁の半ばから南西側壁まで周溝が設けられており、特に南西側では最大幅は2mをこえる。床面はほぼ平坦であり、大小合わせて11個のピットを検出したが、主柱穴を特定することはできなかった。南コーナーを中心に、竈の痕跡と思われる焼土の散布が認められたためこれを精査したが、竈の施設は検出しなかった。遺物は、この部分を中心に、周溝埋土内から主に出土した。



第38図　12号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第44・45図、図版41）

須恵器

杯蓋（1、2）　1はほぼ平坦な天井部に、直線的に外に開く体部が続く。口縁部は外傾する。調整は、天井部をヘラ切り後ナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。2の天井部は平坦で、体部は丸味を帯び、口縁部は直に下る。調整は、天井部をヘラ切り後粗いナデ、天井部と体部の境付近を回転ヘラケズリ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

杯身（3～6）　いずれも器高が低く、底部は丸味を持つ。口径は9.7cm～10.0cmを測る。3は外面灰かぶりで、受部に重ね焼きの痕跡が残る。4は底部外面をヘラ切り後ナデ、その他を回転ナデとナデ。底部外面にヘラ記号がある。5は底部外面をヘラ切り後ナデ、底部と体部の境付近を回転ヘラケズリ、その他を回転ナデとナデで仕上げる。6は立ち上がりが三日月状に反る。焼成不良で磨滅しており、調整は不明。

皿（7）　口縁部が短く外反し、口縁端部を丸く仕上げる。底部外面を手持ちヘラケズリし、その他を回転ナデとナデで仕上げる。

甕（8）　口頸部を欠損する。調整は、底部から胴部下位にかけて手持ちヘラケズリ、胴部中位を回転ヘラケズリ、肩部から頸部にかけて回転ナデである。

甕（9）　口縁部から肩部にかけての破片資料である。胴部外面に格子目タタキ、内面に同心円文当て具痕が残る。その他は回転ナデ。口縁部に1条の沈線がめぐる。

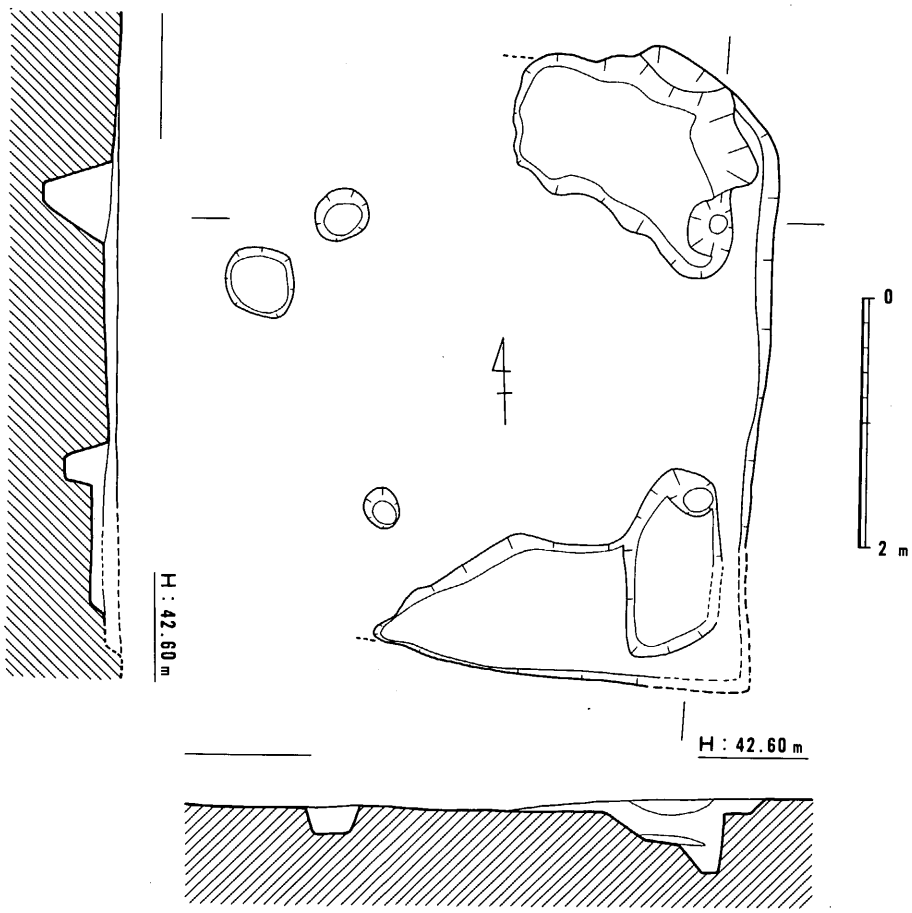
土師器

椀（10）　丸い底部と内湾する体部を持つ。内外面とも磨滅しており、調整は不明である。

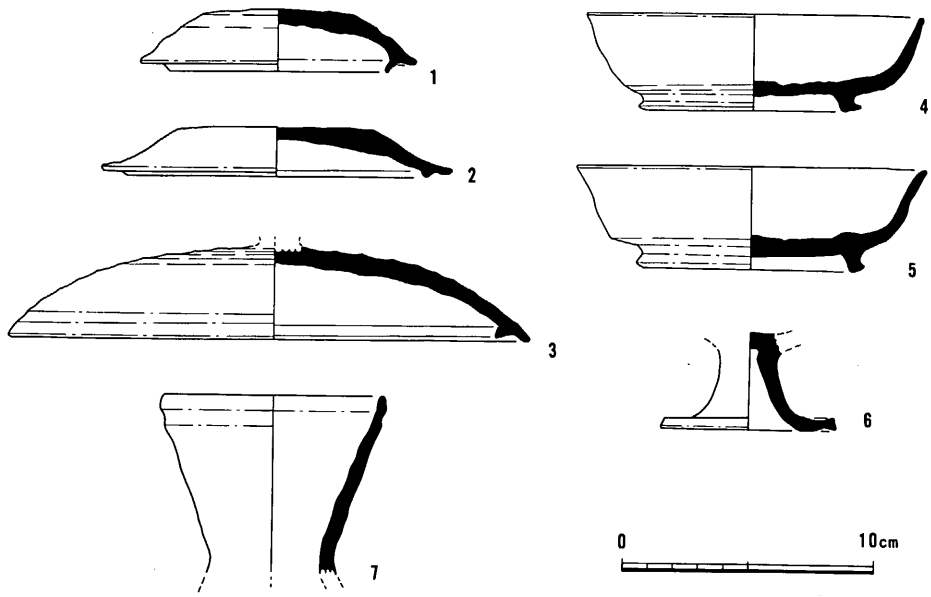
甕（11、12）　11は、底部から胴部の外面に格子目タタキが残る。口頸部を回転ナデ、胴部から底部内面をハケで仕上げるが、胴部下位から底部にかけてはハケ目をナデ消している。12は口縁部から胴部にかけての破片資料。調整は、胴部外面ハケ、胴部内面ヘラケズリ、その他を回転ナデで仕上げる。

瓦（第61図、１・２）

１は端面、側面ともにヘラ切りしている。端面で凸面側を、側面では凹面側を面取りしている。凸面は平行タタキのまま。凹面は布目、模骨痕が残る。また、糸切り状の擦痕が認められる。この擦痕は、布目の上についているため、凹面をハケ調整した可能性もある。凹面の端面付近には同心円状タタキを施す。土師質で、胎土に砂粒を含む。２は広端面の幅23.8cmが計測できる。端面はヘラ切りし、凸面側を面取りする。側面はともにヘラ切りし、両面側を面取りする。凸面は平行タタキ痕のままで、凹面に布目、模骨痕が残る。１と同様の糸切り状の擦痕



第39図　14号住居跡実測図（1/60）



第40図　14号住居跡出土土器実測図（1/3）

が認められる。凹面の端面付近に同心円文タタキを施し、一部でその上から横方向のナデを加える。土師質で胎土に砂粒を含む。

18号住居跡（第46図、図版12）

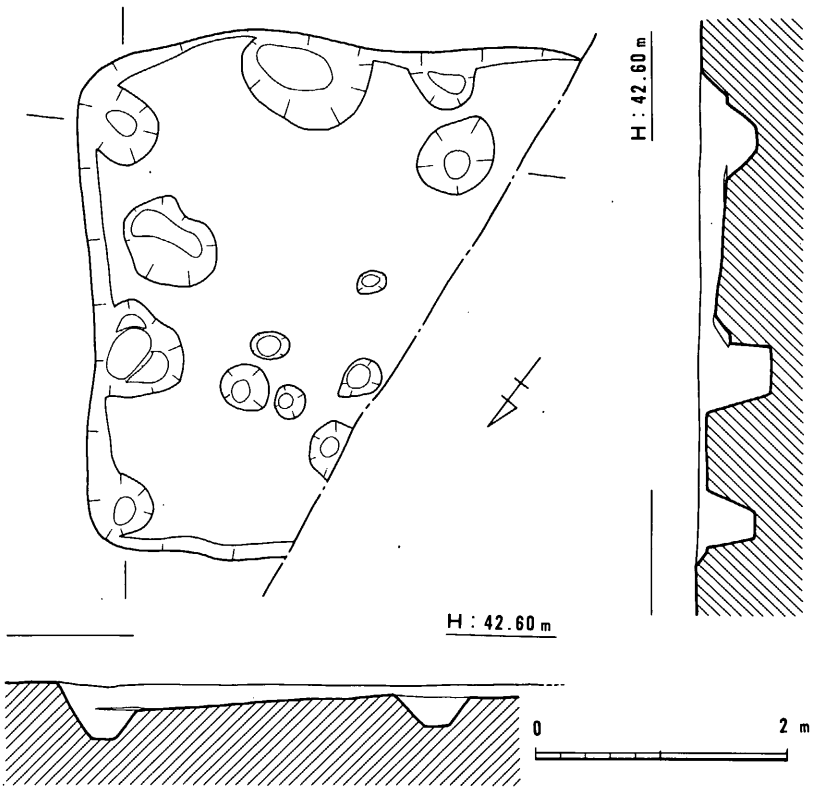
17号住居跡の東側、約4.5mのところに位置する。南側壁以外は凹凸が激しいが、東西約5.5m、南北約7.8mの不整形な長方形を呈する。今回調査した竪穴住居跡では最も大きなものである。壁高は0.17m～0.34mを測る。床面はほぼ平坦で、11個のピットを検出した。それらのうちP1～P4としたものが主柱穴であると思われる。北側壁の中央部付近に焼土の散布を認めたため、この部分を精査したが、竈の施設は検出しなかった。遺物は埋土中より出土した。

出土遺物（第47図、図版44・45）

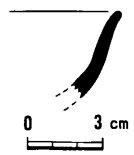
須恵器

杯蓋（1～5）　1～3は、いずれも丸い天井部を持つもので、1、2は口縁が直に下り、3は外に開く。いずれも天井部にヘラ記号を持つ。調整は、天井部外面をヘラ切り後粗いナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。4は天井部が平坦でつまみは付かない。天井部をヘラ切り後ナデ、体部と天井部の境付近を回転ヘラケズリ、その他を回転ナデとナデで仕上げる。5は天井部が高くつまみが付く。天井部外面を回転ヘラケズリし、その他を回転ナデとナデで仕上げる。この5については混入の可能性が大きい。

杯身（6、7）　ともに平坦な底部外面にヘラ記号を持つ。調整も共通しており、底部外面をヘラ切り後粗いナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。6は受部に重ね焼きの痕跡が残る。



第41図　15号住居跡実測図（1/60）



第42図　15号住居跡出土土器実測図（1/3）

口頸部（8）　長頸壺の口頸部である。内外面とも回転ナデを施す。外面にシボリ痕が残る。

19号住居跡（第48図、図版13）

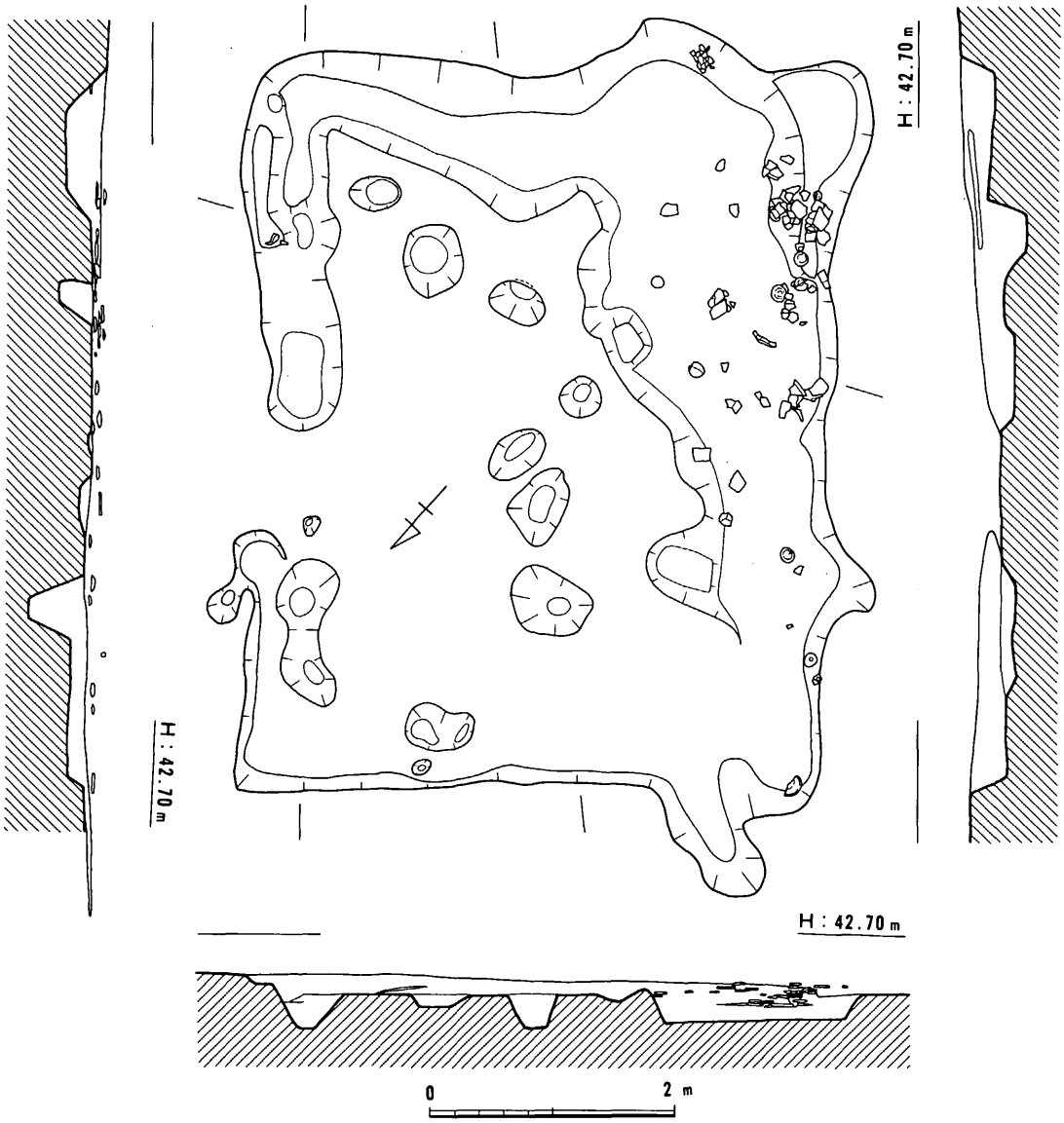
1号住居跡と17号住居跡の中間に位置する。前者から約9.6m、後者からは約11.6m離れている。東側壁の一部が検出されなかったが、南北5.5m、東西5m程度のゆがんだ長方形になると思われる。西側壁から南側壁にかけて3個のピットに切られている。壁高は8cm～40cmを測る。床面は平坦ではなく、高低差と緩い凹凸がある。床面から5個のピットを検出したが、主柱穴を確定することはできなかった。北側壁沿いにやや広範囲に焼土が散布していたため、この部分を精査したが、袖等の竈の施設は残っていなかった。しかし、この部分の埋土中から円筒状土製品を立てた状態で検出し、その周辺から若干の土器片が出土した。この円筒状土製品は竈の支脚とも考えられるが、強く加熱された痕跡は見受けられなかったことから、祭祀的行為の可能性も看過することはできない。遺物はこの他に、埋土中からも出土している。

出土遺物（第49・50図、図版45）

須恵器

杯蓋（1）　天井部外面をヘラ切り後ナデ、その他の部分を回転ナデで仕上げる。天井部にヘラ記号を持つ。

杯身（2）　底部外面には回転ヘラケズリを行う。その他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。

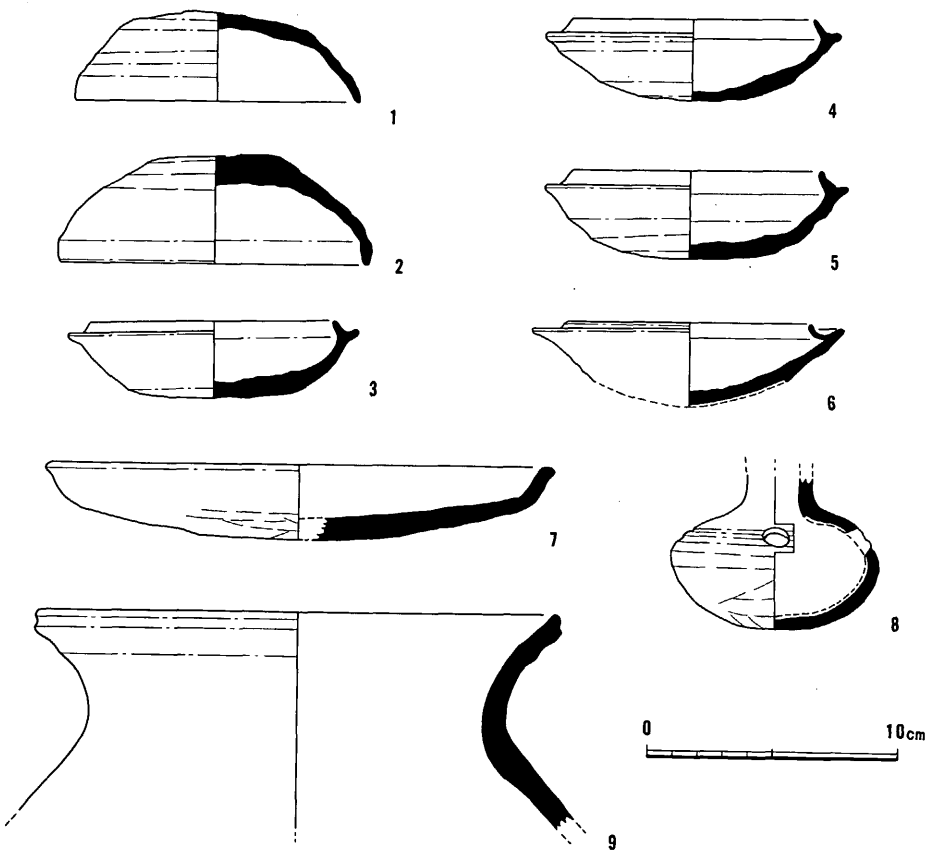


第43図　17号住居跡実測図（1/60）

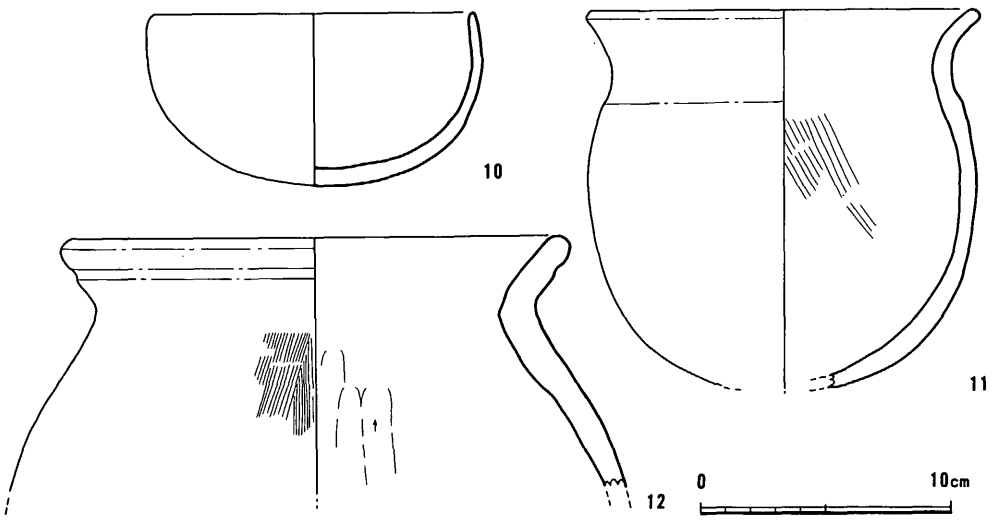
焼成がやや悪く、内外面ともに淡灰色を呈する。

高杯（3）　杯部の体部以上を欠損する。調整は、脚部内外面に回転ナデ、杯部底部外面に回転ヘラケズリ、杯部内面に回転ナデとナデを施す。脚部内外面にシボリ痕がある。

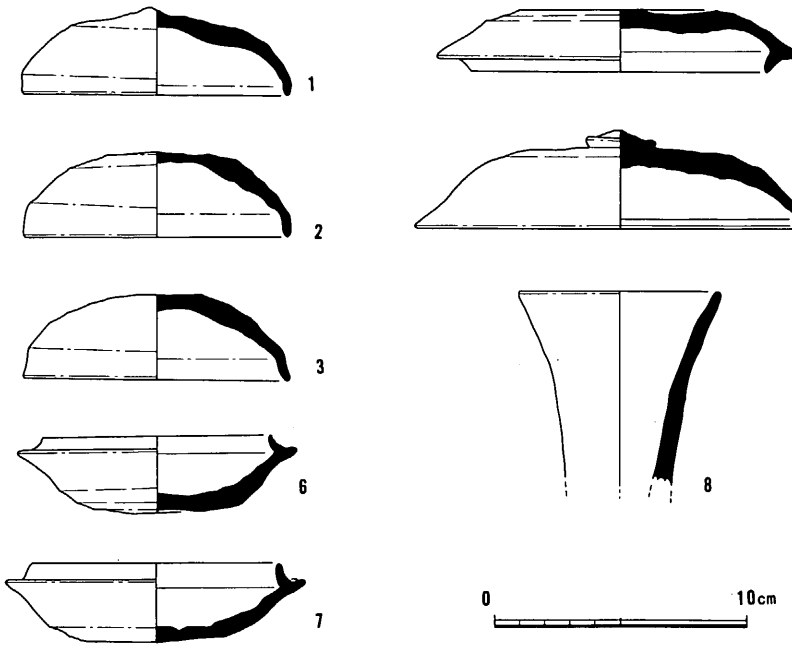
皿（4）　口縁部から底部の一部にかけての破片資料である。調整は、残存する底部の外面に手持ちヘラケズリ、内面に回転ナデ、その他の部分に回転ナデを行う。焼成不良のため内外面ともに明褐色を呈する。



第44図　17号住居跡出土土器実測図①（1/3）



第45図　17号住居跡出土土器実測図②（1/3）



第46図　18号住居跡出土土器実測図（1/3）

土師器

手捏土器（5）　体部内面に指圧痕が残る。その他の部分はナデ。底部外面にヘラ記号がある。内外面に黒斑が見られる。

杯身（6）　高台は端部を細く作り、貼り付けの痕跡が明らかである。底部と体部の境には稜が認められる。全体に磨滅しており調整は不明瞭だが、体部外面に回転ナデ後ヘラミガキ、内面に暗文が認められる。

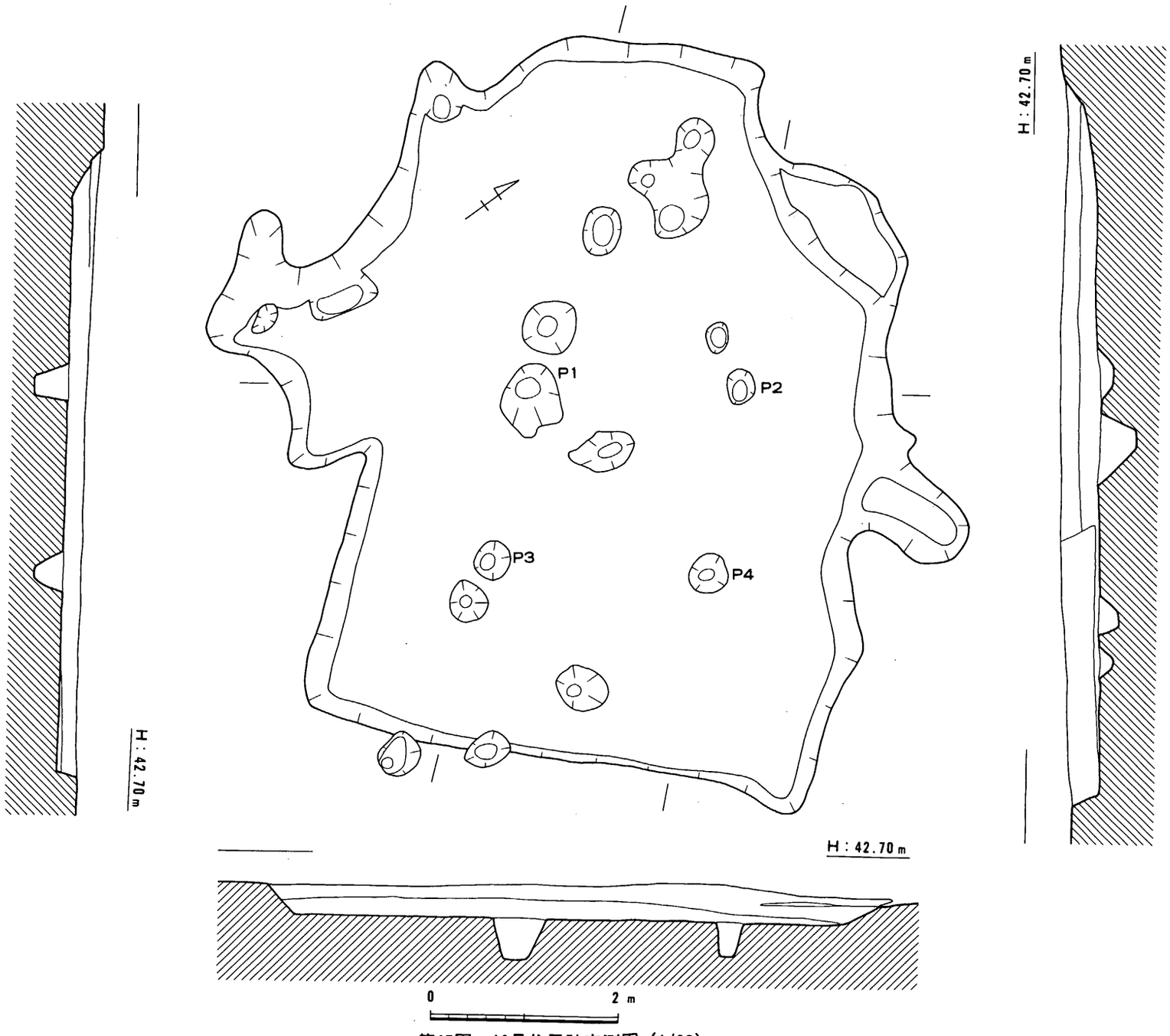
円筒状土製品（7）　土師質の土製品であるため、土師器の項に含めた。残存する端部を下端として実測した。残存高27cmを測る。調整は、磨滅のためわからなくなっている部分もあるが、外面に格子目タタキ、内面にナデが認められる。また、粘土の接合痕が明確である。

土製品

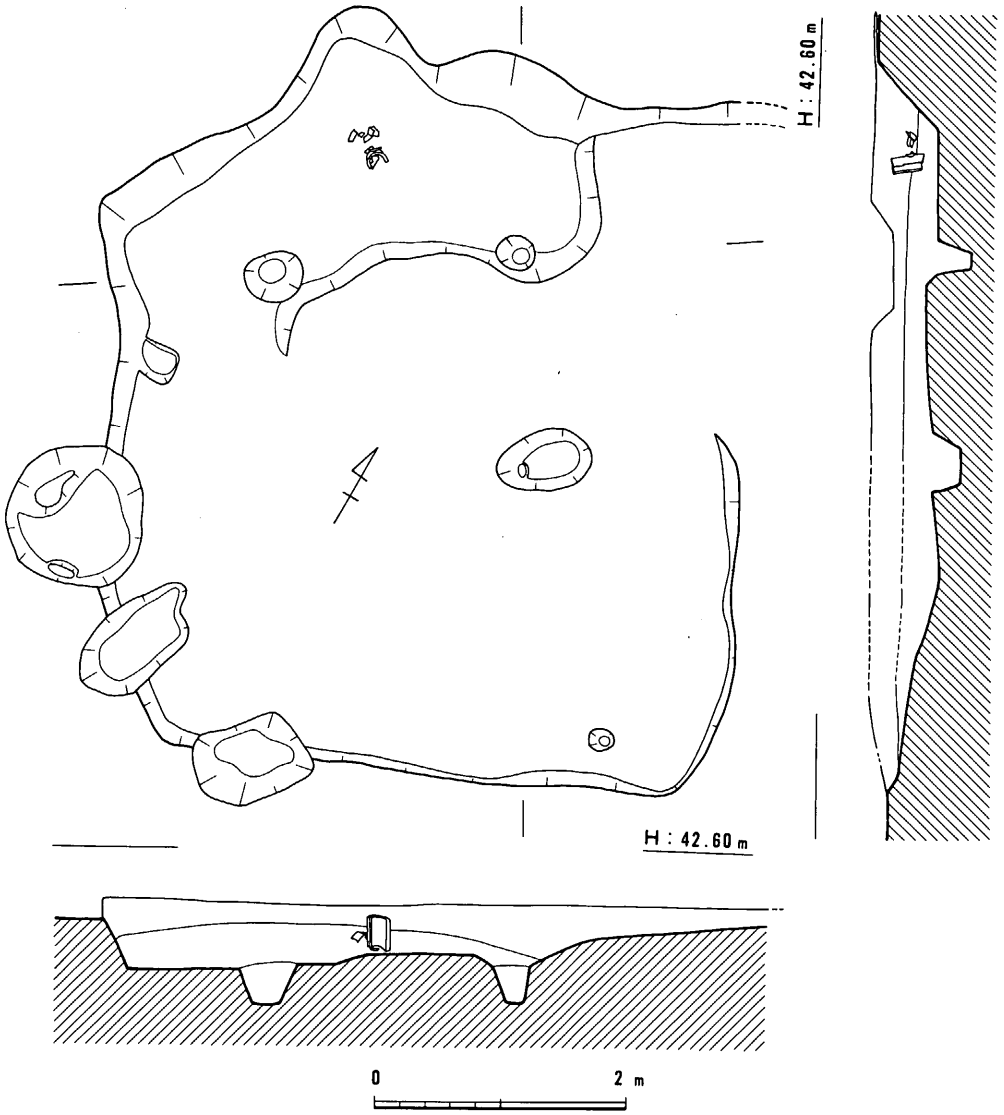
土鈴（第50図、8）　残存高6.2cm。上部の把手となる部分には穴が穿たれている。調整は内外面ともにナデ。焼成は良好で、内外面とも明褐色を呈する。

20号住居跡（第51・52図、図版13・14）

調整区の中央やや北寄りの場所に位置する。3号住居跡から南に6.1m、19号住居跡から東に約9.2mの距離を測る。東側の部分をSD02に切られているが、その部分を補って考えると、一辺4.2mの正方形であると思われる。床面は、多少の高低差が認められるもののほぼ平坦であり、壁高は約0.2mを測る。床面から3個のピットを検出したが、主柱穴を確定することはできなかった。北西コーナー部分に、床面から約0.2mを測る堀り込みがあり、遺物が集中的に出土した。竈は北側壁の中央部やや西寄りにもうけられており、両袖が残存した。竈内からは高杯を



第47図　18号住居跡実測図（1/60）



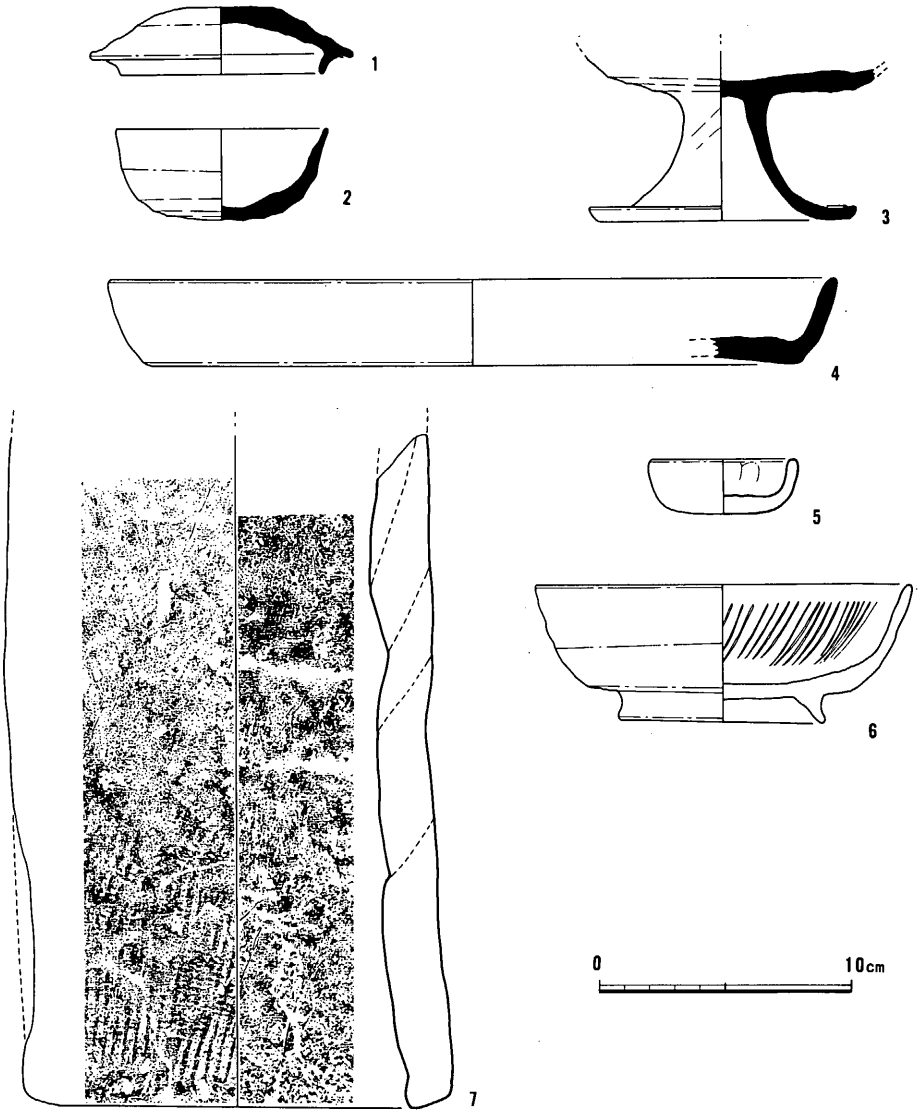
第48図　19号住居跡実測図（1/60）

倒立した状態で検出した。支脚とも考えられるが、二次焼成を受けた痕跡がないため、２号、19号住居跡の例と同様に、祭祀的行為の可能性もある。遺物は、この竈の付近、前述のくぼみ、他の部分の埋土中から出土した。

出土遺物（第53・54・55・56図、図版46・83）

須恵器

杯蓋（１、２）　１は焼きひずみがあり、本来天井部が緩い丸味を持つものと思われる。天井

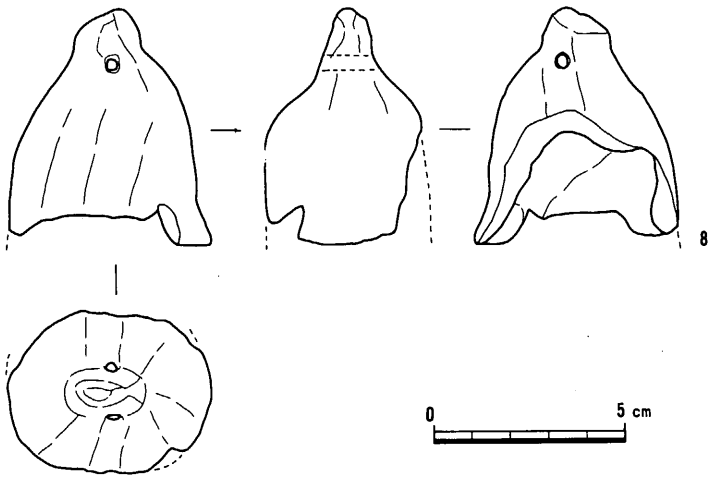


第49図　19号住居跡出土土器実測図（1/3）

部外面に回転ヘラケズリを施し、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。天井部外面にヘラ記号を持つ。2は、口縁部が直に下る形状である。天井部外面をヘラ状の工具でナデている。その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。外面は一部灰をかぶっており、部分的に自然釉になっている。天井部外面にヘラ記号がある。

杯身（3）　底部は平坦で、外面には回転ヘラケズリを施す。その他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。外面は一部灰をかぶっており、底部外面にヘラ記号がある。

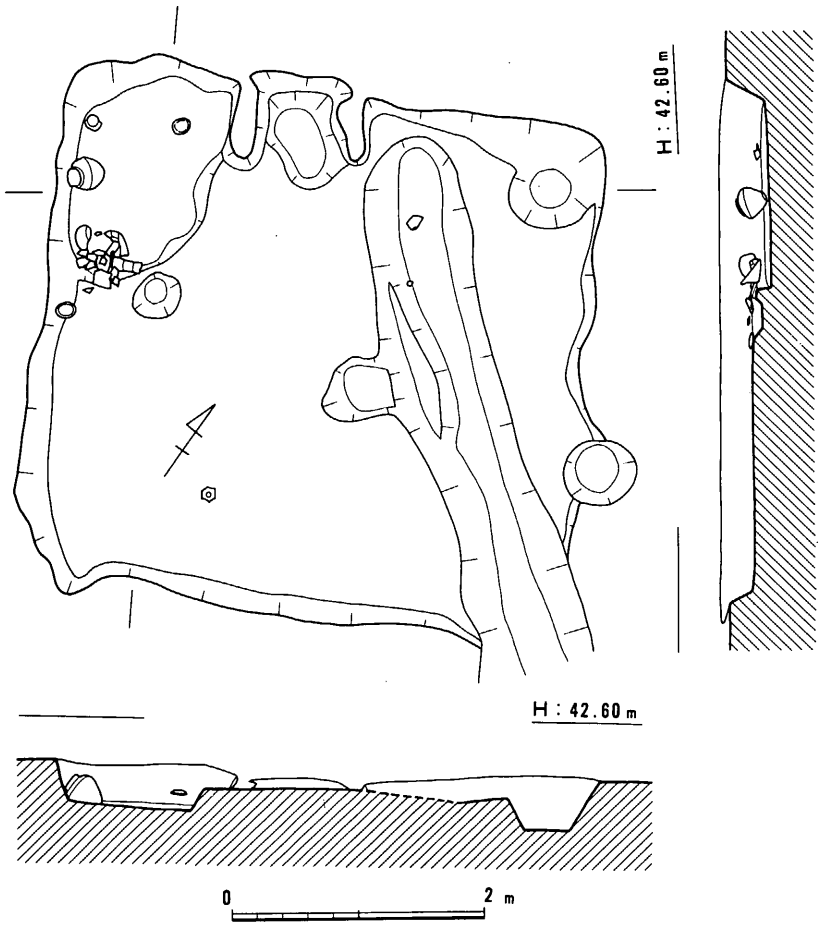
高杯（4）　竈の内部から倒立した状態で出土したもので、ほぼ完形に近い。脚部のほぼ中位



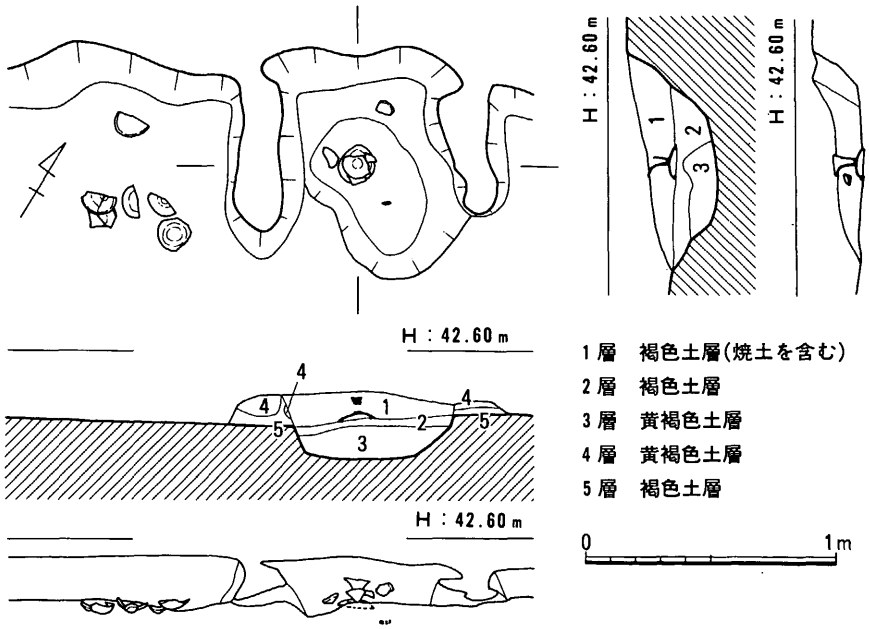
第50図　19号住居跡出土土製品実測図（1/2）

に２条の沈線がめぐり、それ以下の脚部外面および内面は回転ナデを行う。沈線より上の脚部外面から杯部の底部外面にかけてカキ目を施す。杯部のその他の部分は、回転ナデとナデで仕上げる。杯部内面の一部に灰をかぶっている。

平瓶（５）　口径6.2cm、胴部最大径19.7cm、器高16.5



第51図　20号住居跡実測図（1/60）



第52図　20号住居跡竈実測図（1/30）

cmを測り、底部は平坦である。口縁端部を尖り気味に作る。胎土は密であるが焼成が悪いため全体に磨滅しており、調整が不明瞭であるが、底部、胴部の外面にカキ目の痕が残る。頸部外面にヘラ記号があり、胴部中位に径約７mmの孔があいている。この穿孔は焼成前に行われたものである。

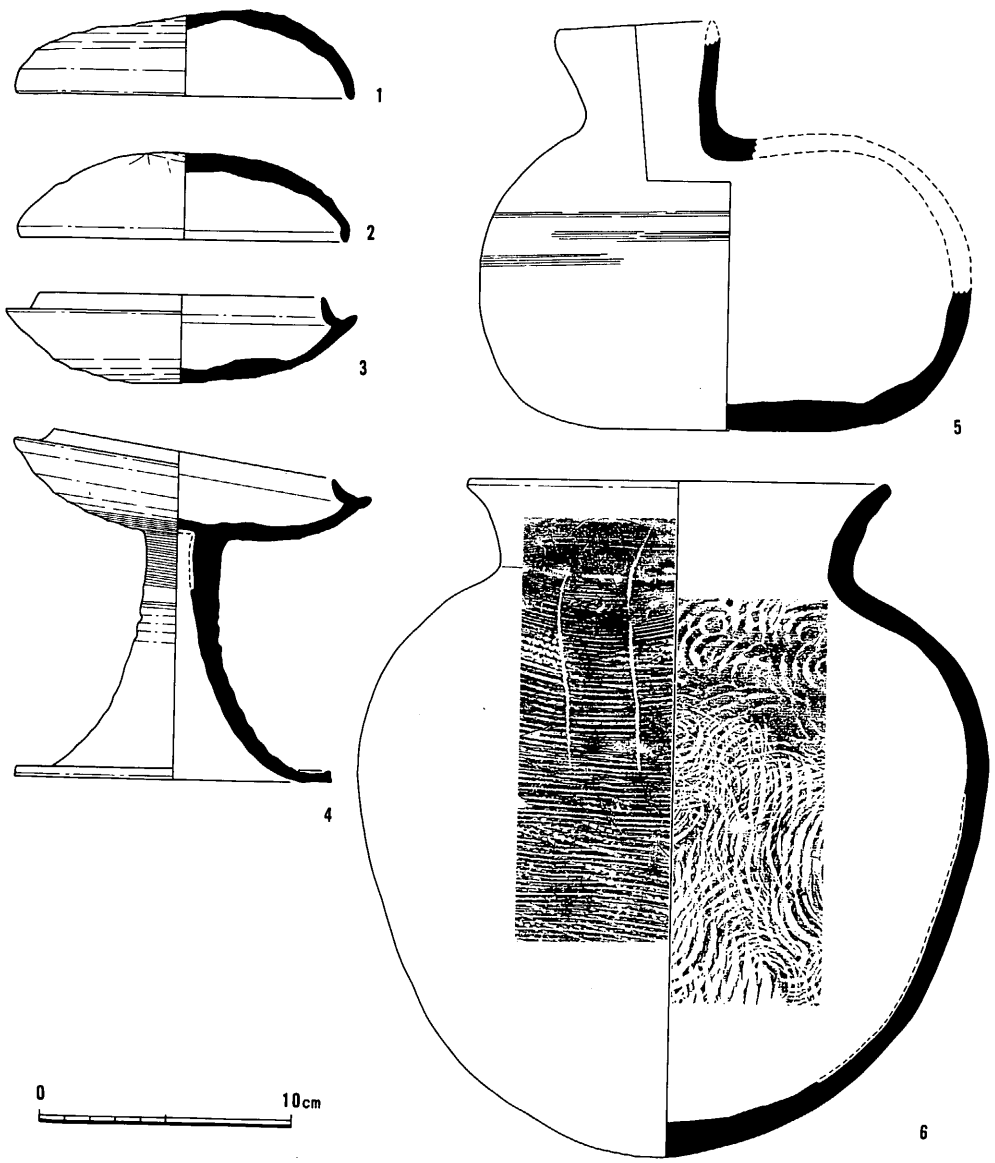
甕（６）　口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形である。口径17.0cm、器高27.2cm、胴部最大径25.2cmを測る。焼成がやや不良なため、内外面ともに淡黄灰色を呈する。調整は、口縁部と頸部内外面は回転ナデ、胴部および底部外面に格子目タタキの後カキ目を施す。胴部および底部内面には同心円文の当て具痕が残る。頸部から肩部にかけてヘラ記号がある。

土師器

甕（７）　口径20cm、器高35cm、胴部最大径26.5cmを測る。底部は平底に近いが、わずかに丸味を持つ。口縁部はやや肥厚させて作る。頸部と胴部の境は、内面に明瞭な稜が認められる。調整は、口縁部から頸部内外面に回転ナデ、胴部外面に縦および斜め方向のハケ、胴部下半から底部の外面は磨滅のため不明瞭だが縦方向のハケ目が部分的に残る。また、内面には縦および斜め方向のヘラケズリを施す。焼成は良好で内外面ともに褐色を呈する。胴部外面に黒斑が認められる。

石製品

紡錘車（８）　滑石製で、断面形は台形を呈する。上下両面ともによく研磨されている。側面



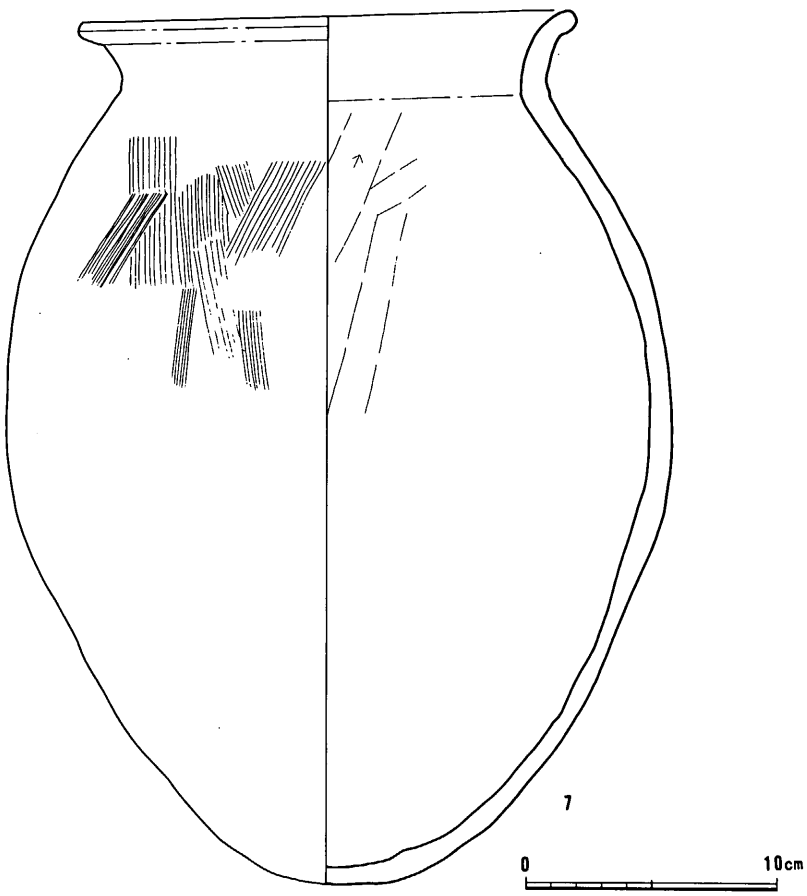
第53図　20号住居跡出土土器実測図①（1/3）

には削りの痕跡が残る。

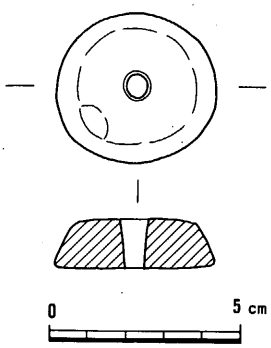
鉄器

鉄鏃　身から箆被にかけての残存資料である。残存長5.7cmを測る。身は両丸造りで腸抉を持つ。箆被は断面長方形を呈する。

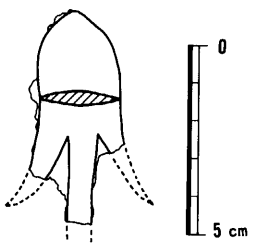
21号住居跡（第57図、図版14）



第54図　20号住居跡出土土器実測図②（1/3）

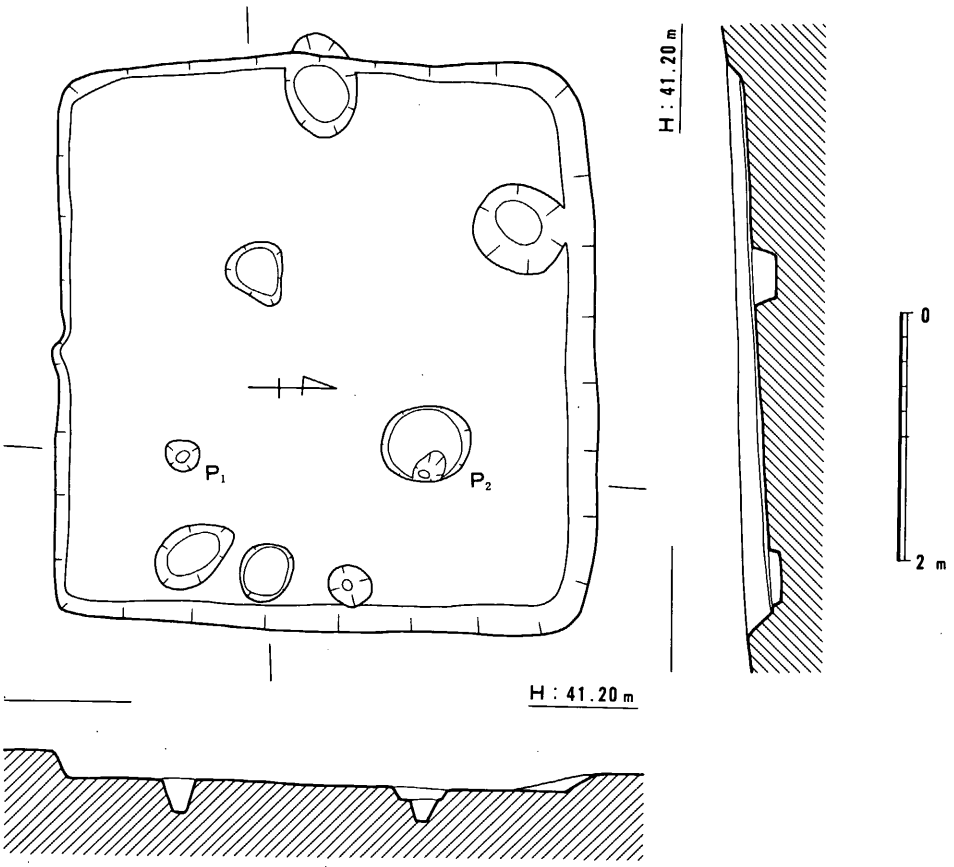


第55図　20号住居跡出土石製品実測図（1/2）



第56図　20号住居跡出土鉄器実測図(1/2)

今回の調査区内で最も東に位置する竪穴住居跡である。16号住居跡から南に17.5m、20号住居跡から東に22mの距離を測る。形状は方形を呈し、各壁長は北側4.4m、東側4.1m、南側4.2m、西側3.9mである。壁高は0.1m～0.2m程度である。床面は平坦で、8個のピットを検出した。それらのうちP1、P2としたもの



第57図　21号住居跡実測図（1/60）

が主柱穴と思われる。西側壁の中央部に竈の痕跡が認められたため、この部分を精査したが、袖等の竈の施設は検出しなかった。この部分の直下の床面には深さ約35cmのピットが検出された。遺物は、主に西側壁沿いの埋土中から出土した。ただし、図示できるものは少なかった。

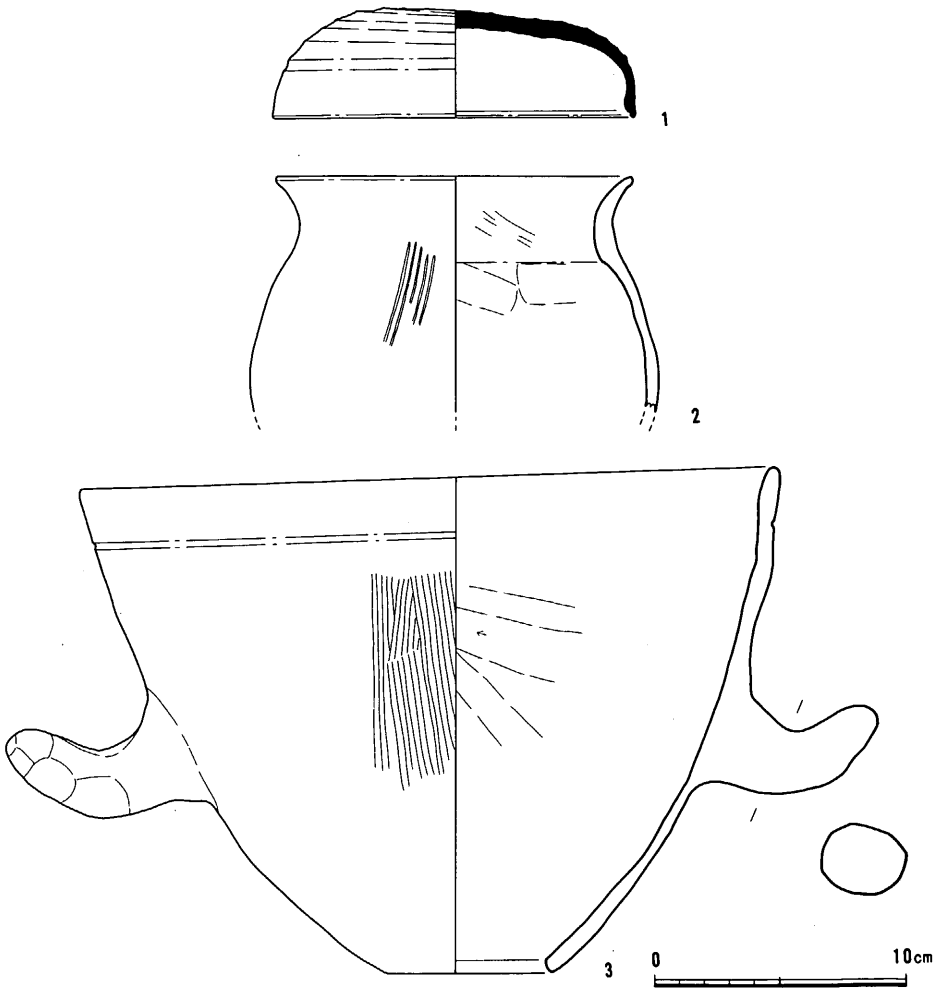
出土遺物（第58図、図版21）

須恵器

杯蓋（1）　天井部外面に回転ヘラケズリを施し、その他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。天井部と体部の境、および口縁部の内側に浅い沈線がめぐる。天井部外面にヘラ記号がある。外面に灰をかぶっており、天井部外面には他の須恵器片が融着している。

土師器

甕（2）　口縁部から胴部中位にかけての破片資料で、残存高9.4cmを測る。調整は、胴部外面はハケ、頸部外面はハケの後回転ナデ、口縁部は回転ナデ、頸部内面は斜め方向のハケ、胴部内面はヘラケズリである。内面の胴部と頸部の境には稜が認められる。焼成は良好で、胎土に



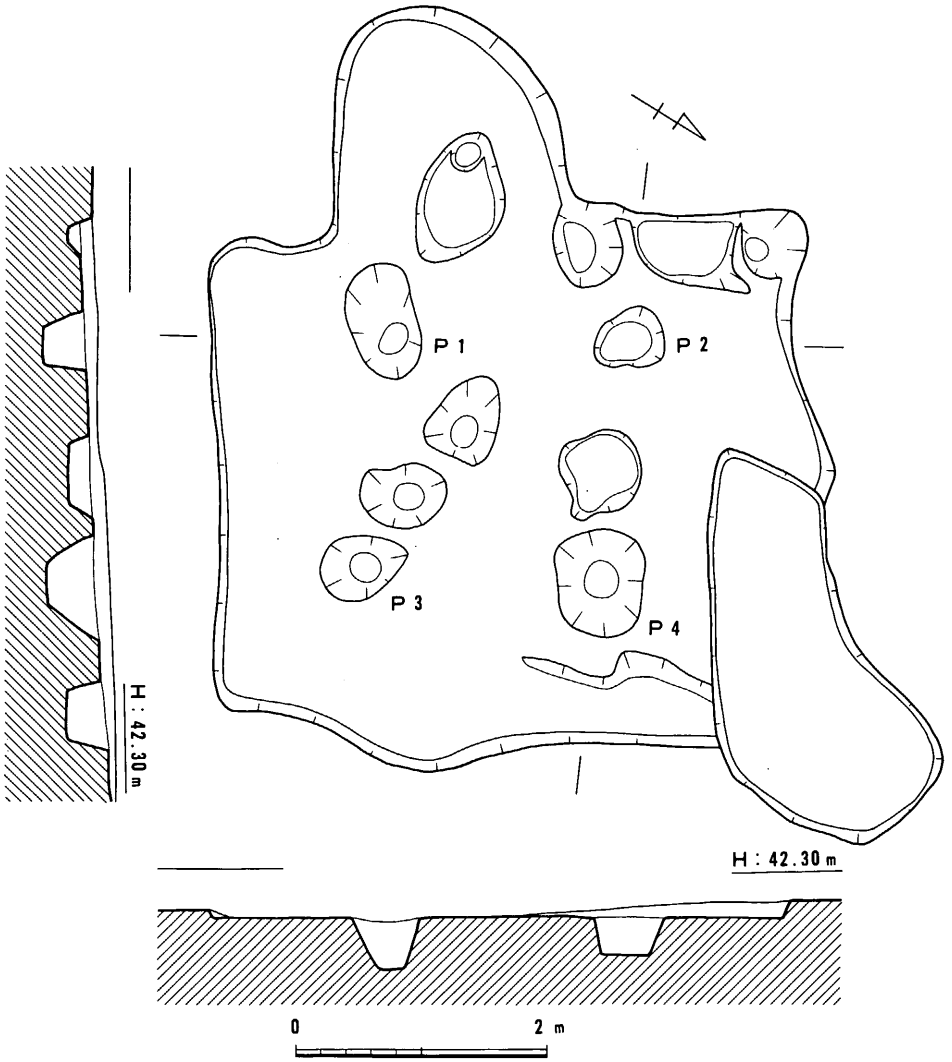
第58図　21号住居跡出土土器実測図（1/3）

わずかに雲母を含む。

甑（3）　内湾気味に伸びる胴部と、わずかに外反する口縁部を持つ。口縁部直下にはごく浅い沈線が1条めぐる。調整は、口縁部内外面は回転ナデ、胴部外面上位はハケ、下位はハケの後ナデ、胴部内面はヘラケズリである。把手は貼り付けで、接合部をハケ、ナデで調整している。外面に煤が付着している。

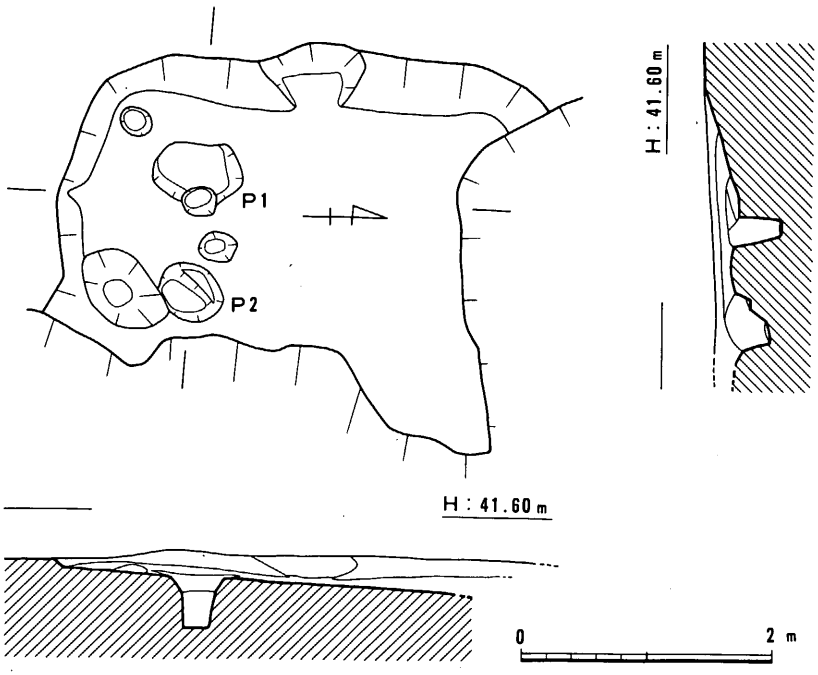
22号住居跡（第59図、図版15）

本調査区の東南部に位置する。21号住居跡から南西に約12m、18号住居跡から東に約14m離れている。北コーナーで楕円形の土坑と切り合っている。新旧関係は、土坑の方が新しい。この部分を補って考えると、北側壁長4.1m、東側壁長4.8m、南側壁長3.8m、西側壁長4.6mと



第59図　22号住居跡実測図（1/60）

いうプランになる。壁高は6㎝～10cmと浅い。北コーナー付近に周溝があったとも思われるが、前述の土坑に切られているため本来の状況はわからない。床面は、やや高低差はあるがほぼ平坦であり、11個のピットが検出された。これらのうちP1～P4としたものが主柱穴と思われる。西側壁の中央部やや南寄りの部分で焼土の散布を認めたため、これを精査したが、袖、支脚等の施設は検出しなかった。この部分の直下の床面から、深さ約0.17mのピットが検出された。また、焼土散布部分を堀り下げた結果、西側壁から最大で1.7mほど突出する形となったが、堀り過ぎの可能性もある。遺物は、埋土中より須恵器、土師器が少量出土したが、いずれも小破

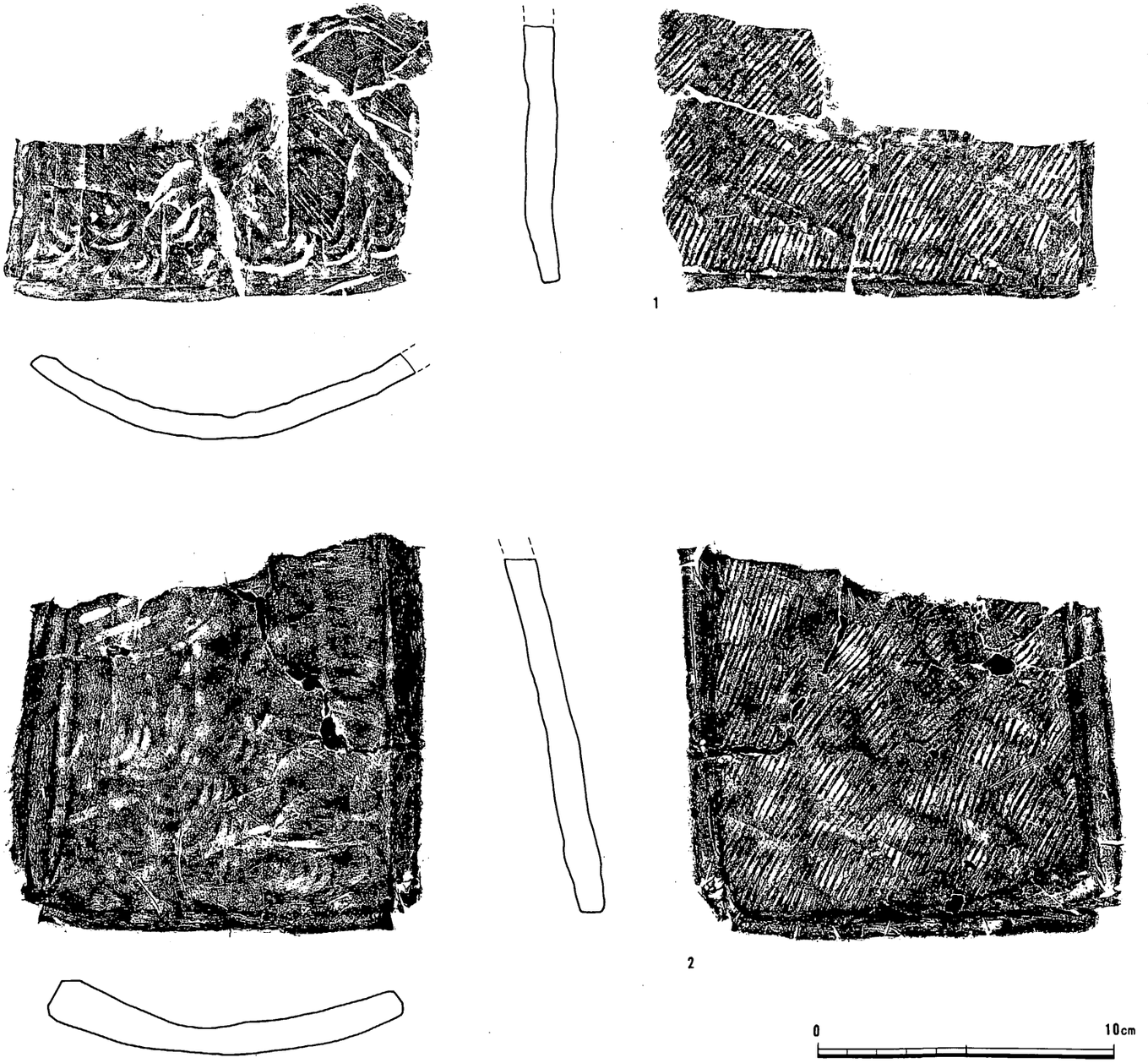


第60図　23号住居跡実測図（1/60）

片のため図示することができなかった。

23号住居跡（第61図）

7号住居跡の南側、同住居跡と切り合う形で検出された。新旧関係は、7号住居跡の方が新しい。やはり斜面を切り込むようにしてつくられており、東側は検出されなかった。北西コーナーを7号住居跡に切られているが、この部分を補って考えると、西側壁長は約3.5mを測ったものと思われる。床面には、若干の高低差と凹凸が認められる。床面からは、南側にかたよって5個のピットが検出された。これらのうち、P1、P2としたものが主柱穴と思われる。西側壁の中央付近に焼土の散布を認めたため、これを精査したが、袖、支脚等の竈の施設は検出しなかった。しかし、この部分の壁が若干堀りくぼめられていることがわかった。遺物は出土しなかった。



第61図　住居跡出土瓦実測図（１／４）

(2)ー② 廃棄土坑（SK）

日ノ浦遺跡の調査区内からは、古墳時代以降の土坑が36基検出された。それらのうち、ここでとりあげる20基については、埋土中より多量の土師器、須恵器が廃棄されたと思われる状態で出土した。そのために、これらの土坑を、廃棄土坑（以下SKと略称する）として他の土坑と区別することとした。なお、SKの番号の付け方は、竪穴住居跡の場合と同様に検出された順である。また、SK11とSK12は欠番である。

SK01（第62図、図版15）

調査区の北西コーナー近くで検出された。楕円形を呈する。上端での長軸長3.12m、短軸長2.23m、深さは約0.6mを測る。底面には2段のテラスを持ち、中央部がくぼむ形状になっている。遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。また、埋土中に3カ所、粘土の散布が認められた。

出土遺物（第63・64図、図版47）

須恵器

杯蓋（1・2） つまみを有し、比較的扁平なものである。つまみはボタン状、または扁平なボタン状を呈する。口縁部は丸く終わり、内面にわずかな沈線をめぐらすだけである。ヘラ切り後ナデるだけでヘラケズリは行わない。

蓋（3） 小型の蓋で、全体を回転ナデ、ナデで仕上げる。天井部内面が磨いたように平滑になっている。全体にていねいな作りである。

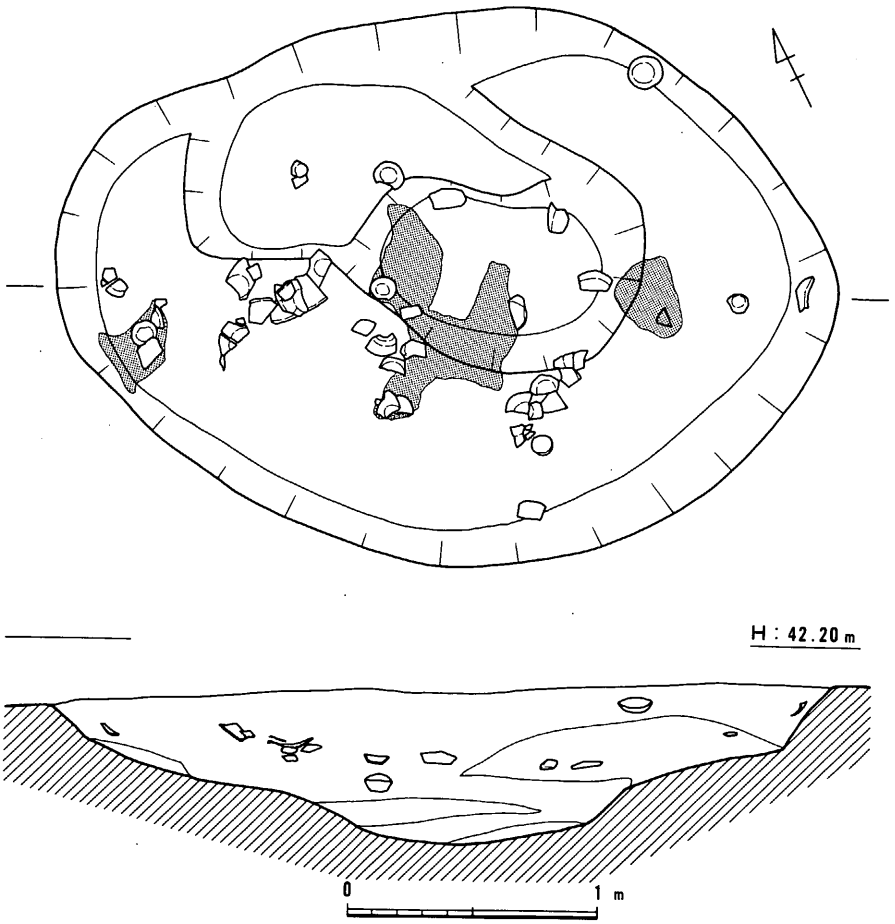
杯身（4～6） 4は小型の高台の付かないものである。体部を回転ナデで仕上げる。底部はヘラ切り後粗くナデるだけだが、その際の処理が粗く余分な粘土が体部に押し付けられたような状態となっている。その結果か、底部が厚い。5・6も高台の付かない杯身である。5は体部下半が丸味を帯びるが、6はほとんど直線的である。体部は回転ナデを行い、底部はヘラ切り後ナデるだけである。

皿（7～10） 口径に違いがあるが、形態的には良く似ている。体部は回転ナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラ切り後ナデている。

円面硯（11） 脚部5分の1ほどの破片である。端部を外側に折り曲げ、外面に浅い沈線をめぐらせている。透しは外側から切り込まれていて、内外面にはみ出した粘土は削り取られている。全体を回転ナデで仕上げる。

土師器

杯（12～18） 口径の割に底径が小さく、また体部が丸い特徴を持つ。口径11cm程度のもの（12～14）と14cm程度のもの（15～18）がある。磨滅しているものを除き、体部内外面及び、底部内面を回転を利用したミガキ、底部外面は回転ヘラケズリしている。18だけがやや浅い。



第62図　SK01実測図（1/30）

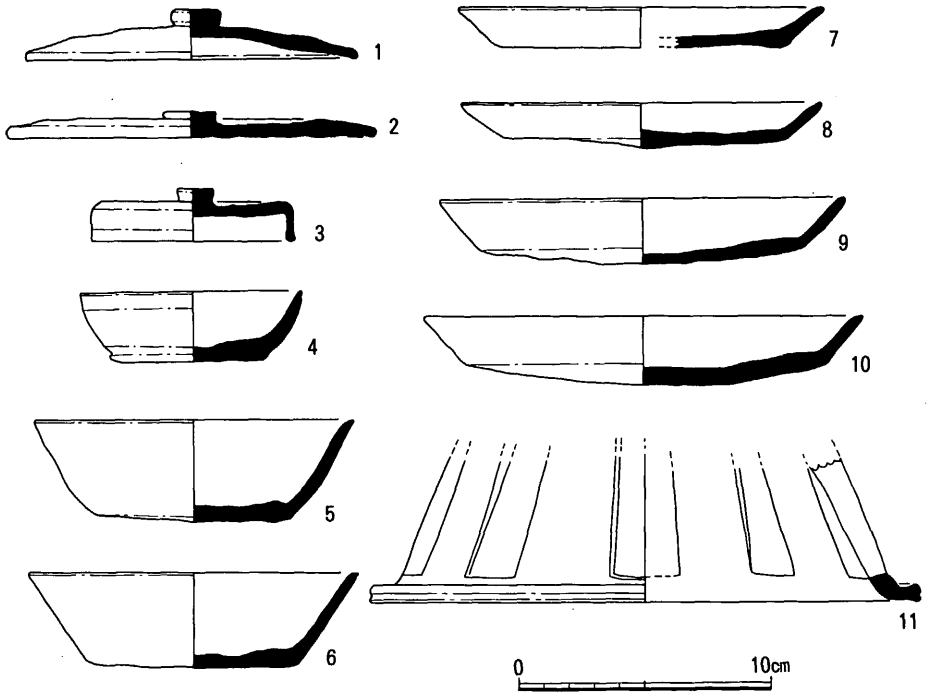
皿（19）　底部と体部の境が比較的明瞭で、底部外面を回転ヘラケズリする。体部内外面は磨滅しているがヘラミガキが一部見られる。本来は全面ヘラミガキをしたものだろう。

鉢（20）　全体の5分の4ほど残存しているもので「く」の字に開く短い口頸部と最大径を上位に持つ胴部から成る。胴部外面は最大径を持つ部分から上と口頸部内外面そして胴部内面を回転ナデ、最大径を持つ部分から下の胴部と底部外面は回転ヘラケズリする。底部内面はナデである。外面には黒斑が見られる。作り、焼成ともに良好なものである。

甕（21）　口縁部4分の1ほどの破片である。残存部外面と、口頸部内面はナデ、胴部内面はヘラケズリする。

瓦（第131図、図版82）

1、2ともに平瓦である。焼成、技法等から見て同一個体と思われるが、接合しないため分けて図示した。1は央端面と側面が残る。央端面はヘラ切り、側面はヘラ切り後凹面側に面取



第63図　SK01出土土器実測図①（1/3）

りを行う。凸面は平行タタキ、凹面には模骨痕と布目が認められる。胎土に砂粒を含むが、須恵質で焼成は良好。2は広端面と側面が残る。広端面はヘラ切り、側面はヘラ切り後凹面側に面取り。凸面は平行タタキ、凹面には模骨痕と布目。胎土、焼成は1に同じ。

SK02（第65図、図版16）

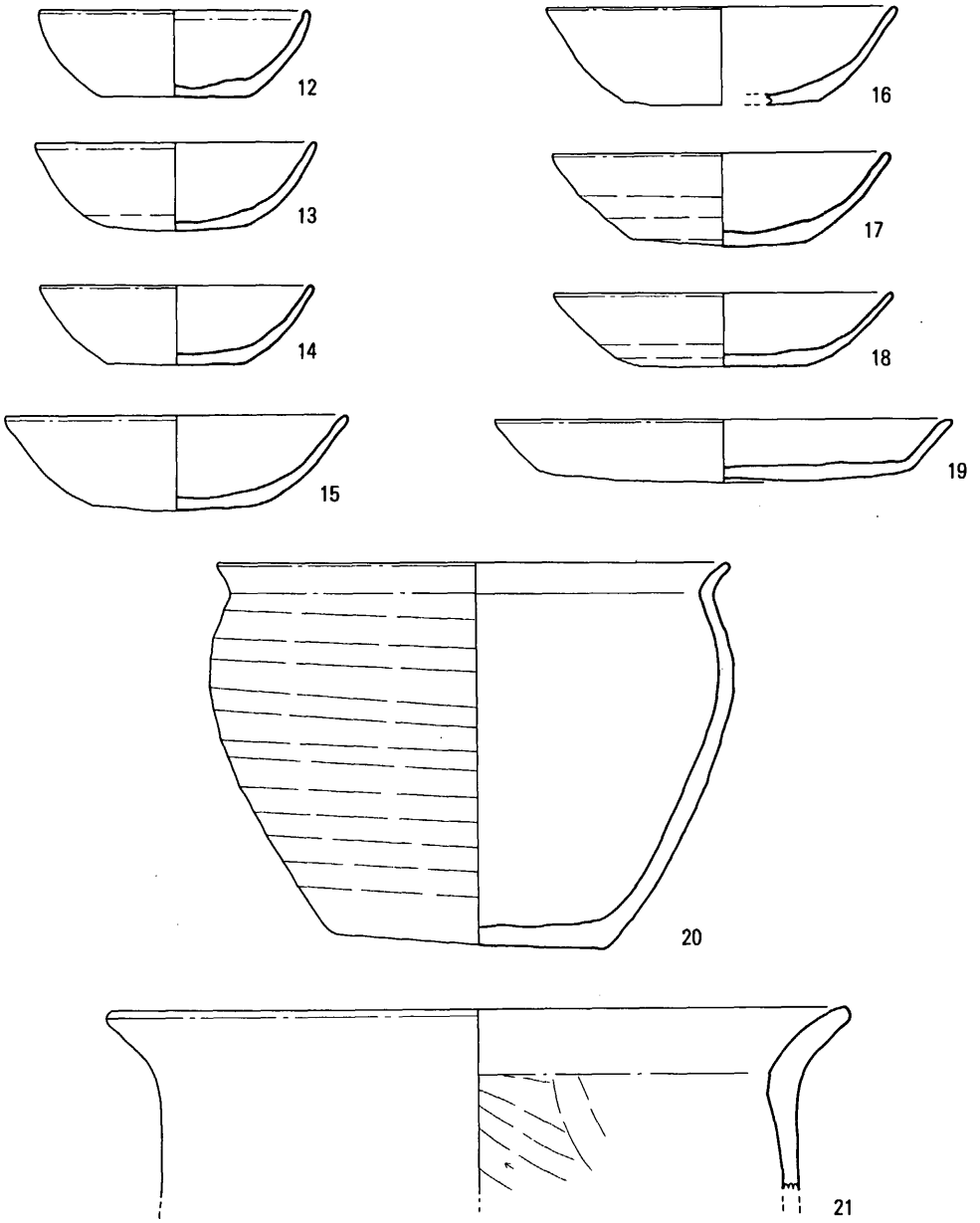
SK01のすぐ南側で検出された。両者の距離は0.8mほどである。南側で大溝と切り合っているが、堀り下げの段階では新旧関係を明らかにすることができなかった。形状は、切り合いの部分を補って考えると、南側がふくらんだ楕円形と思われる。現存する部分においては、上端長軸長2.67m、短軸長2.50m、深さ0.26mを測る。底面は、北側で1段深くなっている。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。一部の遺物は、遺構検出面よりも盛り上がるような状態で検出された。

出土遺物（第66図、図版47・48）

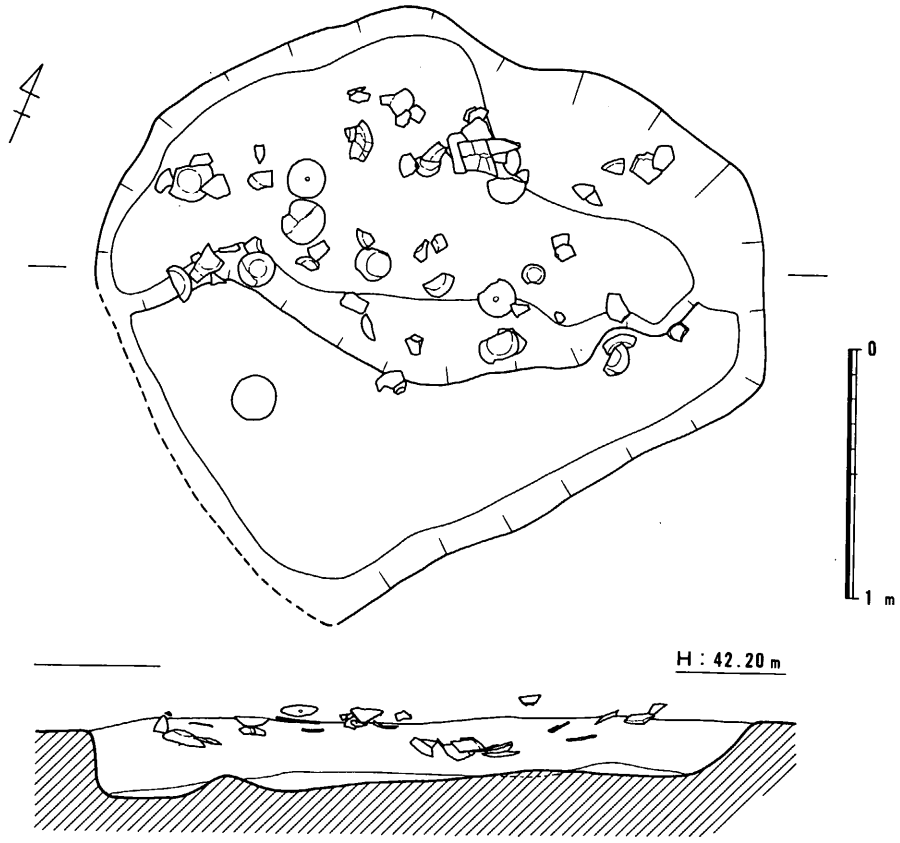
須恵器

杯蓋（1～3）　つまみを持ち、口縁端部の折り曲げのあまり顕著でないものである。つまみは1の中央が尖り気味であるが、その他は扁平なボタン状を呈する。口縁部内面は沈線がめぐるが、2・3はあまり明瞭ではない。天井部外面は回転ヘラケズリを行わない。

杯（4～8）　高台の付くものと付かないものがある。付くものの中でも口径の大小とともに



第64図　SK01出土土器実測図②（1/3）



第65図　SK02実測図（1/30）

深い物（4・6・7）と浅いもの（5）がある。高台は底部の端部よりやや中寄りに付けられる。

土師器

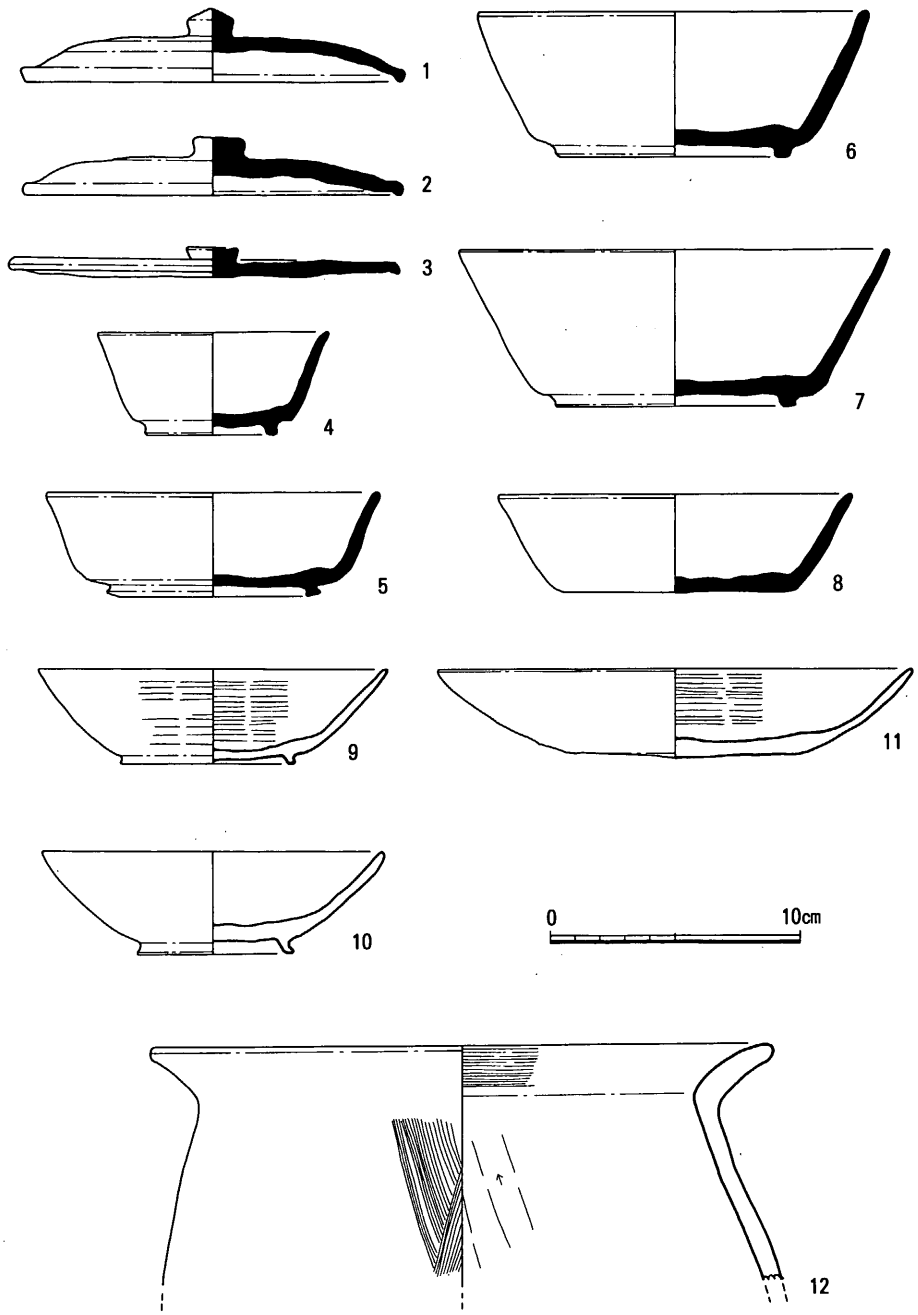
椀（9・10）　口径の割に底径が小さく、体部の丸いもので、同時期の高台の付かないものと同一の形態、技法を持つ。10は器面が荒れているが、9は体部外面下半と底部外面を回転ヘラケズリし、体部内外面をヘラミガキする。

杯（11）　大形の杯で、体部下半と底部外面を回転ヘラケズリする。体部内外面にはヘラミガキが見られる。

甕（12）　口縁部が「く」の字型に外反する甕の破片である。胴部外面と口縁部内面をハケメ調整、口縁部外面をヨコナデ、胴部内面をヘラケズリする。

鉄器（第130図、図版83）

鏃（1・2）　1は錆化が著しいが円頭細根斧箭式に属するものと考えられる。2は同一個体

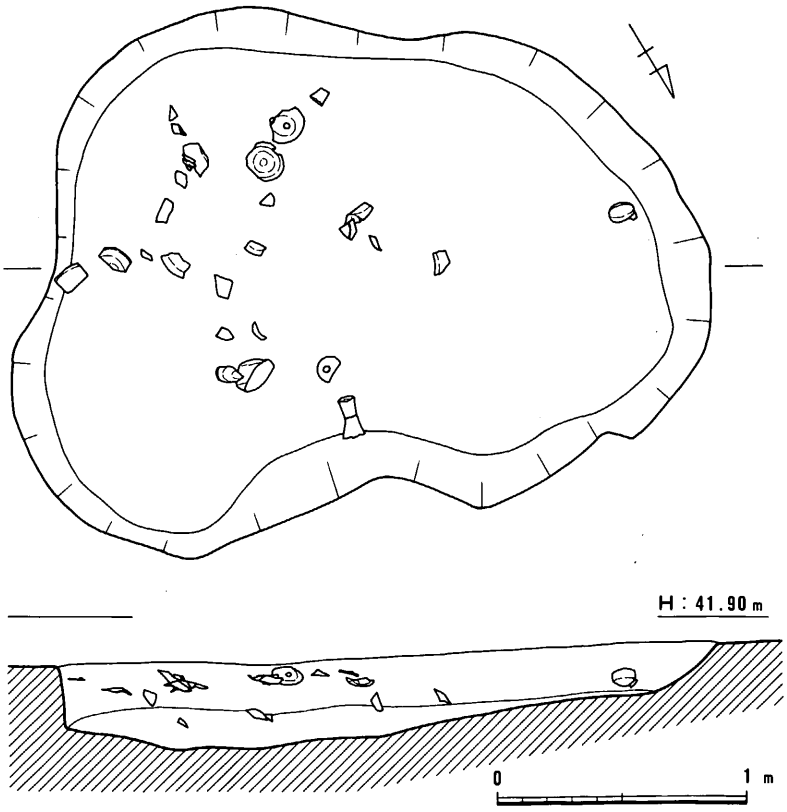


第66図　SK02出土土器実測図（1/3）

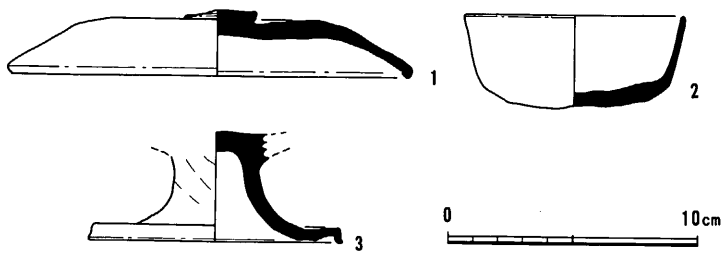
と思われるが接続しない。

瓦（第131図、図版84）

3は平瓦である。広端面の一部が残る。端面はヘラ切りし、凹面側に面取りをする。凸面は平行タタキ、凹面は模骨痕と布目が残る。土師質である。



第67図　SK03実測図（1/30）

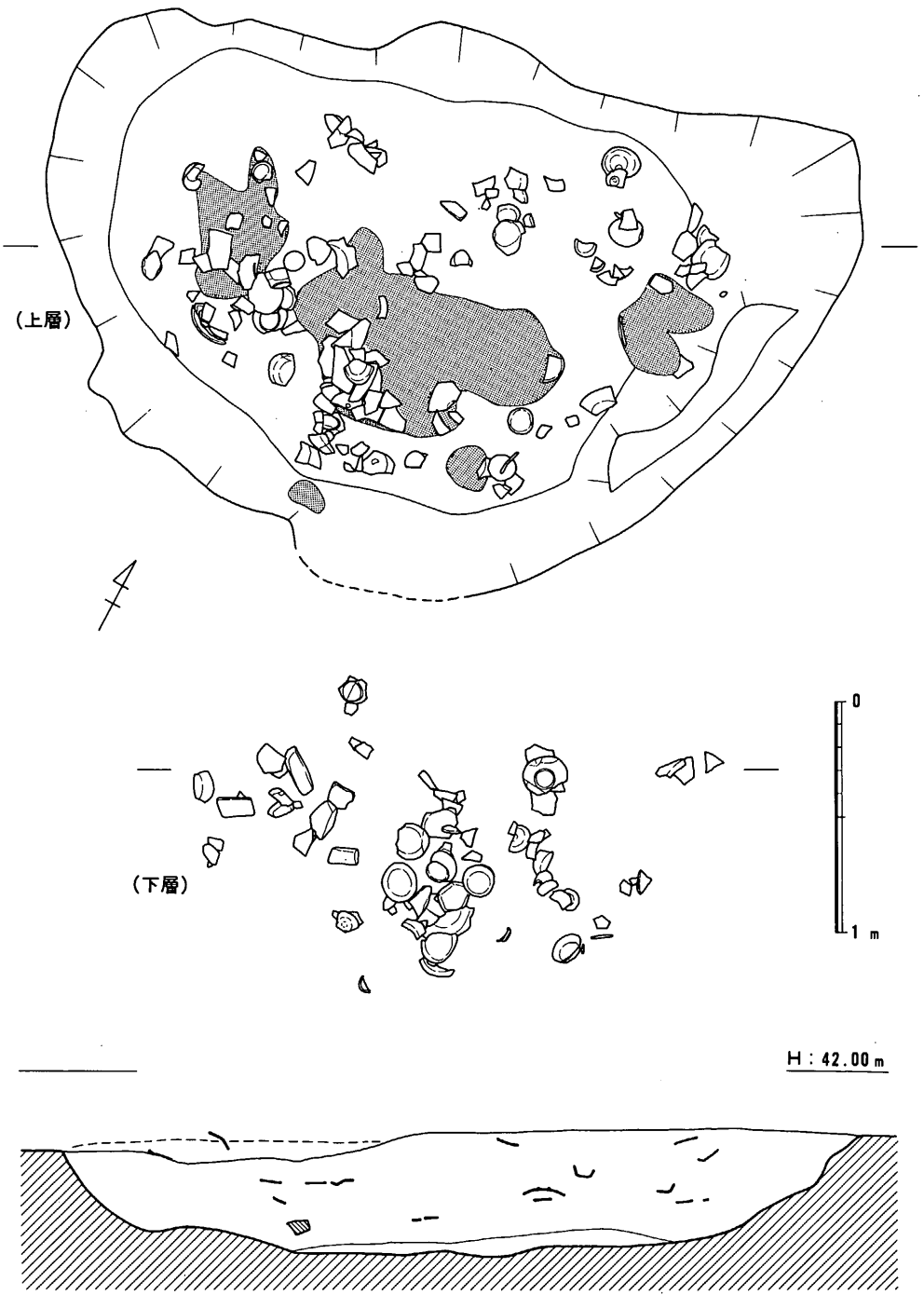


第68図　SK03出土土器実測図（1/3）

SK03（第67図、図版16）

2号住居跡と切り合っている。新旧関係は、SK03の方が新しい。形状は、東側がふくらんだ楕円形を呈する。上端長軸長2.63m、短軸長1.78m、深さ約0.31mを測る。床面は、西から東へ向かって緩やかに傾斜しており、壁の立ち上がりも西側では緩やかだが東側では垂直に近い。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。

出土遺物（第68図、図版48）

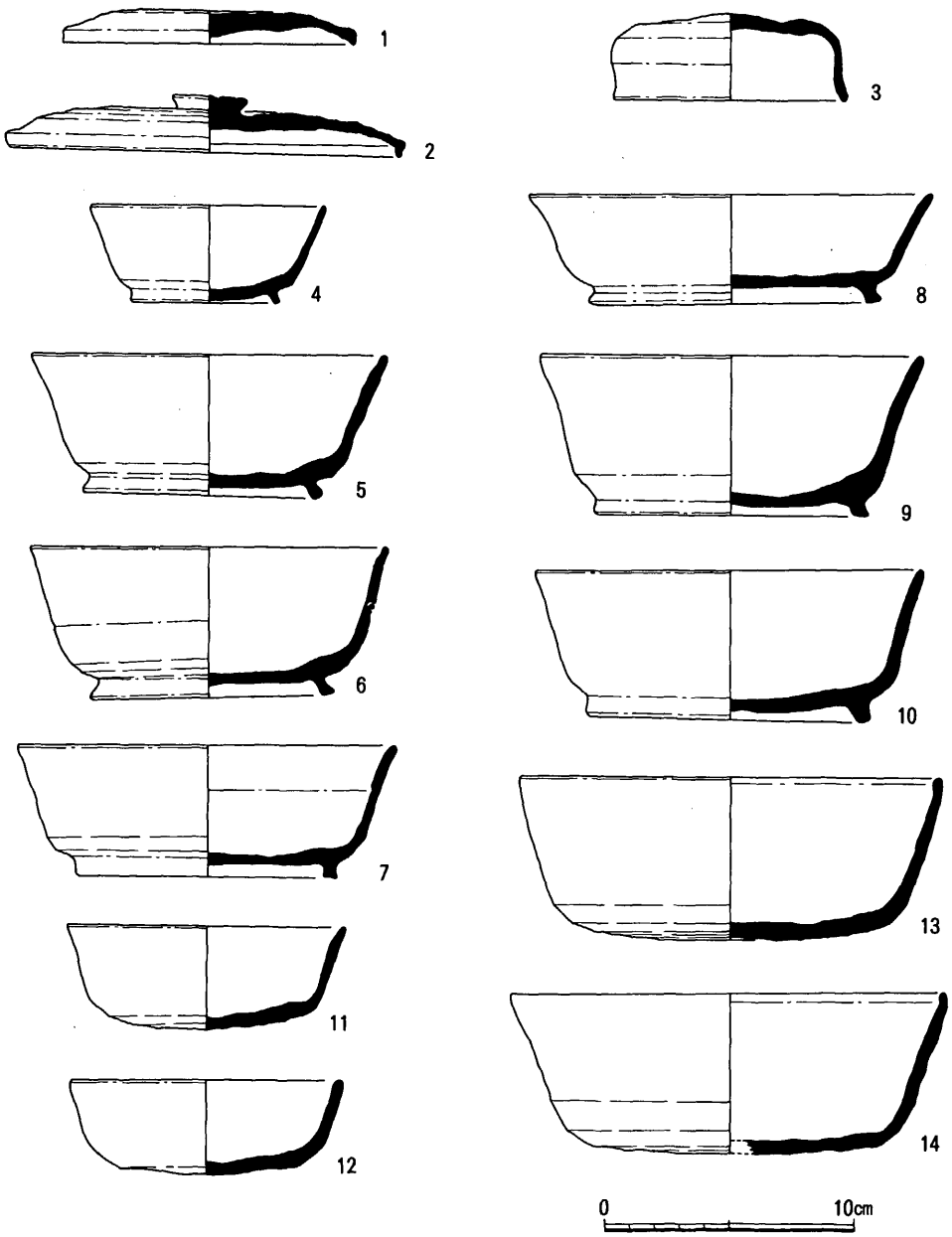


第69図　SK04実測図（1/30）

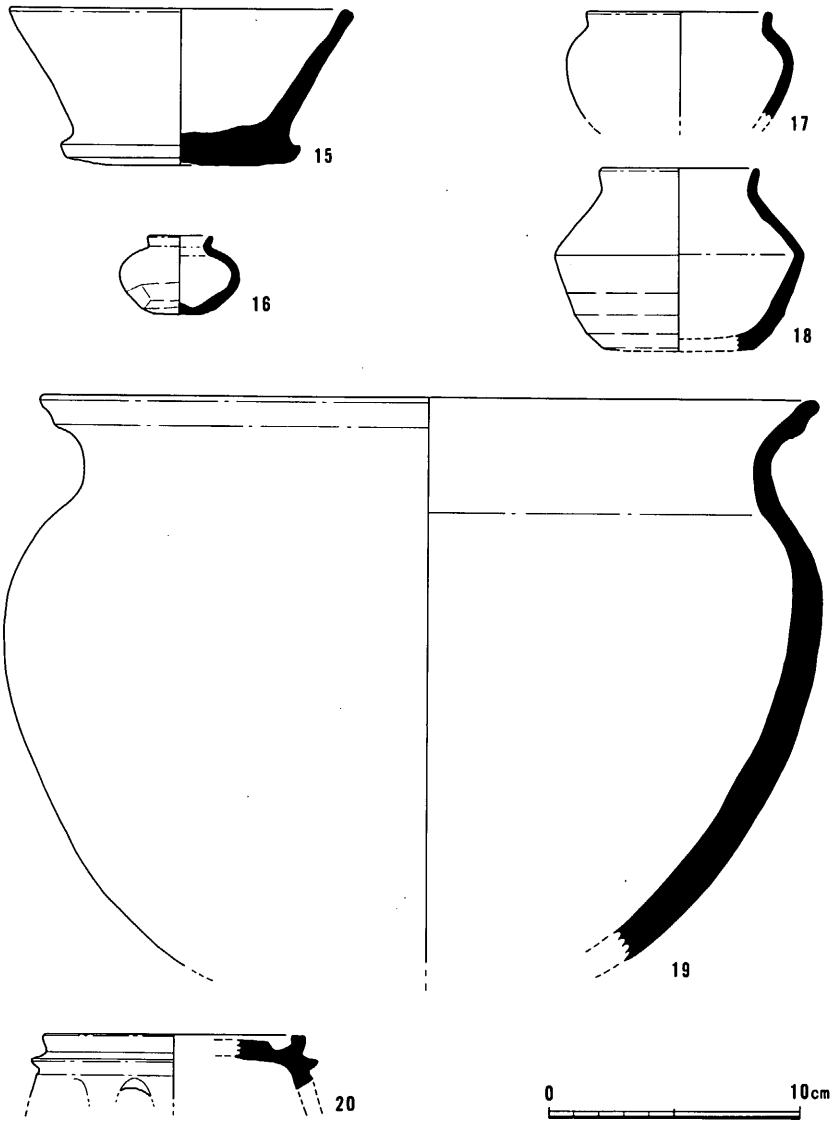
須恵器

杯蓋（1）　やや器高が高い。つまみは径が大きく、扁平に近いながらも中央部分がやや高まる。焼成が不良で淡黄灰色を呈する。柔かいため磨滅しており、調整は不詳である。

杯身（2）　口径9cmを測り、ほぼ直立する体部からなるものである。ヘラ切り後粗くナデる



第70図　SK04出土土器実測図①（1/3）



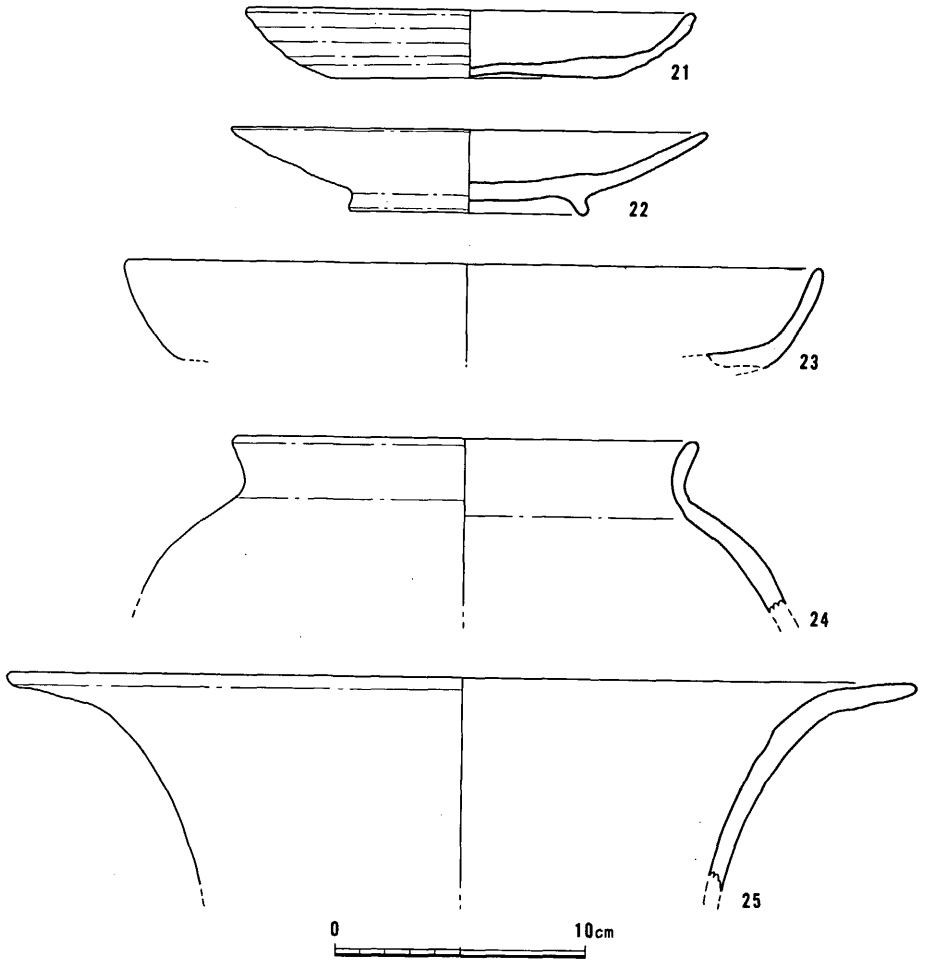
第71図　SK04出土土器実測図②（1/3）

だけである。全体を回転ナデ、ナデで仕上げる。

高杯（3）　脚部のみの破片で、全体を回転ナデ、ナデで仕上げる。

SK04（第69図、図版17）

SK03から南に約9m離れたところに位置する。西側で3号住居跡、南側でピットと切り合っている。新旧関係は、3号住居跡よりも新しくピットより古い。形状は、ややゆがんだ楕円形を呈する。上端長軸長は3.43m、短軸長は2.47m、深さは約0.53mを測る。床面には若干の凹



第72図　SK04出土土器実測図③（1/3）

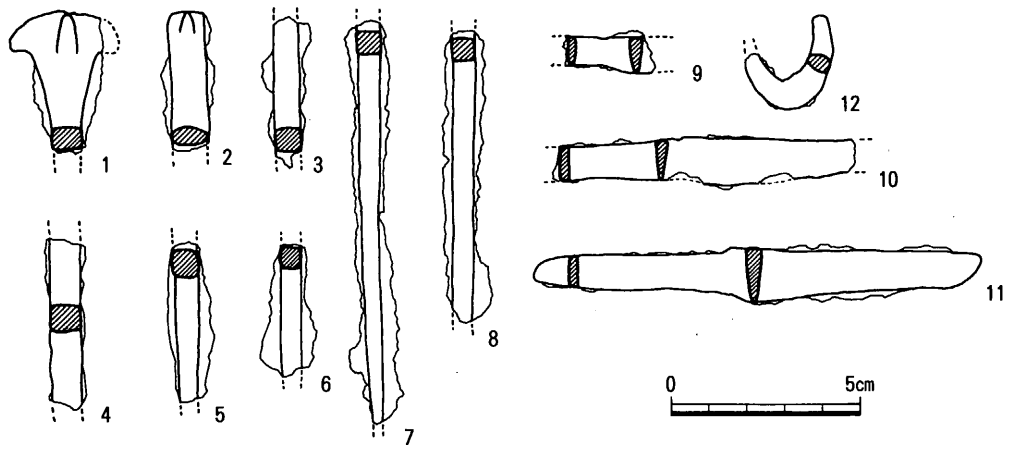
凸が認められ、壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は埋土中から浮いた状態で出土。第69図では上層と下層に分けて図示したが、これは遺物の数が多いため2度に分けて実測、取り上げを行ったことによるもので、埋土に時期差は認められなかった。埋土中の5カ所に粘土が散布しているのが認められた。

出土遺物（第70～72図、図版48・49）

須恵器

杯蓋（1・2）　つまみの付くものと付かないものがある。1は口縁端部を三角形に作り出すもので天井部の一部にカキ目が見られる。2は径が比較的大きく扁平なつまみを持ち、口縁端部を折り曲げるものである。天井部の一部を回転ヘラケズリする。

蓋（3）　天地を逆にして杯身の類とも考えられる形態をなす。口縁端部がやや外へ張り出す。



第73図　SK04出土鉄器実測図（1/2）

天井部外面はヘラ切り後粗くナデる。

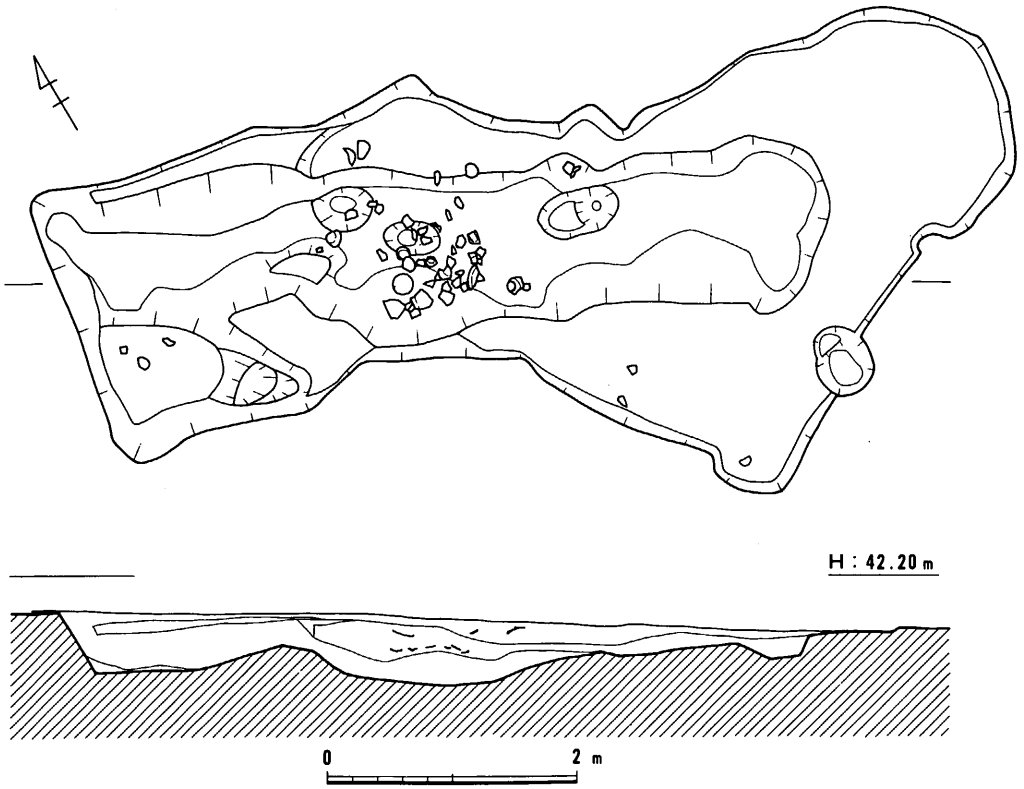
杯身（4～12）　高台の付くものと付かないものがある。法量の大小とともに浅いもの（7・8）と深いものがある。高台は高く外へふんばる。底部外面は回転ヘラケズリする。7には板状圧痕が見られる。4～7の体部下部にひとまわりだけ回転ヘラケズリを行う。6の体部中位には1条の沈線状のくぼみがめぐる。あるいは金属器を意識したものかもしれない。7では内面中位に沈線がめぐる。10は明褐色を呈するものである。11・12は高台が付かない。11の底部外面は回転ヘラケズリする。中心部に細い棒状の原体を強く押し付けながらロクロを回した結果と考えられる浅いリング状（直径約1.8cm）の凹みが見られる。12はヘラ切り後粗くナデるだけである。

鉢（13・14）　13は小破片、14はほぼ完形である。口縁端部を肥厚させ、無高台の杯を大きくしたような形態をとる。体部下半から底部外面を回転ヘラケズリする。

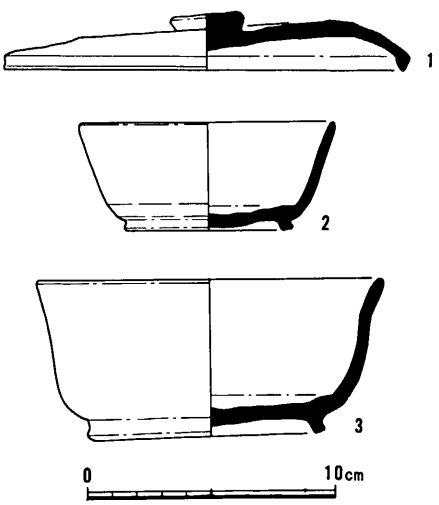
すり鉢（15）　円板状の底部とラッパ状に外に開く体部から成るものである。底部外面には棒状工具を押し付けながら直線状に引いて付けたと思われる幅2～3㎜の沈線が6～7㎜間隔で9本認められる。ただし、外周部から始まった沈線は反対の外周部までは達していない。また、中央部は磨滅している。体部外面には右上がりの紋り痕と似た痕跡がある。口縁部と内面は回転ナデである。

壺（16～18）　16はミニチュアの短頸壺であるが、作りが良い。17は小型の短頸壺で、全体を回転ナデで仕上げている。これも作りが良い。18は胴部中位に稜を持つ小型の壺である。体部外面は底部近くを回転ヘラケズリする。

甕（19）　やや赤味のある灰白色を呈する。胴部外面中位から下位にかけては格子目タタキ、対応する内面は同心円文タタキ、その他はナデで仕上げる。



第74図　SK05実測図（1/60）



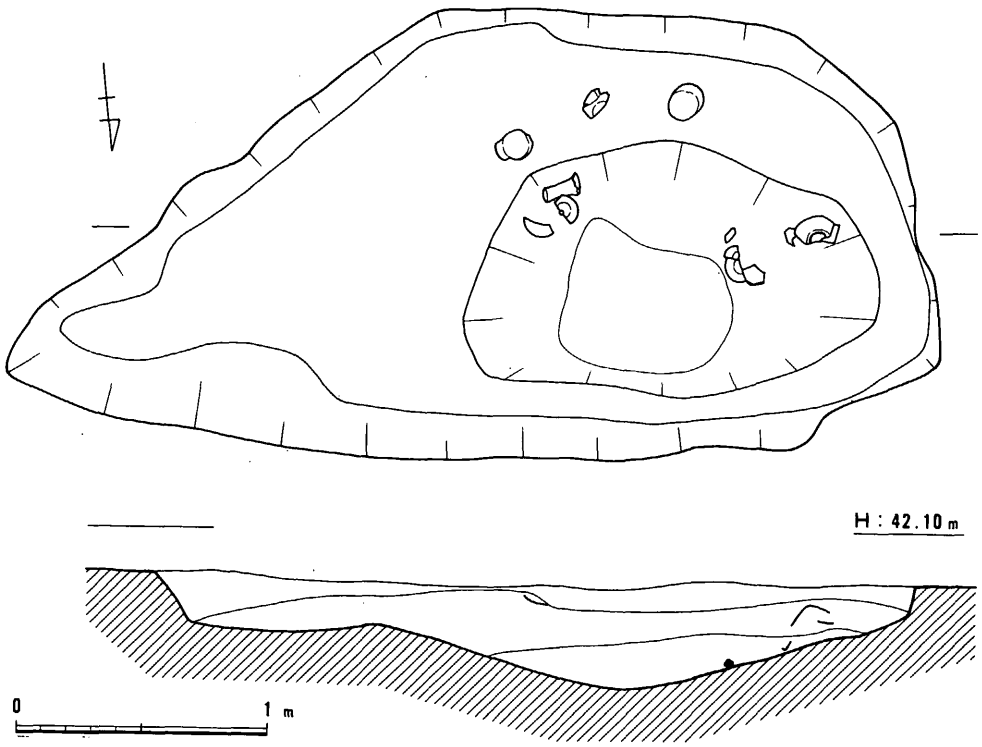
第75図　SK05出土土器実測図(1/3)

円面硯（20）　小破片である。台付圏足硯で、海と陸の区別は明瞭である。外堤はほぼ直立し、陸よりも高い。硯部外側の突帯は明瞭である。

土師器

皿（21～23）　21の底部はヘラ切り未調整である。器面は荒れている。22は高台の付くもので、体部は外へ直線的に開く。内外面ともにヘラミガキした痕跡がある。23は復元口径27.9cmを測る大型の皿である。外面は器面が荒れていて不詳であるが、内面はヘラミガキしている。

壺（24）　赤褐色を呈しているが、須恵器か土師器か迷うものである。器面が荒れているが部分的に残る元の器表は回転ナデ痕は消されかなり平滑にしている。



第76図　SK06実測図（1/30）

甕（25）　大きく外反する口頸部のみの破片である。器面がかなり荒れているが、内外面ともに平滑にしている。

石製品（第129図、図版79）

管玉（1）　異形の管玉で、緑色を呈する。ひすい製と思われる。穿孔は両面から行っている。長さ1.5cm、最大幅0.7cm、孔径は0.3cmを測る。

鉄器（第73図、図版81）

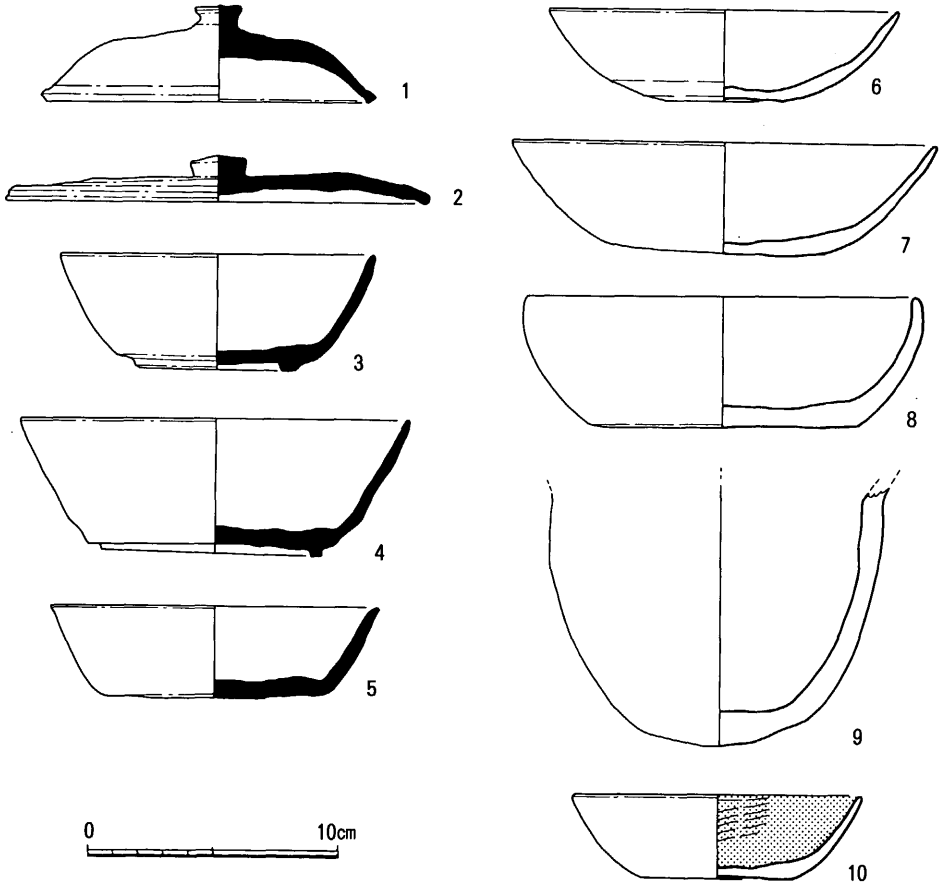
鏃（1～8）　錆化が著しく細部の不明なものが多い。1は飛燕形式、2は方頭細根斧箭式に属するものと考えられる。

刀子（9～11）　これも錆化が著しい。11は全長11.8cmを測り、刃部の背が茎よりわずかに高いものである。

不明鉄器（12）　釣り針状の形態を示すが、錆化が著しく断定できない。

SK05（第74図、図版17）

SK04の南西、約3.5mのところに位置する。ゆがんだ長方形状を呈する。上端の最大値で7.6m×3.14mを測り、SKのみならず、土坑も含めた中で最大の規模のものである。床面は凹凸が激しく、複雑な形状を呈する。深さは5cm～52cmと差が大きいが、おおむね東側で浅く、西側



第77図　SK06出土土器実測図（1/3）

で深い。遺物は、主に中央部付近の埋土中から出土した。小破片が多かったため、３点しか図示することができなかった。

出土遺物（第75図、図版50）

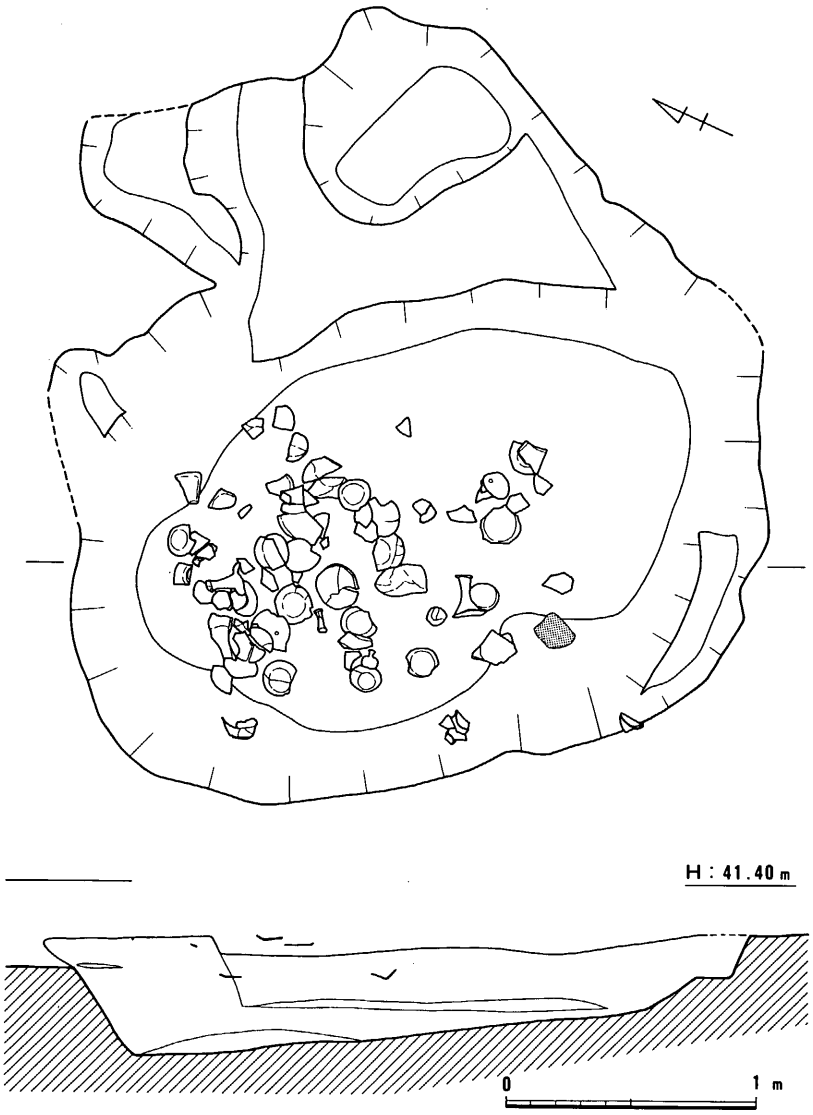
須恵器

杯蓋（１）　扁平で比較的大きいつまみを持つもので、天井部の２分の１を回転ヘラケズリする。口縁端部は長めの断面三角形を呈する。焼けひずみによりき裂がある。

杯身（２・３）　２はあまり高くはないが外へ踏ん張る高台を持つ。３は比較的高い高台を持つ。両者ともヘラ切り後、中心部は軽くナデるだけだが、その他の部分は回転ヘラケズリする。高台貼り付け後その上をナデる。

石製品（第129図、図版79）

権（２）　長さ4.3cm、底部3.0×1.6cmの大きさである。比較的軟質の石を用い、全体を平滑に仕上げている。穿孔は両面から行っている。重さは33.95ｇである。



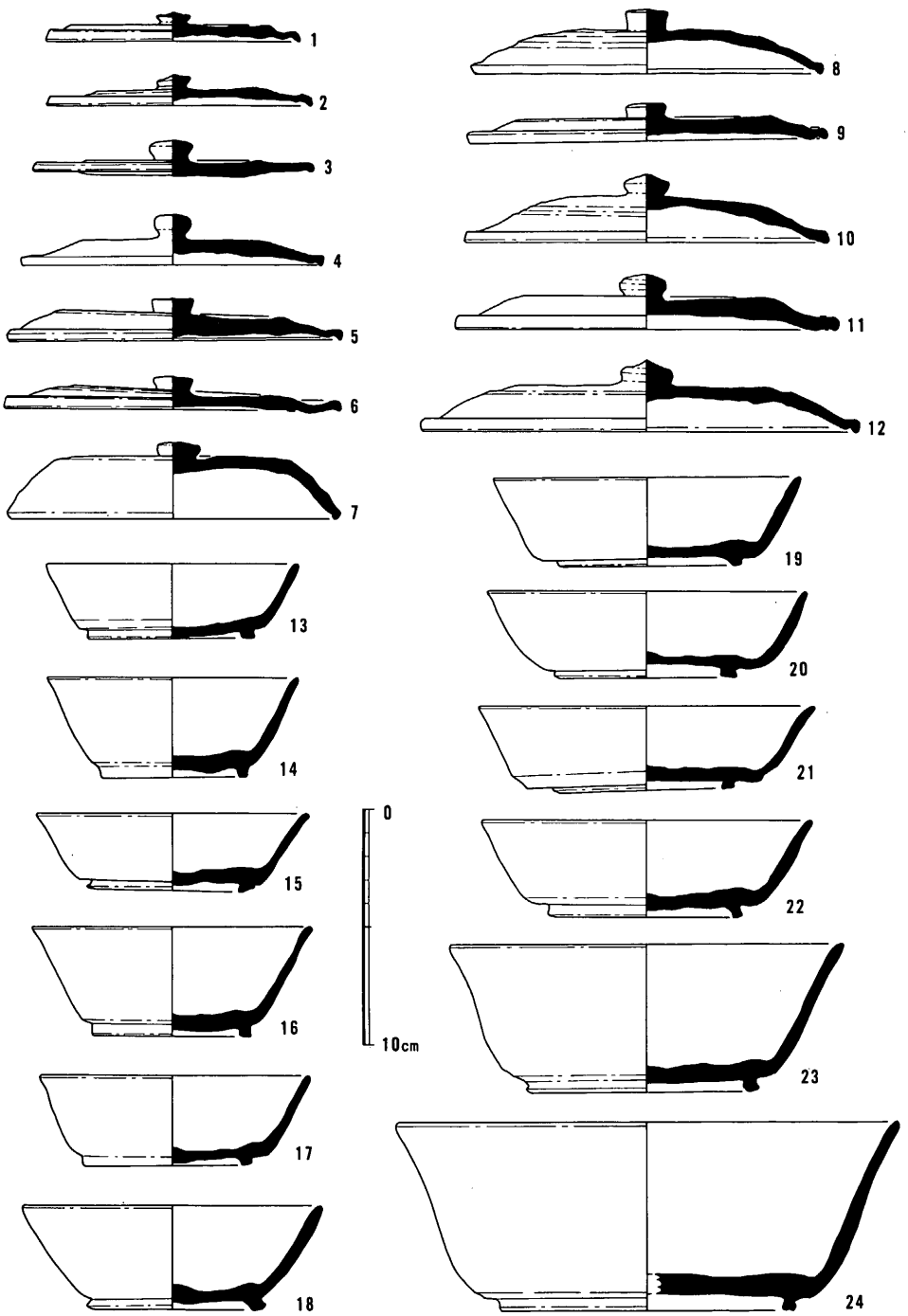
第78図　SK07実測図（1/30）

鉄器（第130図、図版82）

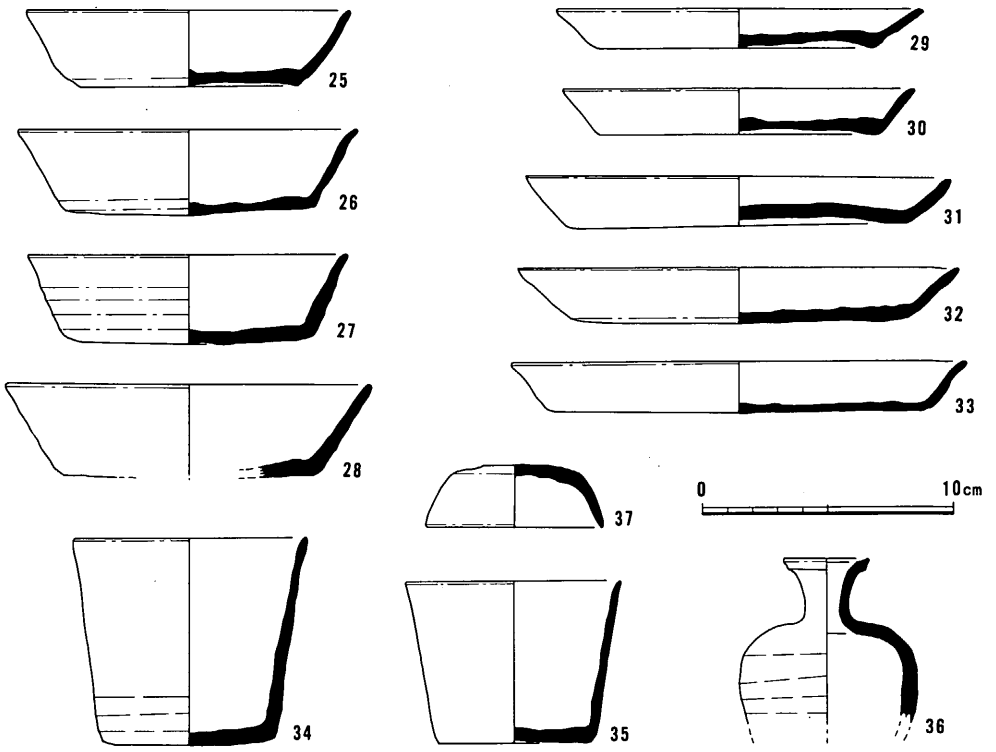
鎌（5）　全長12.3cm、刃部最大幅2.5cmを測る。基部の折り返しは上半分を折り返し上から見た形は横U字形になる。また、刃部は内湾する。

SK06（第76図、図版18）

SK05の南西、約2mのところに位置する。また、20号住居跡とも約1.8mしか離れていない。南西の部分で大溝と切り合っており、新旧関係はSK06の方が新しい。形状は、東側が尖った楕



第79図　SK07出土土器実測図①（1/3）



第80図　SK07出土土器実測図②（1/3）

円形を呈する。上端長軸長は3.68m、短軸長は1.79mを測る。床面には緩い凹凸が認められ、西側には1.66m×1.03mほどのくぼみがある。このくぼみの部分が最も深く、約0.4mを測る。壁の立ち上がりは、西側へ行くほど垂直に近くなっている。遺物は埋土中から浮いた状態で、またくぼみの部分の床面上から出土した。

出土遺物（第77図、図版50）

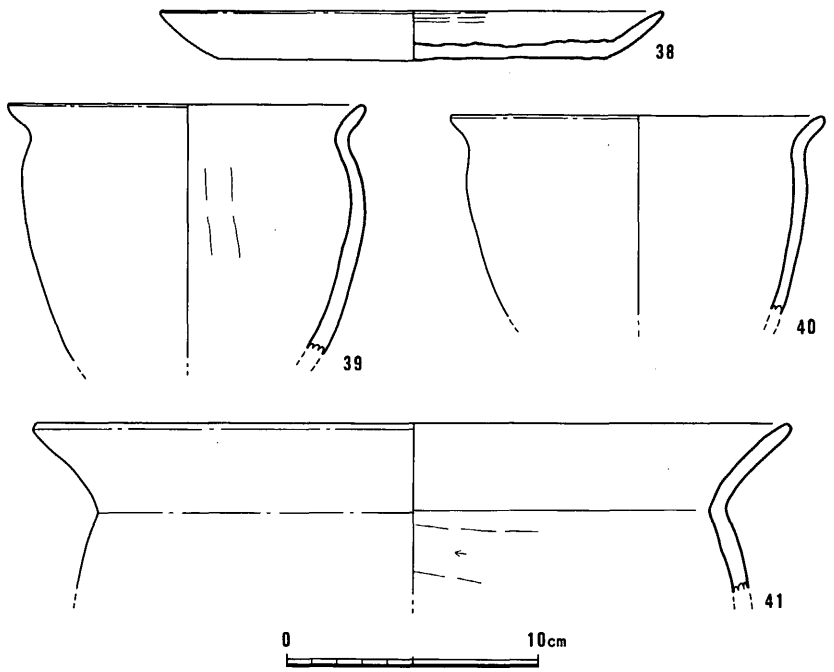
須恵器

杯蓋（1・2）　1はつまみと全体の器高が高い。天井部は回転ヘラケズリしない。2は小さなつまみを持つ扁平なものである。口縁端部は退化しており折り曲げない。天井部は回転ヘラケズリしない。

杯身（3～5）　3・4は高台を持つが、低く、貼り付け方も雑である。ヘラ切り後比較的ていねいにナデるもの（3）とほとんど未調整のもの（4）がある。5は無高台で、底部はヘラ切り後ナデる。

土師器

杯（6・7）　口径の割に底径が小さく、体部が丸いものである。7は器面の荒れのため不明であるが、6は底部外面を回転ヘラケズリする。体部内外面はヘラミガキ痕が一部残る。7は



第81図　SK07出土土器実測図③（1/3）

外面が明褐色であるが、内面は暗褐色を呈する部分が多い。器面は荒れていて調整不詳である。

鉢（8）　平底と丸い体部から成る。6・7より底径が大きく、ぶ厚い作りである。底部外面は回転ヘラケズリをする。体部外面も不詳ながらヘラケズリしているようだ。

甕（9）　口縁部を欠く。2～3㎜の砂粒を多く含み、全体に雑な作りの感を持たせる。器面の荒れのため調整は不詳である。

黒色土器

杯（10）　6の土師器杯の内面を黒化したものである。底部外面を回転ヘラケズリ、内面をヘラミガキしている。

鉄器（第130図、図版82）

刀子（6）　刀子の茎から刃部にかけての破片と考えられるが、錆のため関等が明らかではなく、疑問もある。残存長3.8cmである。

SK07（第78図、図版18）

SK05の東、約10.8m離れたところに位置する。また、本遺構の北、約0.6mのところには23号住居跡がある。斜面に造られており、東側の壁が不明瞭であった。東側のテラス状の部分は、堀り込みも浅く遺物も出土しなかったことから、掘り過ぎた可能性もある。そうすれば、本遺構は本来3.0m×2.0m程度の楕円形を呈していたと考えられる。床面はほぼ平坦で、南から北

に向けて傾斜している。最も深い部分では0.46mを測る。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。一部の遺物は、SK02の場合と同様に、遺構検出面よりも盛り上がるような状態で検出された。また、埋土中に1カ所、粘土の散布が見られた。

出土遺物（第79～81図、図版18）

須恵器

杯蓋（１～12）　口径10.6～18.4cmまでのものがあるが、11cm前後のもの、14～15cm前後のもの、18cmほどのものに収れんする傾向にある。つまみは小さい。形態的には７が他と異なり、高い。口縁端部は12が比較的しっかりしているが、全体的に退化した形態を示す。天井部の回転ヘラケズリは２・６・８にわずかに認められる。

杯身（13～28）　有高台、無高台の違いがある。有高台のものは杯蓋同様法量分化が進んでいる。口径がほぼ同じでも器高に違いがある。器高の低いものに特に顕著であるが、高台は端部より内側に付けられる。底部外面はヘラ切り後ナデるものが多いが24は体部下半とともに回転ヘラケズリを行う。また、20には板状圧痕がある。体部の形態としては、外反気味に外に開くものが多いが、18はやや内湾気味に開く。

無高台のもの(25～28)は口径13.1～14.5cmの大きさで、底部をヘラ切り後ナデるものである。

皿（29～33）　平坦な底部と直線的に外に開く体部からなるもので、底部と体部の境は比較的明瞭である。底部外面はヘラ切り後ナデる。

鉢（34・35）　小型の鉢としておきたい。体部外面下位と底部を回転ヘラケズリする。その他は回転ナデである。大宰府条坊跡SD001では漆入れとして使用されたことが推定されている。〈註１〉

瓶子（36）　小型の瓶子である。全体を回転ナデで仕上げる。作り、焼成の良いものである。

蓋（37）　焼成不良のため淡褐色を呈するものである。器面も荒れていて調整不詳である。

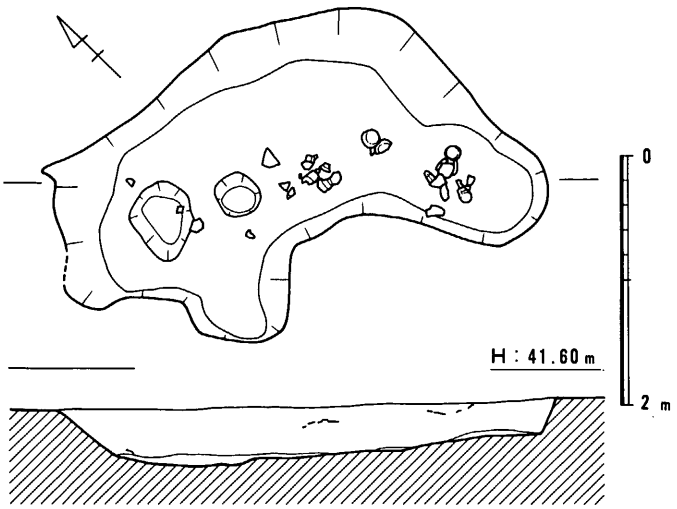
土師器

皿（38）　底部と体部の境に稜は作り出さないもので、底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面と体部内外面をヘラミガキする。

甕（39～41）　39・40は小型の甕である。口縁部は外反するが、内外面ともに稜は作り出さない。39の口縁部内外面と胴部内面上位、外面上位はヨコナデ、あるいはナデである。その他の内面は粗いヘラケズリである。40の外面は器面の荒れのため調整不詳である。41は大型の甕であるが小破片である。口縁部外面上位はヨコナデ、下位はハケメのあとナデ、内面はヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリを行う。ヘラケズリによって口縁部と胴部の境には稜が作り出されている。

鉄器（第130図、図版82）

鏃（３）　鏃の茎の部分かと思われる。断面は錆のため判然としないが、方形を呈するものと思われる。



第82図　SK08実測図（1/60）

〈註１〉『大宰府条坊跡』P.14
太宰府町教育委員会
1982

SK08（第82図、図版19）

SK07の東、約2.2mのところに位置する。ゆがんだ楕円形状を呈する。上端長軸長は3.92m、短軸長は1.77mを測る。深さは0.28m～0.45mほどで、床面には緩やかな凹凸が認められる。床面では２個のピットが検出されたが、ともにあまり深いものではない。北側の壁は比較的緩やかに立ち上がるが、南側の壁の立ち上がりはより垂直に近い。遺物は、埋土中から浮いた状態で検出された。

出土遺物（第83図）

須恵器

杯蓋（１）　扁平に近いが、比較的径の大きいつまみを持ち、口縁端部を折り曲げるものである。天井部は回転ヘラケズリの後ナデを加えている。

杯身（２）　高台の付かないものである。底部外面はヘラ切り後ナデる。その他は回転ナデ、ナデで仕上げる。底部外面にはヘラ記号がある。

土師器

杯蓋（３）　扁平なつまみを持ち、口縁端部は断面三角形に作る。器面が荒れているが、部分的に残る元の器面にはヘラミガキをしている。

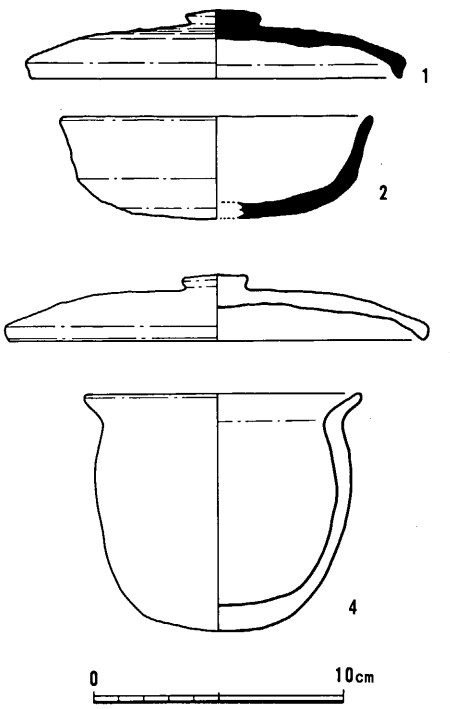
甕（４）　小型の甕とするか鉢とするか迷う。２～３㎜大の砂粒を多く含む。磨滅していて調整が不詳であるが、胴部内面はヘラケズリしている。

瓦（第131図）

４は丸瓦の可能性もあるが、小片のため不詳である。端面をヘラ切りするが、面取りはしていない。凸面は格子目タタキ、凹面には布目が残る。土師質。５は平瓦である。側面をヘラ切りするが、面取りはしていない。凸面は平行タタキを施した後、指でナデる。部分的に指圧痕が残っている。凹面には糸切り状擦痕が残る。須恵質。

SK09（第84図、図版19）

６号住居跡の東、約2.9mのところにある。つぶれた円形状を呈し、上端長軸長1.97m、短軸



第83図　SK08出土土器実測図（1/3）

長1.39mを測る。途中にテラスを持つが、床面はほぼ平坦である。深さは約0.34mを測る。壁の立ち上がりは西側の方が緩やかである。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。本遺構の場合も、一部の遺物が遺構検出面よりも盛り上がるような状態で検出された。埋土中の3カ所に粘土の散布が見られた。

出土遺物（第85・86図、図版53）

須恵器

杯蓋（1～4）　身受けのかえりのあるものが1点（4）あるが、その他はないものである。また、1・2はつまみがなく、3・4はつまみが付く。口縁端部は1が三角形に作り、2は折り曲げる。1・2の天井部外面はヘラ切り後粗いナデである。3は中心が盛り上がるつまみを持ち、口縁端部は折り曲げる。調整は器面の荒れのため不詳である。4は天井の高い形態で、退化したかえりを持つ。天井部は回転ヘラケズリし、他は回転ナデ、ナデを行う。

杯身（5・6）　比較的高い高台の付くもので、底部はヘラ切り後ナデるものである。器高に違いが見られる。

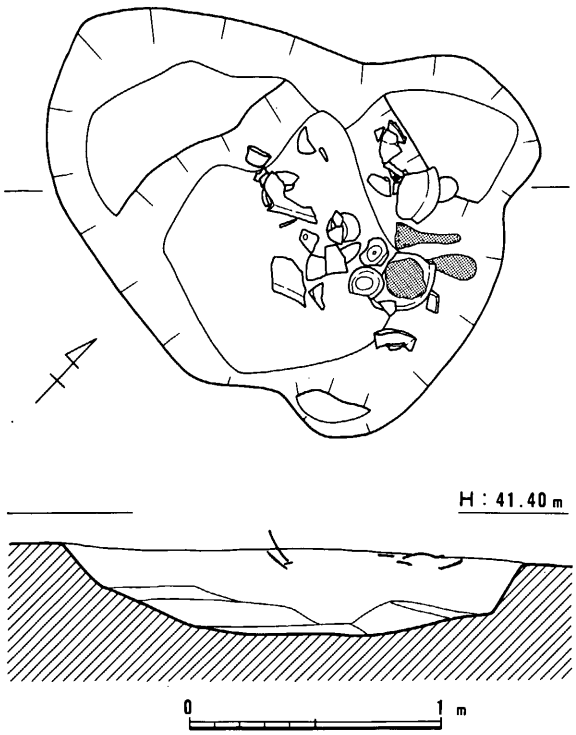
長頸壺（7）　頸部の大部分を欠く。胴部の稜は鋭い。高台は高く、外へふんばる。底部外面は回転ヘラケズリし、高台貼り付け時にナデる。胴部下半の大部分は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデである。頸部の貼り付けは内面に粘土を補強することによっている。

土師器

皿（8・9）　8は無高台で底部と体部の境が不明瞭なものである。底部はヘラ切り後粗いナデ、体部外面はヘラミガキ、内面は器面の荒れのため調整不詳である。9は有高台で、底部外面は回転ヘラケズリ、体部外面はヘラミガキ、内面は回転ナデを行っているが、内面のミガキの有無は判別しにくい。

椀（10）　底部と体部の境を丸く作り、体部が内湾気味に開くものである。底部外面、体部内外面をヘラミガキする。底部内面は器面の荒れのため不明である。

鉢（12）　口縁部が大きく外反する大型の鉢である。調整は体部上半にハケメが見えるが、その上、並びに下半・底部をナデている。口縁部外面もナデである。内面は口縁部にハケメ、体部と底部はヘラケズリである。体部外面に直径約6cmの円形の剝離痕がある。把手がはずれた



第84図　SK09実測図（1/30）

ような痕跡であるが、この種の鉢に把手が付くのか不明である。反対側にはない。

甕（13）　口径が胴部最大径より小さいもので、口縁部内外面をヨコナデ、胴部外面をハケメ調整、内面をヘラケズリするものである。

SK10（第87図、図版20）

6号住居跡と切り合っている。新旧関係は、SK10の方が新しい。凹凸の多い平面形を呈するが、上端の最大値で4.36m×3.92mを測る。床面は、東側では複雑な形状であるが、西側では1段のテラスを持つだけで比較的平坦である。深さは、テラスまで約0.2m、床面まで0.25m～0.42mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかな方である。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。それらのほとんどは、本遺構の西側から出土したものである。

出土遺物（第88図、図版53）

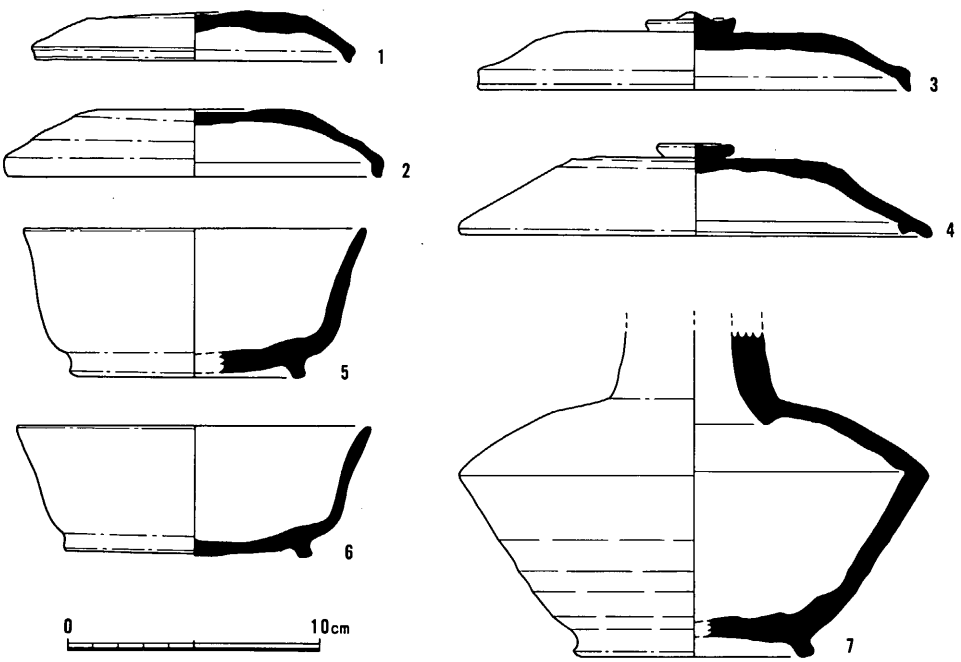
須恵器

杯蓋（1～3）　扁平なボタン状のつまみを持つものである。しかし、1は扁平すぎてつまめない。口縁端部は折り曲げ方の顕著なもの（1）、断面三角形に作るもの（2）、その中間的なもの（3）がある。天井部外面は回転ヘラケズリする。1の天井部にはヘラ記号がある。

杯身（4・5）　4は高台の付かないもので、直立する体部と外反する口縁部からなる。底部外面はヘラ切り未調整である。5はあまり外へふんばらない高台の付くもので、底部外面はヘラ切り後軽くナデるだけである。

蓋（6）　小型の蓋で、全体をナデ、回転ナデで調整する。

すり鉢（7・8）　円板状の底部と外反する体部を持つものであるが、底部外面には通常見られる未貫通の小穴などは見られない。8の底部側面は手持ちのヘラケズリを行っている。



第85図　SK09出土土器実測図①（1/3）

ＳＫ13（第89図、図版20）

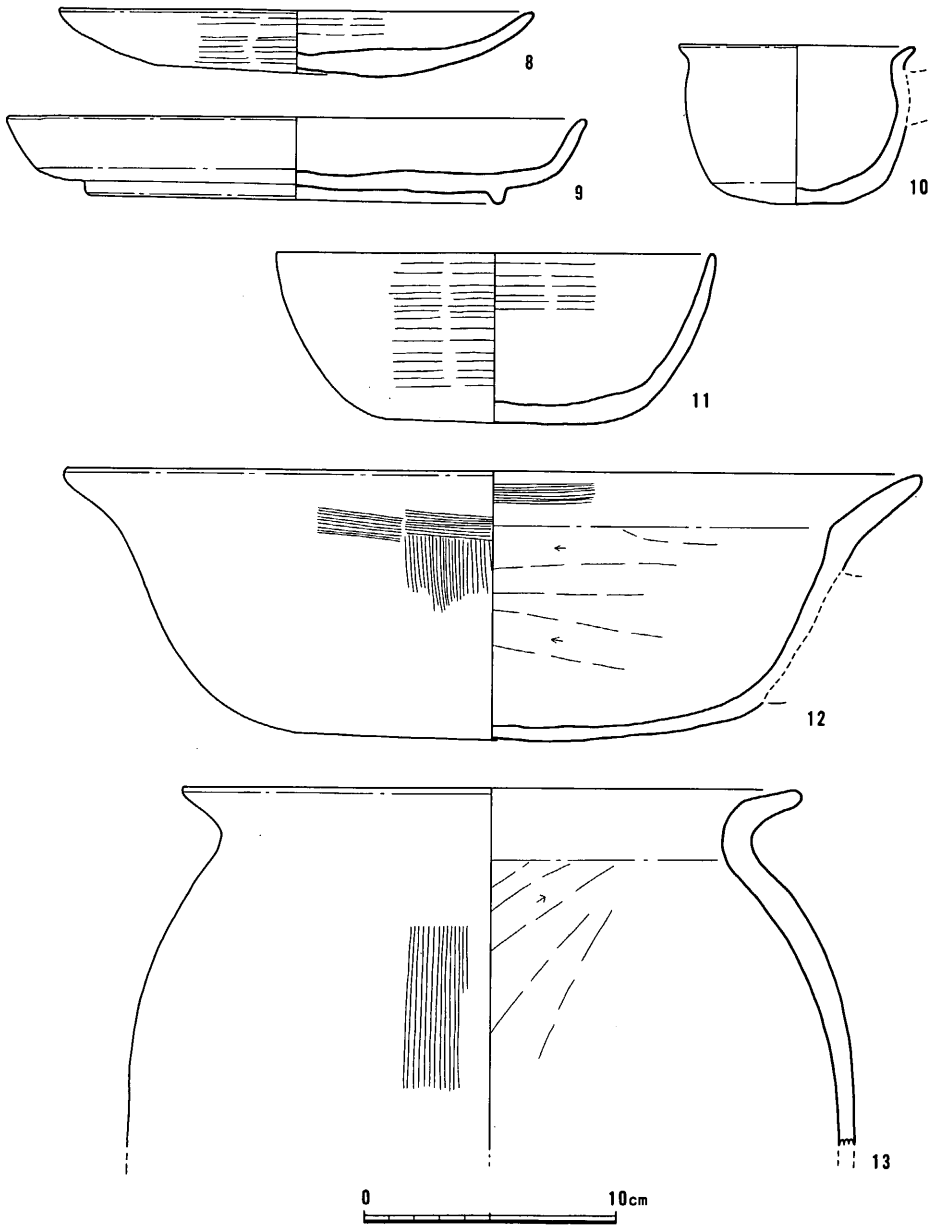
12号住居跡の東、約２ｍのところに位置する。本遺構の南、約2.6mのところからは11号住居跡が検出されている。遺構検出時に判別できなかったため一緒に掘ったが、西側で他の遺構と切り合っているものと考えられる。その部分を補って考えると、上端長軸長約2.6m、短軸長1.86ｍの楕円形を呈していたものと思われる。床面には凹凸があり、深さは0.15m～0.35mを測る。また、深さ0.23mのピットが検出された。壁の立ち上がりは、西側は不明だが東側では緩やかである。遺物は、埋土中から浮いた状態で出土したが、本遺構の場合も、一部の遺物が検出面よりも盛り上がるような状態で検出された。なお、第89図では上層、下層に分けて図示したが、これが埋土の時期差によるものでないことは、ＳＫ04の場合と同様である。

出土遺物（第90～92図、図版53・54）

須恵器

杯身（１～11）　高台の付くものは、高台と体部が一体となったような形態が多くなる。また法量の点で大きなものが多い。大きなものの体部は直線的に外開きの形をとる。通常の大きさのものはやや丸味を持つ。高台の貼り付け方は雑であるが、低い物（１～５・８）と比較的高いもの（６・７・９）がある。特に９は薄いがしっかりしている。底部外面はヘラ切り未調整かヘラ切り後粗くナデる。５・６には板状圧痕がある。

10・11は高台が付かないものである。９の底部は平坦であるが、10はやや丸味を持っている。

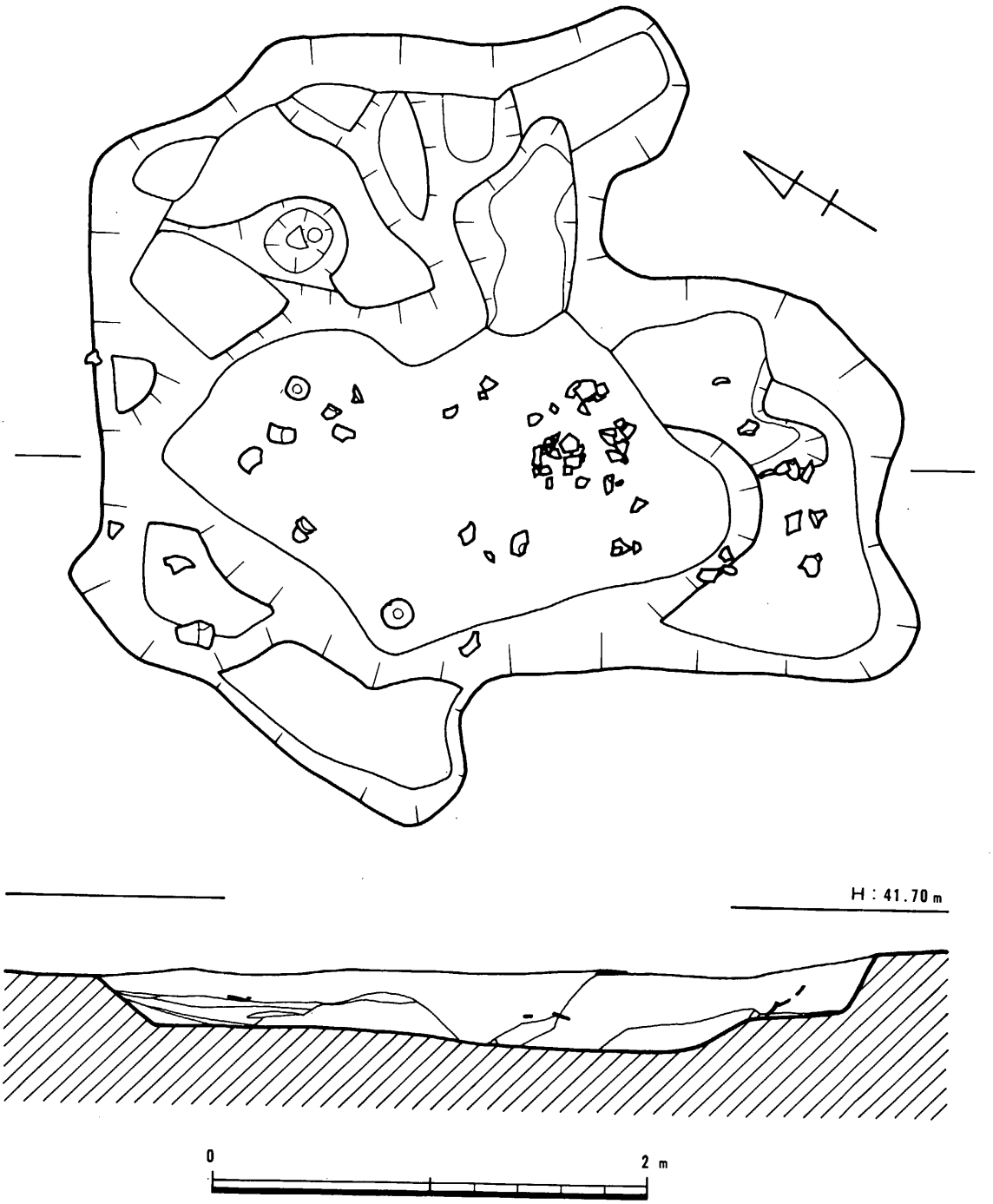


第86図　SK09出土土器実測図②（1/3）

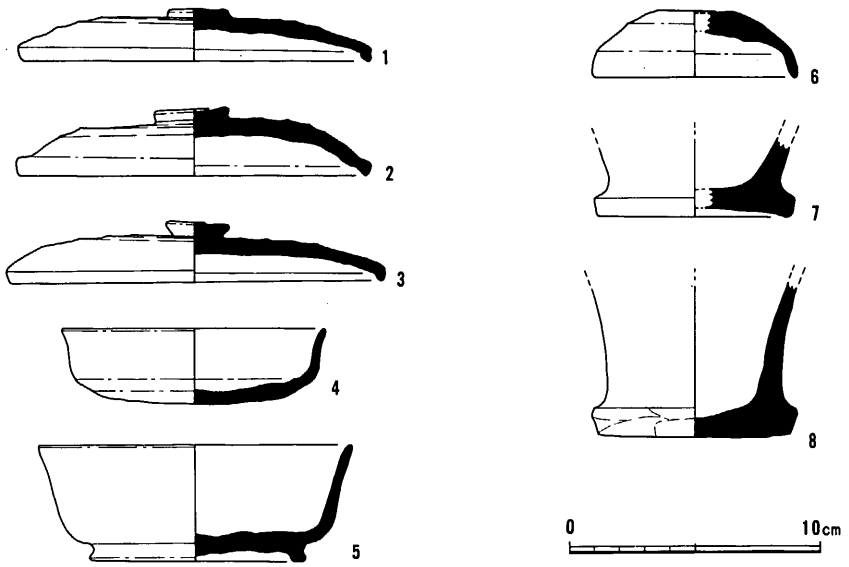
また、9の底部外面には板状圧痕が付く。10はヘラ切り後ナデる。

蓋(12)　小破片のため、器種の決定に疑問が残る。直角に折れた体部は平坦な口縁端部に至って終わる。天井部はヘラ切り後粗くナデるだけである。

壺（13）　口頸部を欠くが、瓶子として良いであろう。底部はヘラ切り後粗くナデる。その他



第87図　SK10実測図（1/30）



第88図　SK10出土土器実測図（1/3）

は回転ナデである。

土師器

杯（14～19）　直線的に開く体部と平坦な底部から成るもので、底部はヘラ切り未調整か粗くナデる。15、17には板状圧痕がある。

皿（20～24）　底部が円板状に突出するもの（20～22）とそうでないものがある。前者がヘラ切り未調整、後者はヘラ切り後粗くナデる。

椀（25～27）　25は薄く高い高台が付く。全体を回転ナデで仕上げる。26の体部には多くの沈線がめぐる。一本づつ付けたものではないようだ。高台は高いが、外側の貼り付け方が雑である。27は高台というより脚と言った方が適当かもしれない。色調は薄いピンクがかった白色で、胎土もきめ細かい。

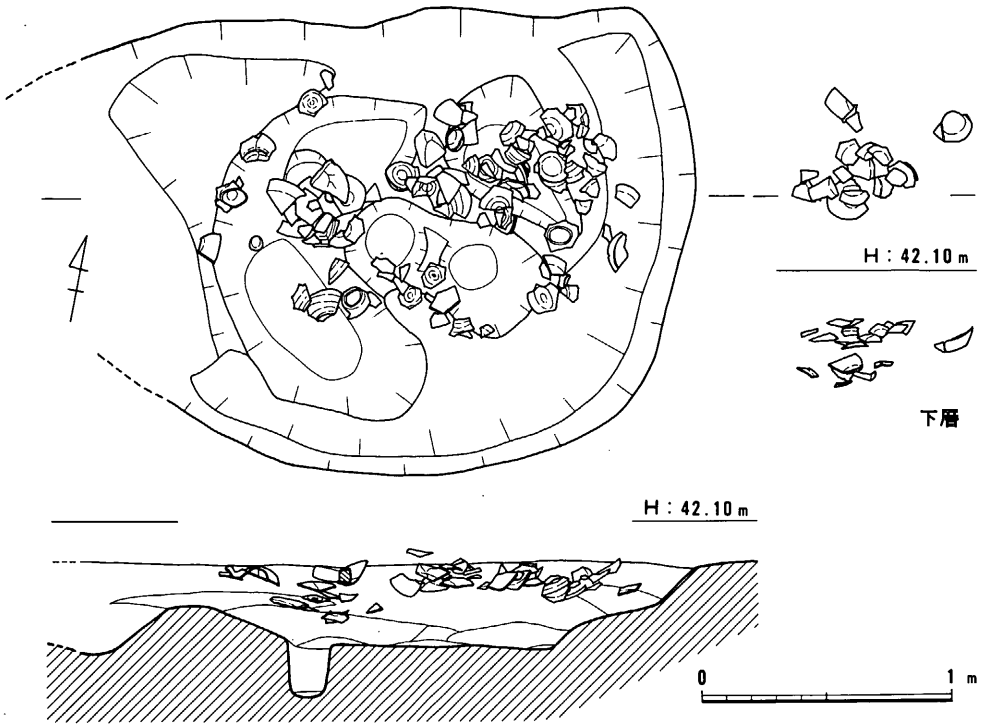
鉢（28）　皿を大きくした形態である。底部はヘラ切り後粗くナデる。

甕（29～31）　29・30は小型の甕で胴部最大径より口縁部径の方が大きい。内外面ともヨコナデ、ナデで調整する。31は大型の甕で、口縁部内面と胴部外面をハケメ調整、口縁部外面をヨコナデ、胴部内面をヘラケズリする。

黒色土器

椀（32～39）　すべて内面のみ燻したA類である。高台の高いものと低めのものがあるが、38を除いて口縁端部が外反気味である。外面は35と39にヘラミガキが見られる。34・35・37～39の外面には回転ヘラケズリが施される。

ＳＫ14（第93図）



第89図　SK13実測図（1/30）

ＳＫ13の北西に接するように位置する。両者の距離は、最も近いところで約0.4mである。南側がややふくらんだ楕円形を呈し、最大値で5.52m×3.94mを測る。床面は凹凸が激しく一定していない。深さは0.27m～0.49mを測る。床面で５個のピットが検出された。壁は、南側では緩やかに立ち上がるが北側では垂直に近い。遺物のほとんどは、本遺構の北側の埋土中から浮いた状態で出土した。

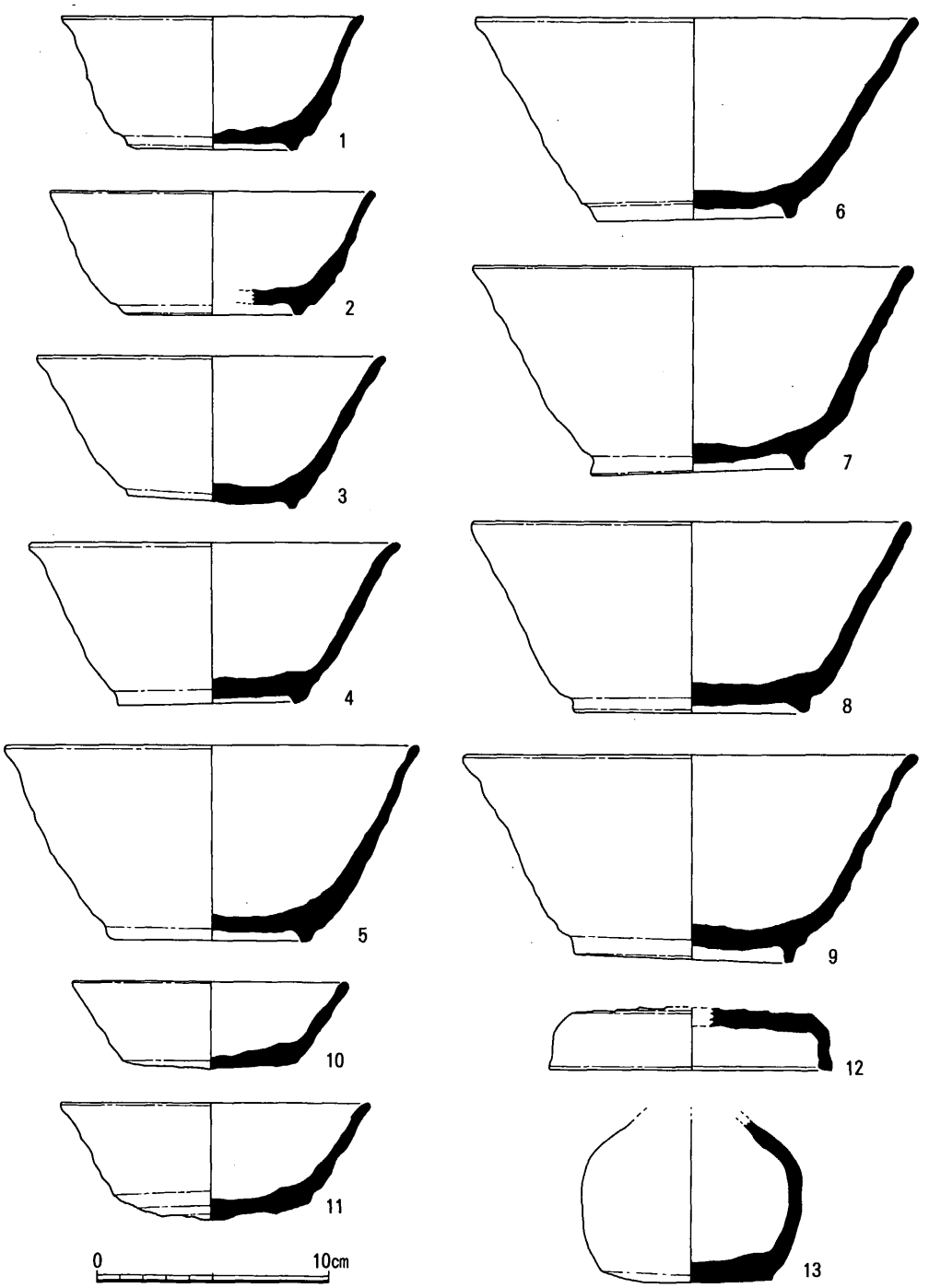
出土遺物（第94図、図版55・56）

須恵器

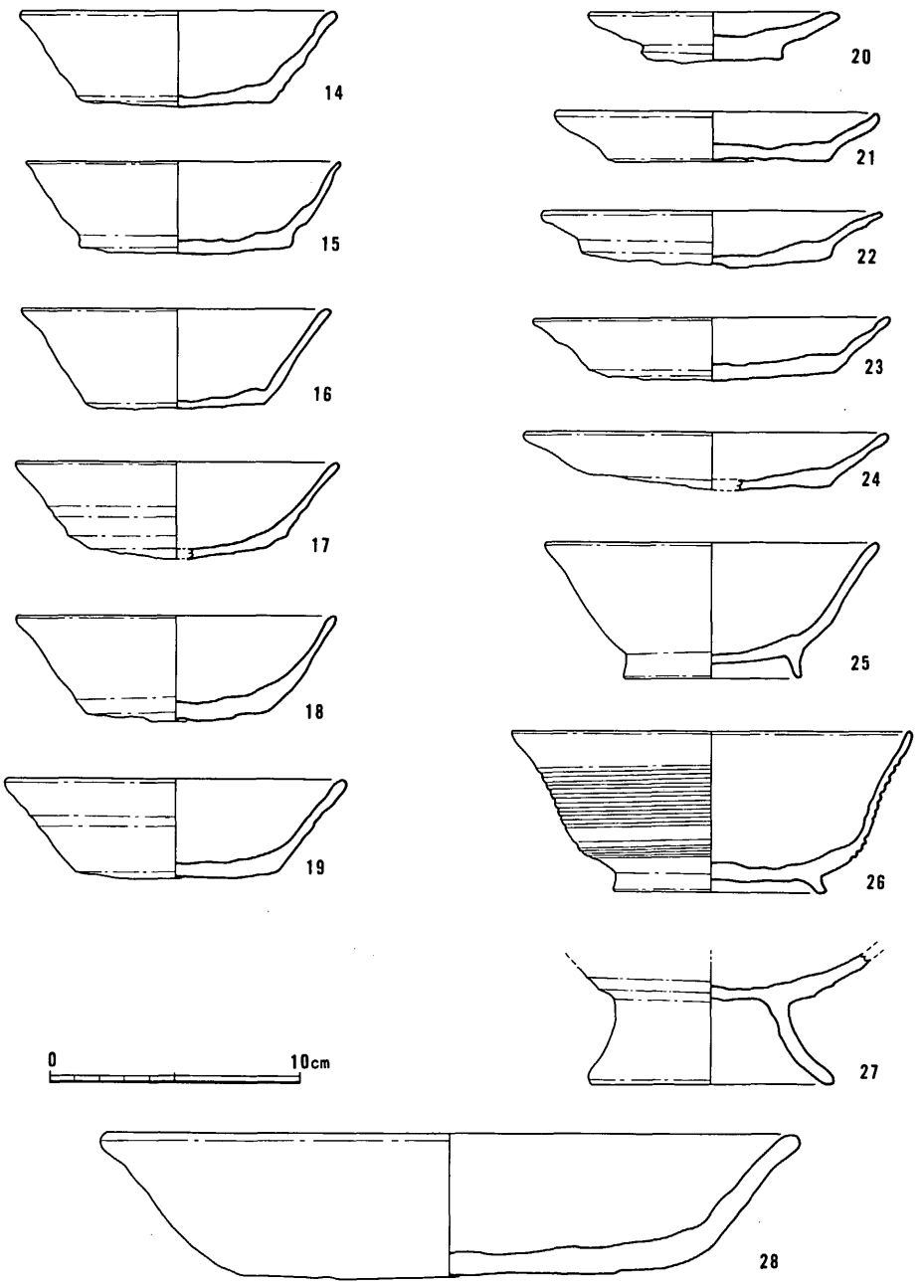
杯蓋（１～３）　１は丸味のあるつまみと長く折り曲げた口縁部からなる。天井部外面は回転ヘラケズリする。２・３は扁平なつまみを付けるもので、やはり天井部外面を回転ヘラケズリする。すべて焼成時の焼けひずみがある。

杯身（４～５）　底端部よりやや中央寄りに比較的しっかりした高台の付くものである。４は底部外面を回転ヘラケズリしている。５は底端部を一部回転ヘラケズリしているが、その他はヘラ切り後ナデている。

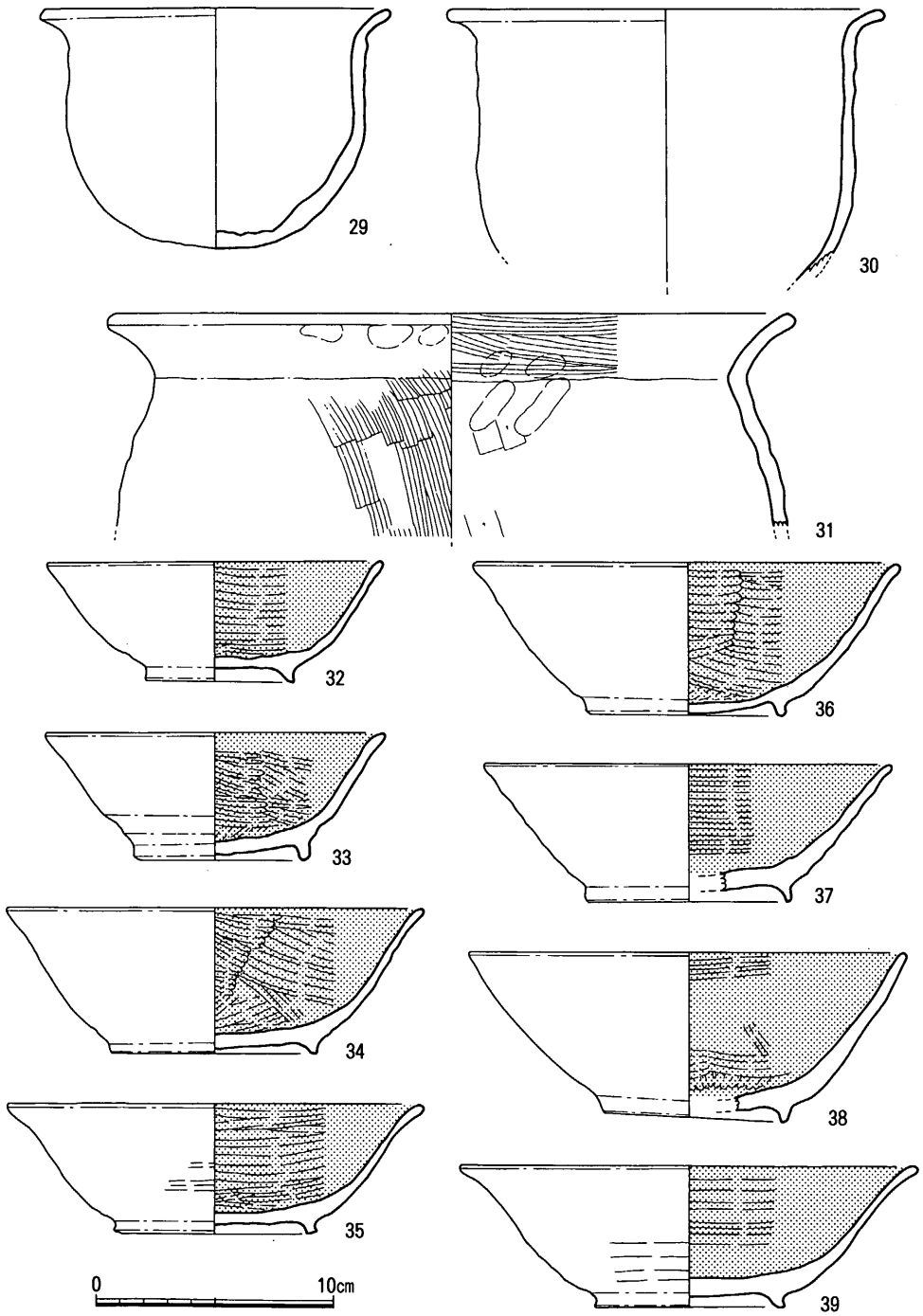
皿（６）　底部と体部が比較的わかりやすいもので、底部外面をヘラ切り後粗くナデるものである。



第90図　SK13出土土器実測図①（1/3）



第91図　SK13出土土器実測図②（1/3）



第92図　SK13出土土器実測図③（1/3）

甕（7）　二等辺三角形の頂点側半分を上向きに折り曲げたような把手を一対付けたものである。焼成不良のため灰白色を呈し、全体を回転ナデで調整する。

土師器

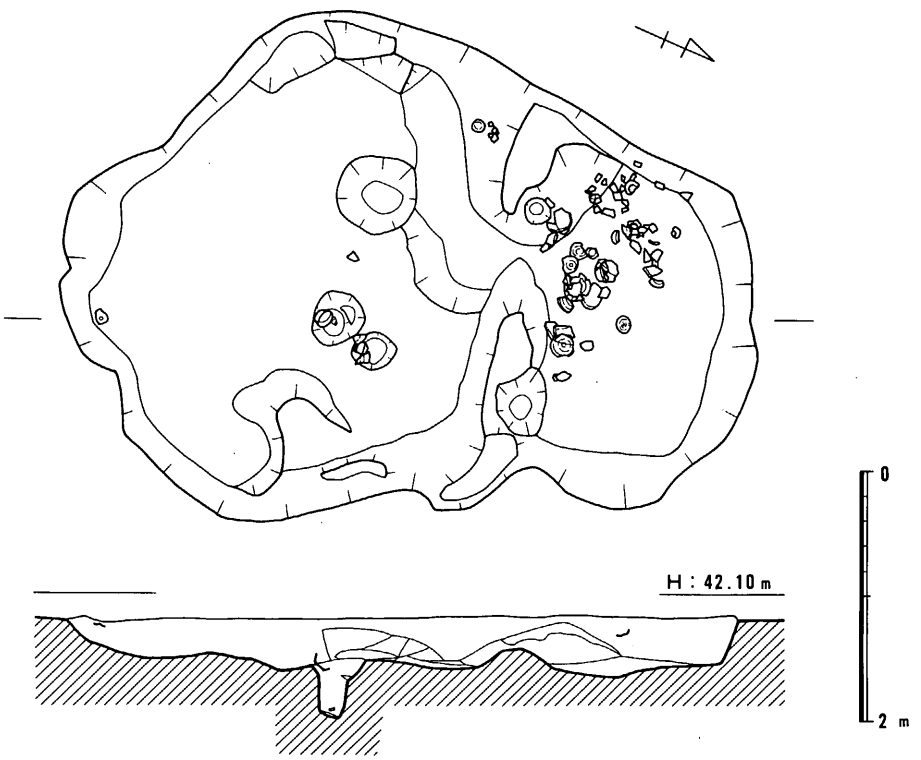
杯蓋（8）　扁平なつまみを持ち、断面三角形に作る口縁端部を持つ。器面が荒れていて調整不詳であるが、天井部外面は回転ヘラケズリをしていて、その上をヘラミガキしている可能性がある。

椀（9・10）　大型の椀で、低い高台が付く。器面が荒れているが体部内外面ともにヘラミガキを行っていると思われる。

高杯（11）　短脚で体部と底部の境が不明瞭な杯部を持つ。杯部は内外面ともにヘラミガキをする。

ＳＫ15（第95図、図版21）

本調査区内では西端近くで検出された。14号住と切り合っており、新旧関係はＳＫ15の方が新しい。平面形はゆがんだ楕円形を呈する。上端長軸長で3.02m、短軸長で1.48mを測る。床面には凹凸が認められるが、ピット等は検出されなかった。壁の立ち上がりは、南側ではきわ



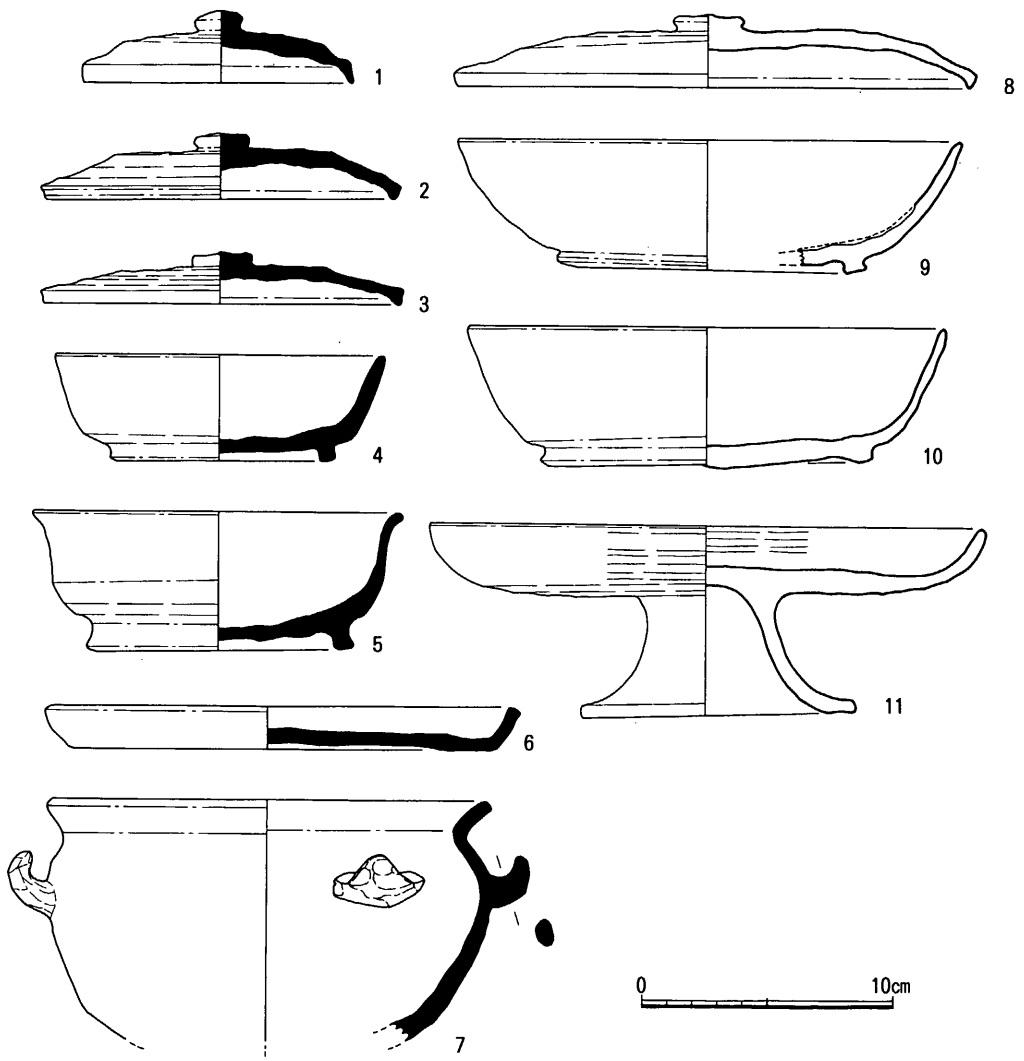
第93図　SK14実測図（1/60）

めて緩やかだが、北側では垂直に近い。深さは南側で0.26m、北側で0.82mを測り、北側ほど深い。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。本遺構においても、一部の遺物は検出面よりも盛り上がるような状態で検出した。

出土遺物（第96図、図版56）

須恵器

杯身（1）　高台の付かないもので、体部は心もち内湾しながら外に開く。底部外面はヘラ切り未調整である。



第94図　SK14出土土器実測図（1/3）

土師器

皿（２・３）　底部と体部の境が比較的明瞭なもので、底部外面はヘラ切り後粗いナデ、体部内外面は回転ナデを行う。

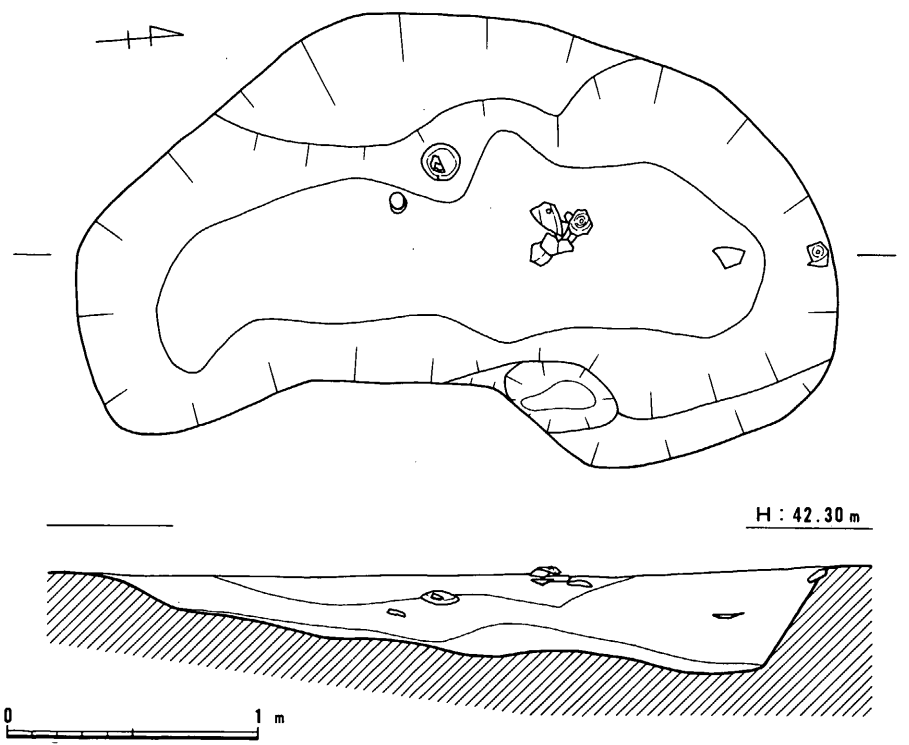
鉢（４）　器種名を何とするか迷うものである。把手付の鉢としておきたい。外面の把手から下部はヘラケズリし、その他はヨコナデである。把手は断面不整円形を呈し、先端部に行くにつれて細くなる。

ＳＫ16（第97図、図版21・22）

調査区の南部で検出された。本遺構の西、約8.8mのところには11号住居跡がある。大溝と切り合っており、新旧関係はＳＫ16の方が新しい。ゆがんだ長方形を呈し、上端長軸長は4.44m、短軸長は1.81mを測る。床面はほぼ平坦で、ピット等は検出されなかった。深さは約0.55mである。壁の立ち上がりは比較的緩やかであり、特に南側ではそれが顕著である。遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。

出土遺物（第98・99図、図版56）

須恵器

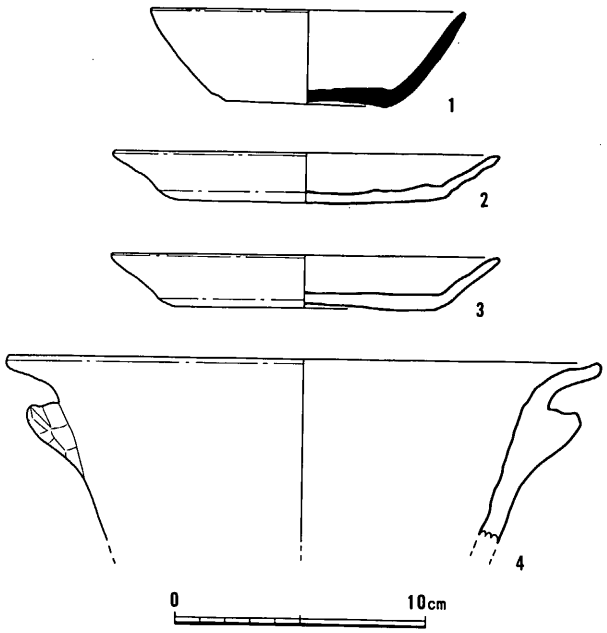


第95図　SK15実測図（1/30）

杯蓋（1・2）　つまみの付かないもので、天井部が平坦な蓋である。口縁端部は丸く終わり、内側に沈線を持つ。1の天井部はヘラ切り未調整、2はヘラ切り後ナデる。

杯身（3～7）　3・4は高台を持つが、きわめて雑な貼り付け方である。5～7は無高台で直線的に外開きするものである。5の底部外面はヘラ切り後余分な粘土を体部側に押し付けている。6・7はヘラ切り後粗くナデるだけである。

皿（8）　生焼けのもので内外面淡黄灰色を呈する。底部外面はヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデである。



第96図　SK15出土土器実測図（1/3）

土師器

椀（9）　比較的高い高台が付き、直線的に外傾する体部から成る。

杯（10・11）　須恵器の無高台の杯と同形態である。底部外面はヘラ切り後粗いナデである。11の内面には油煙らしきものが付着している。灯火器として使われたものだろうか。

皿（12～15）　底部がやや丸味を持つ浅い皿である。底部外面はヘラ切り後ナデる。その他は回転ナデ、ナデである。

脚付鉢（16）　高く外へふんばる脚を持つものである。他の例から考えて、外開きの大型の椀と似た形態を示すと思われる。底部内面には油煙らしきものが付着している。胎土はきめ細かく、灰白色を呈する。

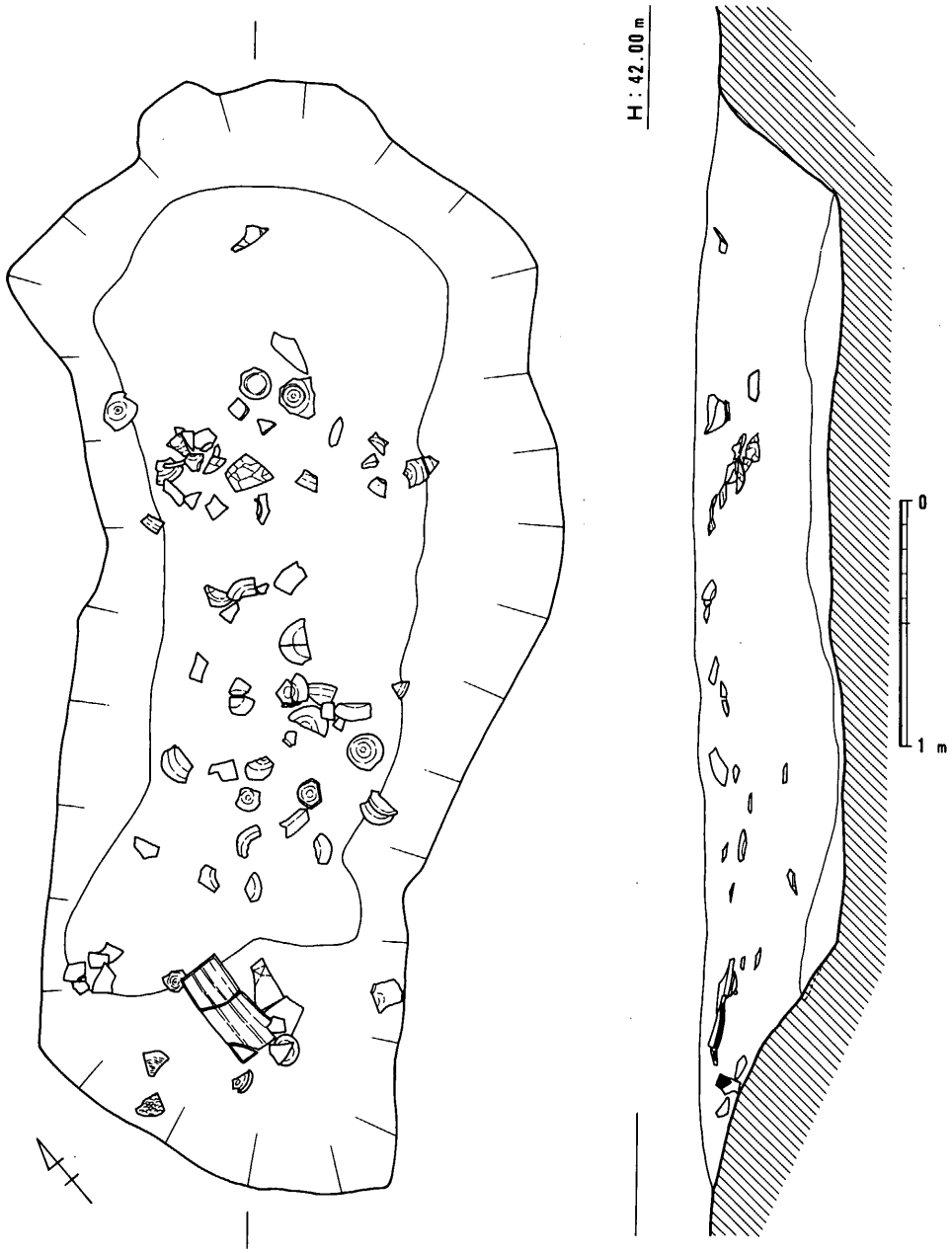
鉢（17）　丸底で外へ大きく開く形態を示す。外面は胴部下半をヘラケズリ、上半と口縁部内外面は回転ナデ、胴部内面はナデによって平滑にしている。

甕（18）　小破片である。口縁部内外面はナデ、胴部内面ヘラケズリする。胴部上位はナデか。

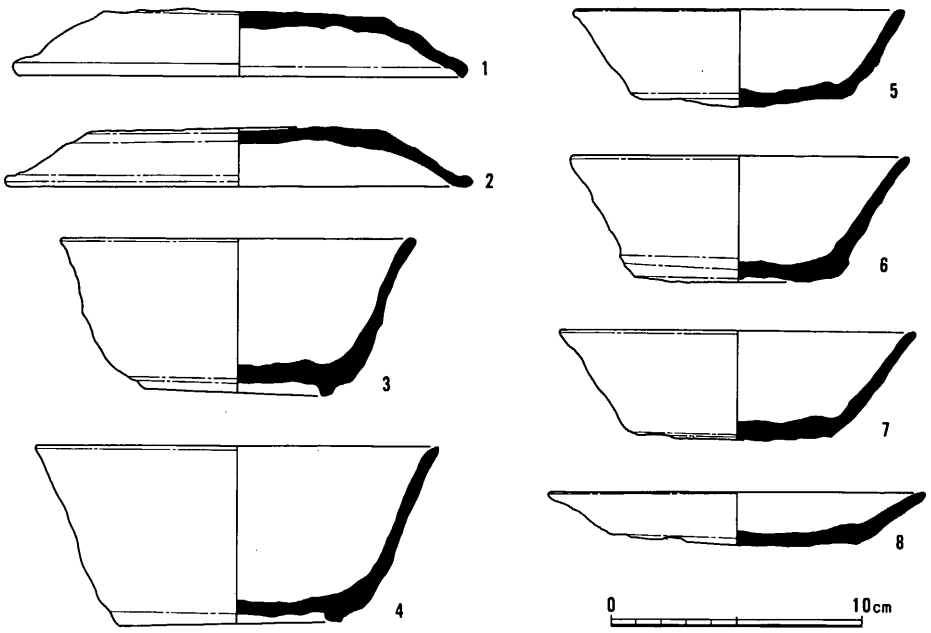
黒色土器

鉢（19）　内面だけを燻したものである。割れ口から脚が付くものと考えられる。外面の調整はわかりにくいが、3分の2程度ヘラケズリをしていると思われる。

石製品（第129図、図版79）



第97図　SK16実測図（1/30）



第98図　SK16出土土器実測図①（1/3）

管玉（4）　碧玉製で、長さ2.8cm、径1.0cmを測る。片面穿孔で、孔径は3.5×3.5mm、2×1.5mmである。

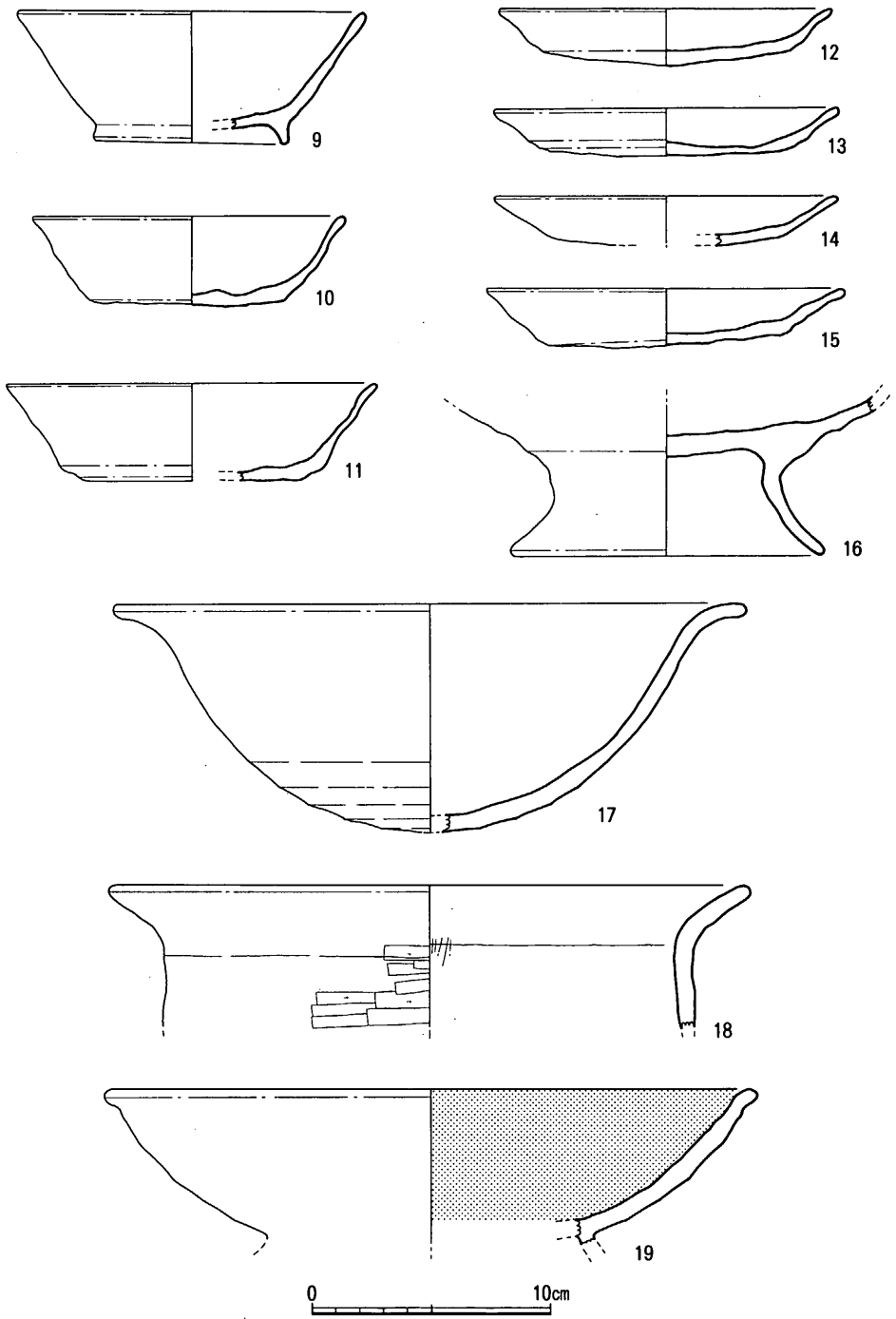
子持ち勾玉（5）　滑石製で頭尾両端を欠く。子に当たる部分が腹部では幅広の突起として、背部では刻み目として残る極めて退化した型式のものと思われる。穿孔が一個見られる。偏平なもので、研磨して制作したものである。

瓦（第131・132図、図版84）

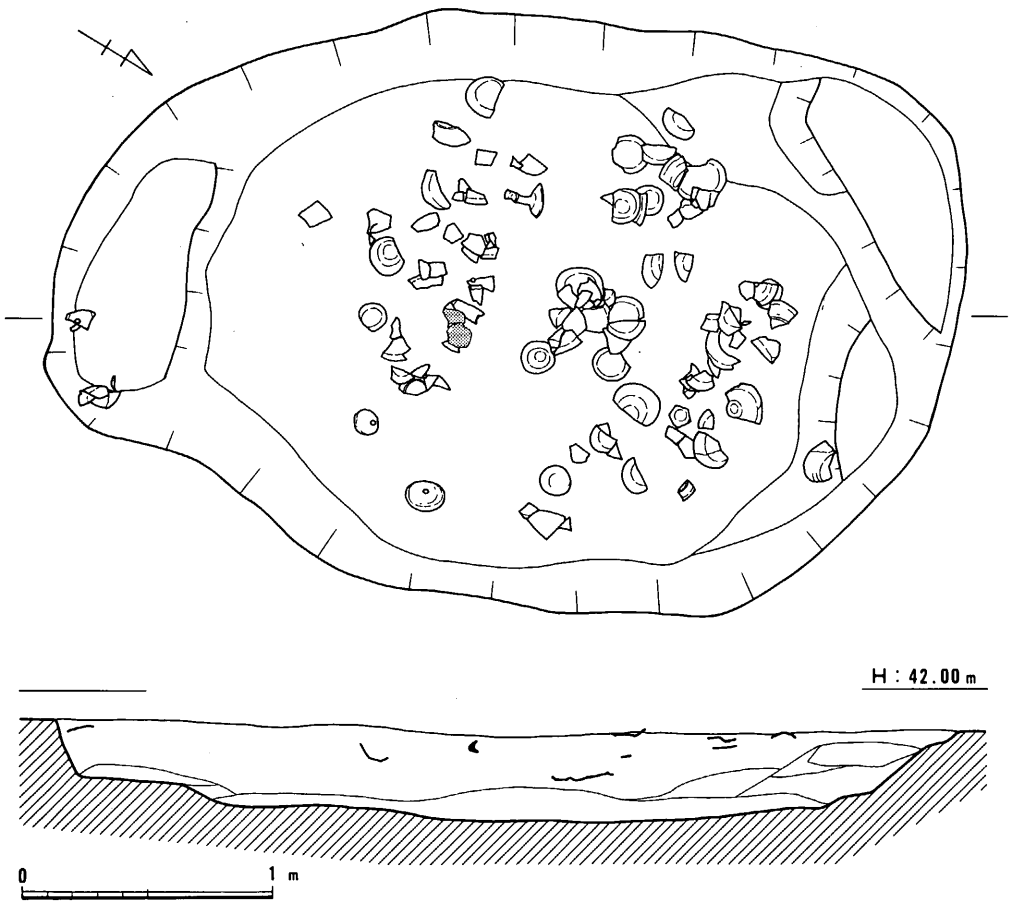
6は平瓦である。側面の一部が残る。側面はヘラ切りし、凸面に面取りをしている。凸面には格子目タタキがのこるが、凹面は磨滅のため調整不明である。土師質。8は熨斗瓦である。広端部を一部欠くがほぼ完形である。凹面には模骨痕と布目が残る。広端面付近を指で横方向にナデる。凸面には縦方向のヘラケズリと指でナデた痕跡が認められる。広端面は、凹面側に面取りをする。側面は両方とも凸凹両面の側に面取りをする。央端面を丸く作り、端縁直下の凹面側に沈線を施すことによって段状の部分を形成している。端縁部から凸面側で3.9cm、凹面側で3.5cm幅の部分は、最後にヨコナデで仕上げる。須恵質。

ＳＫ17（第100図、図版22）

調査区ほぼ中央で検出された。本遺構の西、約1.8mのところに18号住居跡がある。大溝と切り合い関係にあるが、ＳＫ17の方が新しい。形状は楕円形で、上端長軸長3.61m、短軸長2.34



第99図　SK16出土土器実測図②（1/3）



第100図　SK17実測図（1/30）

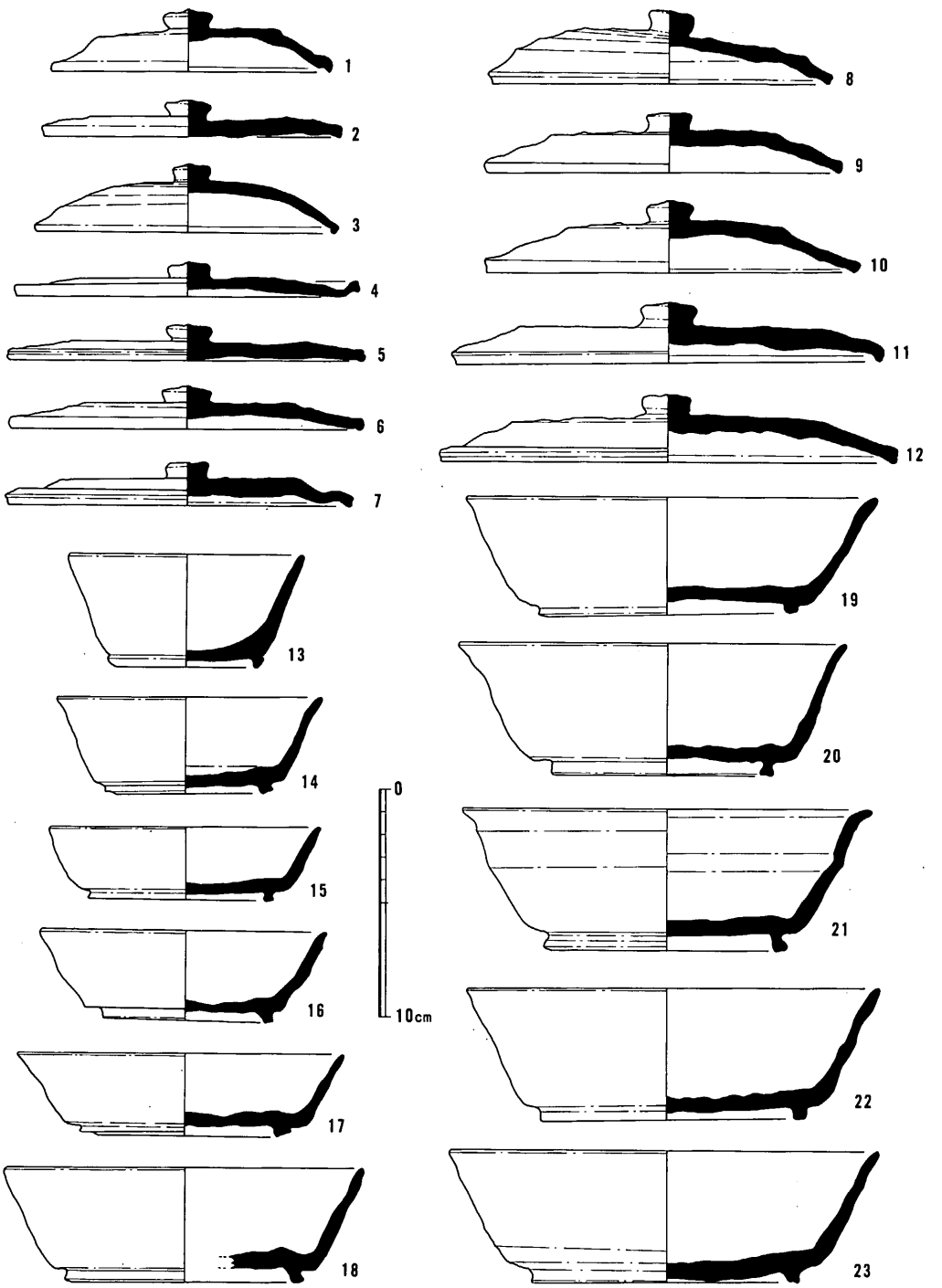
mを測る。底面には緩やかな凹凸が認められ、最も深い部分で0.33mをはかる。ピット等は検出されなかった。壁の立ち上がりは、北側で緩やかで南側では垂直に近い。遺物は埋土中より浮いた状態で出土した。本遺構においても、一部の遺物は検出面よりも盛り上がるような状態で検出された。

出土遺物（第101～103図、図版57・58・59）

須恵器

杯蓋（1～12）　すべてつまみがつく。つまみは1のようにやや高いものもあるが全体的に低くて小さいつまみである。器高の低いものも多い。口縁端部は3のように折り曲げの明瞭なものもあるが、丸く退化したものが多い。天井部は1と5を除いて回転ヘラケズリする。

杯身（13～26）　高台の付くものと付かないものがある。付くものは口径10.3～18.7cmとバラエティがある。高台は底端部よりやや内側に付けられる。底部外面はヘラ切り未調整かヘラ切

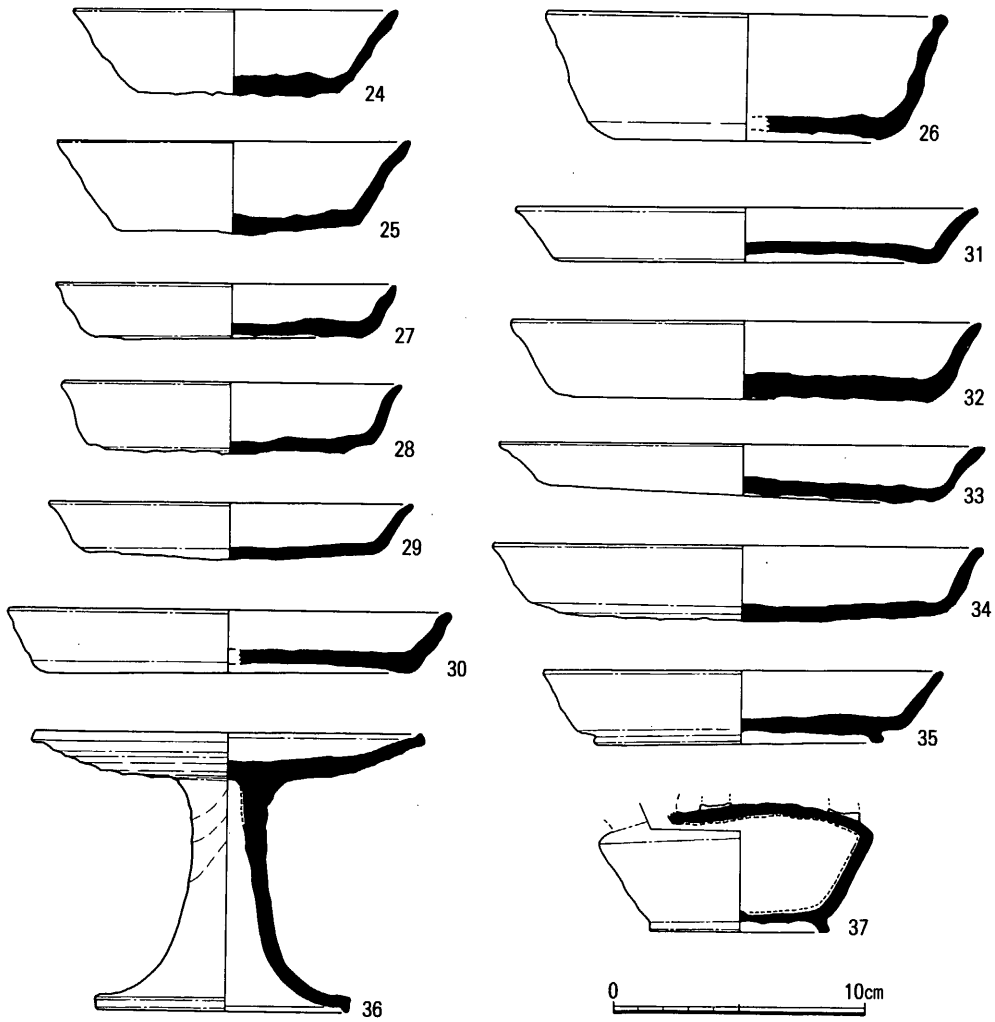


第101図　SK17出土土器実測図①（1/3）

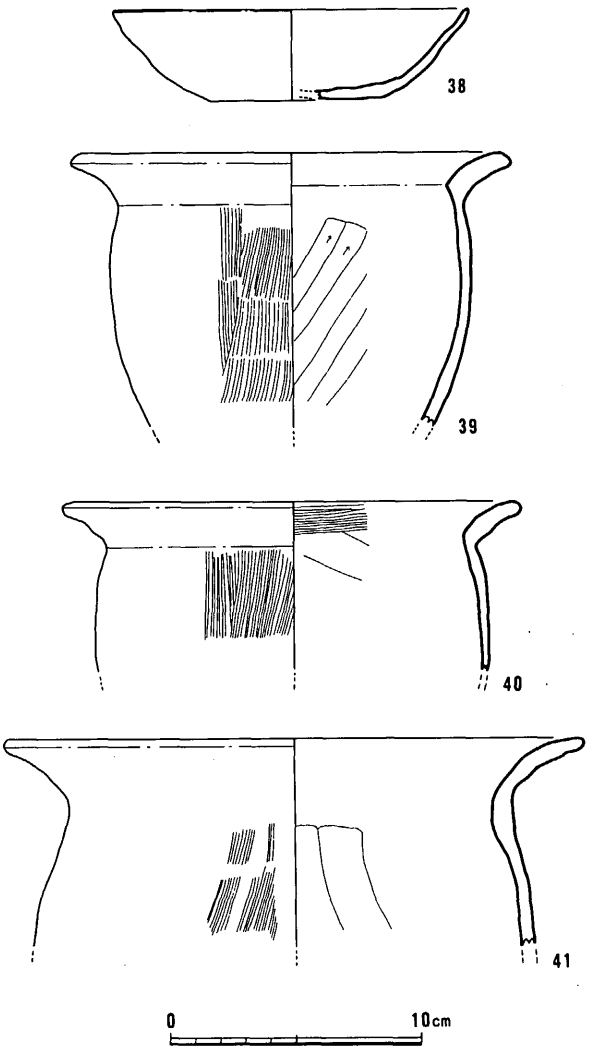
り後粗いナデである。21は体部中位に稜を持つ特徴的な形態を示す。内側を強くナデることによって押し出したものである。また、口縁端部を強く外反させたり、底部外面を回転ヘラケズリする点も他と異なっている。金属器を意識したものと考えられる。

高台の付かないものは、直線的に外方へ開きそのまま丸く終わる端部を持つ24・25と口縁端部の内側を肥厚させるやや大型の26とがある。底部外面は24がヘラ切り未調整、25・26がヘラ切り後ナデである。

Ⅲ（27～35）　35は高台が付くがその他は付かない。底部と体部の境の明瞭なものと丸く作られて不明瞭なものがある。33は焼成時のひずみが激しい。34の底部外面には板状圧痕がある。底部外面はヘラ切り後粗くナデる。



第102図　SK17出土土器実測図②（1/3）



第103図　SK17出土土器実測図③（1/3）

35は底端部からやや内よりに高台を付けたもので、作りの良いものである。底部外面はヘラ切り後軽くナデる。色調の違いから正位置で重ね焼きしたことがわかる。

高杯（36）　浅い杯部と長脚からなるものである。杯の口縁部内側に浅い沈線をめぐらし、端部をつまみ上げるように終わる。杯底部外面2分の1を回転ヘラケズリする。その他は回転ナデとナデで調整する。

平瓶（37）　口頸部を欠く。また、痕跡から角張った把手が付くものと考えられる。胴部の稜は鋭い。高台はしっかりしている。回転ナデで仕上げる。

土師器

杯（38）　底部外面を回転ヘラケズリする。体部外面は器面の荒れのため不詳だが、内面はヘラミガキする。

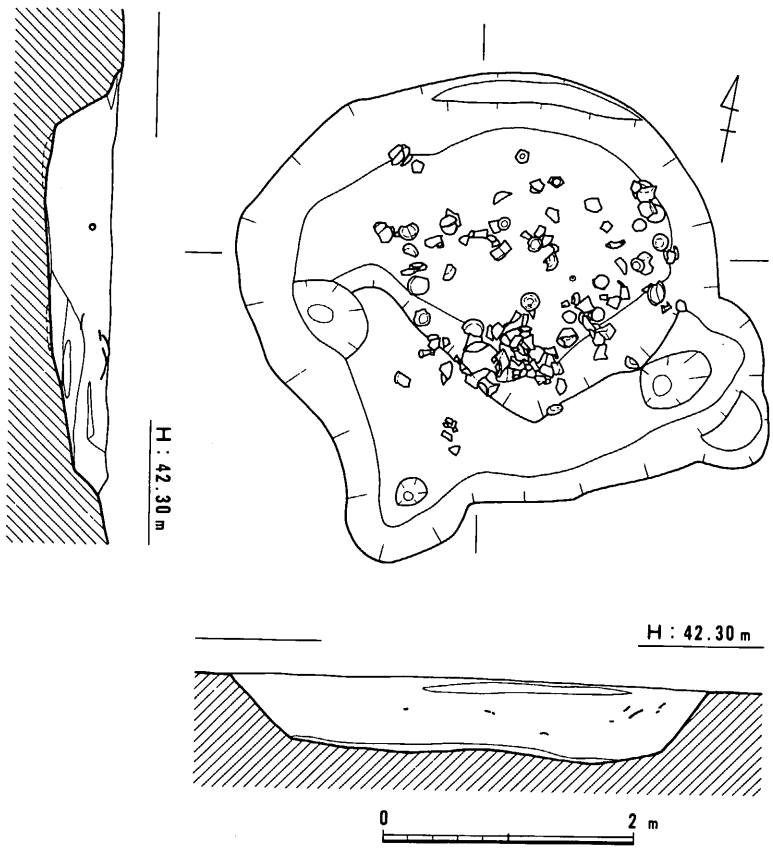
甕（39～41）　口縁部径が胴部最大径より大きいものである。胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリを行う。39・40の頸部は稜をなす。

石製品（第129図、図版79）

紡錘車（6・7）　滑石製である。6は断面台形を呈し、穿孔は片面穿孔である。上端径3.6cm、下端径4.4×4.3cm、厚さ1.4cm、孔径0.7cm、重さ約45gである。7は6より厚く、側面が丸味を持って作られている。上端径2.7cm、下端径4.0cm、厚さ1.9cm、孔径0.6～0.7cm、重さ約55gを測る。

SK18（第104図、図版23）

SK17の北西、約7mのところに位置する。また、本遺構の南、約6mのところには18号住



第104図　SK18実測図（1/60）

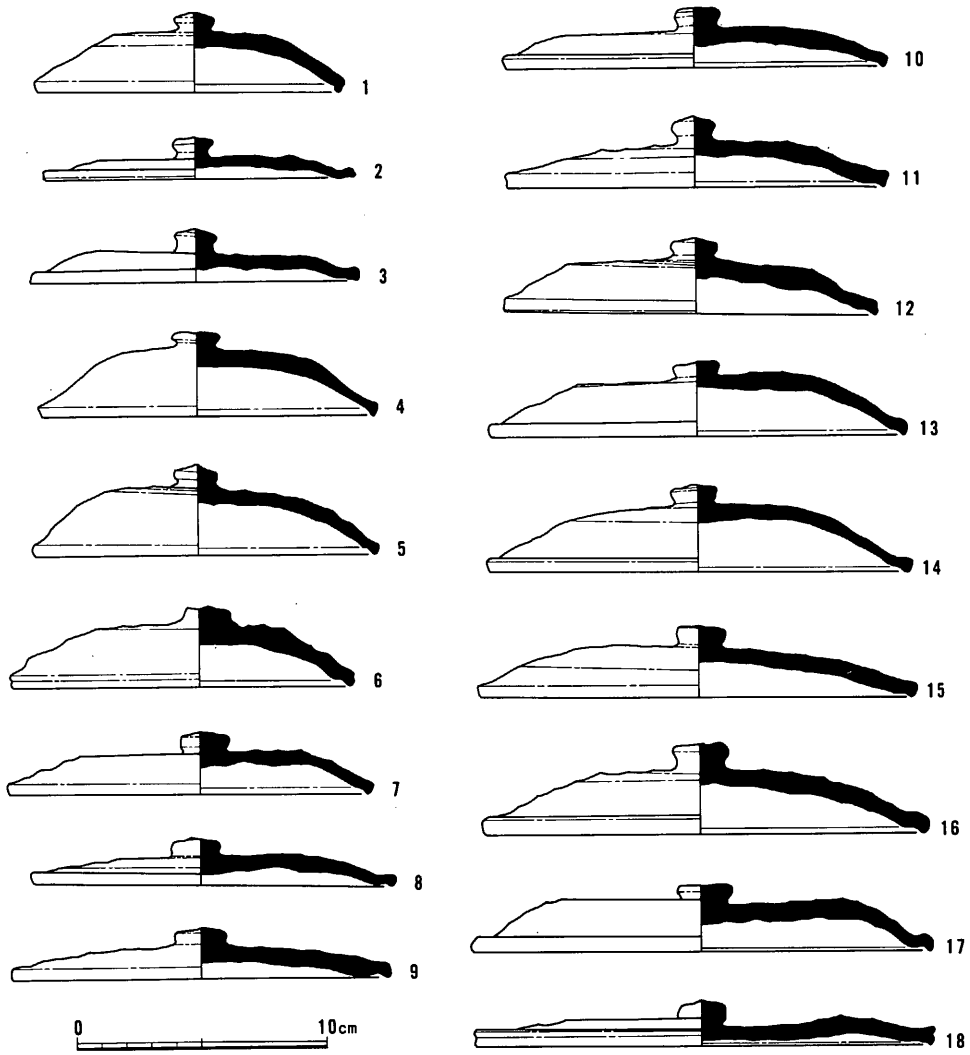
居跡がある。形状は2カ所が突出した円形とでも言えるであろうか。上端の最大値で4.57m×4.16mを測る。床面には凹凸があり、最も深い部分で、0.62mを測る。2カ所にテラスがある他、床面から3個のピットが検出された。壁の立ち上がりは比較的緩やかな方である。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。

出土遺物（第105～108図、図版59・60）

須恵器

杯蓋（1～18）　すべてつまみを持つものである。つまみの高さに違いはあるが総じてつまみの径は小さい。口縁端部の折れ曲げ方は小さい。天井部外面は1と11に回転ヘラケズリが見られる。6のように極端に中心部からずれた場所につまみを付けるものがある。

杯身（19～28）　高台を持つものと持たないものがある。高台を付けるものは底端部よりやや内側に付けられる。体部は直線的に外に開くもの（19・20・23）とやや内湾気味に開くものがある。底部外面はヘラ切り後ナデるものが多いが、19は未調整で粘土紐を巻いた様子が良くわかる。



第105図　SK18出土土器実測図①（1/3）

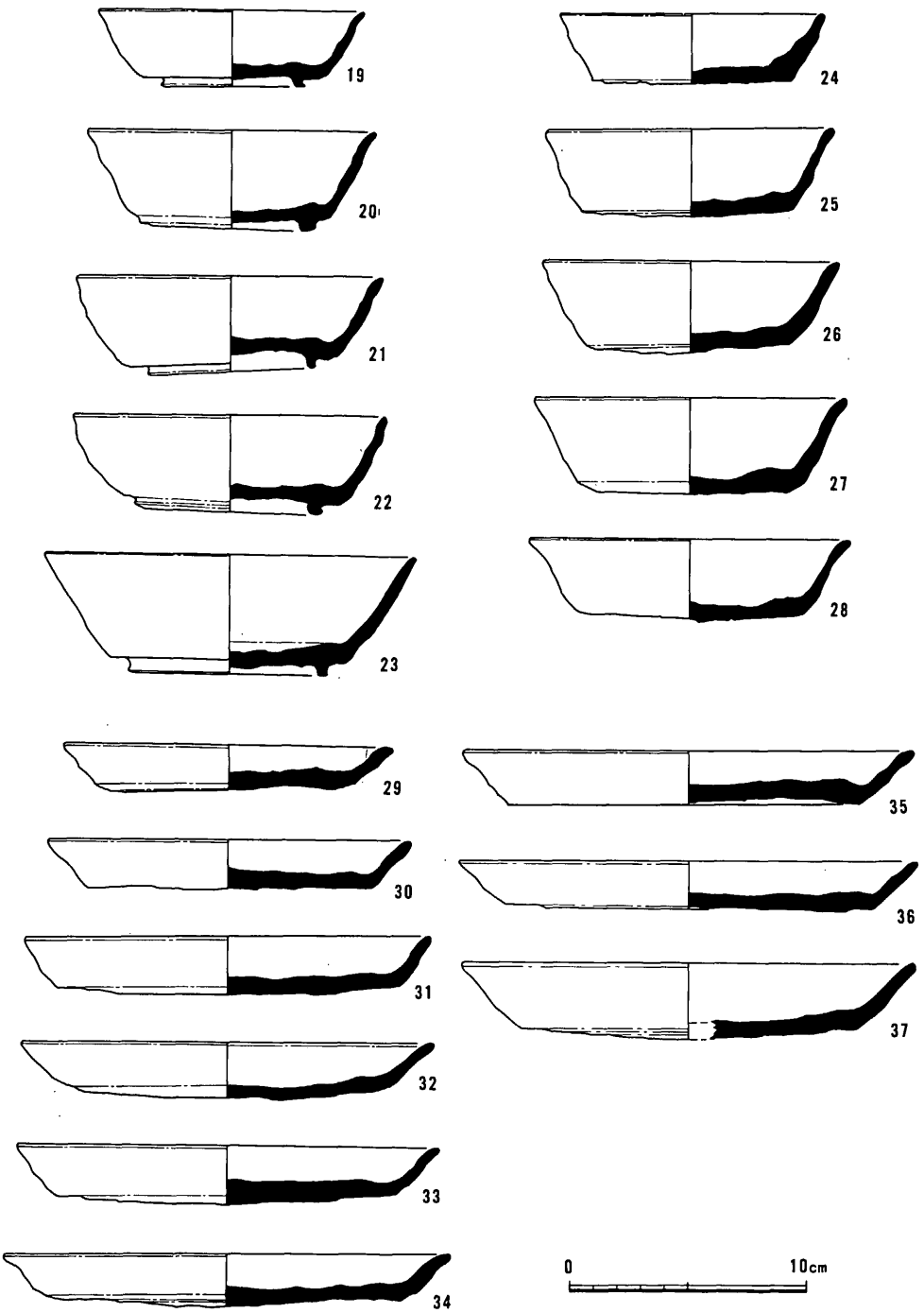
高台の付かないものは体部が直線的に外へ開くもので、底部外面はヘラ切り未調整のもの（24・28）とヘラ切り後ナデるものがある。26は焼けひずみが大きい。28には火だすきが見られる。

皿（29～37）　口径14.0～19.2cmの大きさのもので、底部が平坦なものとやや丸味を持つものがある。底部外面はヘラ切り後ナデる。36には板状圧痕がある。

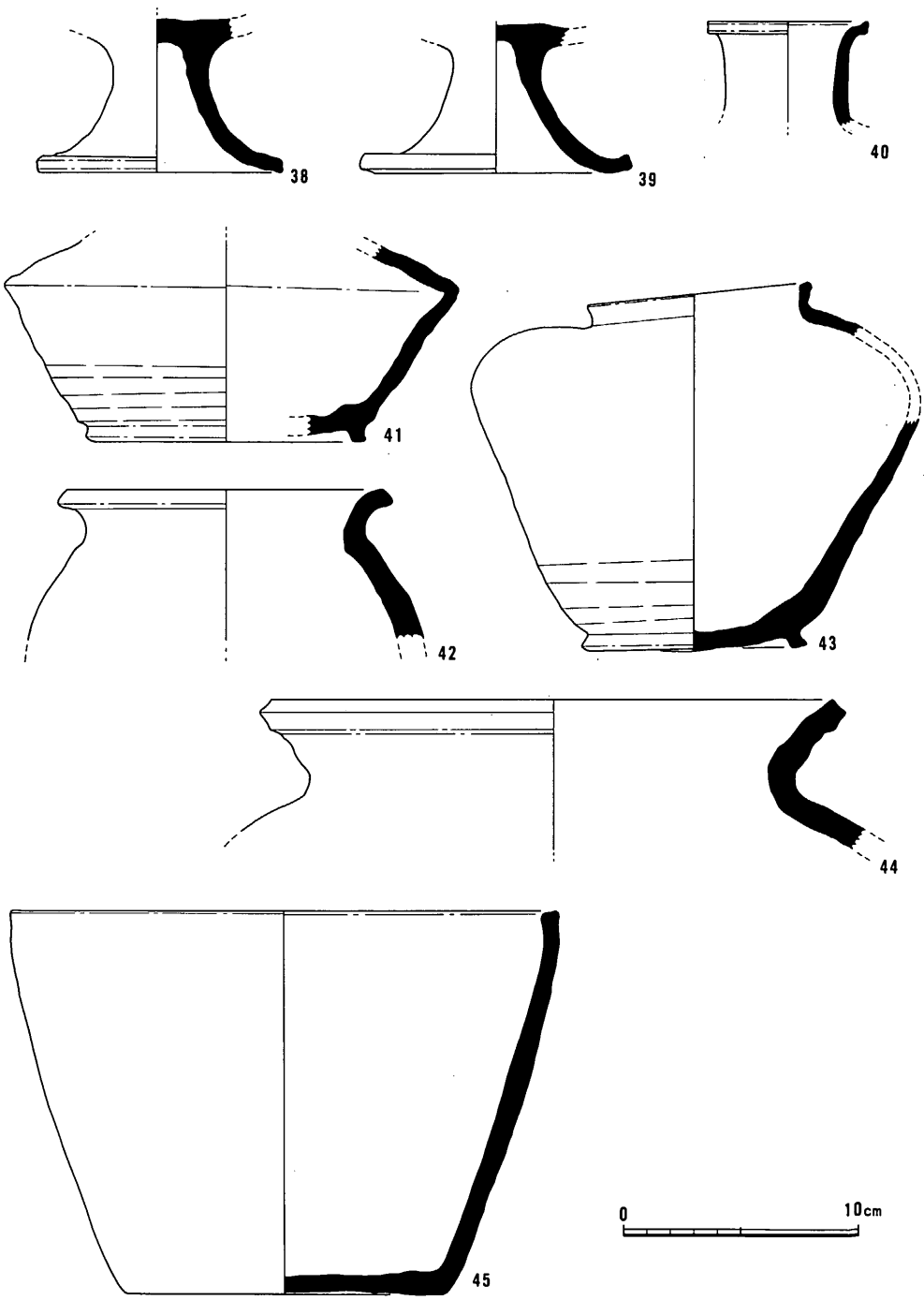
高杯（38・39）　脚部のみの破片で両者とも短脚である。回転ナデで仕上げる。

壺（40・42）　40は口頸部のみである。回転ナデで仕上げる。42は広口で頸部の短い壺である。

長頸壺（41）　胴部のみである。稜は鋭い。胴部下半と底部外面は回転ヘラケズリする。



第106図　SK18出土土器実測図②（1/3）

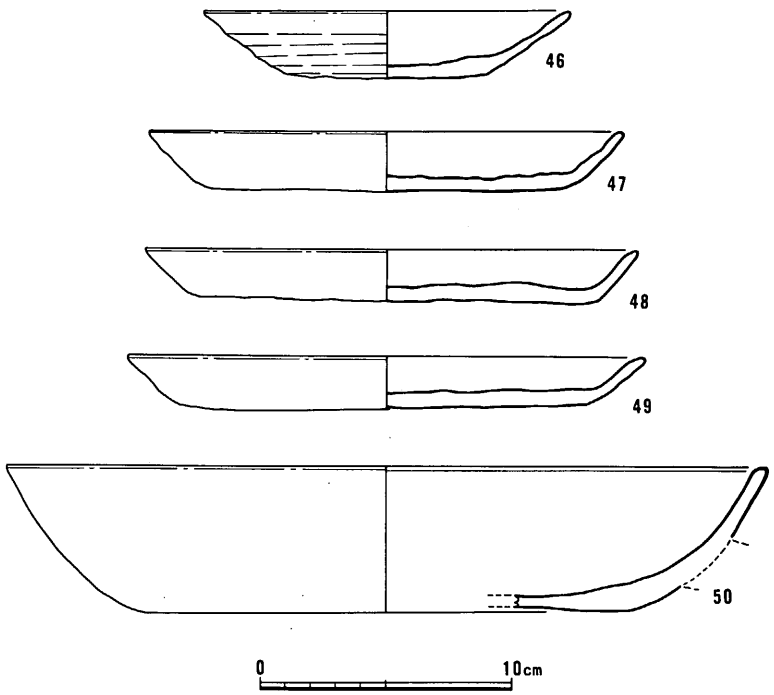


第107図　SK18出土土器実測図③（1/3）

短頸壺（43）　短い口頸部と肩の張る胴部からなるもので、胴部下半と底部外面を回転ヘラケズリしている。頸部の付け根付近に焼けひずみが見られる。

甕（44）　中型甕の口縁部破片である。端部は外側を厚く作る。

鉢（45）　平底とやや外開きの体部からなるもので、口縁端部内側をわずかに肥厚させている。



第108図　SK18出土土器実測図④（1/3）

調整は磨滅のため不詳であるが、胴部内面にはナデを行っている。

土師器

杯（46）　底部外面を回転ヘラケズリ、体部内外面をヘラミガキする。

皿（47～49）　底部外面をていねいに回転ヘラケズリする。磨滅のため調整不詳だが、体部内外面はヘラミガキしているものと思われる。

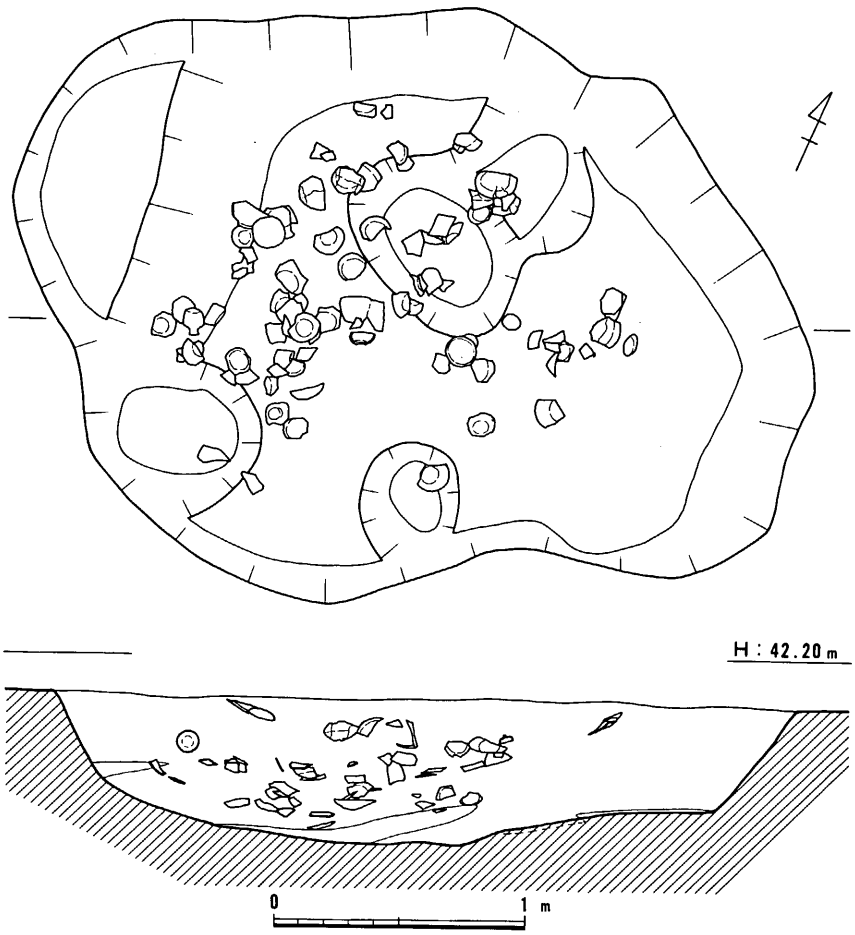
鉢（50）　皿を大型にしたような器形をなす。底部外面は回転ヘラケズリする。器面が荒れていて調整不詳であるが、体部内面はヘラミガキしているものと思われる。体部外面に把手がはずれたような痕跡がある。

ＳＫ19（第109図、図版23）

ＳＫ18の北、約1.6mのところにある。本遺構の西、約４mのところには19号住居跡がある。ややゆがんだ楕円形を呈し、上端長軸長3.23m、短軸長2.3mを測る。床面には凹凸があるが、中心部ほど深くなっており、最も深い部分で0.59mを測る。壁の立ち上がりは西側の方が若干緩やかである。床面では３個のピットが検出された。他に西側にテラスを持つ。遺物は埋土中から浮いた状態で検出した。

出土遺物（第110～112図、図版60・61・62）

須恵器

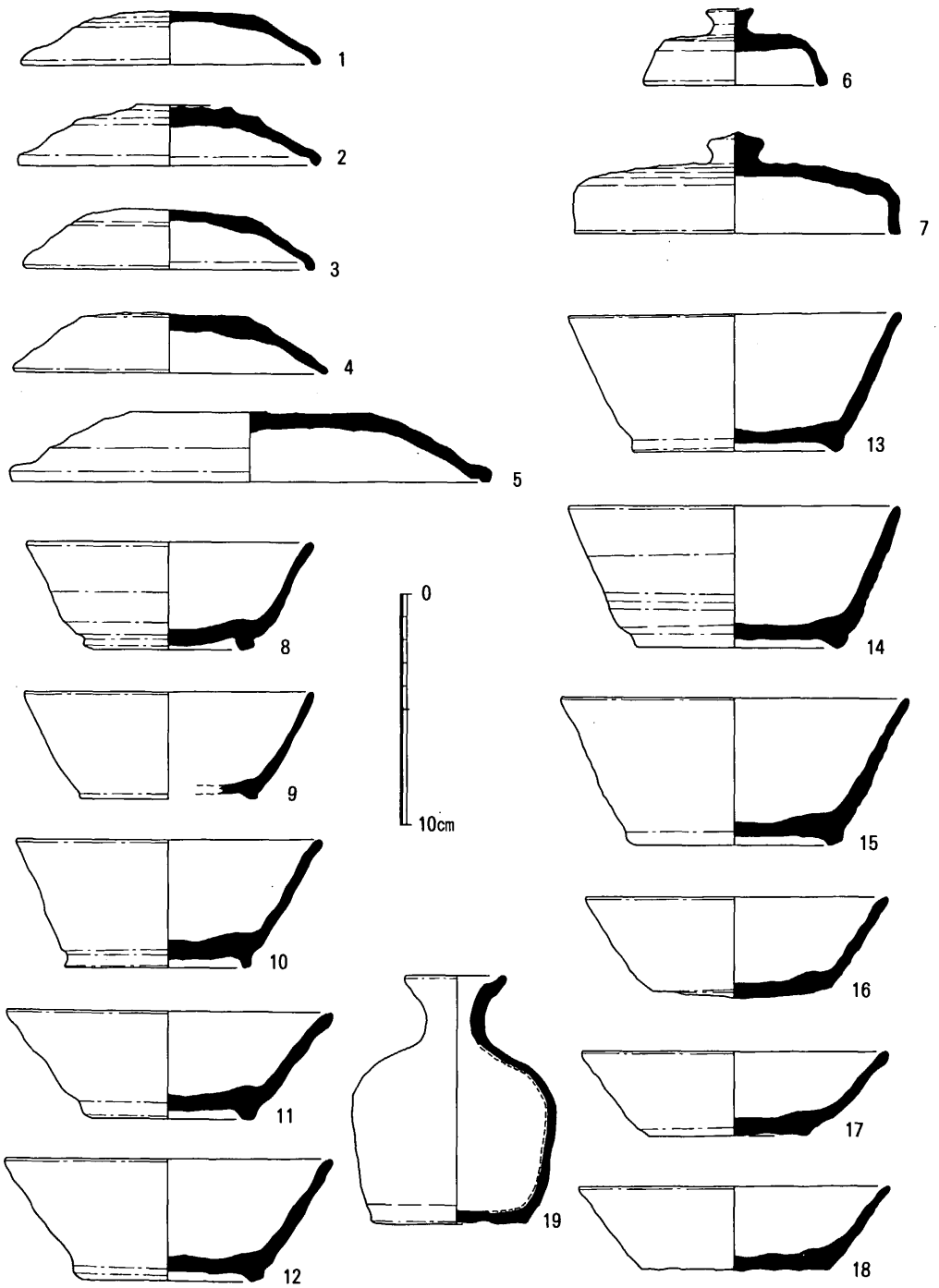


第109図　SK19実測図（1/30）

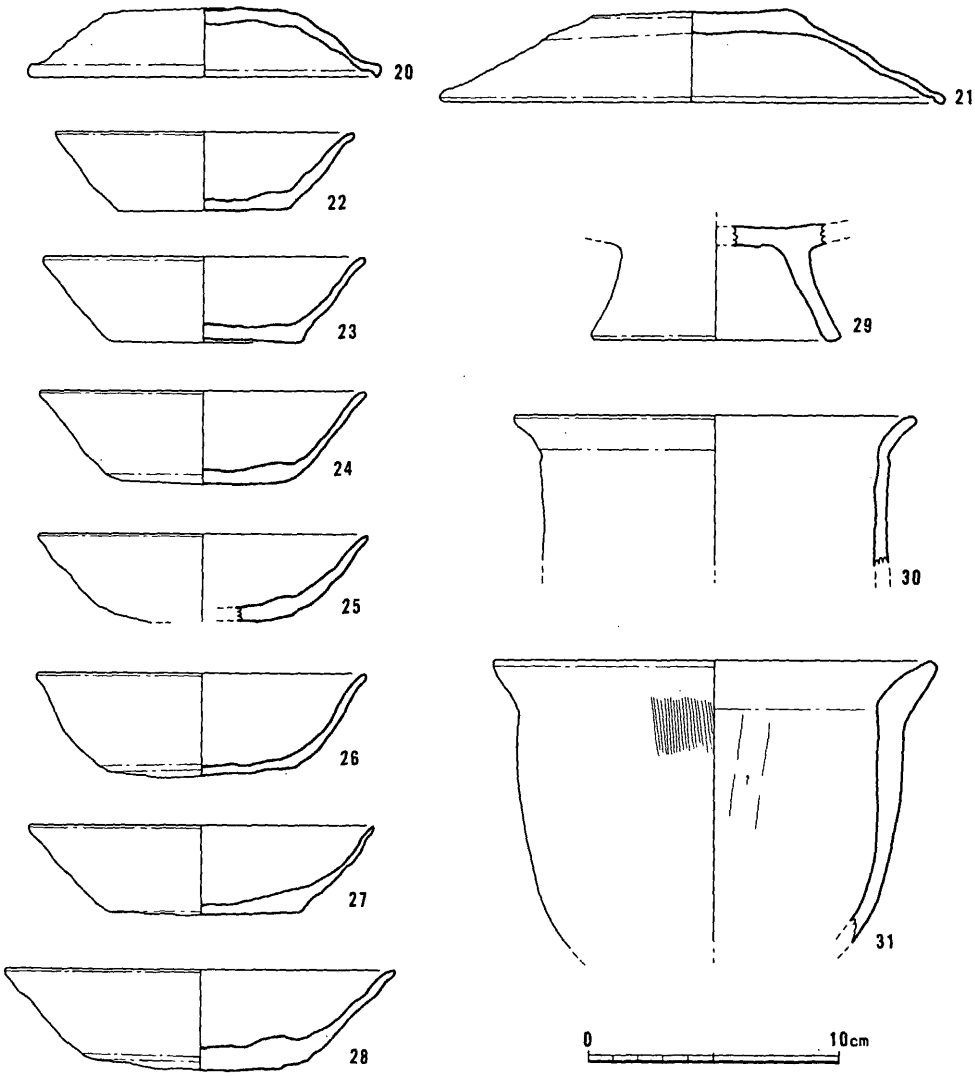
杯蓋（1～5）　すべてつまみのつかないものである。口縁端部は丸く作る。天井部外面はヘラ切り後ナデるもの（3～5）と未調整と思われるもの（1・2）がある。5は大型で砂粒の目立つものである。

蓋（6・7）　6は小型の蓋で、比較的高いつまみが付く。肩部を回転ヘラケズリし、その他を回転ナデ、ナデで仕上げる。7はほぼ直角に折れる体部を持つ蓋で、やはり天井部の肩部寄りを回転ヘラケズリしている。

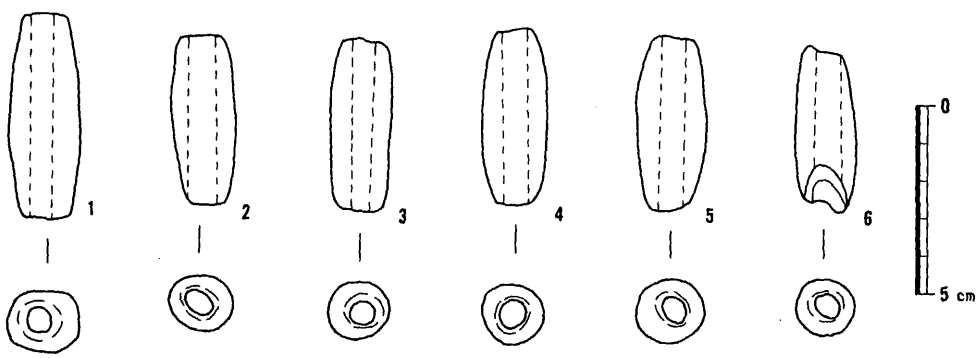
杯身（8～18）　高台の付くものと付かないものがある。8は底端部よりやや内寄りに付くが、その他は端部に付けられ、体部と高台が一体になったような形態を示す。底部はヘラ切り後ナデる。また、高台貼り付け時に貼り付け部分だけでなく広くナデるものがある。しかし、高台の貼り付け方は雑なものが多い。



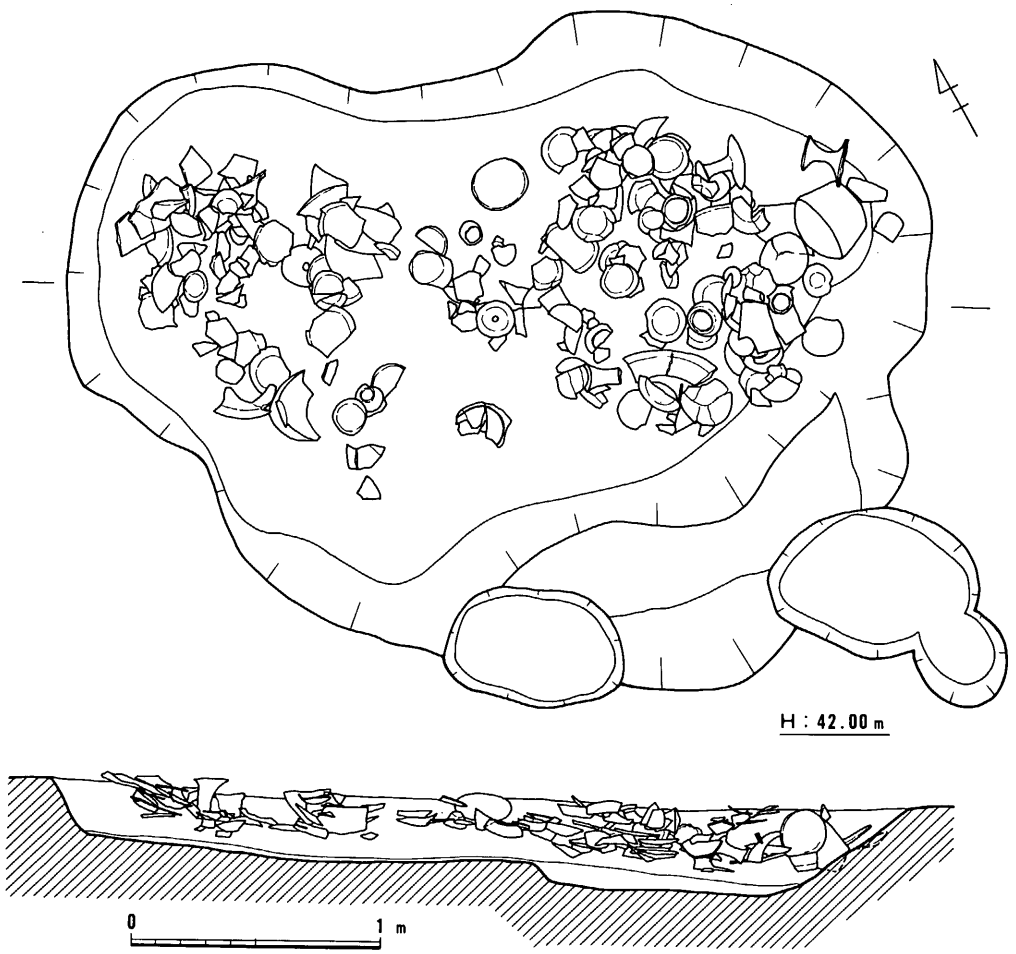
第110図　SK19出土土器実測図①（1/3）



第111図　SK19出土土器実測図②（1/3）



第112図　SK19出土土製品実測図（1/2）



第113図　SK20実測図（1/30）

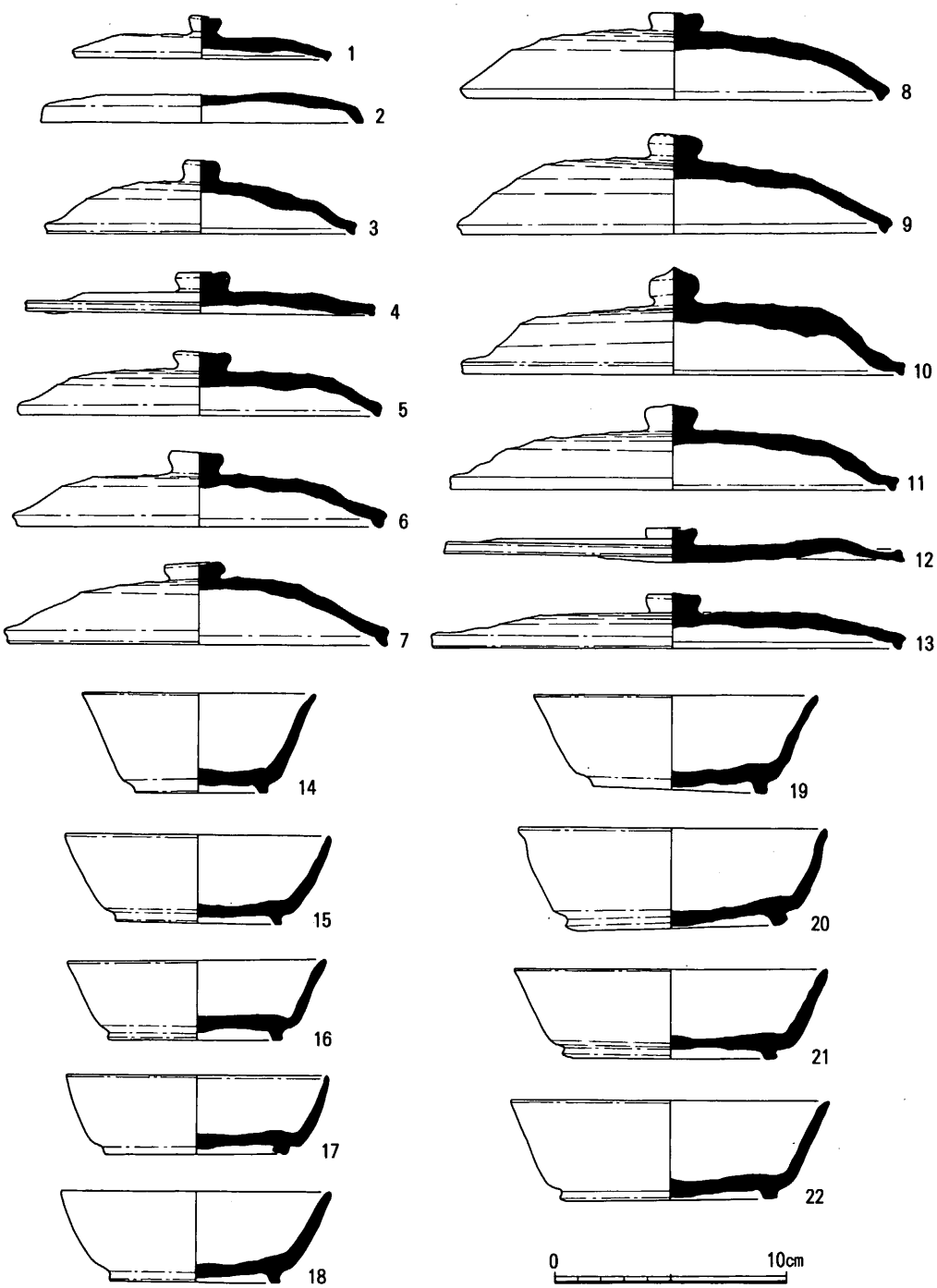
高台のないものは直線的に外に開く。底部外面はヘラ切り後ナデる。

瓶子（19）　口縁部の一部を欠くだけで完形に近い。底部はヘラ切り未調整で、その他は回転ナデである。底部は焼成時に粘土紐のつなぎ目が離れ、容器としての機能は果たせない。

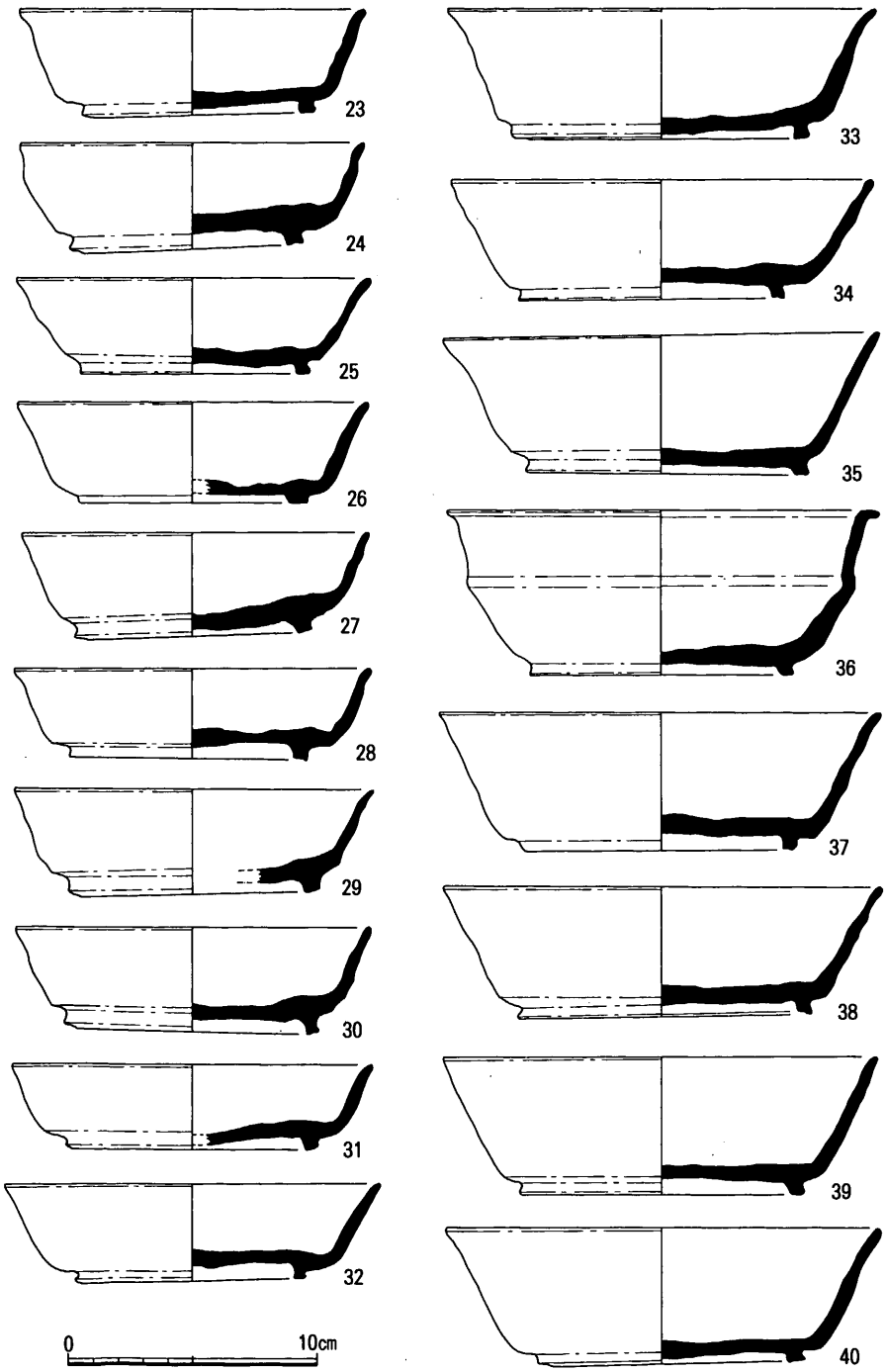
土師器

杯蓋（20・21）　つまみのつかないものである。天井部はヘラ切り後ナデる。21は大型の蓋で口縁端部内面に沈線が入る。

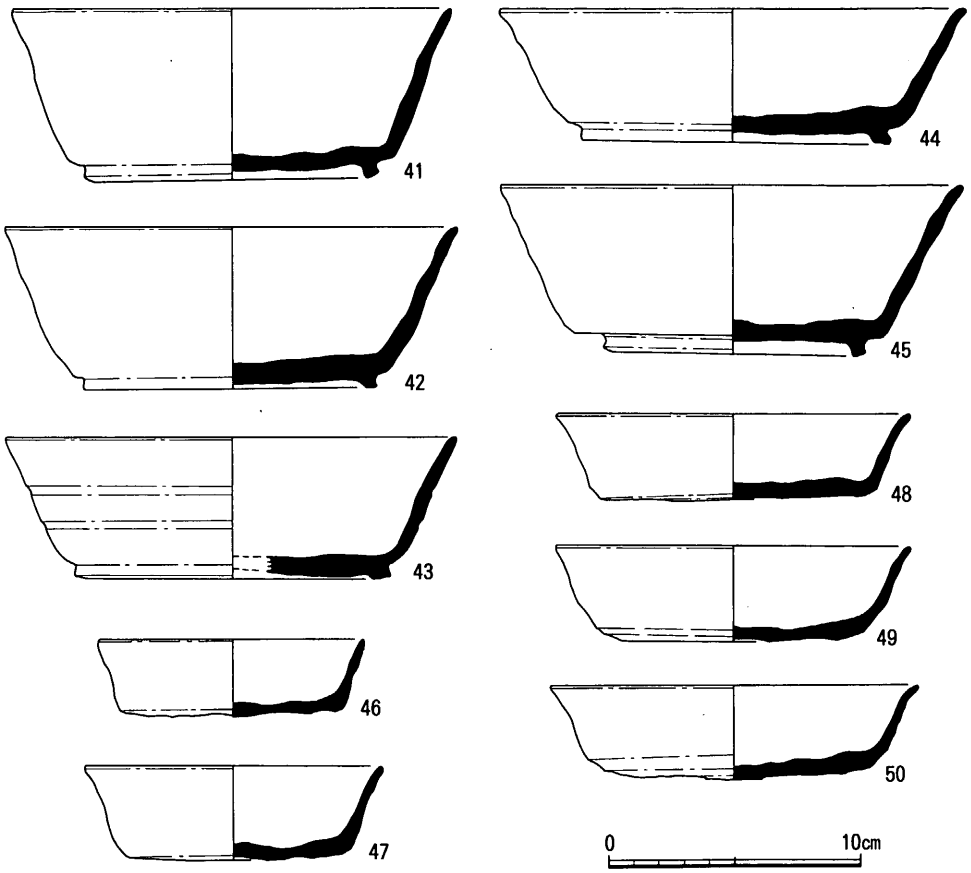
杯（22～28）　体部と底部の境の断面形から2種類に分けられる。1つは25～27のように体部と底部の境が丸味を持つもので、その他はやや角張るものである。前者特に25は前代の杯に見られた底部を回転ヘラケズリする底部の小さい杯に似た形態を示す。全体的に底部外面はヘラ



第114図　SK20出土土器実測図①（1/3）



第115図　SK20出土土器実測図②（1/3）



第116図　SK20出土土器実測図③（1/3）

切り後ナデる。22～24、28は淡褐色、橙色を呈し、技法的には須恵器と同様である。このため須恵器焼成不良品と区別のつきにくいものである。

脚付鉢（29）　脚部のみの破片である。ヨコナデを行っている。

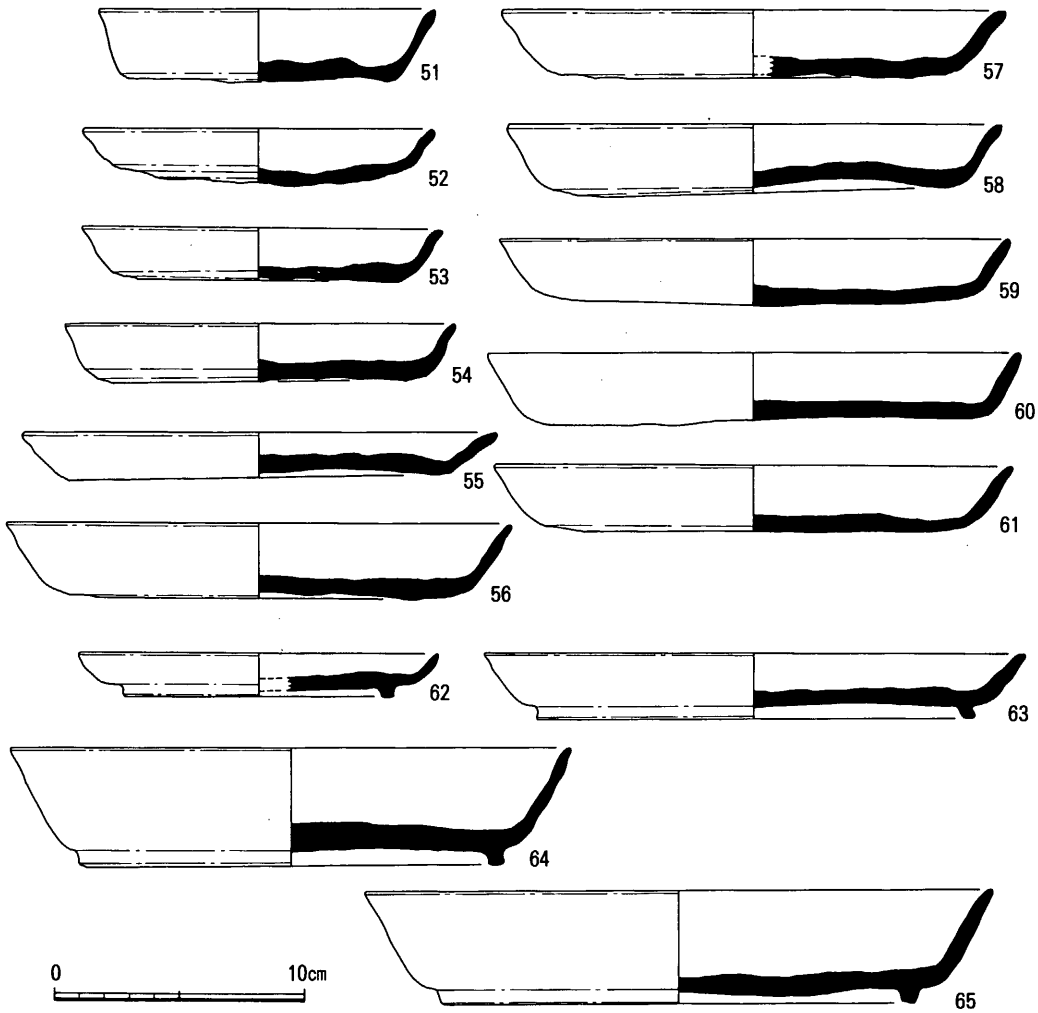
甕（30・31）　30は短く外反する口縁部を持つもので、外面には胴部の境に沈線をめぐらす。内外面ともヨコナデを行う。31は口縁部があまり外反しないもので、胴部外面をハケメ調整、内面をヘラケズリする。

土製品（第112図、図版79）

土錘（１～６）　紡錘型の土錘で、孔が長軸方向に通る。１はやや大きく長さ５cmを越えるが、他は4.5cmほどである。孔の直径は約0.6cmである。指押さえで整形している。

ＳＫ20（第113図、図版24）

ＳＫ17の東、約５ｍのところに位置する。また、この位置は20号住居跡と22号住居跡のほぼ中間にもあたる。南側で２基のピットと切り合い関係にあるが、ＳＫ20の方が古い。ゆがんだ



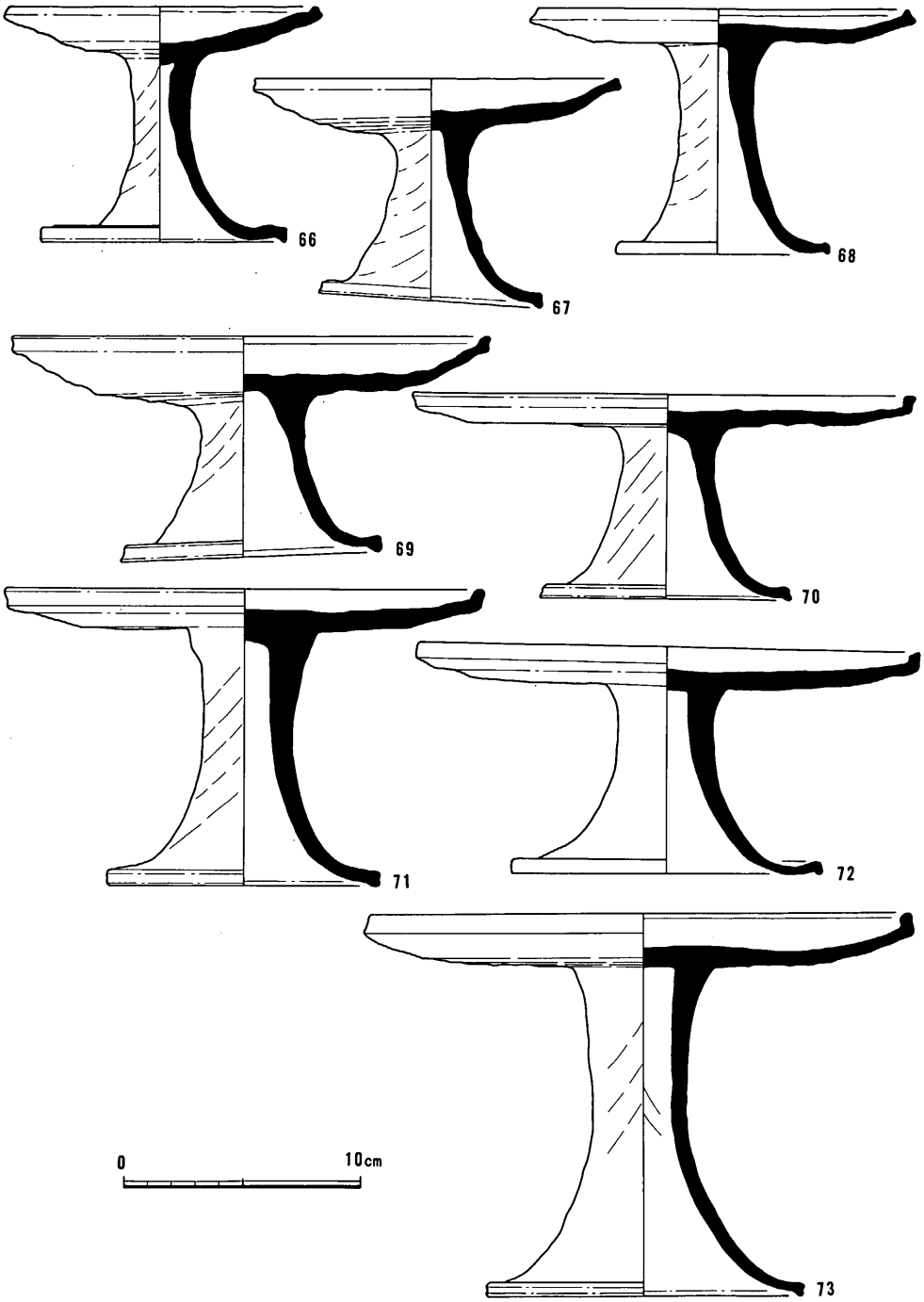
第117図　SK20出土土器実測図④（1/3）

楕円形を呈し、上端長軸長3.45m、短軸長2.55mを測る。床面はほぼ平坦であるが、段がつく部分がある。深さは0.23m～0.33mほどで、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。南側にテラスがある他は、ピット等は検出しなかった。遺物は埋土中から浮いた状態で大量に出土した。一部の遺物は、遺構検出面より盛り上がるような状態で検出された。

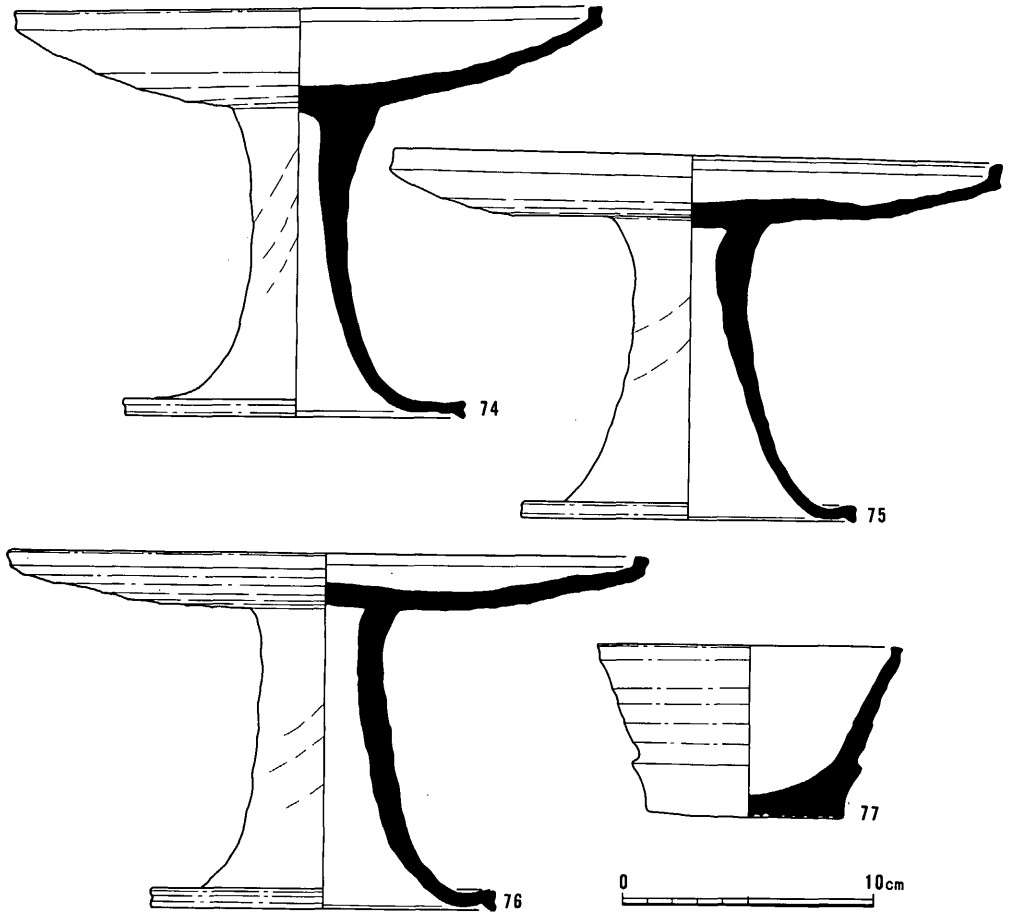
出土遺物（第114～124図、図版62～67）

須恵器

杯蓋（1～13）　つまみのないもの（2）と付くものがある。2は口縁端部の折り曲げ方がつまみの付くものと比べ長く、様相を異にしている。天井部外面はヘラ切り後ナデる。その他はつまみの付くものであるが、10は形態が違う。10を除いたものはそれほど高くなく、またそれ



第118図　SK10出土土器実測図⑤（1/3）



第119図　SK20出土土器実測図⑥（1/3）

ほど大きくないつまみを付ける。口縁端部の作りはあまりしっかりしていない。天井部外面は回転ヘラケズリする。10は宝珠型のつまみを持ち、天井部も高く、回転ヘラケズリの範囲も広い。他とは形態、作りの違うもので、杯身36とセットになる金属器写しの蓋と考えられる。

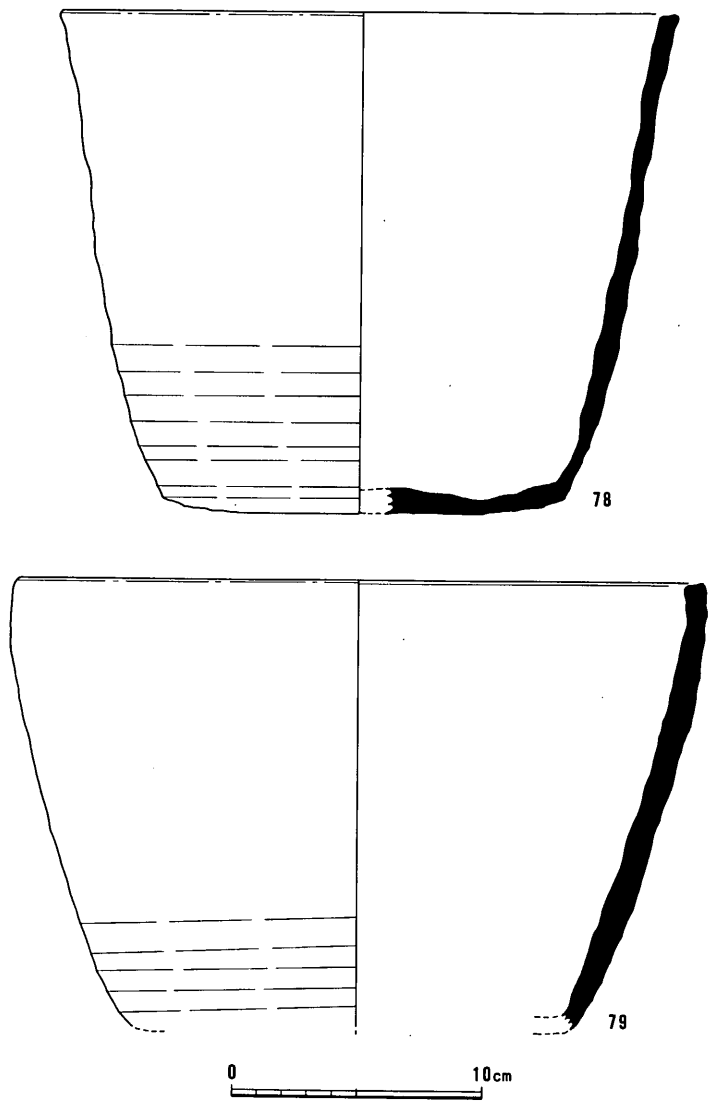
杯身（14～50）　高台の付くもの（14～45）と付かないもの（46～50）がある。付くものは口径が10.1～18.6cmと幅広いが、14cm前後と18cm前後がそれぞれ約30％、12cm前後が10％を占め、その前後を含めると、それ以上となり、それらに収れんすることがわかる。また、径高指数(器高÷口径×100)は30ぐらいが平均値であるが、高いものは、口径の小さなものと大きな部類に認められる。技法的には、底部外面をヘラ切り後ナデ、体部内外面は回転ナデ、底部内面はナデを行う。

36は形態・技法の点で他と異なる。口縁端部は極端に外反させ、平坦面を作り出す。体部中位では内面から強く押し出すことによって稜を作る。体部内外面のほとんどを回転ナデ、底部

内面をナデ、底部外面と体部下半を回転ヘラケズリする。蓋11とセットを成すと考えられ、前述したように金属器写しであろう。

高台の付かないものは数が少ない。口径が14cm前後のものとそれより小さいものがある。底部外面はヘラ切り後ナデを行う。ナデには粗いものとややていねいなものがある。

皿（51～65）　高台の付かないものと付くものがある。前者は口径13～16cmのものと19～22cmのグループがある。底部外面を回転ヘラケズリするものが多く、しないものは51～53、55・56である。大きなものにヘラケズリを行う率が高いことになる。

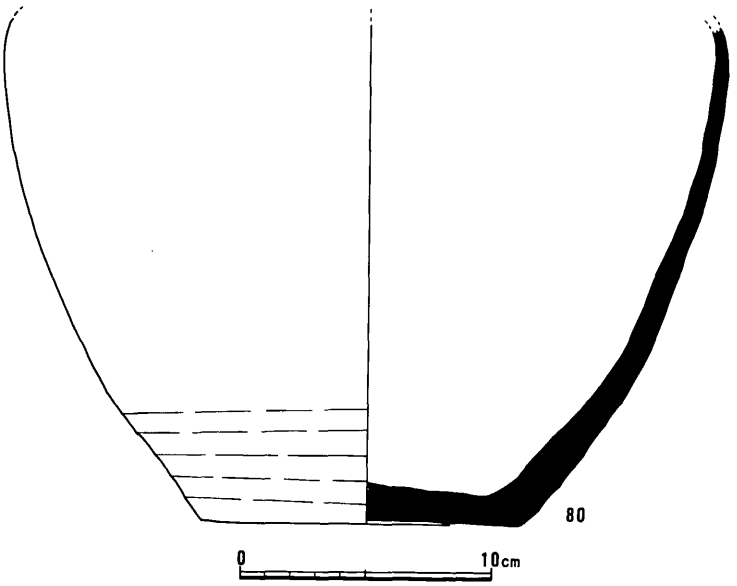


第120図　SK20出土土器実測図⑦（1/3）

高台の付くものも口径に違いがあるが、低いもの（62・63）とやや高いもの（64・65）がある。底部外面は回転ヘラケズリする。

高杯（66～76）　法量による違いが見られる。口径16cm以下のもの（66～68）は器高10cm前後で、口縁端部を断面三角形に作る。口径20cm以上のものは器高10cm以下の短脚類（69・70・72）、14cm以上の長脚類（73～76）、中間のもの（71）に分けられ、杯部の口縁部はほぼ直角に折り曲げて端部を角張らせる。杯部外面は回転ヘラケズリする。その他は回転ナデ、ナデである。66～68の杯部破片は蓋杯と見間違いやすいであろう。

すり鉢（77）　底部が円板状をなさず、鉢を二段に重ねたような形態をなす。底部外面は四角く細い工具で刺突をくりかえしている。貫通はしない。体部内外面は回転ナデ、底部側面は回転ヘラケズリ、内面は手持ちのヘラケズリを行う。



第121図　SK20出土土器実測図⑧（1/3）

鉢（78・79）　大型の鉢である。78は底部外面と体部下半を回転ヘラケズリする。79は底部が完全にはずれている。78より口径が大きいが、調整は同じである。

壺（80）　平底の胴部下半のみである。胴部下半と底部外面を回転ヘラケズリする。その他の胴部外面は格子目タタキの上をナデる。内面には同心円文の当て具痕が残り、底部とその周囲はナデを行う。

甑（81）　須恵器の甑は比較的珍しい。体部底近くを回転ヘラケズリする他は回転ナデで調整する。底部は上げ底風に底を作り、ヘラ状工具で楕円形の孔を抜き取っている。完形であれば12～13個の孔を持つものであろう。焼成は良い。

土師器

皿（82）　3分の2ほどの破片であるが、全体をヘラミガキしている。

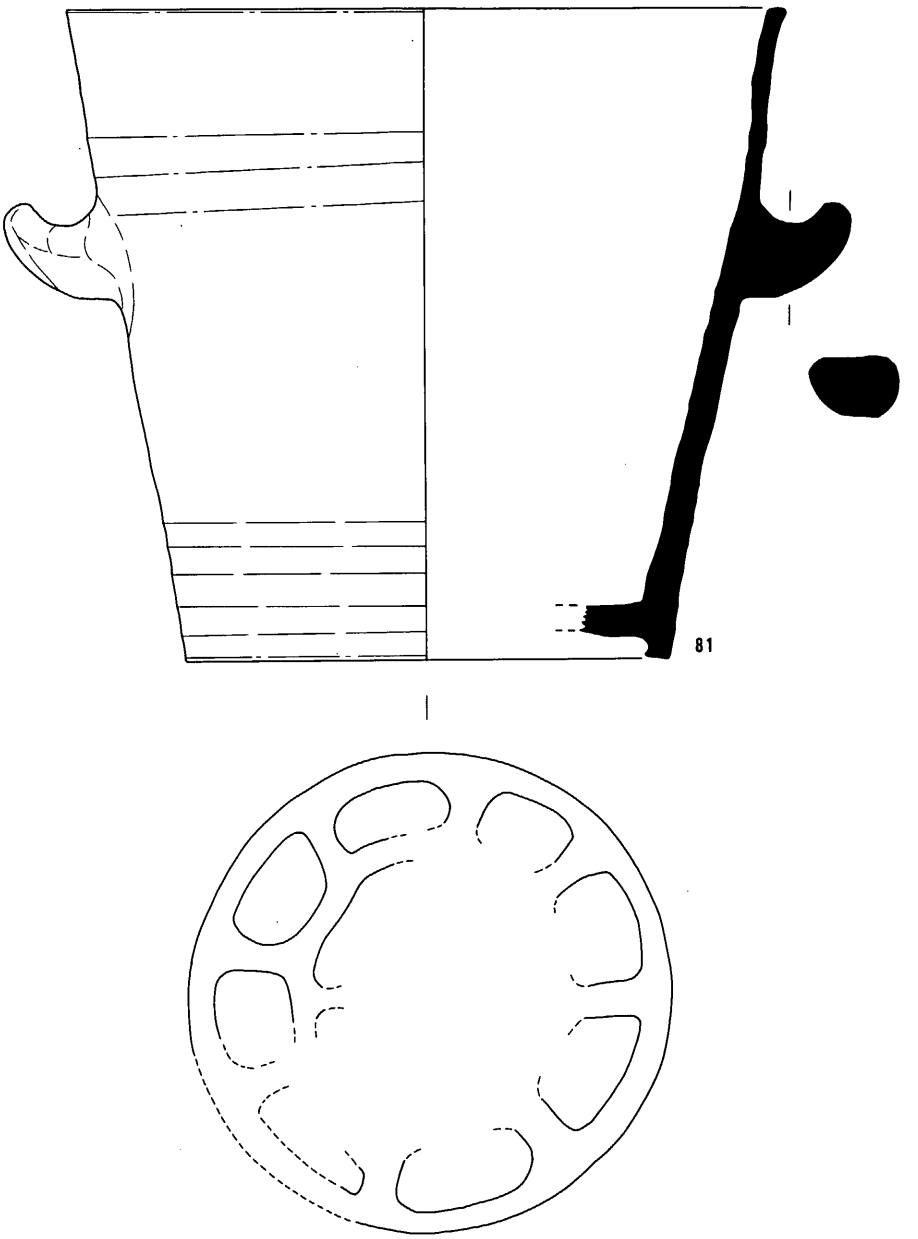
高杯（83）　大型の高杯で、66～76の須恵器高杯よりも大きい。杯部の口縁部は上側に折り曲げるが、端部は丸く終わる。杯部内外面はヘラミガキする。脚部は回転ナデである。

鉢（84）　大きく外反する口縁部を持つもので、底部を欠くが丸底になるものであろう。口縁部下半から胴部外面は縦方向のハケメ調整、口縁部上半はヨコナデ、内面は横方向のハケメ調整、胴部内面はヘラケズリし、口縁部と胴部の境は稜をなす。

甕（85・86）　比較的長く外反する口縁部と長めの胴部からなるもので、部位ごとの調整は84の鉢と同様である。

鉄器（第130図）

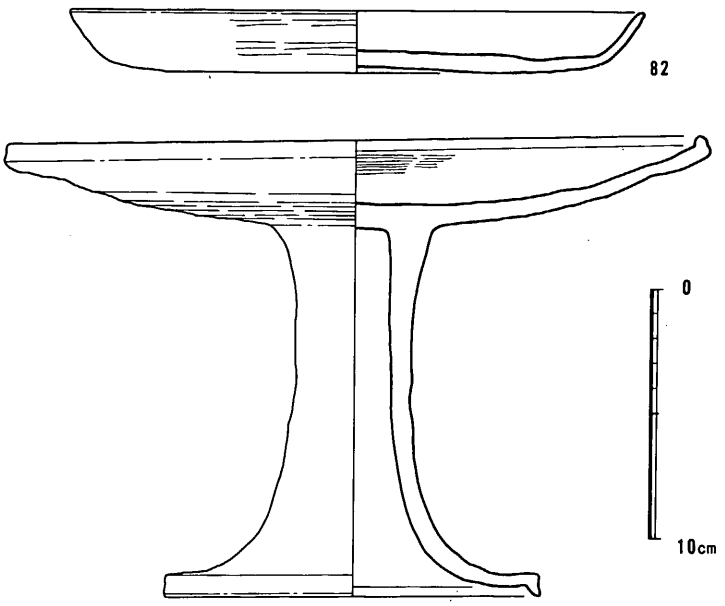
鏃（4）　錆化著しく詳細は不明であるが、断面方形を呈するものと考えられる。



第122図　SK20出土土器実測図⑨（1/3）

瓦（第131図）

7は側面が残る。凸面側と凹面側の両方を面取りしている。凸面は縦方向のヘラケズリ、凹面は模骨痕と布目が残る。土師質で、胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。



第123図　SK20出土土器実測図⑩（1/3）

ＳＫ21（第125図、図版21）

調査区の南東部に位置する。本遺構のすぐ北側には22号住居跡があり、最も近い部分の距離は0.19mである。平面形は楕円形を呈し、上端長軸長2.9m、短軸長1.52mを測る。壁から底面にかけて緩く弧を描くような断面形を呈し、壁と床の区別がつきにくい部分があった。底面までは、最も深い部分で0.54mを測る。西側にテラスがあるが、その他にピット等は検出されなかった。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。

出土遺物（第126図、図版67・68）

須恵器

壺（1）　長胴の耳付壺の破片と思われる。内外面回転ナデを行う。

土師器

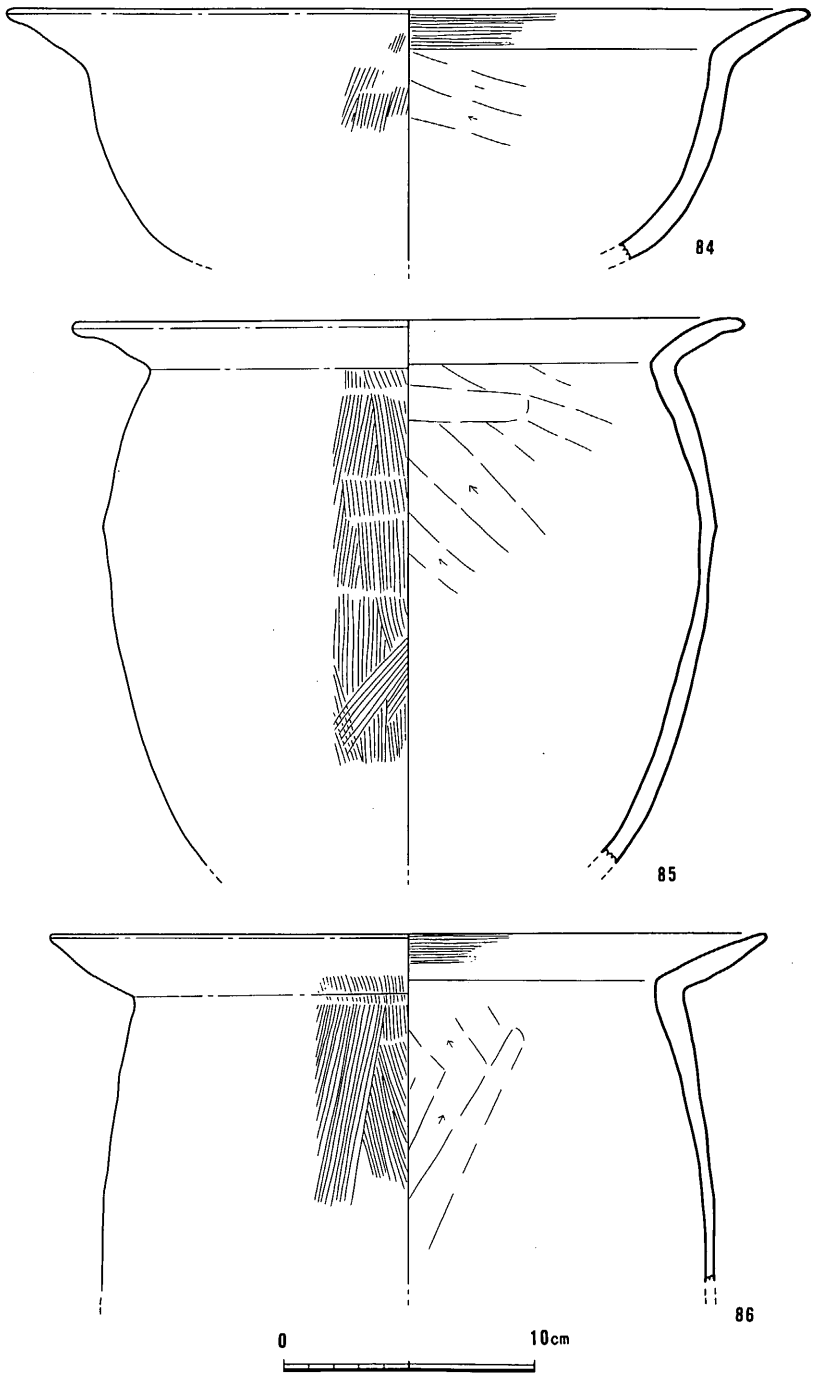
蓋（2）　口縁端部を丸く作る。器高の低いものである。天井部はヘラ切り未調整である。

杯（3～6）　3～5は直線的に外開きのもので、3・4は底部ヘラ切り未調整である。5はヘラ切り後粗くナデる。6は体部が屈曲するもので、底部外面はヘラ切り後ナデる。7の皿と似ているが、器高の点で杯に入れた。

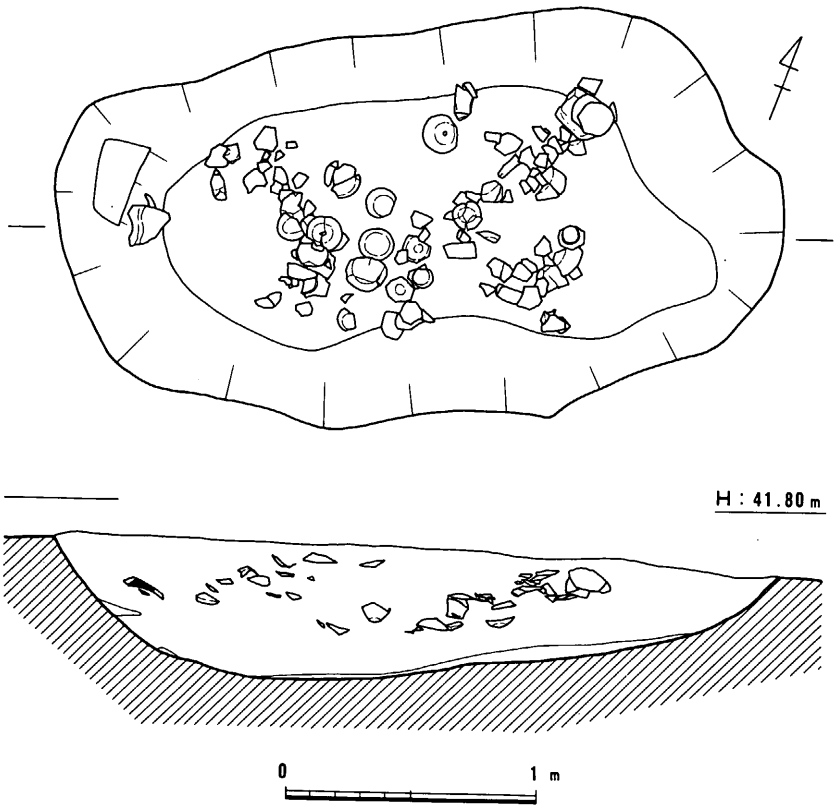
皿（7）　蓋とするか皿とするか迷うものである。底部外面はヘラ切り後ナデる。器面が荒れているが、回転ナデを行っている。

椀（8・9）　8は外へふんばる高台を付け、丸い体部を持つものである。調整は器面の荒れのため不詳である。9は高台の高い椀の底部のみの破片で、調整等は不明である。

脚付鉢（10）　高い脚の付くもので、上には椀を大きくしたような鉢がのるのではないかと思われる。



第124図　SK20出土土器実測図⑪（1/3）



第125図　SK21実測図（1/30）

黒色土器

椀（11～13）　すべて内面だけを燻すA類の椀である。口縁端部に外反するもの、内湾気味のもの、直行するものの違いが見られる。内面のミガキは12が一番ていねいである。

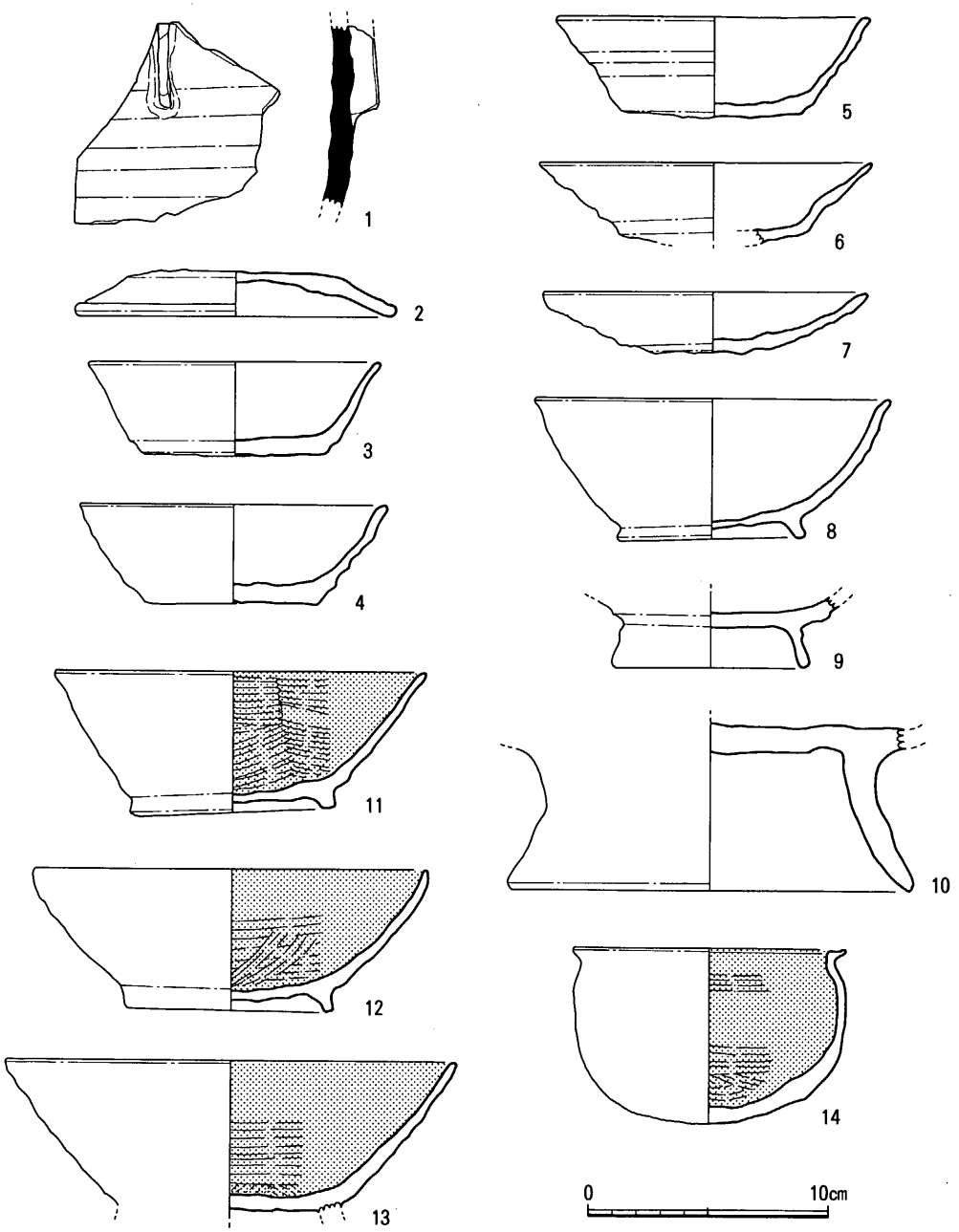
壺（14）　口縁部を外反させ、平坦面を作り出している。頸部をわずかにすぼませる丸底の壺である。あるいは鉢とした方が良いかもしれない。やはり内面だけを燻すものである。ヘラミガキは体部は横方向に、底部は不定方向に行っている。

石製品（第129図、図版80）

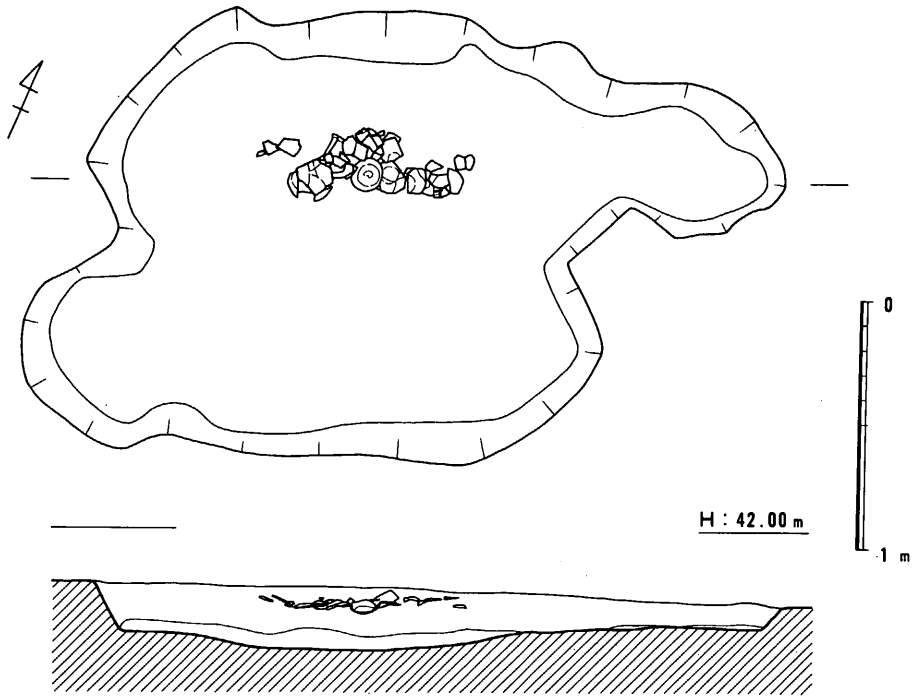
石帯（8）　巡方で縦3.3cm、横3.7cm、厚さ0.9cmを測る。石質は不明だが黒色を呈する。裏面を除く5面はよく研磨され光沢がある。裏面に帯に装着するためのかがり穴が四隅にあけられる。

SK22（第127図、図版25）

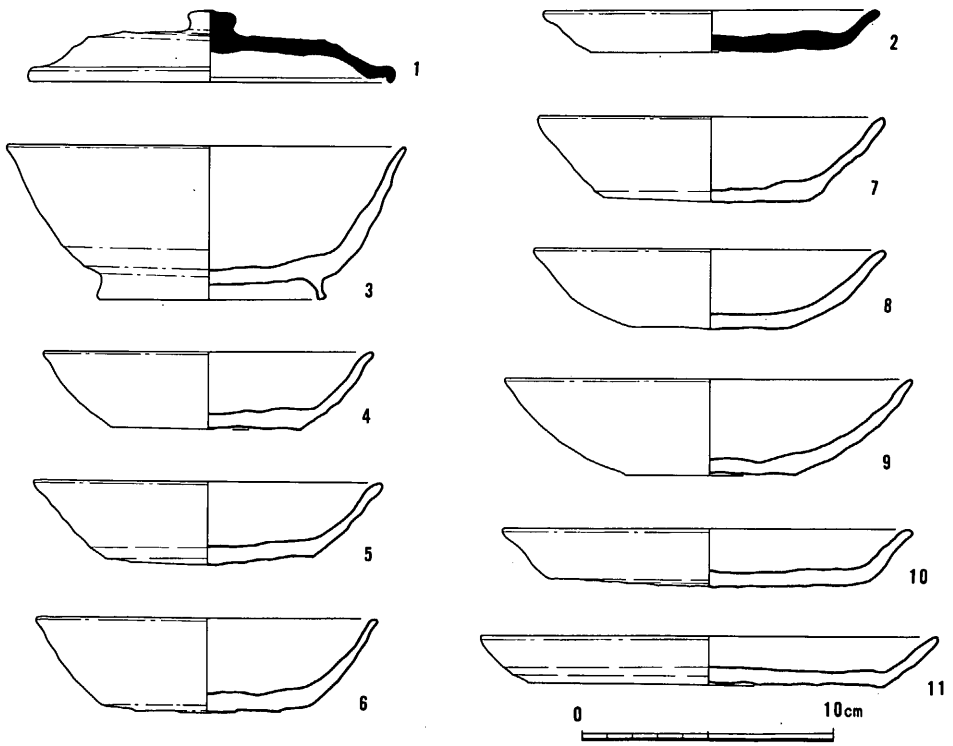
調査区のほぼ中央に位置する。本遺構のすぐ北側には20号住居跡があり、最も近い部分の距離は0.65mである。平面形は不整形を呈し、上端長軸長3.07m、短軸長1.8mを測る。底面には



第126図　SK21出土土器実測図（1/3）



第127図　SK22実測図（1/30）



第128図　SK22出土土器実測図（1/3）

緩やかな凹凸があり、中央部がくぼんでいる。最も深い部分で0.25mを測る。テラス、ピット等は検出されなかった。遺物は、本遺構の中央よりやや北寄りの部分から集中的に出土した。いずれも埋土中浮いた状態であった。

出土遺物(第128図、図版68)

須恵器

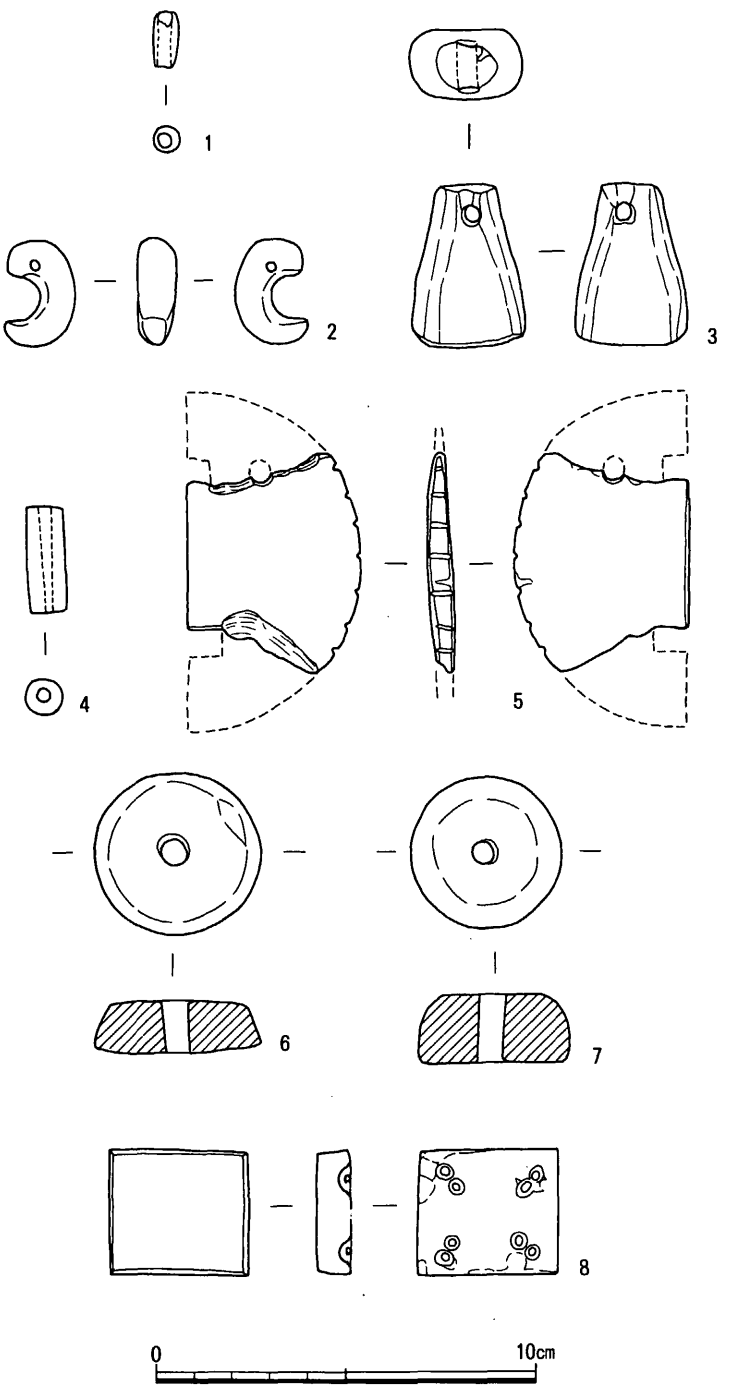
杯蓋（1） 小さめのつまみを持つものである。天井部は回転ヘラケズリしない。

皿（2） 浅いもので、底部外面はヘラ切り未調整である。その他は回転ナデ、ナデである。

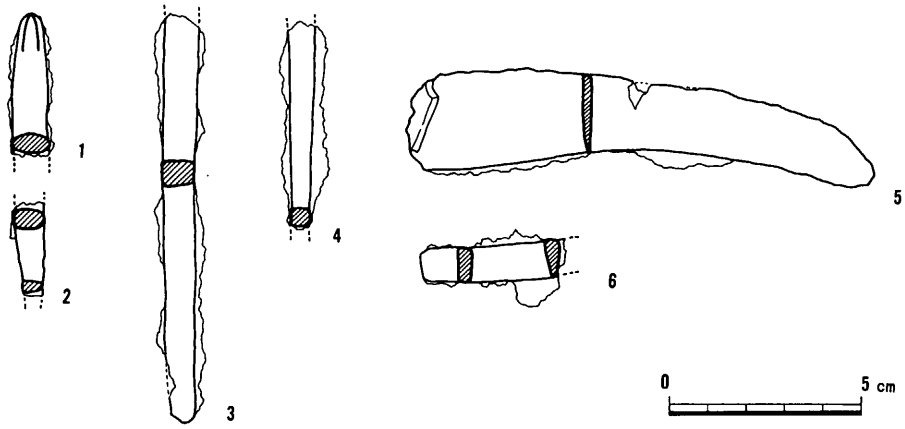
土師器

椀（3） 比較的高くしっかりした高台を付けるものである。底部外面は回転ヘラケズリしている。体部は回転ナデである。

杯（4～9） 6を除いて底部外面を回転ヘラケズリする。大きめの9は、体部下位も行う。



第129図 SK（1・3～8）、竪穴状遺構（2）出土石製品実測図（1/2）



第130図　SK出土鉄器実測図(1/2)(1・2－SK02、3－SK07、4－SK20、5－SK－05、6SK－06)

器面が荒れていて、ヘラミガキの有無は確認できない。6はヘラ切り後粗くナデるもので、淡褐色を呈するが、焼成不良の須恵器と区別が付きにくいものである。

皿（10・11）　浅いもので、底部外面を回転ヘラケズリする。体部内面に一部ヘラミガキの痕跡が残る。

(2)－③溝

大溝（SD01）（第133・134図、図版28～30）

本遺構は、調査区を北西～南東に縦断する形で検出された。調査区域内での長さは約84mを測る。南端部は徐々に浅くなり、標高41.20m付近で消滅する。SK02・06・16・17と切り合い関係にあるが、いずれについても大溝の方が古い。壁と床面はともにしっかりとしており、明確に検出された。壁と床から若干のピットとテラスが検出されたが、規則的な配列を認めることはできなかった。断面形は、北側の部分では逆台形であるが、中央部と南側では底部が狭くなり「V」字形を呈する。そして、南端部付近では再び逆台形となる。幅は最大で約4m、深さは最大1.4mを測る。埋土は6層からなる。

遺物は埋土中から出土したが、特に集中する部分が合わせて19カ所認められたので、これらは、A～S群とし、群ごとに取り上げることとした。各群の名称は、北から順にA～Jまではアルファベットの通りであるが、K～Sは調査の便宜上アルファベットが逆転して付いている。すなわち、A、B、C……H、I、J、S、R、Q……M、L、Kという配列である。その他の遺物は一括して取り上げた。器種としては、須恵器の杯蓋、杯身が大多数を占め、須恵器の甕も多い。土師器は小破片が多く、その殆どは甕であった。土製品と石製品がそれぞれ1点ずつ出土したが、鉄器は出土しなかった。遺物の殆どは第1層の下位から第6層までの間から出

土した。

SD02

大溝(SD01)の東で検出された。長さ約37mを測る。大溝に比して壁も床もはっきりしなかったが、最大幅約6.5m、最大深さ約0.6mとなった。北端では20号住居跡を切っているが、その途中で急激に立ち上がって終わる。南端は大溝と同様に終わる。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物（第135～160図、図版69～76・80）

A群
〈註1〉

須恵器

杯蓋 (1) 天井部外面はヘラ切り後ナデ、その他を回転ナデとナデで仕上げる。

杯身 (2) 底部外面はヘラ切り後ナデ、その他を回転ナデとナデで仕上げる。

B群

須恵器

杯身 (3) 体部中位の沈線は2条の部分と1条の部分がある。底部外面をヘラ切り後ナデ、その他を回転ナデとナデ。ヘラ記号あり。

口頸部 (4) 壺の口頸部と思われる。内外面とも回転ナデを施す。

土師器

甕 (5) 胴部外面ハケ調整、内面はヘラケズリを施す。

C群

須恵器

蓋 (6) 天井部外面手持ちヘラケズリ。その他は回転ナデとナデ。

壺 (7) 底部のみ残る。残存高5.6cm。底部外面回転ヘラケズリ。その他の部分は回転ナデ。

D群

須恵器

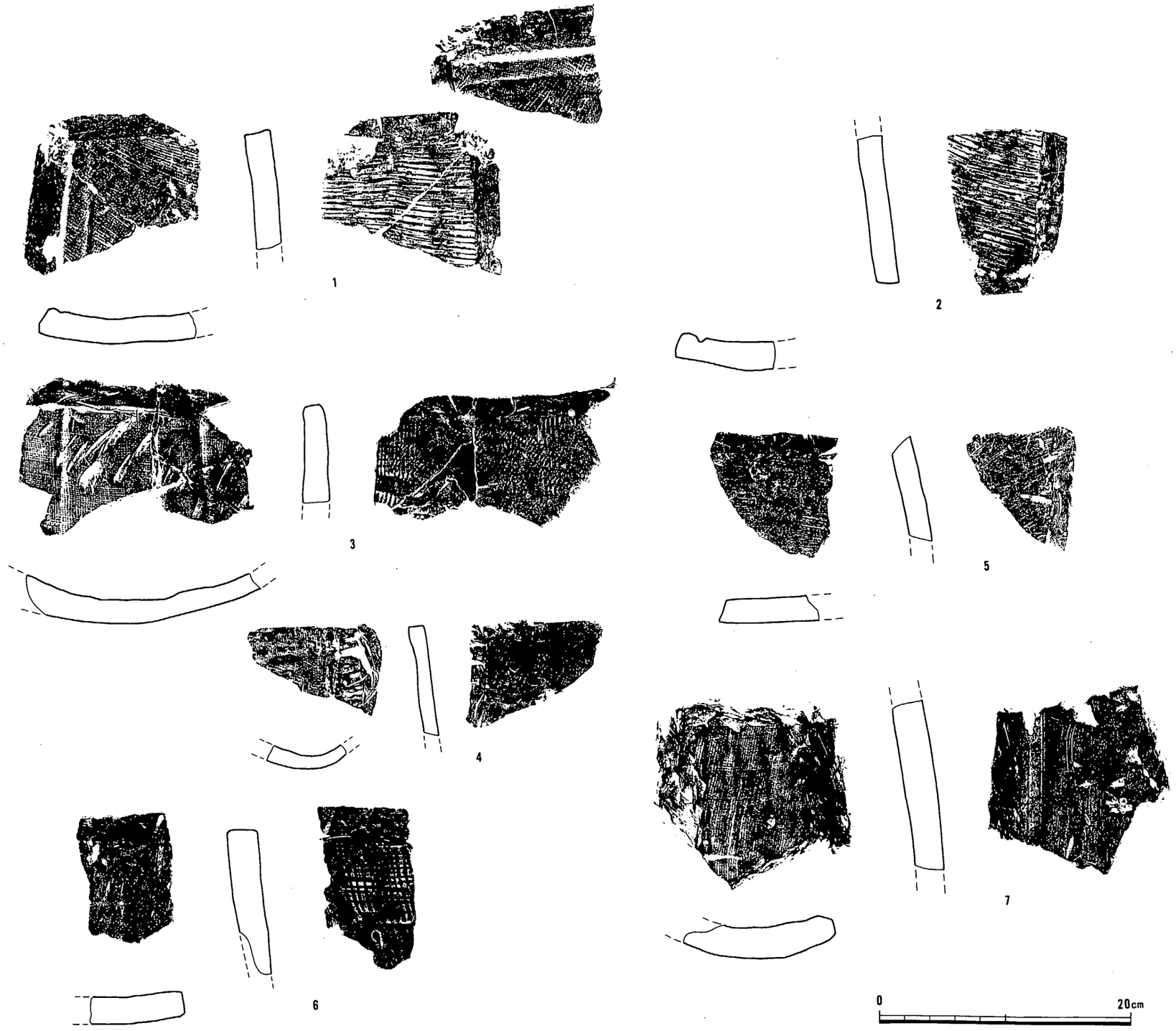
杯蓋 (8) 天井部外面はヘラ切り後ナデ。その他は回転ナデとナデ。

椀 (9) 底部外面に手持ちヘラケズリを施す。その他は回転ナデとナデ。

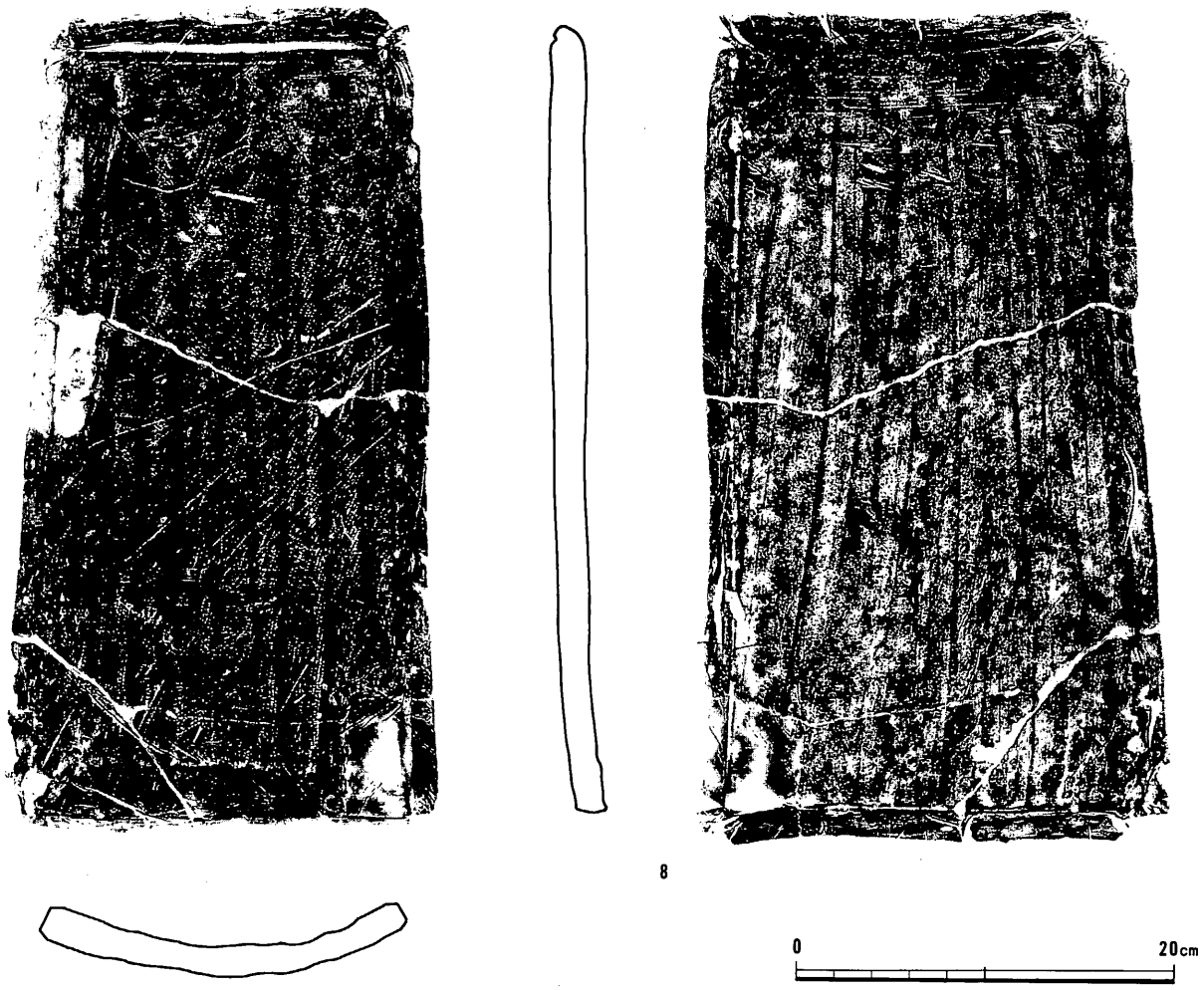
甕（10・206・208・210） 10は胴部外面に平行タタキ、内面に同心円文が残る。全体に灰をかぶっており、一部で自然釉化している。206は胴部外面に格子目タタキを施し、部分的に回転ナデとカキ目を加える。胴部内面は同心円文当て具痕が残る。208は頸部外面にヘラ記号がある。ともに胴部内面は同心円文当て具痕が残る。胴部外面は格子目タタキの上から、208は部分的に回転ナデとカキ目、210は全体にカキ目を加える。

E群

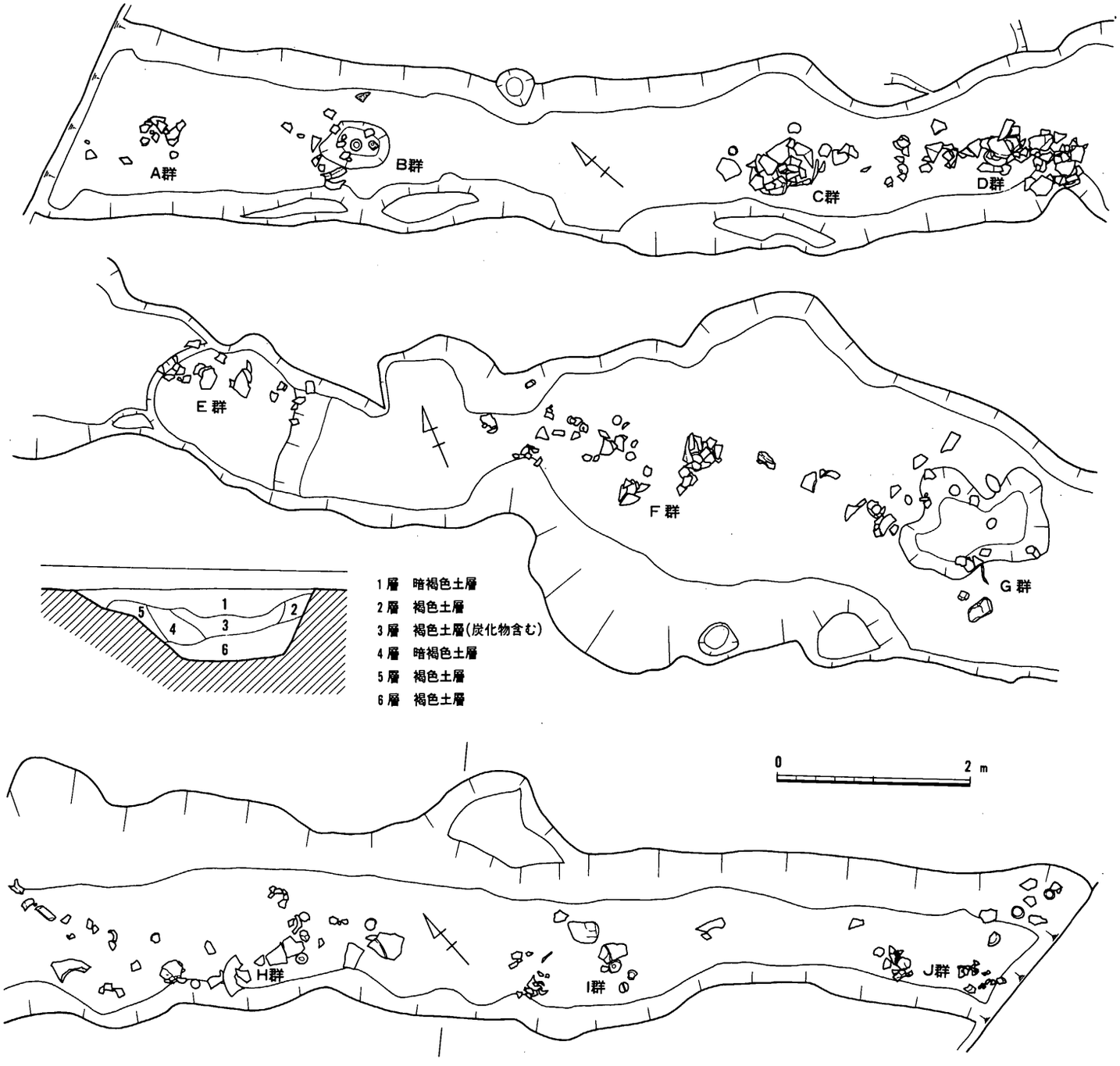
須恵器



第131図　SK出土瓦実測図①（1/4）



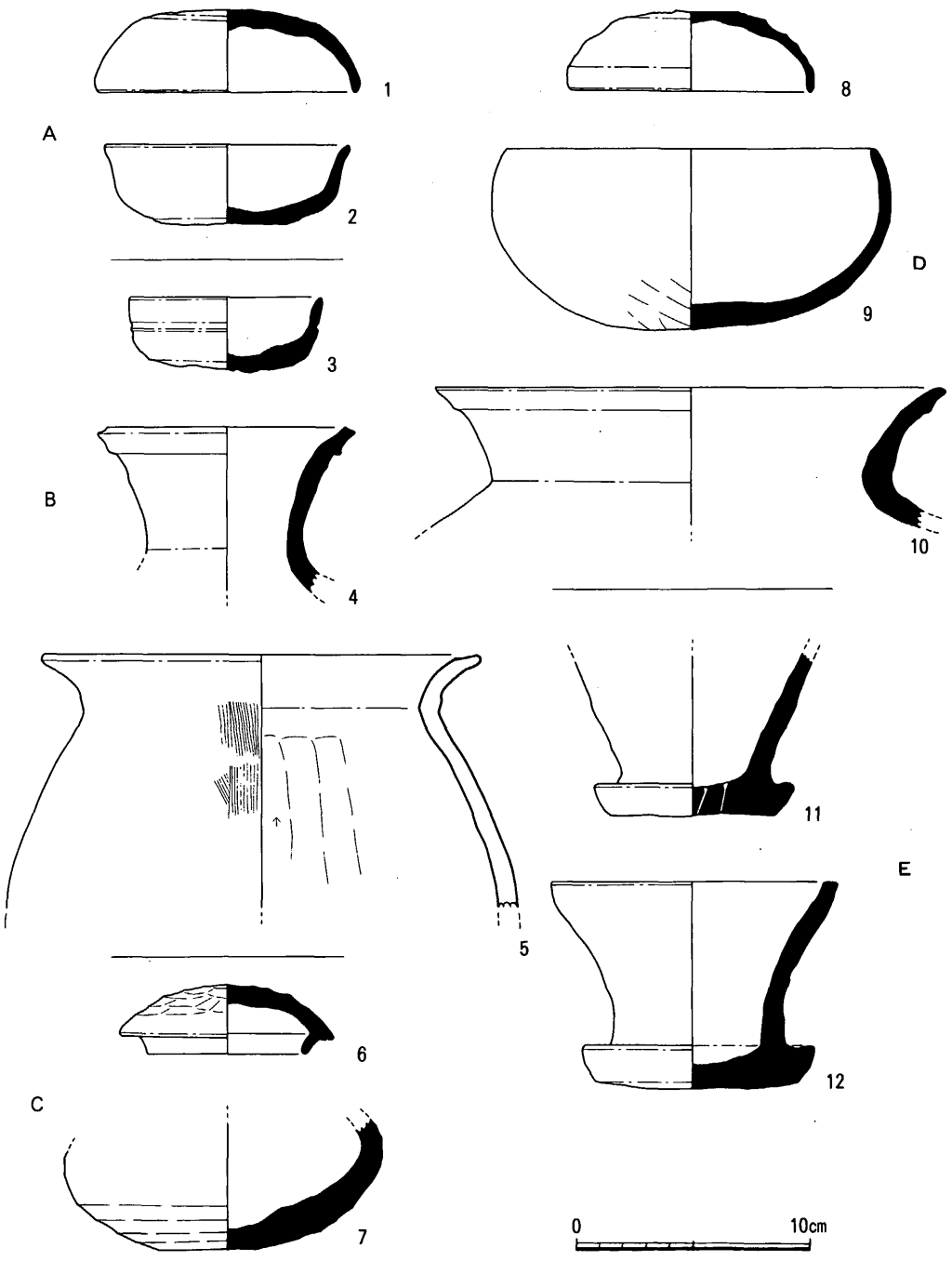
第132図　SK出土瓦実測図②（1/4）



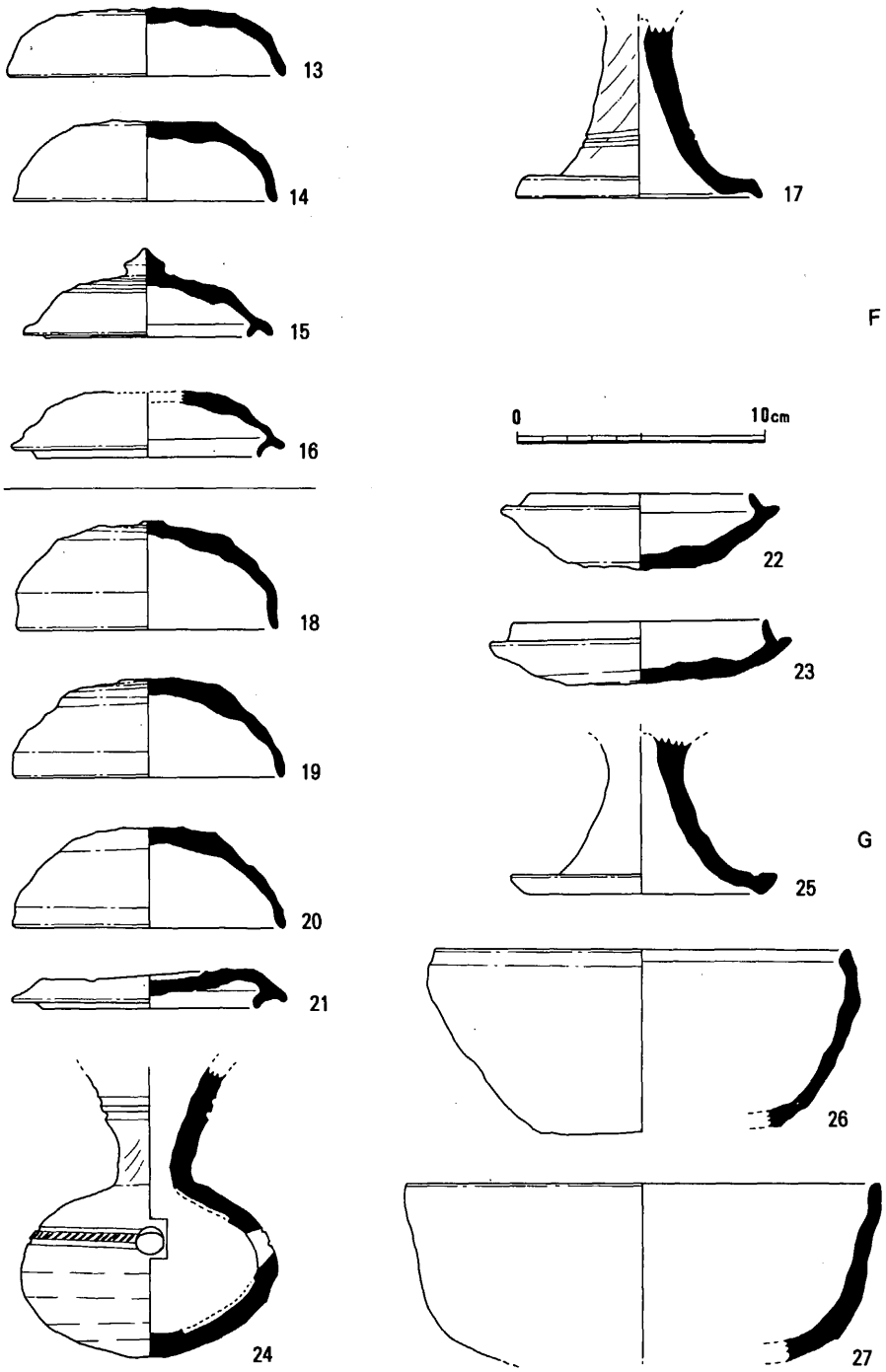
第133図　大溝遺物出土状況実測図①（1/60）



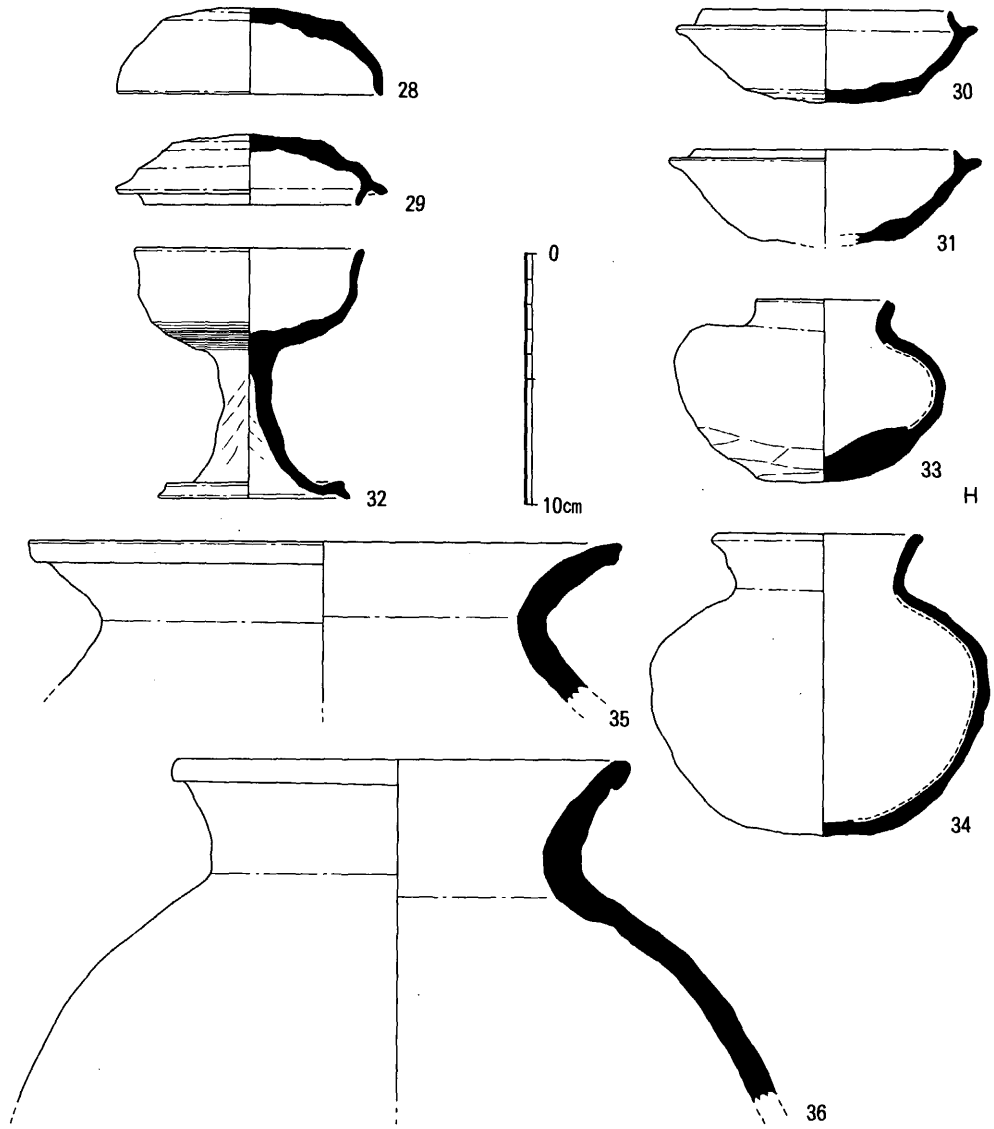
第134図　大溝遺物出土状況実測図②（1/60）



第135図　大溝出土土器実測図①（1/3）



第136図　大溝出土土器実測図②（1/3）



第137図　大溝出土土器実測図③（1/3）

すり鉢（11・12）　11は底部外面をナデ、他を回転ナデで仕上げる。底部に4カ所の針の穴のような穿孔がある。12は底部外面を手持ちヘラケズリする。他は回転ナデとナデで仕上げる。

F群

須恵器

杯蓋（13～16）　13は天井部外面を手持ちヘラケズリ、14・16はヘラ切り後ナデ、15はカキ目を施す。いずれも体部内外面を回転ナデ、底部内面をナデで仕上げる。

高杯（17）　脚部下位に２条の沈線がめぐる。内外面とも回転ナデを施す。

Ｇ群

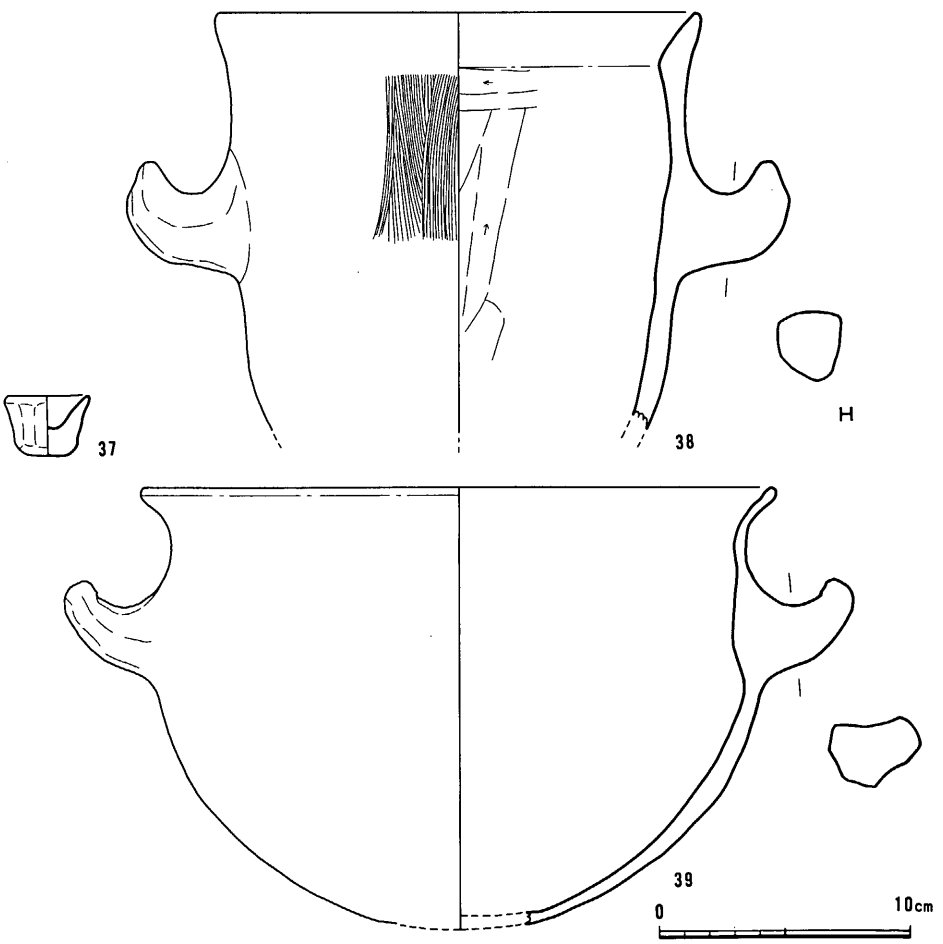
須恵器

杯蓋（18～21）　18と20は天井部外面にヘラ記号がある。21は焼けひずみが著しい。調整はいずれも天井部外面をヘラ切り後ナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

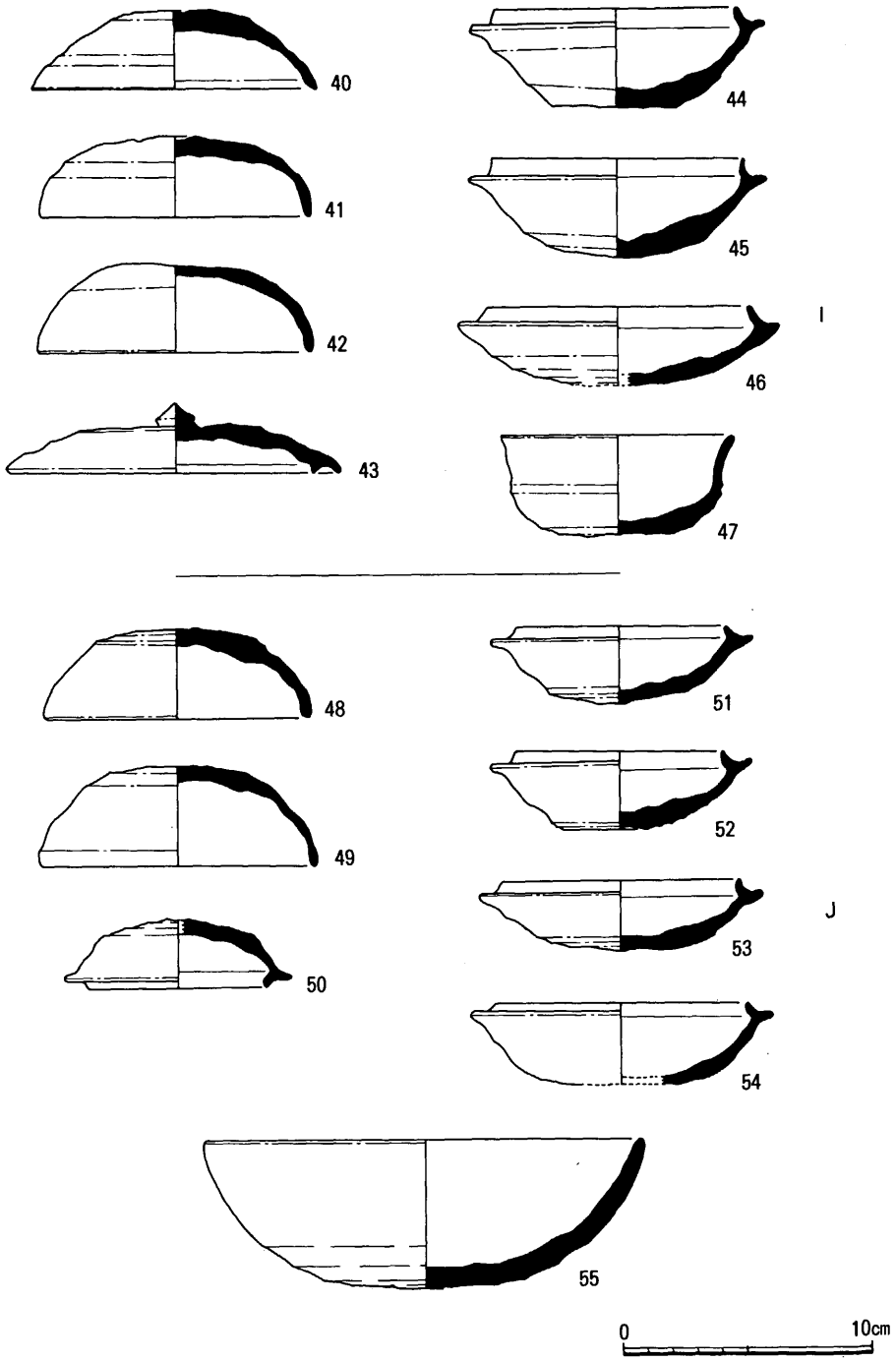
杯身（22・23）　22は底部外面をヘラ切り後粗いナデ、その他を回転ナデとナデ。23の底部外面には回転ヘラケズリを施し、その他を回転ナデで仕上げる。

甕（24）　頸部内外面は回転ナデ、２条の沈線がめぐる。シボリ痕が見られる。胴部は孔の上半分の高さに２条の沈線をめぐらせその間を刻目で埋める。上半分回転ナデ、下半分と底部には回転ヘラケズリを施す。胴部下位にヘラ記号がある。

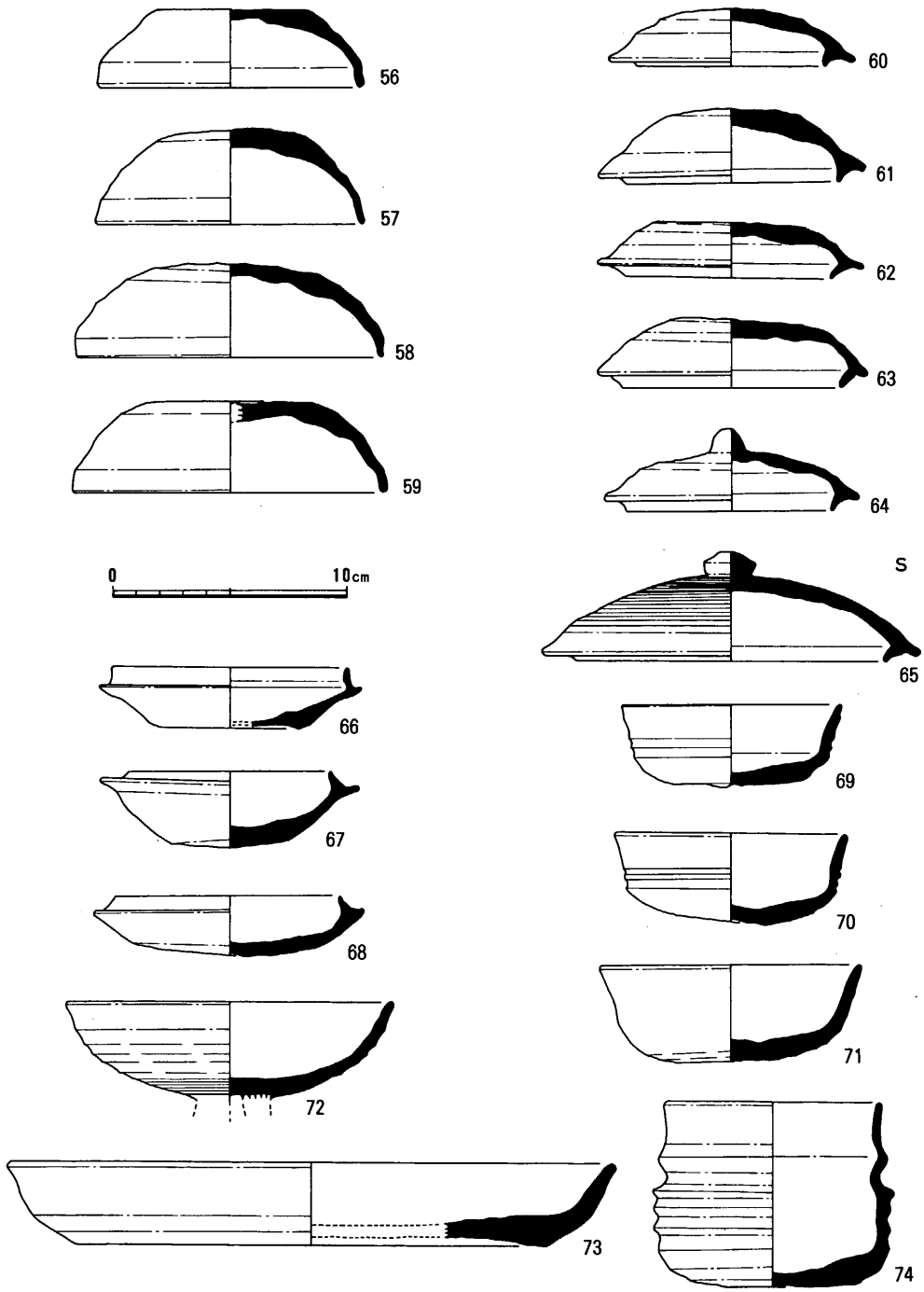
高杯（25）　磨滅が激しいが、内外面とも回転ナデの痕跡が部分的に認められる。



第138図　大溝出土土器実測図④（1/3）



第139図　大溝出土土器実測図⑤（1/3）



第140図　大溝出土土器実測図⑥（1/3）

椀（26・27）　ともに口縁端部を斜めに作り、底部外面を手持ちヘラケズリする。26は底部以外は灰かぶりのため調整不明。27は体部内外面を回転ナデし、底部内面はナデ。

Ｈ群

須恵器

杯蓋（28・29）　ともに天井部外面をヘラ切り後ナデ、その他を回転ナデとナデで仕上げる。

杯身（30・31）　ともに底部外面をヘラ切り後ナデ、その他を回転ナデとナデで仕上げる。

高杯（32）　杯底部外面にカキ目。脚部にシボリ痕が見られる。回転ナデ、ナデで仕上げる。

短頸壺（33）　底部外面を手持ちヘラケズリする。他の部分の調整は灰かぶりのため不明。焼けひずみが著しい。

壺（34）　球状の体部を持ち、口縁部は緩く外反する。底部外面に指圧痕が見られる。

甕（35・36）　35は胴部と頸部の外面に平行にタタキ。頸部ではそれを回転ナデで消す。胴部内面は同心円文当て具痕が残る。36は胴部外面に平行タタキ、内面に同心円文当て具痕が残る。

土師器

手捏土器（37）　体部外面に指圧痕が残る。

甑（38）　把手は貼り付けた後、指でナデて整える。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面縦方向のハケ、胴部内面ヘラケズリである。

甕（39）　把手の付く甕である。口縁部と胴部内面にヨコナデを施す。胴部外面の調整は磨滅のため不明だが、黒斑が見られる。把手は指でナデて整える。

Ｉ群

須恵器

杯蓋（40～43）　40は口縁部が外に開く。41、42は直に下がる。40、41は天井部ヘラ切り後ナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。42は灰かぶりのため外面の調整がわからない。内面は回転ナデとナデ。43は平坦な天井部に回転ヘラケズリを施し、他は回転ナデとナデ。

杯身（44～47）　44、45は体部が深い。底部外面ヘラ切り後ナデ。その他の部分を44は回転ナデ、45は回転ナデとナデで仕上げる。46は体部が浅い。底部外面に回転ヘラケズリを施す。その他は回転ナデとナデ。47は外面に部分的に灰をかぶる。底部外面をヘラ切り後ナデ。その他を回転ナデとナデで仕上げる。

Ｊ群

須恵器

杯蓋（48～50）　48・49は平坦な天井部を持つ。49は外面に部分的に灰がかぶる。調整は、天井部外面ヘラ切り後ナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。50は口径9.2cmと小型である。平坦な天井部に回転ヘラケズリを施す。その他は回転ナデとナデ。

杯身（51～54）　51・52はともに口径8.4cm、受部径10.6cmである。底部外面をヘラ切り後ナ

デ、その他を回転ナデ、ナデ。53・54は口径9.5cm～10.1cm、受部径11.5cm～12.2cmである。調整は、53が51・52と同様。54は磨滅のため不明。

椀（55）　復元口径17.5cmを測る。体部は内湾気味に伸びる。底部から体部下位にかけての外面に回転ヘラケズリを施し、体部内外面を回転ナデ、底部内面をナデで仕上げる。

S群

須恵器

杯蓋（56～65）　56～59はかえりがないものである。口径11.4cm～13.5cm。59のみ天井部外面に回転ヘラケズリを施す。他の3点はヘラ切り後ナデである。60～63はかえりがつき、最大径は10.5cm～11.5cmである。60のみ天井部に回転ヘラケズリを施す。他の3点はヘラ切り後ナデ。64、65はつまみとかえりがつく。64は天井部外面を回転ヘラケズリする。65は外面のほぼ全面にカキ目を施す特徴的なものである。ともにつまみは貼り付けである。

杯身（66～71）　66～68はかえりがつく。68は体部が浅い。いずれも天井部はヘラ切り後ナデる。69～71は体部が直線的に伸びる。69、70は体部に2条の沈線をめぐらす。いずれも底部外面はヘラ切り後ナデるだけである。

高杯（72）　杯部のみ残る。底部外面にカキ目と回転ヘラケズリを施す。他は回転ナデとナデで仕上げる。

皿（73）　復元口径26.0cmを測る。磨滅が激しく調整は不明。

椀（74）　体部を蛇腹状に作り、口縁部は直に上方へ伸びる。調整は、底部外面をヘラ切り後ナデ、体部内外面を回転ナデ、底部内面をナデで仕上げる。

甕（207）　焼成不良のため磨滅が激しい。胴部外面は格子目タタキに少しカキ目を加える。内面は同心円文当て具痕が残る。

土師器

甕（75～77）　いずれも小破片を図上復元した。調整は、75・76が胴部外面をハケ、内面をヘラケズリ。76は頸部内面に横方向のハケを加える。77は磨滅のため不明。

甑（78）　小破片のため図上復元した。調整は口縁部は回転ナデ、胴部外面がハケ、内面はヘラケズリを行う。

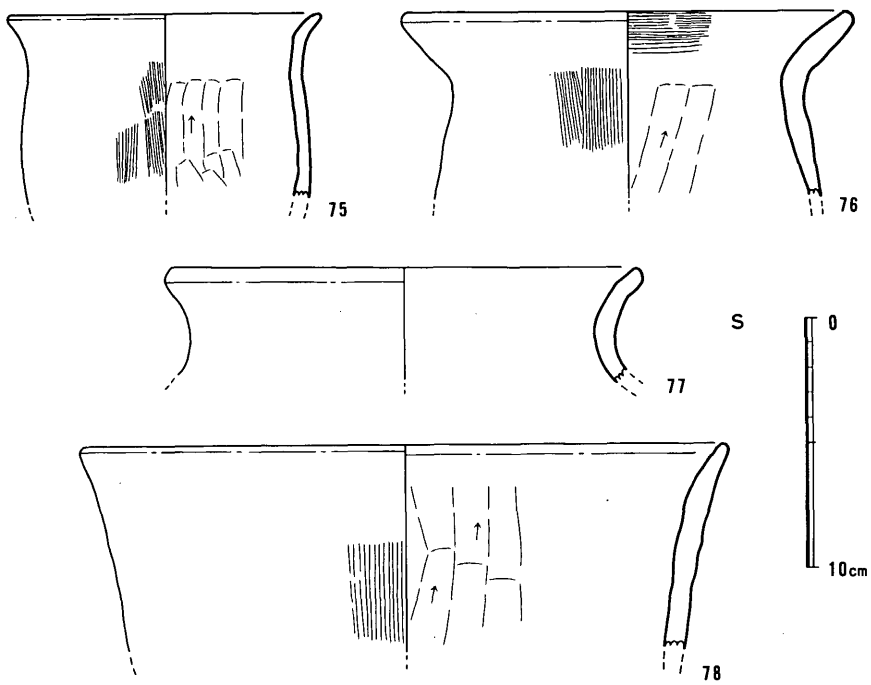
R群

須恵器

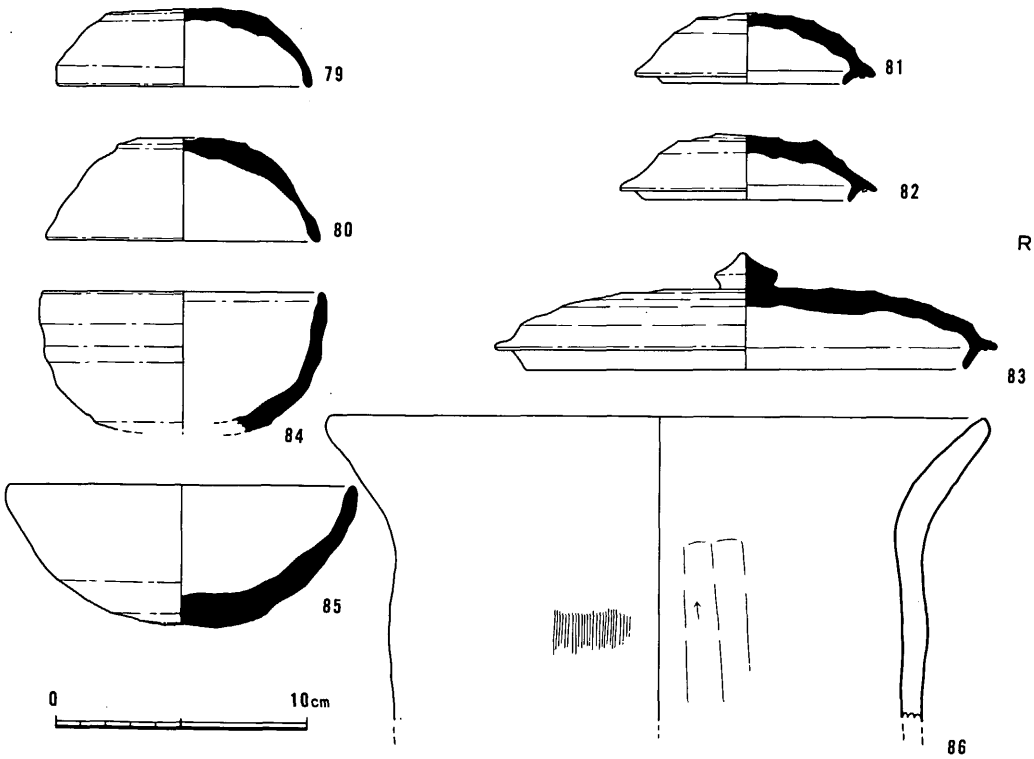
杯蓋（79～83）　かえりを持たないもの（79・80）と持つもの（81～83）がある。79・80は天井部外面をヘラ切り後ナデ、81は回転ヘラケズリを行う。82はヘラ切り後ナデである。83は天井部外面を回転ヘラケズリし、つまみは貼り付け。

杯身（84）　口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。底部外面はヘラ切り後ナデ。

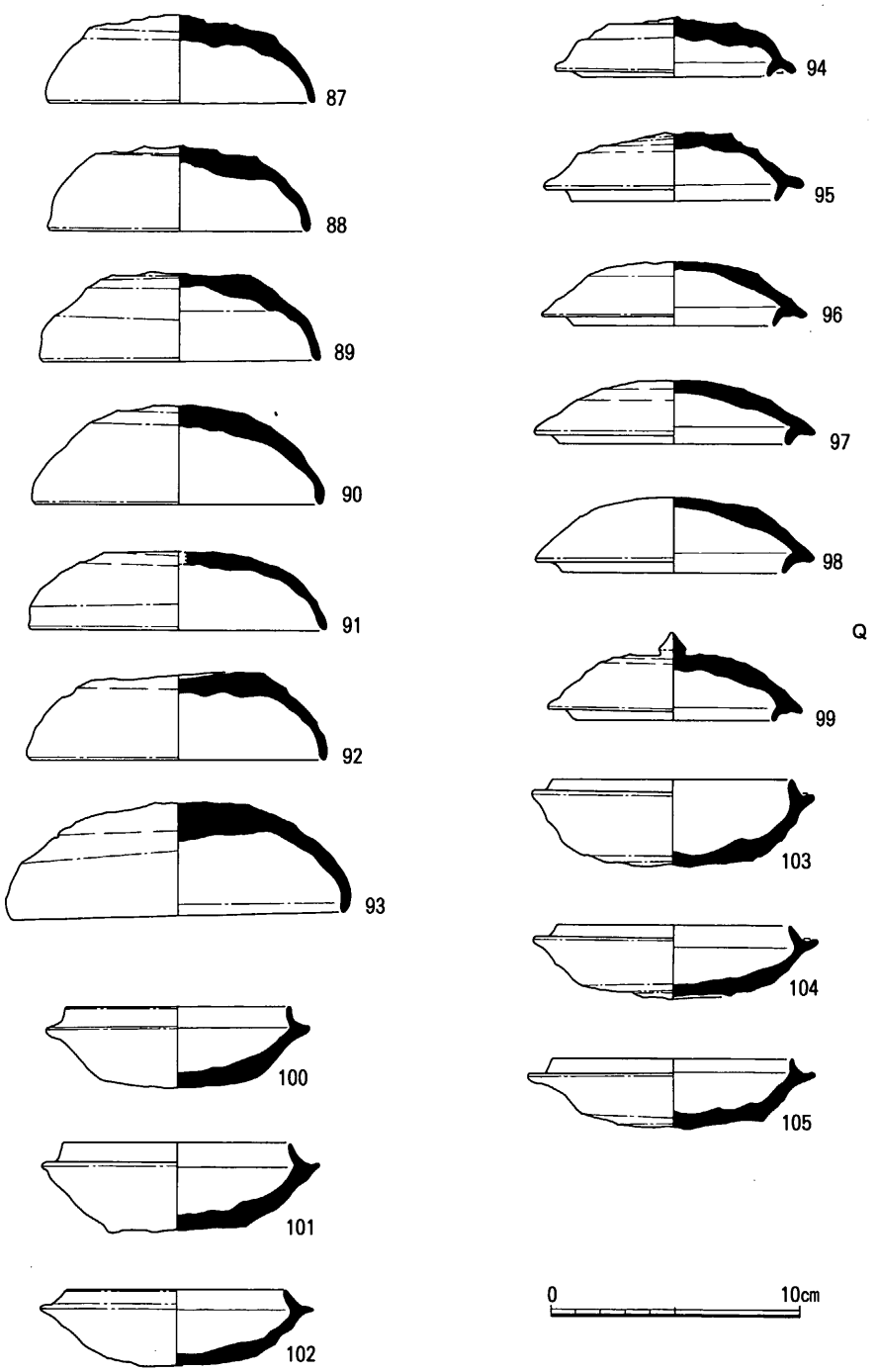
椀（85）　底部から口縁部にかけて内湾する。成形、調整にロクロを使用したか疑問が残る。



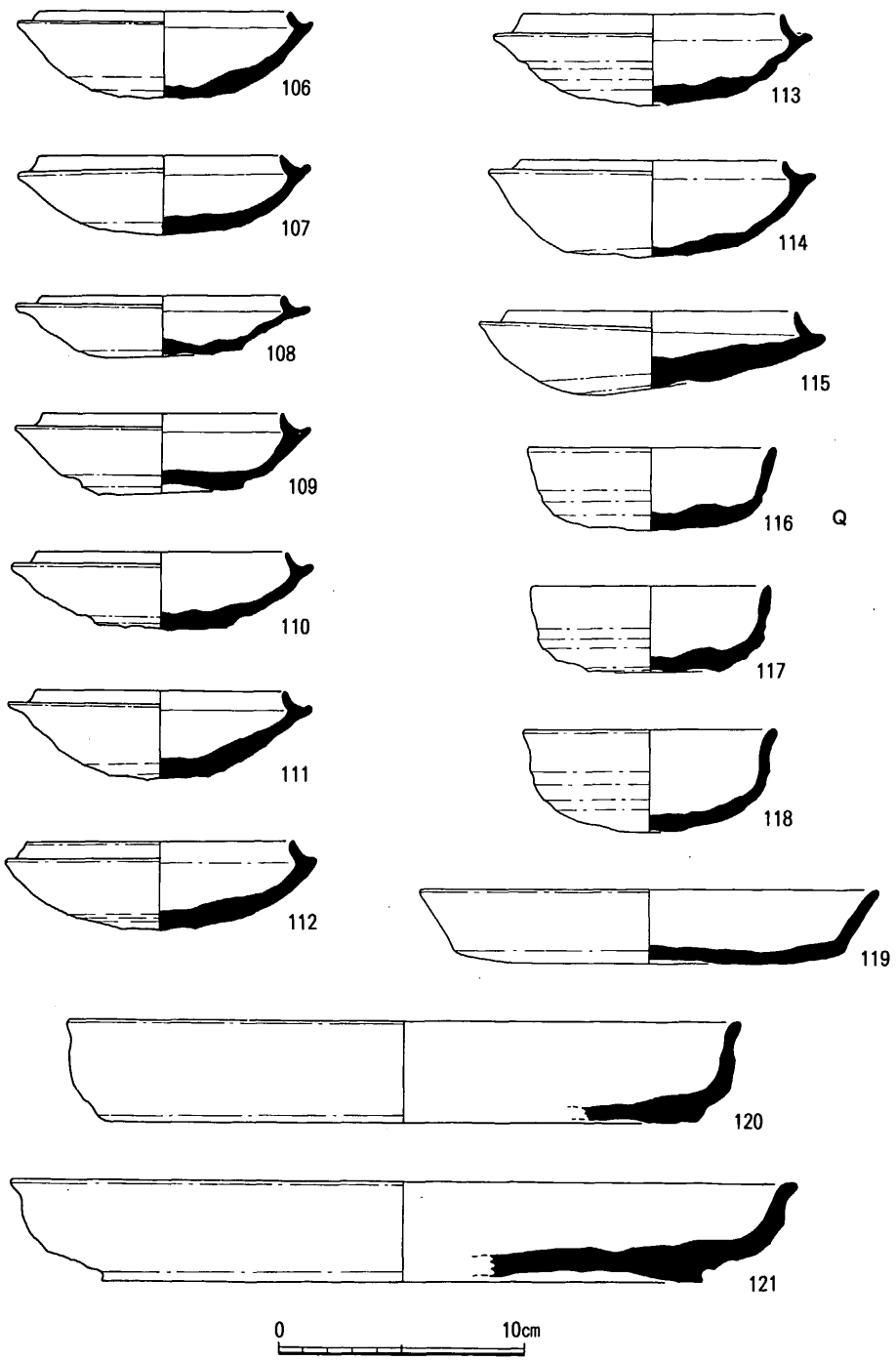
第141図　大溝出土土器実測図⑦（1/3）



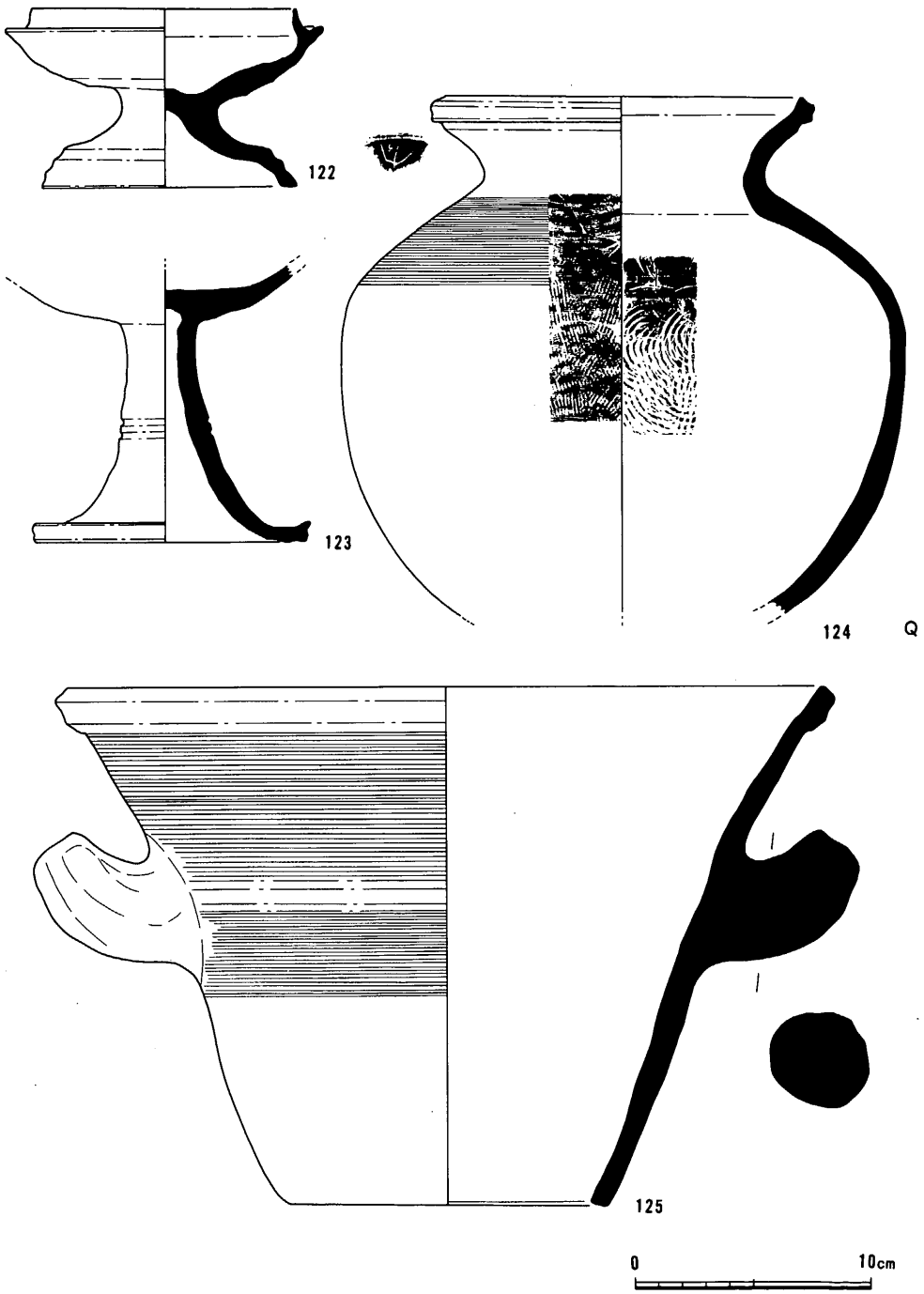
第142図　大溝出土土器実測図⑧（1/3）



第143図　大溝出土土器実測図⑨（1/3）



第144図　大溝出土土器実測図⑩（1/3）



第145図　大溝出土土器実測図⑪（1/3）

あるいは形の整わない蓋である可能性もある。

土師器

甕（86）　内外面とも磨滅が激しいが、胴部外面にハケメ、内面にヘラケズリの痕が残る。

Q群

須恵器

杯蓋（87～99）　かえりを持たないもの（87～93）と持つもの（94～99）がある。前者のうち93は口径13.5cmを測り、やや大ぶりである。91は天井部外面を回転ヘラケズリする。93はヘラ切り後、ヘラ状の工具でナデる。その他は、ヘラ切り後ナデ。94～99は最大径9.7cm～11.2cmを測る。99のみつまみがつく。調整は、95・99が天井部外面にヘラケズリを施す。94・96・97・98はヘラ切り後ナデる。99のつまみは貼り付けである。

杯身（100～118）　立ち上がりのあるもの（100～115）とないもの（116～118）がある。100～105は最大径が12cm以下、106～115は12cmをこえる。106と111のみ底部外面に回転ヘラケズリを施す。108と115は焼けひずみが著しい。116・117は口縁部が直線的に立ち上がり、118は短く外反する。いずれも体部に１～２条の浅い沈線をめぐらす。底部外面にはヘラ切り後ナデを施す。

皿（119～121）　119・120は体部が直線状に伸びる。121は口縁部が短く外反する。いずれも底部外面はヘラ切り後ナデ。120と121は底部の切り離しが粗いため、粘土が厚く残る。

高杯（122・123）　122は短脚で、脚端部は平坦面を持つ。杯部の底部外面を回転ヘラケズリ。その他を回転ナデとナデ。123は脚部中位に２条の沈線がめぐる。回転ナデとナデを施す。

甕（124・200・211）　124は肩部から頸部にかけてカキ目を施す。口頸部内外面は回転ナデ、胴部外面は平行タタキだが、部分的にカキ目を加える。胴部内面は同心円文当て具痕が残る。200は磨滅が激しい。頸部外面に２条の沈線がめぐり、胴部外面に格子目タタキ、内面は同心状当て具痕。202は口径52.6cmを測る。頸部を沈線によって４区画に分け、ヘラによる連続斜線文を施す。211も磨滅が激しい。頸部上半部はヘラによる連続斜線文を施した後に沈線で区画する。胴部外面平行タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。

甑（125）　把手の付く位置から上の胴部外面にカキ目を施す。それより下の部分は格子目タタキが残るが、部分的にヘラケズリを加える。口縁部から胴部内面は回転ナデ。把手は貼り付け。

鉢（126）　残存約２分の１の資料だが、体部中央部が幅3.7cm～5.5cmに渡って内外面とも帯状に他の部分と異なる色を呈している。調整は底部から体部下位外面を回転ヘラケズリする。

土師器

甕（127・128）　ともに小破片。内面にヘラケズリの痕跡が残るが、外面の調整は磨滅のため不明。128は胴部外面ハケ、内面にヘラケズリの痕跡が残る。

甑（129）　口縁部が強く外反する。調整は口縁部は横ナデ、胴部外面縦方向のハケ、内面はヘラケズリ、底部には２個の穿孔が見られる。胴部外面に煤が付着している。把手は貼り付け。

P群

須恵器

杯蓋（130・131）　ともに天井部外面をヘラ切り後ナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

杯身（132・133）　ともに底部外面をヘラ切り後ナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。133は焼けひずみがある。

高杯（134）　脚部下位を欠く。杯部の底部外面に回転ヘラケズリを施す。その他は回転ナデとナデで仕上げる。

すり鉢（135）　底部のみ残る。底部外面はヘラ切り後ナデる。

甕（199）　焼成不良で器表の磨滅が激しい。頸部上半分にカキ目、胴部外面格子目タタキ、内面に同心円状当て具痕が認められる。

O群

須恵器

杯蓋（136・137）　136は天井部外面ヘラ切り後ナデ。137はつまみを欠き、天井部外面は回転ヘラケズリを施す。

杯身（138・139）　138は底部外面に回転ヘラケズリを施す。139の底部外面はヘラ切り後ナデ。138は外面の一部に灰をかぶる。

高杯（140）　脚部のみ残る。外面に細かいカキ目を施す。

椀（141）　「八」字状に開く高台を持つ。底部外面に回転ヘラケズリを施す。その他の部分は回転ナデとナデ。

甕（142）　口縁端部を斜めに作る。胴部外面は格子目タタキの上から粗いカキ目を加える。胴部内面は同心円状の当て具痕を回転ナデで消している。

N群

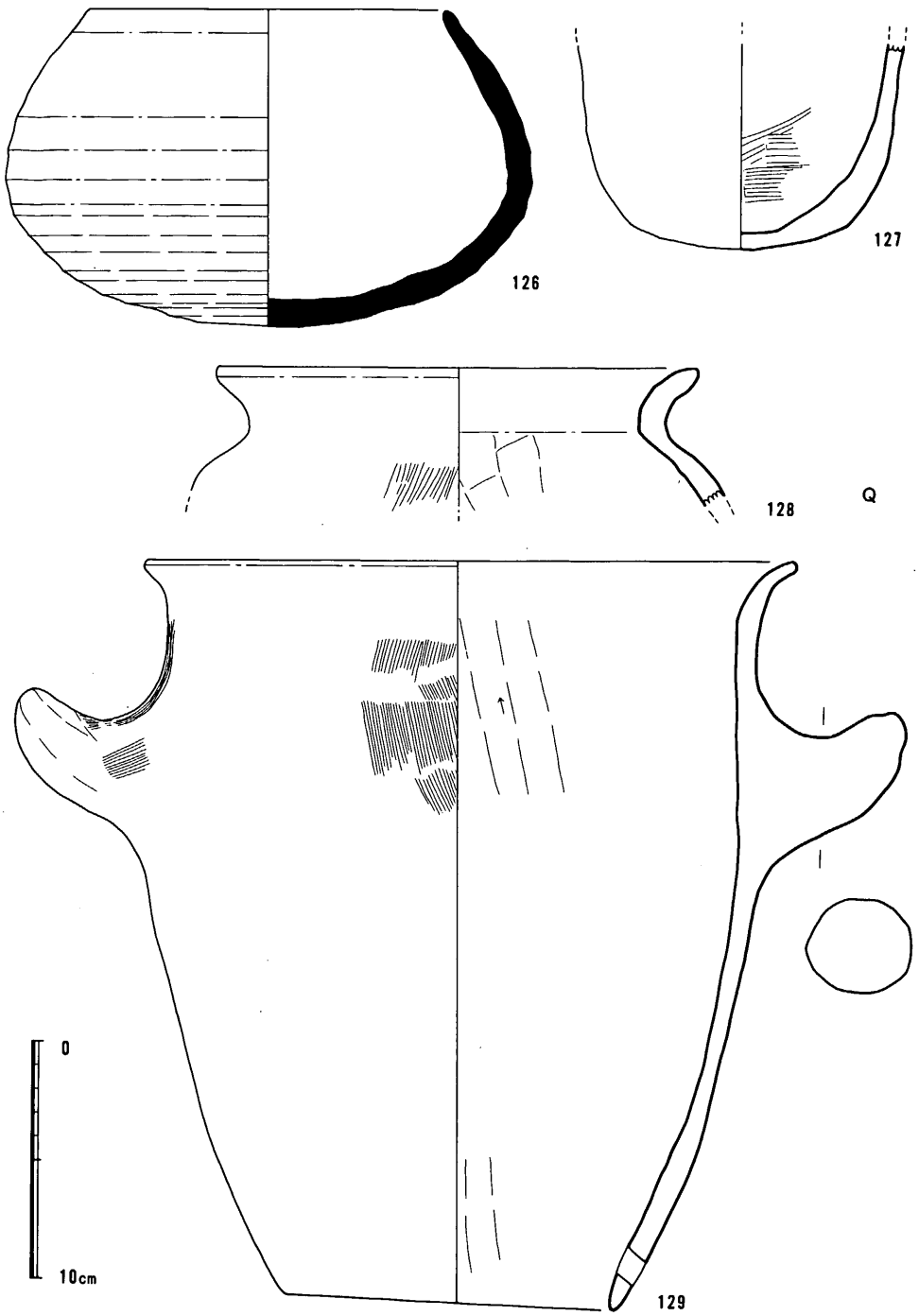
須恵器

杯蓋（143～147）　143と144は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。145はヘラ切り後ナデである。147は天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。つまみは貼り付け。

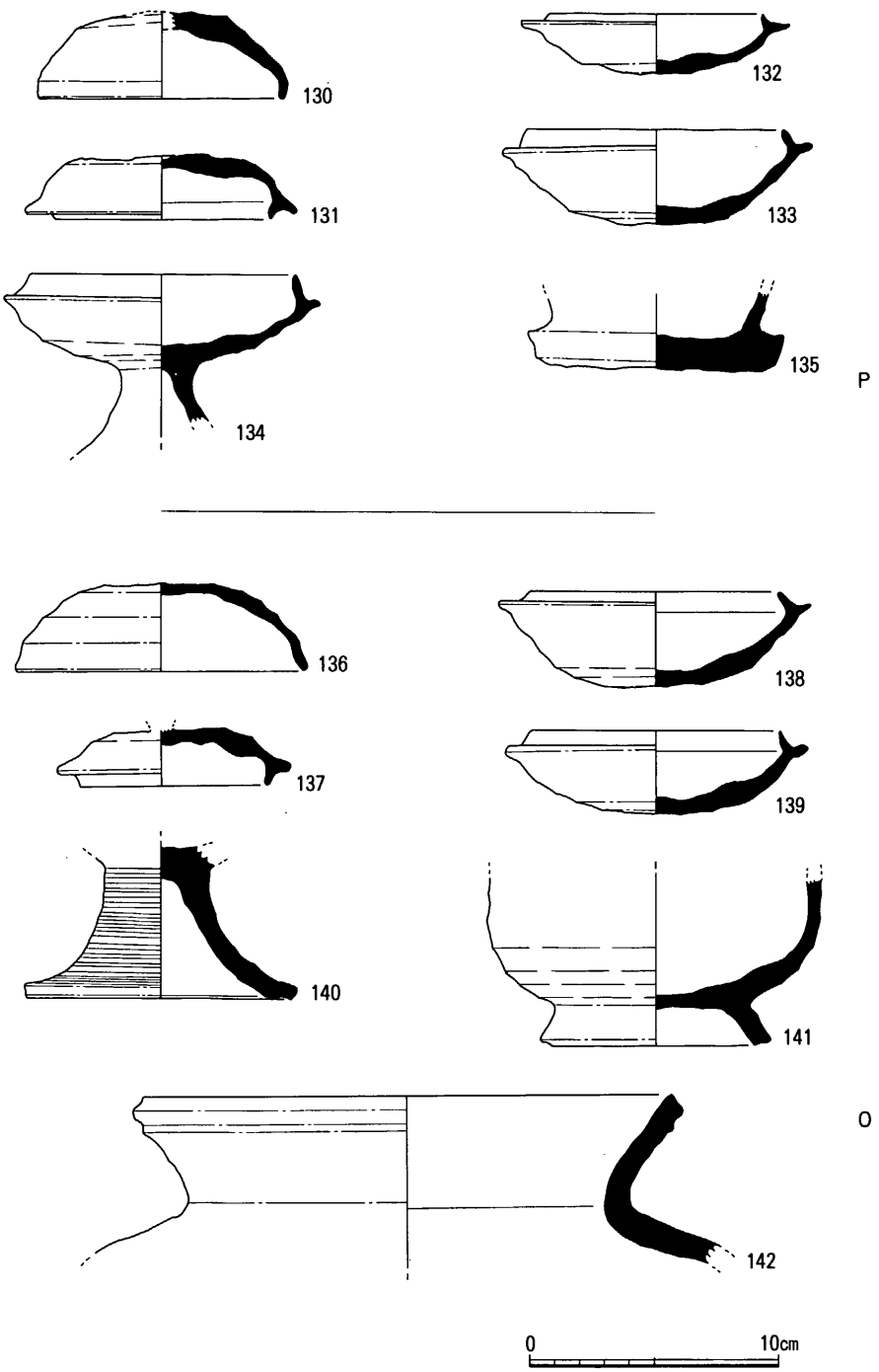
蓋（148）　壺類の蓋と思われる。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。

杯身（149～157）　最大径12cmで分けると、149・150がそれ以下、151～157はそれ以上である。底部外面の調整は、149・156・157が回転ヘラケズリ、150・152～155がヘラ切り後ナデ、151は灰かぶりのため不明である。151を除いて、他の部分を回転ナデとナデで仕上げている。

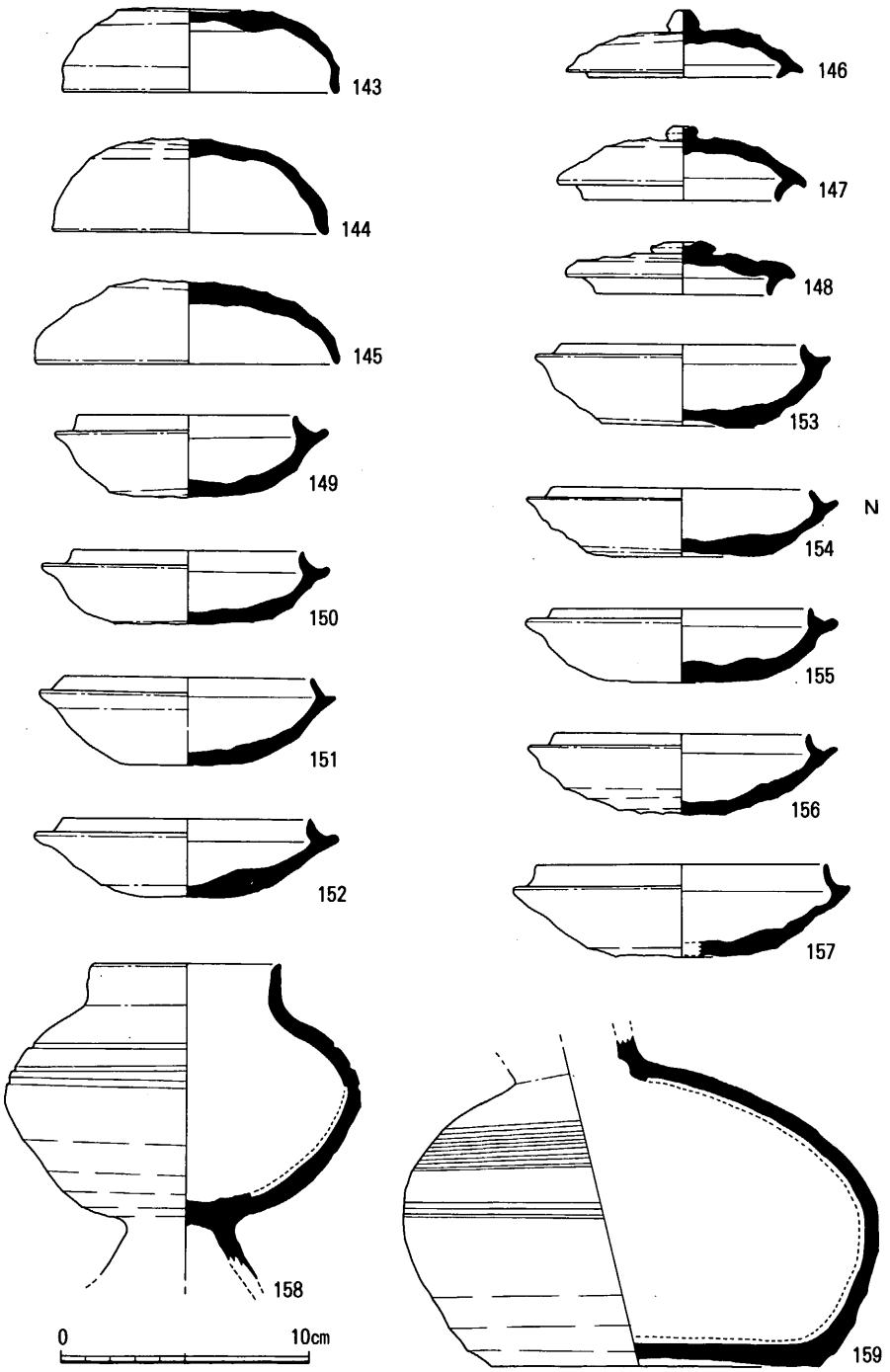
短頸壺（158）　脚が付くが、大半を欠損する。焼成不良のため磨滅が激しいが、胴部外面下位に回転ヘラケズリを施す。肩部に3条の沈線がめぐる。



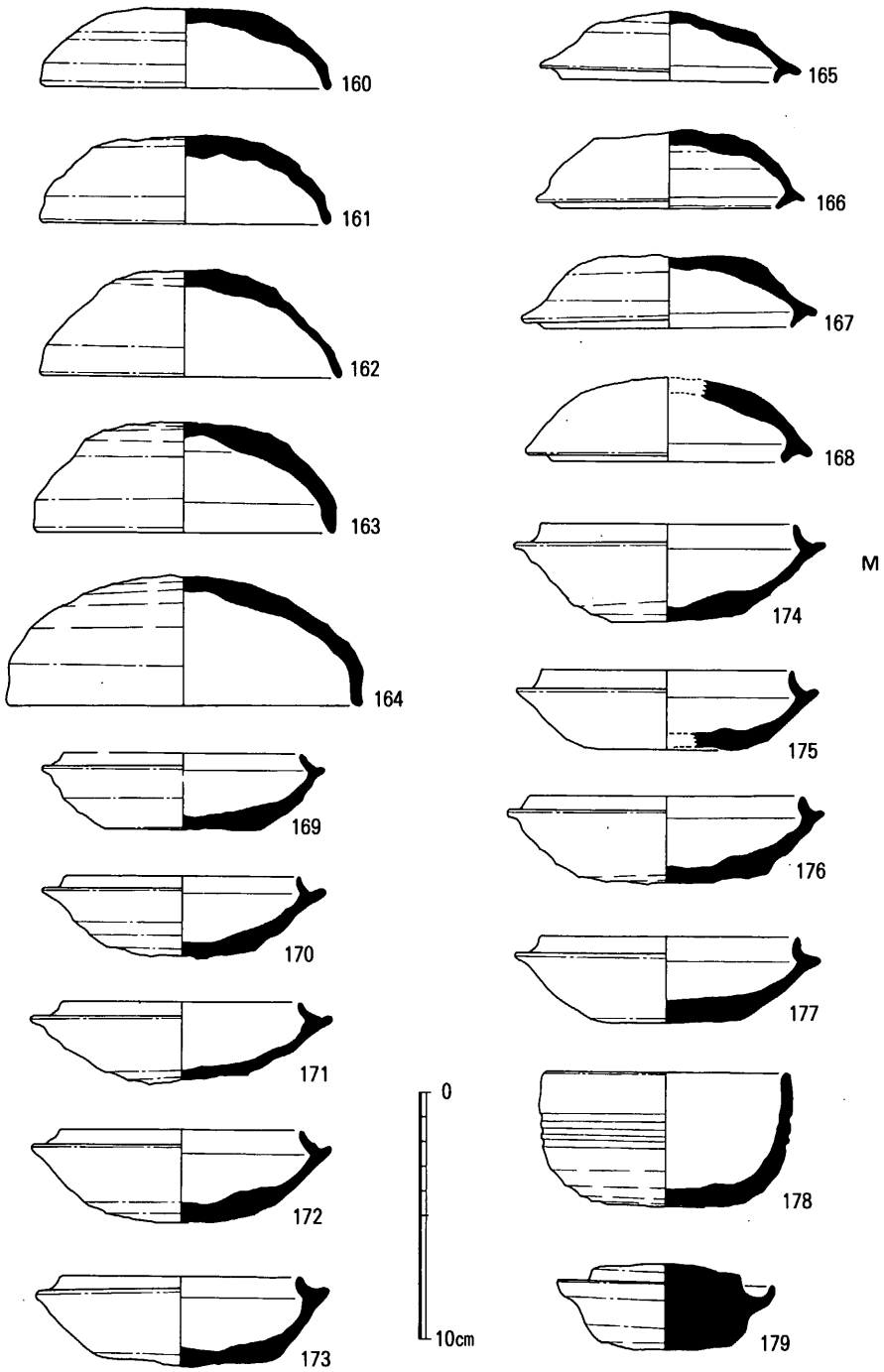
第146図　大溝出土土器実測図⑫（1/3）



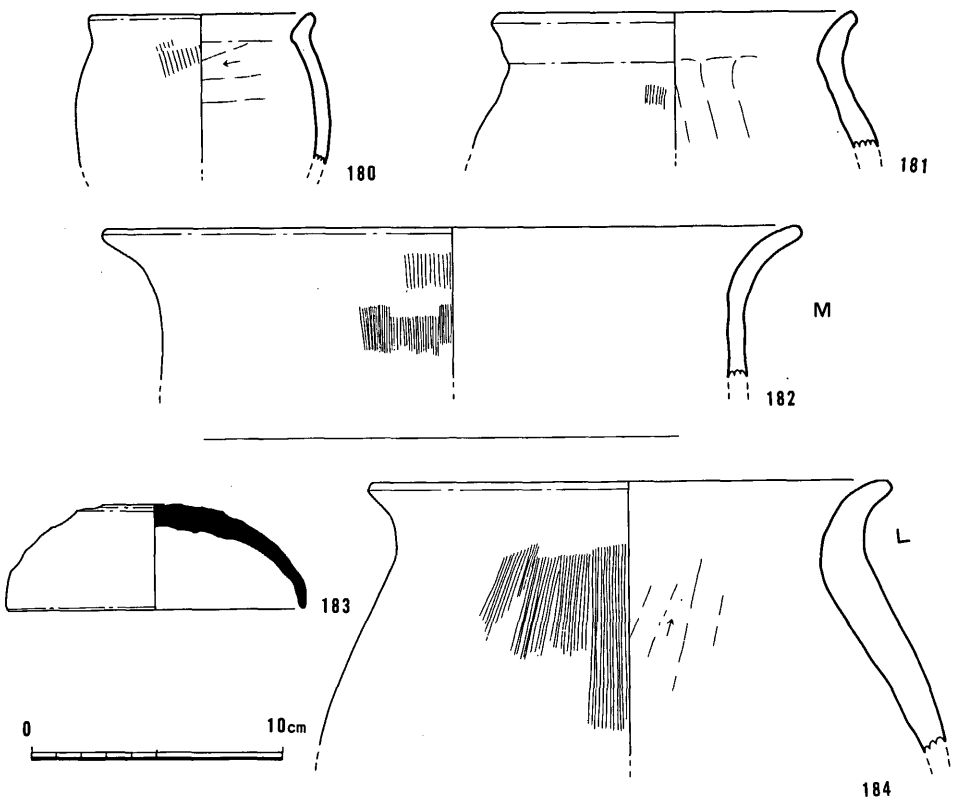
第147図　大溝出土土器実測図⑬（1/3）



第148図　大溝出土土器実測図⑭（1/3）



第149図　大溝出土土器実測図⑮（1/3）



第150図　大溝出土土器実測図⑯（1/3）

平瓶（159）　口頸部欠損。上げ底気味の底部は、中央部に指圧痕が残り、それ以外の部分は回転ヘラケズリ。胴部下位は回転ヘラケズリ、肩部から頸部にかけてカキ目を施す。

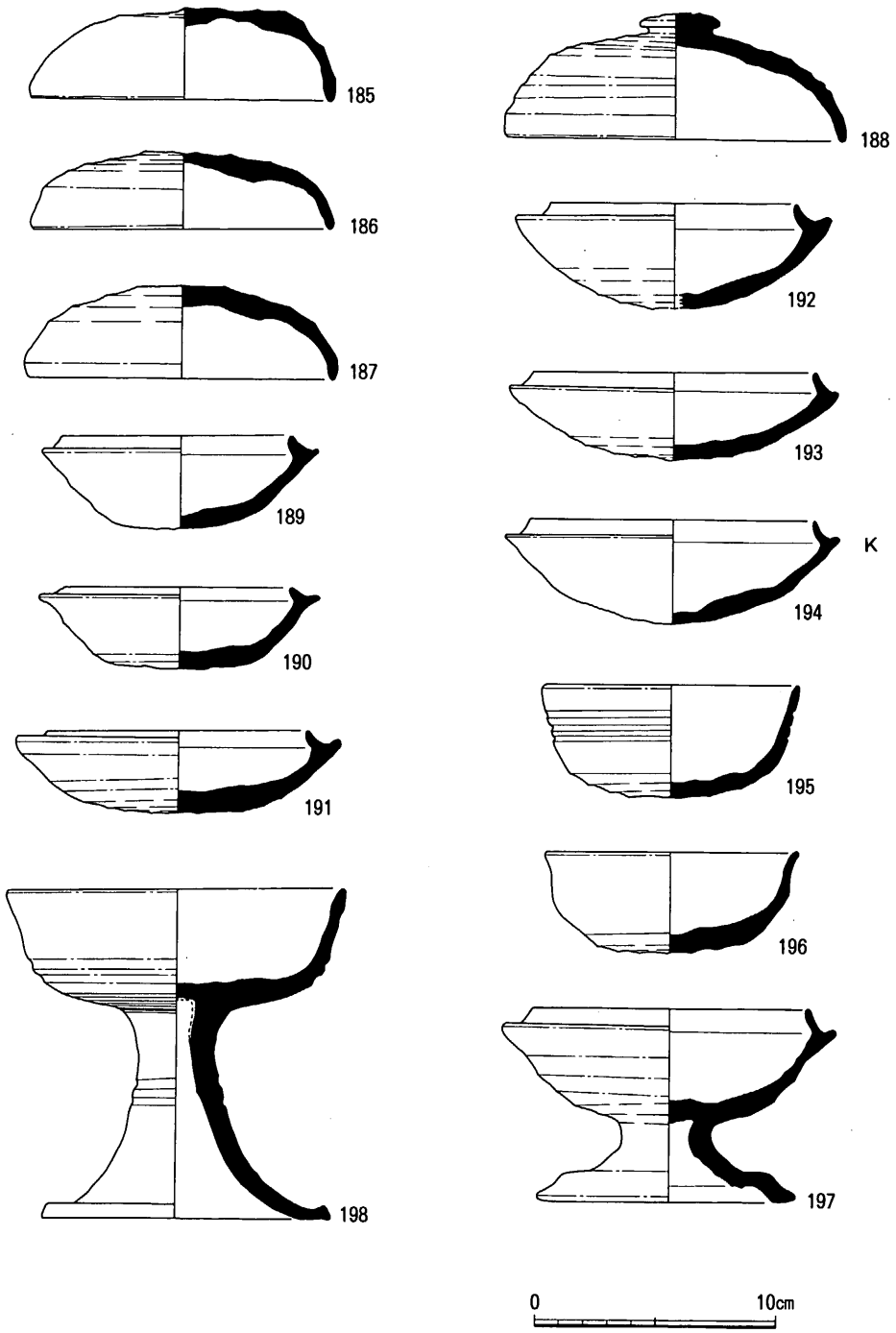
甕（201・204・212）　201は頸部に2条の沈線をめぐらす。胴部外面は格子目タタキに粗いカキ目を少し加える。内面は同心円文当て具痕。胴部内面中位に、他の部分と色の異なる部分が幅約10cmの帯状に認められる。204は口径37.2cmを測る。頸部上半を沈線で区画し、不規則な連続波状文をヘラで施す。212は頸部に3条の沈線がめぐる。ヘラ記号あり。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。

M群

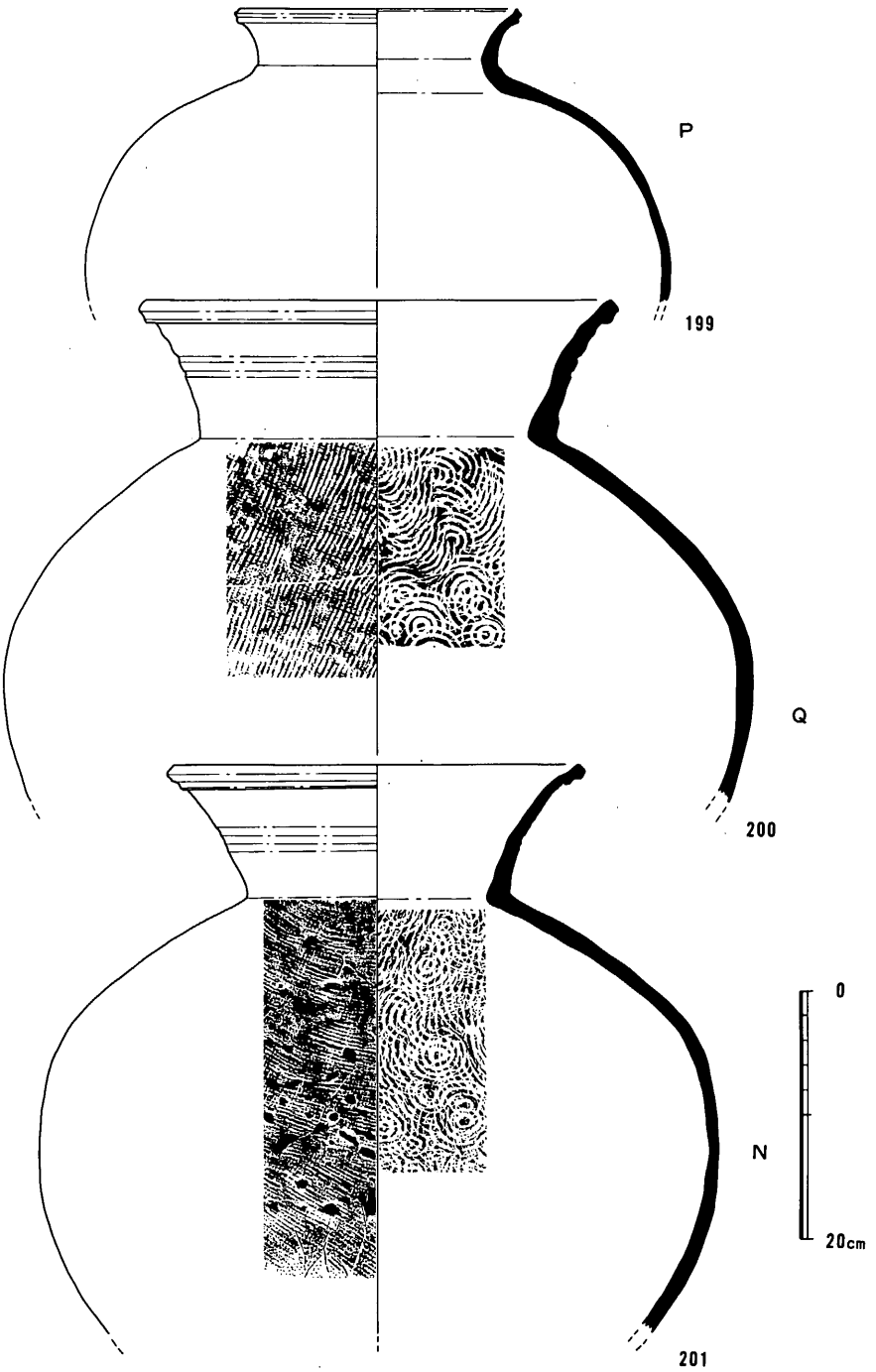
須恵器

杯蓋（160～168）　160～164はかえりを持たない。164は口径14.3cm、器高5.2cmと大きい。160と161は天井部外面ヘラ切り後ナデ、162～164は回転ヘラケズリを施す。いずれもその他を回転ナデとナデで仕上げる。165～168はかえりを持つ。165がやや小ぶりである。調整はいずれも天井部外面がヘラ切り後ナデ、他の部分は回転ナデとナデ。

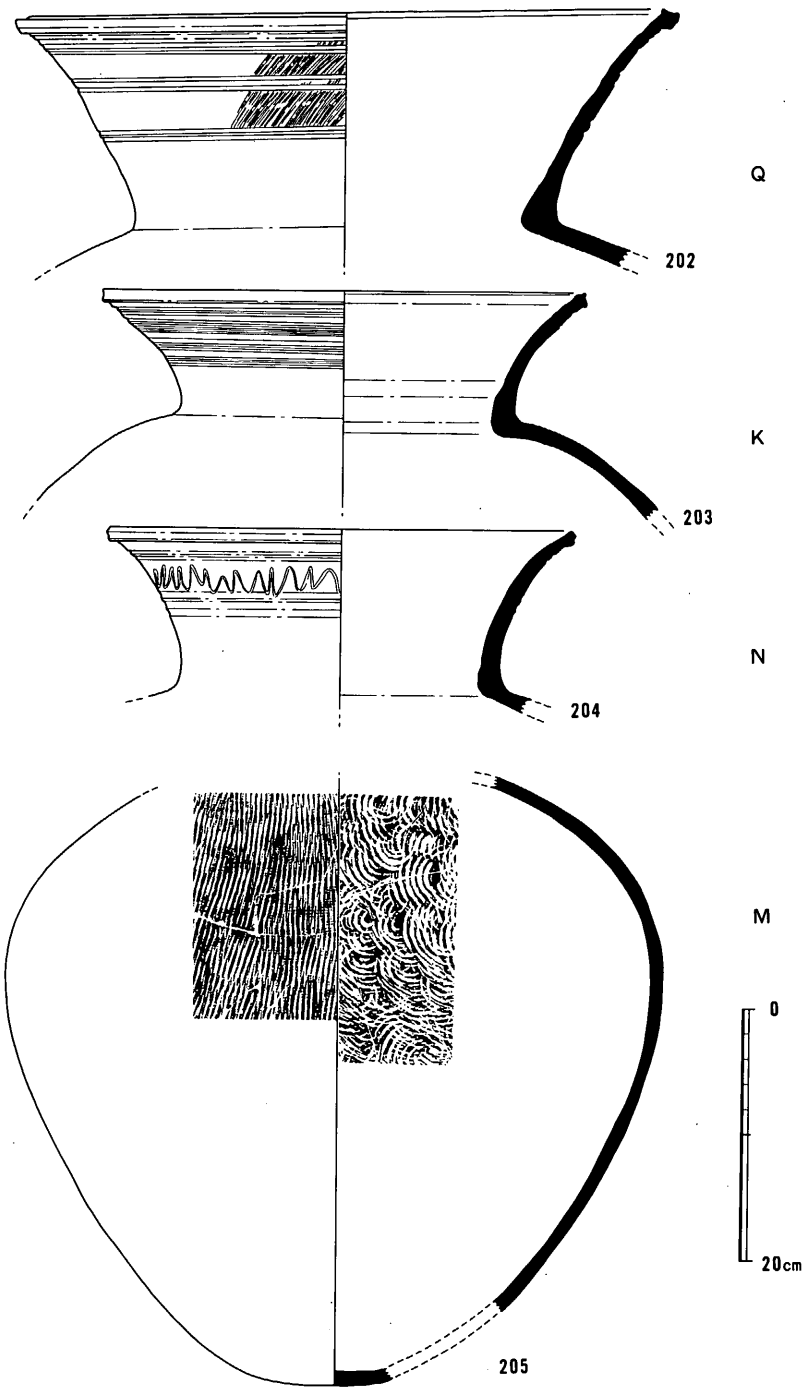
杯身（169～178）　169～177は立ち上がりがある。大きさに大差はないが、169と170が最大径



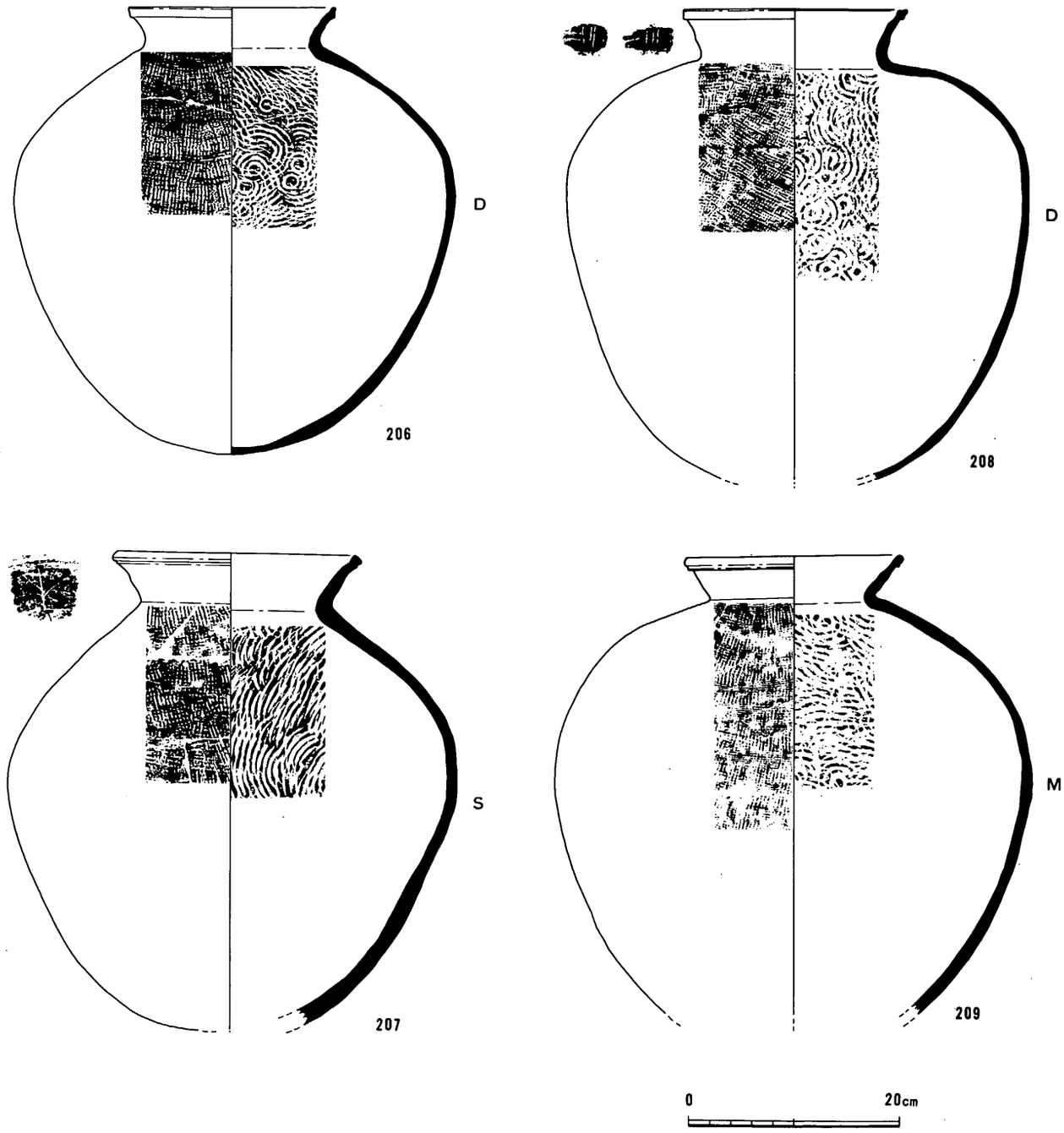
第151図　大溝出土土器実測図⑰（1/3）



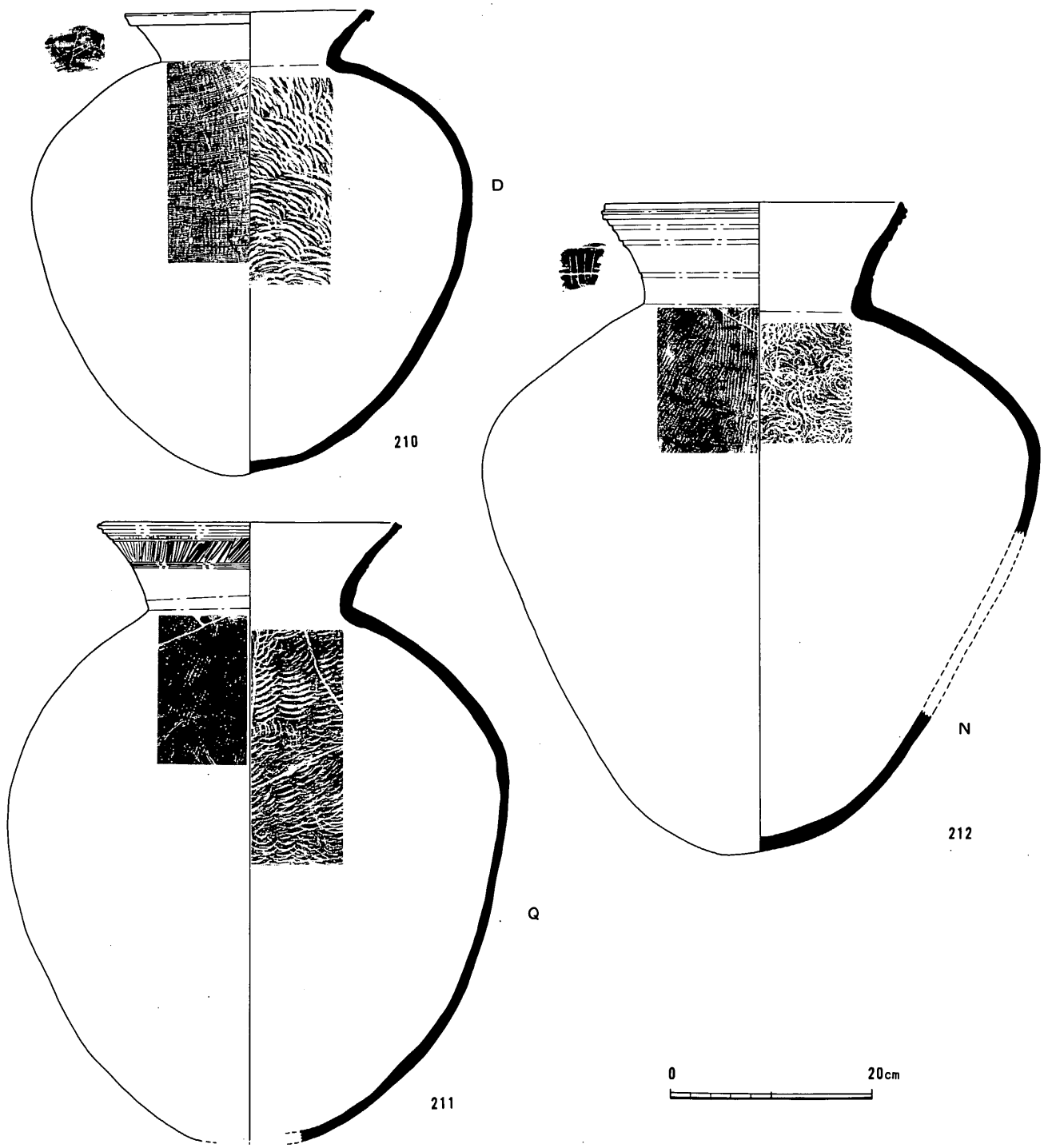
第152図　大溝出土土器実測図⑱（1/6）



第153図　大溝出土土器実測図⑲（1/6）



第154図　大溝出土土器実測図⑳（1/6）



第155図　大溝出土土器実測図㉑（1/6）

12cm以下である。172を除いて底部は平坦である。調整は、174・176が底部外面に回転ヘラケズリを施す。他の底部外面はヘラ切後ナデ。天井部外面以外の部分は、いずれも回転ナデとナデで仕上げる。178は体部がわずかに内湾する。外面に3条の沈線がめぐる。底部外面に回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデで仕上げる。

円面硯（179）　器高3.4cm、外堤径8.7cmを測る。陸部と海部は明瞭に分かれる。底部外面はヘラ切り後ナデ、その他の部分を回転ナデで仕上げる。

甕（205・209）　205は口頸部を欠く。胴部外面は平行タタキに少しカキ目を加える。内面は同心円文当て具痕。209は頸部にヘラ記号がある。胴部外面は格子目タタキにカキ目を加える。内面は同心円文当て具痕が残る。

土師器

甕（180～182）　180と182は図上復元した。180は口縁部をヨコナデ、胴部外面ハケ、内面をヘラケズリする。181と182は器面の磨滅が激しい。181は胴部外面にハケ、内面にヘラケズリ、182は胴部外面にハケの痕跡が認められる。

L群

須恵器

杯蓋（183）　口径12.0cm。天井部外面はヘラ切り後ナデ。その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

土師器

甕（184）　これも図上復元した。口縁部は緩く外反する。調整は、口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ、内面はヘラケズリである。

K群

須恵器

杯蓋（185～187）　口径12.4～12.7cmを測る。いずれも天井部外面に回転ヘラケズリを施す。その他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。

蓋（188）　高杯の蓋と思われる。つまみは低くボタン状を呈し、中央がくぼむ。天井部外面に回転ヘラケズリを施す。その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

杯身（189～196）　189～194は立ち上がりがある。189と190は最大径が12cm以下である。底部外面に回転ヘラケズリを施すものは191～193、その他はヘラ切り後ナデる。いずれも他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。195・196は立ち上がりがない。195は体部が直線状に外に開き、3条の沈線がめぐる。196の体部は緩い「S」字状を呈する。ともに底部外面に回転ヘラケズリを施す。

高杯（197・198）　197は短脚で蓋があるもの。脚端部を平坦に作る。杯部の底部外面に回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデとナデで仕上げる。198は長脚で蓋がないもの。脚部中位に

2条の浅い沈線をめぐらす。杯底部外面にカキ目。他を回転ナデとナデで仕上げる。

甕（203）　口径38.2cmを測る。頸部上半部に粗いカキ目と2条の浅い沈線をめぐらす。胴部外面は格子目タタキにカキ目を加え、内面は同心円文当て具痕が残る。

一括出土土器

須恵器

杯蓋（213～221）　かえりを持つものと持たないものがある。天井部外面に回転ヘラケズリを施すのは214、216、217～219である。

蓋（222）　壺類の蓋と思われる。天井部外面に回転ヘラケズリを施す。

杯身（223～232）　立ち上がりのあるものとないものがある。底部外面に回転ヘラケズリを施すのは224・225・227。226・229は底部に手持ちヘラケズリを施す。

鉢（233）　口径と器高の比率から鉢とした。底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデとナデ。

高杯（234・235）　杯底部外面の調整は、234がカキ目、235が回転ヘラケズリである。ともに他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

𤭯（236）　脚が付くが大半を欠く。胴部外面は孔の少し上までカキ目を施す。

平瓶（237）　口頸部を欠く。底部は丸味を持ち回転ヘラケズリを施す。

すり鉢（238・239）　238は底部外面をヘラ切り後ナデる。体部に3条の沈線がめぐる。239は底部中央部を欠くが、外面はヘラ切り後ナデ。体部はカキ目の後4条の浅い沈線をめぐらす。

横瓶（240）　胴部外面は平行タタキの後カキ目、内面は同心円状当て具痕が残る。

壺（241）　磨滅のため調整が不明瞭だが、外面肩部から体部下位にかけてカキ目が残る。

土師器

甕（242・243）　242は図上復元した。口縁部はヨコナデ、胴部外面ハケ、内面はヘラケズリを施す。243は平底である。調整は口縁部はヨコナデ、胴部外面ハケ、内面はヘラケズリ。

甑（244）　底部に穿孔が見られる。調整は、口縁部をヨコナデ、胴部外面ハケ、内面はヘラケズリである。把手は貼り付け。胴部外面に煤が付着している。

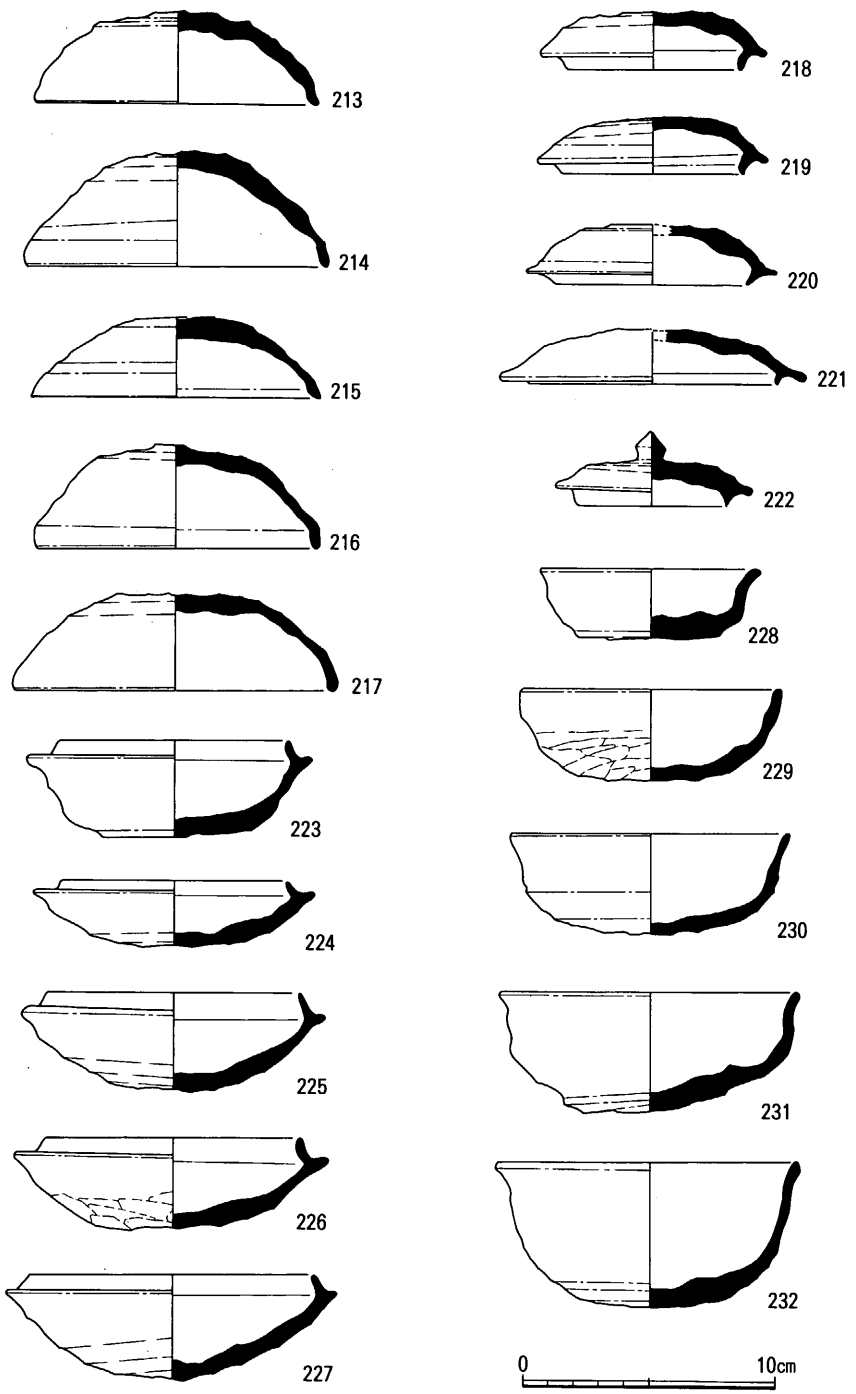
不明土器（245）　土師質のものなので土師器の項に入れた。残存高27.5cmを測る。器壁が厚く、全体的に粗い作りである。調整は、外面がハケ、内面は指でナデる。蓋受け状の部分は貼り付けた後ナデて調整している。用途は不明であるが、何名かの方々から陶棺ではないかとの御教示をいただいた。

土製品

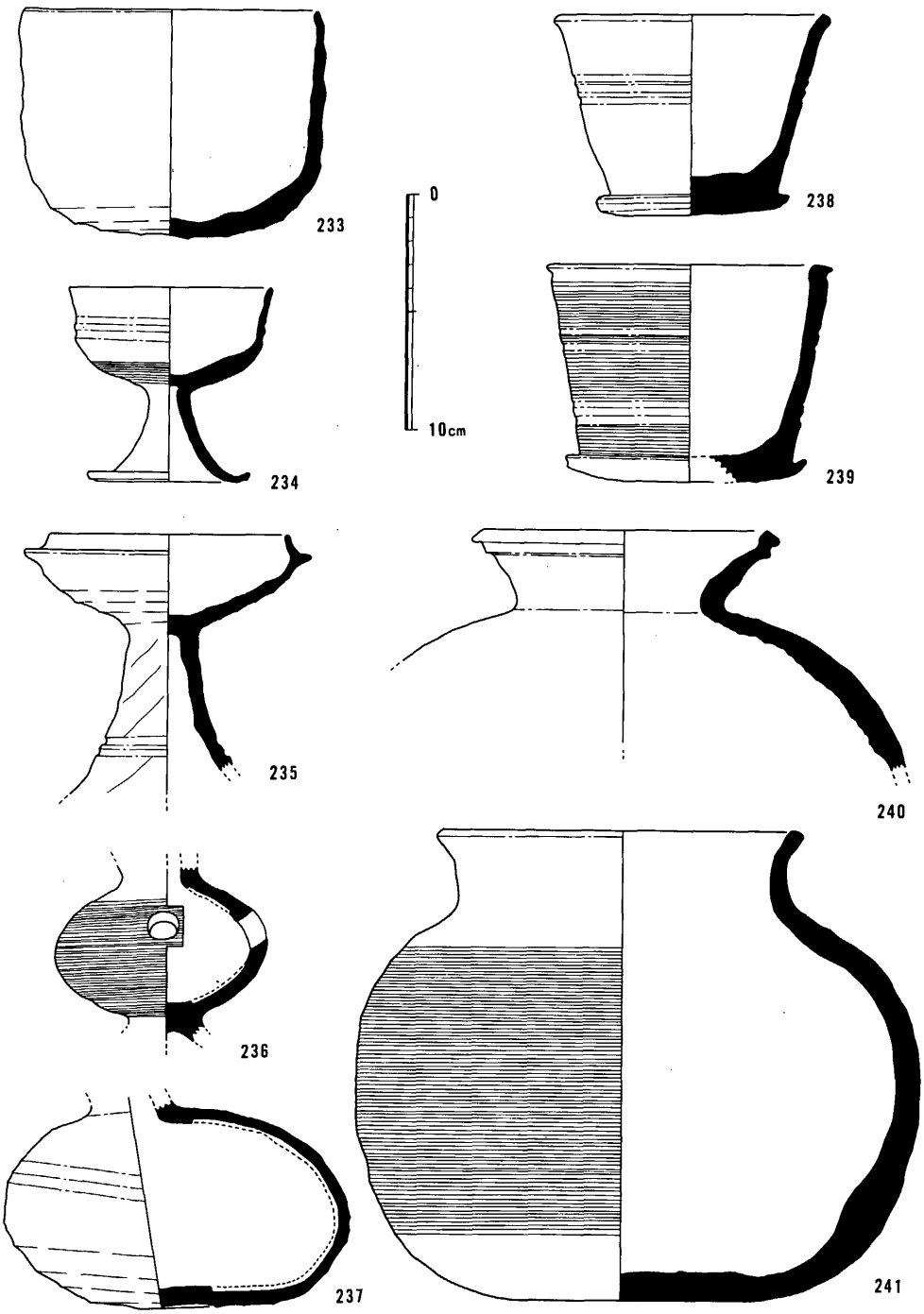
紡錘車（246）　直径3.6cm、厚さ2.2cmを測る。土師質で淡橙色を呈するが、表面は磨滅している。

石製品

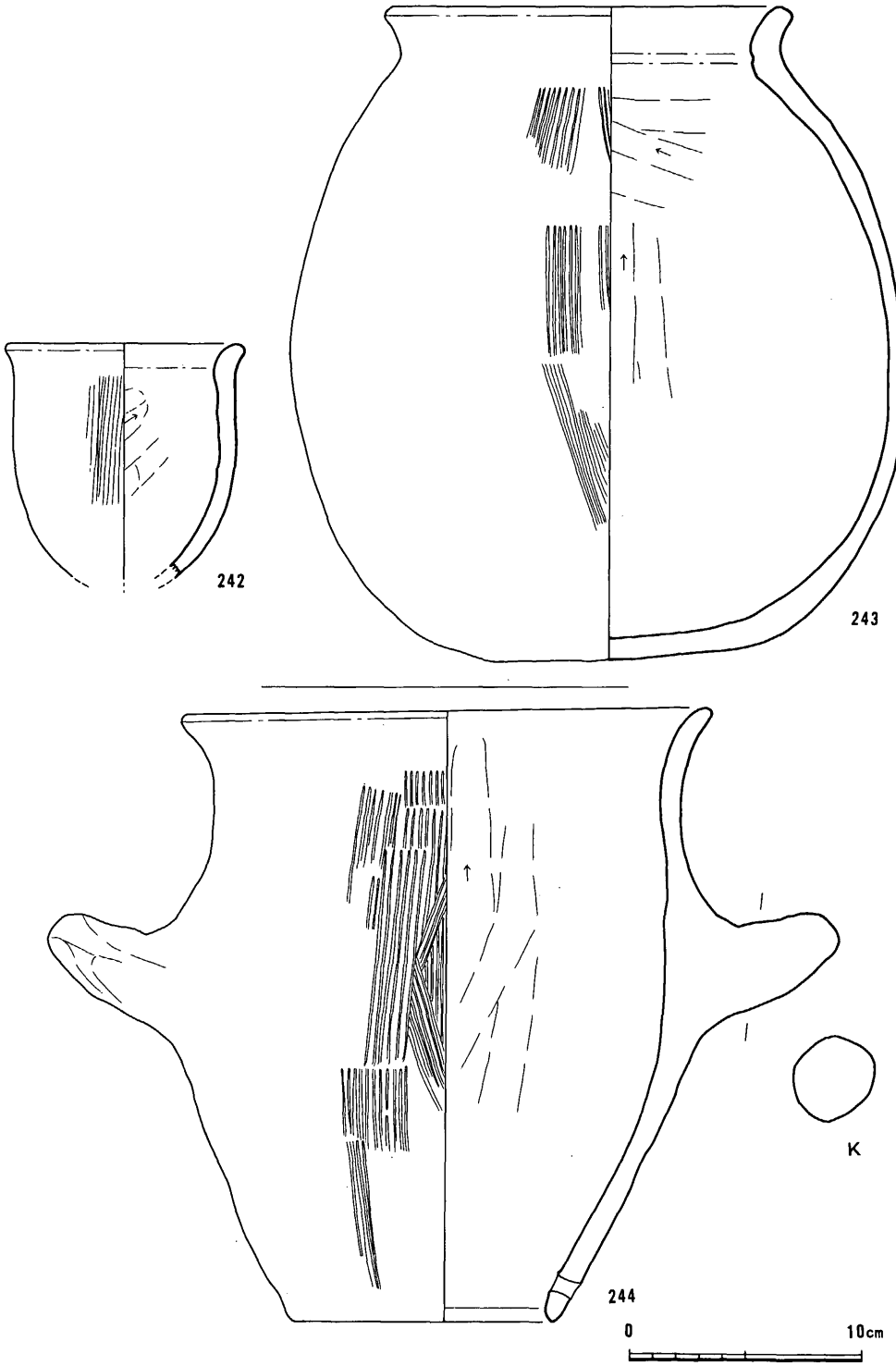
子持勾玉（247）　滑石製。背部に4個、腹部に2個の突起を持つ。長さ3.6cm、厚さ0.6cm。



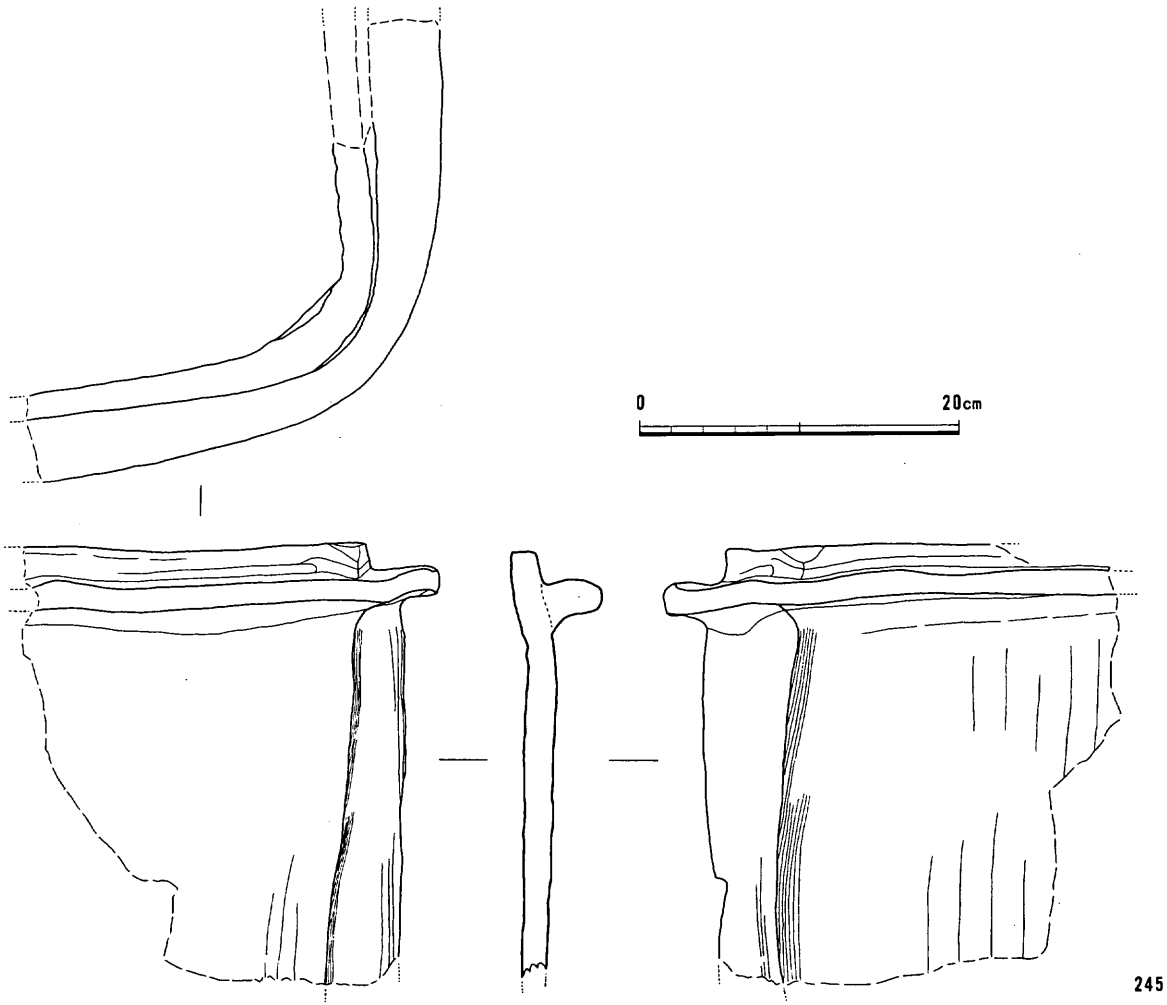
第156図　大溝出土土器実測図㉒（1/3）



第157図　大溝出土土器実測図㉓（1/3）



第158図　大溝出土土器実測図㉔（1/3）



第159図　大溝出土土器実測図㉕（1/4）

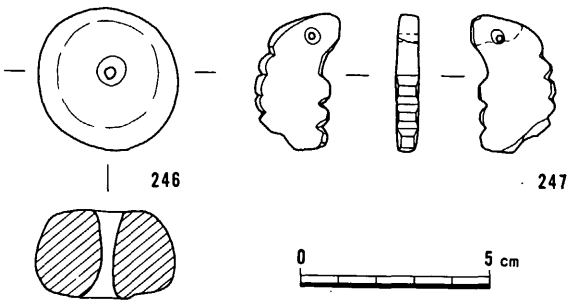
〈註1〉A群は調査区外（北側）へ続いている可能性が大きい。

(2)—④　竪穴状遺構

広く浅いプランを持つ遺構で、竈を伴わないものを竪穴状遺構とした。

1号竪穴状遺構（第161図、図版28）

調査区の南端部近く、8号住居跡の北東で検出された。両者の距離は、最も近い部分で約1mである。2号竪穴状遺構と切り合っているが、検出時に判別できなかったため一緒に掘ったが、出土遺物の検討から本遺構の方が古いことがわかった。ゆがんだ正方形を呈し、最大値で6.5m×6.4mを測る。壁高は5cm～10cm程である。床面は高低差と細かい凹凸が認められた。床面で多数のピットを検出したがいずれも浅い。遺物は埋土中から出土した。



第160図　大溝出土土製品・石製品実測図（1/2）

出土遺物（第162図、図版76）

須恵器

杯蓋（1～4）　2とその他のものには形態的な差がある。天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデ、体部内外面回転ナデを行うものである。2は天井部と体部の境に明瞭な沈線を持つ。口唇部は丸く終わる。天井部の回転ヘラケズリの範囲は4が最も広く1が最も狭い。

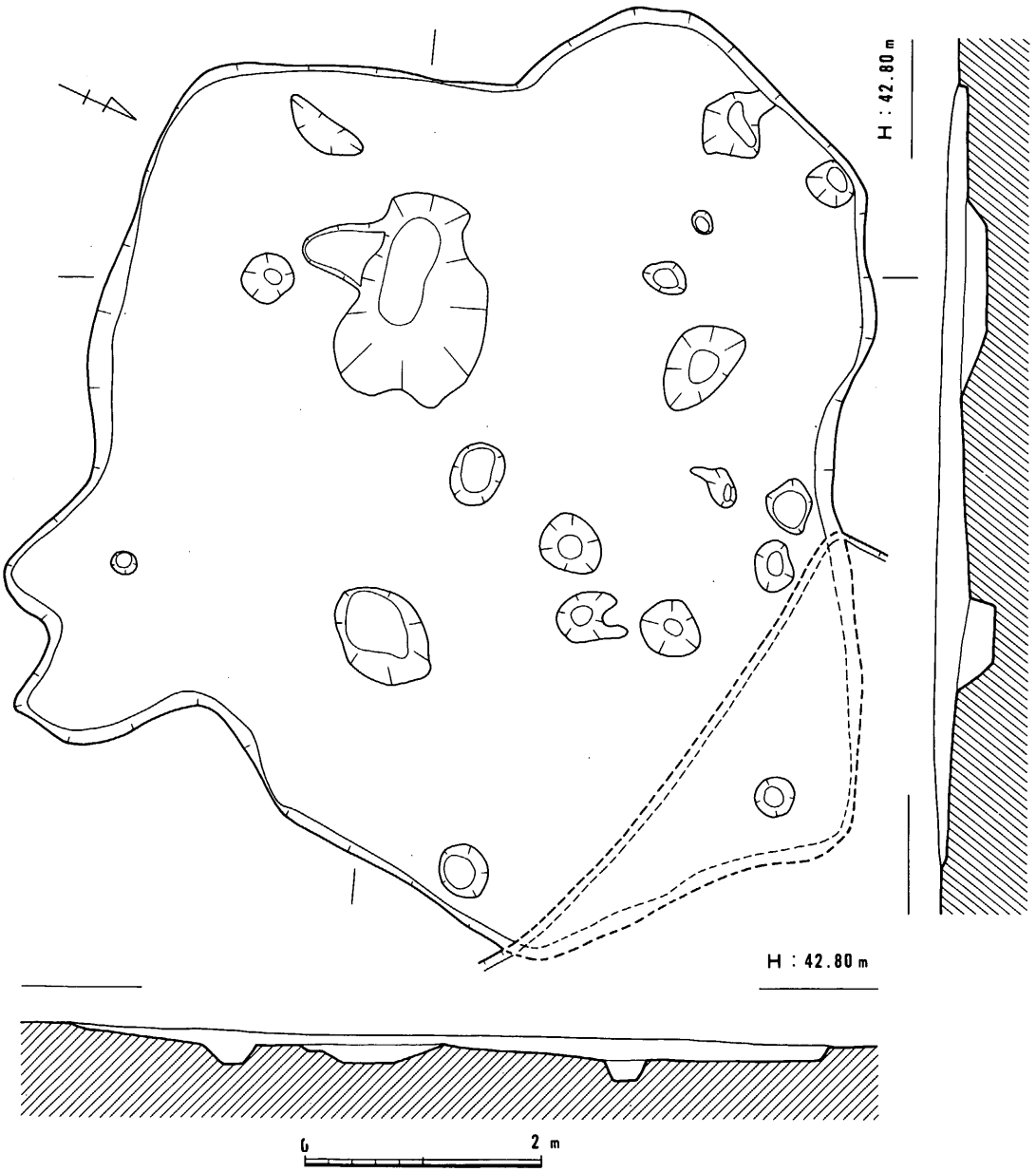
杯身（5～9）　立ち上がりが低くかつ内傾するものである。立ち上がりは基部から端部まで厚さの一様なもの（7）と基部が太く端部が細くなるもの（9）がある。また、立ち上がり方には湾曲しながら立つもの（5・6）と直線的に立ち上がるもの（8・9）がある。底部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ、その他は回転ナデを行う。

甕（10）　上半部の丸味が足りない胴部を持つもので、孔の上部付近に沈線をめぐらす。胴上半部はカキ目調整、下半は回転ヘラケズリ、頸部にはシボリ痕が見えるがナデを行う。

甕（11・12）　11は二重口縁風に口縁部外側を折り曲げる。口頸部内外面を回転ナデ、胴部外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。12は口縁端部外側に粘土を貼り付け凸帯としている。口頸部内外面を回転ナデ、胴部外面は平行タタキのあとカキ目、内面は同心円文当て具痕が残る。

土師器

甕（13～16）　13～15は小形の甕で、外反する口縁部の比較的長いもの（13）と短いもの（14・15）がある。調整もやや違い、13は口縁部上半内外面をヨコナデし、口縁部外面下半と胴部外面をハケメ調整、胴部内面を指オサエの後ヨコナデを行う。14・15は胴部内面を斜め上がりのヘラケズリを行う。15は長胴の甕で短く外反する口縁部を持つ。口縁部内面をハケメ調整、外

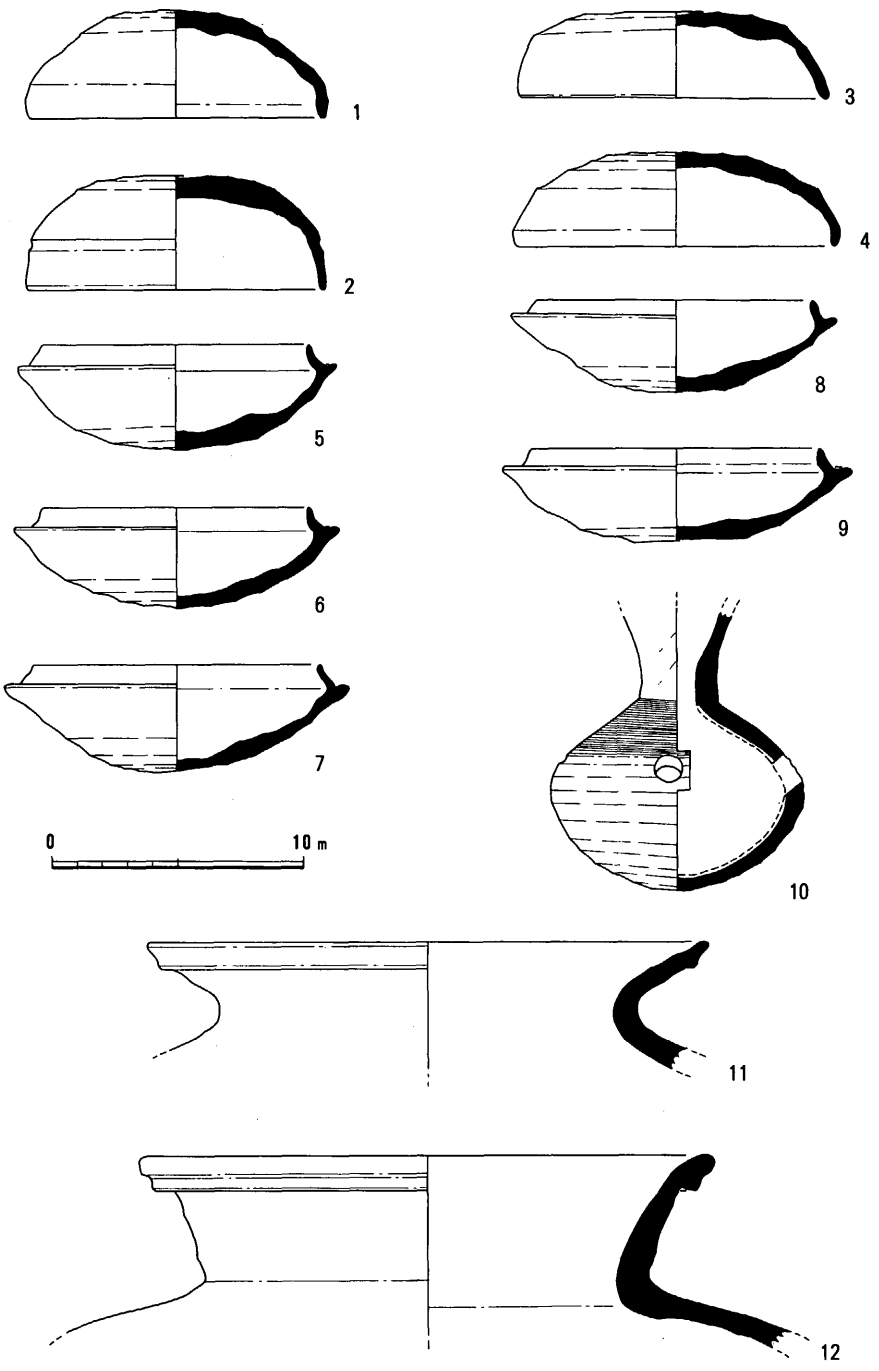


第161図　1号竪穴状遺構実測図（1/60）

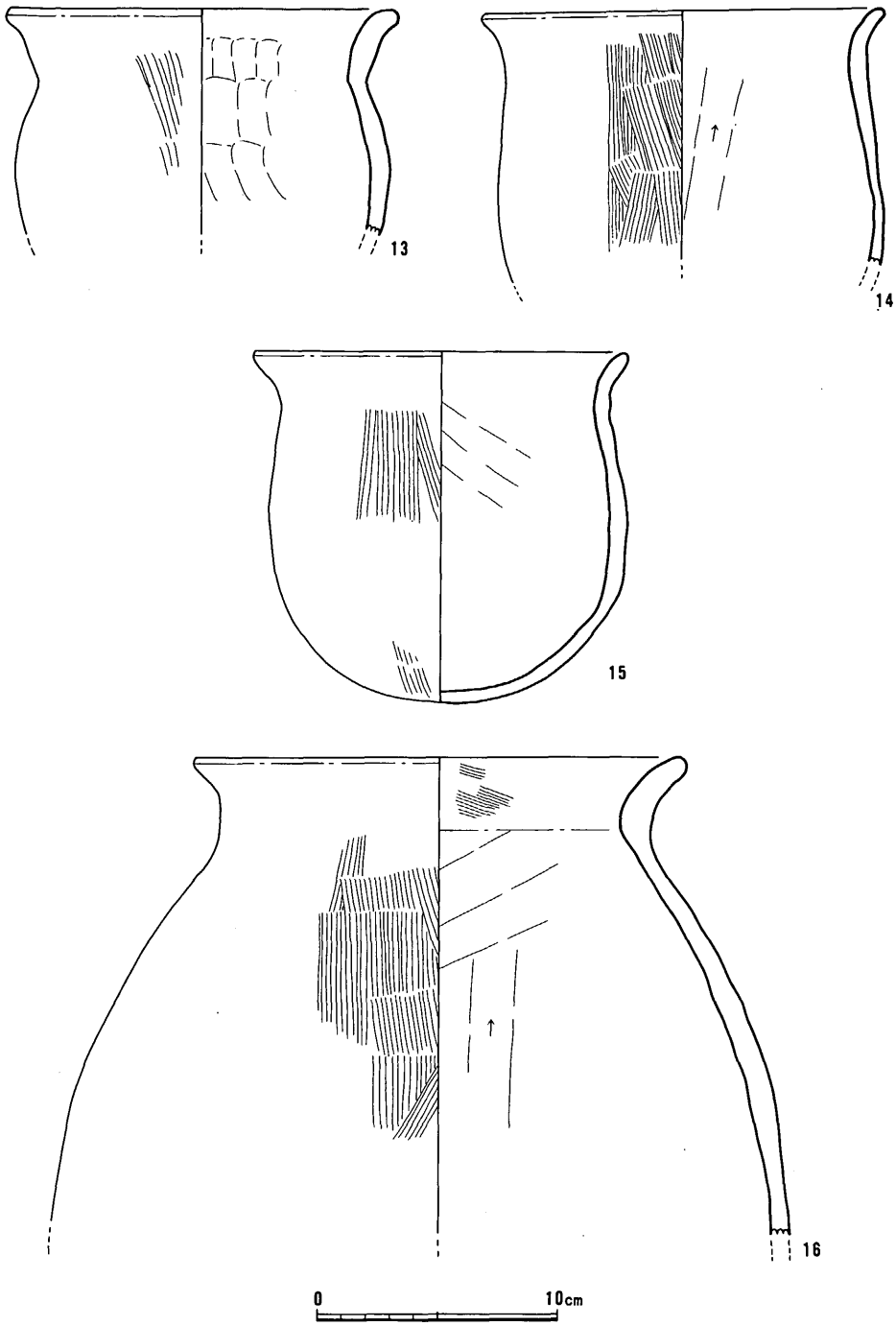
面をヨコナデ、胴部外面をハケメ調整、内面をヘラケズリするものである。

石製品（第129図、図版79）

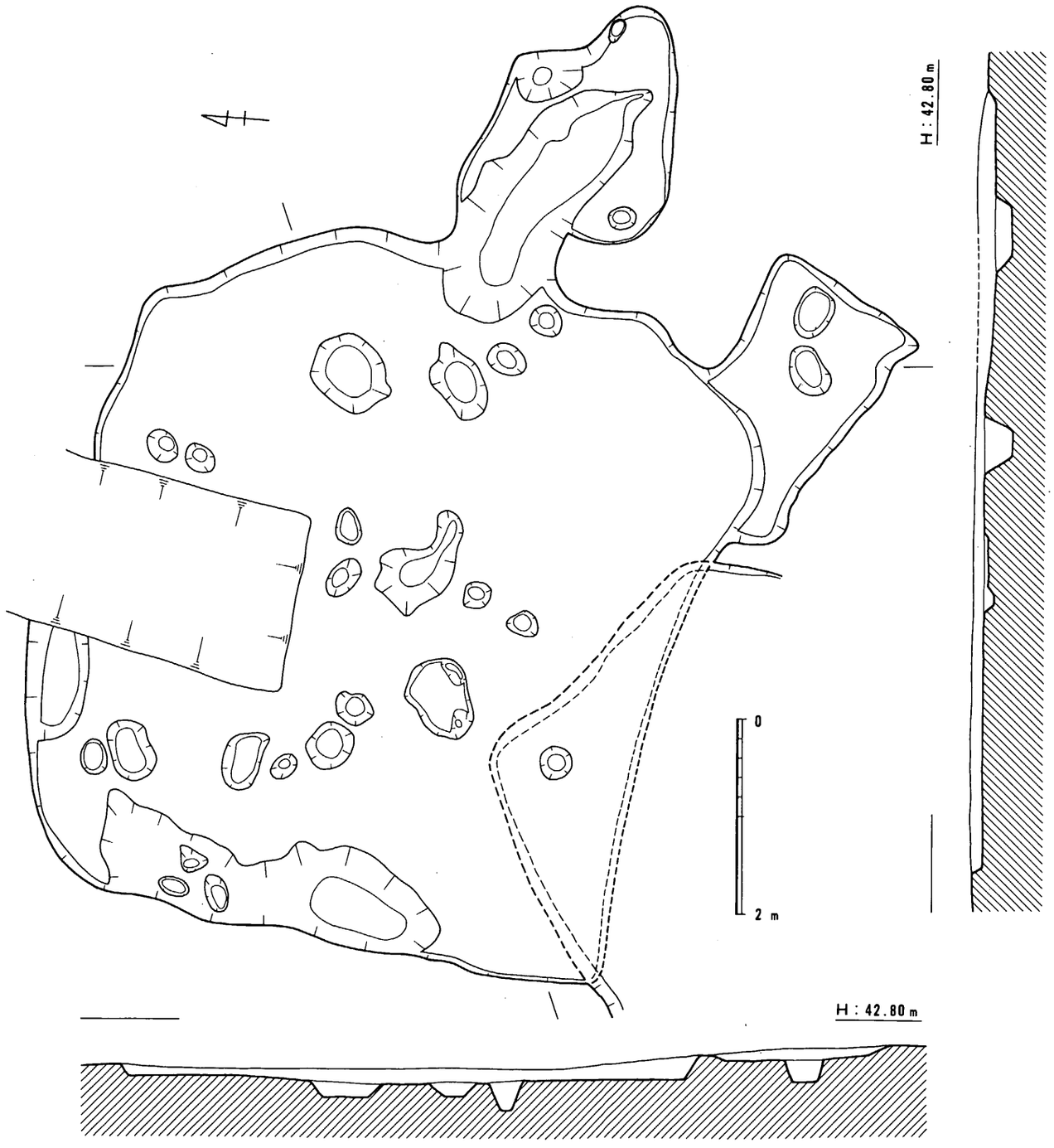
勾玉（2）　コの字形を呈するもので、黒色の石を用いている。削って成形しているが、背側は稜を作らず平滑にし、腹側は削り痕が残る。穿孔は両面穿孔である。J字頭風の線が見られ



第162図　1号竪穴状遺構出土土器実測図①（1/3）



第163図　1号竪穴状遺構出土土器実測図②（1/3）



第164図　2号竪穴状遺構実測図（1/60）

るが、傷も多く明らかではない。

2号竪穴状遺構（第164図）

1号竪穴状遺構との新旧関係は前述の通りである。また、10号住居跡とも切り合っており、やはり2号竪穴状遺構の方が新しい。形状は、隅丸の正方形とも思われるが、東側に突出した部分が2カ所認められた。その部分を含んだ最大値は10.2m×6.6mとなる。壁高は8cm～10cm程である。床面には高低差があるがおおむね平坦である。床面で多数のピットを検出した。遺物は埋土中から出土した。

出土遺物（第165図、図版77）

須恵器

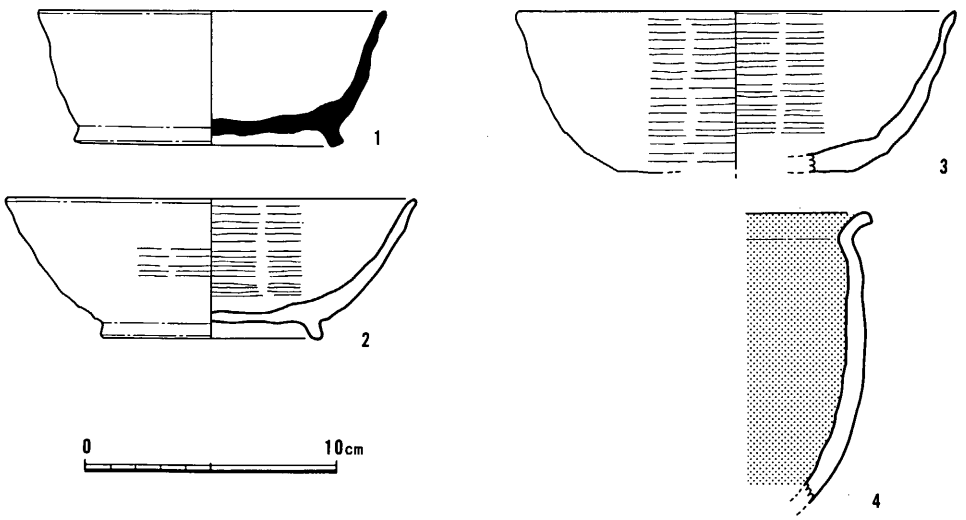
杯身（1）　高台が比較的高く外へ踏んばるものである。体部はあまり外開きせず、回転ナデで仕上げる。底部外面はヘラ切り後ナデ、内面にもナデが行われる。

土師器

椀（2・3）　2は高台の付くもので、やや丸味を持った体部からなる。体部は内外面ヘラミガキを行う。底部外面は回転ヘラケズリ後ナデか。3は無高台のもので、体部はやはり内外面をヘラミガキする。底部はごく一部しか残存していないため、やや判然としないが、回転ヘラケズリしているものと思われる。

黒色土器

鉢（4）　小破片である。燻しているのは内面だけであるが、外面も暗褐色を呈し、煤様のものが付着している。内面のヘラミガキは口縁部が横方向、胴部が斜め方向である。



第165図　2号竪穴状遺構出土土器実測図（1/3）

3号竪穴状遺構（第166図）

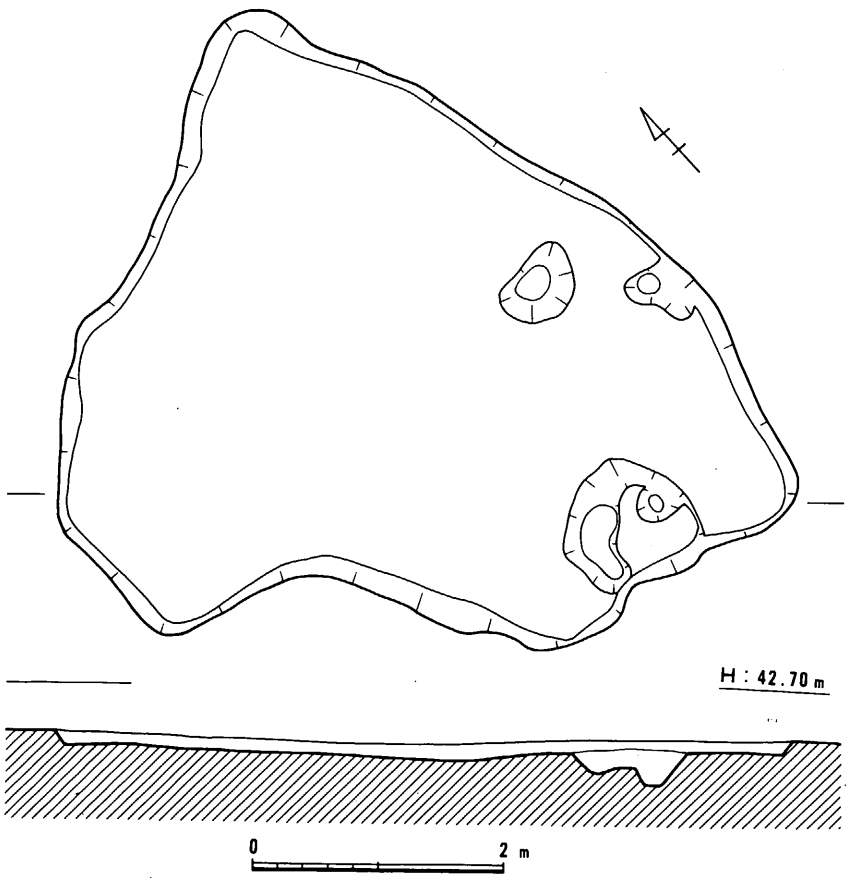
調査区の西端近く、14号・15号住居跡と隣接して検出された。前者との距離は約１m、後者とは約1.6mである。ゆがんだ長方形を呈し、最大値で5.6m×4.7mを測る。壁高は約0.1mである。床面には緩い凹凸が認められ、浅いピットが検出された。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物（第167図）

須恵器

杯身（１）　小破片であるが高台付きの杯身である。高台は底端部よりやや内側に付けられ、低いものである。内面はナデるが、外面は判然としない。

高杯（２）　杯部の小破片である。口縁端部上面を平坦にする特徴がある。底部の約２分の１を回転ヘラケズリする。



第166図　3号竪穴状遺構実測図（1/60）

4号竪穴状遺構（第168図）

23号住居跡の南側、約0.5mのところに位置する。東側と南側を明確にすることができなかったが、床面と思われる段のある平坦面を検出した。この平坦面は、最大値で5.3m×2.1mを測る。壁高は6cm～20cm程である。この遺構の埋土を掘り下げる途中で、SK07の平面プランが確認された。遺物は埋土中から出土した。

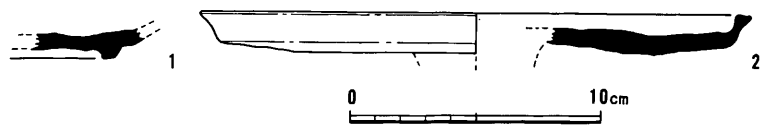
出土遺物（第169図、図版77）

杯蓋（1）　小さなつまみを付け、口縁端部は丸く作り、内面に浅い稜が入るだけのものである。天井部の回転ヘラケズリは行わない。

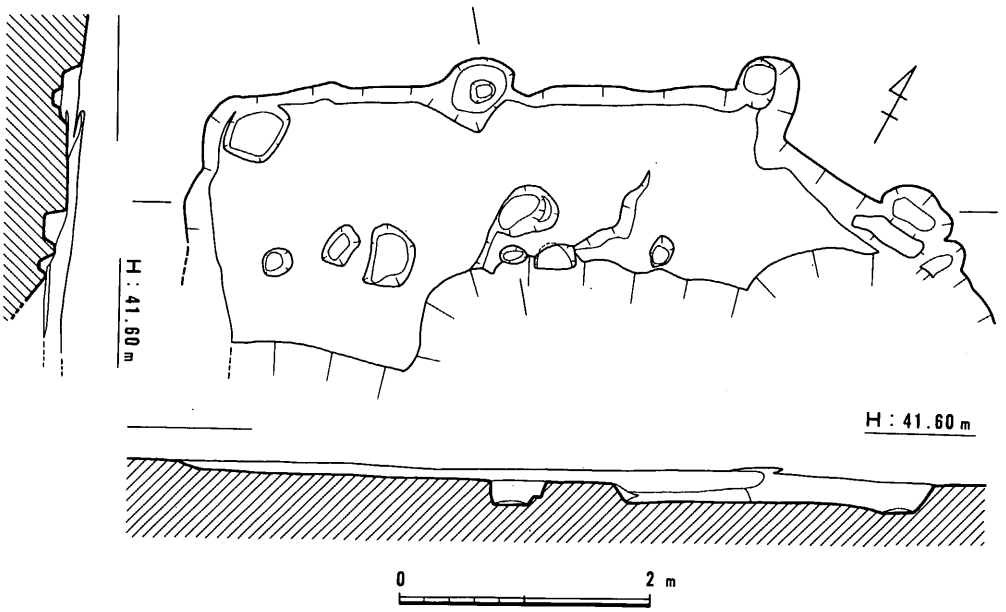
蓋（2）　体部がほぼ直角に折れるもので、口縁端部は丸味をおびる。天井部外面は粗いナデを行う。あまり作りの良いものではない。

杯身（3～6）　高台の付くものと付かないものがある。3は器高が低く、底部と体部の境が丸く作られるものである。底部内外面ともにナデを行う。4は高台と体部が一体となったような作りで、体部も直線的に外に開く。3に比べて器高も高い。底部外面はヘラ切り未調整である。5・6は高台の付かないもので、底部外面に粘土紐の巻き上げ痕と思われる渦巻状の沈線がある。粗くナデたような痕跡もあり、比較的平坦である。

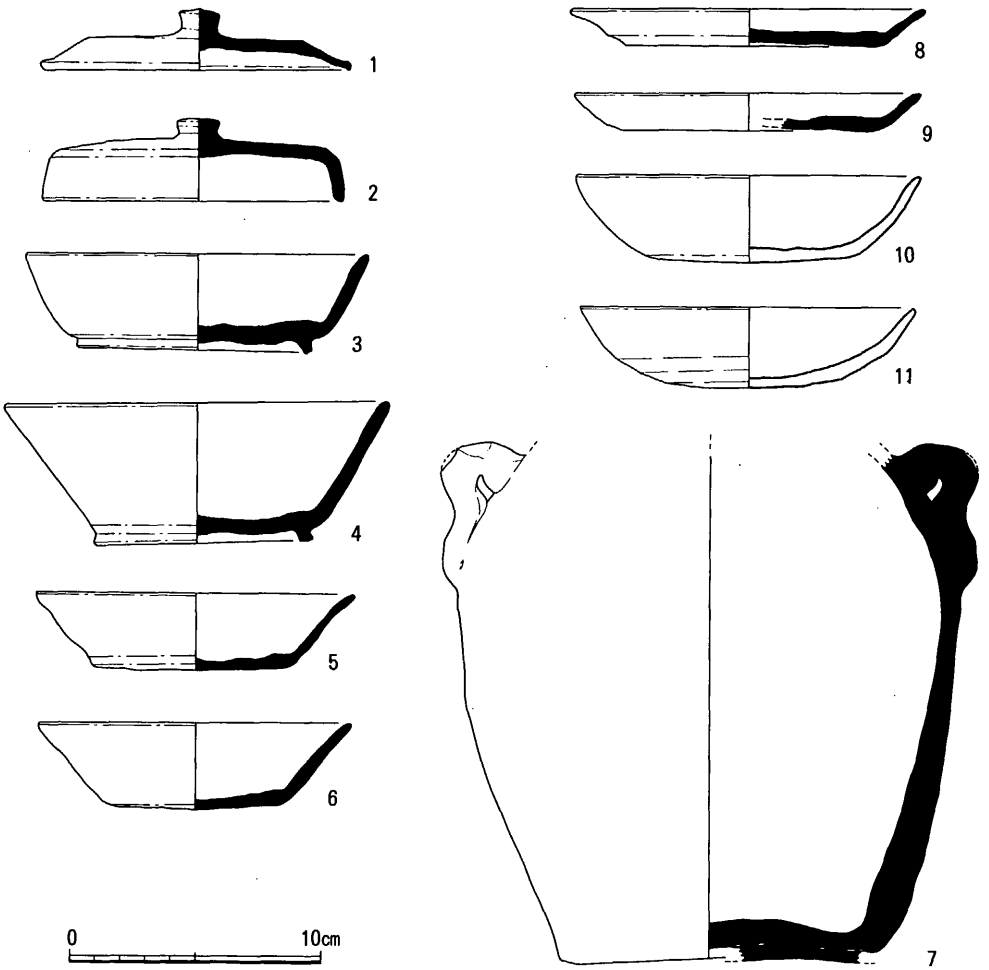
壺（7）　片方の耳



第167図　3号竪穴状遺構出土土器実測図（1/3）



第168図　4号竪穴状遺構実測図（1/60）



第169図　4号竪穴状遺構出土土器実測図（1/3）

を欠くが、双耳壺であろう。粘土紐を数字の3の字様にして貼り付けるがやや斜め向きに貼り付けている。胴部下半は粗い回転ヘラケズリ、その上はあまりていねいでない回転ナデを行っている。底部外面は粗いナデを行う。底部に焼成時に融着した須恵器片が見られる。

皿（8・9）　浅い皿である。8の底部外面には広範囲に板状圧痕が残るが、刻みが深く、板目の鋭い板でなでて通常のナデを軽く加えたものかもしれない。9にも一部板状圧痕が残る。

土師器

杯（10・11）　口径の割合に底径の小さいもので、底部外面を回転ヘラケズリする。体部内外面は磨滅のため調整不明だが、本体はヘラミガキを行っていたものと思われる。

(2)—⑤　土坑

SK（廃棄土坑）と形態的には大差ないが、出土遺物の少ないものを土坑とした。

3号土坑（第170図）

ゆがんだ楕円形を呈する。上端長軸長2.29m、短軸長1.79m、深さは最大で0.72mを測る。壁と床はともにしっかりしているが、遺構検出時に東側の部分を削りすぎた可能性がある。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。

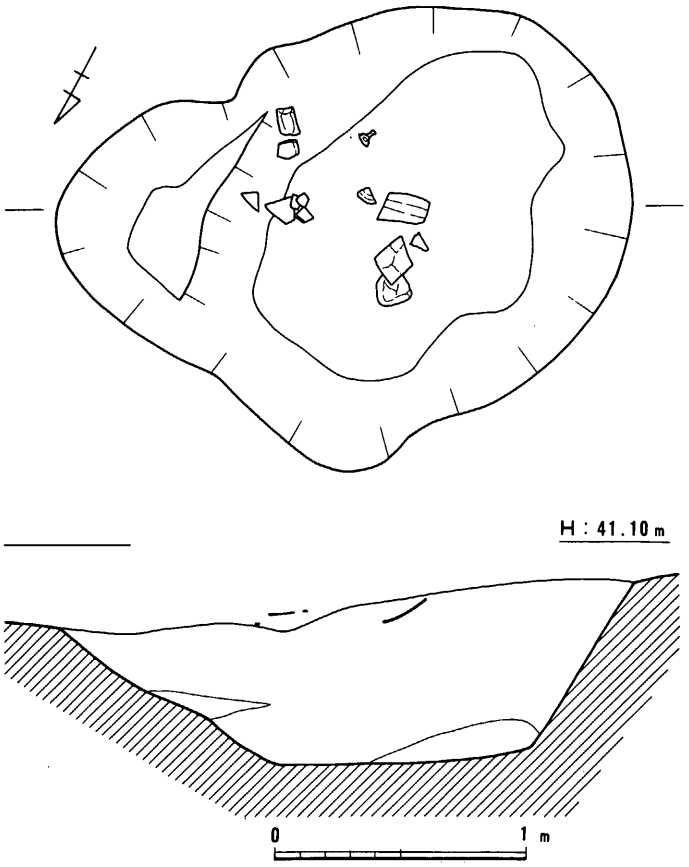
出土遺物（第175図）

須恵器

杯蓋（1）　身受けのかえりを持つ。天井部外面はヘラ状の工具でナデる。その他は回転ナデとナデで仕上げる。

杯身（2）　立ち上がりがある。底部外面はヘラ切り後ナデ。他は回転ナデで仕上げる。

高杯（3）　脚部のみ残る。脚端部は折り返さない。下位に2条の沈線がめぐる。内外面ともに回転ナデを施す。



第170図　3号土坑実測図（1/30）

10号土坑（第171図）

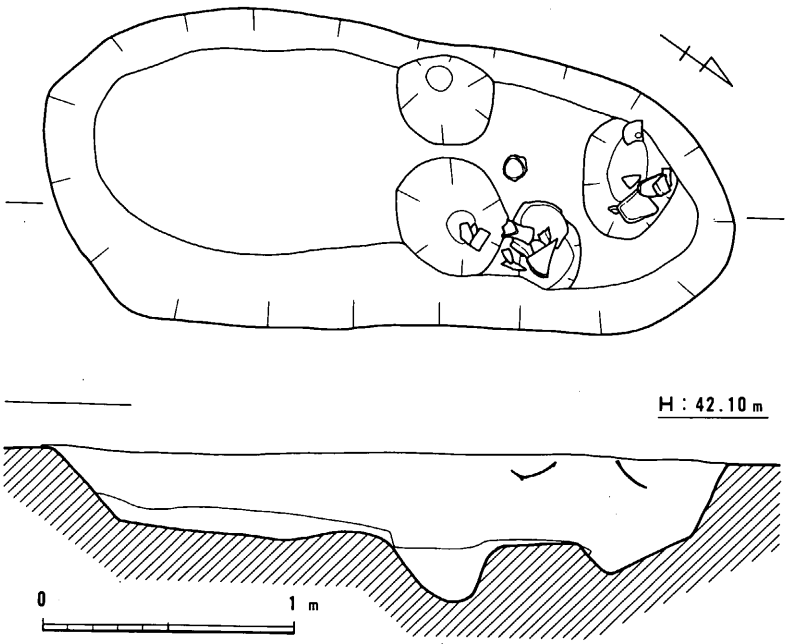
楕円形を呈する。上端長軸長 2.7m、短軸長1.15m、深さは最大で0.36mを測る。壁と床はしっかりしている。11号土坑と切り合っており、新旧関係は10号土坑の方が新しい。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。

出土遺物（第175図、図版77）

須恵器

杯蓋（4）　天井部外面に回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。

杯身（5）　底部外面はヘ



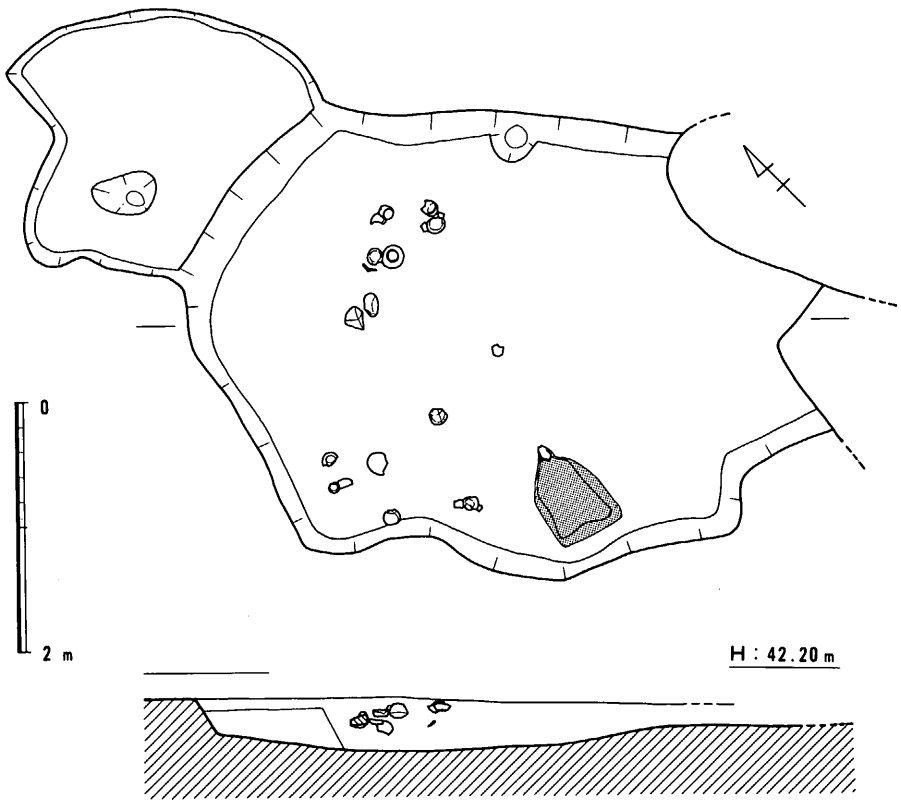
第171図　10号土坑実測図（1/30）

ラ切り後ナデ。他の部分は回転ナデとナデ。高台は貼り付け。

Ⅲ（6）　体部が直線的に外上方へ伸びる。底部外面には回転ヘラケズリを施す。

11号土坑（第172図）

北側に突出部を持つ楕円形を呈する。南東の部分を10号土坑と12号住居跡に切られる。



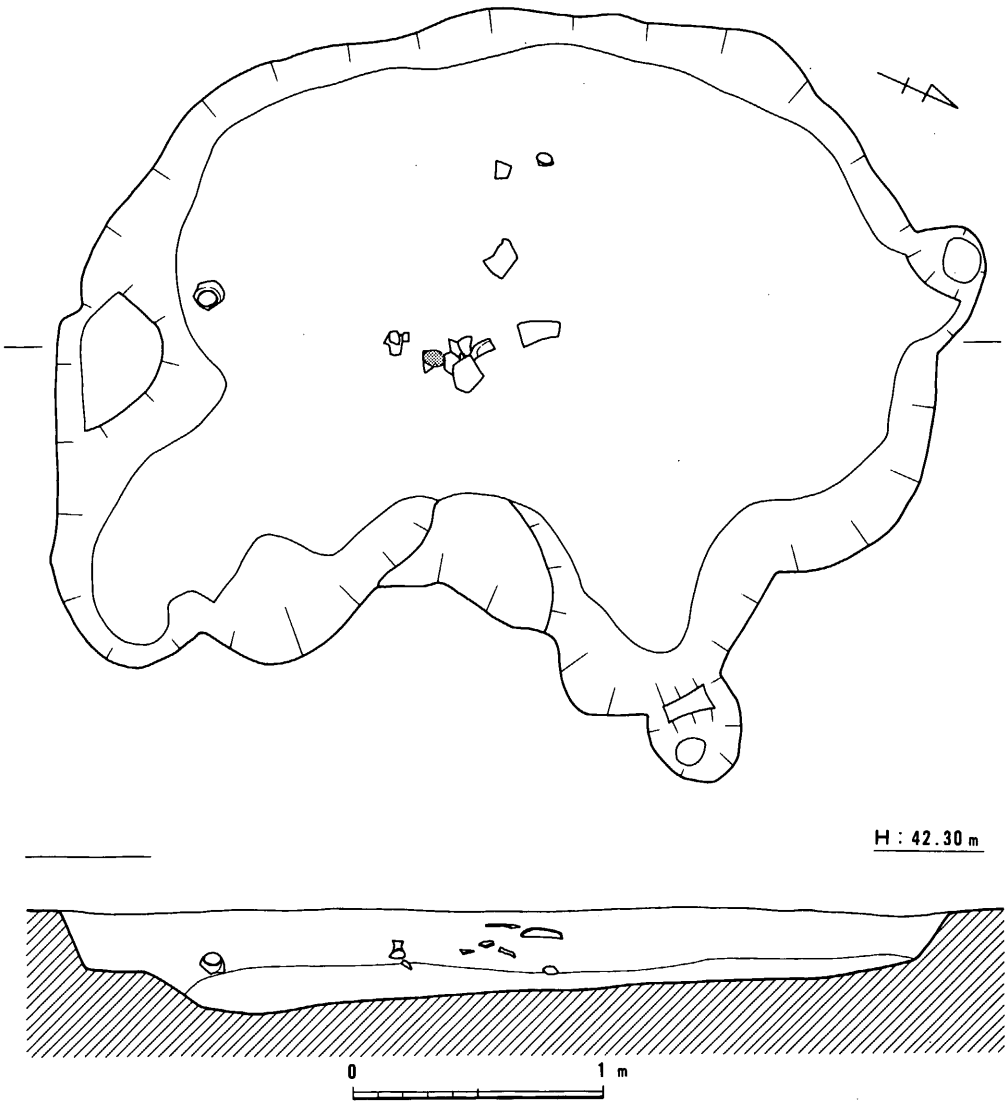
第172図　11号土坑実測図（1/60）

最大規模で7.2m×3.94mを測る。深さは最大で0.44mである。北側の突出部の深さは0.1m程である。壁・床はしっかりしている。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。

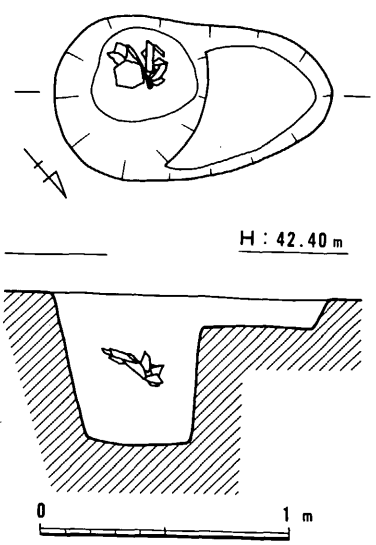
出土遺物（第175図、図版77）

須恵器

杯蓋（7～9）　7のみかえりを持たない。8・9のかえりは短く断面三角形を呈する。いずれも天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。



第173図　13号土坑実測図（1/30）



第174図　16号土坑実測図（1/30）

杯身（10～15）　10～13は高台が付く。10・11は体部が直線上に開く。12・13は体部が丸味を持ち、高台が高く踏んばる。13は体部中位から底部にかけて外面に回転ヘラケズリを施す。10～12は底部外面をヘラ切り後ナデる。14・15は高台が付かない。14は上げ底気味である。底部外面の調整は、ともにヘラ切り後ナデ。

皿（16）　体部が直線的に外に開く。底部外面はヘラ切り後ナデ。その他は回転ナデとナデ。

椀（17）　高台が付く。焼成不良のため磨滅が激しいが、底部外面に回転ヘラケズリ、内面に回転ナデの痕跡が残る。

13号土坑（第173図）

ゆがんだ楕円形を呈する。上端長軸長3.55m、短軸長2.47m、深さは最大で0.42mを測る。壁と床はしっかりしている。遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。

出土遺物（第176図）

須恵器

杯身（18）　底部外面をヘラ切り後ナデ、その他を回転ナデとナデで仕上げる。焼成不良で淡黄灰色を呈する。

皿（19）　体部は短く直線的に外に開く。底部外面ヘラ切り後ナデ、体部外面回転ナデ。内面に灰をかぶっており調整は不明。

高杯（20）　脚部のみ残る。内外面とも回転ナデを施す。シボリ痕が見られる。

16号土坑（第174図）

楕円形を呈する。上端長軸長1.11m×0.62mを測る。深さは最大で0.6mである。壁と床はともにしっかりしている。遺物は南側の深い部分の埋土中から出土した。

出土遺物（第176図、図版78）

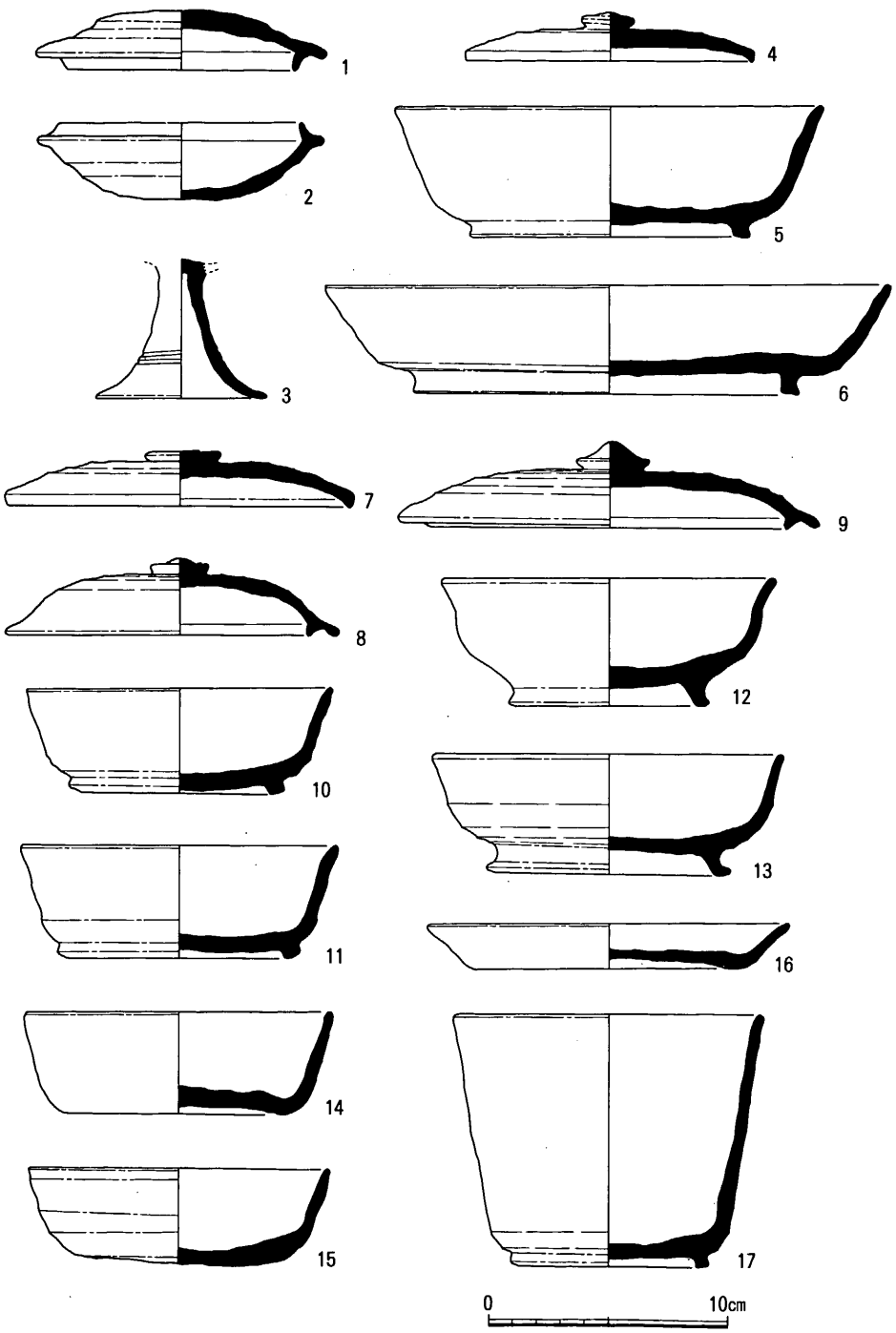
土師器

甑（21）　脚部から口縁部にかけて直線的に伸びる。口縁端部は丸く仕上げる。調整は、口縁部ヨコナデ、胴部外面縦方向のハケ、内面はヘラケズリである。把手は貼り付けた後、指とハケで調整する。

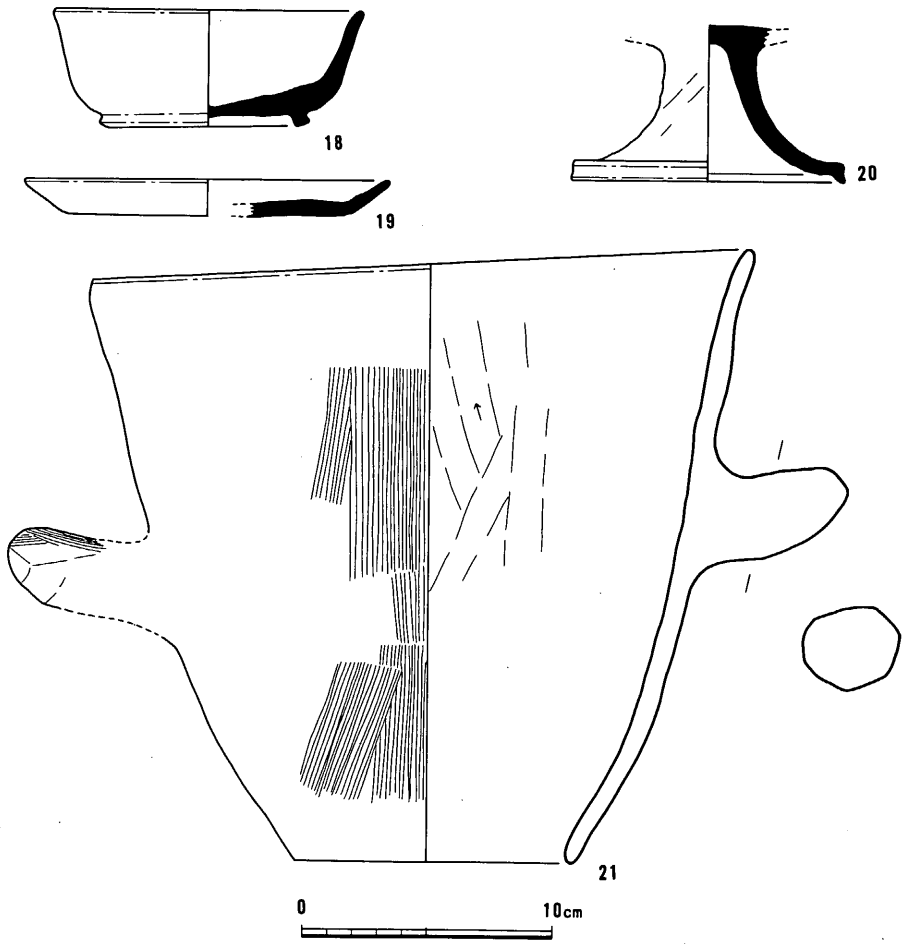
1号土坑（第177図）

ゆがんだ隅丸長方形を呈する。東側は調査区外へ伸びる。検出された限りでは3.27m×1.64m程を測る。床に段が認められる。

出土遺物



第175図　3号（1～3）、10号（4～6）、11号（7～17）土坑出土土器実測図（1/3）



第176図　13号（18～20）、16号（21）土坑出土土器実測図（1/3）

出土遺物は小片のため図示できなかった。

2号土坑（第177図）

ややゆがんだ円形を呈する。上端長軸長1.66m、短軸長1.58m、深さは最大で0.41mを測る。レンズ状の断面を呈する。

出土遺物

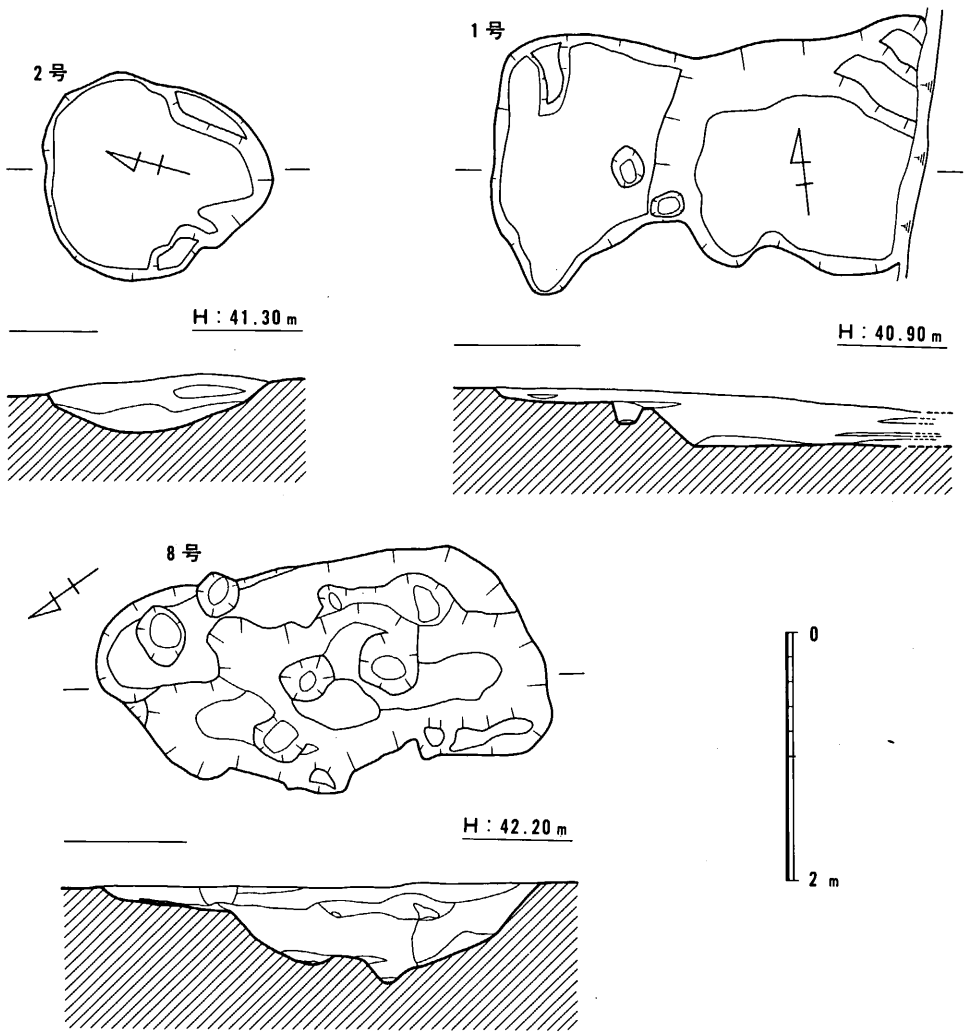
出土遺物は小片のため図示できなかった。

8号土坑（第177図）

ゆがんだ楕円形を呈する。上端長軸長3.53m、短軸長1.85mを測る。床は複雑な様相を呈し、深さは最大で0.76mを測る。

出土遺物

出土遺物は小片のため図示できなかった。



第177図　1号・2号・8号土坑実測図（1/60）

4号土坑（第178図）

隅丸の二等辺三角形とでも言うべき形を呈する。最大値で2.43m×2.24mを測る。床には段があり、深さは最大で0.33mを測る。大溝を切っている。

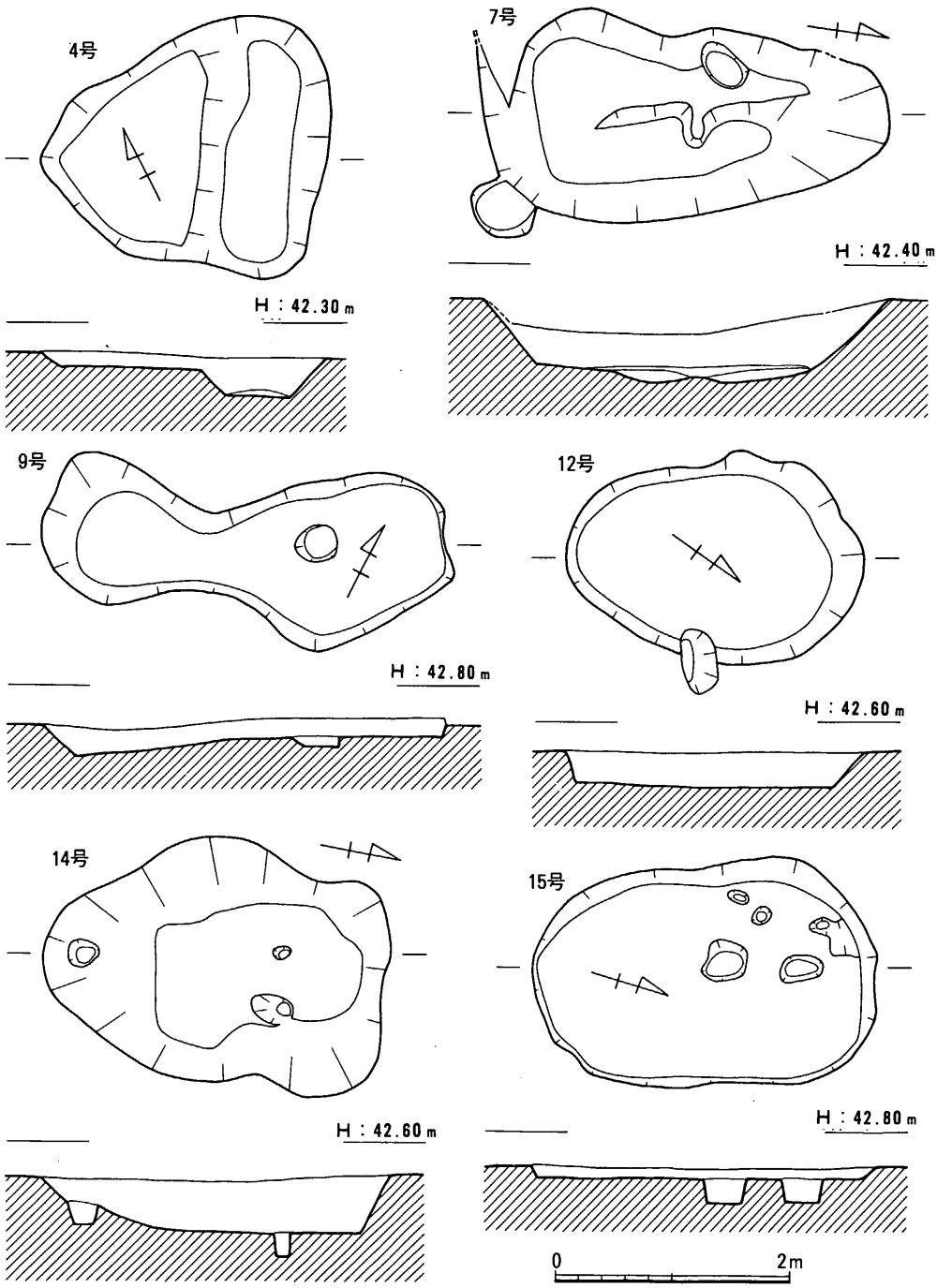
出土遺物

出土遺物は小片のため図示できなかった。

7号土坑（第178図）

楕円形を呈し、上端長軸長3.44m、短軸長1.56mを測る。深さは最大で約0.7mである。床面には段が認められる。規模の割に比較的多数の遺物が出土した。

出土遺物（第180・181図、図版78）



第178図　4号・7号・9号・12号・14号・15号土坑実測図（1/60）

須恵器

杯身（1～5）　1・2のみ高台を持つ。いずれも底部が平坦で体部が直線的に開き、調整は底部外面をヘラ切り後ナデ、その他の部分に回転ナデとナデを施す。4の口縁直下には1条の沈線がめぐる。

甕（6）　小破片のため図上復元を行った。調整は、口頸部内外面を回転ナデ、胴部外面格子目タタキ、内面には同心円文当て具痕が残る。

土師器

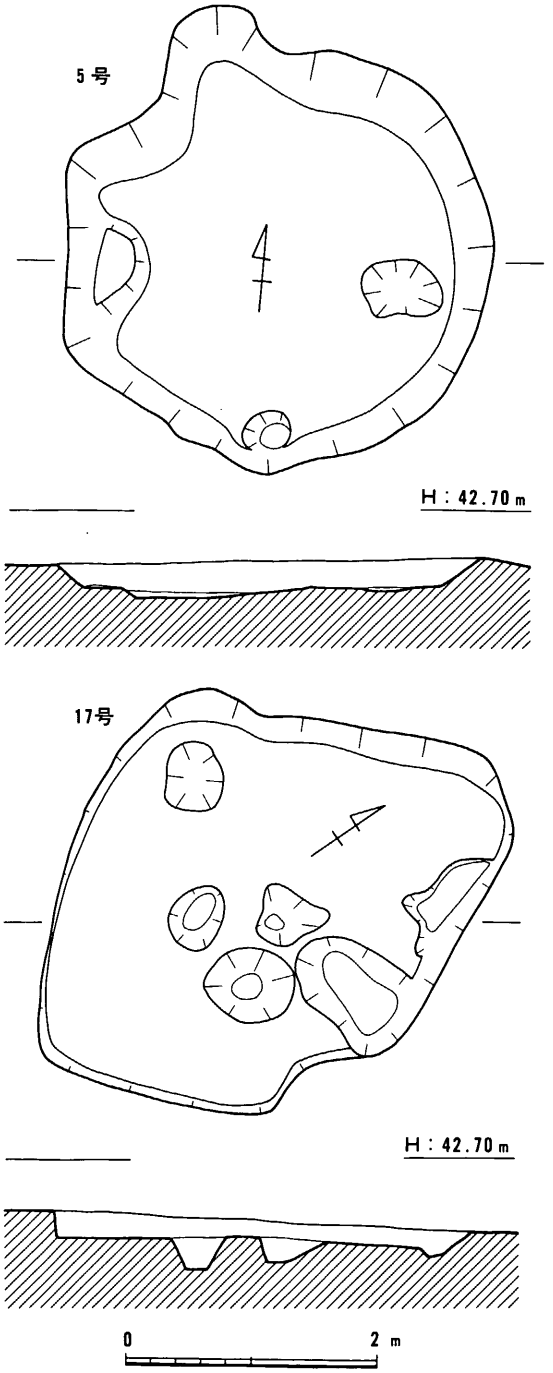
皿（7）　口縁部は大きく外に開く。底部外面ヘラ切り後粗いナデ。その他は回転ナデとナデ。

甕（8）　小破片を図上復元した。調整は、口縁部外面回転ナデ、内面は横方向のハケ。胴部外面縦方向のハケ、内面はヘラケズリである。

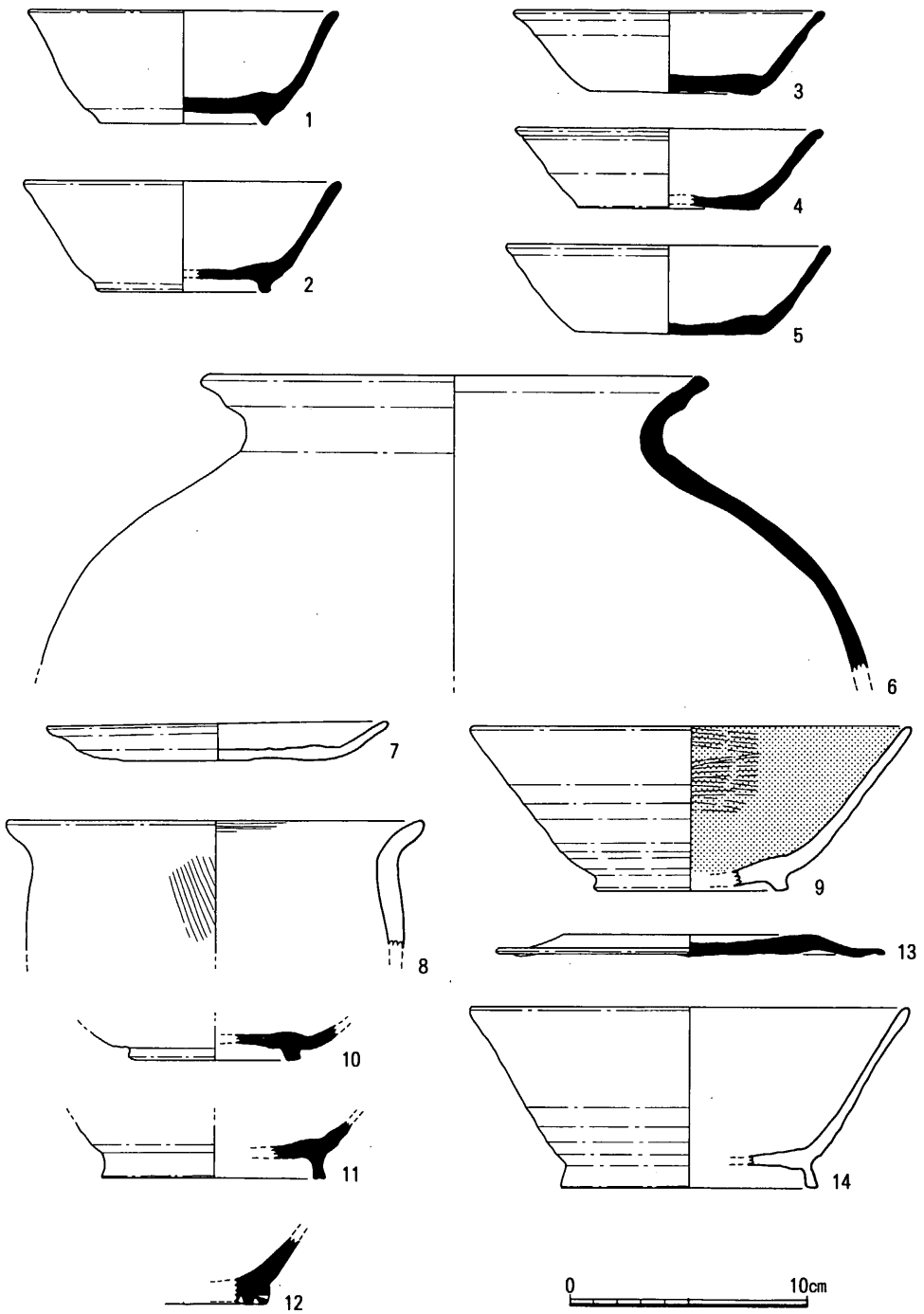
竈（15）　土師質のものなのでここに入れた。ミニチュアの竈である。体部中位が張る樽形の土器に、焚口としての窓とこれを覆う庇を付けたものと言える。焚口部は長方形に近い台形を呈する。体部内面には粘土帯を積み上げた痕跡が残る。その後回転ナデを施す。外面も回転ナデ。庇には指圧痕とナデが認められる。庇の接合部は指でナデるが、完全にはナデ消されていない。体部内面と庇に部分的に黒色顔料が残る。

黒色土器

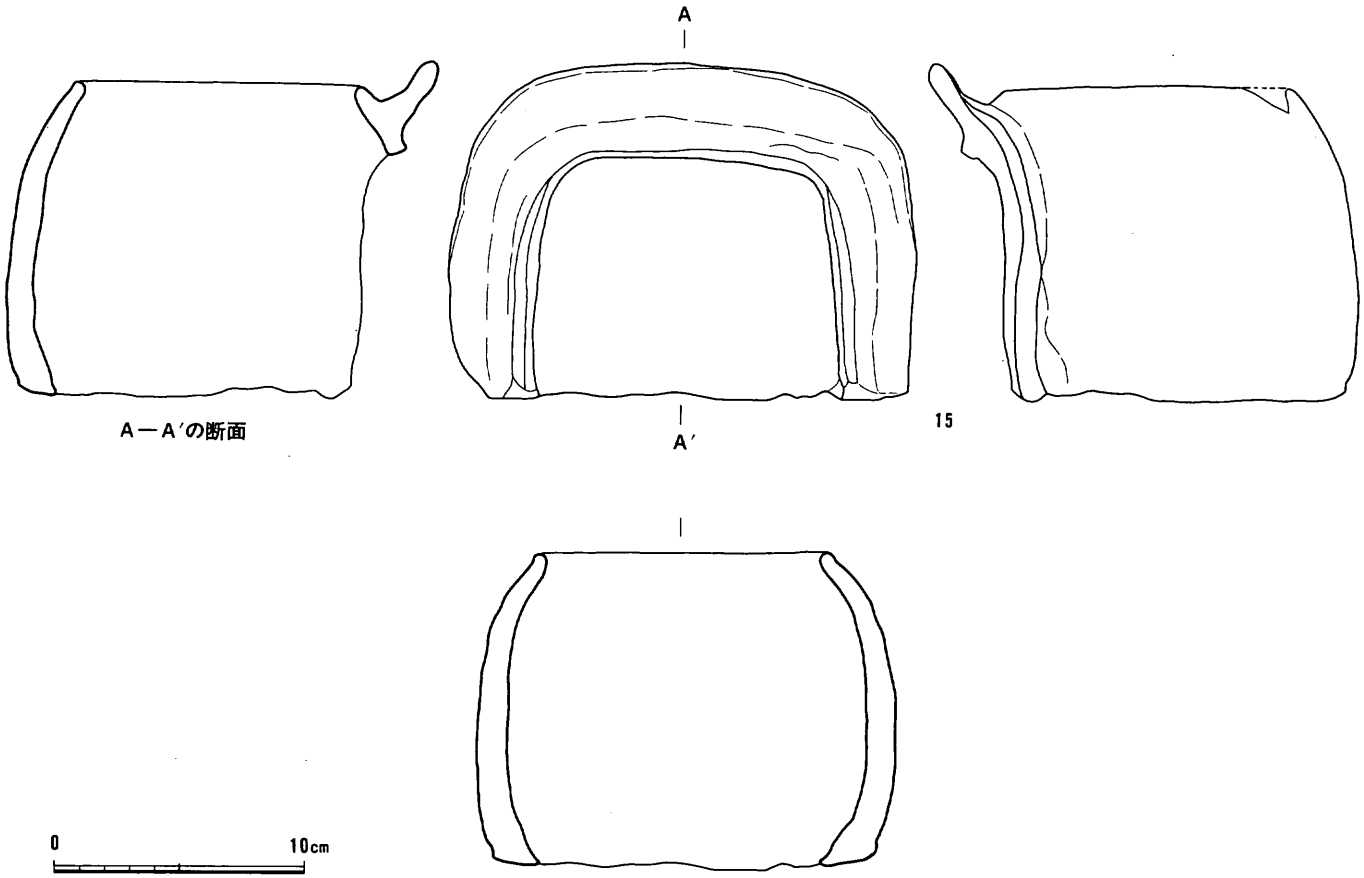
椀（9）　内面のみ燻したものであるが、口縁部外面の0.6cm下まで黒化している。底部外面と高台には煤様のものが付着す



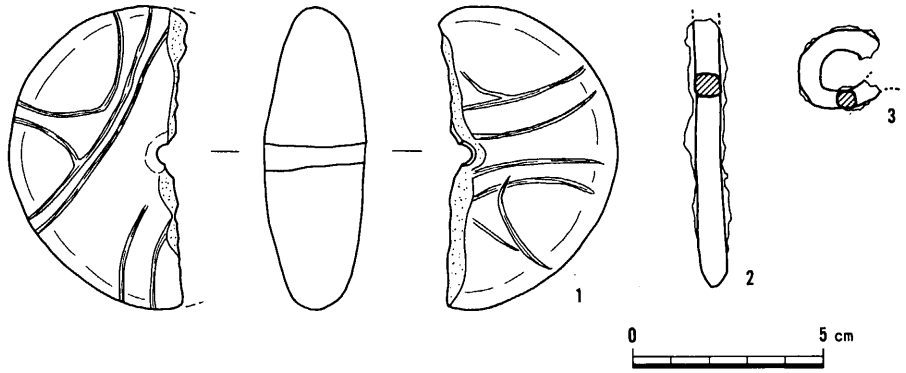
第179図　5号・17号土坑実測図（1/60）



第180図　7号（1～9）、14号（10～12）、15号（13・14）土坑出土土器実測図（1/3）



第181図　7号土坑出土竈実測図（1/3）



第182図　ピット出土土製品、鉄器実測図（1/2）

る。体部外面下位を回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。

9号土坑（第178図）

中央のくびれた楕円形を呈する。規模は最大値で3.42m×1.44mを測る。深さは最大で0.24mである。

出土遺物

出土遺物は小片のため図示できなかった。

12号土坑（第178図）

楕円形を呈する。上端長軸長2.54m、短軸長1.82m、深さは最大で0.3mを測る。

出土遺物

出土遺物は小片のため図示できなかった。

14号土坑（第178図）

小さくくびれた楕円形を呈する。上端長軸長2.98m、短軸長2.06m、深さは最大で0.48mを測る。壁の上位でピットが検出された。

出土遺物（第180図）

須恵器

杯身（10・11）　ともに小片である。高台は貼り付け。底部外面はヘラ切り後ナデ。

すり鉢（12）　底部に鋭い刺突具で多くの穴をあけている。焼成不良。

15号土坑（第178図）

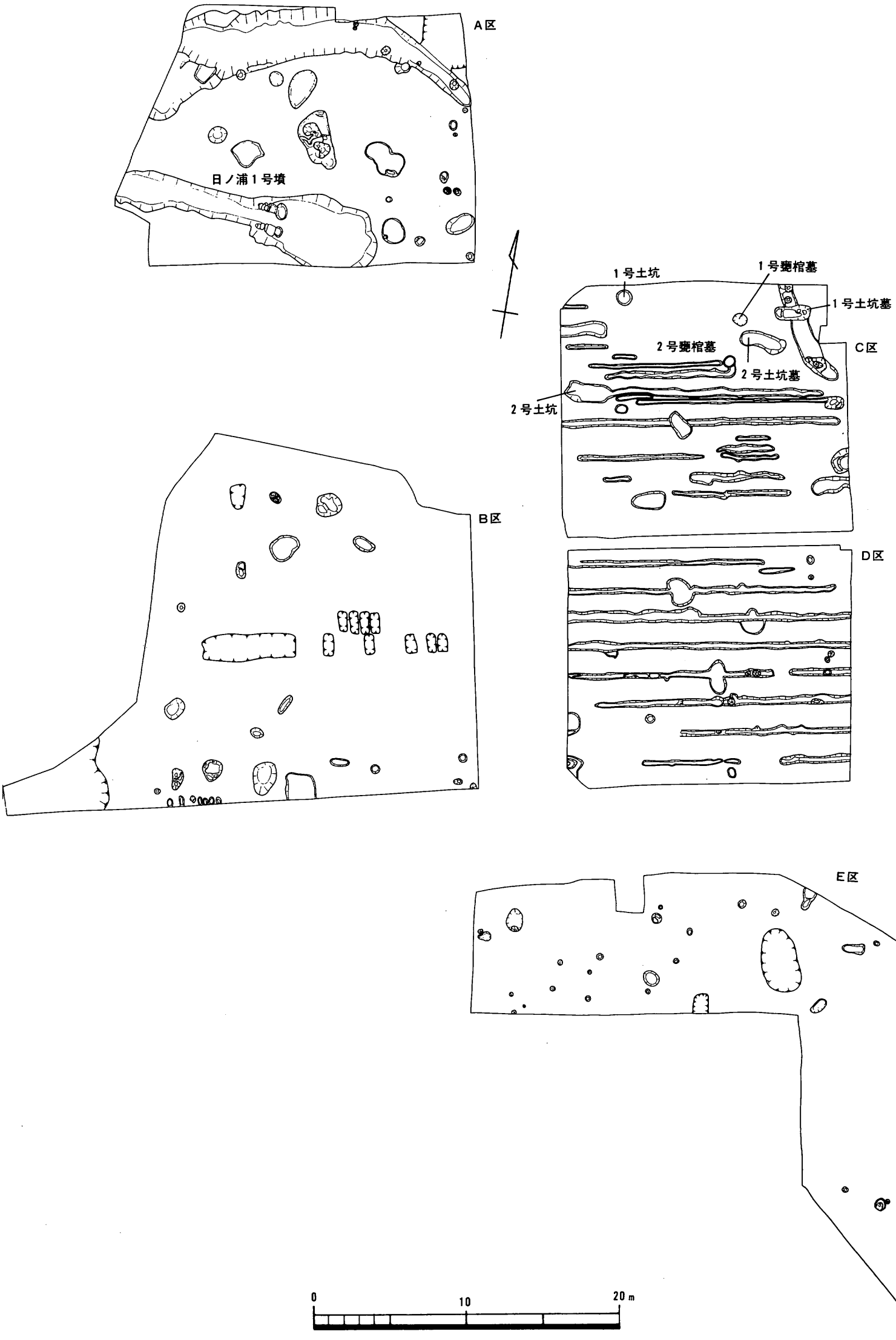
楕円形を呈する。上端長軸長2.92m、短軸長1.82m、深さ0.1mを測る。

出土遺物（第180図）

須恵器

杯蓋（13）　天井部外面はヘラ切り後ナデ。他は回転ナデとナデで仕上げる。

椀（14）　体部は直線的に上外方に開き、体部と底部の境に高台を貼り付ける。体部内外面は



第183図　日ノ浦II遺跡遺構配置図（1/300）

回転ナデ、底部内外面はナデ調整である。

5号土坑（第179図）

円形を呈する。規模は3.77m×3.39mである。深さは最大で0.29mを測る。

出土遺物

出土遺物は小片のため図示できなかった。

17号土坑（第179図）

ゆがんだ隅丸長方形を呈する。上端長軸長3.24m、短軸長3.16m、深さは最大で0.2mを測る。

出土遺物

出土遺物は小片のため図示できなかった。

(3) その他の遺物（第182図、図版78・83）

出土状態

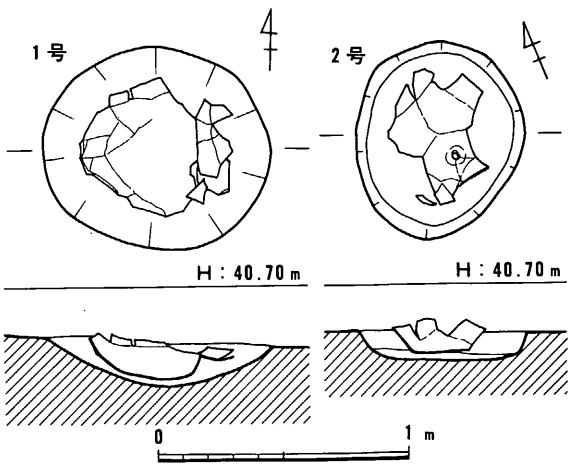
いずれも小ピットの埋土中から、須恵器、土師器の小片とともに出土した。

土製品（1） 有孔円盤形土製品である。約2分の1の破片で、残存長4.7cm、厚さ2.7cmを測る。両面とも沈線で文様を施す。胎土には白色砂粒を多く含む。

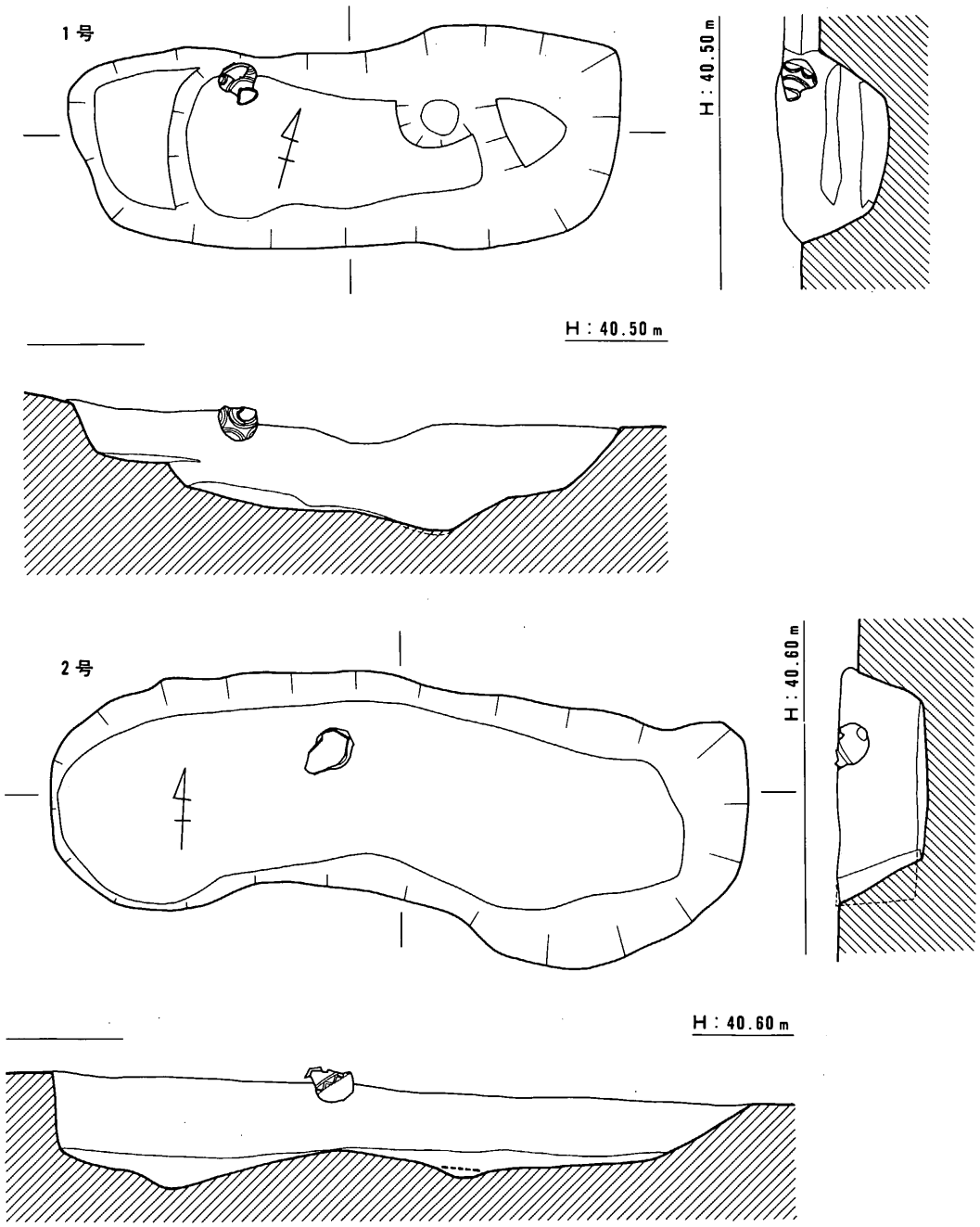
鉄器（2、3） 2は残存長7.0cmを図り、断面形はほぼ方形を呈する。用途は不明である。2は不完全な環状をなし、断面はほぼ方形を呈する。刀子の素環頭とも考えられるが、はっきりしない。

2.日ノ浦II遺跡

日ノ浦II遺跡はA～E区に分けて調査を行ったが、明確な遺構を検出することができたのはA区とC区のみである。C、D区では東西方向に走る細い溝が多く検出され、当初これを調査・記録したが、後にこれらは最近のものであることがわかったため、今回は報告しない。また、C区では1号土坑墓に切られる溝状のくぼみがあるが、浅く、壁・床ともにしっかりしておらず、遺物はまったく出土しなかった。遺構と断定するのはややためらわれるため、



第184図 1号・2号甕棺墓実測図（1/30）



第185図　1号・2号土坑墓実測図（1/30）

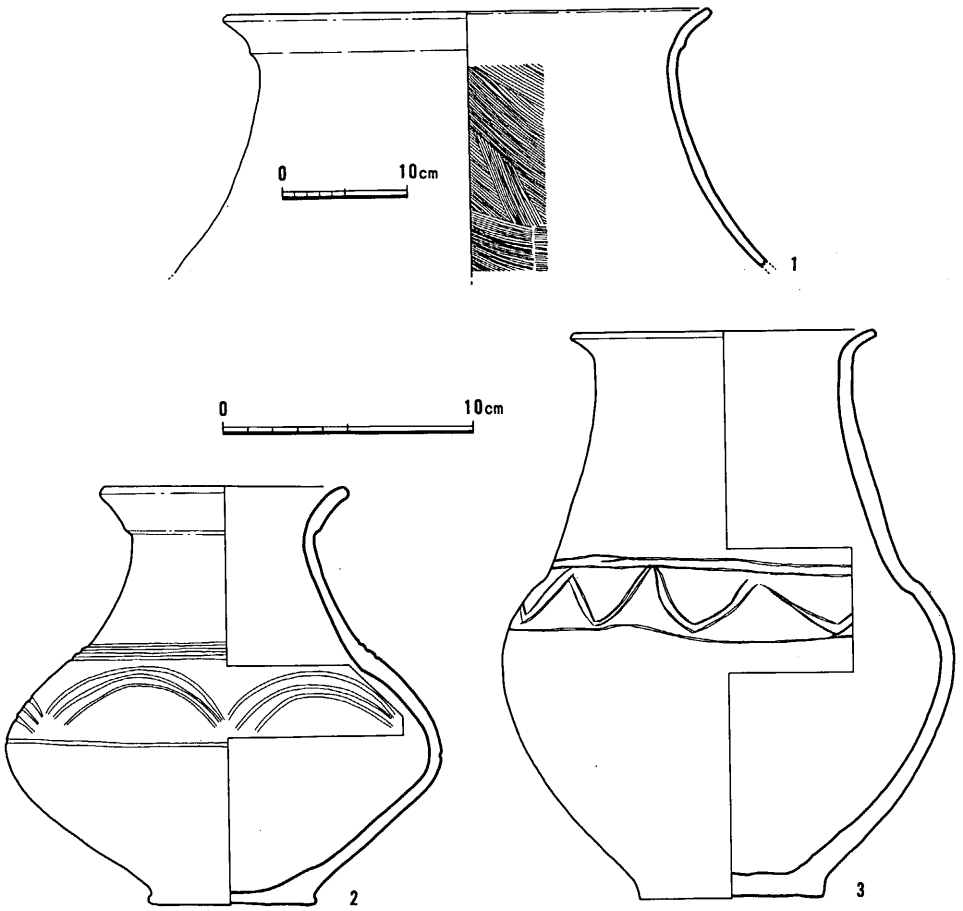
ここでは、当地には弥生時代前期後半以前の遺構がある可能性を指摘するにとどめることとする。

(1) 弥生時代の遺構と遺物

(1)—① 甕棺墓

1号甕棺墓（第184図、図版36）

削平によって激しく破壊されている。上甕は壺、下甕も壺を用いている。どちらも口縁部を打ち欠いて接口させた形で最終的に掘り上げたが、掘り上がるまでに下甕側の壺の口縁部片がかなり出土した。このことから墓坑底面に接する部分の下甕は打ち欠いているが、それ以外は打ち欠かずに利用した特異な接口方法だったと考えられる。墓坑内からは打ち欠かれた下甕の口縁部が出土している。残存する墓坑の大きさは90cm×80cmである。棺の埋置角度は棺の残存



第186図　1号甕棺（1）、1号・2号土坑墓（2・3）出土土器　（1は1/6、2・3は1/3）

量が少ないため正確でないが、概ね20°前後であろう。主軸方位はN—85°—Eである。副葬遺物はない。時期は弥生時代前期前葉である。

出土遺物（第186図、図版85）

棺　大型の壺を棺としたものである。実測図では口縁部から頸部までしか示していないが、土器片自体は底部まで揃っている。しかし頸部から下は残存量が少ない上に、頸部と胴部を接合することが不可能だった。したがって、頸部から下は無理に径を復元せず、図化もしていない。口径のみ復元し、39.0cmの値を得ている。器高は60cm前後になろうか。口縁下外面に段を削り出している。調整は口縁部の内面から外面全部にかけてはヘラミガキである。外面には化粧土が塗られている。頸部の内面は斜めのハケである。

2号甕棺墓（第184図、図版36）

1号甕棺墓と同じように削平がひどい。このため上甕の土器が何であったのか不明である。下甕は壺であるが、口縁部と底部を欠いてしまっている。下甕には水抜きのためと思われる直径約3cmの円形の穿孔がある。残存する墓坑の大きさは65cm×75cmである。棺の埋置角度は不明。主軸方位はN—70°—Eである。副葬品はない。時期は弥生時代前期前葉である。

棺の図示は、細片となり不能である。

1号土坑墓（第185図、図版37）

長さ2.4m、幅85cm～1mの土坑墓である。深さは最も深い部分で約50cmあるが、底面は平坦でなく、東側ほど深い。浅い方が頭位であろう。最も深い部分は丸い落ち込みとなっている。したがって、棺本体は長さ1.5m、幅60cmとなる。主軸方位はN—76°—Eである。底面から、かなり浮いた頭位側から、副葬された壺が1点出土している。これから見て、時期は弥生時代前期後半でも古い時期のものと考えられる。

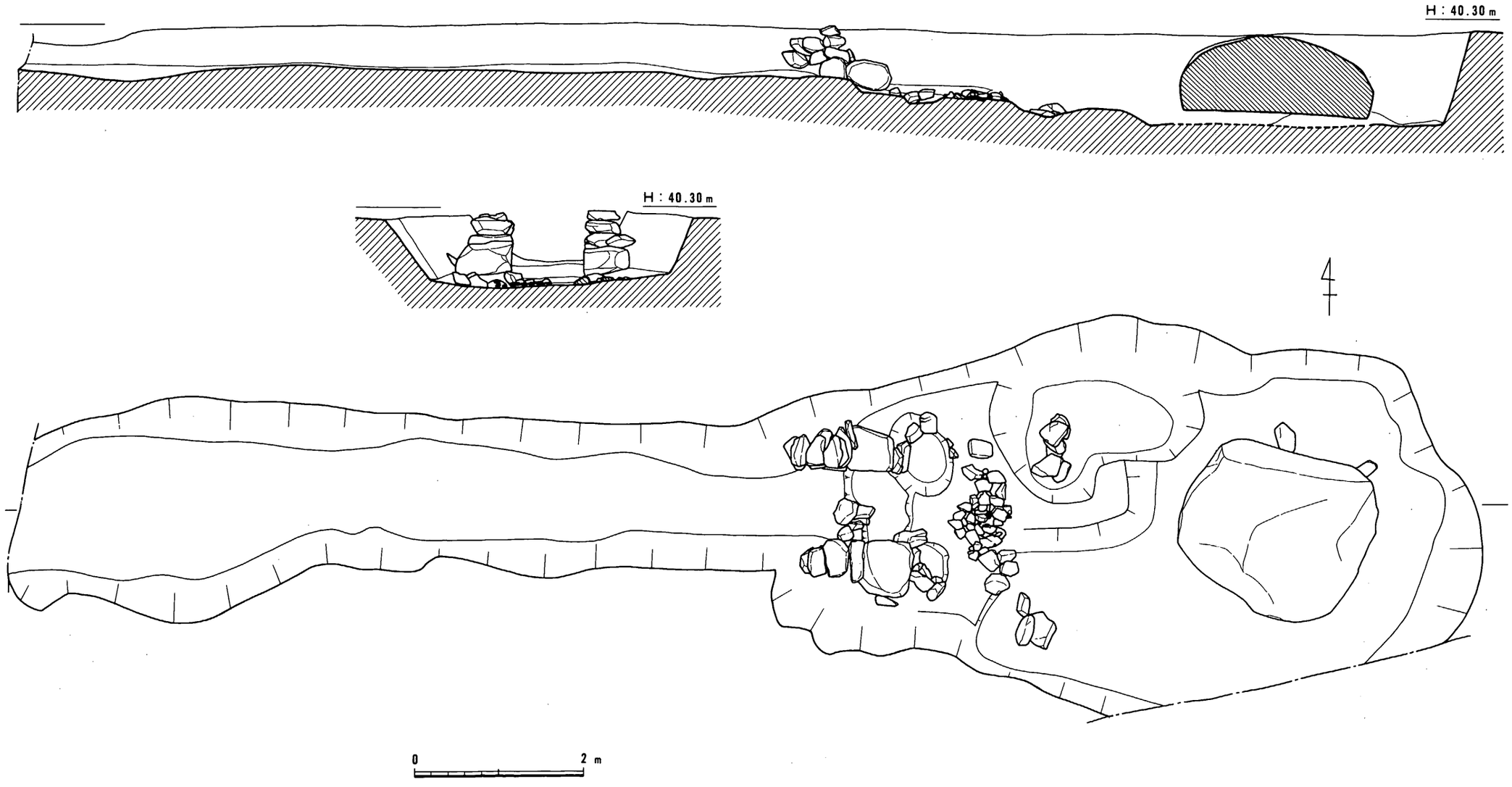
出土遺物（第186図、図版85）

弥生土器

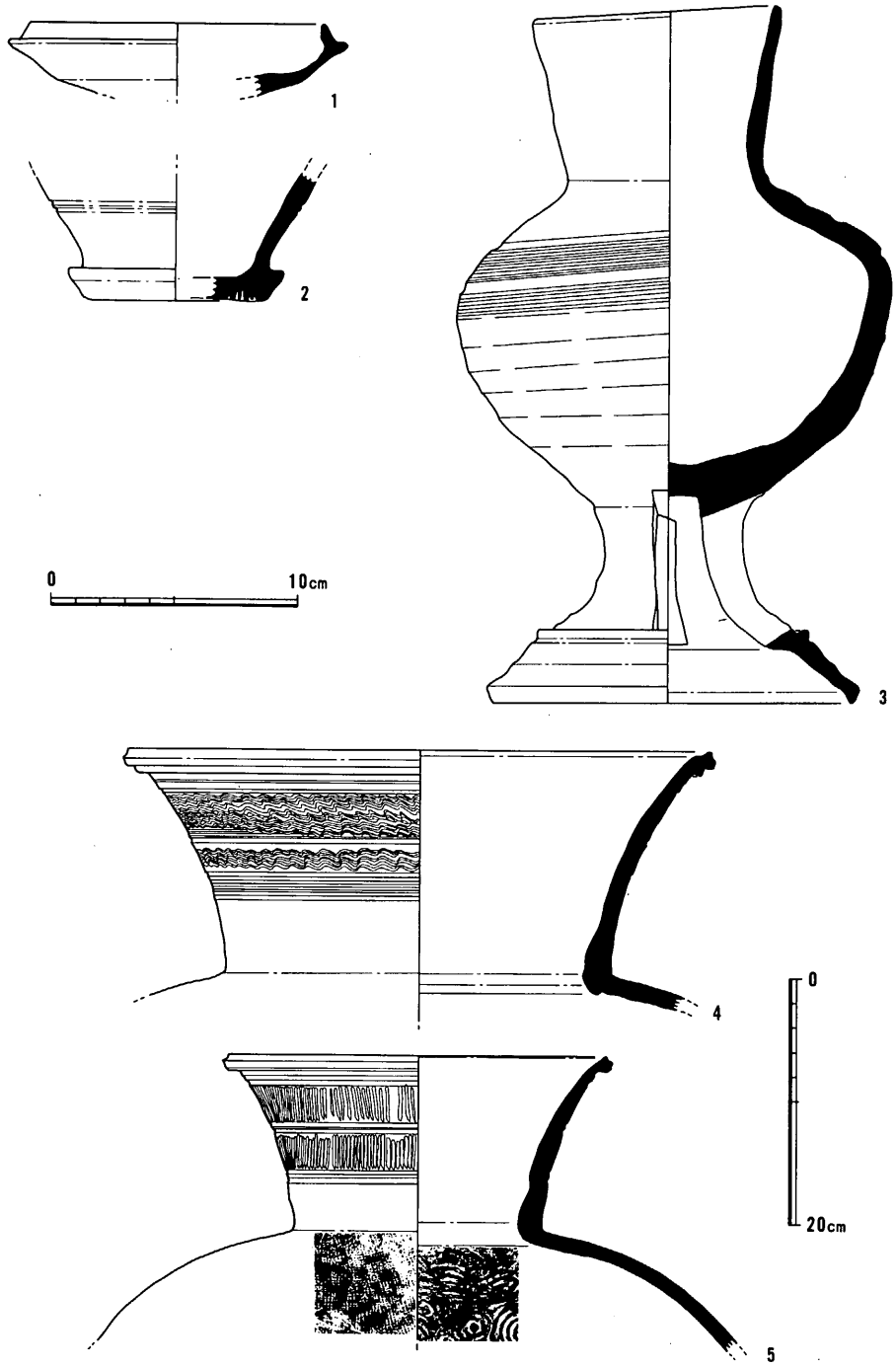
壺（2）　副葬されていた小型の壺である。口縁部と胴部を一部欠いている。口径10.0cm、器高16.9cm、底径6.8cmである。口縁直下には削り出しによって段をつけている。胴部は強く張り出し、最大径17.4cmを測る。底部は円盤状である。肩部にヘラ描きの並行沈線が1条、胴部最大径の部位にヘラ描きの沈線が1条施されている。これらの間に、3条のヘラ描き沈線を1単位とする上向きの重弧文が6個施される。調整は全体にわたって内面がナデ、外面はていねいなヘラミガキである。口縁部の内面から頸部の外面にかけての一部に、赤色顔料が塗布された痕が残っている。

2号土坑墓（第185図、図版37）

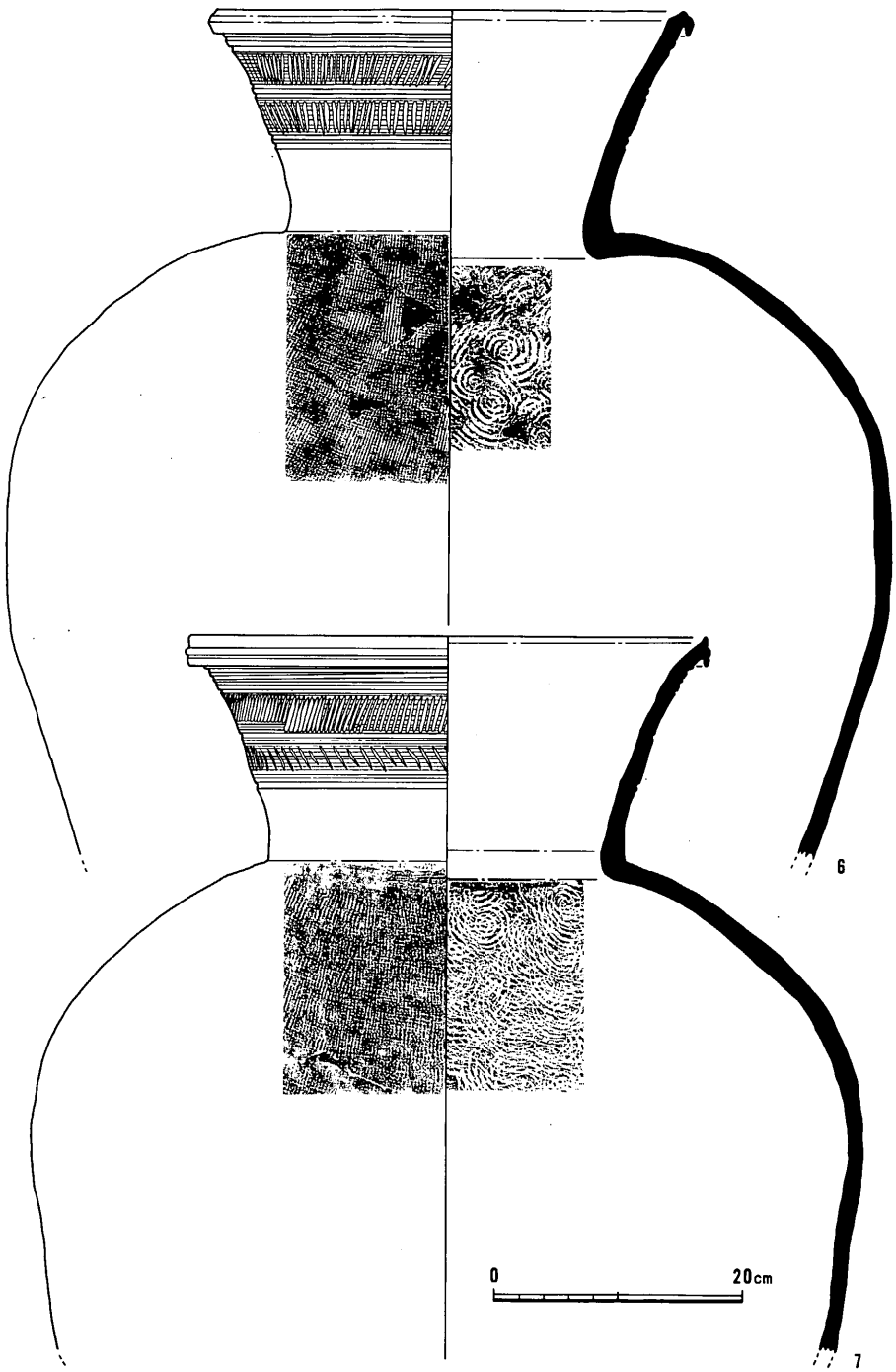
長さ3m、幅90cm～1.1mの土坑墓であるが、長軸側の主軸はかなりねじれている。底面は1号土坑墓と同様に平坦でなく、中央部分が高くなっている。東側の壁の傾斜は極めて緩やかで



第187図　日ノ浦１号墳石室実測図（1/60）



第188図　日ノ浦１号墳出土土器実測図①（1/3・1/6）



第189図　日ノ浦１号墳出土土器実測図②（1/6）

ある。主軸方位はN－88°－Eである。底面から約20cm浮いて、副葬された壺が1点出土しているが、墓坑の削平と一緒にかなり欠き取られてしまっている。時期は弥生時代前期後半である。

出土遺物（第186図、図版85）

弥生土器

壺（3）　副葬されていた小型の壺である。削平により口縁部のほとんどと、胴部の約3分の1を欠損している。口径は復元すると11.8cmになる。器高は22.8cm、底径は7.4cmである。肩部と胴部の境には、痕跡的な段が見られる。この部分のわずか上にヘラ描きにより2条の平行沈線が、胴部最大径の部位には1条の沈線がめぐらされる。その間に2条を1単位とするヘラ描きの山形文が施されている。この数を復元すると12個になる。施文は浅く、技術的にも稚拙である。刻線は直線をなさず、山形文の施文方向の変換部は工具の持ち替え方も雑で、線のつなぎ目が途切れてしまっている。調整は口縁部が横ナデ、頸部の内面がナデ、胴部の内面がハケメの後ナデである。外面はすべてヘラミガキである。胴部外面に大きな黒斑がある。

(2)　古墳時代以降の遺構と遺物

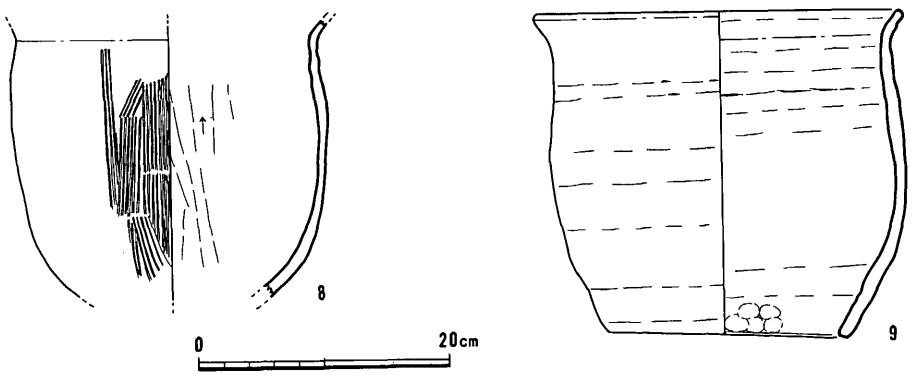
(2)—①　日ノ浦1号墳（第187図、図版31・32・33）

1）　検出状況

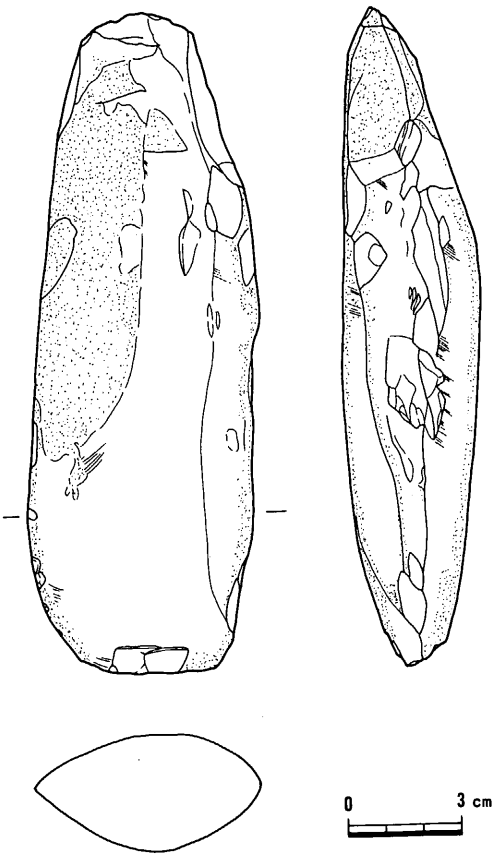
調査前には墳丘の盛り上がり等はなく、予測できなかったものである。表土除去後、一部残存している石室と、弧状にめぐる溝によって確認できた。従って、墳丘は全て削平されていた。また、石室も玄門部の一部と天井石と思われる大石が発見されただけである。

2）　規模

墳丘が削平されているため高さは明らかにできない。周溝は幅1～4.5m、深さ0.5～0.65mで全体の4分の1程度が検出されている。石室掘り方の中心部から周溝中央部まで約13.5mを



第190図　日ノ浦1号墳出土土器実測図③（1/6）



第191図　日ノ浦１号墳出土石器実測図（1/2）

測るため、直径27m程度と推定される。

３）　石室

ほぼ西へ開口する横穴式石室である。主軸方位はN—92°—Wである。原位置を保っているのは羨道両側壁の一部と玄室床面の敷石の一部である。他に、袖石はその抜き穴がわかる。また、奥にある2.2m×1.8m×0.9mの巨石はその位置と大きさと下面がほぼ平坦であることから、天井石だったと推定できる。小さく割ろうとしたものか、連続するホゾ穴状のくり込みが見られる。

掘り方は8.3m×4.8mの不整の長方形状を呈し、検出面からの深さ1.05mを測る。玄室床面は玄門近くの1.8m×0.7mの小範囲に敷石が見られる。本来は全面にあったものであろう。鉄器が４点出土した。袖石の抜き穴には根石が数個ずつ見られる。そこから約1.3mにわたり羨道が続き、わずかながら石積みが残る。袖石側は最下段にやや大きめの石を横にして据える。その外側からは最下段には少し大きめの石を据えるものの、その上にはあまり大きくなくやや細長めの石を小口積みにしている。閉塞は明瞭ではないが、その痕跡ではないかと思われる石積みが、羨道部中央よりやや玄門側に寄った部分で見られた。乱れており原位置は保っていないと思われた。

墓道は羨道に引き続いて溝状に約９m検出された。ほとんど主軸に添っている。上端幅は最狭部で1.6m、最も広い部分で2.6m、深さ約0.6mを測る。

出土遺物（第188～191図、図版87）

須恵器

杯身（１）　小破片である。立ち上がりは低く内傾する。外面は全面に自然釉がかかり、調整不詳である。

すり鉢（２）　これも小破片である。底部外面には竹状のもので刺突した径３㎜程度の貫通しない穴が多く穿たれる。全体を回転ナデで仕上げる。

台付壺（３）　三方向に長方形透しを持つ脚の付くものである。口頸部内外面は回転ナデ、胴部上半部も回転ナデ、中位をカキ目調整、下位は回転ヘラケズリと回転ナデ、脚部は回転ナデを行う。砂粒が多く含まれ、作りはそれほどていねいではない。

甕（4～7）　いずれも全容は知り得ないものである。4は頸部にゆるやかな波状文をめぐらすものである。5～7は二段にわたってヘラによる連続斜線文をめぐらす。7は上段の斜線文の長さを違えており、下段は上段に比べてまばらに施す。4個とも口縁部の形態は違う。また接合方法としては口頸部を胴部の上に乗せて内外面に粘土を貼り付ける方法をとっているが、5・6のように胴部内面側を少しつまみ出すようにして接合している場合がある。

土師器

甕（8）　底部と口縁端部を欠く。口縁部内外面をヨコナデ、胴部外面ハケメ調整、内面ヘラケズリを行う。

甑（9）　底部をヘラで切っている。口縁部内外面をヨコナデ、胴部内外面を斜め又は縦方向のナデを行う。粘土紐の巻き上げ痕が所々に見られる。

石製品（第191図、図版86）

磨製石斧　長さ17.4cm、最大幅5.0cm、最大厚さ3.1cmを測り、玄武岩製と思われる。典型的な太形蛤刃石斧に比べいびつである。刃部には剝離した部分がある。また、基部は折れている。折れた部分は磨き直している。

2—②　土坑

1号土坑（第192図、図版37）

C区で検出された。円形を呈し、1.02m×0.96mを測る。深さは最大で0.17mである。壁と床はともにしっかりしており、床面には緩い凹凸が認められた。

出土遺物（第193図、図版86）

土師器

杯（1～3）　いずれも底部内面はナデ調整。底部外面はヘラ切り後粗いナデで、板状圧痕を伴う。

椀（4・5）　4の底部外面はヘラ切り後粗くナデる。板状圧痕を伴う。底部内面はナデ調整。5の底部外面はヘラ切り後粗いナデ。体部内外面は回転ナデ。底部内面にはヘラミガキを施す。

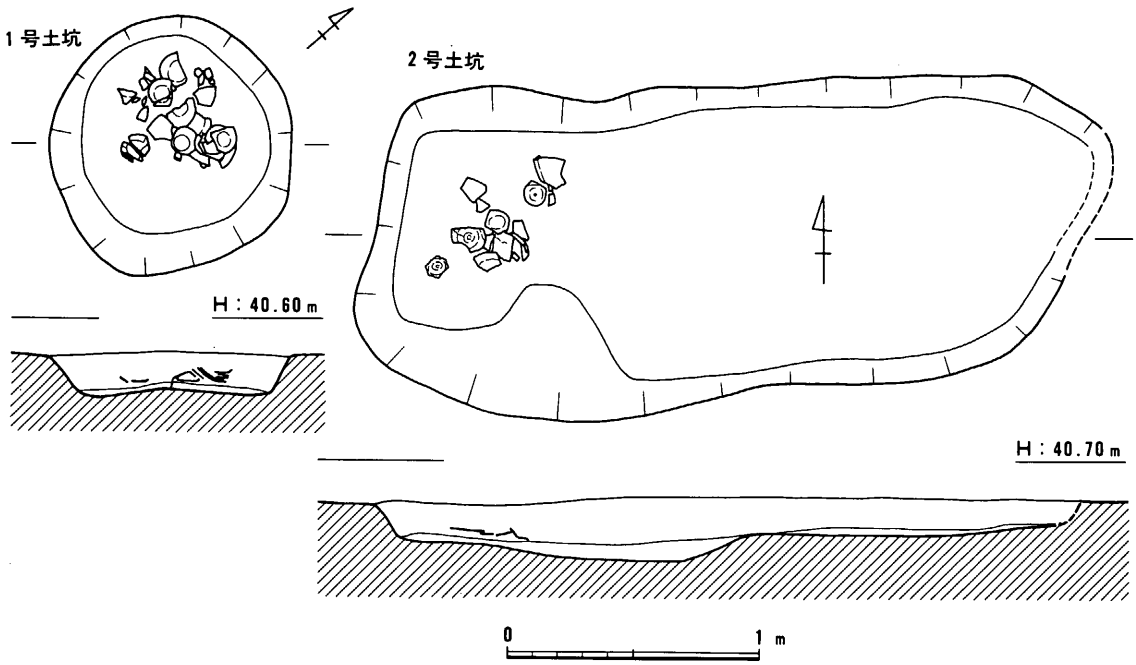
皿（6～10）　6、8は口縁部が外反し、10は体部が屈曲する。いずれも底部外面はヘラ切り後粗くナデる。7、10は板状圧痕を伴う。底部内面はナデ調整を行う。

2号土坑（第192図、図版37）

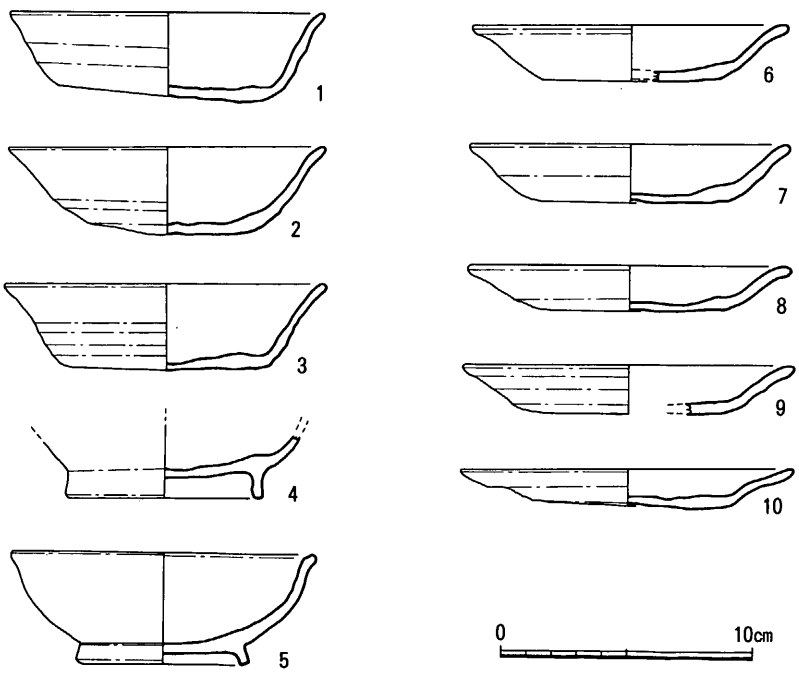
C区で検出された。隅丸のゆがんだ長方形を呈し、東側の一部を近年の住宅建築に伴う溝で破壊されている。上端長軸長2.8m、短軸長1.2m、深さは最大で0.26mを測る。壁と床はともにしっかりしており、床面は緩やかな凹凸と段が認められた。

出土遺物（第194図）

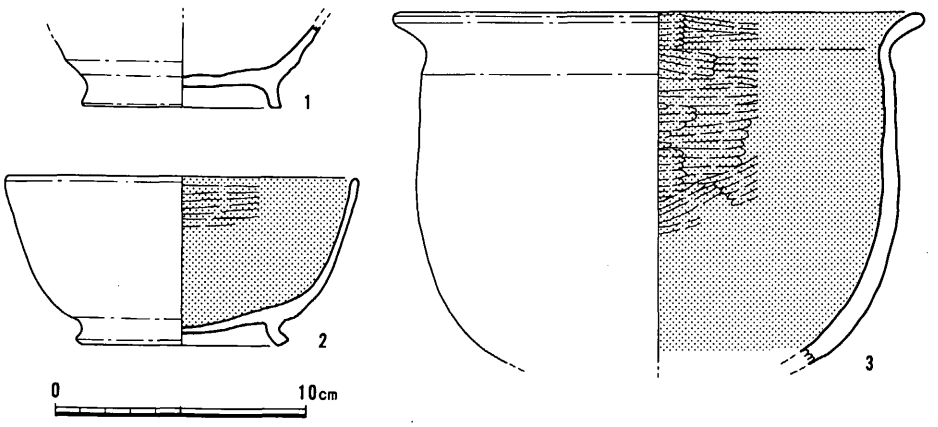
土師器



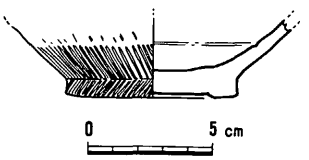
第192図　1号、2号土坑実測図（1/30）



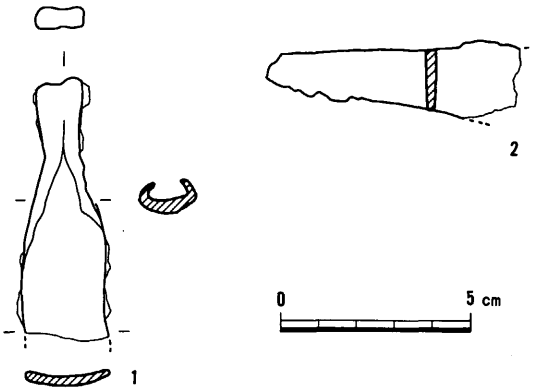
第193図　1号土坑出土土器実測図（1/3）



第194図　2号土坑出土土器実測図（1/3）



第195図　大溝出土白磁実測図（1/3）



第196図　22地点南西隅出土鉄器実測図（1/2）

椀（1）　小破片であるが、体部は直線的に伸びるものと思われる。底部外面はヘラ切り後粗くナデる。板状圧痕を伴う。内面はナデ調整。

黒色土器

椀（2）　内面のみ燻すが、口縁部外面の1.6cm下まで黒化している。内面にヘラミガキを施す。外面は回転ナデである。

甕（3）　底部を欠く。内面のみ燻すが、外面にも煤が付着する。内面にはヘラミガキを施す。外面は口縁部から胴部中位にかけては回転ナデ。胴部中位以下には格子目タタキが残る。

その他の遺物（第195・196図）

出土状態

B区南西隅に、自然地形に伴う深い落ち込みがあるが、その埋土中より出土した。

遺物

白磁(第195図)　残存高3.2cmの小片。灰白色の胎に灰色味のある白色釉を施す。底部は露胎で、内面見込みには焼台痕が大きく残る。

鉄器（第196図、図版86）

不明鉄器（1）　残存長約7cmを測る。幅が狭まっていく部分の両側を折り返している。その先の部分は断面長方形を呈する。

刀子（2）　刀子と考えたが、刃部が非常に薄い。関は峰側で屈曲する。茎の断面は長方形を呈する。

Ⅳ．ま　と　め

日ノ浦遺跡群の調査結果は前述のとおりである。以下にまとめを行いたい。

1．各遺構の時期について

一部の遺構を除けば、日ノ浦遺跡群の年代はおおよそ6世紀中頃から9世紀初頭にかけてである。ここでは出土遺物、特に須恵器の蓋杯類を中心に、遺構の形態、切り合い関係等を加味しながら、各遺構の時期を考えていきたい。なお、参考とした編年案および使用した絶対年代については、次項の「2．廃棄土坑出土土器について」と同じである。

(1)日ノ浦遺跡

(1)—a　竪穴住居跡

1号住居跡

須恵器の杯蓋（第13図1～9）は、いずれもかえりが消失し、天井部を回転ヘラケズリする。杯身（10～20）は、体部がほぼ直線状に伸び、高台が外へふんばる。これらは、いずれも8世紀前半の時期と考えられる。また、第14図21・22の須恵器杯身、26の土師器杯蓋は大宰府SD2340出土資料に、27の土師器皿は条坊2次SD001出土資料に、それぞれ対応し、8世紀前半代の時期を考えることができる。23の杯身は8世紀後半であることが確実であるが、1点のみであり、小破片であるため後代の混入の可能性が高い。以上のことから、本遺構の時期は8世紀前半と考えられる。

2号住居跡

出土した杯蓋は、丸味を持つ蓋と内傾した短い立ち上がりを持つ身のセットで、天井部と底部を回転ヘラケズリする。小田富士雄氏編年のⅣ期（6世紀末～7世紀初頭）にあたるもので、本遺構の時期もそれにあたると考えられる。

3号住居跡

第21図1の杯蓋は、2号住居跡のものと同時期である。2の杯蓋はやや特徴的だが、同時期

とすることができる。すなわち、本遺構の時期も6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

4号住居跡

かえりを持たない杯蓋、直線的な体部と外にふんばる高台を持つ杯身、という組み合わせから、本遺構の時期は8世紀前半と考えられる。

5号住居跡

第24図2の杯身、3の長頸壺から8世紀前半という時期が得られ、4号住居跡とほとんど時期差がないものと考えられる。

6号住居跡

第26図1、2は6世紀末～7世紀初頭、3は7世紀後半と考えられる遺物である。いずれも小破片のため本遺構の時期は確定しがたい。最終的に埋没したのが7世紀後半、と考えておきたい。

7号住居跡

須恵器蓋杯のセットを見ると、6世紀末～7世紀初頭の時期が考えられる。

8号住居跡

出土遺物が1点のみで、しかも小破片のため、時期を確定することはためらわれるが、この杯身が確実に本遺構の時期を示すものであれば、6世紀末～7世紀初頭と考えることができる。

9号住居跡

杯蓋1点のみの出土である。磨滅のため不明瞭であるが、天井部を回転ヘラケズリすることから8世紀中頃のものと考えられる。

10号住居跡

第34図1～4の形態から、8世紀前半の遺構であると考えられる。2の杯蓋は全体にかなり磨滅しているが、天井部はヘラケズリしており、口縁端部は本来断面三角形を呈したと考えられるものである。

11号住居跡

杯身1点のみの出土だが、屈曲する体部、高く外にふんばる高台などから、7世紀後半という時期が考えられる。

12号住居跡

出土遺物の時期は7世紀後半と考えられる。しかし、本遺構は11号土坑を切り、10号土坑に切られている。詳細は土坑の部分で述べるが、11号土坑の時期は8世紀前半、10号土坑は同中頃と考えられるので、本遺構の時期は8世紀前半から中頃までの間となる。遺物は、ともに混入したものと思われる。

13号住居跡

本遺構の時期は縄文時代晩期である。

14号住居跡

蓋類には内面にかえりが残る。杯身の体部は屈曲し、高い高台が大きくふんばる。したがって7世紀後半という時期が考えられる。

15号住居跡

出土遺物は7世紀後半頃の杯身か、とも思われるがあまりにも小片のためわからない。また、本遺構の規模、床面の状況等からは9号住居跡との類似点も見られるが、本遺構は西半分が調査区外にあるため、詳細な比較ができず、また出土遺物との時期差も大きい。残念ながら、本遺構の時期は不明とせざるをえない。

16号住居跡

本遺構の時期は縄文時代晩期である。

17号住居跡

第44図7の皿のみ時代が大きく下るが、この遺物は出土状況から後代の混入である可能性がきわめて高い。したがって本遺構の時期は6世紀末から7世紀初頭と考えられる。

18号住居跡

第47図1～3、6・7と4・5・8では時期が異なる。両者の出土状況には差がないため、最終的には7世紀後半に埋没したとも考えられるが、確実に時期を決定することはできなかった。

19号住居跡

第49図1、2の蓋杯はV期、3の高杯はVI期に属するものである。従って、本遺構の時期は7世紀中頃から後半と考えられる。

20号住居跡

第53図1～4の蓋杯、高杯はIIIB～IV期に属するものである。したがって、本遺構の時期は6世紀後半と考えられる。

21号住居跡

第58図1の杯蓋は、IIIA期に属するものである。したがって、本遺構の時期は6世紀中頃と考えられる。

22号住居跡

遺物は出土しなかった。また、規模、床面の状況等からも本遺構と類似の竪穴住居跡は存在しない。したがって、残念ながら本遺構の時期は不明とせざるを得ない。

23号住居跡

遺物が出土しなかったが、7号住居跡に切られている。規模や床面の状況から、時期的には7号住居跡と大差はないものと考えられるが、細かい時期の決定はできない。

(1)—b　廃棄土坑（SK）

SKについての詳しい考察は次章に譲り、ここでは各遺構の時期を例記することとしたい。

SK01	8世紀中頃～後半	SK02	8世紀中頃～後半	SK03	8世紀初頭～前半
SK04	8世紀初頭～前半	SK05	8世紀初頭～前半	SK06	8世紀中頃～後半
SK07	8世紀中頃～後半	SK08	8世紀初頭～前半	SK09	8世紀初頭前後～前半
SK10	8世紀前半	SK13	9世紀初頭頃	SK14	8世紀前半
SK15	8世紀中頃～後半	SK16	9世紀初頭頃	SK17	8世紀中頃～後半
SK18	8世紀中頃～後半	SK19	9世紀初頭頃	SK20	8世紀中頃～後半
SK21	9世紀初頭頃	SK22	8世紀中頃～後半		

(1)—c　溝

大溝（SD01）

IV～V期、すなわち6世紀末から7世紀前半にかけて埋没したものと考えられる。

SD02

20号住居跡を切っているため、これより新しいことは間違ないが、遺物がほとんど出土しないため細かい時期決定はできなかった。

(1)—d　竪穴状遺構

1号竪穴状遺構

第162図2の杯蓋以外はIV期のものである。したがって、本遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭、2の杯蓋は流れ込んだものと考えられる。

2号竪穴状遺構

第165図1の杯身は8世紀前半のものであるが、これ以外は8世紀後半に属するものである。したがって、本遺構は最終的には8世紀後半に埋没したものと考えられる。

3号竪穴状遺構

ともに小破片であるが、第167図1、2とも8世紀後半に属すると考えられる。

4号竪穴状遺構

第169図1の杯蓋、3～6の杯身の形態から、本遺構の時期は8世紀後半と考えられる。

(1)—e　土坑、不整形土坑

6号土坑、1号不整形土坑

ともに縄文時代晩期と考えられる。

3号土坑

第175図1、2とも最大径約12cmを測る。時期的にはIV～V期、すなわち6世紀末～7世紀前半と考えられる。

7号土坑

第180図1～5の杯身の形態から、本遺構の時期は8世紀末頃と考えられる。

10号土坑

第175図４、５の蓋杯から、本遺構の時期は８世紀前半から中頃と考えられる。

11号土坑

第175図８、９、12、13は７世紀後半のもの、７、10、11は８世紀前半のものである。したがって、本遺構は７世紀後半から存在したが、最終的に埋没したのは８世紀前半であると考えられる。

13号土坑

第176図18の杯身、20の高杯から、時期は８世紀前半と考えられる。

16号土坑

第176図21の甑以外に遺物が出土していないので細かい時期決定はできないが、６世紀～７世紀頃のものと考えておいてよいだろう。

14号土坑

出土遺物がいずれも小片のため断定しがたいが、第180図10の高台の形態から８世紀後半と考えたい。

15号土坑

第180図13、14の形態から、８世紀末から９世紀初頭の時期が考えられる。

(2) 日ノ浦II遺跡

(2)—a 甕棺墓

１号甕棺墓

本遺構の年代は、弥生時代前期前葉である。

２号甕棺墓

本遺構の年代は、弥生時代前期前葉である。

(2)—b 土坑墓

１号土坑墓

本遺構の年代は、弥生時代前期後半である。

２号土坑墓

本遺構の年代は、弥生時代前期後半である。

(2)—c 古墳

日ノ浦１号墳

第188図１の杯身、４の頸部に波状文を有する甕から判断し、本古墳の時期はIIIB～IV期すなわち６世紀後半と考えられる。

(2)—d 土坑

１号土坑

第193図１～３のような平底の杯、また５の体部が丸味を有していることから、10世紀中頃の

遺構と考えられる。

2号土坑

第194図1、2の椀の形態から、本遺構の時期は10世紀前半であると考えられる。

参考文献

『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』　福岡県教育委員会　1980
小池史哲「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』　1982
『野添・大浦窯跡群』　福岡県教育委員会　1970
『大宰府条坊跡』　太宰府町教育委員会　1982
『大宰府史跡一昭和58年度発掘調査概報』　九州歴史資料館　1984
『大宰府史跡一昭和59年度発掘調査概報』　九州歴史資料館　1985
『太宰府・佐野地区遺跡群』　太宰府市教育委員会　1991
『牛頸石坂窯跡一C地点一』　大野城市教育委員会　1985
『牛頸井手窯跡群』　大野城市教育委員会　1989
『牛頸後田窯跡群』　大野城市教育委員会　1991
『牛頸小田浦窯跡群』　大野城市教育委員会　1992
『牛頸月ノ浦窯跡群』　大野城市教育委員会　1993

2．廃棄土坑（SK）出土土器について
——8～9世紀の須恵器編年に向けて——

日ノ浦遺跡16地点では20基の廃棄土坑が検出され、それから比較的まとまった土器が出土した。土器は須恵器、土師器、黒色土器で、一部7世紀に入るものも含まれるが、ほとんどが8世紀～9世紀前半のものと考えられる。遺跡全体の存続年数が300年近くにわたることから、一部混入した土器と考えられるものもあったが、全体としては一括遺物として良好な状況にあると判断される。窯跡出土遺物ではないが、牛頸窯跡群出土須恵器の編年を目ざす立場からこれら廃棄土坑出土遺物について考えてみたい。

さて、当該期の牛頸窯跡群出土須恵器編年については以下の研究がある。まず小田富士雄氏らの業績がよく知られている。牛頸自体についての編年はIII～V期だけであるが、筑後[註1]や豊前[註2]地域の編年で北部九州全体並びに当該期の編年をカバーするものとなっている。また、7世紀後半から9世紀前半までI～IIIに分けて考えた亀井明徳氏の業績[註3]、最近では同じく7世紀後半から9世紀初頭頃までをIV期に分けて考えた川述昭人、森田勉氏の業績[註4]がある。

一方、大宰府へ目を転じると、そこでは陶磁器を含めた土器全体の編年が進められ、前川威洋[註5]、森田勉、横田賢治郎[註6]、そして山本信夫[註7]、中島恒次郎[註8]氏の業績[註9]が知られている。

ここでは川述、森田氏の牛頸窯跡群出土須恵器編年案と大宰府での山本、中島氏の業績を参考にして考えていきたい。

また、主に須恵器の蓋杯類の変遷に視点を当てていきたい。蓋杯類が最も普遍的に出土していることと紙数の都合からである。また、絶対年代を考える際は、好資料に多く恵まれているわけでなく、7～9世紀では大宰府史跡第85次調査のSD2340出土資料が天平六年（734年）銘木簡と共伴したことぐらいである。しかし、間接資料として、第64図に示したような杯類（山本氏らが杯d類と呼ぶもの）が長岡京跡右京第102次調査SD10201で延暦三年（784年）銘木簡と共に出土し、おおまかに8世紀後半頃のものと考えられていた製作年代が証明された例がある。さらに、牛頸ハセムシ窯跡では和銅六年（713年）銘ヘラ書き須恵器が灰原から出土し、12—V号または12—IX号窯跡出土須恵器と共伴する可能性が高いことがわかった。これらの例を参考にして絶対年代を考えていきたい。現段階では蓋のかえりが消滅する時期を西暦700年前後、先述した土師器杯d類が出土する時期を8世紀後半と考え、その他を8世紀前半、中頃～後半等と表現しておき、近い将来四半期ごとの編年の確立を目ざしたい。

〈註10〉 〈註11〉 〈註12〉 〈註13〉

蓋で最も古いものと思われるものはSK09出土の蓋（第85図4）である。内面に退化したかえりを有するもので、既にかえりの消滅した蓋と共伴している。かえりの消滅した蓋では、つまみは高く、口縁端部の折り曲げは長い。また、杯身は体部が直立に近く立ち、深く、また高台は高く外へふん張り気味である。これらは8世紀でも初頭前後～前半の時期と考えられる。共伴する土師器の皿類は回転ヘラミガキをする。回転台を利用するという土師器の製作技法の初源は必ずしも明らかではなく、7世紀後半の一点に求められると思うが、本例も古い部類に属する。

SK09とほぼ似た時期だが次の段階に考えられるものは蓋内面のかえりが完全に消滅するSK03、04、05、08である。SK03の2と3（第68図、P61）は前代の流れ込みであろう。蓋のつまみは比較的大きく（直径約3cm）しっかりしている。つまみの付くものは天井部は回転ヘラケズリする。杯身は高台が高く外へふん張る。しかし、やや浅めのもの（SK04、第70図、P63）が現われる。さらに法量の小さいものも見られる（第70図4、第75図2）。第70図の11、12の高台のない杯身は前代のものかと思われる。なお、法量分化が現われるのは7世紀後半代で牛頸井手3号窯跡出土遺物などに例がある。通常の杯身口径が14～15cmとすると法量分化で現われるのはまず、小形の部類（11～12cm）である。大形が現われるのは後述する8世紀中頃以後と思われる。

次に位置すると考えられるものはSK10、14である。蓋のつまみは小さめになり、口縁端部の折れ方も短かめとなる。しかし、天井部は回転ヘラケズリする。杯身には深いものはなくなり、高台も低くなる。第94図（P87）は特殊なもので金属器写しと考えられ、普遍化することはできない。SK14では土師器の椀が伴う（第94図）。現在最古に属すと考えられる土師器椀は太宰府市宮ノ本8号墓の骨蔵器に伴うものや同じく大宰府史跡第85次調査SD2340出土椀であるが、SK14出土の椀は後者に近い。しかし、当該期の土師器椀はまだ絶対数が少なく、位置付け等については、これからの課題である。SK10、14それぞれの須恵器杯身を見れば、SK10出土例が

〈註14〉 〈註15〉

SD2340よりやや古く考えられるが、総体的に見ておおよそSD2340と同じ頃、既ち8世紀前半と考えて大過ないと思われる。

次の8世紀中頃から8世紀後半については杯蓋天井部の回転ヘラケズリの有無で細分可能と考えられる。蓋天井部の回転ヘラケズリについては、SK17とSK20出土杯蓋（つまみ付）にはすべて見られSK07、SK17、SK18では一部に見られ、SK01、SK02、SK06、SK22では全く見られない。また、先述した長岡京跡で出土した土師器杯d類は、回転ヘラケズリした蓋が含まれるSK17、回転ヘラケズリしない蓋が出土したSK01、SK02、SK06、SK22で共伴している。土師器杯d類の使用期間は、今のところ8世紀前半には上り得ず、また9世紀代には下がらない。従って、これらは8世紀中頃～後半の産物と考えて誤りないと考えられるが、回転ヘラケズリの見られるSK 7、SK17、SK18、SK20をより先行する一群とし、回転ヘラケズリの見られないSK01、SK02、SK06、SK22をそれらに続く一群と考えることが可能であろう。SK15も同時期と考えられる。さらに、つまみ付きの蓋はすべて回転ヘラケズリしているSK20はSK 7、SK17、SK18より先行する可能性が考えられる。これの一群を8世紀中頃から後半に属するものと考えたい。この時期には蓋杯の法量分化が最も進む。以前に調査、報告した牛頸石坂窯跡〈註16〉でも同様であったが、杯身については口径が14、15cm前後のものが最も多く5割以上を占め、11～12cm、18cm付近に小ピークを持つ傾向が見られた。SK17やSK20でも同様の傾向が見られる。器形的にはこれらの一群に大きな違いはないように思えるが、高台付杯身の場合、低い高台が底端部より内側寄りに付けられ、SK01以下の一群ではより低い。体部が直線的になったものが目立ってくるのもこの時期の特徴である。〈註17〉また、高台のない杯は、口径に対する底径の割合が前者では大きく、体部が立った感じを持たせ、後者では小さく、体部が横に開く感じを持たせる。蓋を見ると、前代まであったつまみのないものがかなり、少なくなると思われる。つまみは小さく（2cm以下のものが多い）、一部円筒状に高いものもあるが、低いものが多い。須恵器以外ではSK06で黒色土器の杯が出土しているが、内面のみを燻したA類で、器形、技法から土師器杯d類を燻したものである。

次に続くものとしてSK13、SK16、SK19、SK21がある。SK21を除いて須恵器高台付の杯に特徴がある。即ち、高台と体部が一体となったような作りの杯である。高台は細く比較的高いものと低いものがあるが、付け方の雑さが目立つ。体部は比較的深くなるが、器高指数（器高÷口径×100）で見るとSK19の場合は30台と40台があり、SK13、16の場合ほとんどが40を越える。また、蓋はつまみがない。前代にはほとんどの蓋にはつまみが付いたが、この時期になって、またつまみのない蓋が目立ってくる。蓋の口縁端部は非常に退化して丸く終わり、内面に痕跡的に沈線を持つ程度となる。天井部は回転ヘラケズリを行わない。土師器を見ると、高脚の器形など前代までなかった器種が現われている。また、色調にも変化が見られる。SK19の杯類には赤褐色をしたものが多いが共伴した高脚の土師器やその他の土坑出土土師器は全体に白

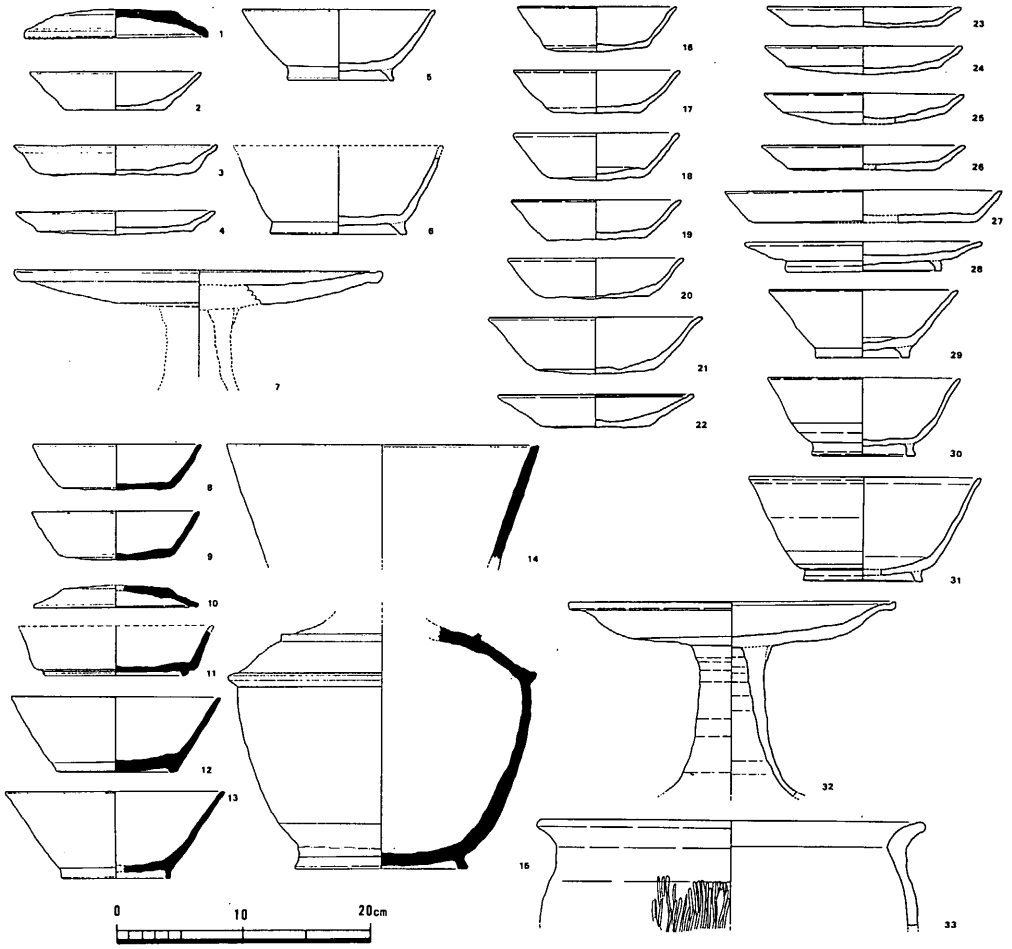
味がかった色調を示すものが多い。特に高脚の器形はやや桃色がかった白色という表現が合う。また、ヘラミガキは行なわない。他にSK21で見られるように黒色土器が多くなってくる。すべて内面だけを黒色化するA類だけである。

これらの時期については、大宰府史跡SE400出土遺物が参考になる（第199図参照）。高台と体部が一体となったような杯、凸帯をめぐらす壺の出現、そしてヘラミガキしない土師器の一群である。須恵器高台付杯は8世紀後半と考えた一群の土坑出土杯体部のより直線化したもの、さらにそれらと共伴した直線化した土師器椀の影響とも考えられる。土師器杯d類が長岡京跡で延暦三年（784年）銘木簡と共に出土したことより、SE400は既に言われるようにそれに続く9世紀初頭頃と考えて矛盾はない。従って、SK13、SK16、SK19、SK21も同時期と考えたい。ただし、器高指数がやや低めで、土師器の色調も前代と同じものが含まれるSK19を須恵器杯の特徴からSE400と同じ時期に、SK19より器高指数が高く、高台の貼り付け方が極めて粗雑なものが含まれるSK13、SK16をほぼ同時期ながらもやや下げて考えることが可能かもしれない。疑問点として、大宰府では土師器の高脚の器形が現われるのはSK 1800の時期、即ち9世紀中頃から後半にかけてのようであるが、それとの整合性をどう考えたら良いのかという問題が生じる。SK13、SK16の年代を9世紀前半頃と広く考えておくべきかもしれない。

以上土坑出土遺物を主に須恵器蓋杯類を概観した。今後の牛頸窯跡群出土須恵器の編年の参考にしたい。

また、窯跡では井手24号窯跡でしか出土していない高台と体部が一体となったような杯が比較的まとまって出土した。今まで牛頸窯跡群の操業年代は6世紀中頃から8世紀後半までという表現を多くしてきたが、6世紀中頃から9世紀初頭頃までと改めたい。

〈註1〉『野添・大浦窯跡群』　福岡県教育委員会　1970
〈註2〉『立山山窯跡群』　八女古窯跡調査団　1972　1977
〈註3〉『天観寺山窯跡群』　北九州市埋蔵文化財調査会
〈註4〉『IX．向佐野、長浦窯跡の調査』『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VI』　福岡県教育委員会　1975
〈註5〉「IV　結語」『牛頸窯跡群』　福岡県教育委員会　1985
〈註6〉『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集（下）』　福岡県教育委員会　1978
「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」　『九州歴史資料館研究論集2』　1976
〈註7〉「大宰府出土輸入陶磁器について」　『九州歴史資料館研究論集4』　1978
森田勉「大宰府の出土品③土器、陶磁器」『仏教芸術』　1983　外
〈註8〉「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『乙益重隆先生古稀記念論文集』1989
〈註9〉「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究VIII』　1992、「都へ行った土器」『古文化談叢第28集』　1992
〈註10〉『大宰府史跡―昭和58年度発掘調査概報』　九州歴史資料館　1984　翌年の概報にも87、90



第197図　大宰府史跡(SE400)出土土器実測図（1/6）（註18文献より）

次調査分として、SD2340出土土器が報告されているが、報文にもある通り、8世紀中頃までの土器を含んでいると考えられる。8世紀前半の資料としては、58年度概報下層出土遺物が良好と考えられる。

〈註11〉中島恒次郎「都へ行った土器」『古文化談叢第28集』　九州古文化研究会　1992

〈註12〉『牛頸ハセムシ窯跡群II』大野城市教育委員会　1989

〈註13〉太宰府市教育委員会山本信夫氏は既に7世紀後半～9世紀前半までをＩＡ～ⅥＢ期まで、おおよそ四半期ごとに区分している。前掲註9他、四半期ごとの編年を目ざす理由は、文献史料が多く現われる8世紀代になると、より細かな絶対年代が必要にされることと、全国的にもそのような傾向にあり、共通した時期区分の上で、種々の論議をする必要があると思われるからである。

〈註14〉『宮ノ本遺跡―第2次調査』太宰府市教育委員会　1992

〈註15〉註10に同じ。なお、中島恒次郎「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会　1992　P146　註7参照

〈註16〉『牛頸石坂窯跡』　大野城市教育委員会　1985
〈註17〉高台付の小型の杯身は時期を問わず、直線的なものが多い。
〈註18〉横田賢次郎「大宰府出土の土師器に関する覚書き(3)」『九州歴史資料館研究論集５』　1979
〈註19〉大宰府史跡ＳＸ2999出土遺物に見られる。『大宰府史跡―昭和61年度発掘調査概報―』　九州歴史資料館　1987
〈註20〉『大宰府史跡―昭和56年度発掘調査概報―』　九州歴史資料館　1982
〈註21〉『牛頸窯跡群Ⅰ』福岡県教育委員会　1988

３．日ノ浦遺跡の変遷について

最後に、時期ごとの遺構の分布状況から、集落の変遷についてごく簡単にまとめておきたい。ただし、縄文時代の遺構については前後の連続性が認められなかったため、ここでは触れないこととする。調査の結果得られた本集落の存続の期間は、６世紀中頃から９世紀初頭までである。これは牛頸窯跡群の操業期間と一致している。ここでは、６世紀中頃から後半をⅠ期、７世紀前半から後半をII期、８世紀前半から中頃をIII期、８世紀後半から９世紀初頭をIV期としておく。

Ⅰ期は本集落が開始された時期である。竪穴住居が２軒あるだけで、廃棄土坑や土坑は見られない（第198図Ⅰ）

II期の集落は、主に竪穴住居で構成されている。遺構の内訳は、竪穴住居９軒、竪穴状遺構と土坑が各１基、大溝１条である。注目されるのは、Ⅴ期の須恵器の出土地点が大溝に限定されており、また、その埋没状況にはIV期の須恵器との時間的な差が認められないことである。Ⅴ期の須恵器の性格の一端を表す事例であるかもしれない。（第198図II）

III期になると、竪穴住居に加えて廃棄土坑が現れてくる。遺構の内訳は、竪穴住居６軒、廃棄土坑７基、土坑３基である。竪穴住居については、１号において４本の主柱穴としっかりした竈を検出したものの、他の５軒では柱穴、竈ともはっきりしなかった。（第199図III）

IV期になると、集落を構成するのは竪穴状遺構３基、廃棄土坑13基、土坑３基である。廃棄土坑の数が急増するのと、竪穴住居が作られなくなるのが、この時期の特徴であると考えられる。（第199図IV）

以上、簡単に集落の変遷を概観してみた。遺構の平面的な分布については、特に時期的な偏りはないものと思われる。なお、日ノ浦II遺跡では10世紀代の遺構が検出されているため、日ノ浦遺跡の北には９世紀以降の集落が存在する可能性があるが、今後の調査を待ちたい。

本稿をまとめるにあたって、太宰府市教育委員会山本信夫氏、狭川真一氏、中島恒次郎氏、山村信榮氏、石川県立埋蔵文化財センター北野博司氏、愛知県教育委員会城ケ谷和広氏からは有益な御助言を賜った。厚く御礼を申し上げる。また、末尾ながら、現地調査および整理作業に御協力戴いた皆様方に、心より御礼を申し上げたい。



Ⅰ. 6 世紀中頃～後半



Ⅱ. 7 世紀前半～後半

第198図　時期別遺構配置図①（1/600）



Ⅲ．8 世紀前半～中頃



Ⅳ．8 世紀後半～ 9 世紀初頭

第199図　時期別遺構配置図②（1/600）

遺　物　法　量　表

ページ
日ノ浦遺跡 ……196
日ノ浦II遺跡 ……213

略号凡例
竪穴住居跡……住
廃棄土坑……ＳＫ
大溝……溝
竪穴状遺構……竪
土坑……坑
甕棺……甕
土坑墓……墓
日ノ浦１号墳……１号墳

※（　）は復元値
～　は現存高

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
13住－ 1	浅鉢	②3.4～	1住－ 8	杯蓋	①(14.9) ②2.8 ③3.0 ④0.6
2	〃	②3.2～	9	〃	①15.8 ②2.7 ③3.4 ④0.7
3	深鉢	②3.8～	10	杯身	①9.3 ②4.0 ⑤6.2 ⑥0.7
4	〃	②3.6～	11	〃	①10.4 ②3.8
5	〃	②3.9～	12	〃	①(12.5) ②5.0 ⑤9.1 ⑥0.6
6	〃	②2.9～	13	〃	①(12.6) ②4.6 ⑤(9.3) ⑥0.5
7	〃	②2.0～	14	〃	①(11.6) ②5.0 ⑤8.5 ⑥0.5
8	〃	②2.4～	15	〃	①(12.3) ②4.8 ⑤9.6 ⑥1.1
16住－ 1	浅鉢	②4.1～	16	〃	①12.6 ②5.1 ⑤(9.1) ⑥0.9
2	〃	②3.0～	17	〃	①13.4 ②5.3 ⑤9.3 ⑥0.9
3	〃	②4.0～	18	〃	①(13.2) ②5.0 ⑤(9.8) ⑥0.7
4	深鉢	②3.2～	19	〃	①14.0 ②5.5 ⑤9.6 ⑥0.7
5	〃	②2.5～	20	〃	①13.8 ②5.2 ⑤9.6 ⑥0.7
6	〃	②6.3～	21	〃	①15.1 ②3.8 ⑤10.3 ⑥0.6
7	〃	②4.1～	22	〃	①19.6 ②6.9 ⑤12.2 ⑥0.9
1不整－1	浅鉢	②3.5～	23	〃	①(13.2) ②3.9
2	〃	②4.3～	24	皿	①10.6 ②2.5
3	深鉢	②7.8～	25	鉢	①(12.6) ②5.2
6坑－ 4	〃	②2.9～	26	杯蓋	①18.7 ②2.4～
1住－ 1	杯蓋	①(10.0) ②1.1	27	皿	①14.4 ②3.3～
2	〃	①10.2 ②1.6	28	鉢	①10.7 ②8.6～
3	〃	①10.4 ②1.5	29	把手付甕	①27.2 ②14.9～ ⑧32.8～
4	〃	①10.6 ②1.9	2住－ 1	杯蓋	①12.4 ②4.2
5	〃	①14.0 ②2.2	2	杯身	①11.0 ②3.5 ⑦12.9
6	〃	①14.6 ②3.0 ③3.1 ④0.8	3	鉢	①(13.7)
7	〃	①(14.8) ②2.8 ③3.0 ④0.6	4	手捏土器	①2.9 ②1.7

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
2住－ 5	甕	①14.0 ②15.8 ⑧15.3	8住－ 1	杯身	②2.8～
6	〃	①(18.4) ②8.1～	9住－ 1	杯蓋	①15.6 ②3.7 ③3.2 ④1.0
7	〃	①(23.8) ②7.3～	10住－ 1	〃	①11.5 ②1.9
8	〃	①(18.4) ②12.7～	2	〃	①(13.6) ②2.3 ③2.3 ④0.4
9	〃	①(12.6) ②5.3～	3	杯身	①(9.8) ②4.0 ⑤(7.2) ⑥0.6
3住－ 1	杯蓋	①(11.6) ②3.8	4	〃	①11.5 ②4.4
2	〃	①14.2 ②4.1	5	鉢	①19.2 ②7.1～
3	手捏土器	①2.5 ②1.6 ⑨2.5	6	皿	①10.6 ②1.5 ⑨8.3
4	〃	①3.0 ②1.4 ⑨3.2	7	高台付皿	①(22.0) ②2.8～ ⑤(15.0) ⑥0.4
4住－ 1	杯蓋	①17.2 ②2.4	8	椀	①17.1 ②6.8 ⑤10.5 ⑥0.5
2	杯身	①(10.0) ②4.2 ⑤(7.2) ⑥0.5	9	竈	①(23.0) ⑨(50.0)
3	〃	①14.3 ②6.3～	11住－ 1	杯身	①14.4 ②4.7 ⑤10.6 ⑥1.1
4	〃	①(15.0) ②5.7 ⑤(10.7) ⑥0.7	12住－ 1	高杯	①16.9 ②5.0～
5	皿	①(24.4) ②5.1 ⑤(19.8) ⑥0.5	2	甕	①(15.4) ②17.2～ ⑧(16.7)
5住－ 1	杯蓋	①(8.2) ②2.1 ⑧(10.4)	14住－ 1	杯蓋	①(8.6) ②2.5 ⑧(11.0)
2	杯身	①(12.2) ②4.3 ⑤(8.2) ⑥0.7	2	〃	①(11.9) ②2.1 ⑧(14.0)
3	長頸壺	①9.2～ ⑧19.1	3	蓋	①17.9 ②3.7～ ⑧20.8
6住－ 1	杯蓋	②2.6～	4	杯身	①13.5 ②3.9 ⑤8.9 ⑥0.7
2	杯身	②1.8～	5	〃	①(13.9) ②4.2 ⑤9.0 ⑥0.9
3	〃	②1.9～ ⑤9.6	6	高杯	②3.9～ ⑩7.0
7住－ 1	杯蓋	①(12.4) ②3.7	7	壺	①8.8 ②7.1～
2	杯身	①10.7 ②2.8 ⑦12.8	15住－ 1	杯身	②3.5～
3	蓋	①7.7 ②3.4	17住－ 1	杯蓋	①11.4 ②3.7
4	鉢	①(9.1) ②11.3	2	〃	①12.4 ②4.4
5	甕	①(15.2) ②6.5～	3	杯身	①9.8 ②3.2 ⑦11.7
6	手捏土器	①3.2 ②2.4	4	〃	①9.7 ②3.4 ⑦11.8

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
17住－ 5	杯 身	①10.0 ②3.6 ⑦12.6	20住－ 4	高 杯	①11.4 ②14.0 ⑦14.5
6	〃	①9.8 ②3.1～ ⑦12.4	5	平 瓶	①(6.2) ②16.5 ⑧19.7
7	皿	①(20.3) ②3.0	6	甕	①16.6 ②27.2 ⑧25.1
8	甑	②6.2～ ⑧6.2	7	〃	①19.5 ②36.5 ⑧26.5
9	甕	①(20.6) ②8.6～	21住－ 1	杯 蓋	①14.5 ②4.4
10	椀	①13.0 ②6.9	2	甕	①(14.5) ②9.4～ ⑧(16.3)
11	甕	①15.2 ②15.2 ⑧15.6	3	甑	①27.7 ②20.0 ⑧34.8
12	〃	①(19.4) ②10.1～	SK 1 － 1	杯 蓋	①(13.2) ②2.2 ③2.0 ④0.6
18住－ 1	杯 蓋	①10.6 ②3.5	2	〃	①14.8 ②1.1 ③2.2 ④0.5
2	〃	①10.5 ②3.4	3	蓋	①8.1 ②2.1 ③1.5 ④0.7
3	〃	①10.6 ②3.5	4	杯 身	①(8.9) ②2.9
4	〃	①11.7 ②2.6 ⑧14.6	5	〃	①12.8 ②4.1
5	〃	①14.2 ②4.0 ③2.5 ④0.7	6	〃	①13.2 ②4.9
6	杯 身	①9.1 ②3.2 ⑦11.1	7	皿	①(14.6) ②1.7
7	〃	①9.8 ②3.1 ⑦11.7	8	〃	①14.4 ②1.8
8	壺	①8.1 ②7.8～	9	〃	①16.2 ②2.7
19住－ 1	杯 蓋	①8.1 ②2.8 ⑧10.5	10	〃	①(16.6) ②2.7
2	杯 身	①8.5 ②3.6	11	円面硯	①5.8～ ⑩(22.0)
3	高 杯	②6.7～ ⑩(10.6)	12	杯	①(10.8) ②3.5
4	皿	①(29.1) ②3.5 ⑨(26.0)	13	〃	①(11.3) ②4.7
5	手捏土器	①6.0 ②2.2	14	〃	①(11.0) ②3.2
6	杯 身	①15.0 ②5.6 ⑤8.3 ⑥1.2	15	〃	①(13.8) ②3.8
7	円筒状土製品	②27.0～ ⑨17.2	16	〃	①(14.1) ②3.9
20住－ 1	杯 蓋	①13.5 ②3.5	17	〃	①13.6 ②3.8
2	〃	①13.2 ②3.5	18	〃	①(13.6) ②3.0
3	杯 身	①11.4 ②3.6 ⑦14.0	19	皿	①18.4 ②2.5

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
SK1－ 20	鉢	①20.1 ②15.6 ⑧20.9 ⑨11.0
21	甕	①(30.0) ②7.5～
SK 2 － 1	杯 蓋	①15.4 ②2.9 ③1.9 ④1.2
2	〃	①15.2 ②2.3 ③2.1 ④0.8
3	〃	①15.7 ②1.2 ③2.0 ④0.7
4	杯 身	①9.3 ②4.1 ⑤5.4 ⑥0.6
5	〃	①13.4 ②4.1 ⑤8.6 ⑥0.5
6	〃	①7.9 ②5.8 ⑤9.4 ⑥0.4
7	〃	①(17.2) ②6.3 ⑤9.6 ⑥0.4
8	〃	①(14.2) ②3.9
9	椀	①14.0 ②3.9 ⑤7.0 ⑥0.3
10	〃	①13.7 ②4.1 ⑤6.1 ⑥0.7
11	杯	①(19.0) ②3.6
12	甕	①24.9 ②9.8～
SK 3 － 1	杯 蓋	①(15.8) ②3.7 ③2.9 ④0.5
2	杯 身	①8.9 ②3.7
3	高 杯	②4.4～ ⑩10.1
SK 4 － 1	杯 蓋	①11.8 ②1.4
2	〃	①15.6 ②2.3 ③3.0 ④0.8
3	蓋	①9.4 ②3.5
4	杯 身	①9.5 ②5.0 ⑤6.1 ⑥0.6
5	〃	①14.3 ②5.8 ⑤9.7 ⑥0.9
6	〃	①14.4 ②6.2 ⑤9.8 ⑥0.9
7	〃	①15.2 ②5.4 ⑤10.5 ⑥0.7
8	〃	①16.2 ②4.5 ③11.7 ④0.9
9	〃	①(15.2) ②6.5 ③11.0 ④0.5
SK 4 －10	杯 身	①15.6 ②6.2 ③11.4 ④0.9
11	〃	①11.2 ②4.2
12	〃	①11.0 ②3.8
13	鉢	①(17.0) ②6.6
14	〃	①17.4 ②6.5
15	すり鉢	①13.7 ②6.3 ⑨9.6
16	壺	①(2.6) ②3.2
17	〃	①(7.4) ②4.3～ ⑧(9.0)
18	〃	①(6.4) ②7.3～ ⑧(10.0)
19	甕	①30.0 ②22.4～ ⑧32.6
20	円面硯	①(11.4) ⑫(10.5)
21	皿	①18.0 ②2.8
22	〃	①19.0 ②3.4 ⑤9.6 ⑥0.7
23	〃	①(27.2) ②4.0～
24	壺	①(18.2) ②7.0～
25	甕	①35.8 ②4.7～
SK 5 － 1	杯 蓋	①16.2 ②2.4 ③3.0 ④0.9
2	杯 身	①(10.2) ②4.4 ⑤6.8 ⑥0.4
3	〃	①13.8 ②6.4 ⑤9.7 ⑥0.8
SK 6 － 1	杯 蓋	①(12.8) ②3.9 ③1.9 ④1.2
2	〃	①16.9 ②1.8 ③2.3 ④0.9
3	杯 身	①(12.5) ②4.7 ⑤6.5 ⑥0.3
4	〃	①15.5 ②5.4 ⑤8.9 ⑥0.3
5	〃	①13.1 ②3.7
6	杯	①(14.0) ②3.7
7	〃	①(17.0) ②4.5

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
SK 6 － 8	鉢	①15.6 ②5.3
9	甕	②10.1 ⑧13.4
10	杯	①(11.6) ②3.4
SK 7 － 1	杯蓋	①10.6 ②1.2 ③1.4 ④0.5
2	〃	①11.0 ②2.3 ③1.3 ④0.5
3	〃	①11.8 ②1.5 ③1.9 ④0.9
4	〃	①12.8 ②2.2 ③1.6 ④1.0
5	〃	①13.9 ②1.8 ③1.6 ④0.7
6	〃	①14.0 ②1.4 ③1.6 ④0.9
7	〃	①(14.0) ②3.4 ③1.8 ④0.7
8	〃	①(14.6) ②2.7 ⑤1.8 ⑥0.9
9	〃	①13.9 ②1.8 ⑤1.8 ⑥0.7
10	〃	①15.2 ②2.9 ③1.9 ④0.9
11	〃	①16.2 ②2.4 ③2.0 ④1.2
12	〃	①(18.2) ②3.0 ③2.3 ④1.0
13	杯身	①10.6 ②3.2 ⑤7.0 ⑥0.4
14	〃	①10.6 ②4.3 ⑤6.1 ⑥0.5
15	〃	①11.3 ②3.3 ⑤7.0 ⑥0.4
16	〃	①11.8 ②4.7 ⑤6.7 ⑥0.5
17	〃	①11.3 ②3.8 ⑤7.1 ⑥0.5
18	〃	①12.4 ②4.5 ⑤7.5 ⑥0.5
19	〃	①13.0 ②3.9 ⑤7.7 ⑥0.5
20	〃	①13.3 ②3.7 ⑤7.7 ⑥0.4
21	〃	①14.0 ②3.6 ⑤7.7 ⑥0.4
22	〃	①12.7 ②4.3 ⑤8.1 ⑥0.6
23	〃	①16.5 ②6.3 ⑤9.7 ⑥0.5
SK 7 －24	杯身	①(21.0) ②9.0 ⑤(12.4) ⑥0.5
25	〃	①12.8 ②3.1
26	〃	①13.5 ②3.5
27	〃	①(12.8) ②3.6
28	〃	①14.5 ②3.7
29	皿	①14.4 ②1.6
30	〃	①(14.0) ②1.9
31	〃	①(17.0) ②2.1
32	〃	①(17.6) ②2.2
33	〃	①(18.0) ②2.1
34	鉢	①(9.4) ②8.3 ⑨7.0
35	〃	①(8.6) ②6.5 ⑨(6.0)
36	瓶子	①3.4 ②6.7～ ⑧7.1
37	蓋	①(7.1) ②2.4
38	皿	①(20.0) ②2.0
39	甕	①14.2 ②10.1～
40	〃	①15.0 ②6.6～
41	〃	①(30.0) ②6.6～
SK 8 － 1	杯蓋	①(14.7) ②2.3 ③3.1 ④0.7
2	杯身	①(12.6) ②4.1 ③2.6 ④0.7
3	杯蓋	①(14.1) ②9.5
4	甕	①(7.4) ②4.3～ ⑧(9.0)
SK 9 － 1	杯蓋	①12.6 ②2.0
2	〃	①14.9 ②2.7
3	〃	①17.3 ②3.2 ③3.6 ④0.9
4	〃	①16.8 ②3.8 ③2.1 ④0.6 ⑧19.0

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
SK 9 － 5	杯　身	①13.6 ②6.0 ⑤9.4 ⑥0.8
6	〃	①13.1 ②5.2 ⑤9.9 ⑥0.8
7	長頸壺	②13.0 ⑤9.6 ⑥0.9 ⑧18.8
8	皿	①18.9 ②2.6
9	〃	①23.2 ②3.5 ⑤16.8 ⑥0.7
10	椀	①9.5 ②6.4
11	鉢	①17.4 ②6.9
12	〃	①24.1 ②10.9
13	甕	①24.7 ②14.5～ ⑧28.9
SK10－ 1	杯　蓋	①14.0 ②2.2 ③2.0 ④0.5
2	〃	①13.9 ②2.8 ③3.0 ④0.6
3	〃	①15.0 ②2.5 ③2.6 ④0.6
4	杯　身	①(10.5) ②3.0
5	〃	①(12.5) ②4.8 ⑤8.6 ⑥0.7
6	蓋	①(8.2) ②2.7
7	すり鉢	②3.2～ ⑨(7.8)
8	〃	②6.3～ ⑨(7.7)
SK13－ 1	杯　身	①13.0 ②5.8 ⑤7.4 ⑥0.5
2	〃	①(14.0) ②5.4 ⑤(7.7) ⑥0.5
3	〃	①15.1 ②6.5 ⑤7.3 ⑥0.4
4	〃	①15.0 ②7.2 ⑤8.3 ⑥0.8
5	〃	①(17.9) ②8.5 ⑤8.6 ⑥0.6
6	〃	①19.1 ②8.9 ⑤8.6 ⑥0.8
7	〃	①19.0 ②9.1 ⑤9.1 ⑥0.9
8	〃	①(19.0) ②7.2 ⑤(10.2) ⑥0.6
9	〃	①19.6 ②9.0 ⑤9.5 ⑥0.7
SK13－10	杯　身	①(12.0) ②3.8
11	〃	①13.4 ②5.1
12	蓋	①(12.2) ②2.7～
13	壺	②7.1～ ⑧9.5
14	杯	①12.7 ②3.9
15	〃	①12.6 ②3.7
16	〃	①12.4 ②4.1
17	〃	①(12.0) ②3.9
18	〃	①12.8 ②4.3
19	〃	①(13.7) ②4.0
20	皿	①(10.0) ②2.0
21	〃	①(12.9) ②2.0
22	〃	①13.6 ②2.3
23	〃	①14.3 ②2.6
24	〃	①(14.5) ②2.4
25	椀	①13.4 ②5.5 ⑤7.1 ⑥1.3
26	〃	①16.0 ②6.6 ⑤8.5 ⑥0.8
27	脚付椀	①10.3 ②5.3～
28	鉢	①28.0 ②5.9
29	甕	①14.4 ②10.1
30	〃	①(18.4) ②11.4～
31	〃	①28.4 ②9.4～
32	椀	①(14.0) ②5.1 ⑤6.3 ⑥0.6
33	〃	①14.4 ②5.4 ⑤7.5 ⑥0.8
34	〃	①17.6 ②6.1 ⑤8.7 ⑥0.4
35	〃	①(17.6) ②5.5 ⑤(8.6) ⑥0.6

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
SK13－36	椀	①(18.0) ②6.4 ⑤8.5 ⑥0.8
37	〃	①(17.2) ②5.8 ⑤(8.7) ⑥0.7
38	〃	①18.4 ②7.2 ⑤7.8 ⑥0.6
39	〃	①(19.3) ②6.0 ⑤(8.0) ⑥0.7
SK14－1	杯蓋	①10.6 ②2.9 ③2.0 ④0.8
2	〃	①13.8 ②2.7 ③2.3 ④0.7
3	〃	①14.1 ②2.1 ③2.4 ④0.7
4	杯身	①(13.2) ②4.2 ⑤8.9 ⑥0.7
5	〃	①14.5 ②5.7 ⑤10.7 ⑥1.0
6	皿	①18.0 ②1.8
7	甕	①(17.7) ②9.6～ ⑧(20.8)
8	杯蓋	①20.4 ②2.9 ③2.9 ④0.7
9	椀	①20.1 ②5.3 ⑤12.4 ⑥0.6
10	〃	①19.2 ②5.6 ⑤13.3 ⑥0.8
11	高杯	①22.2 ②7.8 ⑩11.0
SK15－1	杯	①12.5 ②3.8
2	皿	①15.3 ②2.0
3	〃	①(15.6) ②2.2
4	鉢	①(23.8) ②7.3～
SK16－1	杯蓋	①18.0 ②2.7
2	〃	①18.7 ②2.5
3	杯身	①(14.1) ②6.2 ⑤7.6 ⑥0.4
4	〃	①16.0 ②7.2 ⑤8.8 ⑥0.6
5	〃	①13.0 ②3.9
6	〃	①13.5 ②5.0
7	〃	①14.2 ②4.4
SK16－8	皿	①15.0 ②2.2
9	椀	①14.7 ②5.6 ⑤8.3 ⑥0.9
10	杯	①13.2 ②3.8
11	〃	①(15.6) ②4.1
12	皿	①(14.0) ②2.4
13	〃	①(14.5) ②2.0
14	〃	①(14.5) ②2.1～
15	〃	①15.1 ②2.5
16	脚付鉢	①(13.2) ②6.8～ ⑩13.2
17	鉢	①(26.5) ②9.6～
18	甕	①27.3 ②5.5～
19	脚付鉢	①(27.3) ②6.5～
SK17－1	杯蓋	①12.3 ②2.7 ③2.2 ④0.9
2	〃	①13.0 ②1.7 ③2.0 ④0.9
3	〃	①13.4 ②3.1 ③1.7 ④0.8
4	〃	①15.1 ②1.6 ③1.9 ④0.8
5	〃	①15.7 ②1.6 ③2.0 ④0.8
6	〃	①15.5 ②1.9 ③2.2 ④0.8
7	〃	①14.9 ②2.0 ③1.9 ④0.8
8	〃	①14.6 ②3.2 ③2.0 ④1.1
9	〃	①15.6 ②2.7 ③2.0 ④0.9
10	〃	①16.1 ②3.2 ③2.1 ④0.9
11	〃	①18.4 ②2.7 ③2.5 ④1.1
12	〃	①19.6 ②3.0 ③2.2 ④0.9
13	杯身	①(10.4) ②5.0 ⑤(6.9) ⑥0.5
14	〃	①11.2 ②4.2 ⑤(7.4) ⑥0.5

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
SK17－15	杯身	①12.0 ②3.3 ⑤8.1 ⑥0.4	SK17－41	甕	①(23.3) ②8.6
16	〃	①12.6 ②4.1 ⑤7.7 ⑥0.5	SK18－ 1	杯蓋	①12.0 ②2.2 ③1.6 ④0.7
17	〃	①14.2 ②3.6 ⑤9.3 ⑥0.4	2	〃	①12.4 ②1.7 ③1.6 ④0.8
18	〃	①(15.6) ②5.1 ⑤(10.5) ⑥0.6	3	〃	①13.2 ②2.1 ③1.7 ④1.0
19	〃	①18.0 ②5.3 ⑤11.4 ⑥0.4	4	〃	①(13.7) ②3.4 ③2.0 ④0.7
20	〃	①17.0 ②5.9 ⑤9.7 ⑥0.6	5	〃	①13.6 ②3.6 ③1.7 ④0.8
21	〃	①17.9 ②6.3 ⑤9.6 ⑥0.8	6	〃	①13.8 ②3.2 ③1.8 ④0.8
22	〃	①18.0 ②5.8 ⑤11.7 ⑥0.5	7	〃	①14.3 ②2.5 ③1.9 ④0.8
23	〃	①18.8 ②5.9 ⑤11.7 ⑥0.7	8	〃	①14.7 ②2.2 ③2.0 ④0.8
24	〃	①13.0 ②3.5	9	〃	①15.2 ②2.0 ③2.0 ④0.7
25	〃	①14.2 ②3.7	10	〃	①15.4 ②2.4 ③1.8 ④1.0
26	〃	①(14.8) ②5.1	11	〃	①15.1 ②2.8 ③1.7 ④1.0
27	皿	①13.5 ②2.2	12	〃	①15.0 ②3.1 ③1.9 ④0.8
28	〃	①(13.2) ②2.8	13	〃	①16.7 ②3.0 ③1.8 ④0.6
29	〃	①(14.6) ②2.3	14	〃	①17.0 ②3.5 ③1.8 ④0.9
30	〃	①17.8 ②2.6	15	〃	①17.5 ②3.1 ③2.0 ④0.9
31	〃	①(18.5) ②2.2	16	〃	①17.8 ②3.7 ③2.2 ④1.0
32	〃	①18.6 ②3.1	17	〃	①18.4 ②2.7 ③2.2 ④0.9
33	〃	①19.4 ②2.4	18	〃	①18.1 ②1.8 ③1.9 ④1.0
34	〃	①(19.6) ②3.0	19	杯身	①11.3 ②3.2 ⑤6.1 ⑥0.5
35	〃	①16.1 ②3.1 ⑤11.5 ⑥0.5	20	〃	①12.2 ②4.2 ⑤7.5 ⑥0.5
36	高杯	①(15.4) ②11.2 ⑩10.1	21	〃	①13.0 ②4.2 ⑤7.1 ⑥0.3
37	平瓶	②5.2～ ⑧10.9	22	〃	①13.3 ②4.2 ⑤8.0 ⑥0.7
38	杯	①14.2 ②3.7	23	〃	①15.6 ②5.1 ⑤8.4 ⑥0.5
39	甕	①(17.7) ②11.0～	24	〃	①11.2 ②3.0
40	〃	①(18.3) ②6.9～	25	〃	①(12.2) ②3.7

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
SK18－26	杯　身	①12.4　②3.9	SK19－ 2	杯　蓋	①13.2　②2.7
27	〃	①13.2　②4.1	3	〃	①12.6　②2.6
28	〃	①(13.4)　②3.4	4	〃	①13.7　②2.6
29	皿	①14.0　②2.1	5	〃	①22.0　②3.0
30	〃	①15.3　②2.1	6	蓋	①8.0　②3.3　③2.1　④1.1
31	〃	①(17.2)　②2.5	7	〃	①14.2　②4.3　③2.4 ④1.3
32	〃	①17.5　②2.5	8	杯　身	①(12.5)　②4.3　⑤7.4 ⑥0.5
33	〃	①17.9　②2.5	9	〃	①(12.5)　②4.7　⑤7.6 ⑥0.3
34	〃	①(18.9)　②2.2	10	〃	①13.3　②5.5　⑤8.1 ⑥0.6
35	〃	①(19.0)　②2.3	11	〃	①14.1　②4.7　⑤7.4 ⑥0.7
36	〃	①19.3　②2.1	12	〃	①(14.3)　②5.3　⑤8.3 ⑥0.5
37	〃	①(19.2)　②3.3	13	〃	①14.4　②6.0　⑤9.2 ⑥0.6
38	高　杯	②6.5～　⑩(10.6)	14	〃	①14.4　②6.2　⑤9.2 ⑥0.6
39	〃	②6.3～　⑩(10.0)	15	〃	①(15.2)　②6.4　⑤9.3 ⑥0.7
40	壺	①6.9　②4.5～	16	〃	①13.2　②4.4
41	長頸壺	②8.4～　⑤12.0 ⑥0.7　⑧19.3	17	〃	①13.3　②3.7
42	壺	①(13.5)　②6.5～	18	〃	①(13.6)　②3.6
43	短頸壺	①9.7　②15.8　⑤9.7 ⑥0.7　⑧(19.0)	19	瓶　子	①4.3　②10.7　⑧8.9
44	甕	①(23.9)　②6.5～	20	杯　蓋	①14.1　②2.8
45	鉢	①23.4　②16.4　⑨13.4	21	〃	①20.2　②3.8
46	杯	①14.6　②2.7	22	杯	①11.9　②3.1
47	皿	①18.7　②2.5	23	〃	①(12.9)
48	〃	①19.6　②2.2	24	〃	①13.1　②3.7
49	〃	①20.6　②2.2	25	〃	①13.2　②3.5
50	鉢	①(30.4)　②5.8	26	〃	①(13.0)　②4.2
SK19－ 1	杯　蓋	①(13.0)　②2.4	27	〃	①14.0　②3.6

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
SK19—28	杯	①15.5 ②4.1	SK20—23	杯身	①13.9 ②4.4 ⑤9.4 ⑥0.5
29	脚付鉢	①(10.0) ②4.7～	24	〃	①13.8 ②4.5 ⑤9.5 ⑥0.6
30	甕	①(16.0) ②6.0～	25	〃	①14.2 ②3.9 ⑤9.3 ⑥0.5
31	〃	①(17.8) ②11.4～ ⑧(15.3)	26	〃	①(14.2) ②4.1 ⑤9.3 ⑥0.3
SK20— 1	杯蓋	①11.2 ②1.9 ③1.4 ④0.9	27	〃	①14.0 ②4.3 ⑤9.5 ⑥0.7
2	〃	①14.0 ②1.3	28	〃	①14.3 ②3.7 ⑤9.7 ⑥0.6
3	〃	①13.3 ②3.2 ③1.7 ④0.9	29	〃	①14.4 ②4.3 ⑤10.1 ⑥0.7
4	〃	①15.2 ②1.9 ③2.4 ④0.9	30	〃	①14.3 ②4.4 ⑤10.4 ⑥0.8
5	〃	①15.6 ②2.8 ③2.1 ④0.8	31	〃	①(14.6) ②3.5 ⑤(10.2) ⑥0.6
6	〃	①16.1 ②3.3 ③2.4 ④0.9	32	〃	①15.2 ②4.1 ⑤9.3 ⑥0.7
7	〃	①16.5 ②3.6 ③2.7 ④0.7	33	〃	①17.3 ②5.3 ⑤12.0 ⑥0.7
8	〃	①17.8 ②3.8 ③2.4 ④0.8	34	〃	①16.8 ②4.9 ⑤10.8 ⑥0.6
9	〃	①18.5 ②4.3 ③2.4 ④1.1	35	〃	①17.6 ②5.8 ⑤11.4 ⑥0.6
10	〃	①19.0 ②4.6 ③2.2 ④1.4	36	〃	①17.5 ②6.7 ⑤10.6 ⑥0.4
11	〃	①19.2 ②3.7 ③2.3 ④1.1	37	〃	①17.9 ②5.7 ⑤11.0 ⑥0.5
12	〃	①20.0 ②1.6 ③1.7 ④0.8	38	〃	①17.5 ②5.3 ⑤11.8 ⑥0.6
13	〃	①20.2 ②2.4 ③2.4 ④0.9	39	〃	①17.5 ②5.6 ⑤11.5 ⑥0.6
14	杯身	①10.1 ②4.4 ⑤5.7 ⑥0.6	40	〃	①17.5 ②5.6 ⑤10.7 ⑥0.5
15	〃	①11.6 ②4.0 ⑤7.3 ⑥0.5	41	〃	①17.3 ②6.8 ⑤11.9 ⑥0.6
16	〃	①11.3 ②3.5 ⑤7.6 ⑥5.5	42	〃	①17.9 ②6.5 ⑤11.7 ⑥0.4
17	〃	①11.4 ②3.5 ⑤8.0 ⑥0.3	43	〃	①(18.0) ②5.7 ⑤12.6 ⑥0.6
18	〃	①(11.8) ②4.0 ⑤7.4 ⑥0.5	44	〃	①18.6 ②5.5 ⑤12.3 ⑥0.7
19	〃	①12.3 ②4.3 ⑤7.6 ⑥0.5	45	〃	①18.2 ②6.7 ⑤10.5 ⑥0.7
20	〃	①13.2 ②4.5 ⑤9.7 ⑥0.6	46	〃	①10.6 ②3.2 ⑨9.1
21	〃	①(13.6) ②3.9 ⑤9.4 ⑥0.5	47	〃	①11.7 ②3.8 ⑨9.0
22	〃	①13.8 ②4.5 ⑤9.4 ⑥0.5	48	〃	①14.1 ②3.5 ⑨11.1

NO	器　種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器　種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
SK20—49	杯　身	①14.0 ②3.8 ⑨9.7	SK20—75	高　杯	①24.3 ②14.9 ⑩13.4
50	〃	①14.5 ②3.8 ⑨9.3	76	〃	①(25.5) ②14.4 ⑩13.8
51	皿	①13.3 ②2.9 ⑨10.6	77	すり鉢	①12.2 ②7.0 ⑨7.8
52	〃	①13.9 ②2.3	78	鉢	①24.6 ②21.1
53	〃	①14.5 ②2.1 ⑨10.5	79	〃	①27.1 ②17.8 ⑨17.5
54	〃	①15.6 ②2.3 ⑨11.7	80	壺	①19.1 ②19.1～ ⑧(28.8)
55	〃	①19.0 ②1.8 ⑨15.4	81	甑	①28.7 ②26.1 ⑧(33.8) ⑨19.4
56	〃	①(20.2) ②3.0	82	皿	①23.0 ②2.5
57	〃	①(20.0) ②2.7	83	高　杯	①27.3 ②18.7 ⑩15.0
58	〃	①(19.8) ②3.0	84	鉢	①32.0 ②10.1
59	〃	①20.3 ②2.7	85	甕	①26.8 ②22.0 ⑧(24.4)
60	〃	①20.3 ②3.0	86	〃	①28.6 ②14.1
61	〃	①20.7 ②2.7	SK21— 1	耳付壺	②7.7～
62	〃	①(14.4) ②1.8 ⑤10.9 ⑥0.5	2	蓋	①(13.4) ②2.0
63	〃	①21.5 ②2.7 ⑤17.5 ⑥0.5	3	杯	①(12.1) ②4.0
64	〃	①22.3 ②4.8 ⑤17.0 ⑥0.6	4	〃	①12.8 ②4.2 ⑨7.2
65	〃	①25.0 ②4.6 ⑤19.0 ⑥0.7	5	〃	①12.8 ②4.2
66	高　杯	①13.0 ②10.0 ⑩10.4	6	〃	①13.8 ②3.4～
67	〃	①15.5 ②9.7 ⑩9.6	7	皿	①13.5 ②2.6
68	〃	①15.7 ②10.5 ⑩9.1	8	椀	①14.5 ②6.0 ⑤7.9 ⑥0.8
69	〃	①20.2 ②9.6 ⑩11.0	9	〃	①14.9 ②6.0 ⑤7.9 ⑥0.7
70	〃	①(21.4) ②8.7 ⑩(10.7)	10	脚付鉢	①(3.5) ②3.0 ⑤(8.2)
71	〃	①20.4 ②12.7 ⑩11.6	11	椀	①15.6 ②6.1 ⑤8.6 ⑥0.8
72	〃	①21.4 ②10.8 ⑩13.3	12	〃	①16.0 ②6.0 ⑤8.7 ⑥0.9
73	〃	①23.0 ②16.3 ⑩13.5	13	〃	①18.8 ②6.3～
74	〃	①23.5 ②16.6 ⑩13.6	14	壺	①7.0～ ⑩17.0

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
SK22－ 1	杯　蓋	①14.7 ②2.9 ③1.8 ④0.9	大溝－ 16	杯　蓋	①(9.0) ②2.6～ ⑧(11.1)
2	皿	①13.5 ②1.7	17	高　杯	②7.0～ ⑩(9.8)
3	椀	①(15.8) ②6.2 ③9.2 ④0.9	18	杯　蓋	①10.4 ②4.3
4	杯	①13.0 ②3.1	19	〃	①10.7 ②4.0
5	〃	①13.9 ②3.3	20	〃	①10.9 ②4.0
6	〃	①13.6 ②3.8	21	〃	①8.6 ②1.7 ⑧11.2
7	〃	①13.6 ②3.5	22	杯　身	①(8.9) ②3.1 ⑦(11.7)
8	〃	①(14.0) ②3.2	23	〃	①10.2 ②2.5 ⑦12.2
9	〃	①16.1 ②3.9	24	甕	②11.8～ ⑧10.3
10	皿	①(16.0) ②2.3	25	高　杯	②6.4～ ⑩(9.4)
11	〃	①18.1 ②2.0	26	椀	①16.6 ②7.5
大溝－ 1	杯　蓋	①(11.0) ②3.6	27	〃	①(19.0) ②7.2～
2	杯　身	①(10.3) ②3.5	28	杯　蓋	①10.4 ②3.5
3	〃	①8.2 ②3.2	29	〃	①8.5 ②2.8 ⑧10.8
4	壺	①10.2 ②7.2	30	杯　身	①9.9 ②3.7 ⑦12.0
5	甕	①(18.5) ②10.9～	31	〃	①(10.3) ②3.8 ⑦12.5
6	蓋	①6.8 ②2.9 ⑧9.2	32	高　杯	①(9.0) ②10.0 ⑩7.6
7	壺	②5.6～ ⑧13.7	33	短頸壺	①5.2 ②7.3 ⑧10.8
8	杯　蓋	①(10.3) ②3.4	34	壺	①7.9 ②12.1 ⑧13.5
9	椀	①(15.9) ②7.9	35	甕	①23.4 ②6.4～
10	甕	①21.9 ②6.0～	36	〃	①18.4 ②13.8～
11	すり鉢	②7.1 ⑨7.0	37	手捏土器	①3.2 ②2.5
12	〃	①(12.3) ②8.9 ⑨8.7	38	甑	①(19.5) ②16.7～ ⑧27.0
13	杯　蓋	①(11.1) ②2.7	39	把手付甕	①(25.3) ②17.4～ ⑧31.5
14	〃	①10.5 ②3.2	40	杯　蓋	①(11.5) ②3.2
15	〃	①8.2 ②3.6 ③1.6 ④1.1	41	〃	①(11.0) ②3.3

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
大溝一 42	杯　蓋	①11.2 ②3.6	大溝－ 68	杯　身	①9.6 ②2.7 ⑧11.6
43	〃	①11.1 ②2.8 ③1.5 ④1.0 ⑧13.5	69	〃	①(9.4) ②3.6
44	杯　身	①9.8 ②4.1 ⑦12.0	70	〃	①10.0 ②4.0
45	〃	①10.2 ②4.1 ⑦12.1	71	〃	①11.2 ②4.3
46	〃	①10.6 ⑧3.2 ⑦13.0	72	高　杯	①(14.0) ②4.2
47	〃	①9.3 ②4.2	73	皿	①(26.0) ②3.6
48	杯　蓋	①10.5 ②3.6	74	椀	①(9.4) ②7.9 ⑧10.4
49	〃	①(11.0) ②4.1	75	甕	①(12.2) ②7.5～
50	〃	①(7.1) ②2.8 ⑧9.2	76	〃	①(18.0) ②7.5～
51	杯　身	①8.4 ②3.2 ⑧10.6	77	〃	①(18.6) ②4.6～
52	〃	①8.4 ②3.2 ⑧10.6	78	甑	①(25.8) ②8.3～
53	〃	①9.5 ②2.9 ⑧11.5	79	杯　蓋	①10.0 ②3.1
54	〃	①(10.1) ②3.3 ⑧(12.2)	80	〃	①10.7 ②4.1
55	椀	①(17.5) ②6.1	81	〃	①7.2 ②2.8 ⑧9.6
56	杯　蓋	①(11.4) ②3.4	82	〃	①8.1 ②2.6 ⑧10.2
57	〃	①11.4 ②4.1	83	蓋	①(17.4) ②4.7 ③2.5 ④1.5 ⑧20.0
58	〃	①(12.8) ②4.0	84	杯　身	①11.2 ②5.6
59	〃	①13.2 ②3.9～	85	椀	①13.5 ②5.7
60	〃	①10.5 ②2.5 ⑧8.0	86	甕	①(25.9) ②12.3～
61	〃	①9.1 ②3.2 ⑧11.4	87	杯　蓋	①10.6 ②3.5
62	〃	①11.4 ②2.4 ⑧8.9	88	〃	①10.4 ②3.4
63	〃	①9.3 ②3.1 ⑧11.6	89	〃	①11.0 ②3.6
64	〃	①10.9 ②3.5 ③1.7 ④1.0 ⑧8.9	90	〃	①11.5 ②4.0
65	〃	①13.2 ②4.7 ③2.3 ④1.1 ⑧16.2	91	〃	①11.8 ②3.2
66	杯　身	①(10.0) ②2.6～ ⑧(11.3)	92	〃	①11.9 ②3.5
67	〃	①8.7 ②3.3 ⑧11.1	93	〃	①13.9 ②4.8

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
大溝一 94	杯　蓋	①7.5 ②2.4 ⑧9.7	大溝－120	皿	①27.3 ②4.2
95	〃	①8.2 ②2.8 ⑧10.5	121	〃	①(31.8) ②4.2
96	〃	①(8.1) ②2.6 ⑧10.7	122	高　杯	①(11.2) ②7.7 ⑧13.6 ⑩10.8
97	〃	①(11.1) ②2.6 ⑧11.2	123	〃	②11.8～ ⑩11.5
98	〃	①8.9 ②3.1 ⑧11.2	124	甕	①15.2 ②22.2～ ⑧24.0
99	〃	①8.0 ②3.5 ③1.0 ④0.9 ⑧10.3	125	甑	①(32.1) ②22.3 ⑨13.4
100	杯　身	①(9.1) ②3.3 ⑦(10.6)	126	鉢	①(15.2) ②13.4 ⑧(22.3)
101	〃	①9.1 ②3.7 ⑦11.2	127	甕	②8.7～
102	〃	①9.0 ②3.1 ⑦11.2	128	〃	①20.4 ②5.9～
103	〃	①9.6 ②3.6 ⑦11.4	129	甑	①27.1 ②31.9 ⑧37.7 ⑨13.9
104	〃	①9.3 ②3.0 ⑦11.5	130	杯　蓋	①(9.8) ②3.5
105	〃	①9.5 ②2.8 ⑦11.5	131	〃	①8.6 ②2.6
106	〃	①(10.2) ②3.6 ⑦12.1	132	杯　身	①8.5 ②2.4 ⑧10.8
107	〃	①10.0 ②3.3 ⑦12.0	133	〃	①10.3 ②3.9 ⑧12.5
108	〃	①9.9 ②2.6 ⑦12.0	134	高　杯	①10.6 ②7.4～ ⑦12.7
109	〃	①(9.8) ②3.4 ⑦12.2	135	すり鉢	②3.2～ ⑨8.7
110	〃	①10.2 ②3.2 ⑦12.3	136	杯　蓋	①(11.6) ②3.6 ⑧9.5
111	〃	①10.2 ②3.7 ⑦12.4	137	〃	①7.5 ②2.3 ⑧9.5
112	〃	①(10.5) ②3.7 ⑦(12.8)	138	杯　身	①(10.0) ②3.9 ⑦12.2
113	〃	①10.5 ②3.7 ⑦13.0	139	〃	①10.0 ②3.4 ⑦12.2
114	〃	①10.7 ②4.0 ⑦13.4	140	高　杯	②10.6～ ⑩10.6
115	〃	①11.7 ②3.4 ⑦14.1	141	脚付壺	②6.8～ ⑩8.0
116	〃	①(10.1) ②3.4	142	甕	①(21.2) ②7.0～
117	〃	①9.6 ②3.6	143	杯　蓋	①11.2 ②3.4
118	〃	①(10.4) ②4.2	144	〃	①10.9 ②3.8
119	皿	①(18.8) ②3.0	145	〃	①12.1 ②3.45

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
大溝－146	杯　蓋	①7.6 ②2.72 ③1.3 ④0.7 ⑧9.5
147	〃	①(7.9) ②3.0 ③1.3 ④0.6 ⑧10.1
148	〃	①7.0 ②2.2 ③2.6 ④0.6 ⑧9.4
149	杯　身	①8.8 ②3.6 ⑦11.0
150	〃	①9.4 ②3.0 ⑦11.6
151	〃	①10.0 ②3.7 ⑦12.0
152	〃	①10.0 ②3.2 ⑦12.3
153	〃	①9.7 ②3.4 ⑦12.0
154	〃	①10.4 ②2.7 ⑦12.6
155	〃	①(10.4) ②3.0 ⑦12.6
156	〃	①10.3 ②3.3 ⑦12.5
157	〃	①(11.7) ②3.7 ⑦14.0
158	脚付壺	①7.5 ②12.8～ ⑧14.3
159	平　瓶	②13.3～ ⑧19.2 ⑨13.2
160	杯　蓋	①(11.6) ②3.2
161	〃	①11.9 ②3.6
162	〃	①12.1 ②4.3
163	〃	①12.2 ②4.5
164	〃	①14.0 ②5.2
165	〃	①8.6 ②2.8 ⑧10.5
166	〃	①8.7 ②3.2 ⑧10.8
167	〃	①9.9 ②3.0 ⑧11.9
168	〃	①(9.5) ②3.3～ ⑧(11.5)
169	杯　身	①(9.6) ②3.1 ⑦(11.4)
170	〃	①9.3 ②3.4 ⑦11.4
171	〃	①9.5 ②3.3 ⑦12.1
大溝－172	杯　身	①(9.9) ②3.8 ⑦12.1
173	〃	①9.8 ②3.7 ⑦11.8
174	〃	①10.3 ②4.0 ⑦12.5
175	〃	①10.0 ②3.2 ⑦12.1
176	〃	①10.9 ②3.5 ⑦12.8
177	〃	①10.4 ②3.5 ⑦12.3
178	〃	①9.7 ②5.4
179	円面硯	②3.5⑪5.9 ⑫8.8
180	甕	①(9.1) ②6.2～ ⑧(10.2)
181	〃	①14.0 ②5.5～
182	〃	①(27.9) ②6.1～
183	杯　蓋	①11.8 ②4.3
184	甕	①(20.9) ②11.0～
185	杯　蓋	①12.4 ②3.8
186	〃	①12.3 ②3.3
187	〃	①(12.8) ②3.9
188	杯　蓋	①14.2 ②5.3 ③3.3 ④1.0
189	杯　身	①(9.6) ②3.4 ⑦11.5
190	〃	①(9.5) ②3.4 ⑦(11.6)
191	〃	①11.0 ②3.5 ⑦13.5
192	〃	①(10.4) ②4.4 ⑦(13.2)
193	〃	①11.8 ②3.7 ⑦13.8
194	〃	①11.9 ②4.4 ⑦14.0
195	〃	①10.4 ②4.8
196	〃	①10.4 ②4.2
197	高　杯	①11.4 ②8.0 ⑦13.9 ⑩10.7

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
大溝一198	高杯	①14.1 ②13.8 ⑩(12.0)	大溝－224	杯身	①8.9 ②2.7 ⑦11.2
199	甕	①22.2 ②23.7～ ⑧47.0	225	〃	①10.0 ②4.0 ⑦12.1
200	〃	①(37.2) ②40.6～ ⑧(60.0)	226	〃	①10.1 ②3.7 ⑦12.5
201	〃	①32.4 ②23.0～ ⑧54.2	227	〃	①11.3 ②4.2 ⑦13.2
202	〃	①(52.6) ②20.5～	228	〃	①8.5 ②2.8
203	〃	①38.4 ②18.1～	229	〃	①10.1 ②3.7
204	〃	①(37.2) ②14.4～	230	〃	①(11.0) ②4.1
205	〃	②48.5 ⑧52.0	231	〃	①11.8 ②4.8
206	〃	①20.0 ②42.9 ⑧42.2	232	〃	①11.8 ②5.8
207	〃	①(22.8) ②46.0～ ⑧42.8	233	鉢	①12.3 ②9.7
208	〃	①21.4 ②45.0～ ⑧44.4	234	高杯	①8.6 ②8.3 ⑧6.7
209	〃	①20.9 ②44.0～ ⑧45.6	235	〃	①9.9 ②11.0～
210	甕	①25.0 ②46.6 ⑧48.0	236	壺	②7.4～ ⑧9.0
211	〃	①29.2 ②62.2 ⑧49.7	237	平瓶	②8.85～ ⑧14.5
212	〃	①(29.6) ②32.7 ⑧(55.6)	238	すり鉢	①(11.1) ②8.5 ⑨8.1
213	杯蓋	①11.1 ②3.7	239	〃	①12.0 ②9.3 ⑨10.1
214	〃	①12.0 ②4.6	240	横瓶	①11.8 ②13.0～
215	〃	①11.5 ②3.2	241	壺	①(15.4) ②20.0 ⑧(23.8)
216	〃	①11.1 ②4.1	242	甕	①(10.4) ②10.2～ ⑧9.7
217	〃	①(12.6) ②3.9	243	〃	①17.7 ②28.4 ⑧26.5
218	〃	①6.8 ②2.3 ⑧9.0	244	甑	①22.9 ②26.5 ⑧34.2 ⑨11.2
219	〃	①7.2 ②2.3 ⑧9.1	1竪－ 1	杯蓋	①11.8 ②4.3
220	〃	①(7.6) ②2.2 ⑧9.9	2	〃	①(12.0) ②4.6
221	〃	①(9.8) ②2.2 ⑧12.2	3	〃	①12.2 ②3.4
222	〃	①5.9 ②3.0 ③1.2 ④1.1 ⑧(60.0)	4	〃	①(12.6) ②3.7
223	杯身	①9.1 ②3.9 ⑦11.3	5	杯身	①10.6 ②4.2 ⑦12.7

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
1竪— 6	杯身	①(10.5) ②4.0 ⑦(13.0)
7	〃	①(11.5) ②4.8 ⑦(13.8)
8	〃	①(11.0) ②3.8 ⑦12.9
9	〃	①11.4 ②3.8 ⑦14.0
10	甕	②11.2～ ⑧10.0
11	甕	①(22.4) ②5.1～
12	〃	①(23.0) ②7.7～
13	〃	①(16.3) ②9.5～ ⑧(15.6)
14	〃	①16.8 ②11.3～ ⑧16.1
15	〃	①15.6 ②14.7 ⑧15.0
16	〃	①20.5 ②20.0～ ⑧(30.5)
2竪— 1	杯身	①13.9 ②5.4 ⑤10.7 ⑥0.9
2	椀	①(16.4) ②5.6 ⑤8.8 ⑥0.7
3	〃	①(17.5) ②6.4～
4	鉢	②11.6～
3竪— 1	杯身	②1.1～
2	高杯	①(22.2) ②1.7～
4竪— 1	杯蓋	①12.0 ②2.5 ③1.6 ④0.9
2	蓋	①11.9 ②3.4 ③1.6 ④0.9
3	杯身	①(13.6) ②3.9 ⑤(9.4) ⑥0.5
4	〃	①15.2 ②5.6 ⑤8.7 ⑥0.5
5	〃	①12.6 ②3.1 ⑨8.1
6	〃	①(12.4) ②3.5 ⑨6.8
7	壺	②20.3～ ⑧(21.3) ⑨12.5
8	皿	①14.0 ②1.5
9	〃	①13.8 ②1.5
10	杯	①13.6 ②3.5
11	〃	①13.4 ②3.2
3坑— 1	蓋	①(9.5) ②2.5 ⑧(12.2)
2	杯身	①(10.2) ②3.2 ⑧(12.0)
3	高杯	②5.8～ ⑩7.2
10坑— 4	杯蓋	①12.1 ②2.0 ③2.3 ④0.6
5	杯身	①(18.0) ②5.5 ⑤(11.7) ⑥0.6
6	高台付皿	①23.0 ②4.6 ⑤16.2 ⑥0.8
11坑— 7	杯蓋	①(14.4) ②2.2 ③3.2 ④0.5
8	〃	①(11.0) ②3.2 ③2.4 ④0.7 ⑧14.0
9	〃	①15.0 ②3.6 ③3.1 ④1.2 ⑧17.6
10	杯身	①12.8 ②4.5 ⑤9.02 ⑥0.6
11	〃	①(13.3) ②5.0 ⑤(10.0) ⑥0.7
12	〃	①(14.0) ②5.4 ⑤8.3 ⑥1.2
13	〃	①(14.8) ②5.1 ⑤10.3 ⑥1.1
14	〃	①12.9 ②4.3
15	〃	①12.6 ②4.1
16	皿	①15.2 ②1.9
17	鉢	①13.0 ②10.7 ⑤8.3 ⑥0.6
13坑— 18	杯身	①12.4 ②4.8 ⑤8.5 ⑥0.6
19	皿	①14.6 ②1.5
20	高杯	②6.3～ ⑩11.0
21	甑	①26.5 ②24.7 ⑧33.6 ⑨(11.2)
7坑— 1	杯身	①(13.1) ②4.8 ⑤7.2 ⑥0.7
2	〃	①(13.4) ②4.6 ⑤7.4 ⑥0.7
3	〃	①(13.2) ②4.0 ⑨(7.3)

NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径	NO	器種	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑦受部径 ⑧最大径 ⑨底径 ⑩脚端径 ⑪外提径 ⑫周縁径
7坑— 4	杯身	①(13.0) ②3.4 ⑨(7.7)	1号墳—5	甕	①(31.6) ②24.0～
5	〃	①13.7 ②3.8 ⑨8.2	6	〃	①(37.8) ②69.0～ ⑧71.6
6	甕	①(20.9) ②12.5～	7	〃	①(42.4) ②58.2～ ⑧(67.1)
7	皿	①17.5 ②1.6	8	〃	②22.3～ ⑧25.0
8	甕	①(17.5) ②5.5～	9	甑	①29.4 ②26.3
9	椀	①18.6 ②7.0 ⑤8.2 ⑥0.7	1坑— 1	杯	①(12.6) ②3.6
14坑— 10	杯身	②1.5～ ⑤(7.3) ⑥0.5	2	〃	①12.6 ②3.6
11	〃	②2.5～ ⑤9.5 ⑥1.1	3	〃	①(12.9) ②3.5
12	すり鉢	②2.8～	4	椀	②2.2～ ⑤7.9 ⑥1.3
15坑— 13	杯蓋	①16.4 ②1.9	5	〃	①12.2 ②4.5 ⑤7.0 ⑥0.9
14	椀	①(18.5) ②7.7 ⑤(10.9) ⑥1.1	6	皿	①(12.6) ②2.3
1甕— 1	壺	①(39.0) ②21.0～	7	〃	①(12.8) ②2.4
1墓— 2	〃	①10.0 ②16.9 ⑧17.4 ⑨6.8	8	〃	①12.9 ②1.9
2墓— 3	〃	①(11.8) ②22.8 ⑧18.0 ⑨7.4	9	〃	①(13.2) ②2.0
1号墳—1	杯身	①(11.9) ②2.9～ ⑦(13.8)	10	〃	①13.3 ②1.6
2	すり鉢	②5.3～ ⑨(7.4)	2坑— 1	椀	②3.5～ ⑤8.0 ⑥1.2
3	脚付壺	①(10.1) ②28.5 ⑧17.6 ⑩15.0	2	〃	①(14.2) ②6.8 ⑤8.6 ⑥1.0
4	甕	①(48.0) ②21.0～	3	〃	①21.2 ②19.1～ ⑧19.3

図　　版



(1)　日ノ浦遺跡調査区北半部全景（航空写真）



(2)　日ノ浦遺跡調査区南半部全景（航空写真）



(1)　調査区北半部近景①



(2)　調査区北半部近景②



(1)　調査区北半部近景③



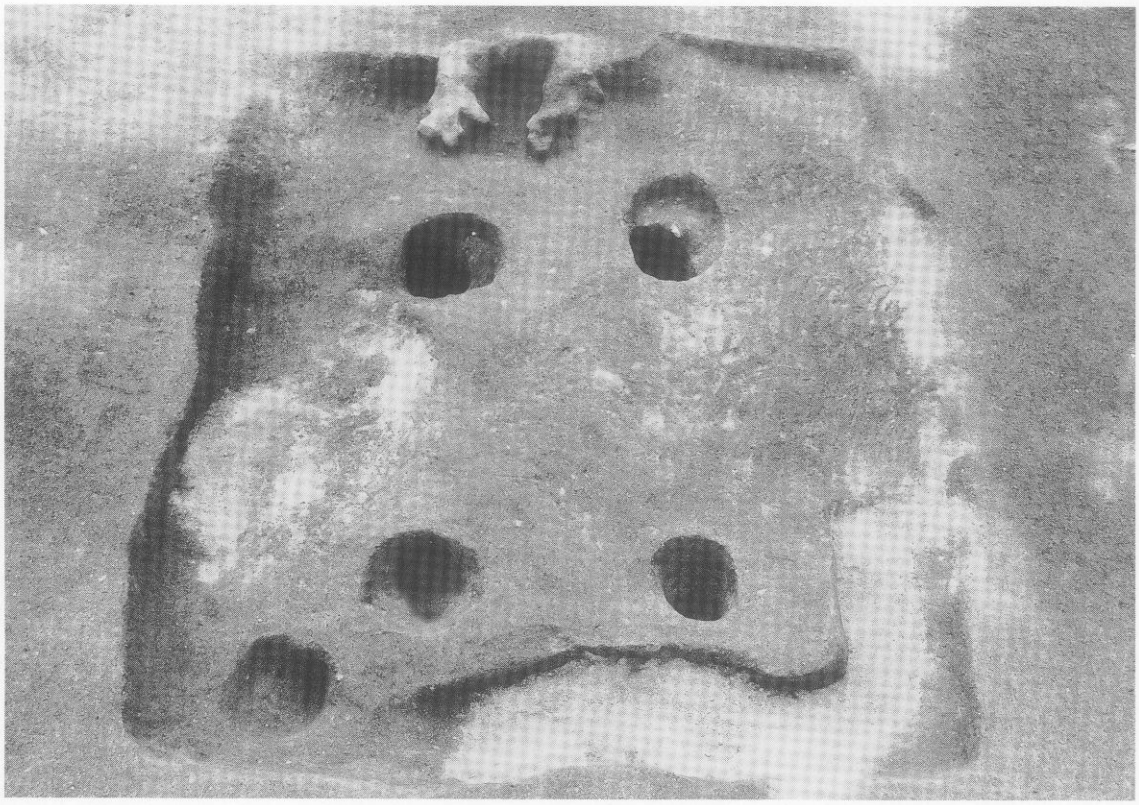
(2)　調査区南半部近景①



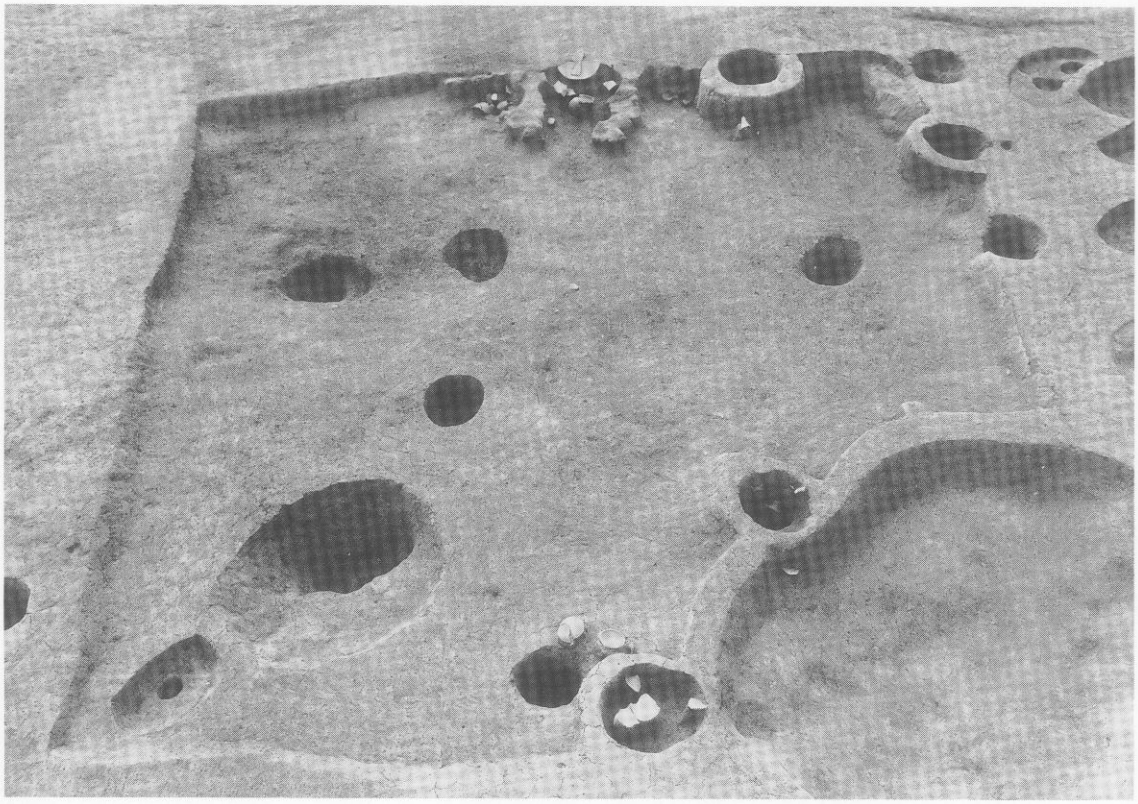
(1)　調査区南半部近景②



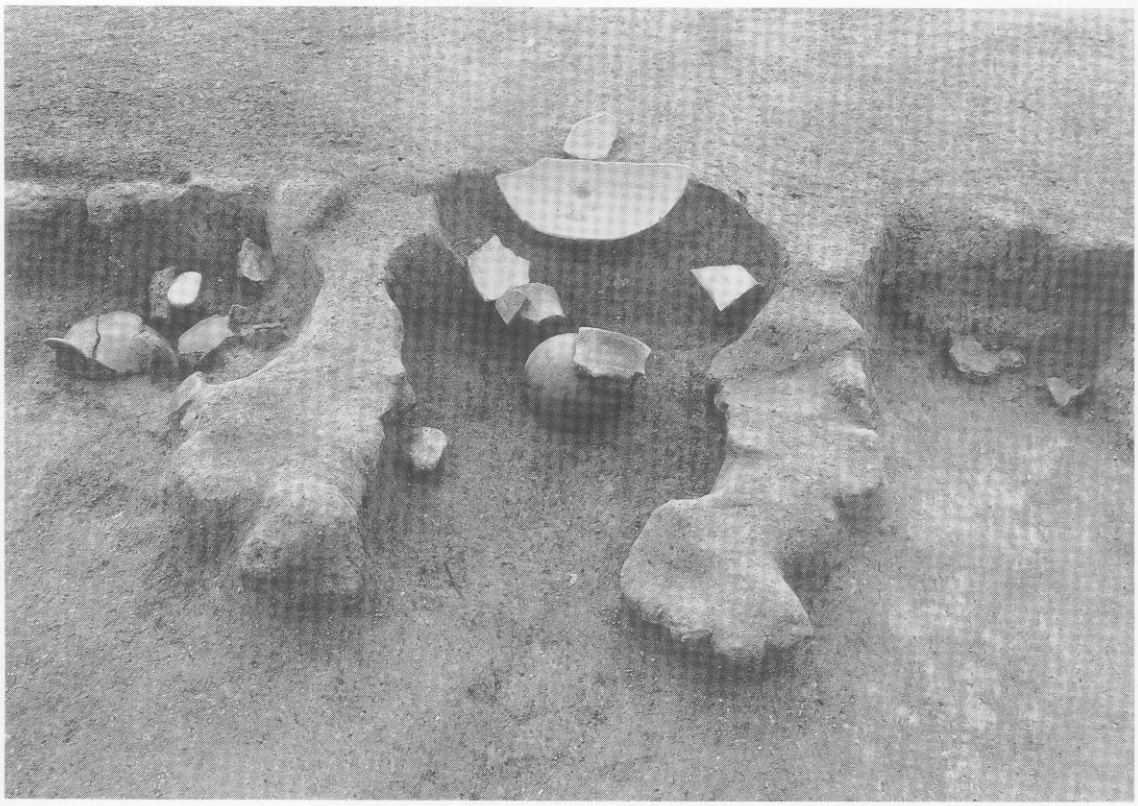
(2)　調査区南半部近景③



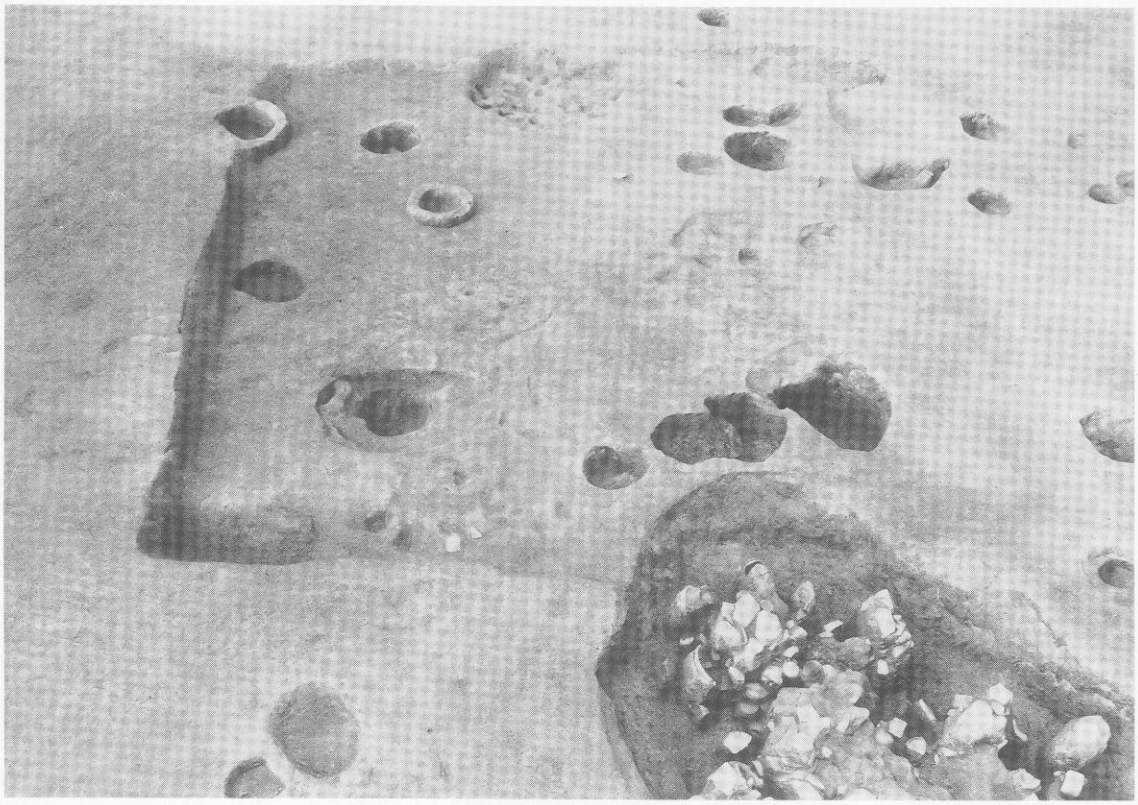
(1)　1 号住居跡



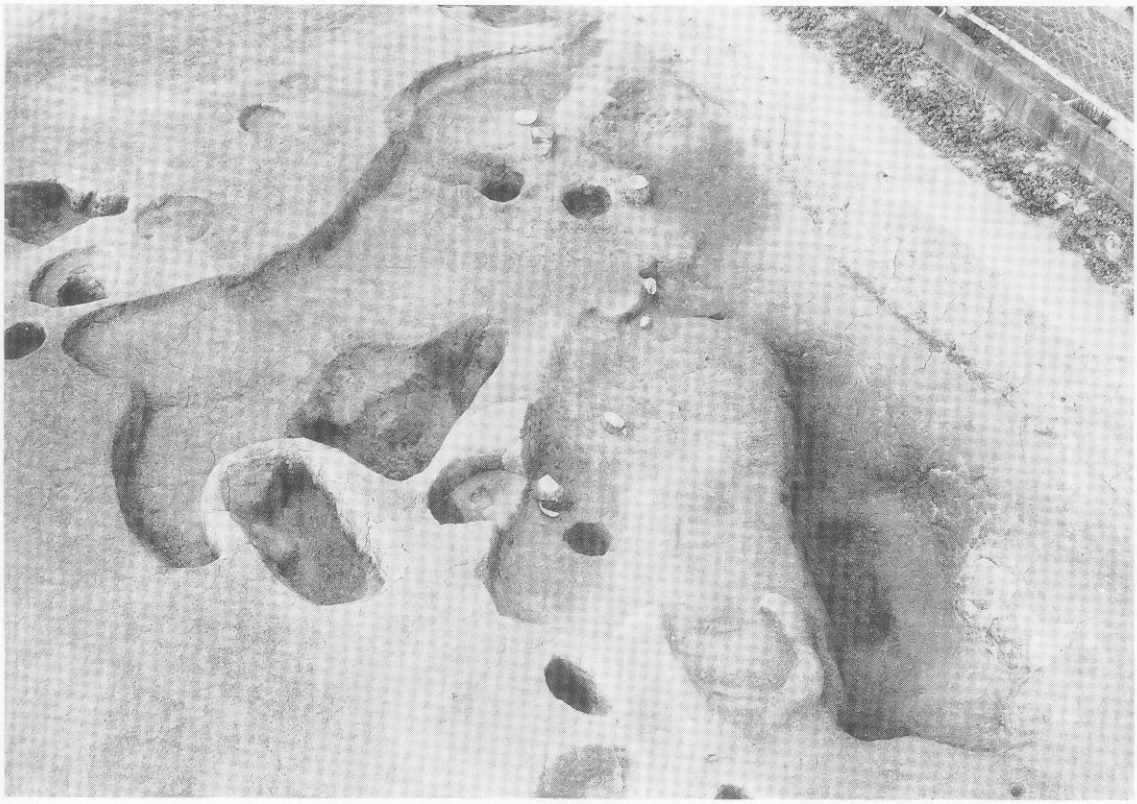
(2)　2 号住居跡



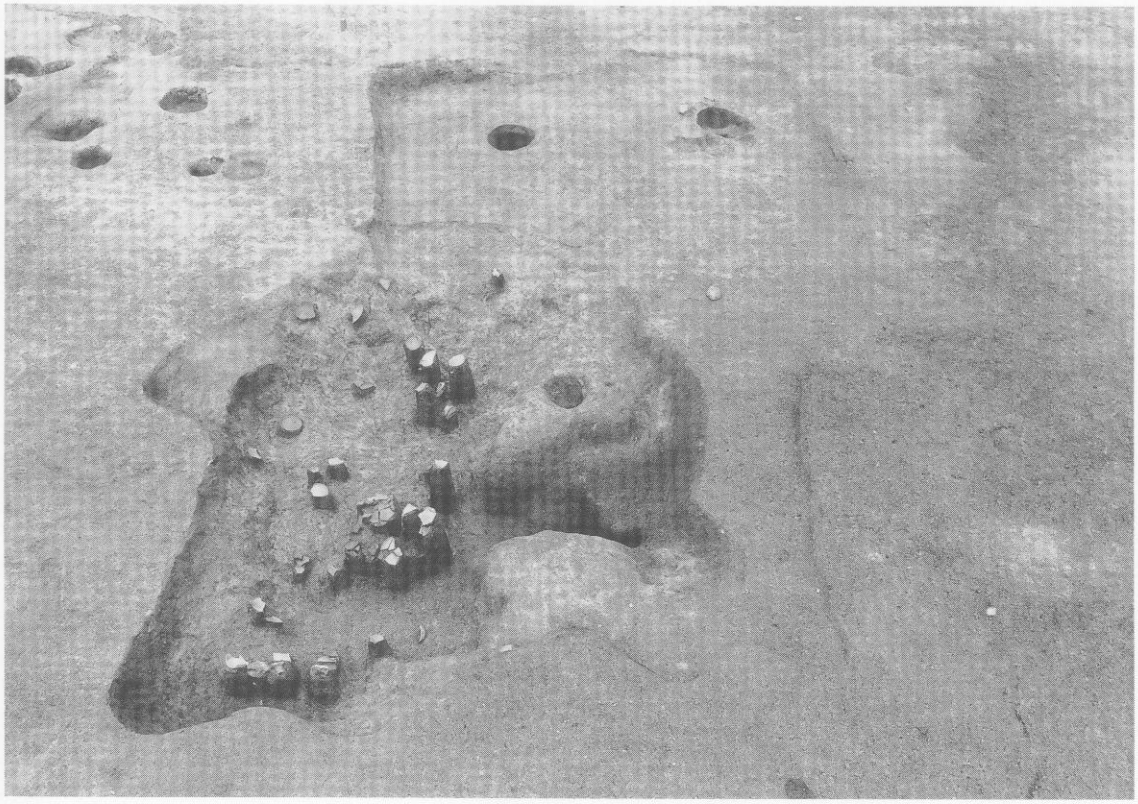
(1)　2 号住居跡竈



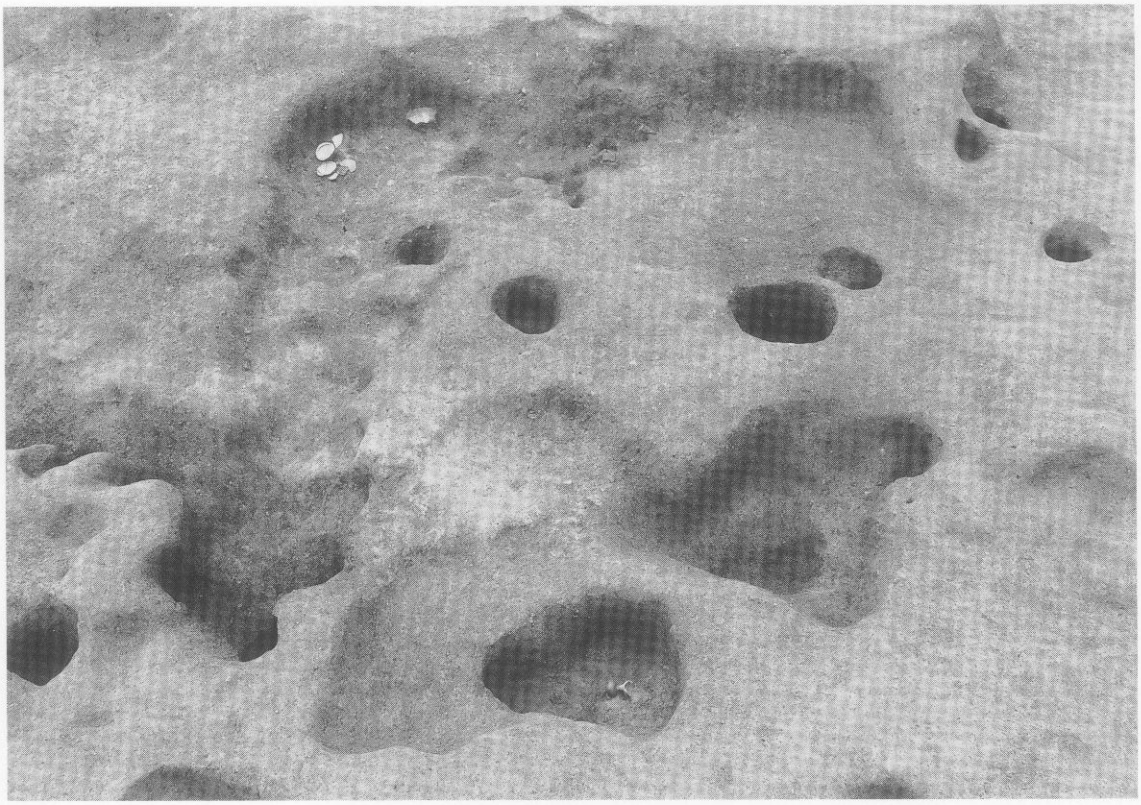
(2)　3 号住居跡



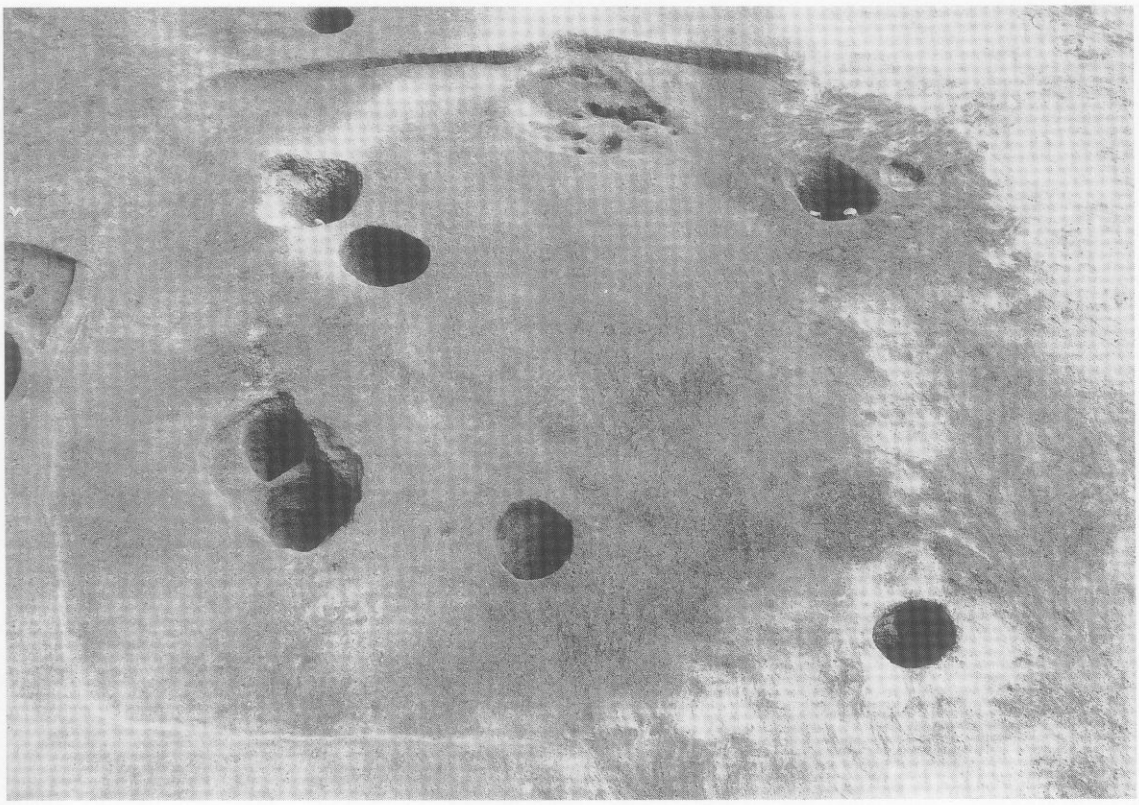
(1)　4 ・ 5 号住居跡



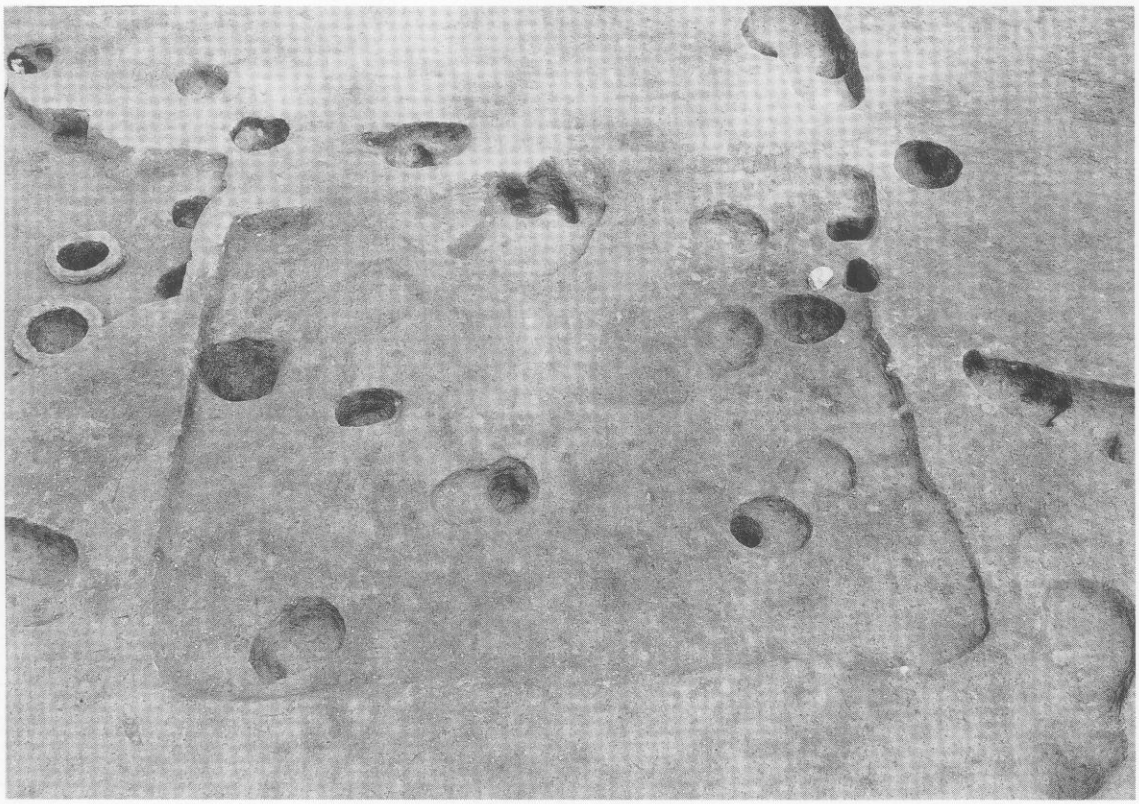
(2)　6 号住居跡



(1)　7 号住居跡



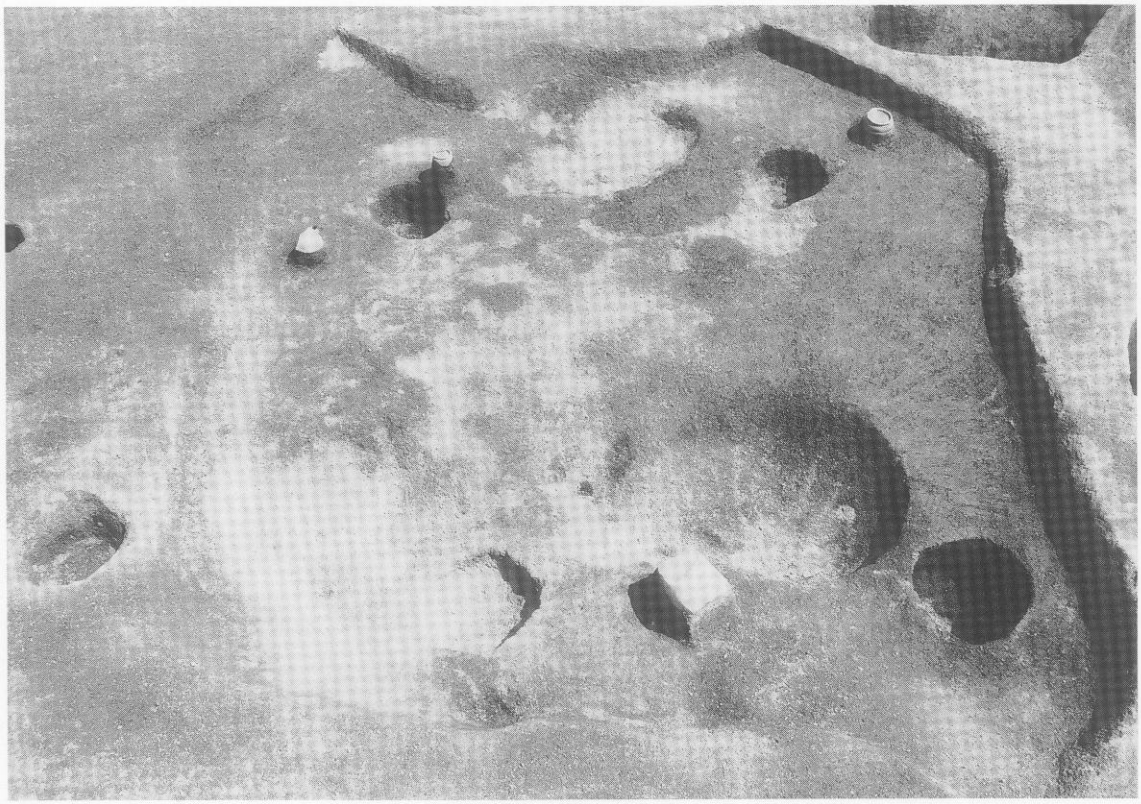
(2)　8 号住居跡



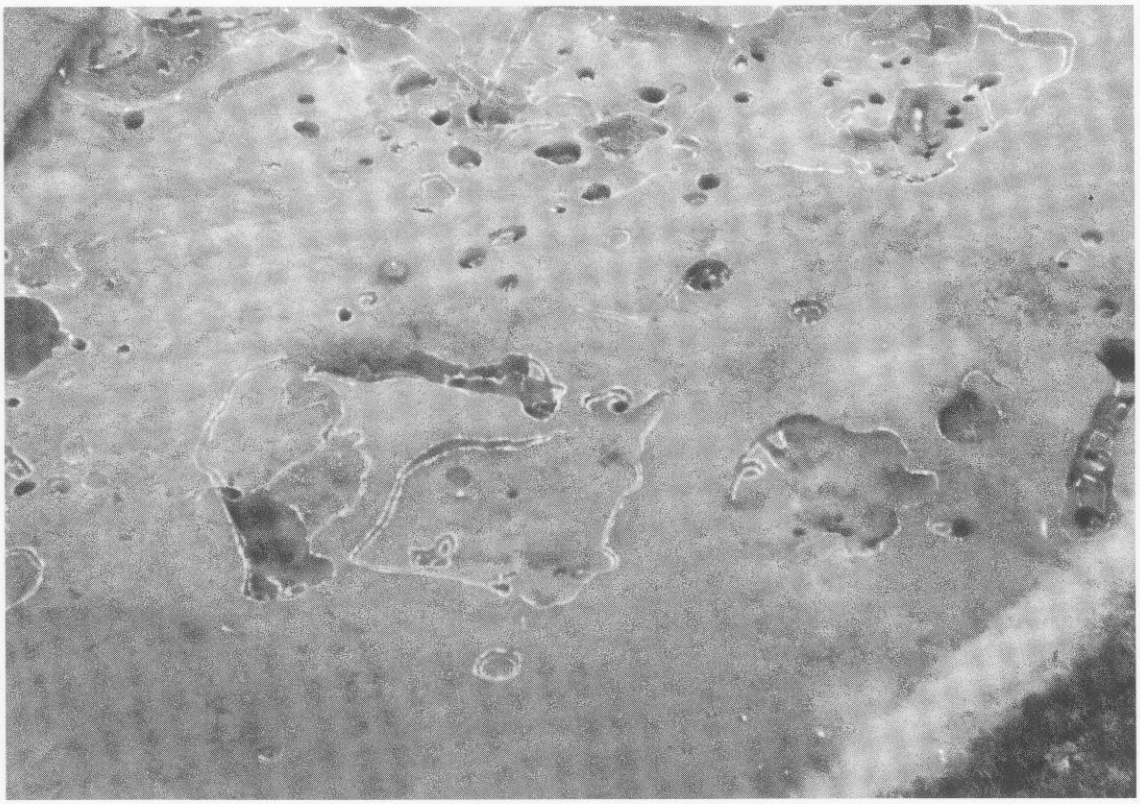
(1)　9 号住居跡



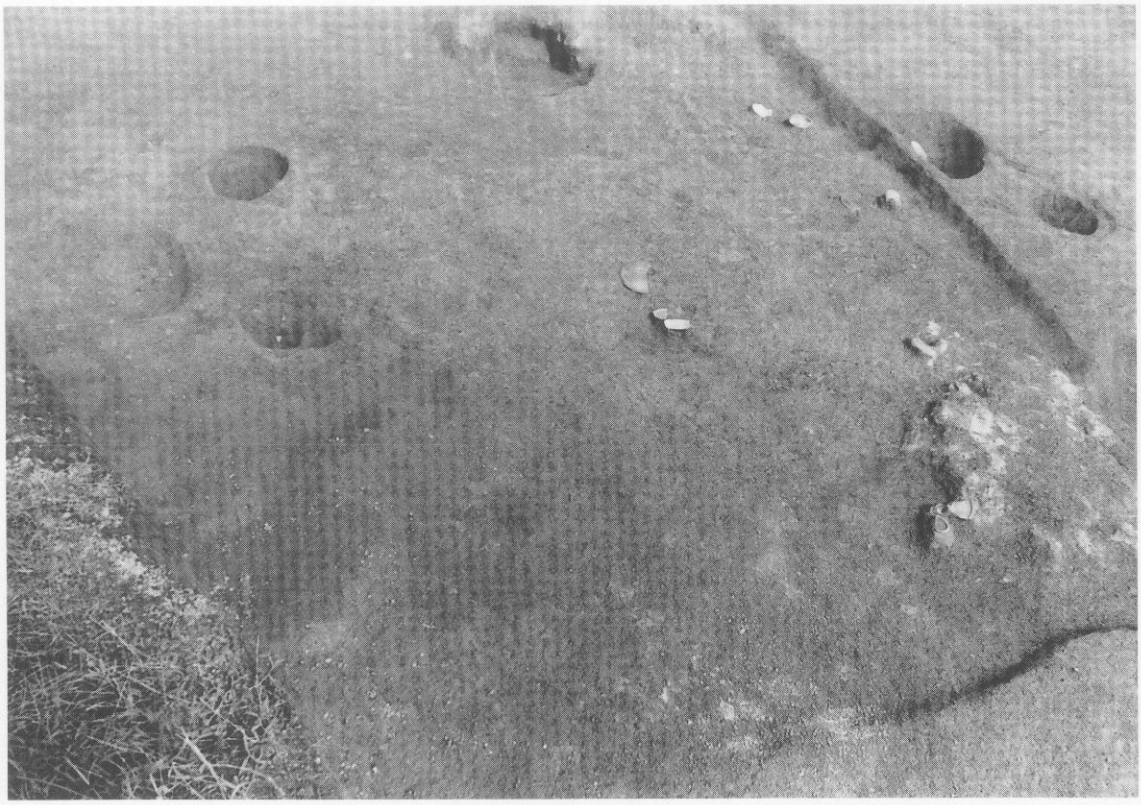
(2)　10号住居跡遺物出土状況



(1)　11号住居跡



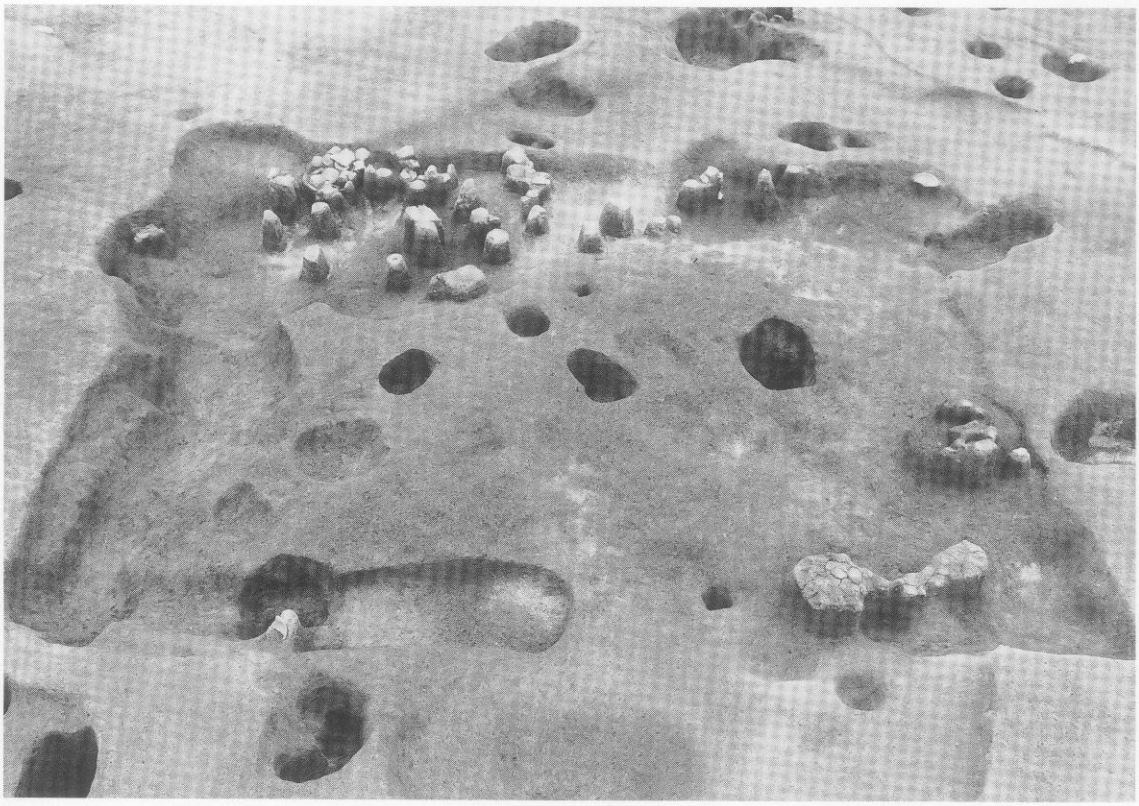
(2)　13・16号住居跡



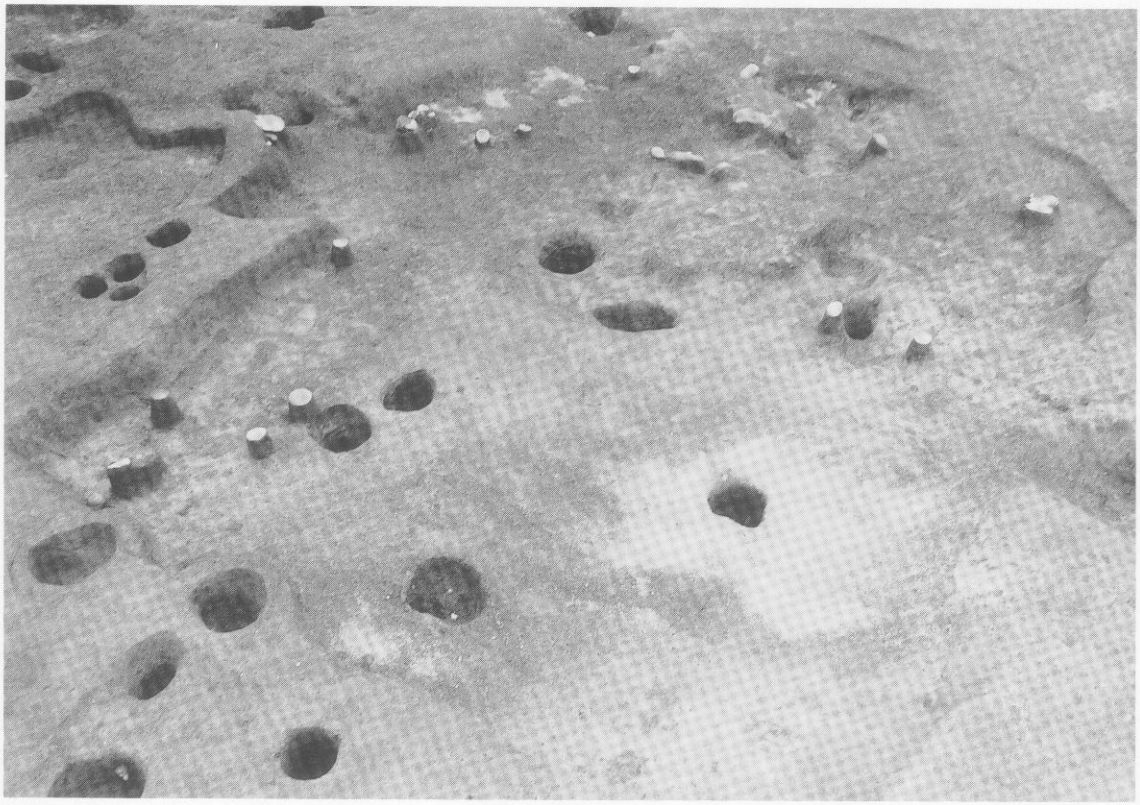
(1)　14号住居跡



(2)　15号住居跡



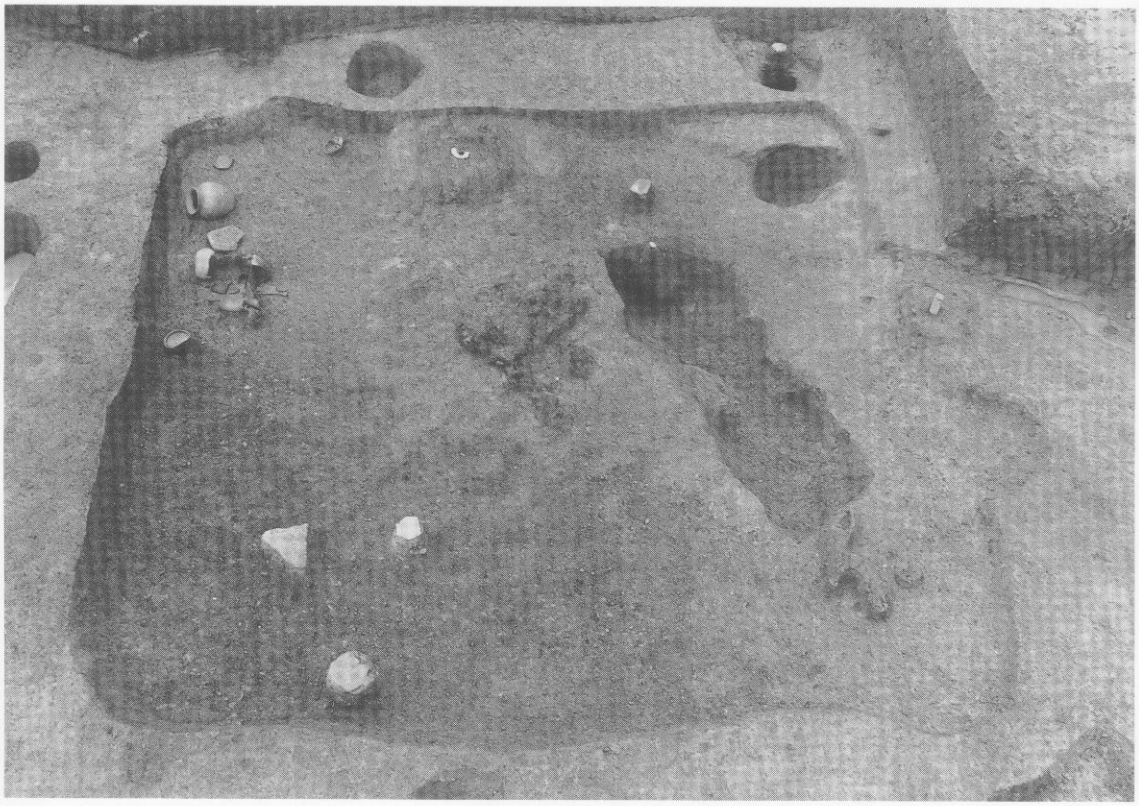
(1)　17号住居跡遺物出土状況



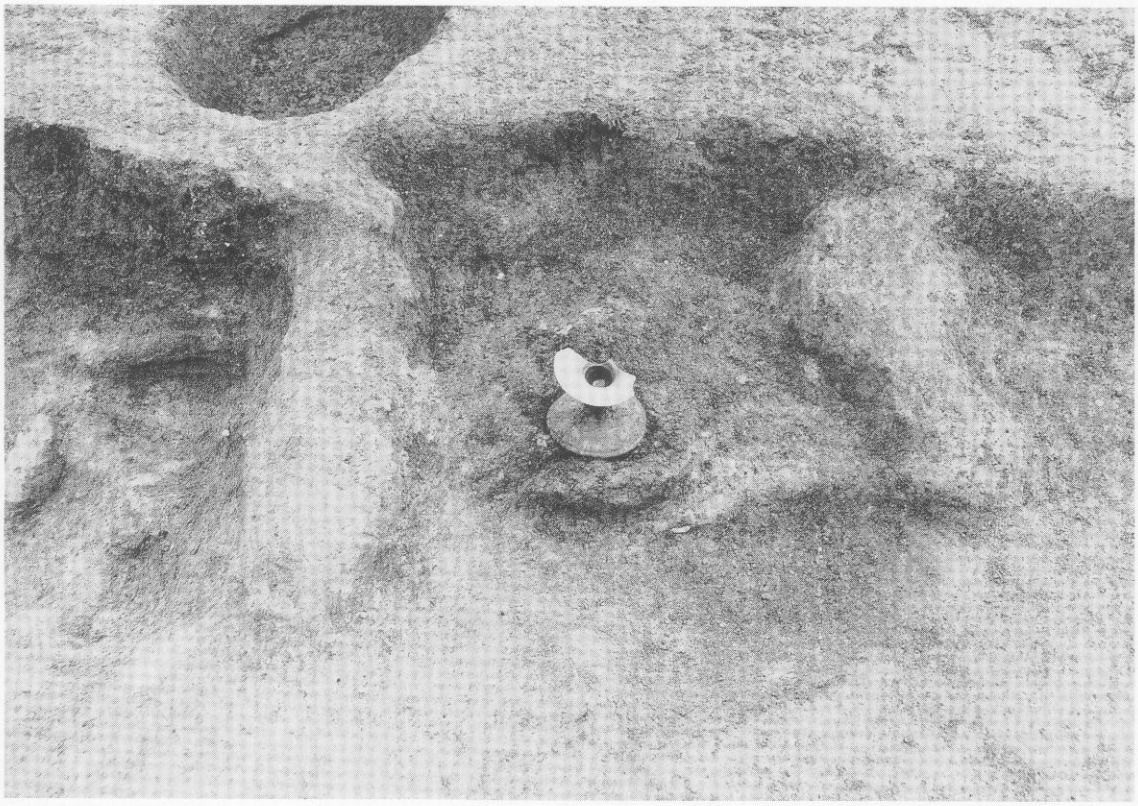
(2)　18号住居跡



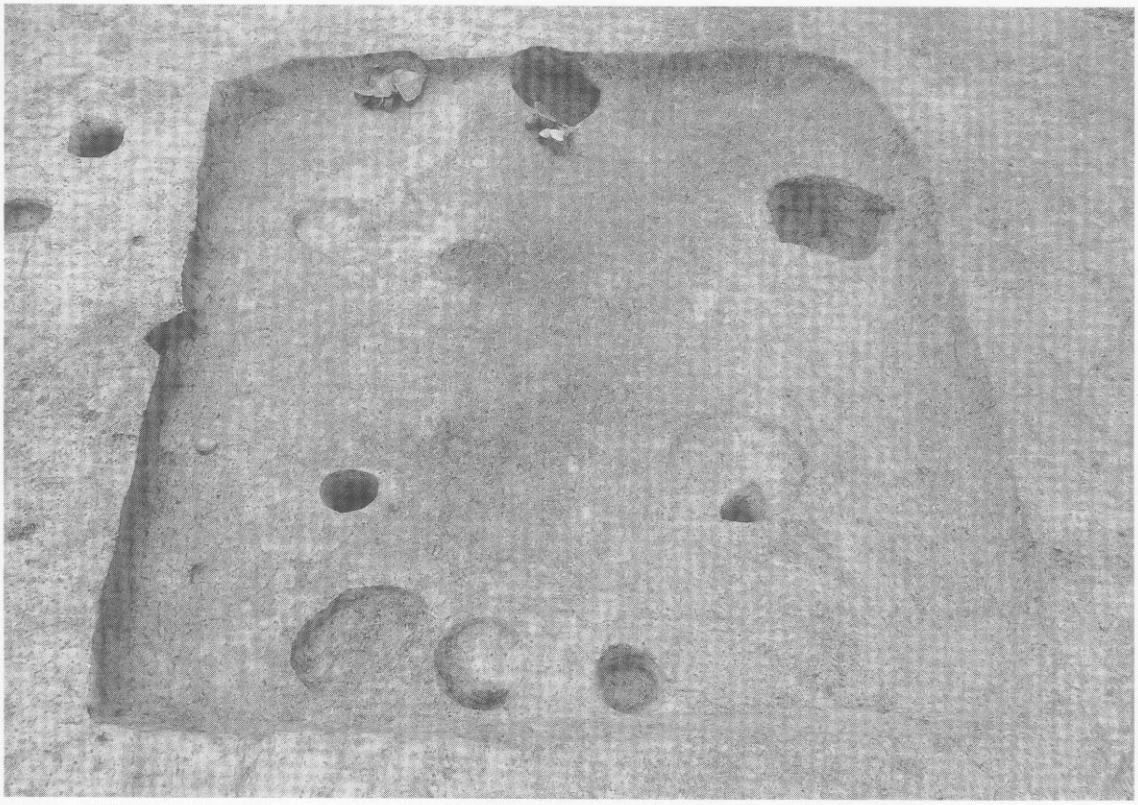
(1)　19号住居跡遺物出土状況



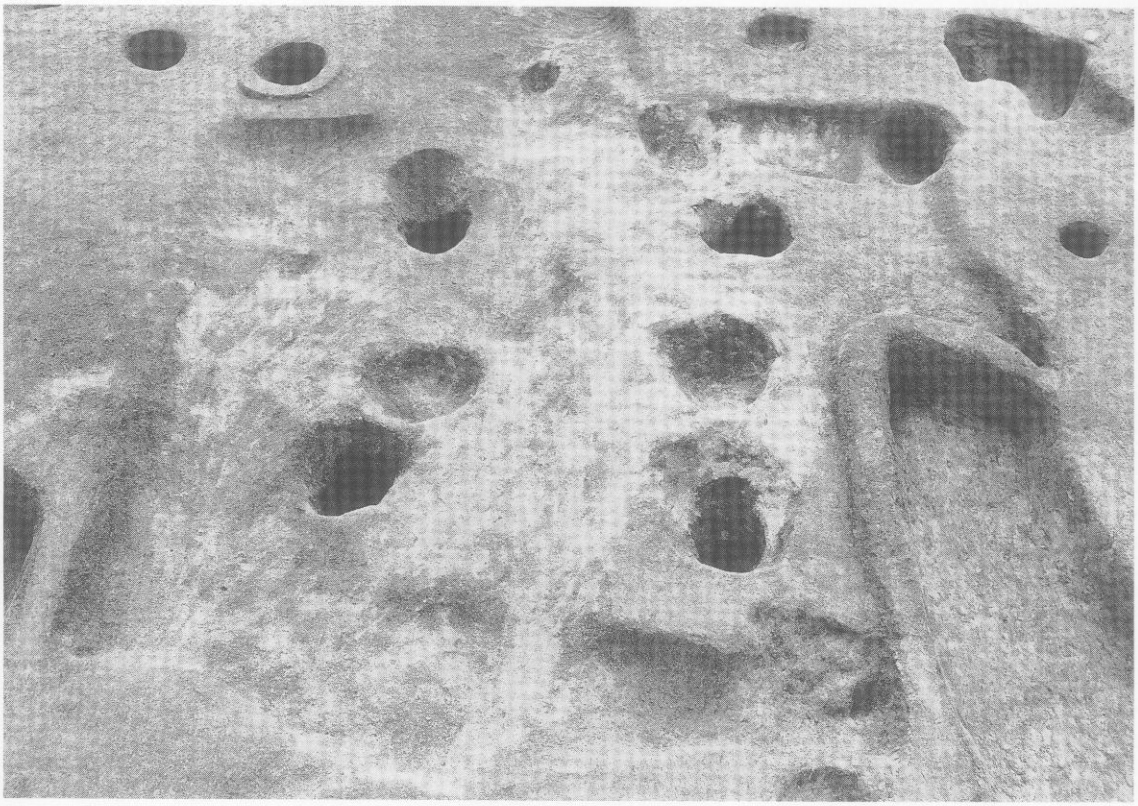
(2)　20号住居跡遺物出土状況



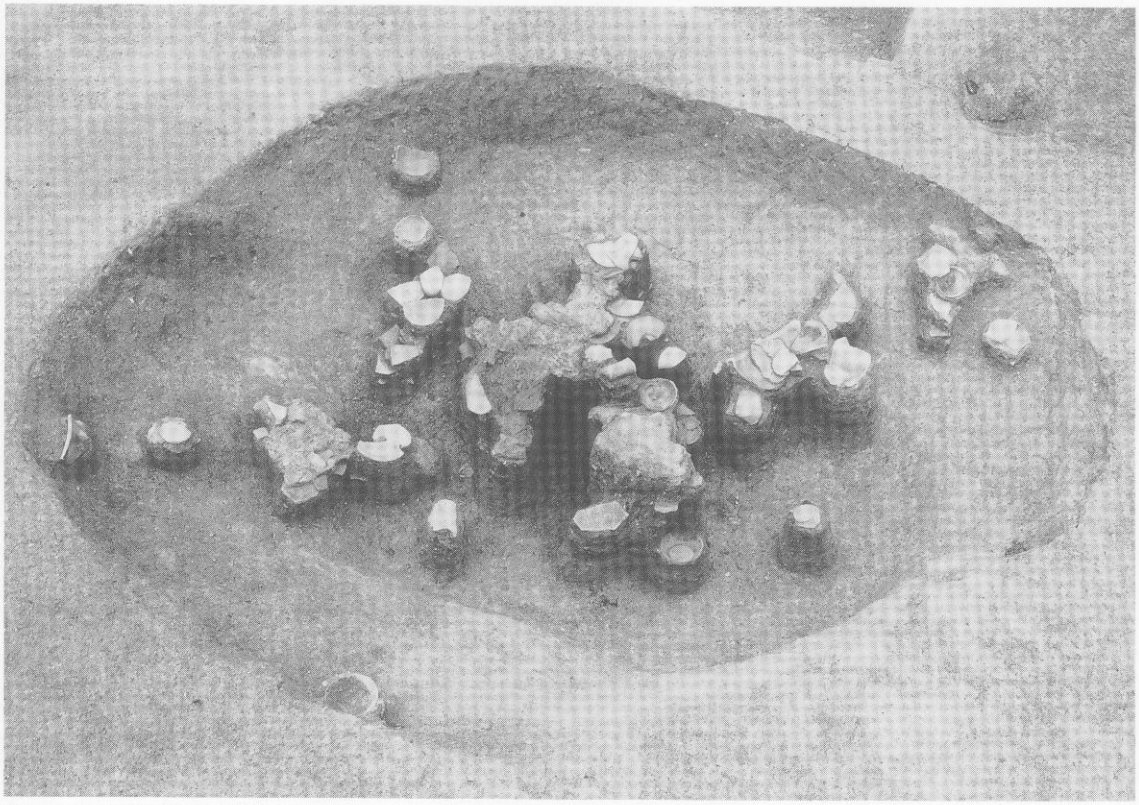
(1)　20号住居跡竈



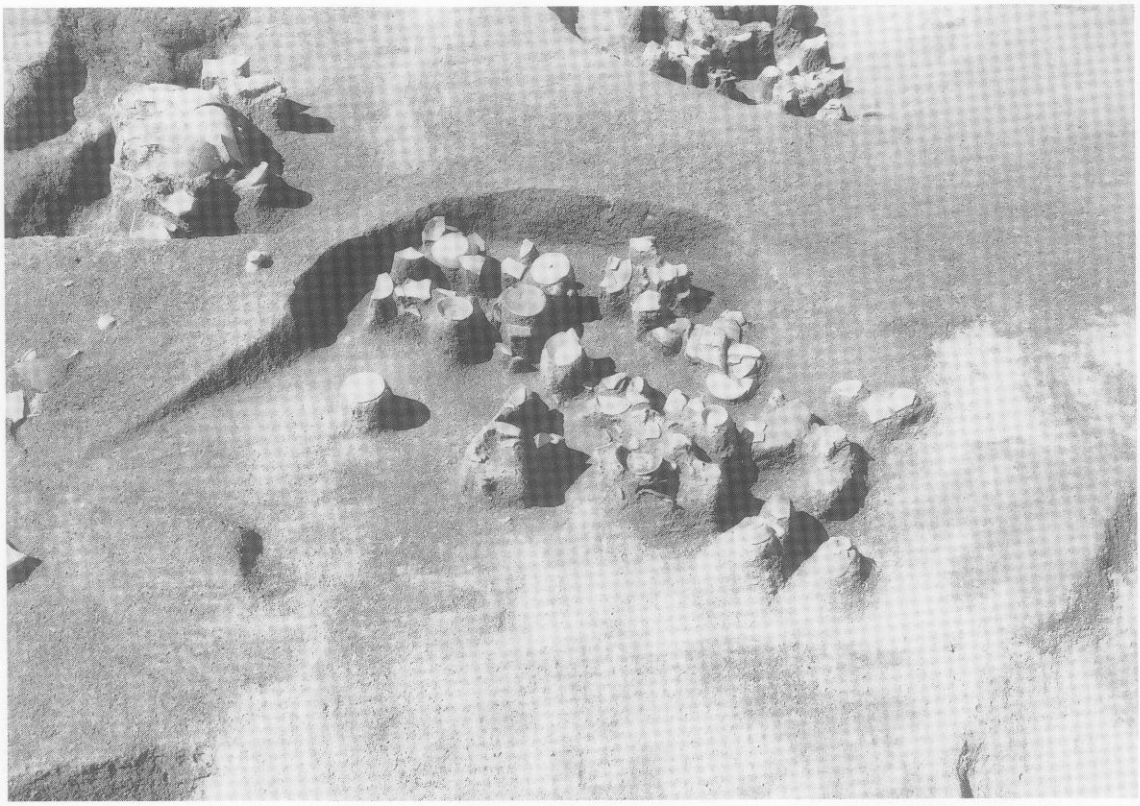
(2)　21号住居跡



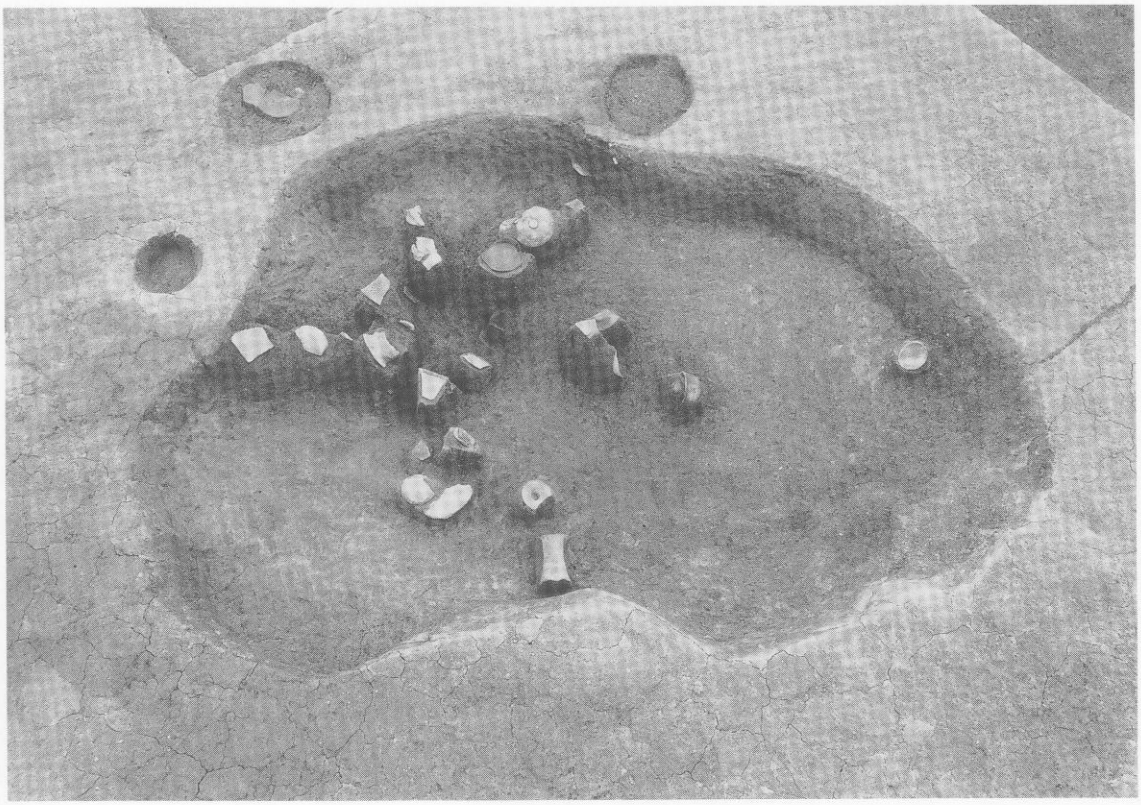
(1)　22号住居跡



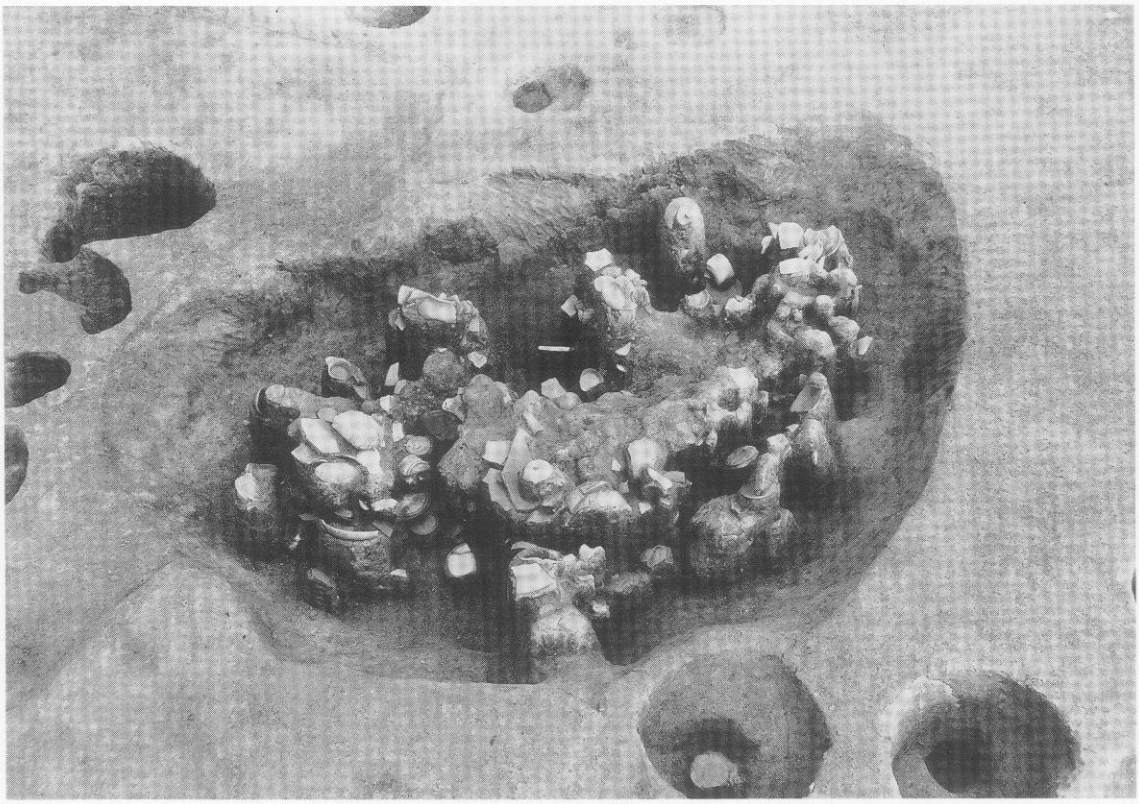
(2)　SK01遺物出土状況



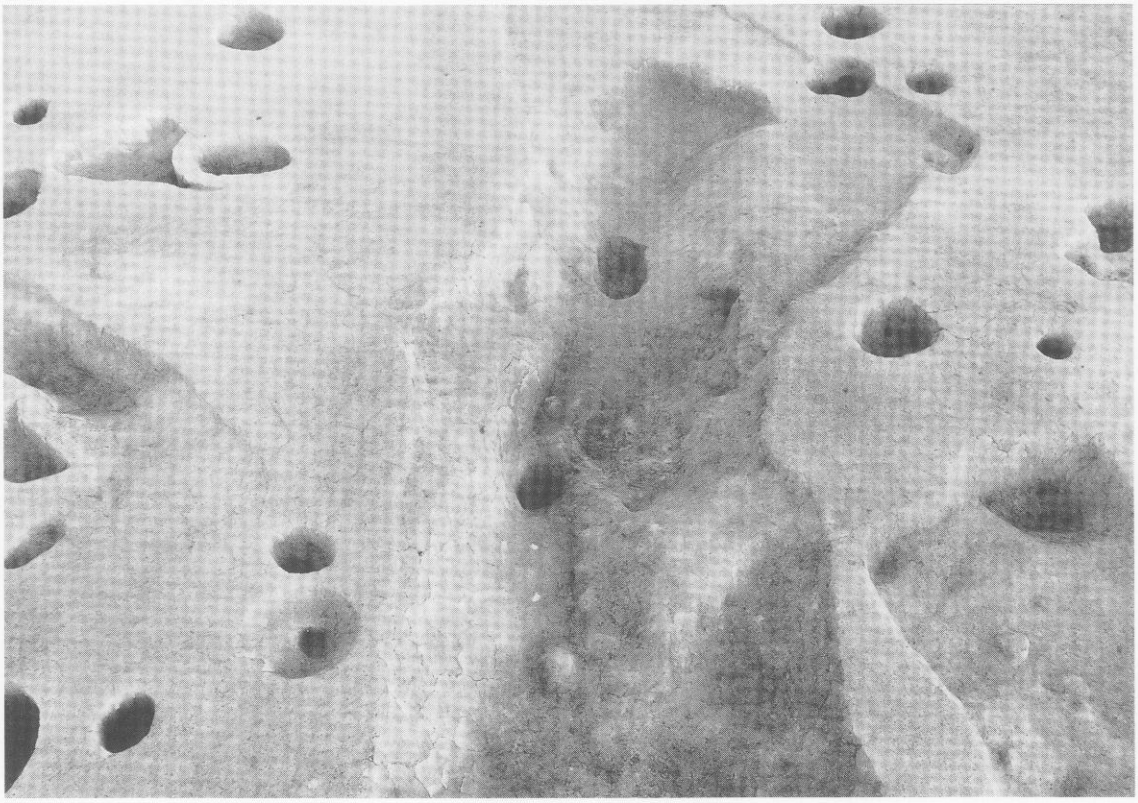
(1)　SK02遺物出土状況



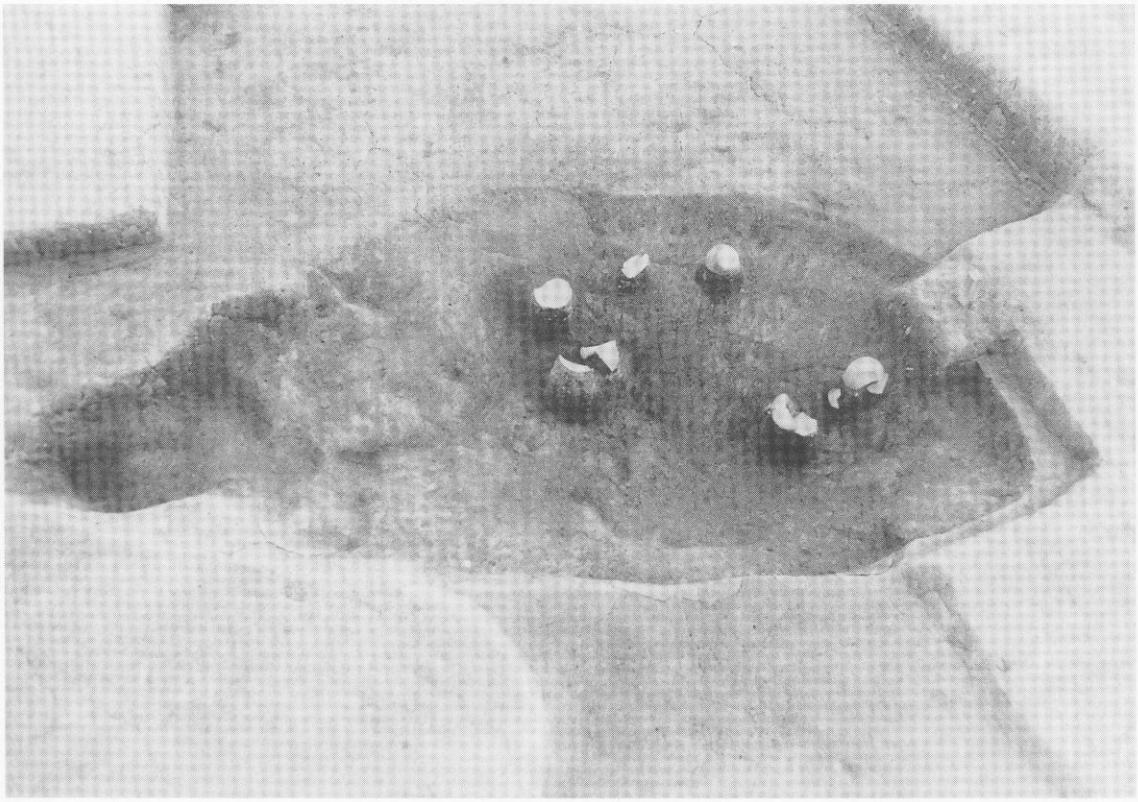
(2)　SK03遺物出土状況



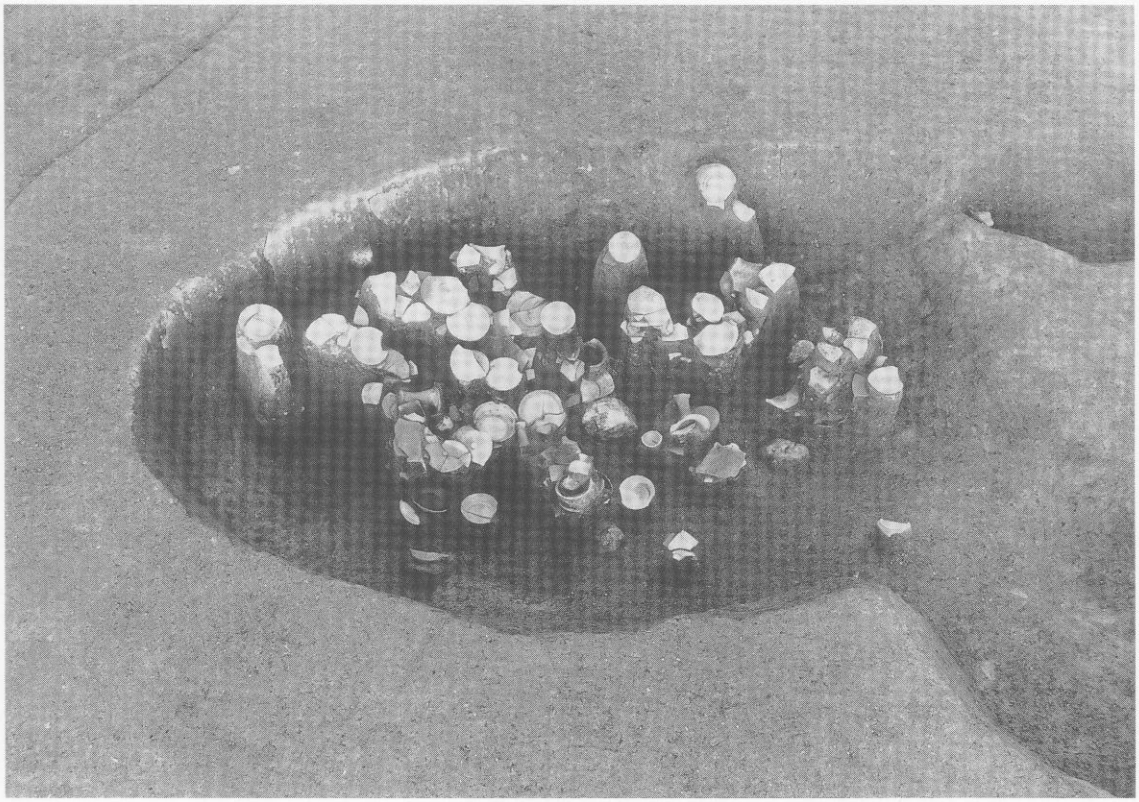
(1)　SK04遺物出土状況



(2)　SK05（部分）



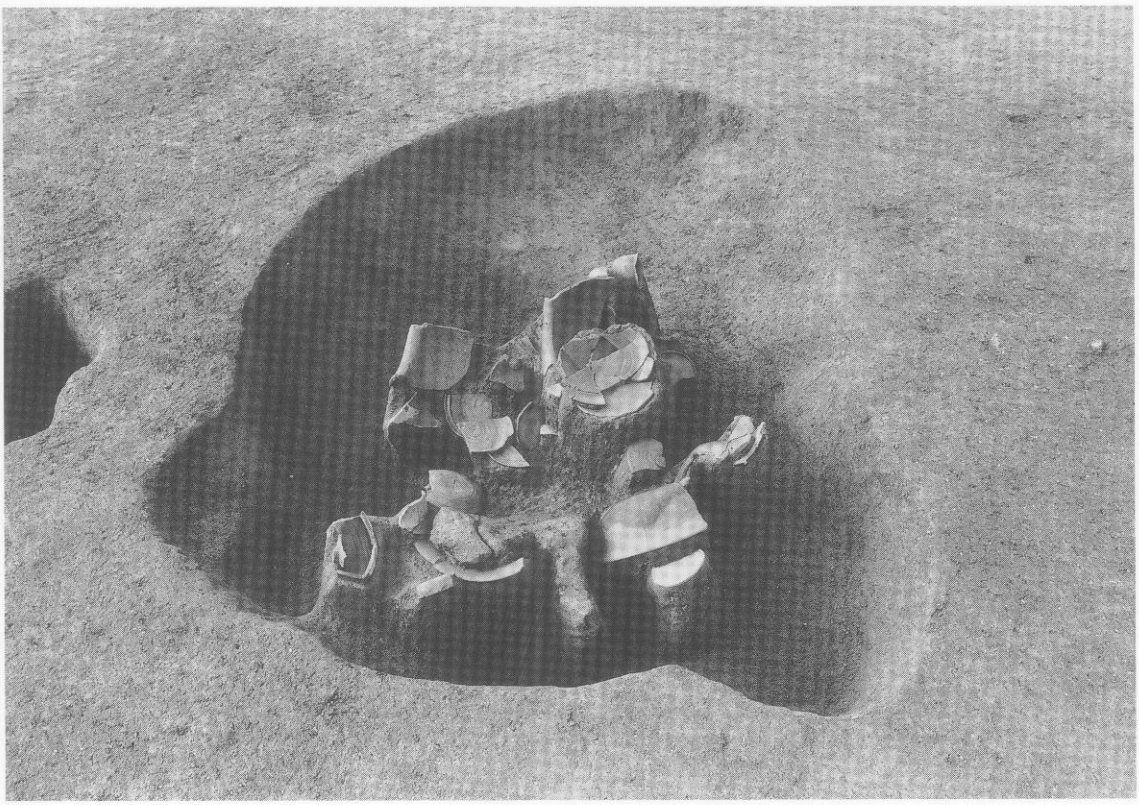
(1)　SK06遺物出土状況



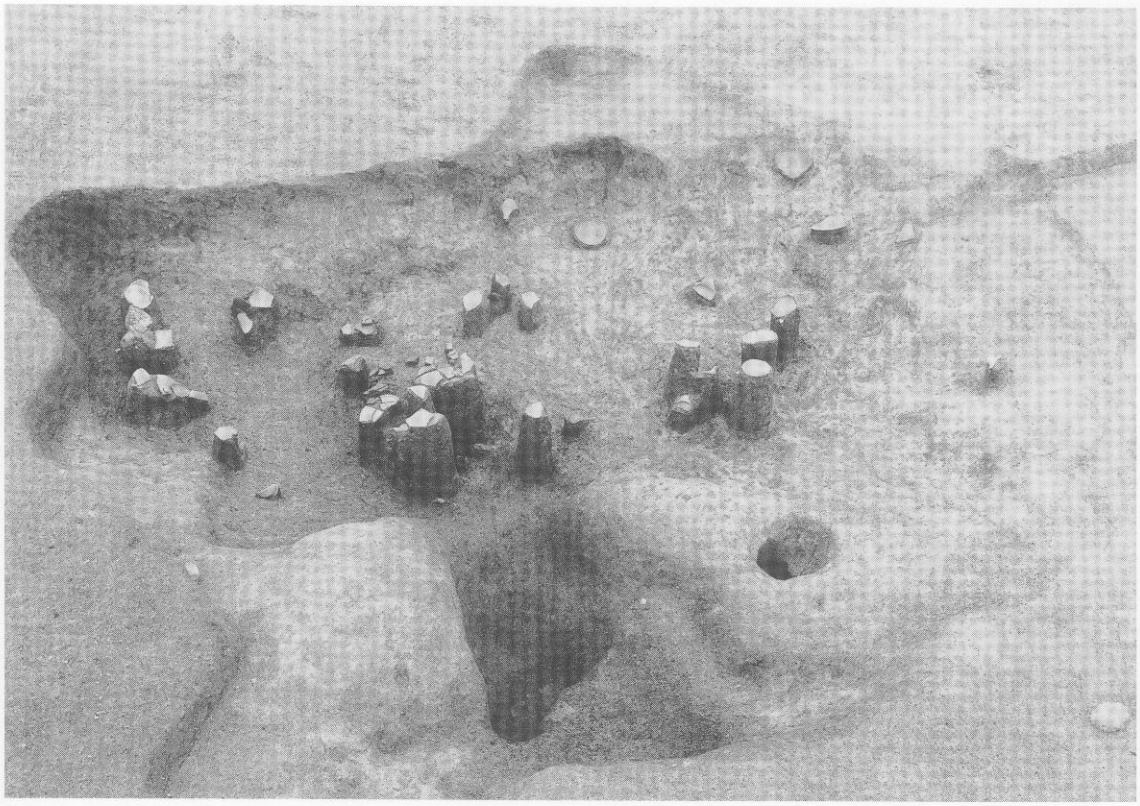
(2)　SK07遺物出土状況



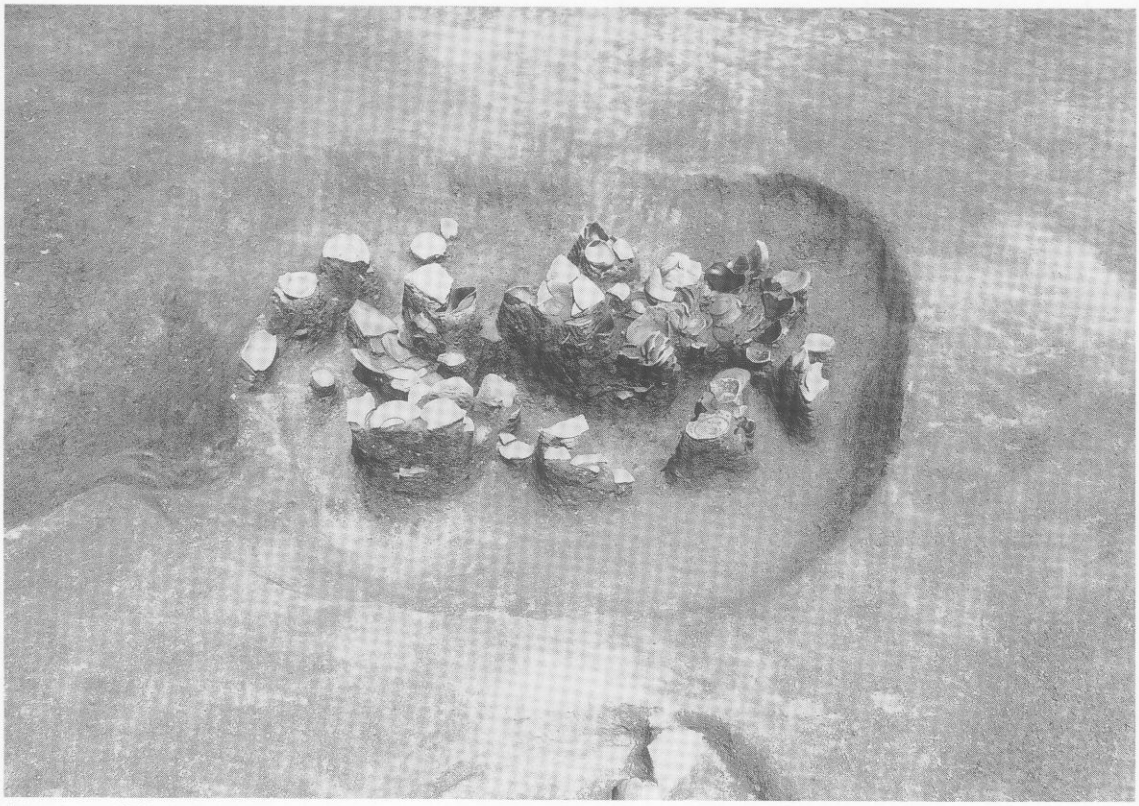
(1)　SK08遺物出土状況



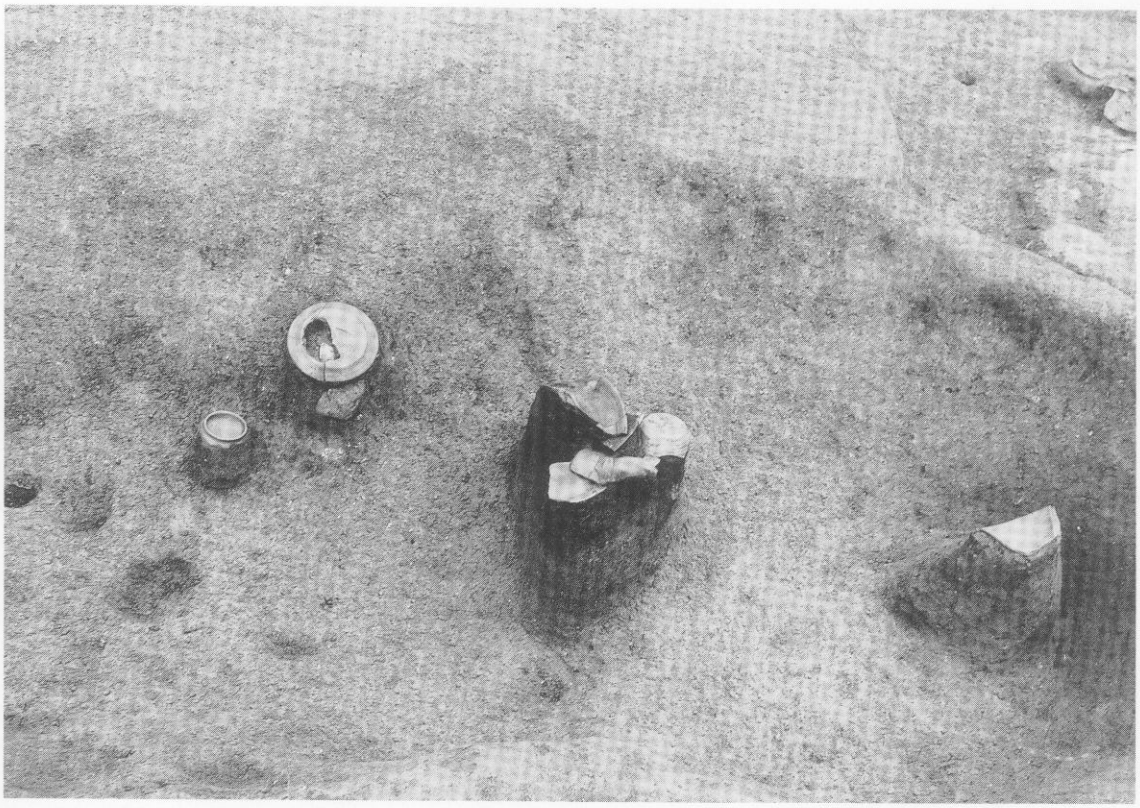
(2)　SK09遺物出土状況



(1)　SK10遺物出土状況



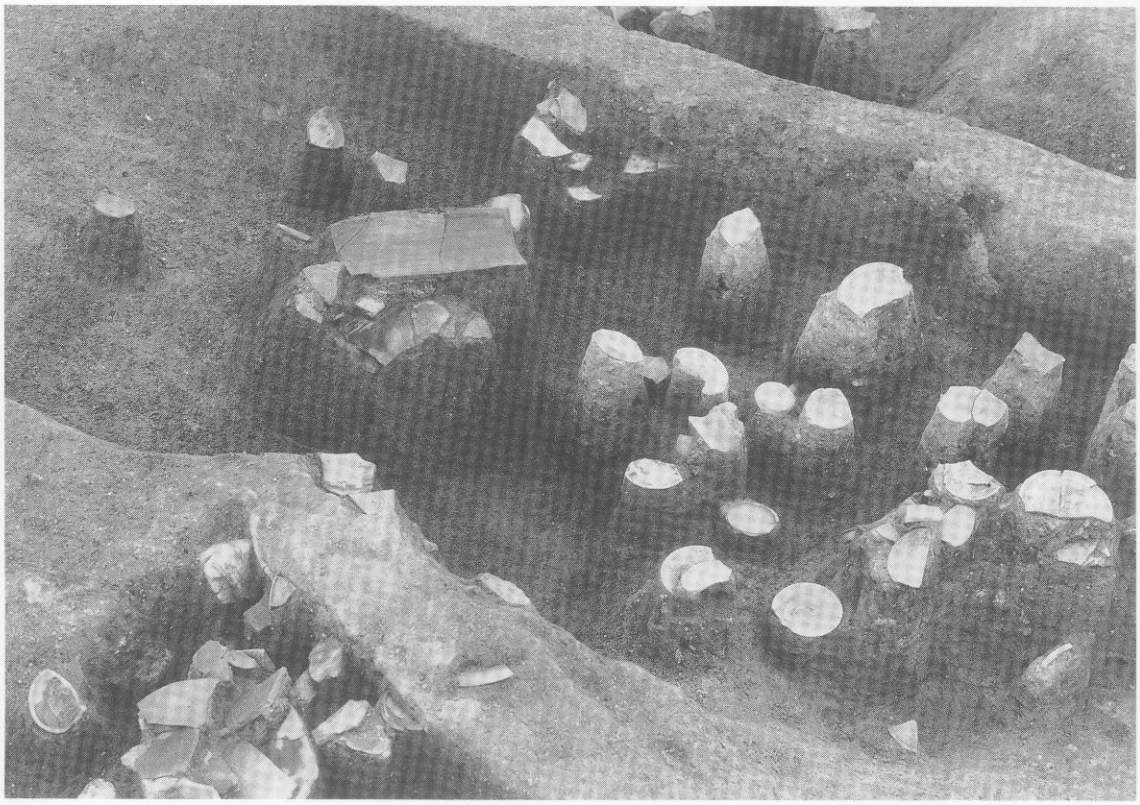
(2)　SK13遺物出土状況



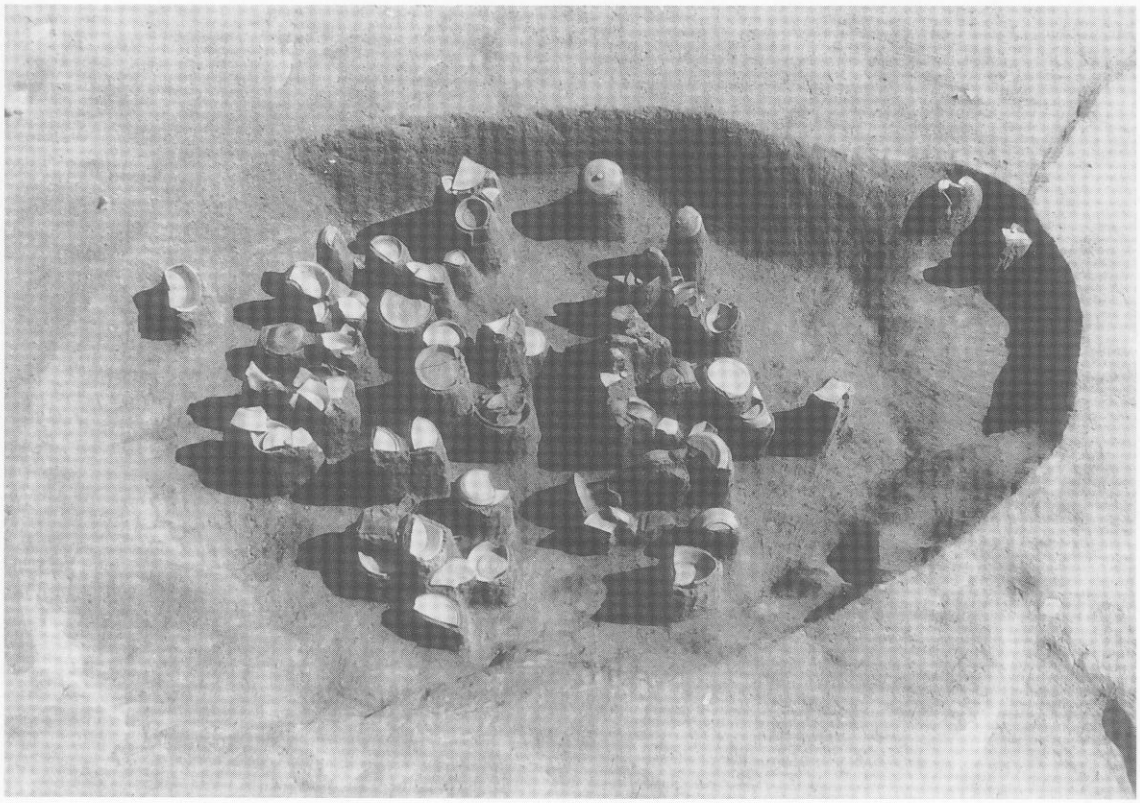
(1)　SK15遺物出土状況（部分）



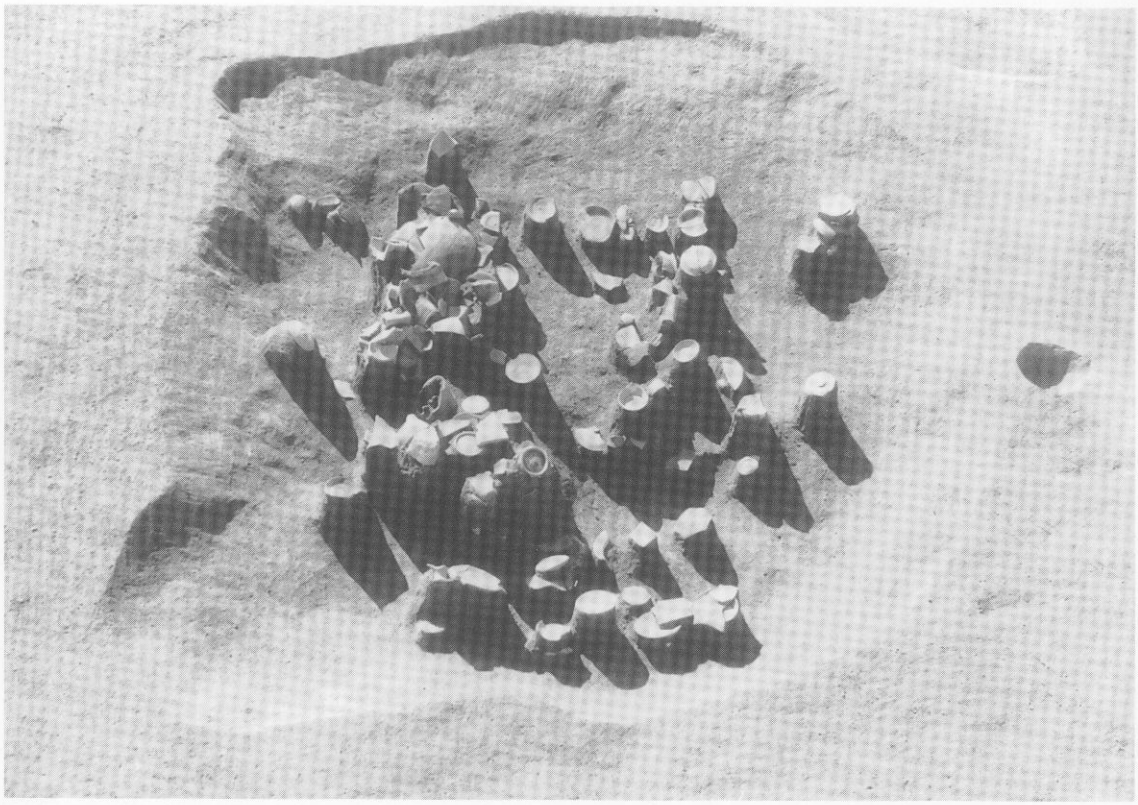
(2)　SK16遺物出土状況



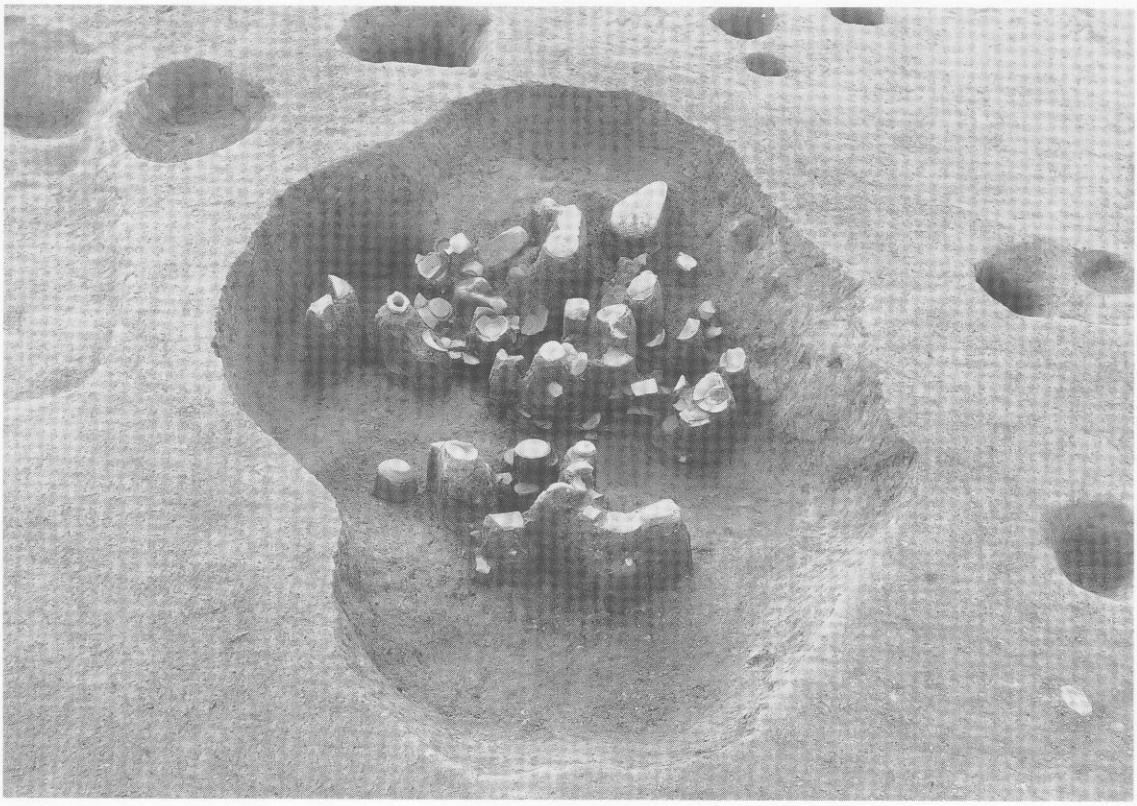
(1)　SK16遺物出土状況（部分）



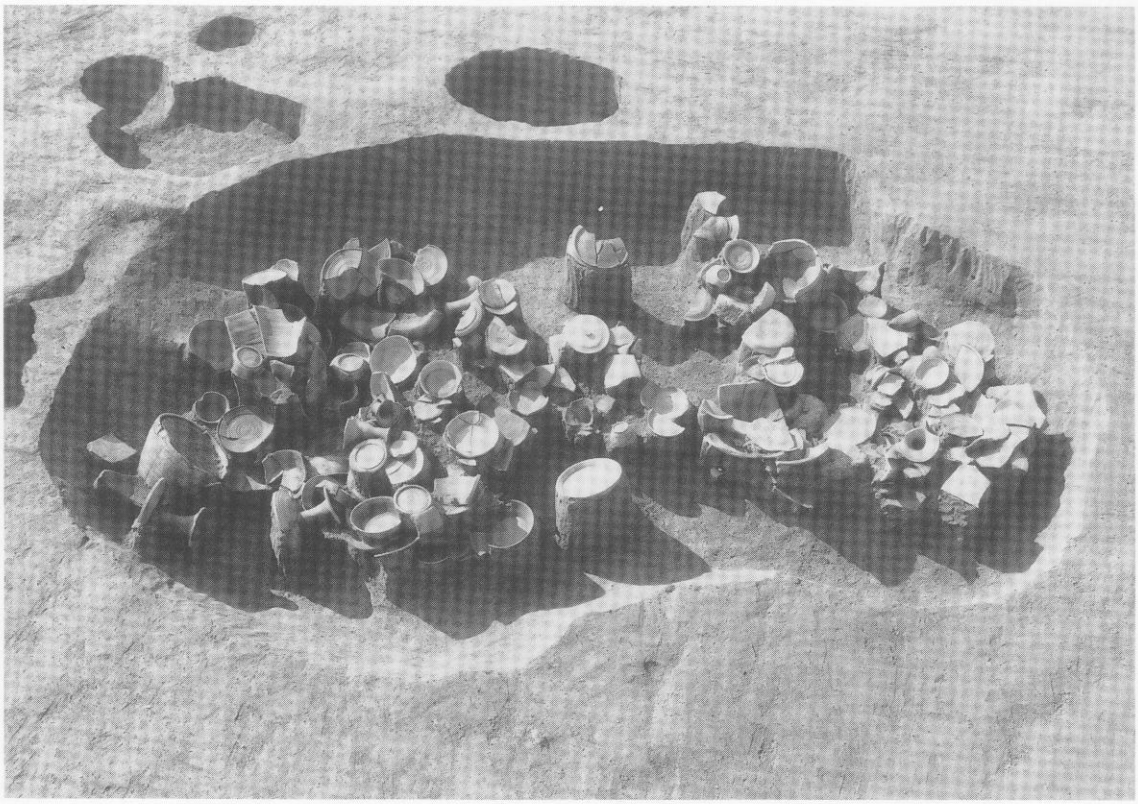
(2)　SK17遺物出土状況



(1)　SK18遺物出土状況



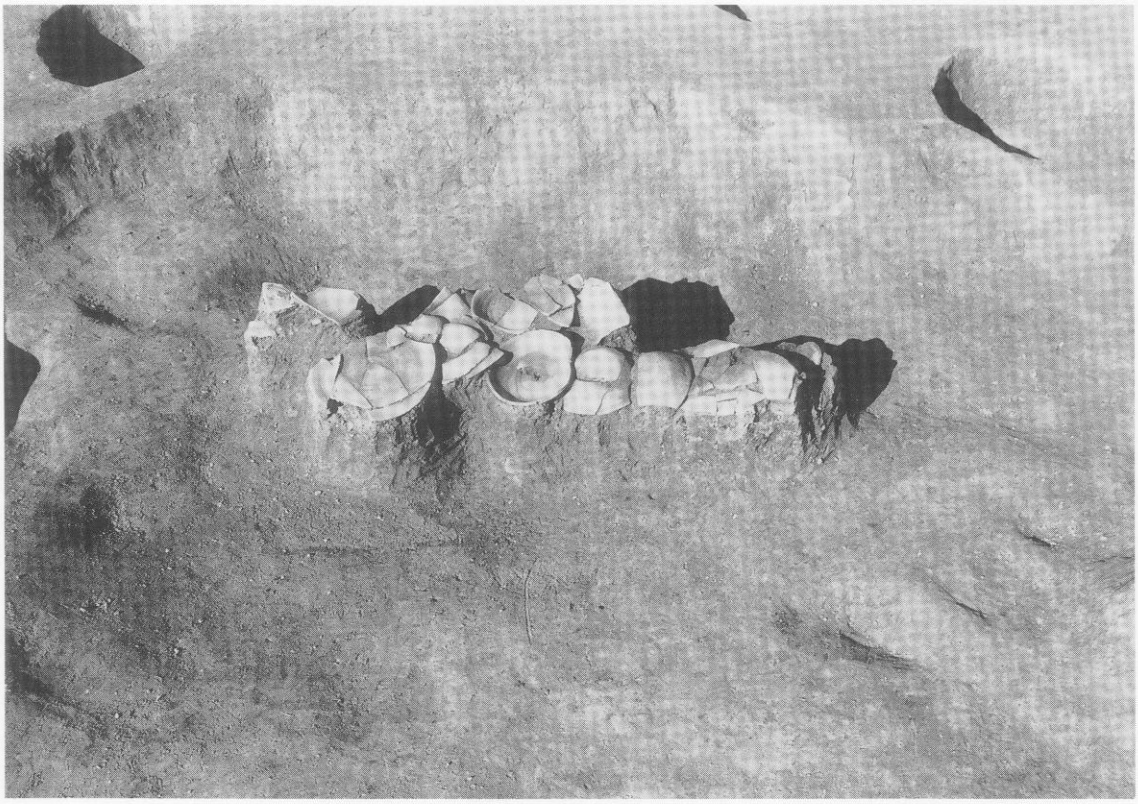
(2)　SK19遺物出土状況



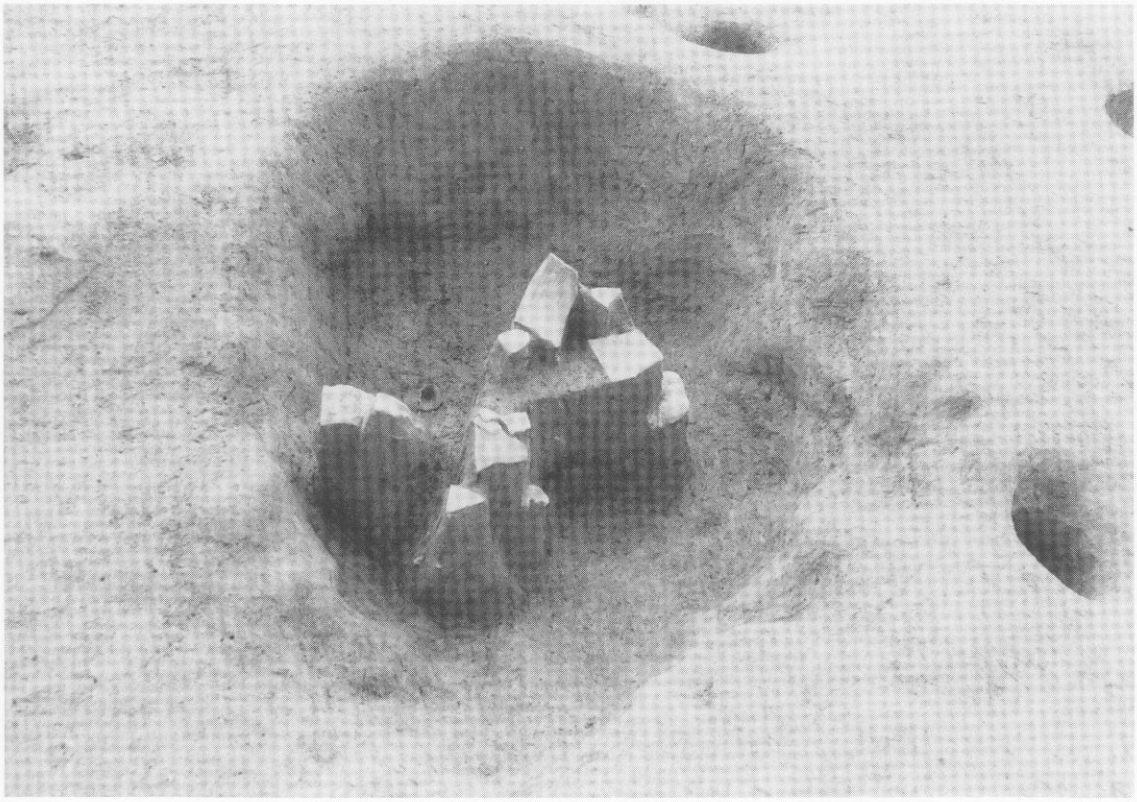
(1)　SK20遺物出土状況



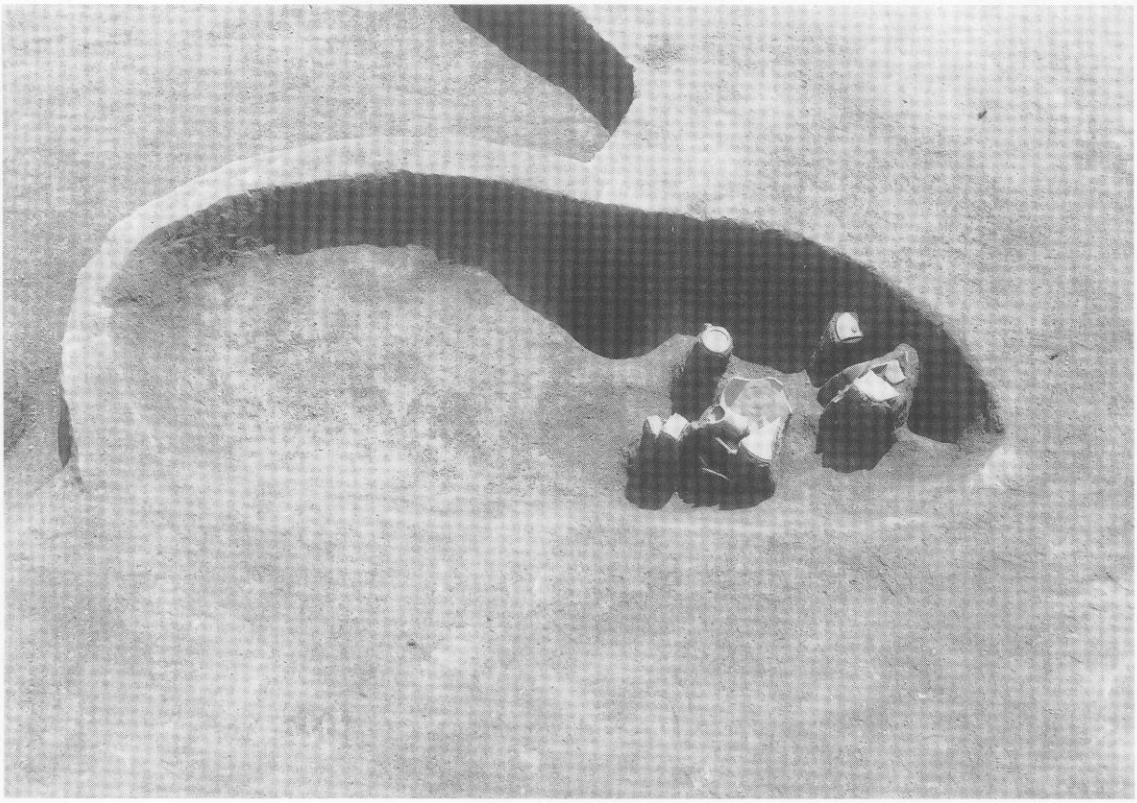
(2)　SK21遺物出土状況



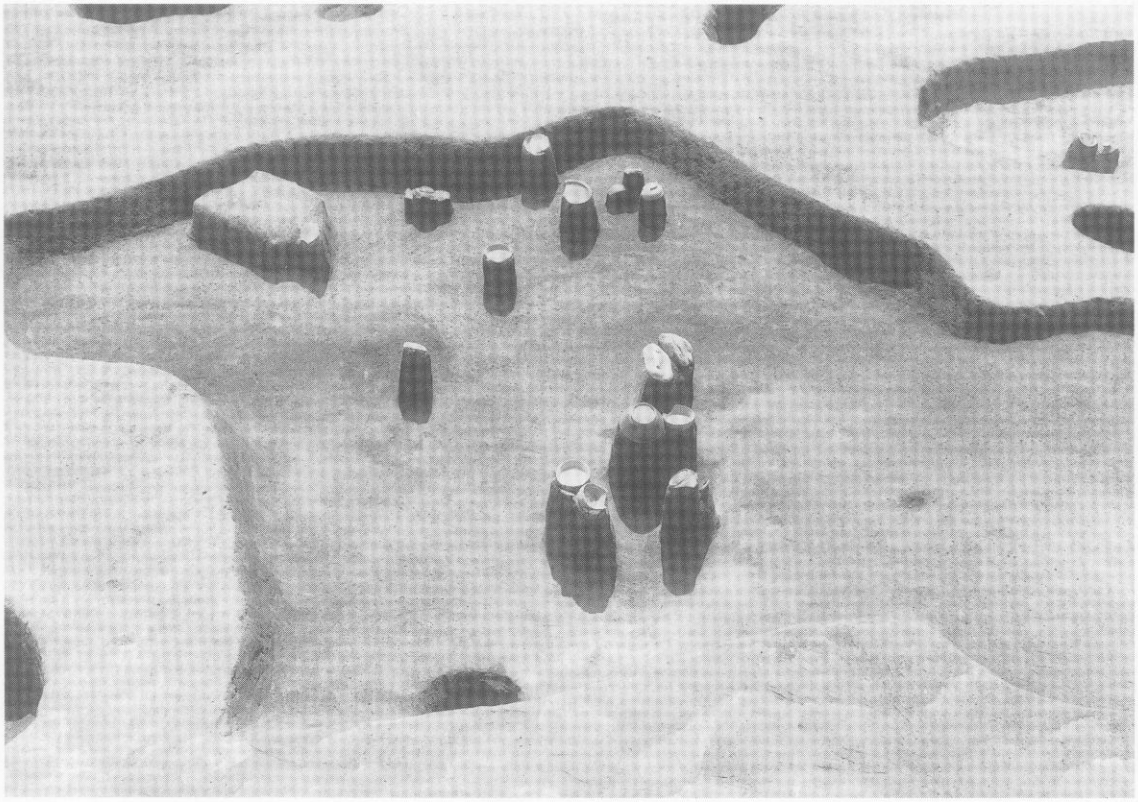
(1)　SK22遺物出土状況



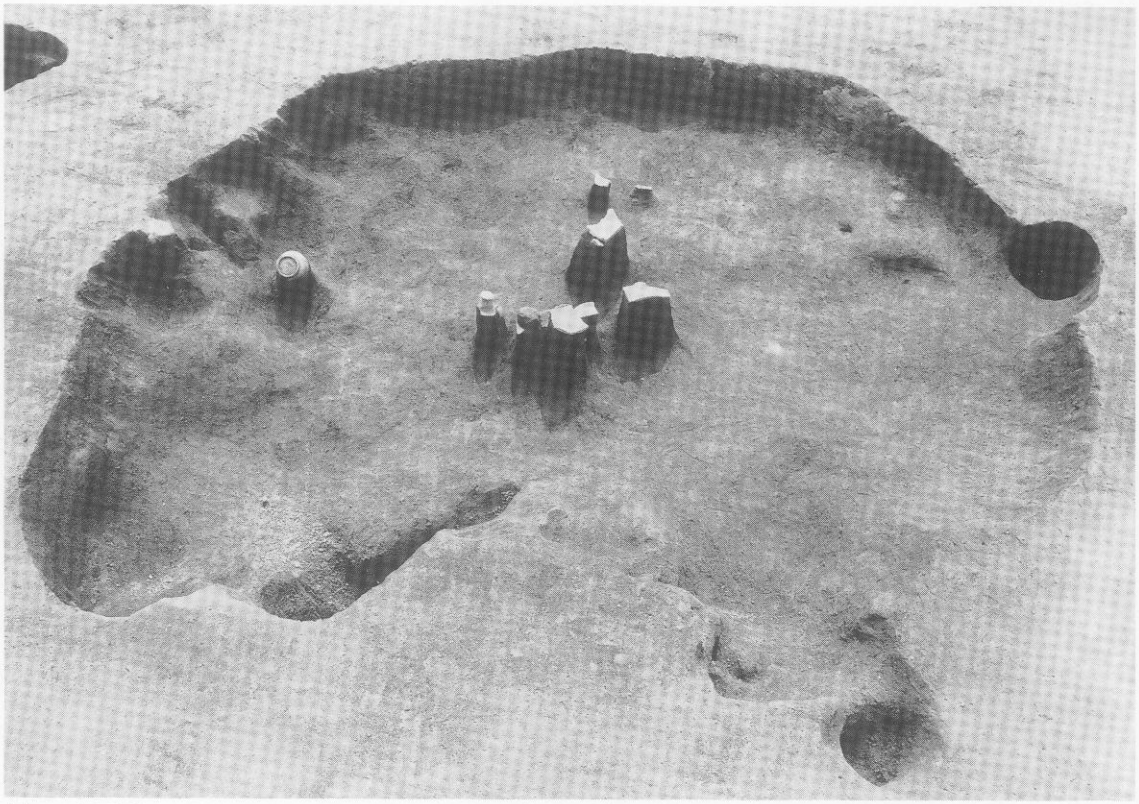
(2)　4号土坑遺物出土状況



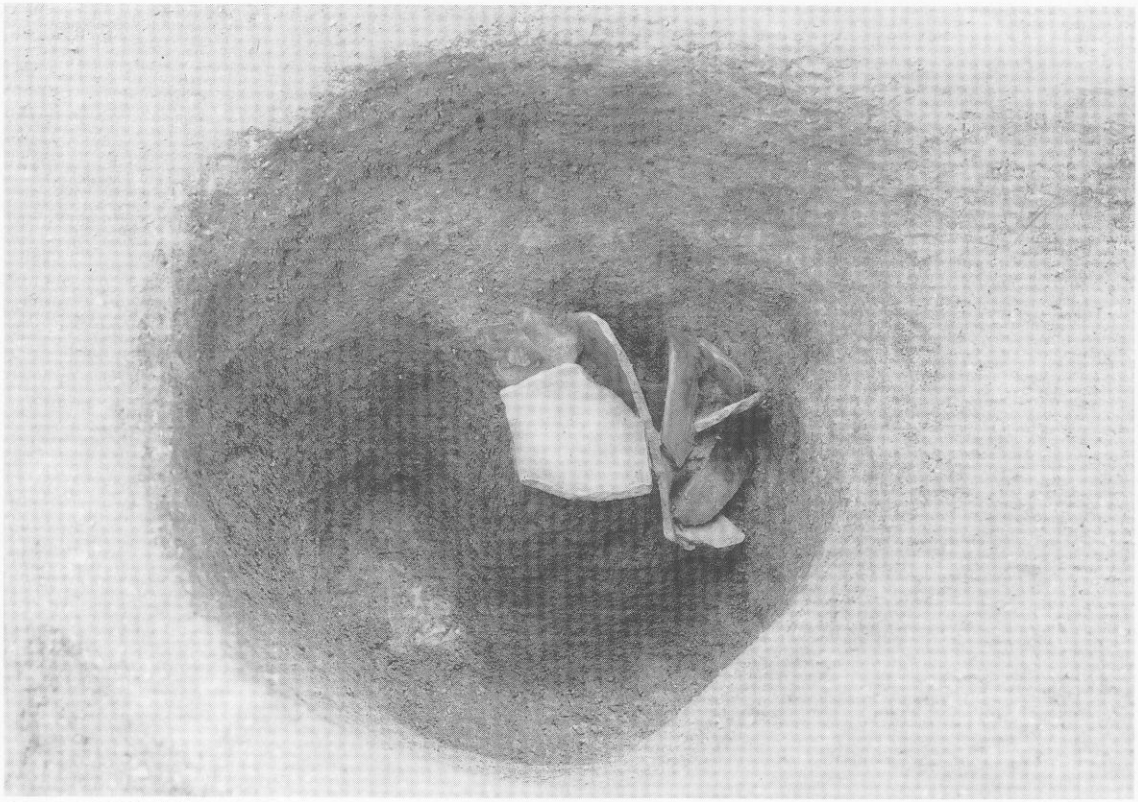
(1)　11号土坑



(2)　12号土坑遺物出土状況



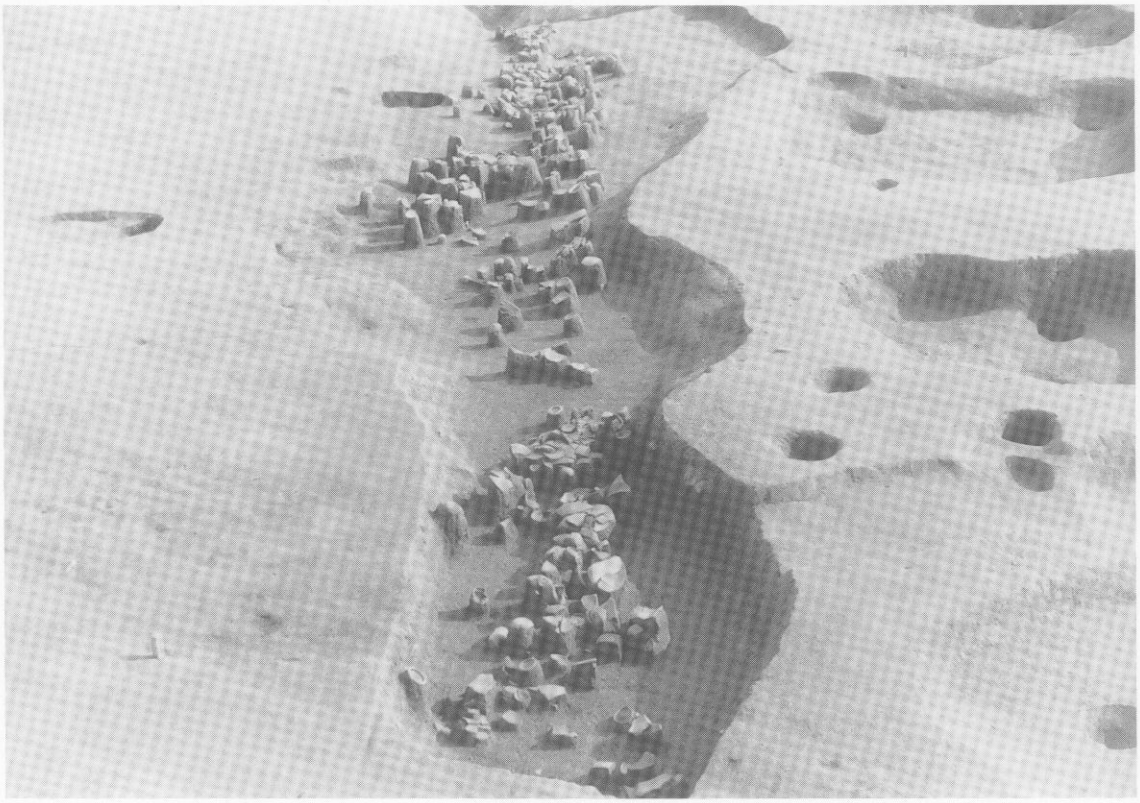
(1)　14号土坑



(2)　17号土坑遺物出土状況



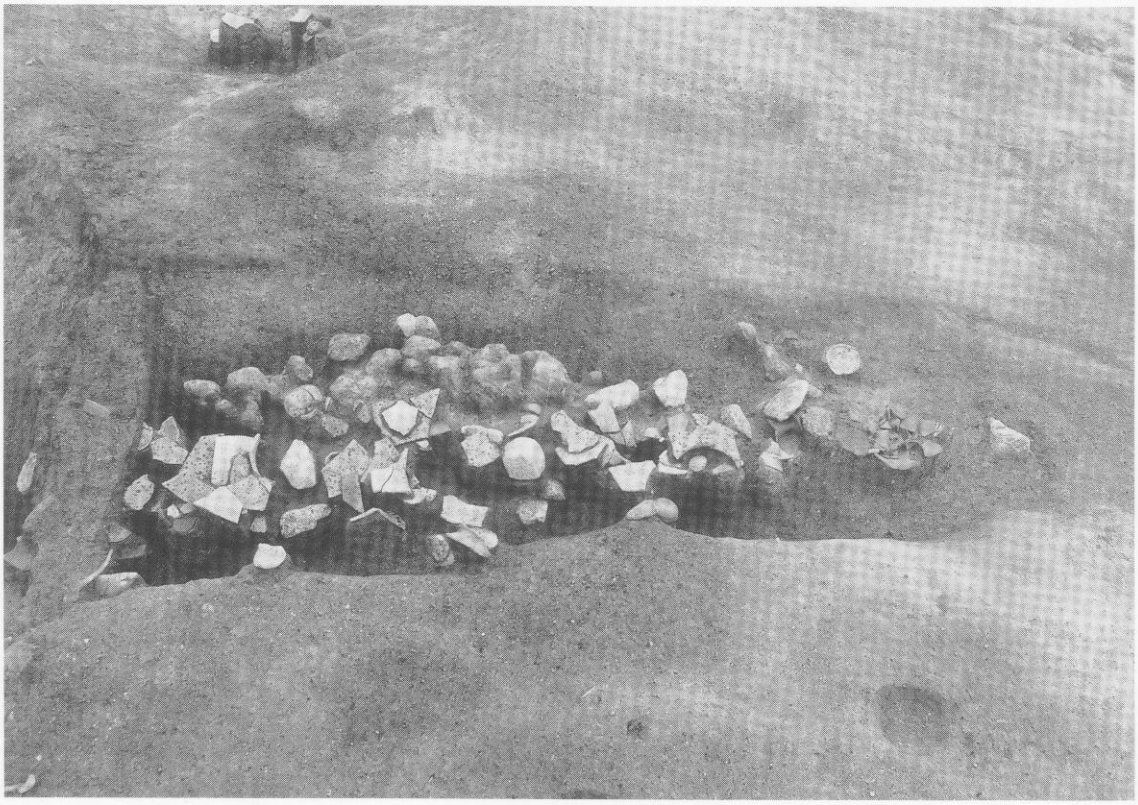
(1)　1号竪穴状遺構遺物出土状況



(2)　大溝内遺物出土状況①



(1)　大溝内遺物出土状況②



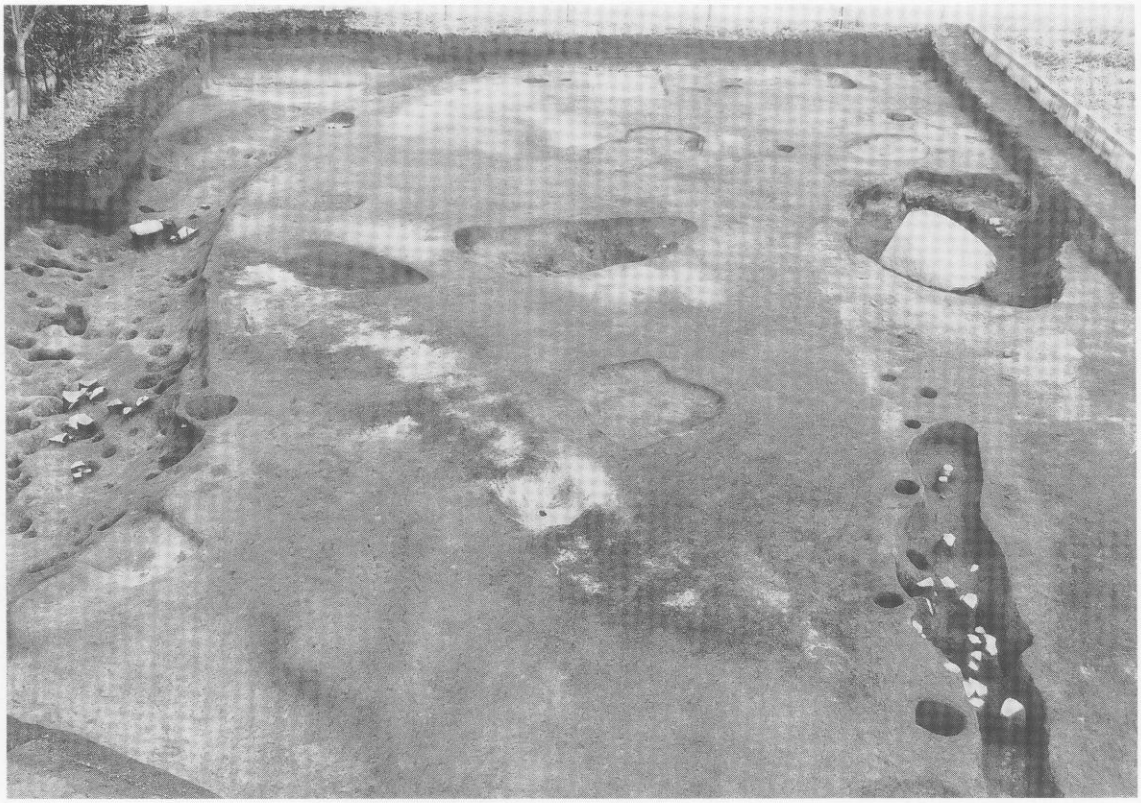
(2)　大溝内遺物出土状況③



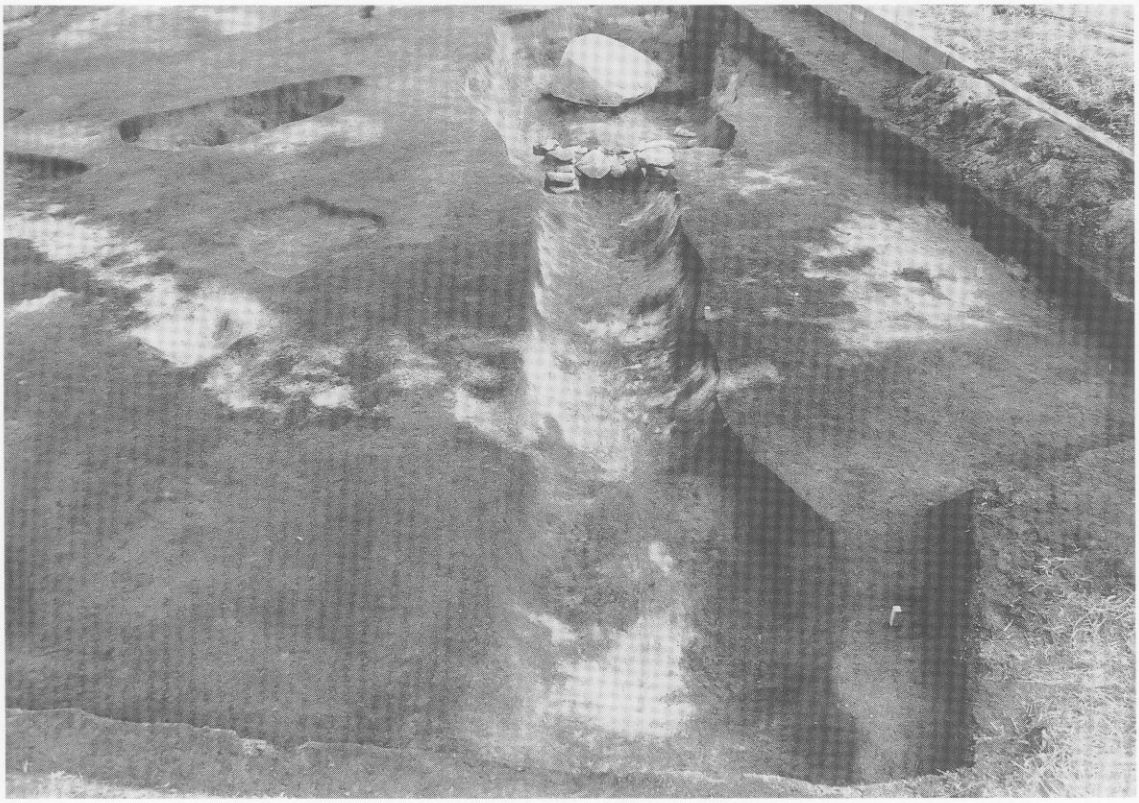
(1)　大溝内遺物出土状況④



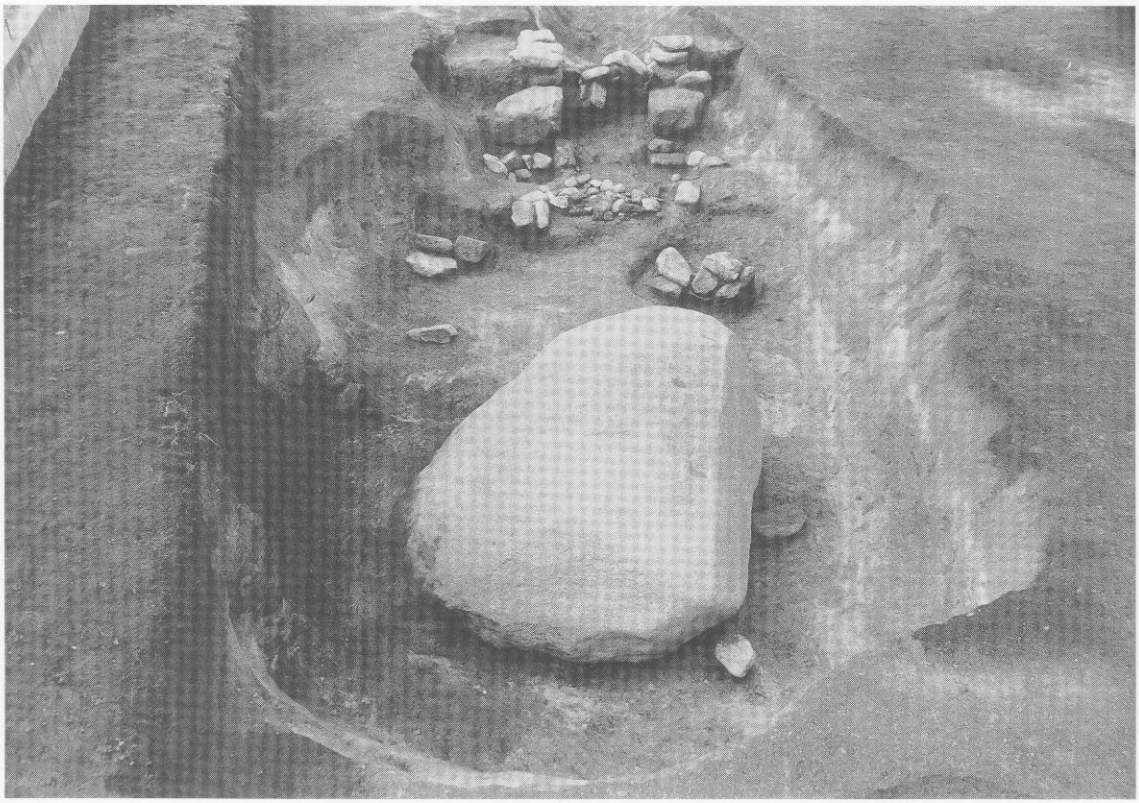
(2)　大溝内遺物出土状況⑤



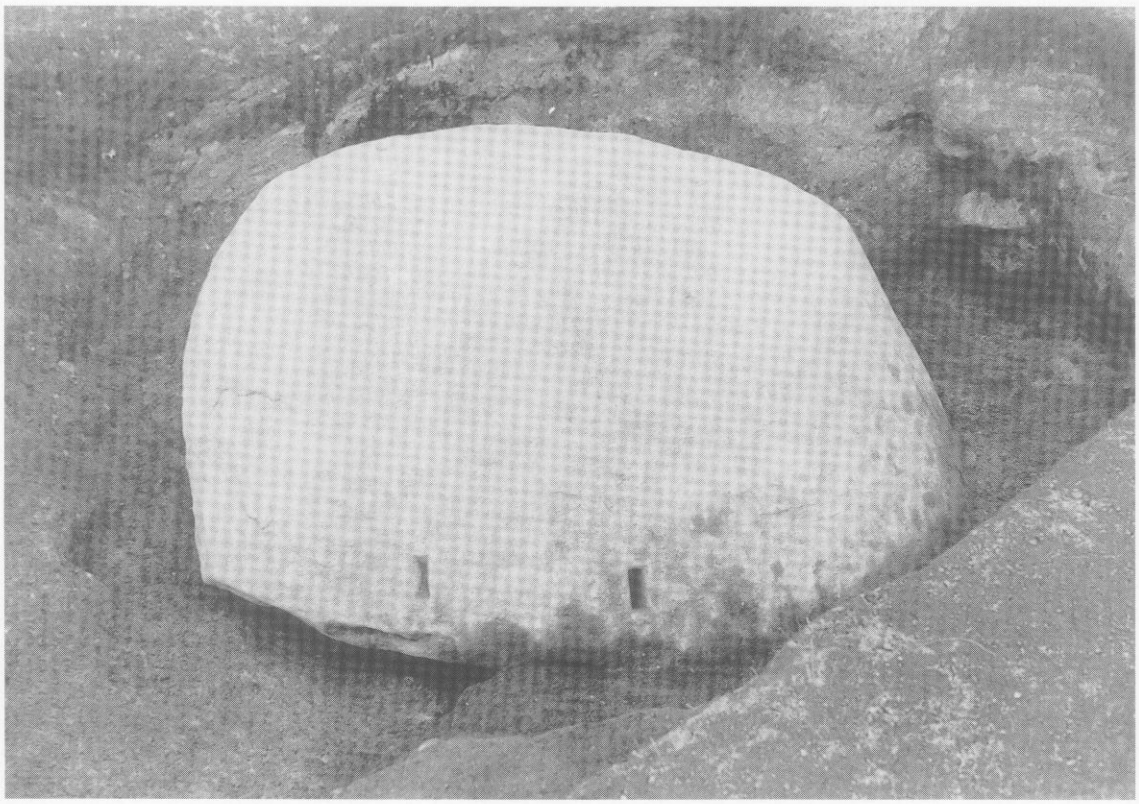
(1)　日ノ浦Ⅱ遺跡Ａ地区１号墳周溝完掘状況



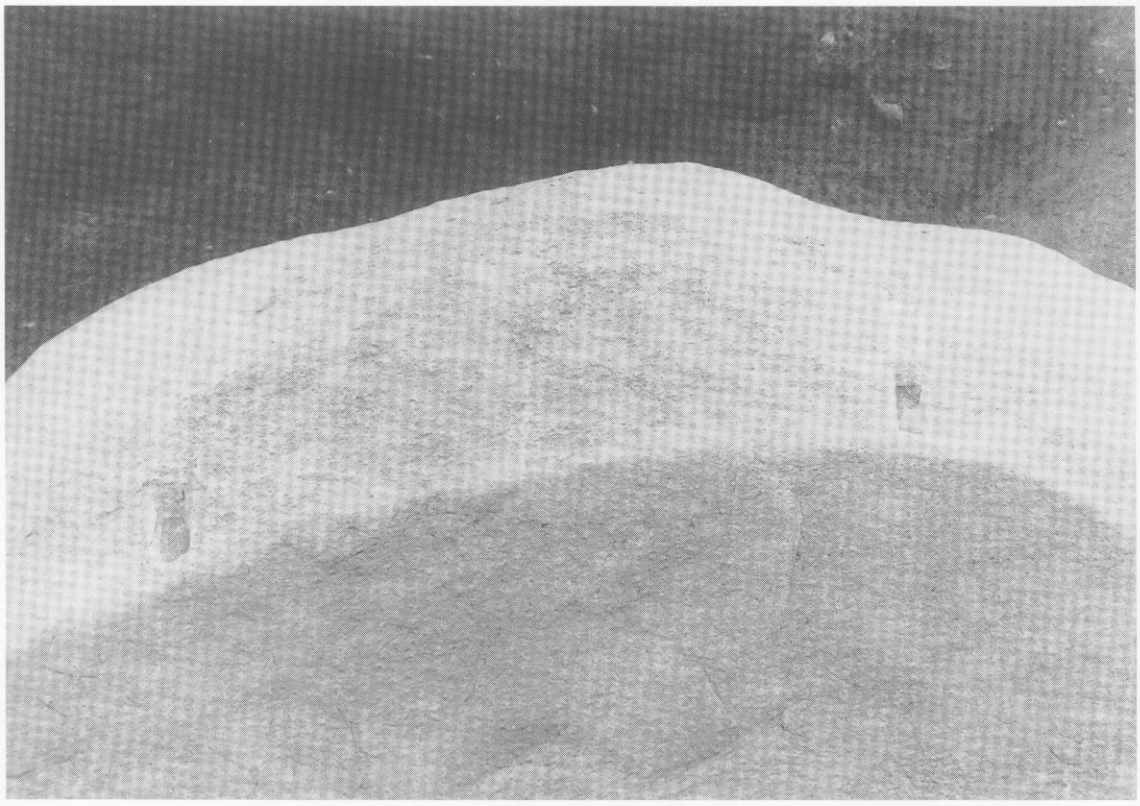
(2)　Ａ地区日ノ浦１号墳



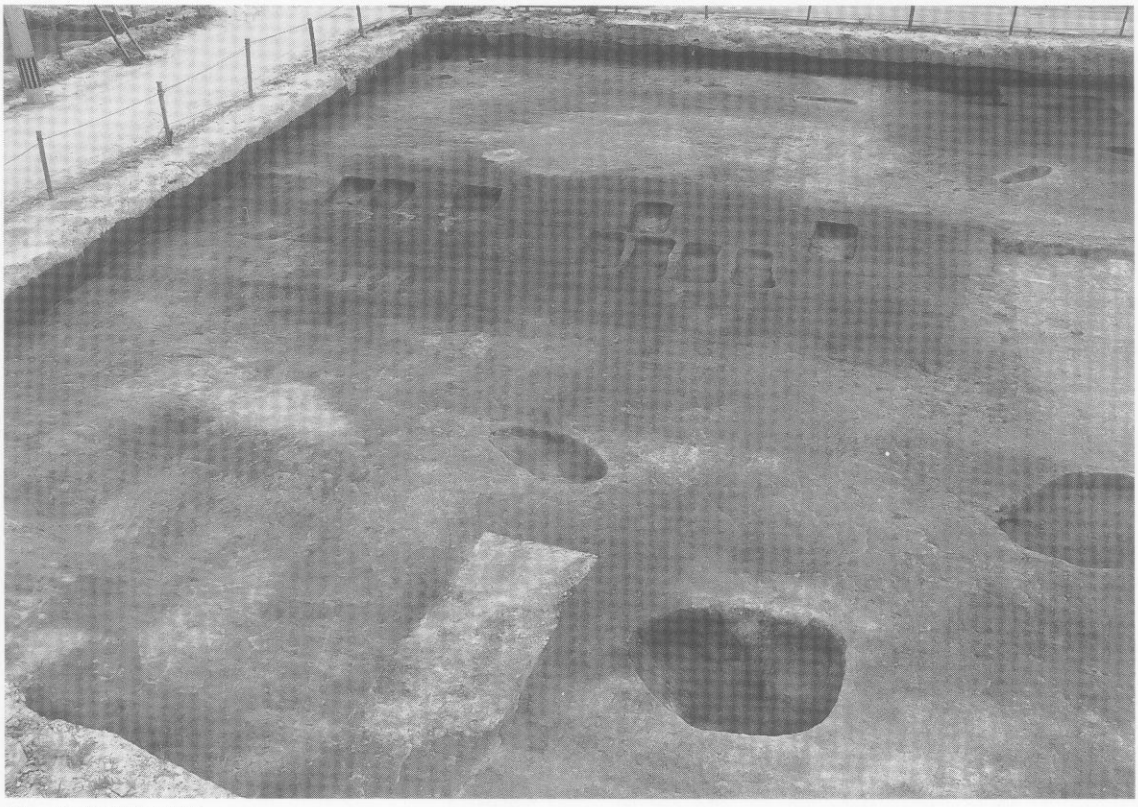
(1)　A地区日ノ浦1号墳



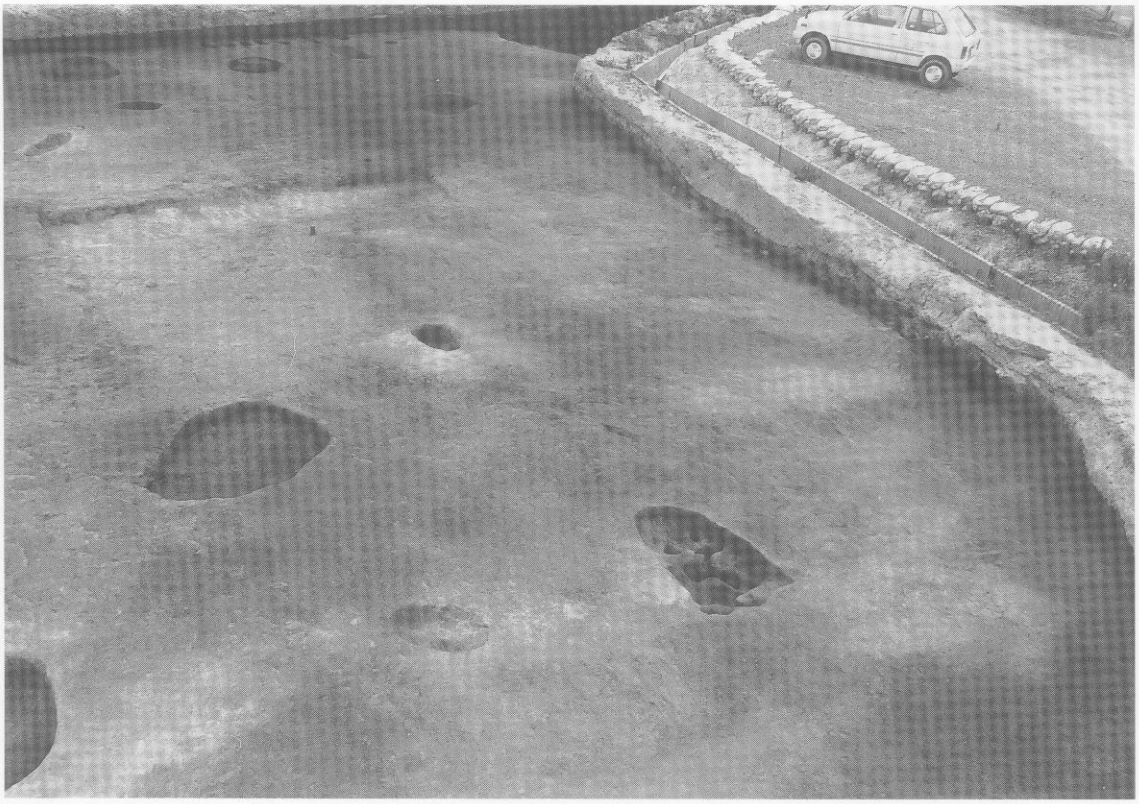
(2)　A地区日ノ浦1号墳天井石



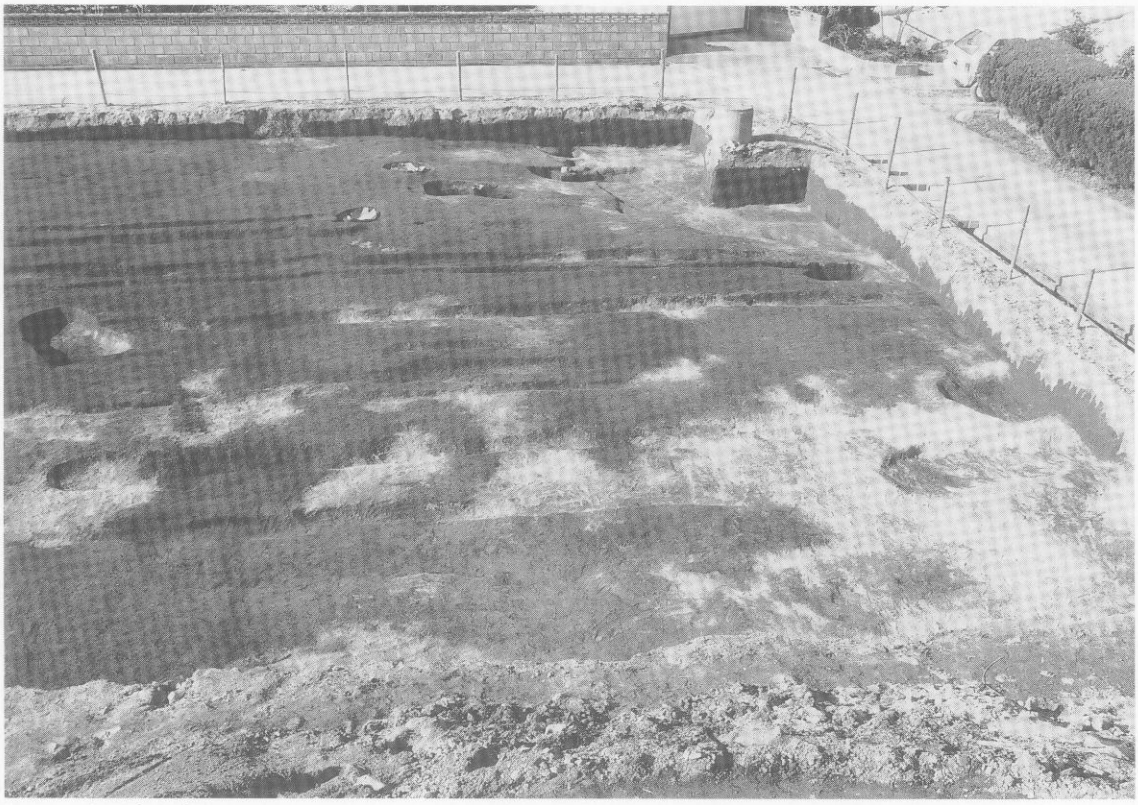
(1)　A地区日ノ浦1号墳天井石



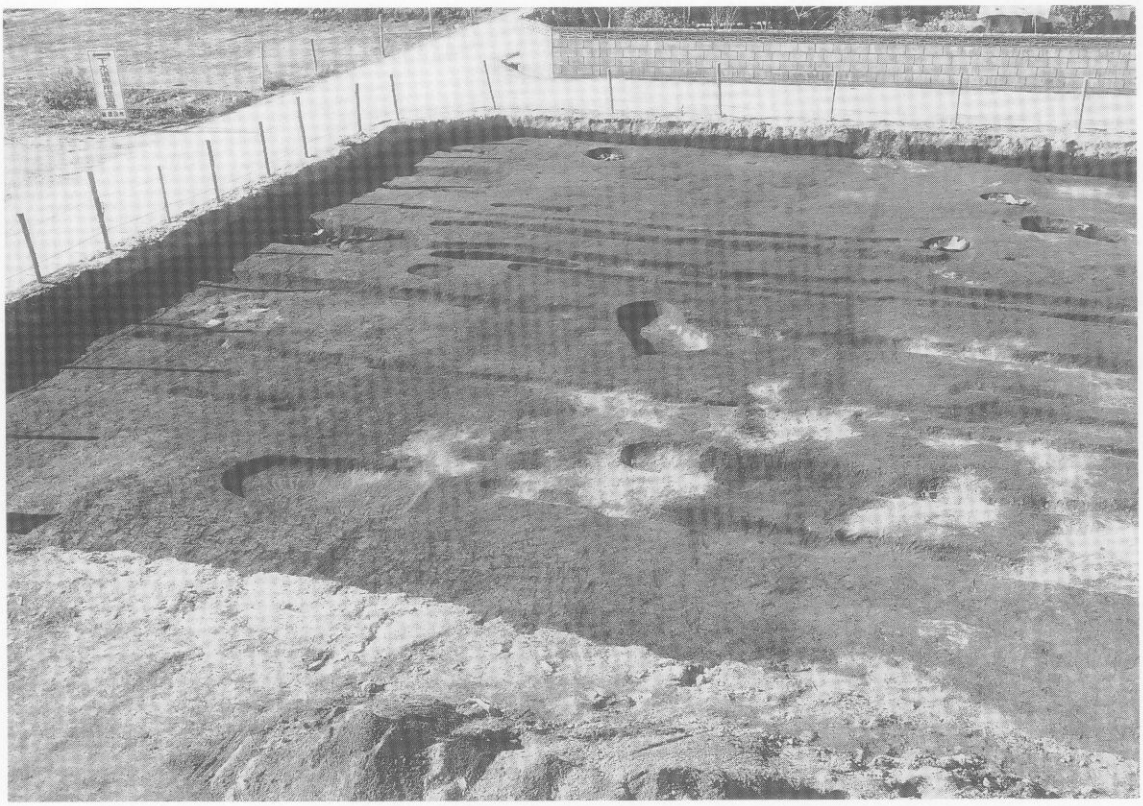
(2)　B地区東半部



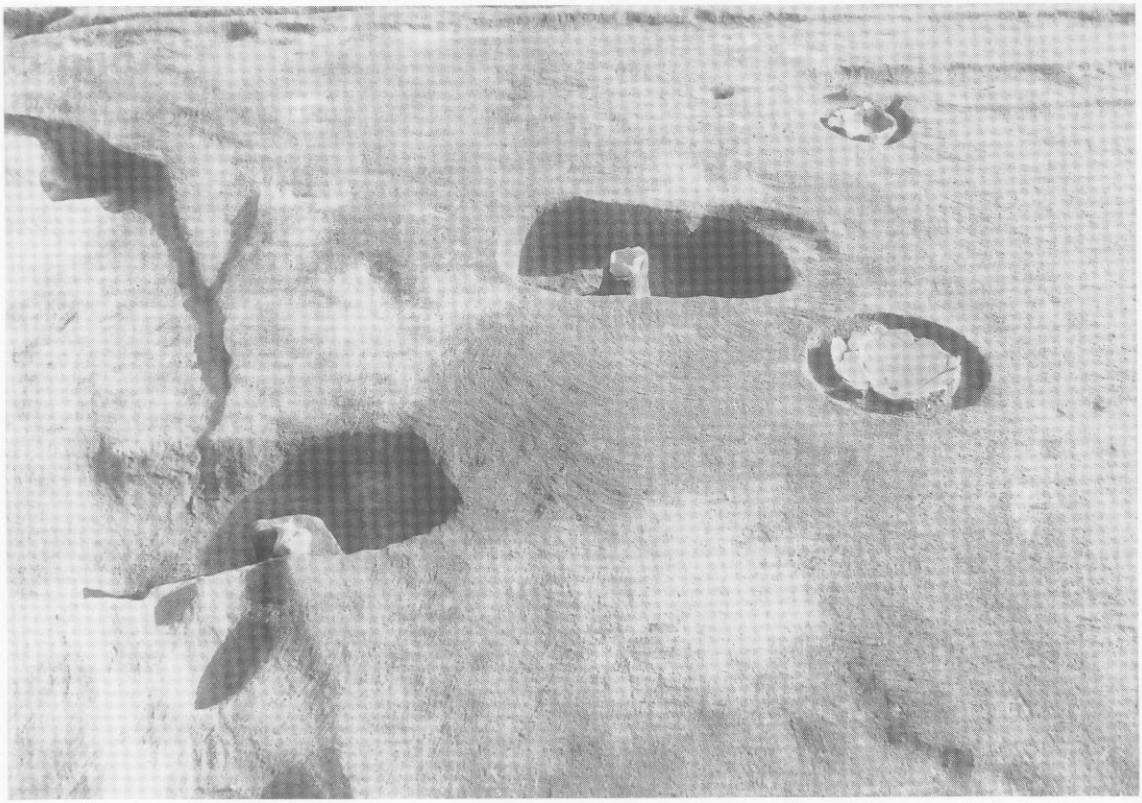
(1)　B地区西半部



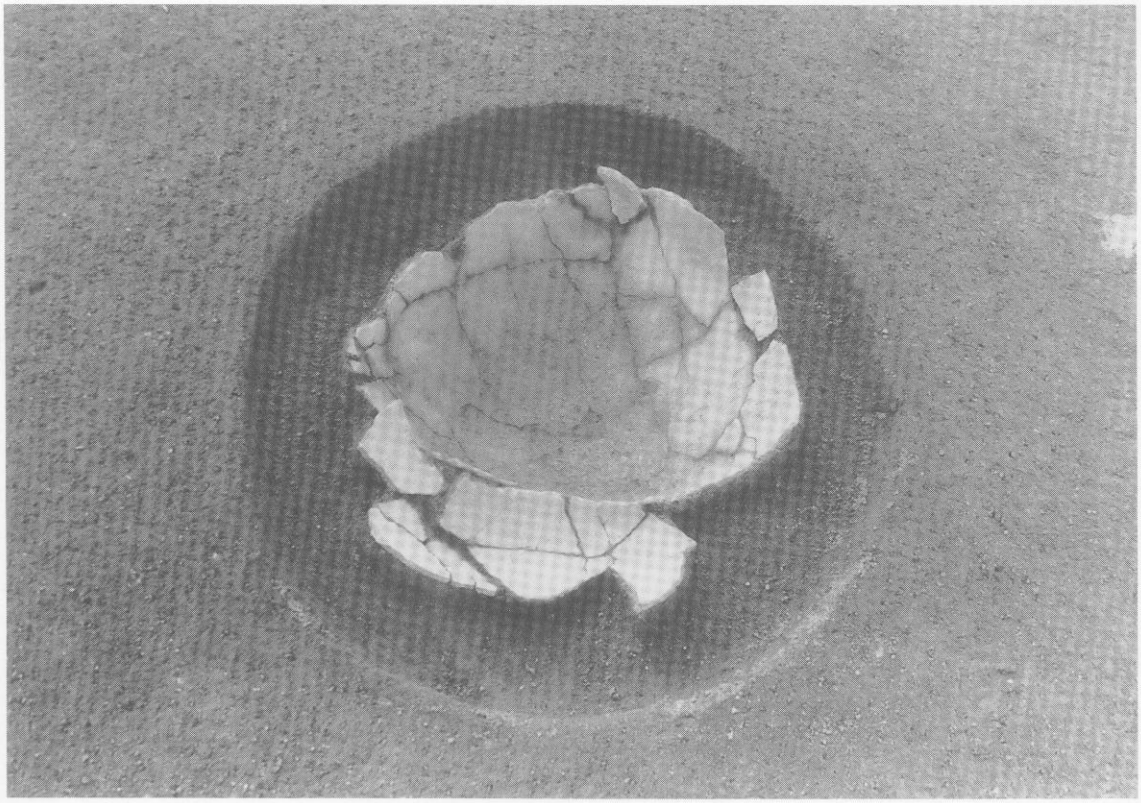
(2)　C地区東半部



(1)　C地区西半部



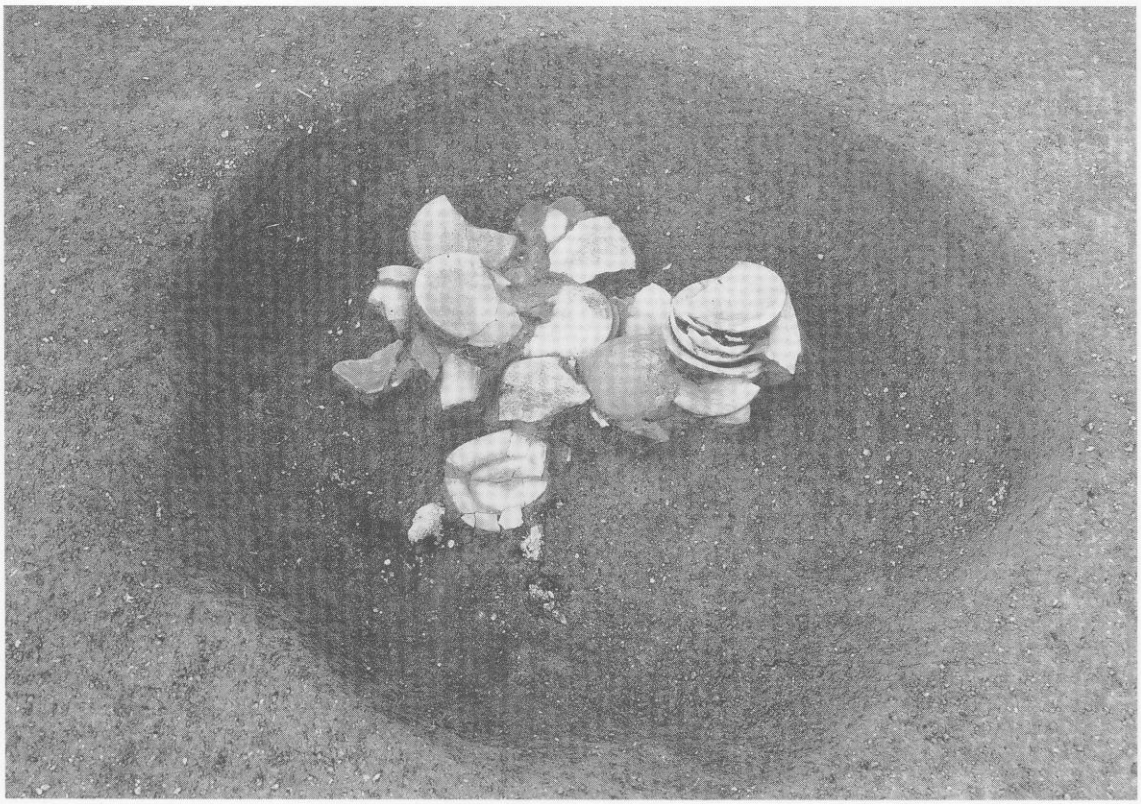
(2)　C地区土坑墓・甕棺墓



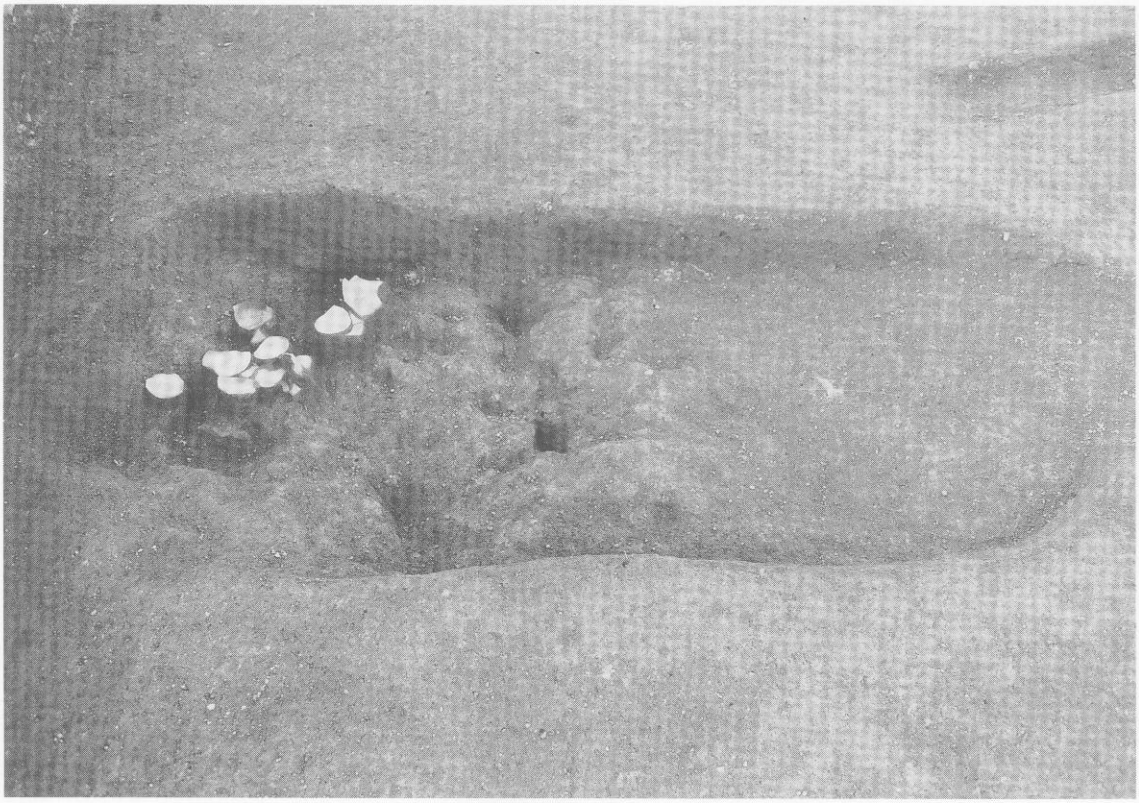
(1)　C地区 1 号甕棺墓



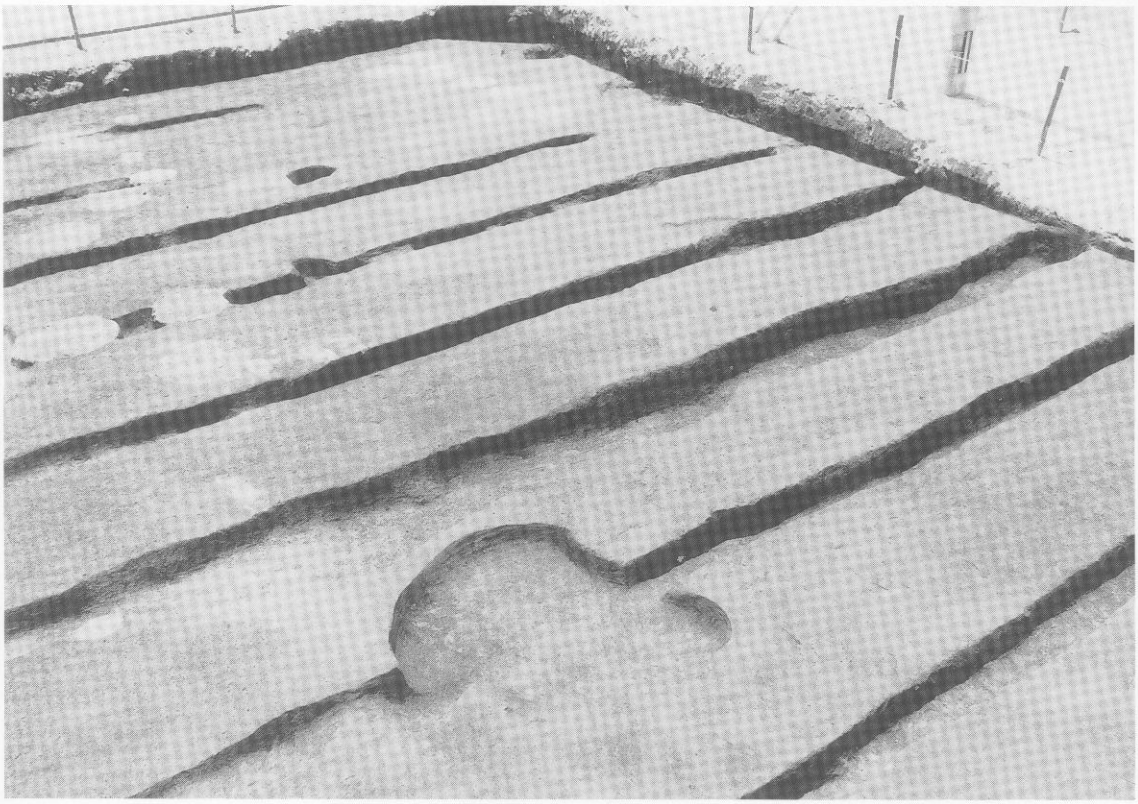
(2)　C地区 2 号甕棺墓



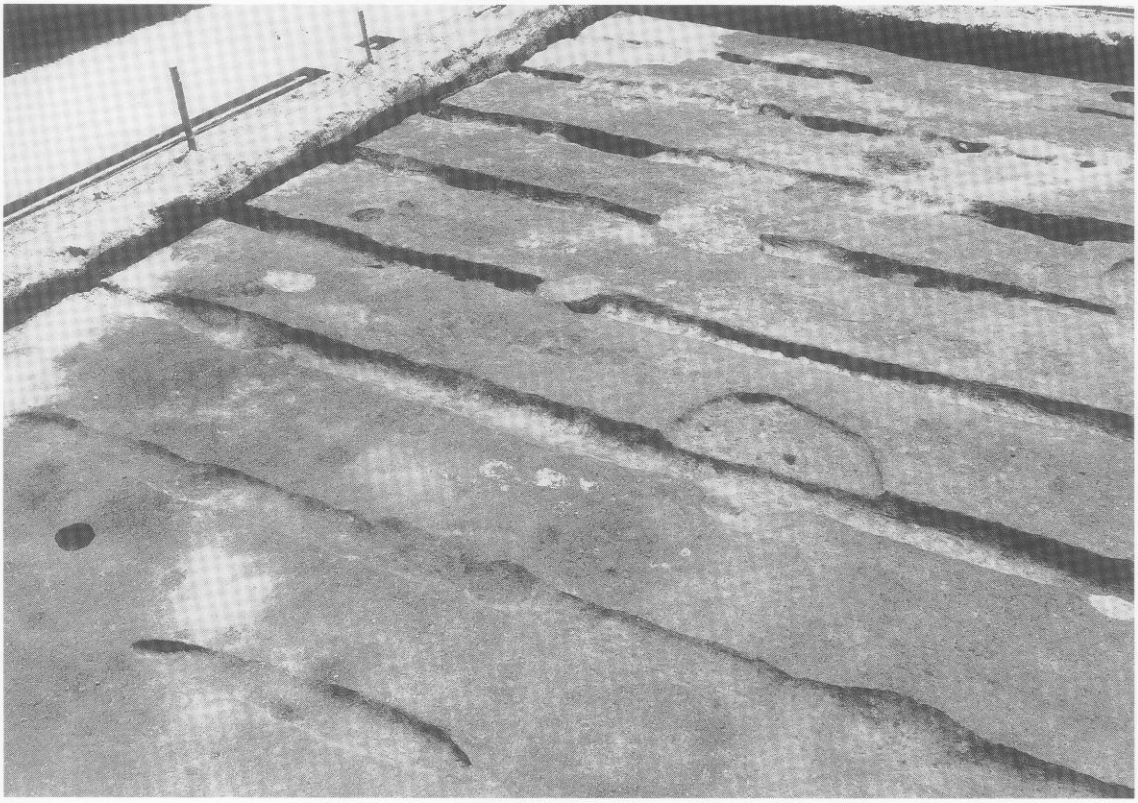
(1)　C地区 1 号土坑



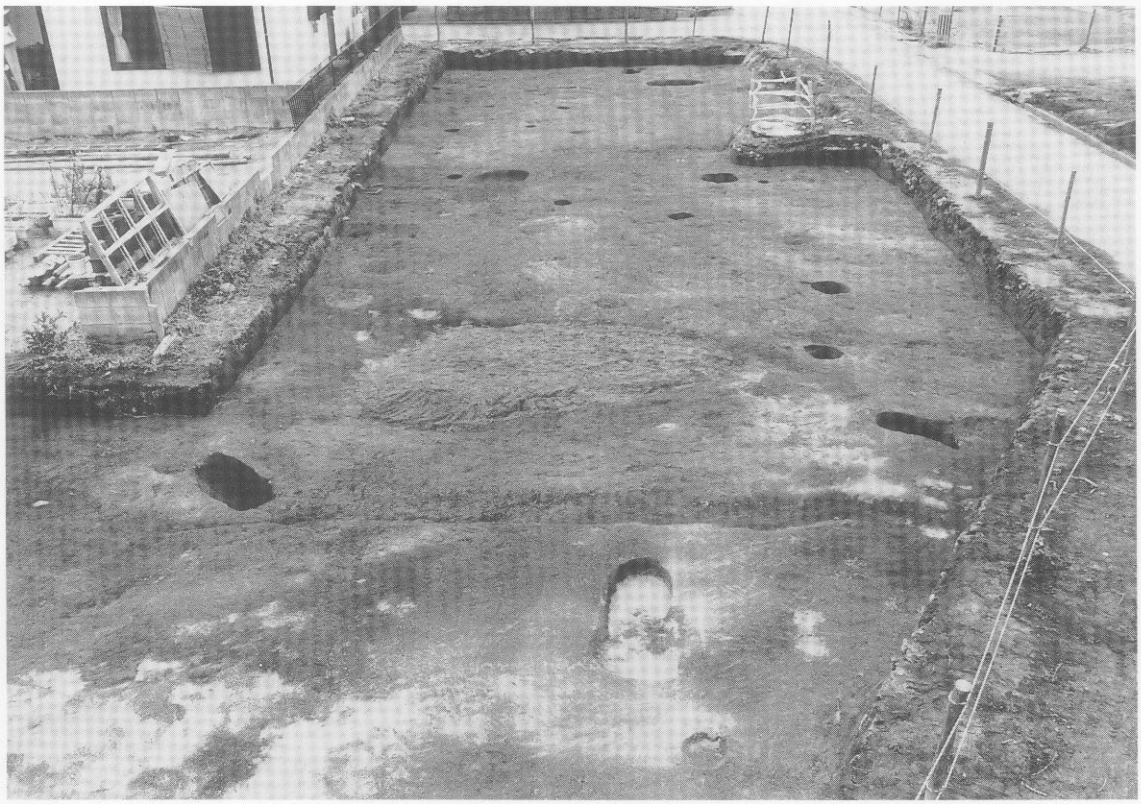
(2)　C地区 2 号土坑



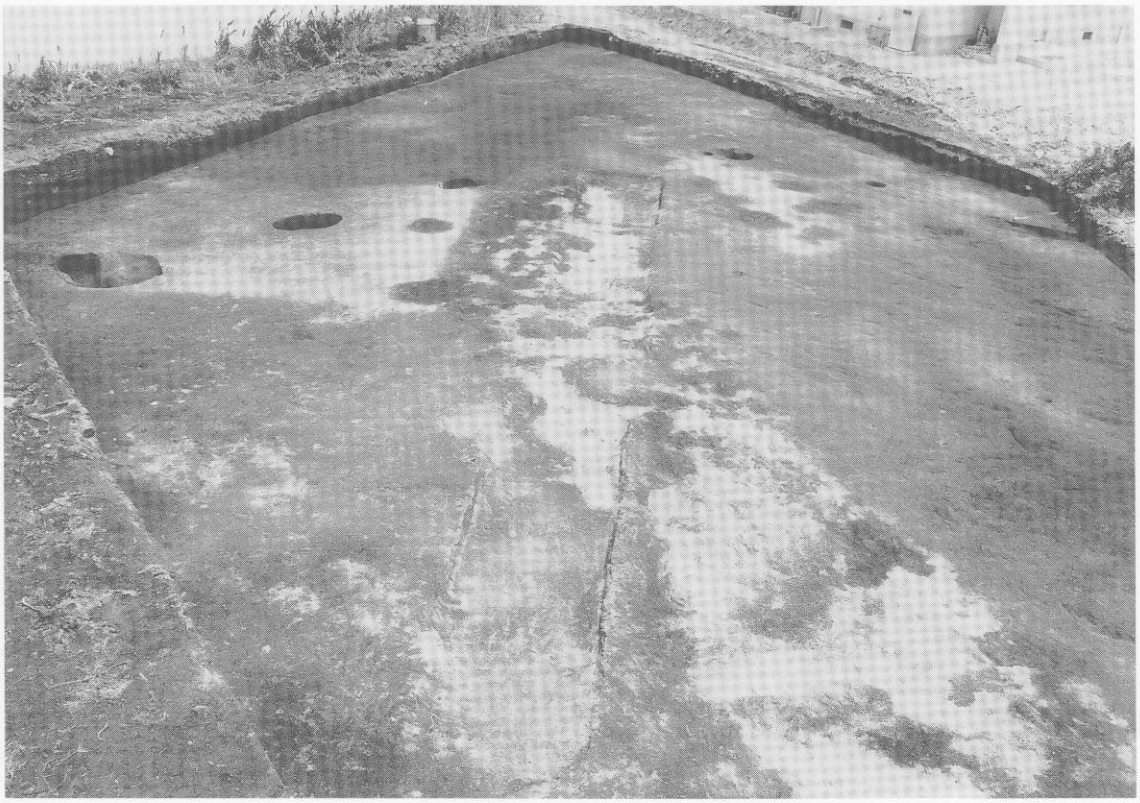
(1)　D地区東半部



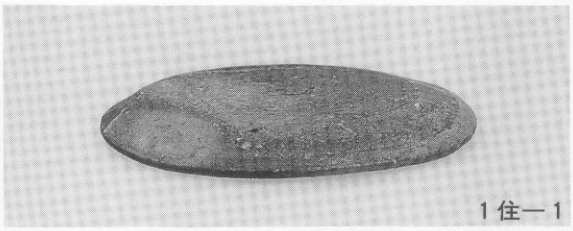
(2)　D地区西半部

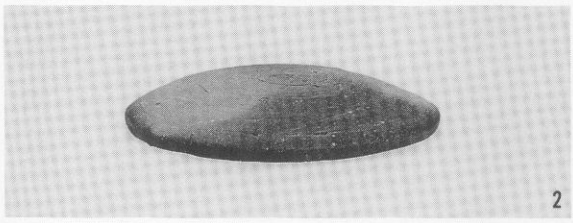


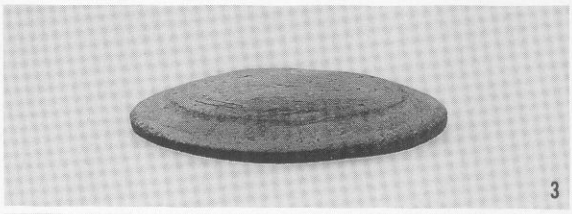
(1)　E地区北半部

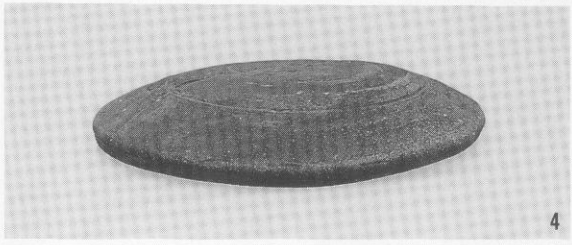


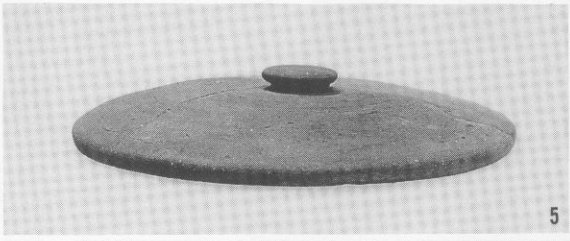
(2)　E地区南半部

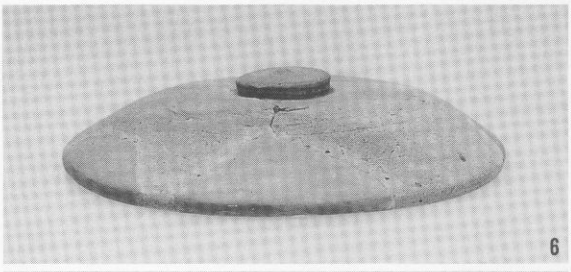

1住—1

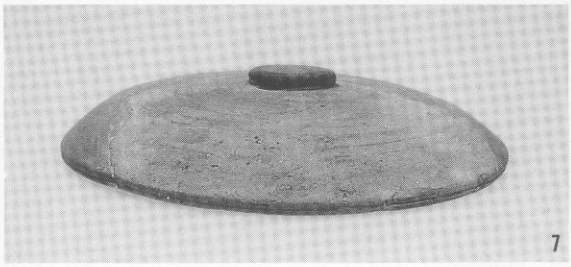

2

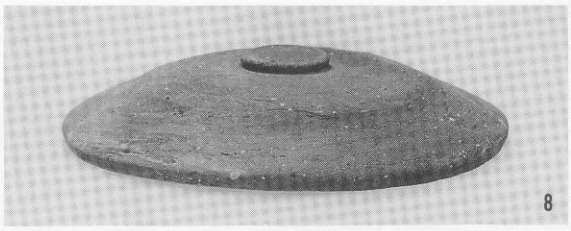

3


4


5


6

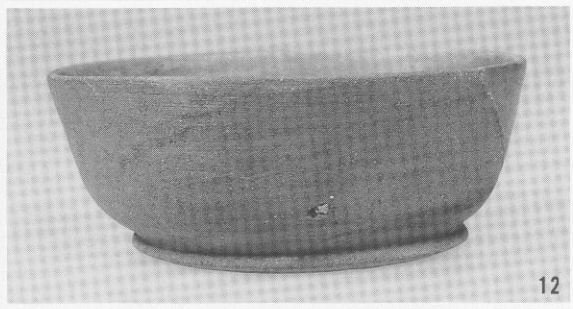

7

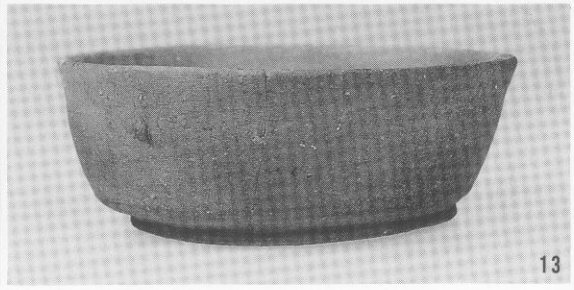

8


9


10


11

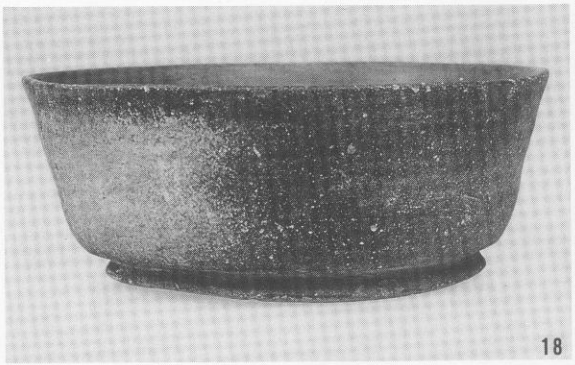

12


13

1号住居跡出土土器

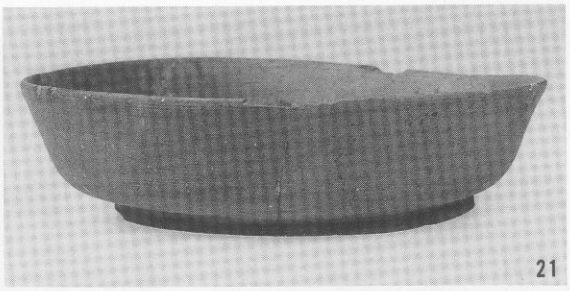

1住—15


16


18

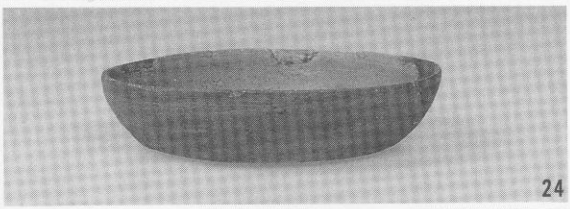

19


20

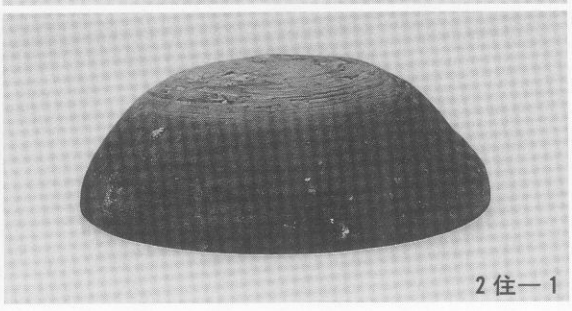

21


22

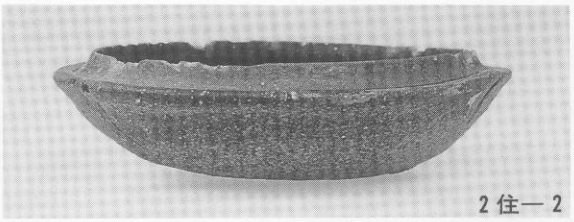

23

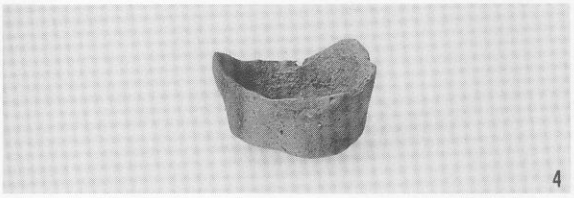

24

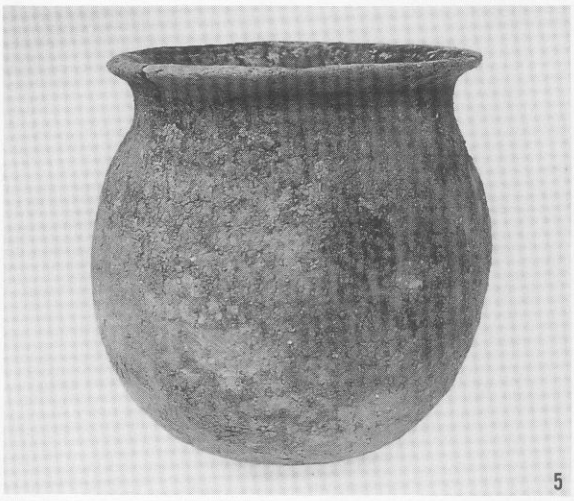

25


2住—1

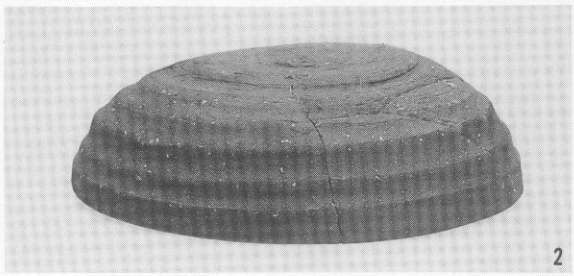
1号・2号住居跡出土土器

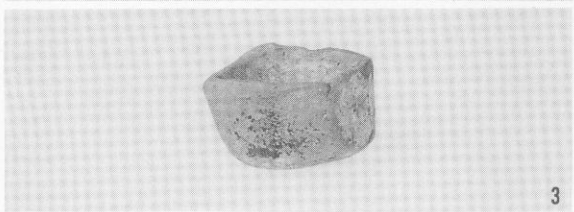

2住—2

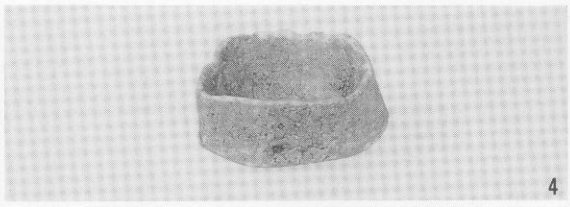

4


5


3住—1

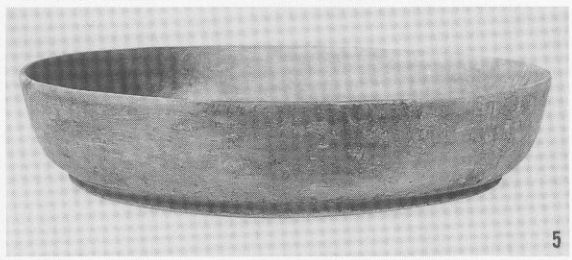

2

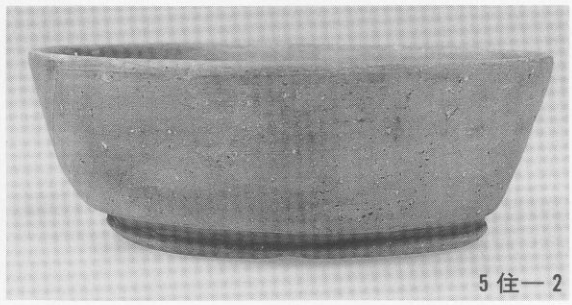

3


4


4住—2

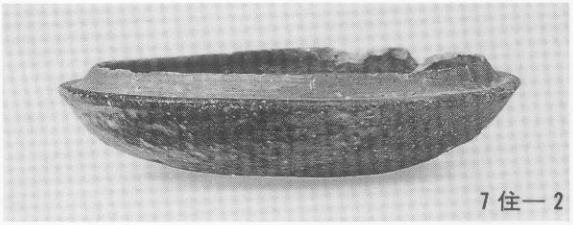

3

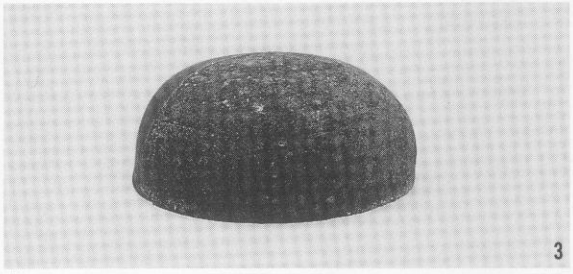

5

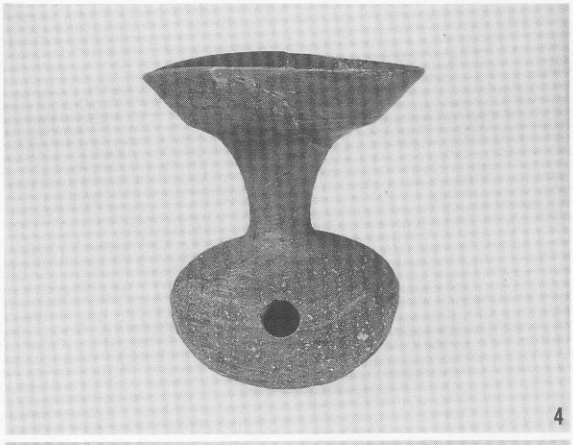

5住—2


7住—1

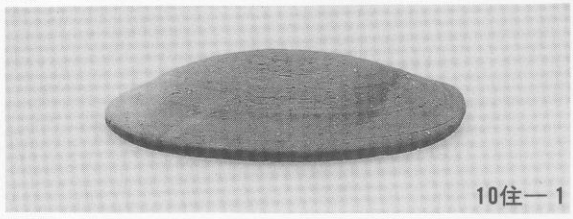
2号・3号・4号・5号・7号住居跡出土土器


7住—2


3

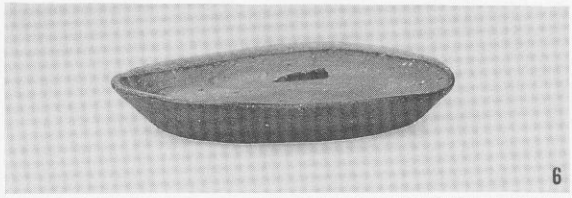

4


9住—1


10住—1

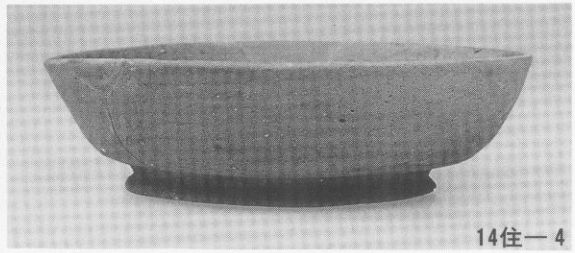

3

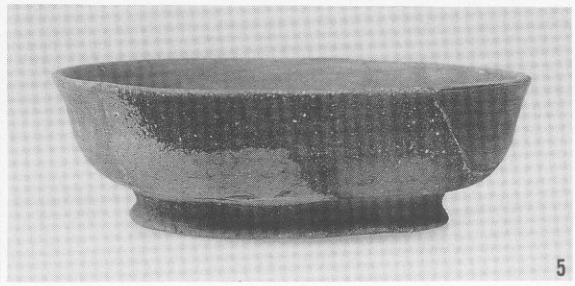

4


6


8

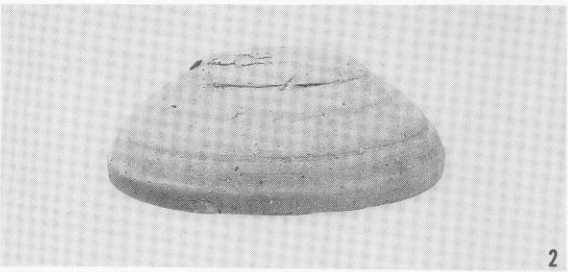

11住—1

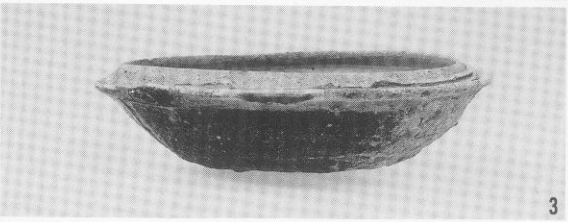

14住—4


5

7号・9号・10号・11号・14号住居跡出土土器

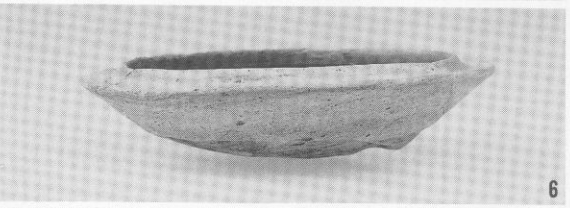

17住—1

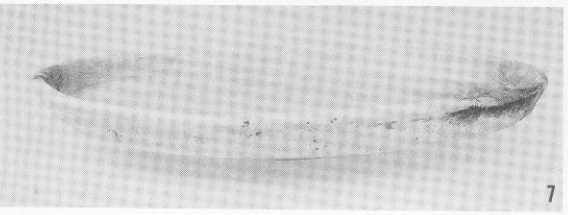

2


3


4

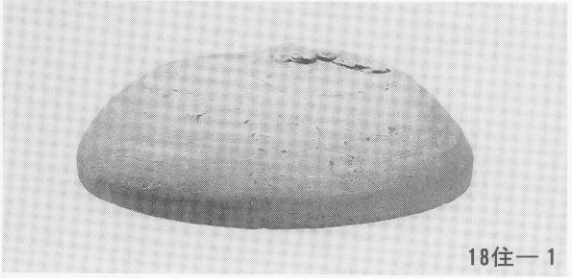

5


6

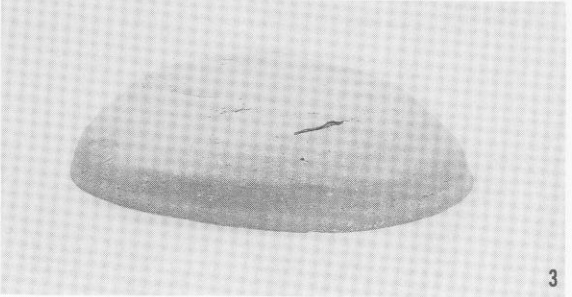

7


10

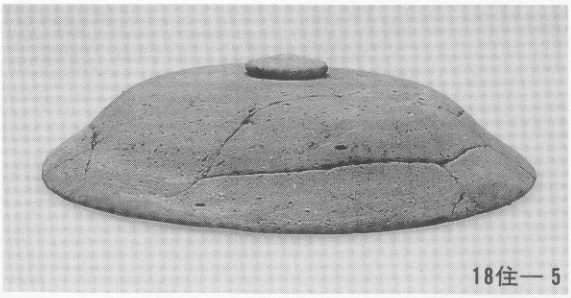

11


18住—1


2


3

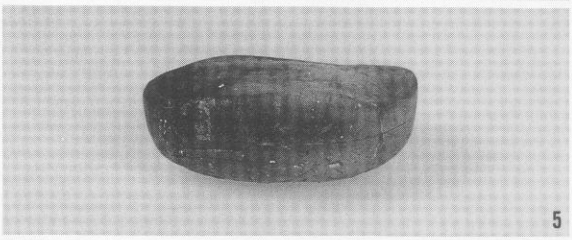
17号・18号住居跡出土土器


18住— 5


7


19住— 1

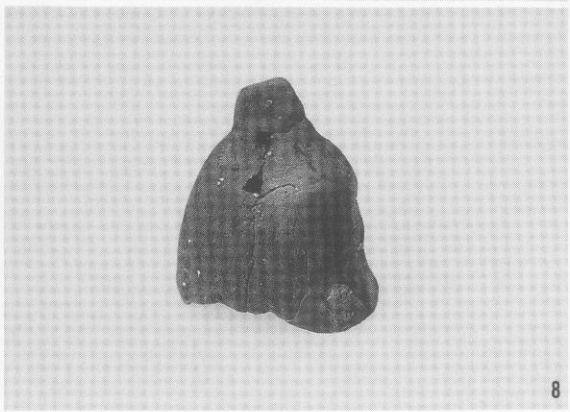

2


5


6




7


8

18号・19号住居跡出土土器

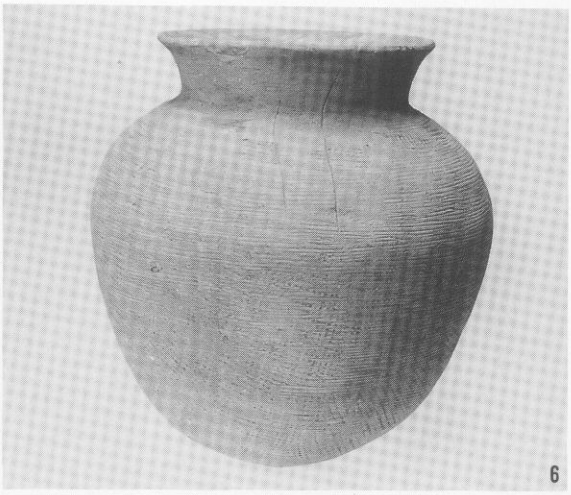

20住—1


2

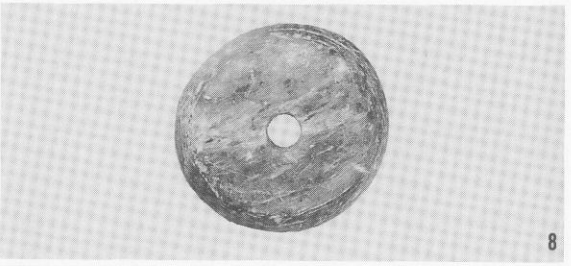

3


4


5

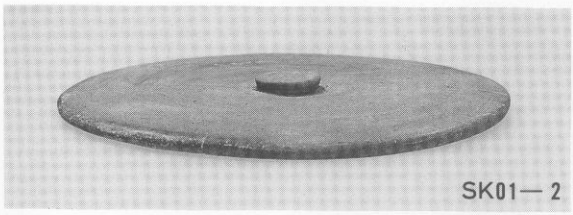

6

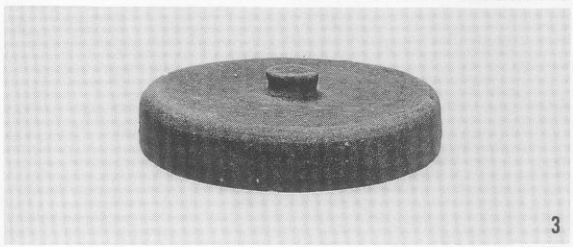

7

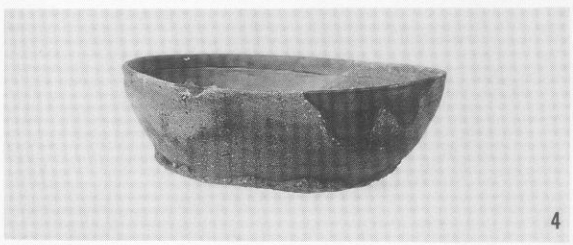

8

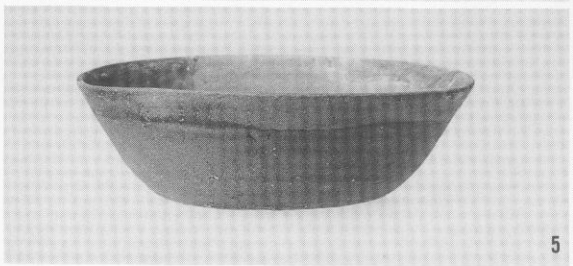

21住—3

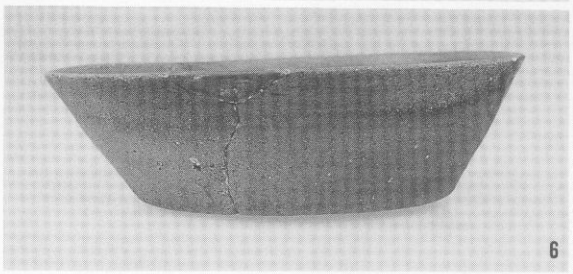
20号・21号住居跡出土土器

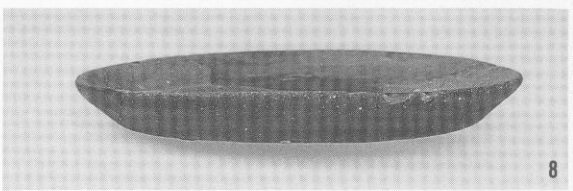

SK01— 2


3

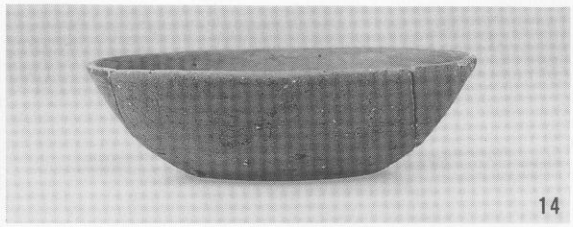

4

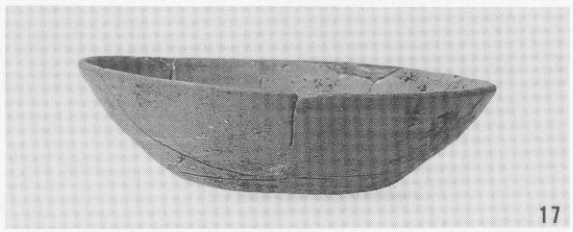

5

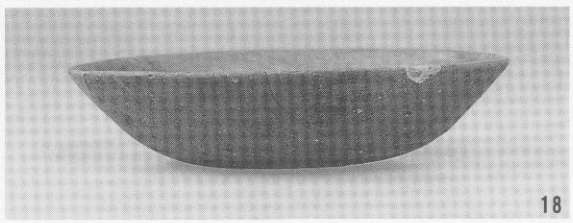

6


8

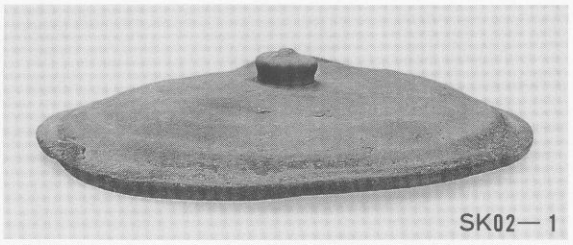

9

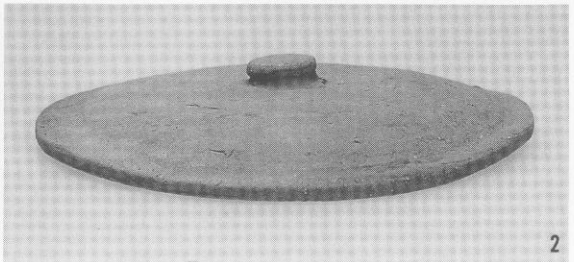

14


17


18


20


SK02— 1

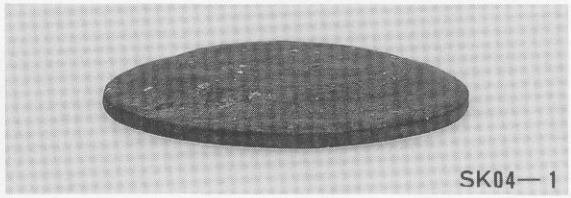

2

SK01・SK02出土土器

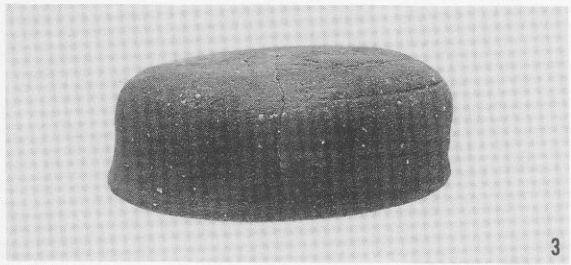

SK02— 4


SK03— 2


7


SK04— 1


8


3


9


4

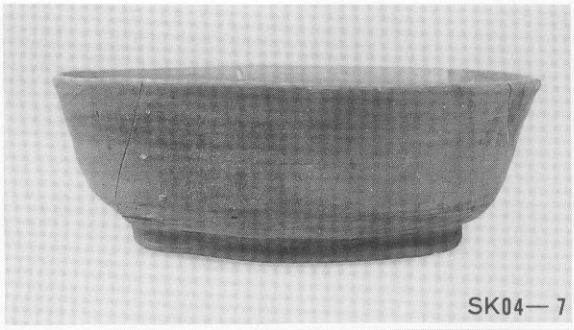

10


5


11

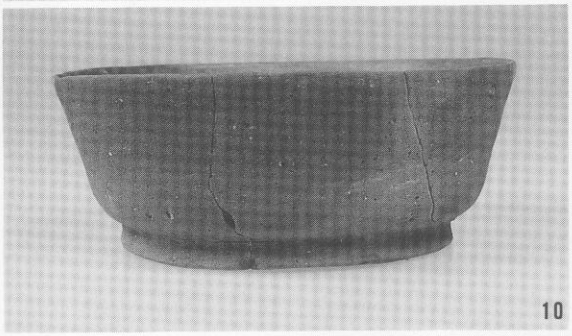

6

SK02・SK03・SK04出土土器


SK04—7


8


9

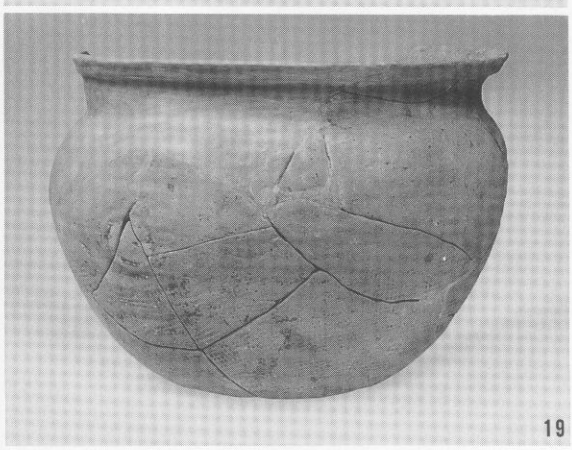

10


11


14

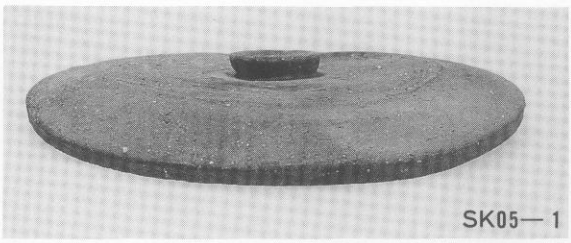

15


16


19


22

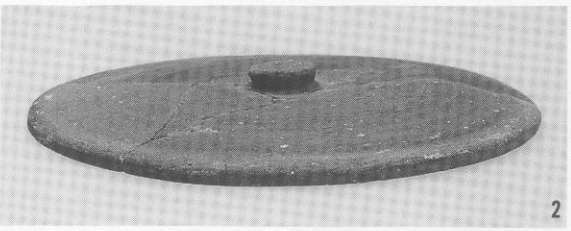
SK04出土土器


SK05—1

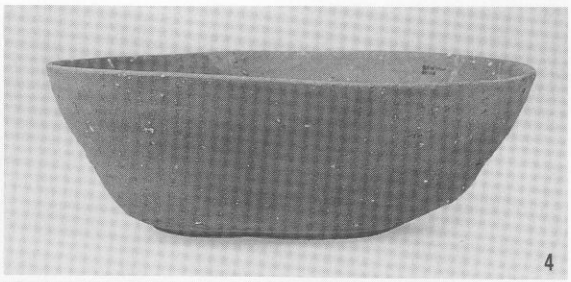

2


3

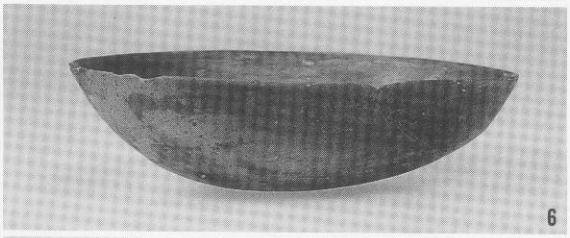

SK06—1

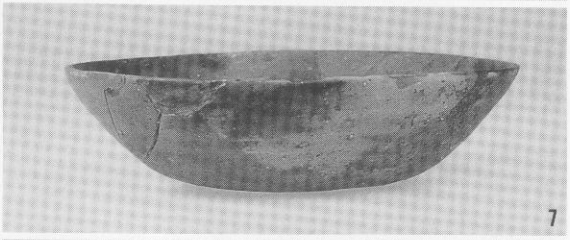

2


3

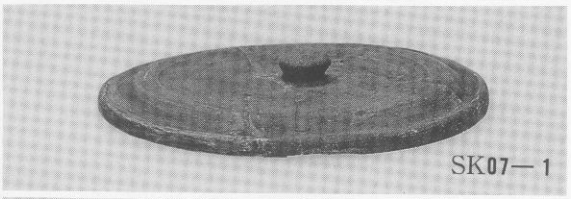

4

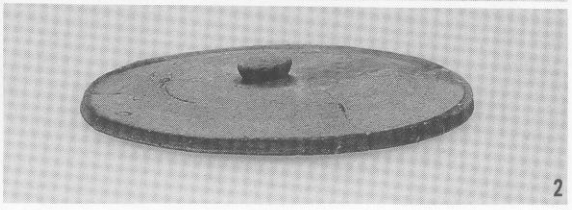

5


6

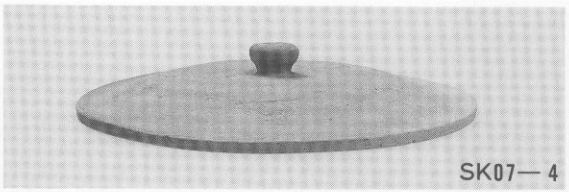

7

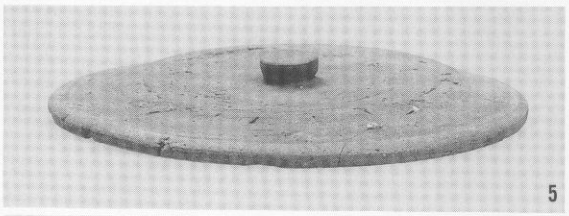

8

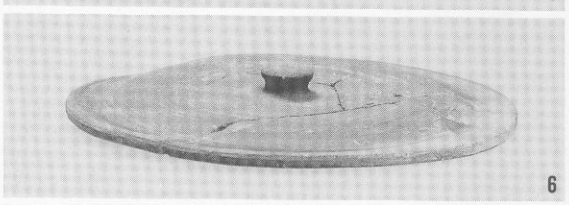

SK07—1

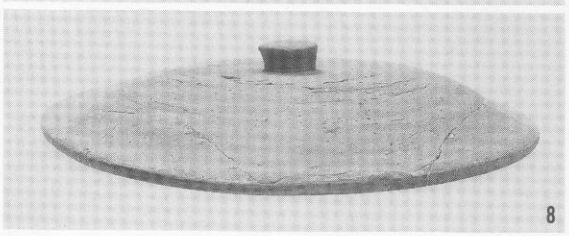

2

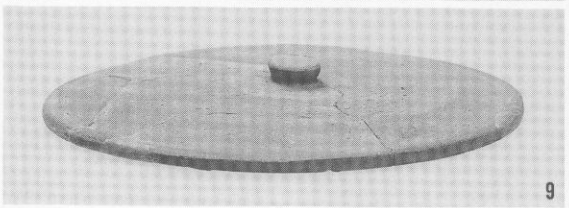
SK05・SK06・SK07出土土器

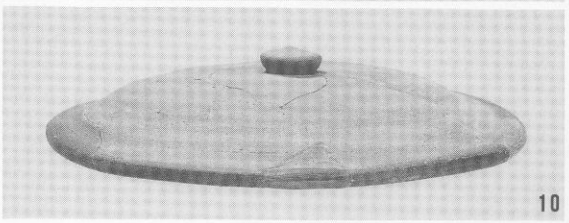

SK07— 4

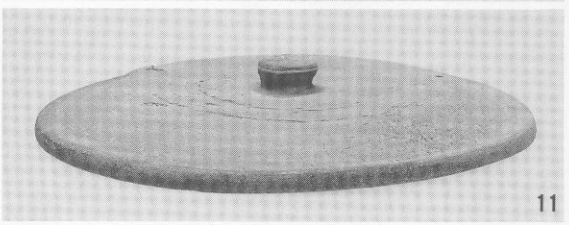

5

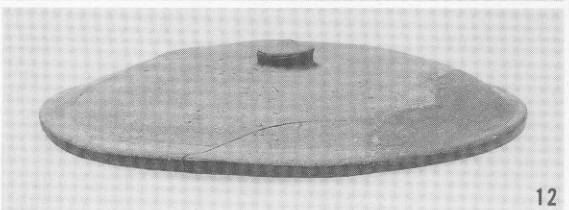

6

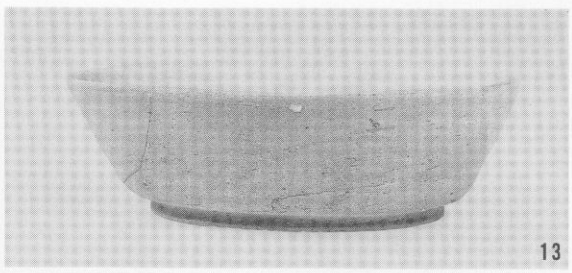

8


9

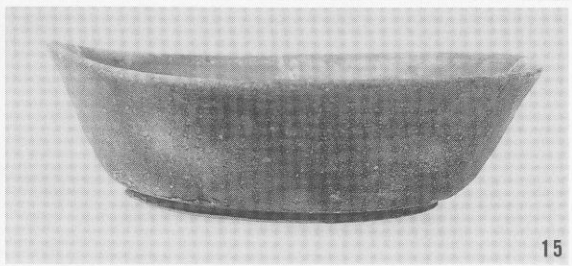

10


11


12


13


14


15

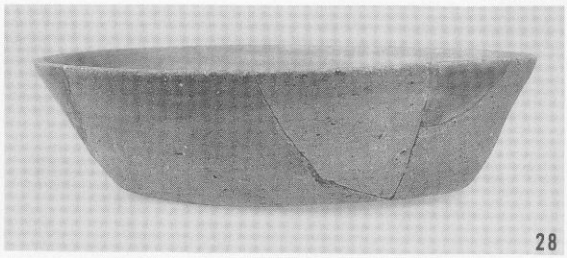

16


17

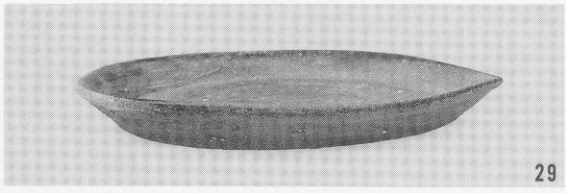

18

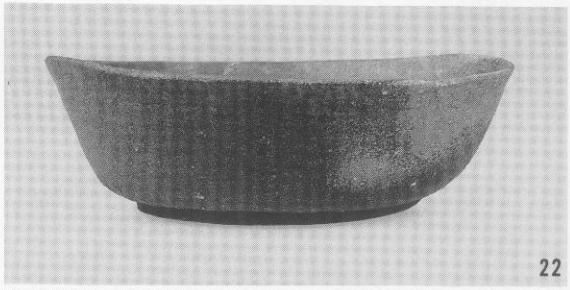
SK07出土土器

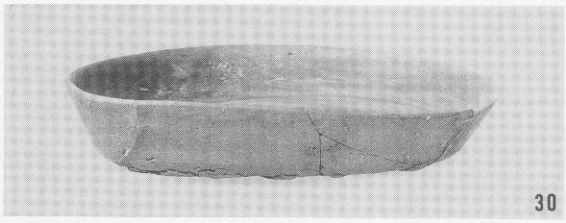

SK07—20

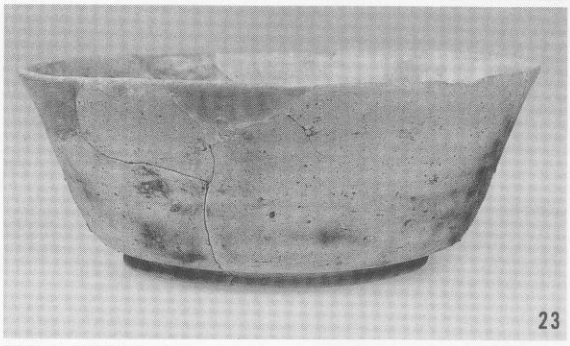

28

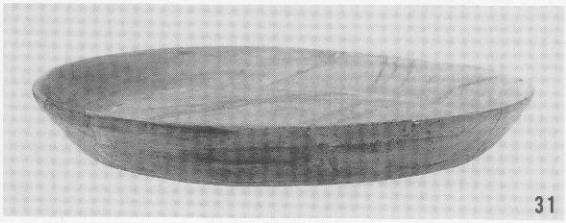

21

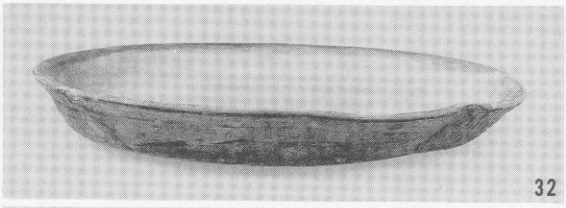

29

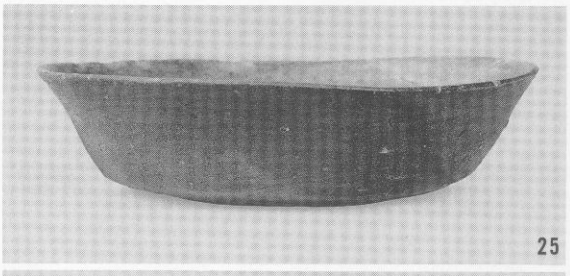

22

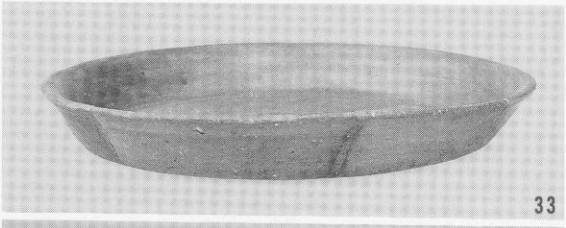

30

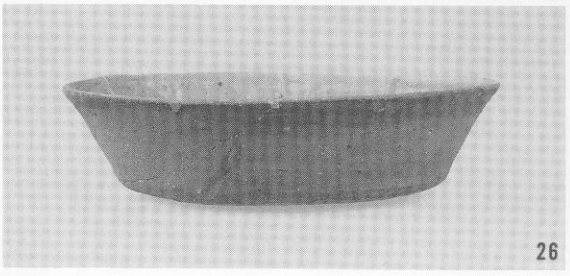

23


31


32


25

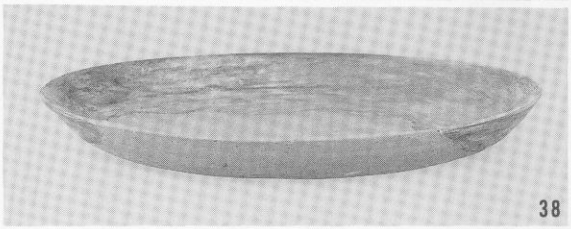

33

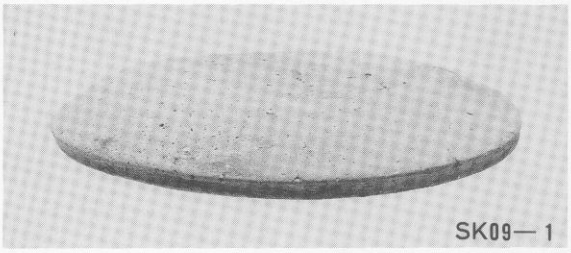

26

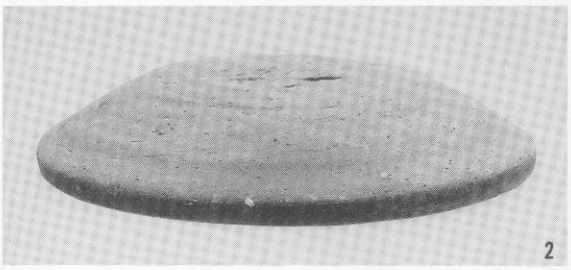

34

SK07出土土器


SK07—35

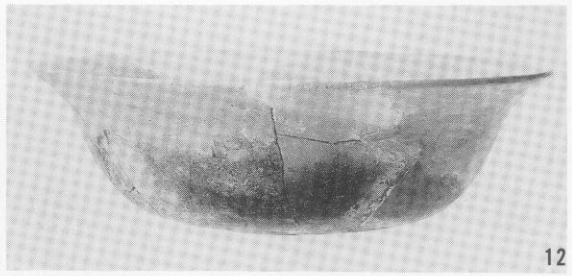

38

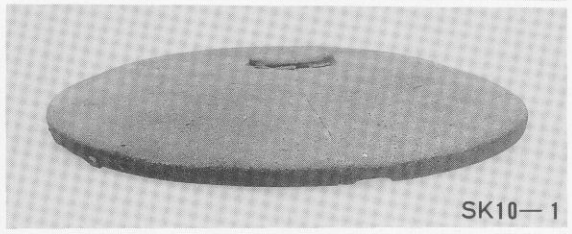

SK09— 1

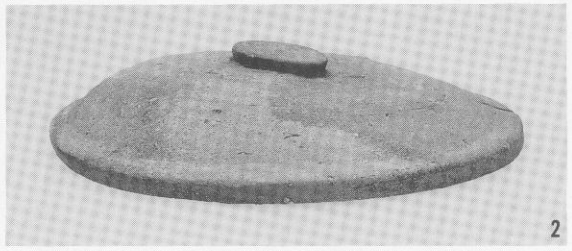

2

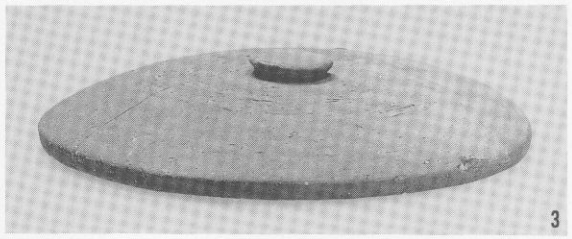

6

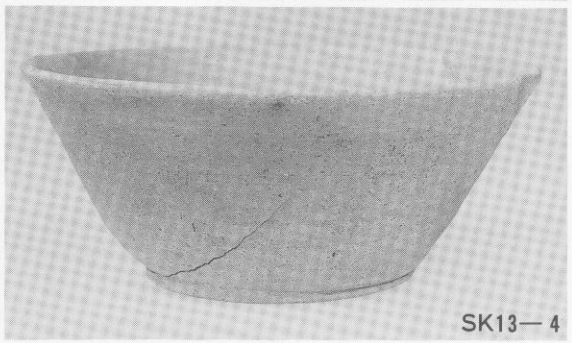

10


12


SK10— 1


2

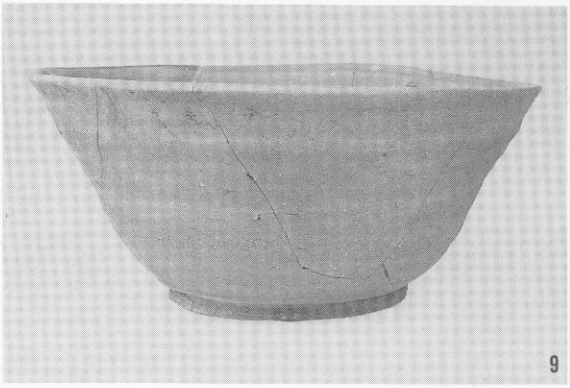

3


SK13— 4


6

SK07・SK09・SK10・SK13出土土器

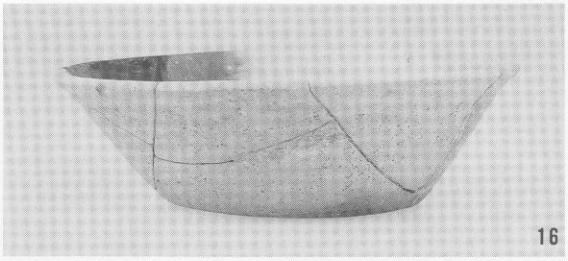

SK13—7

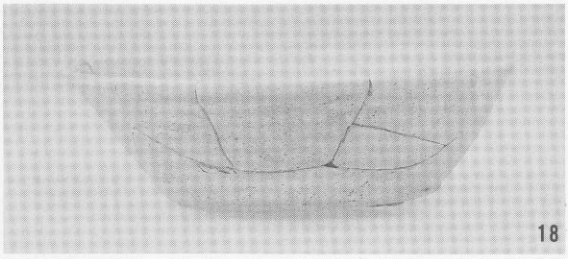

9

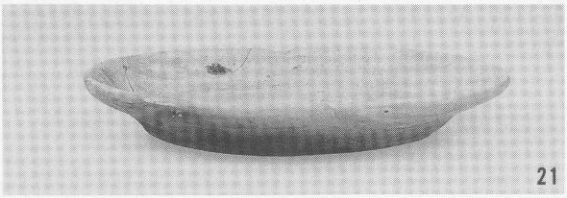

11

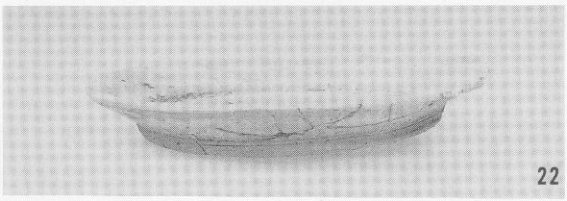

14

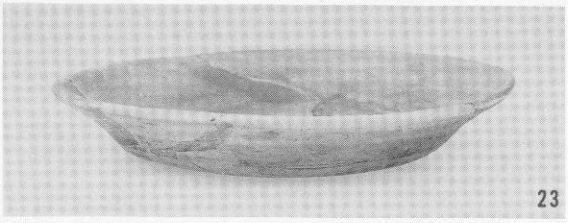

15


16

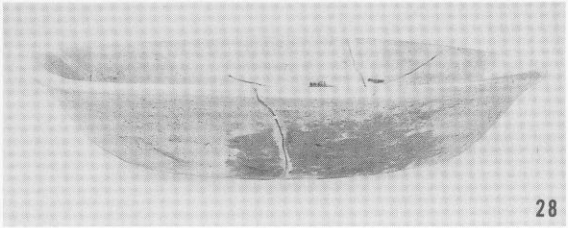

18


21


22

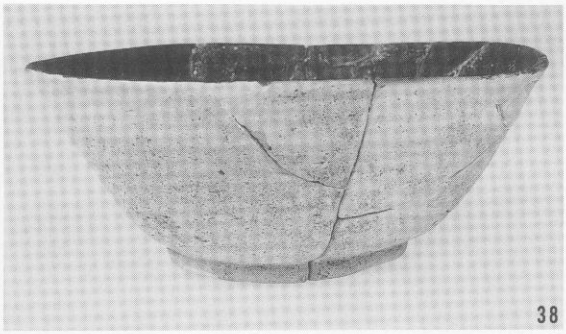

23


26

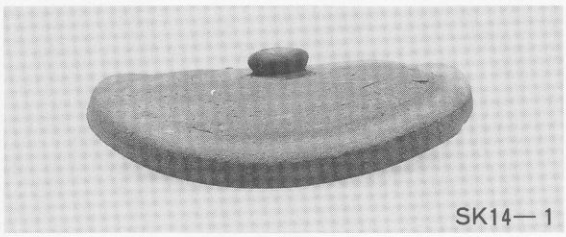

28

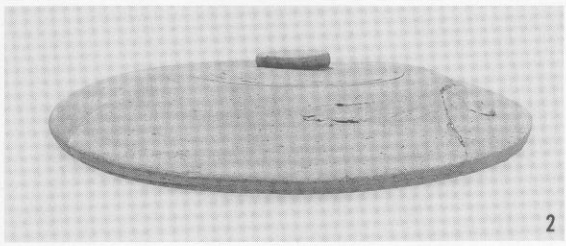
SK13出土土器

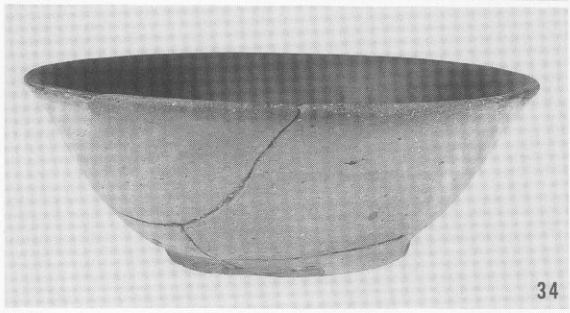

SK13—29

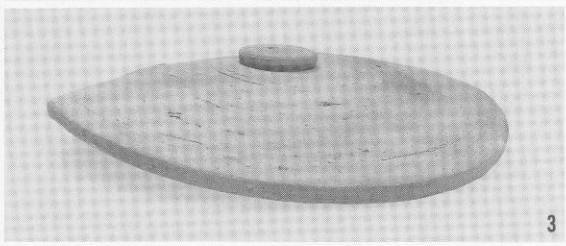

38


32

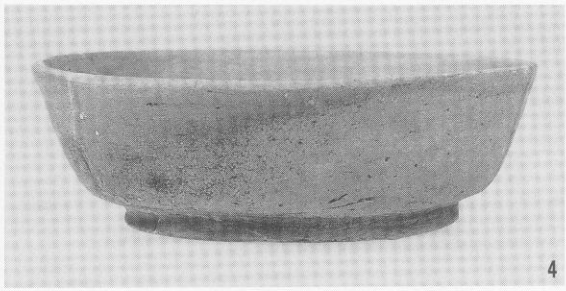

SK14— 1


2

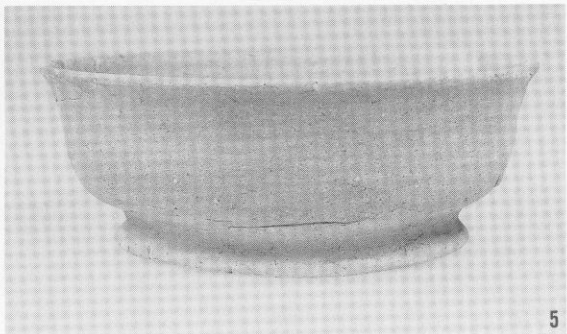

34


3

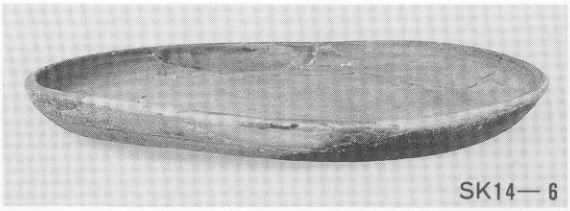

35

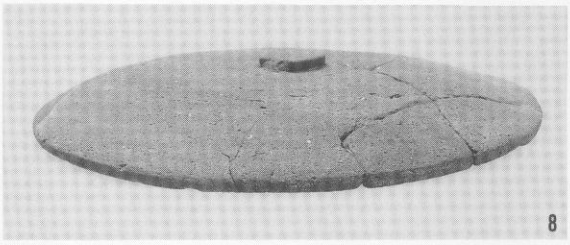

4

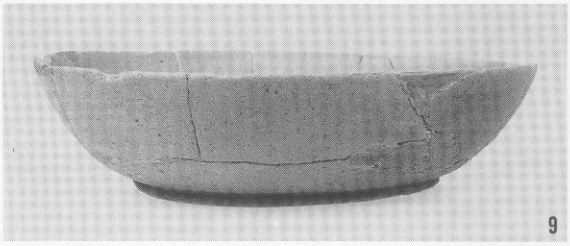

36

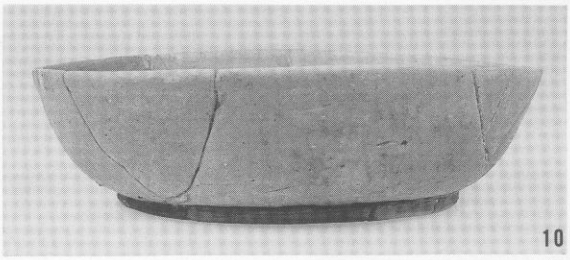

5

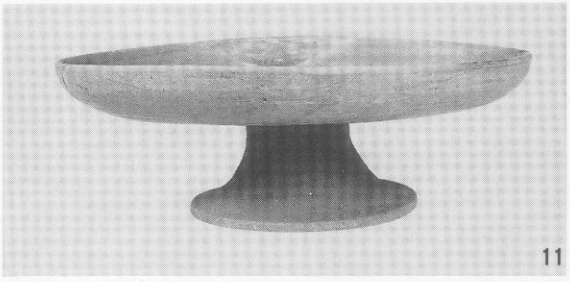
SK13・SK14出土土器

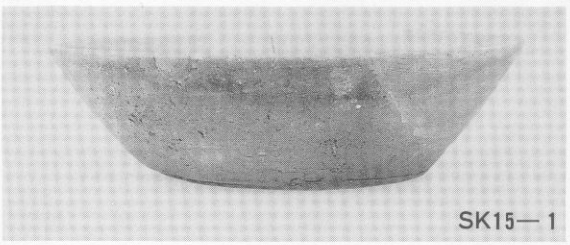

SK14— 6

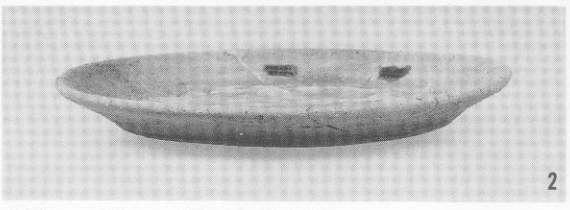

8


9

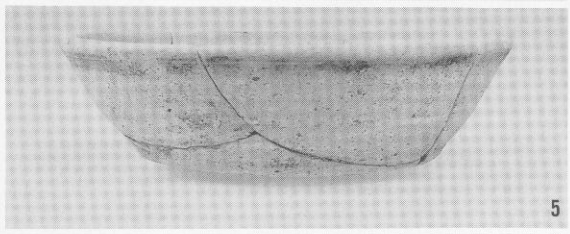

10


11

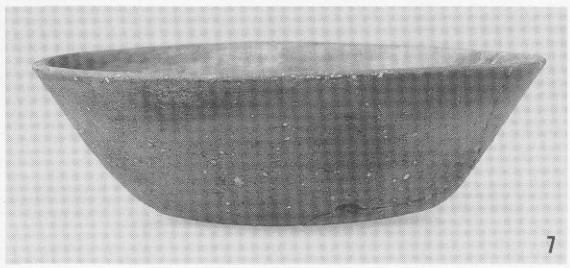

SK15— 1

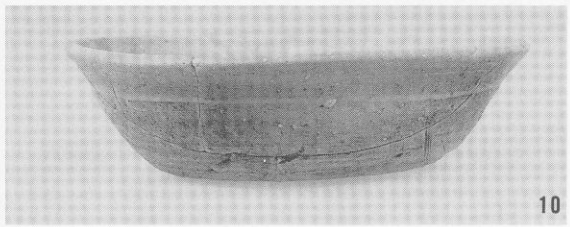

2

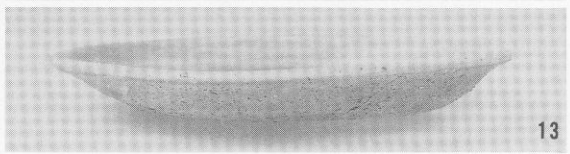

SK16— 4


5


6

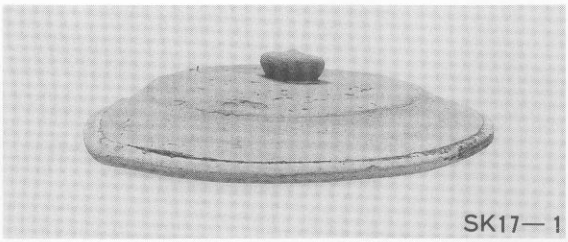

7

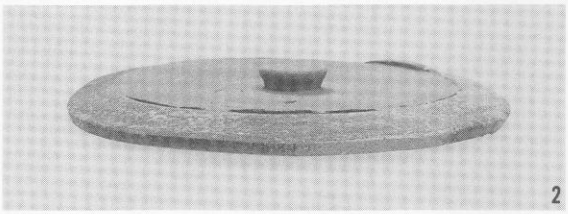

10

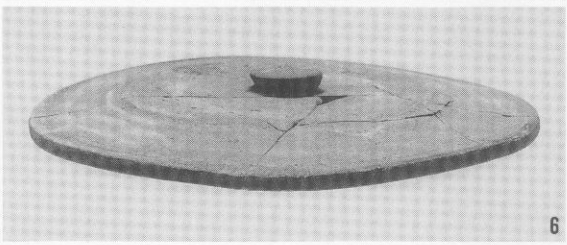

13

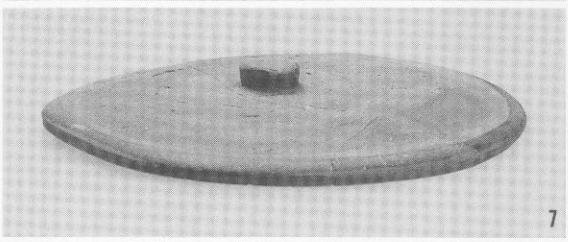

15

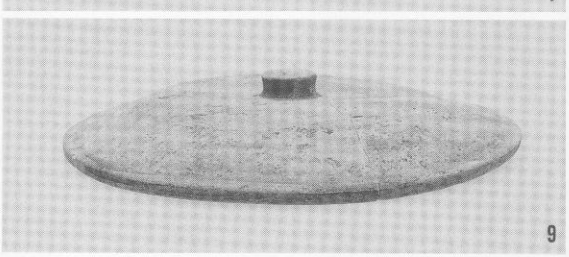
SK14・SK15・SK16出土土器

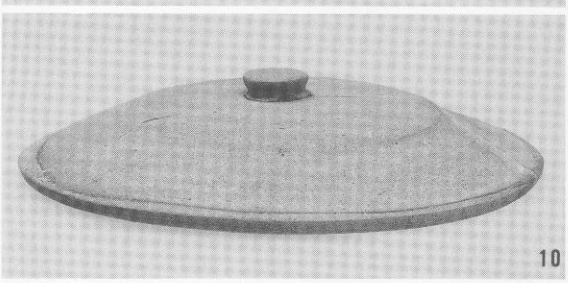

SK17— 1

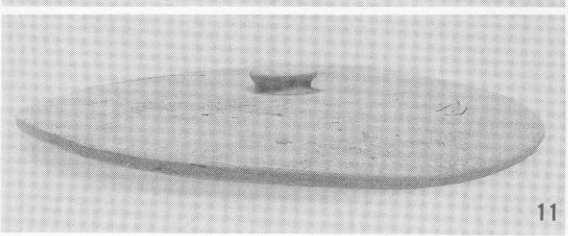

2

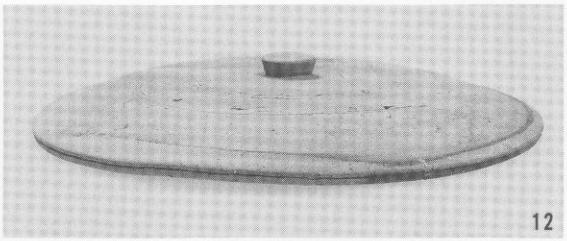

6

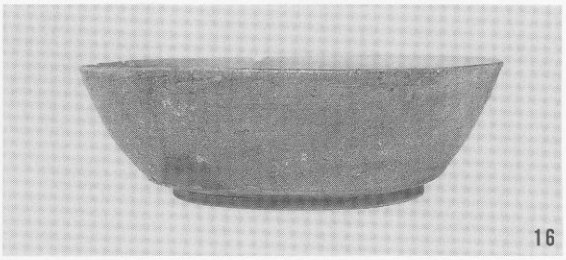

7

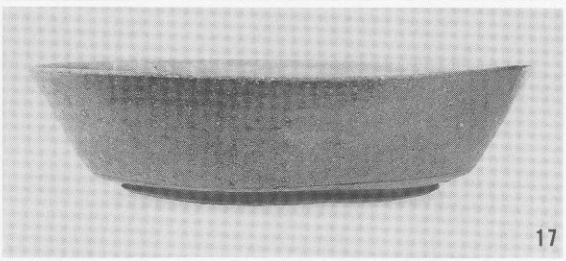

9

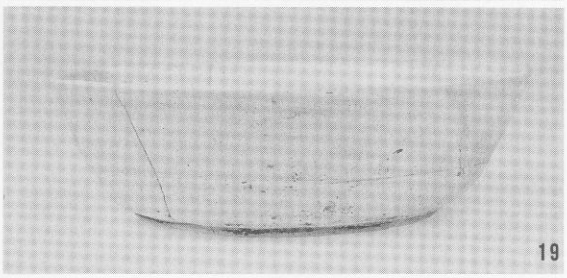

10


11


12


16

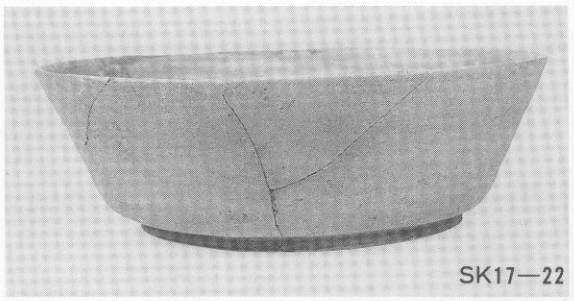

17

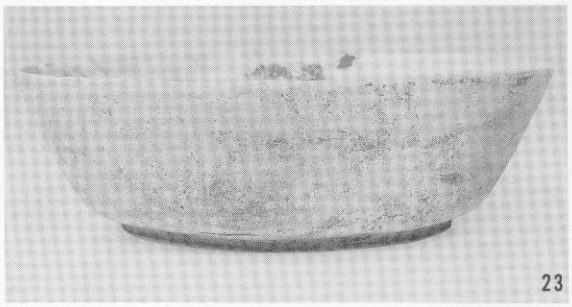

19

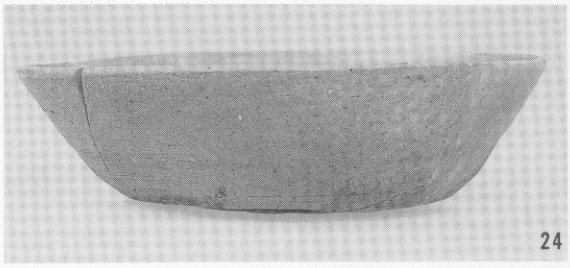

20

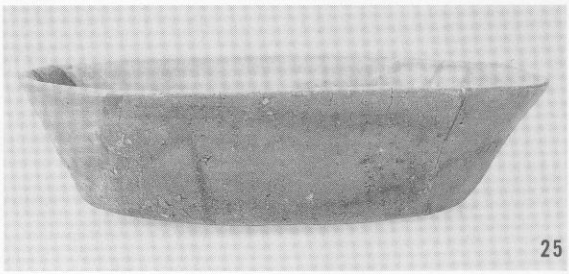

21

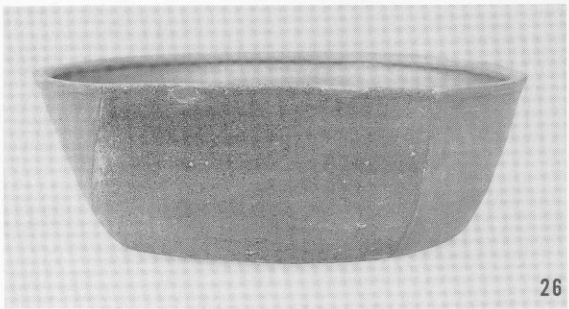
SK17出土土器

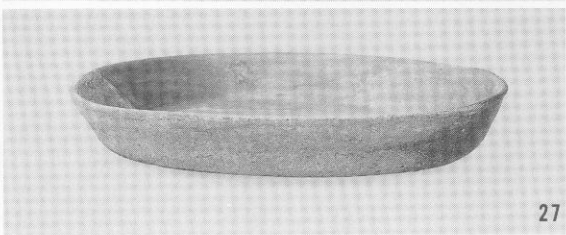

SK17—22

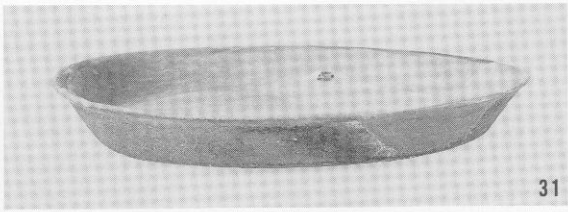

23

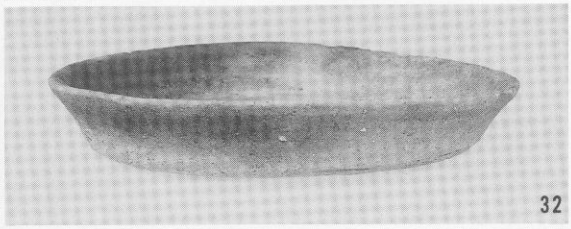

24

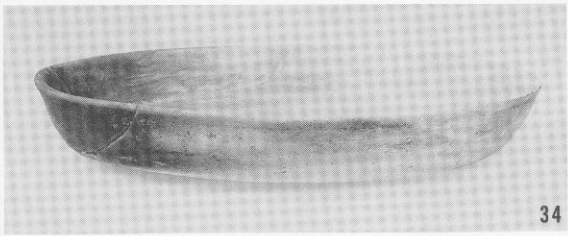

25

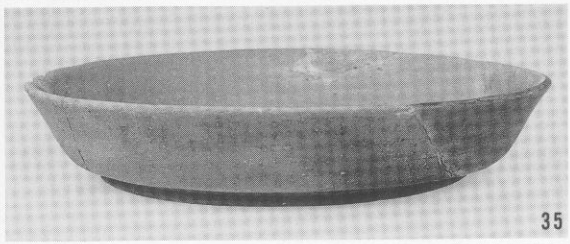

26


27


31


32

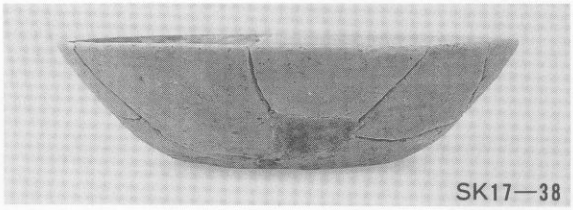

34

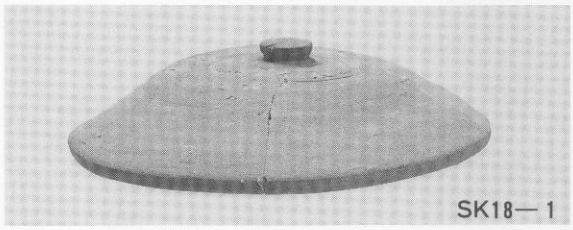

35

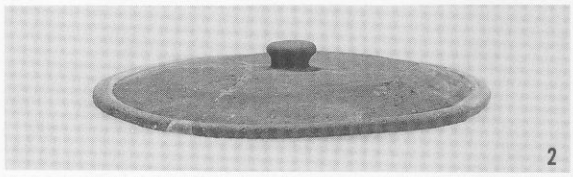

36

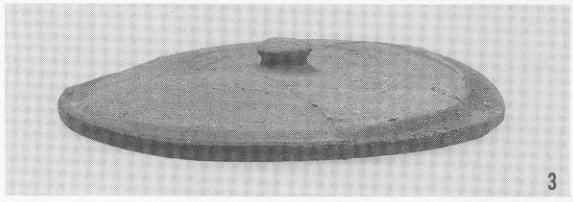

37

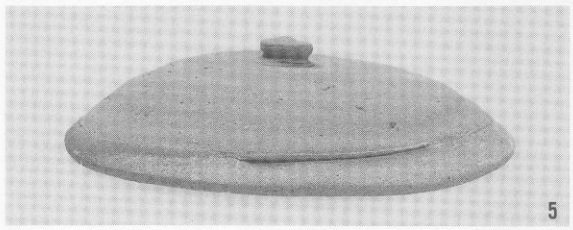
SK17出土土器

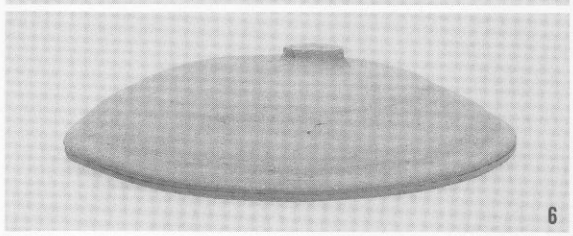

SK17—38

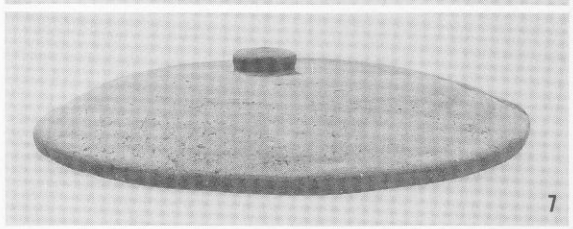

SK18— 1

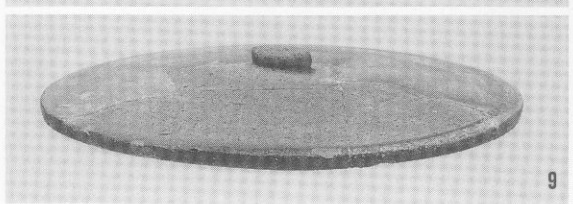

2

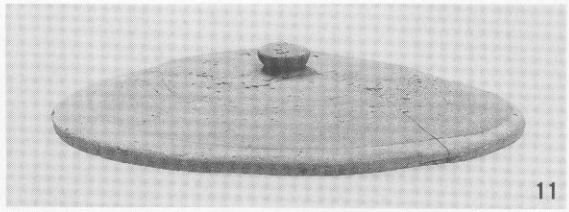

3

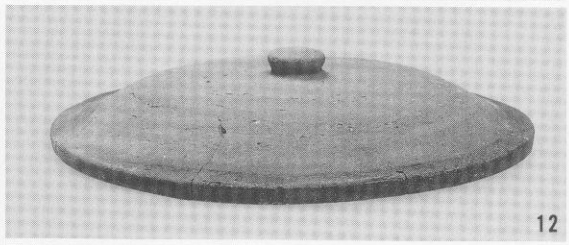

5

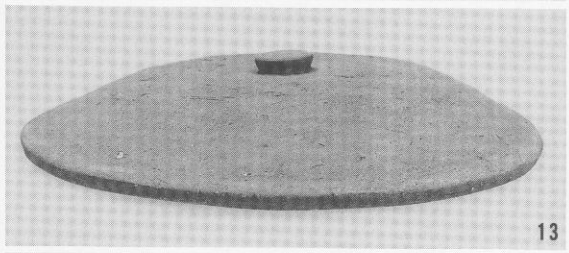

6

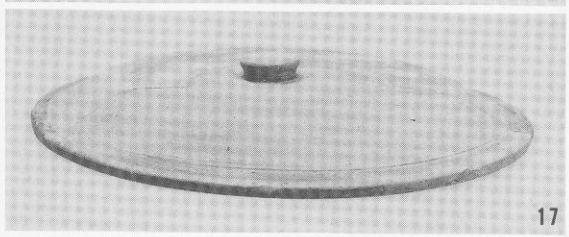

7

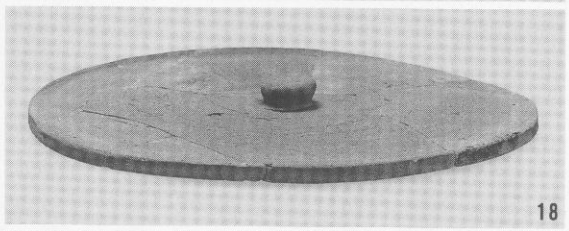

9

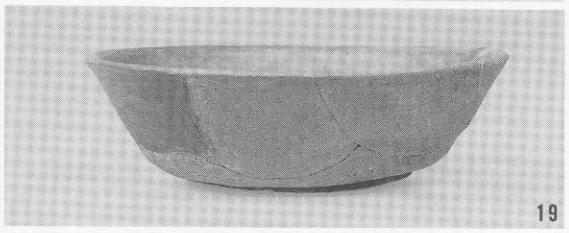

11

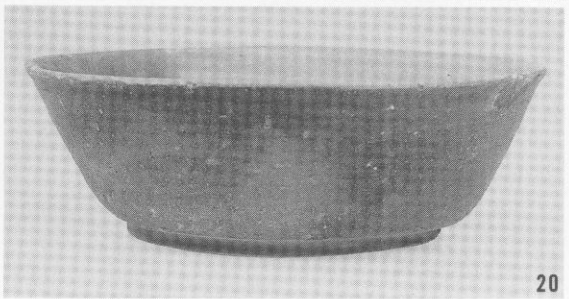

12


13

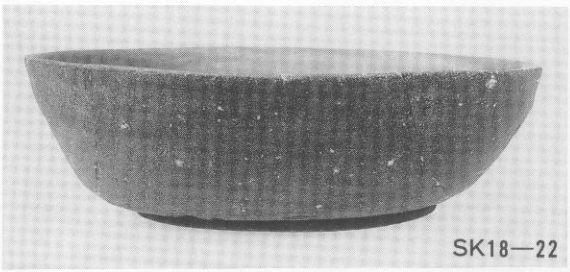

17

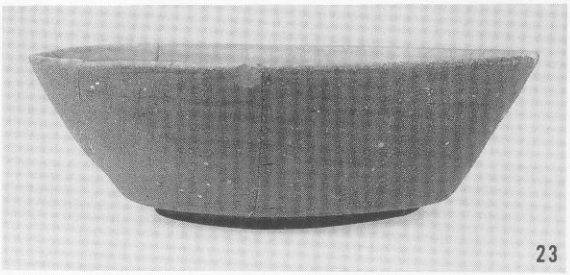

18

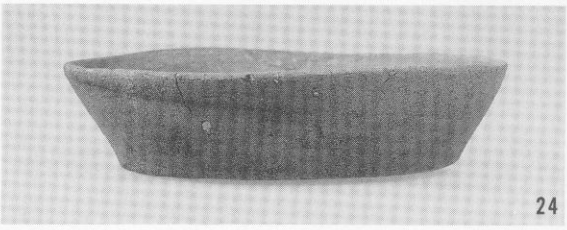

19

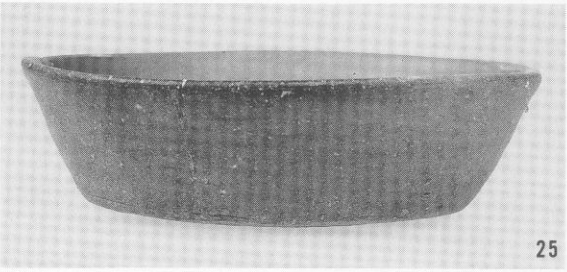

20

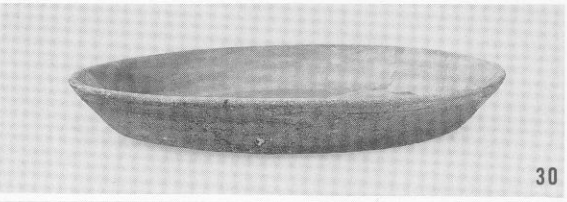
SK17・SK18出土土器

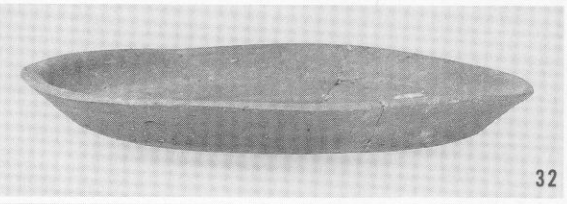

SK18—22

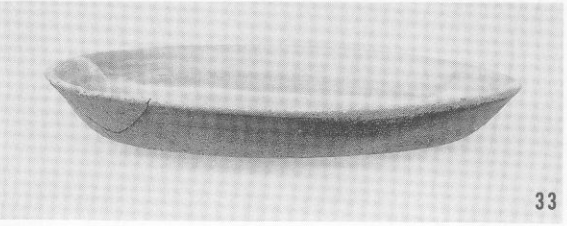

23

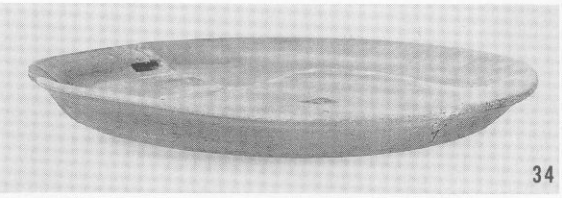

24

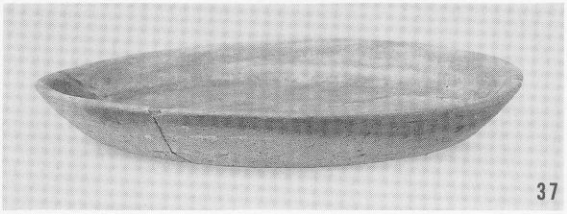

25

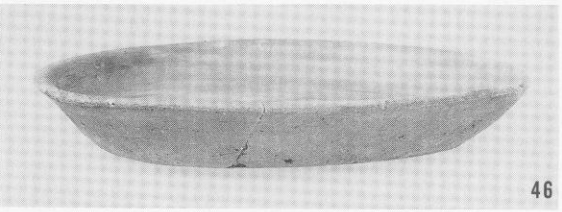

30

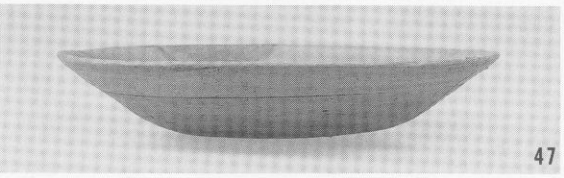

32

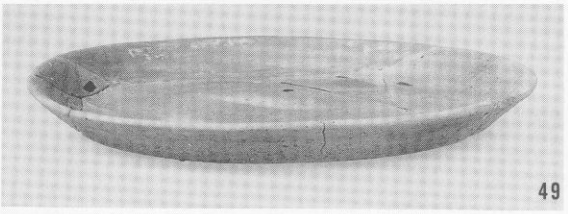

33

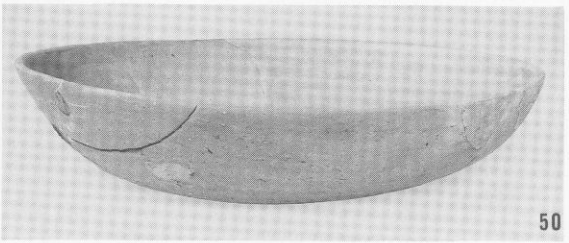

34

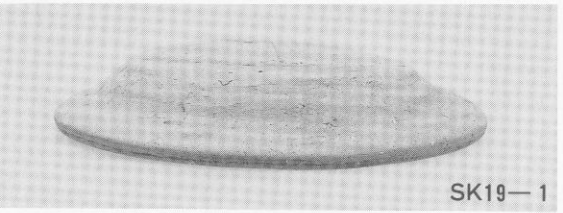

37


46


47


49

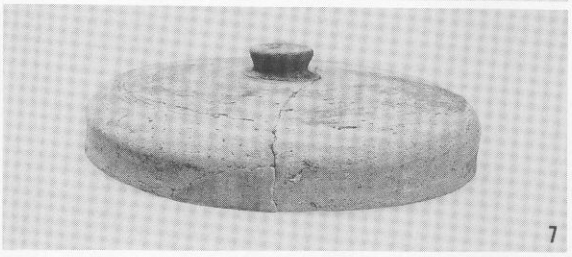

50


SK19— 1


2

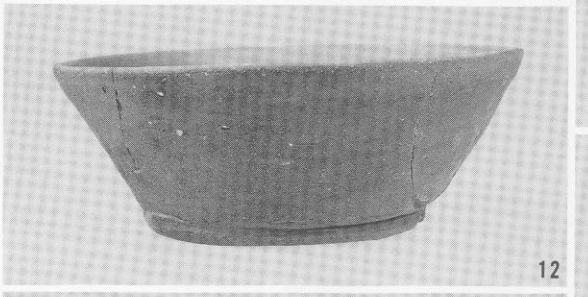
SK18・SK19出土土器

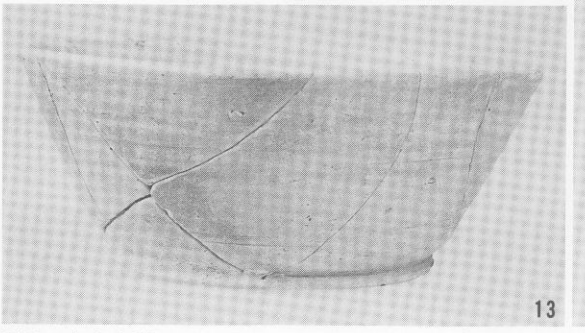

SK19— 6


7


8


11

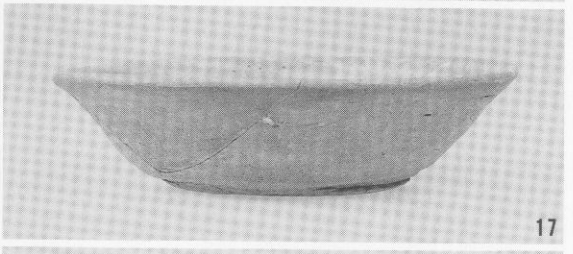

12

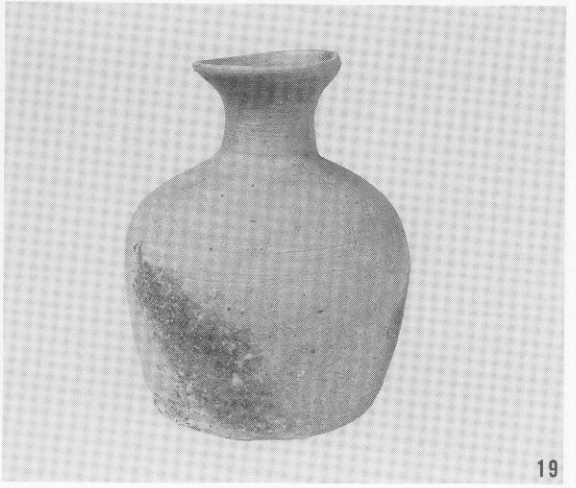

13


14

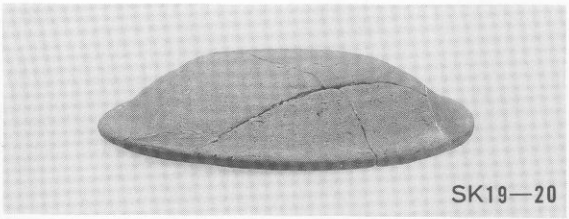

15

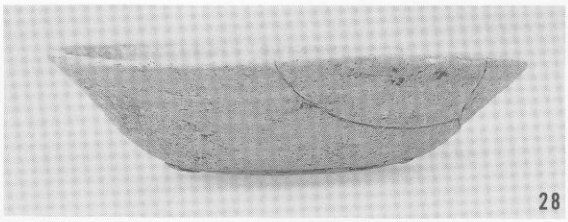

16

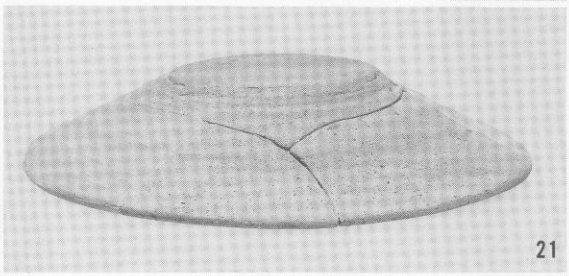

17

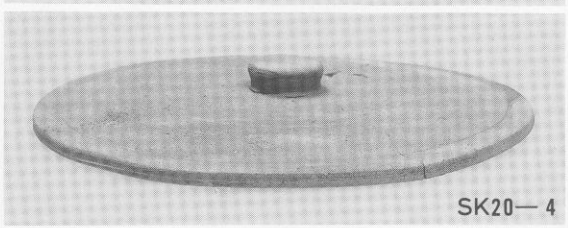

19

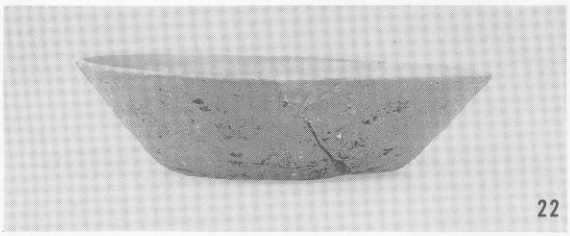
SK19出土土器

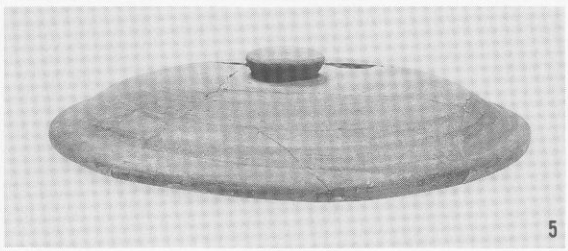

SK19—20


28

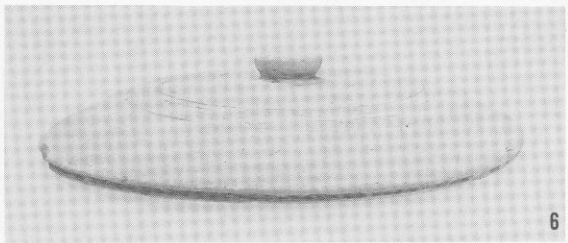

21


SK20— 4

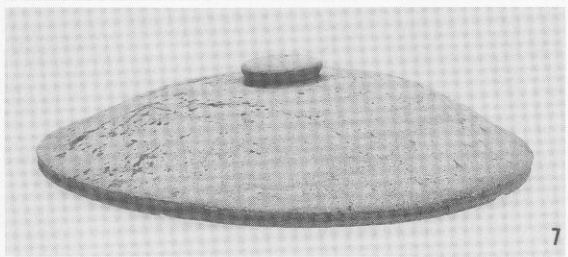

22


5

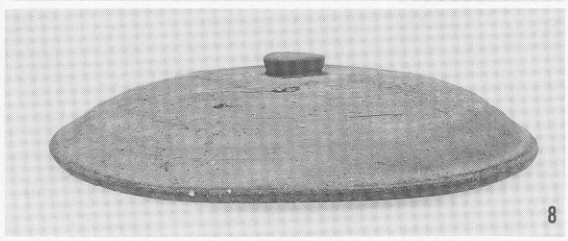

23

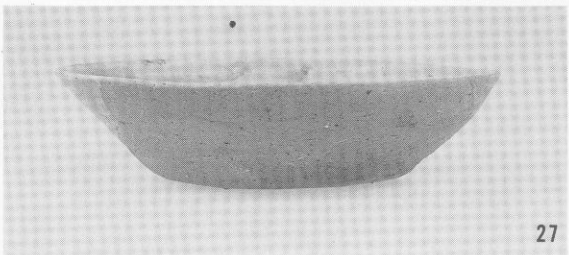

6

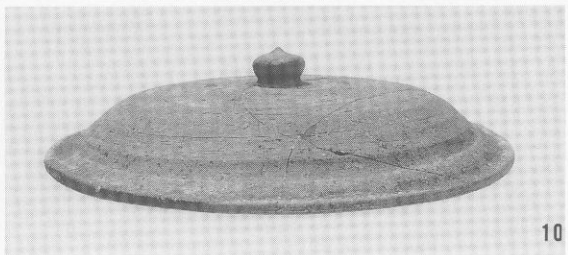

25


7

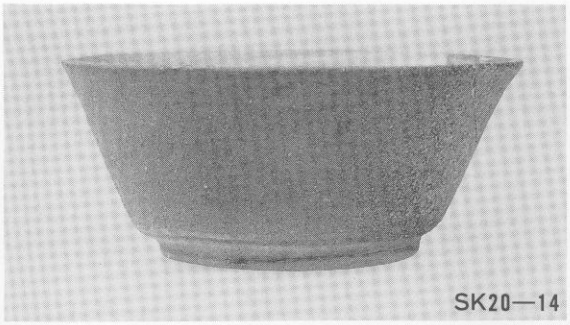

26

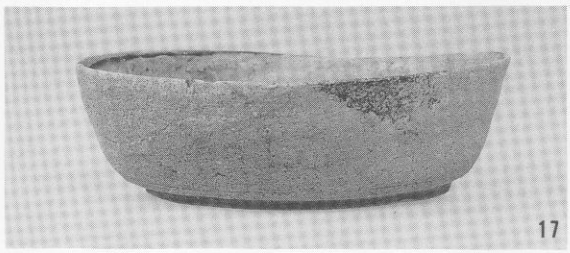

8


27


10

SK19・SK20出土土器


SK20—14

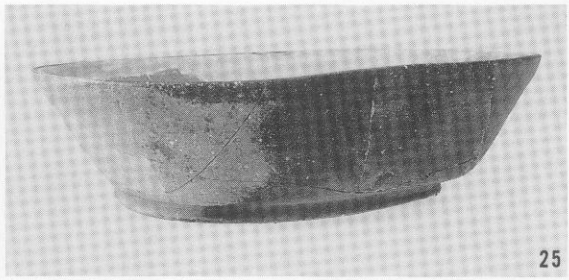

17

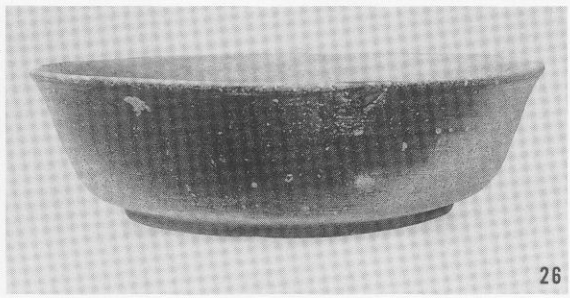

18

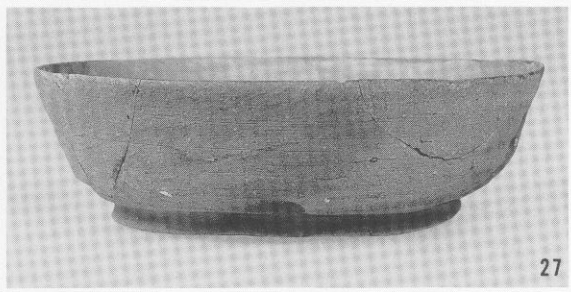

19

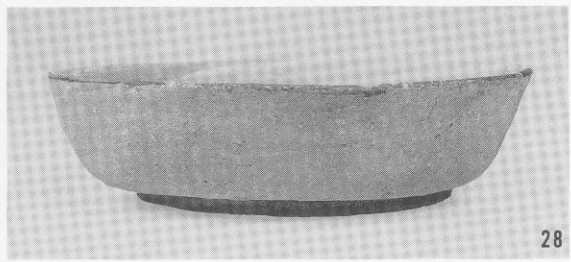

22

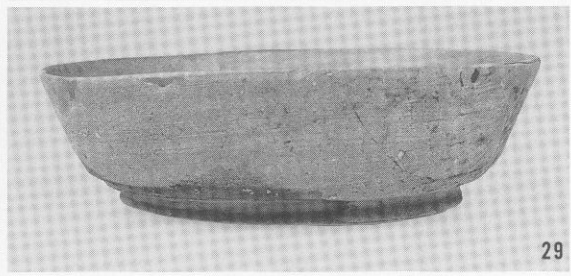

23

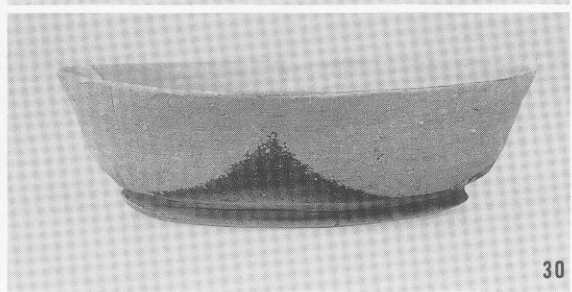

25


26

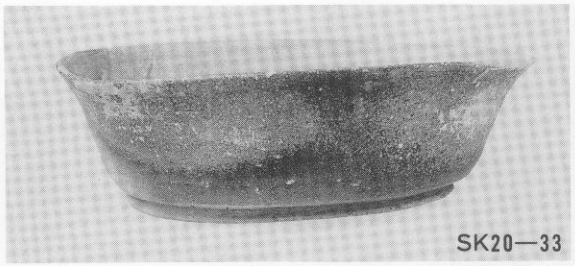

27

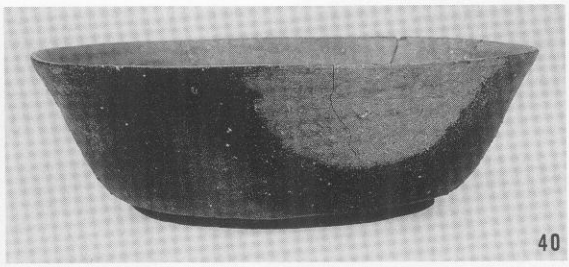

28

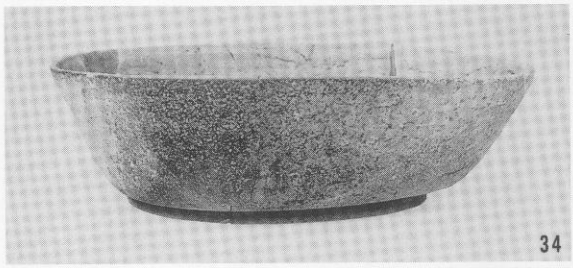

29


30

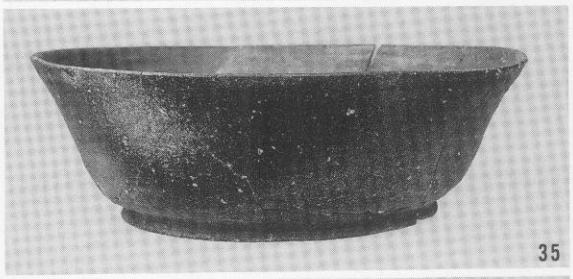
SK20出土土器


SK20—33


40

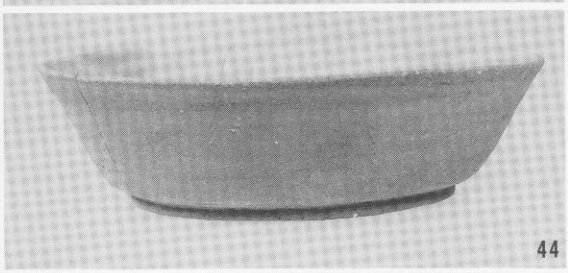

34


41


35

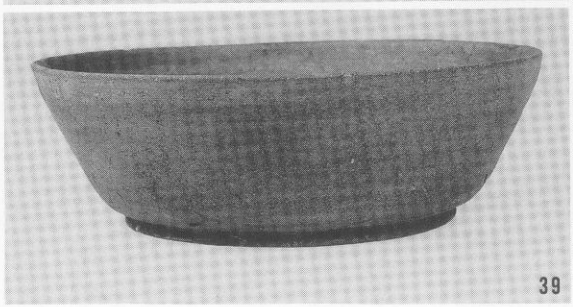

42

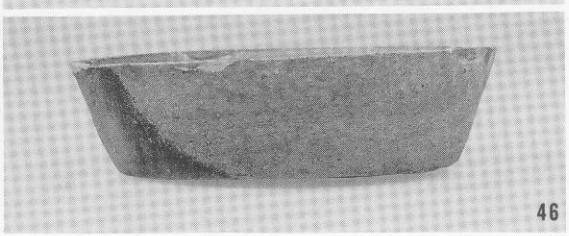

36


44

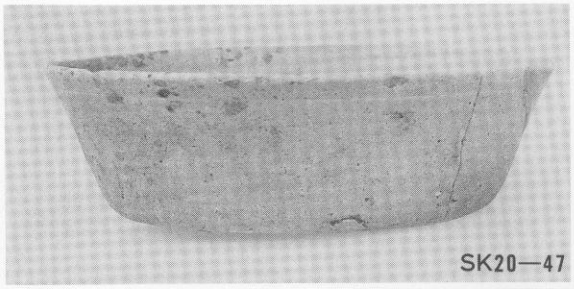

37

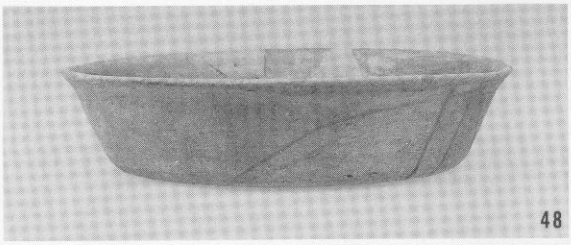

45

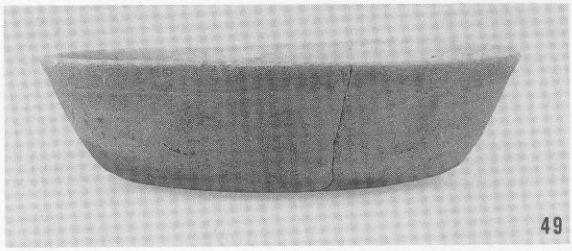

39


46

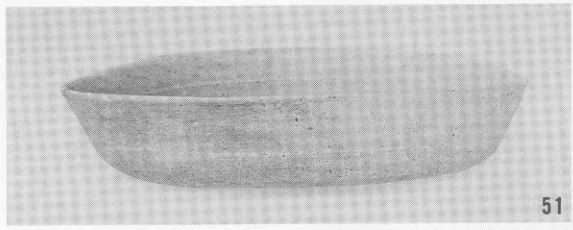
SK20出土土器

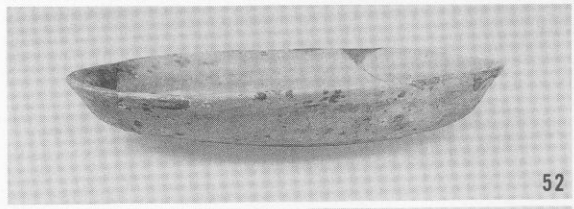

SK20—47

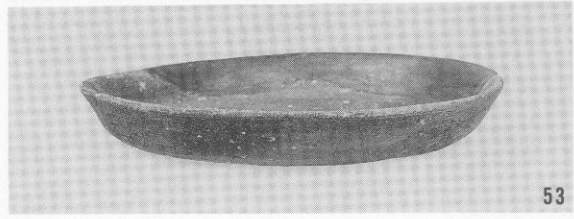

48


49

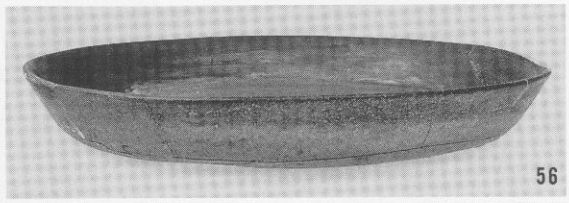

50

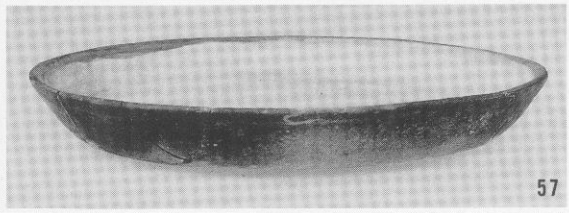

51

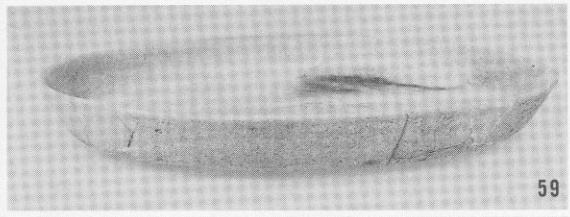

52

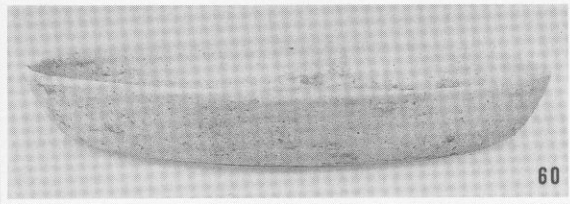

53

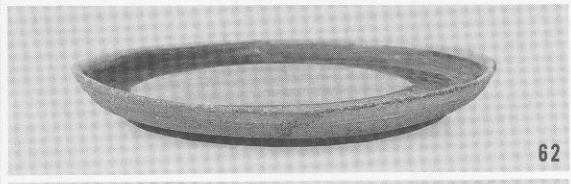

54

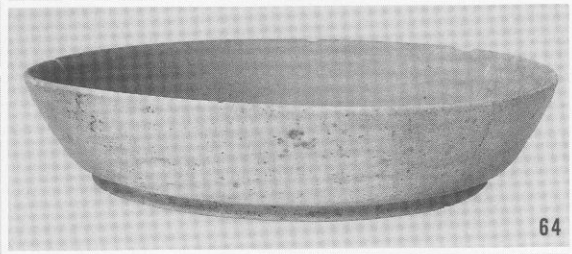

56

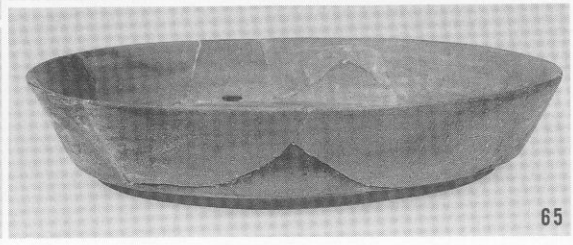

57


59


60

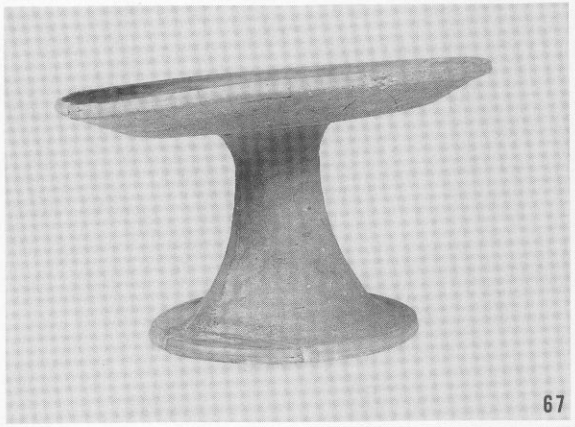

62


64


65

SK20出土土器


SK20—66


67


68


69


71


73

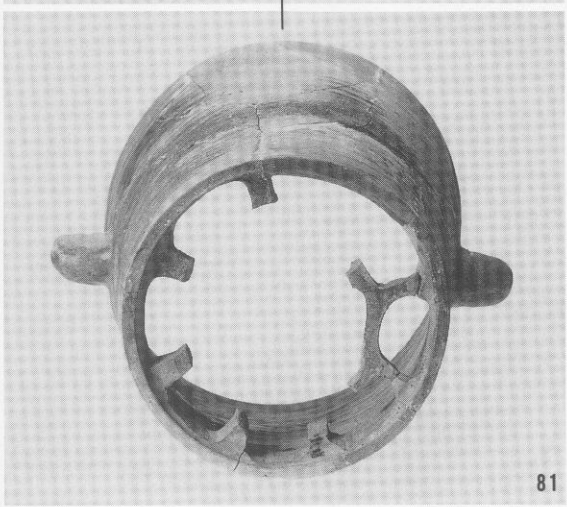

74

SK20出土土器

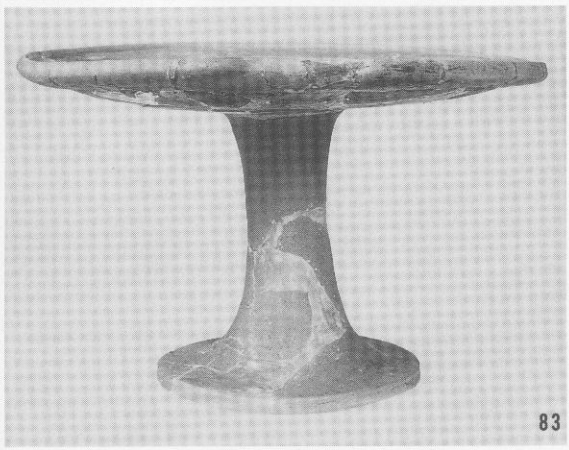

SK20—75




76


81


77


83


79


SK21—3

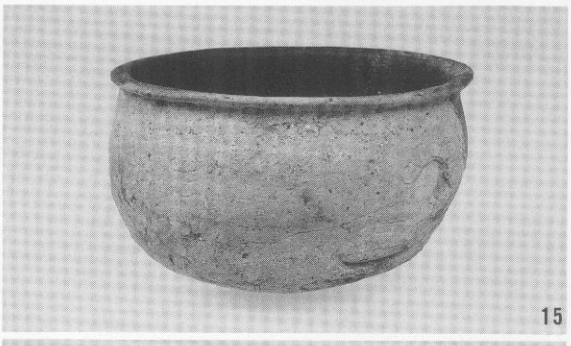
SK20・SK21出土土器

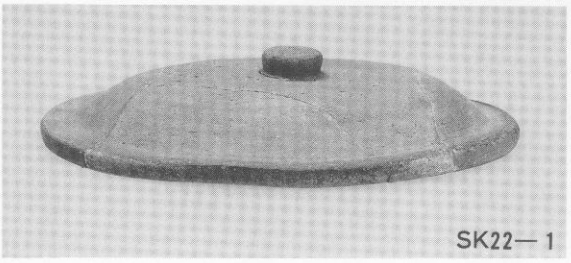

SK21— 6

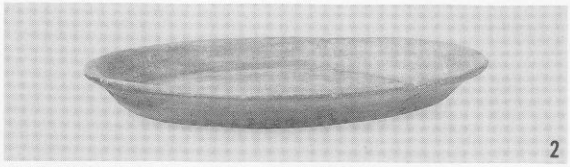

7

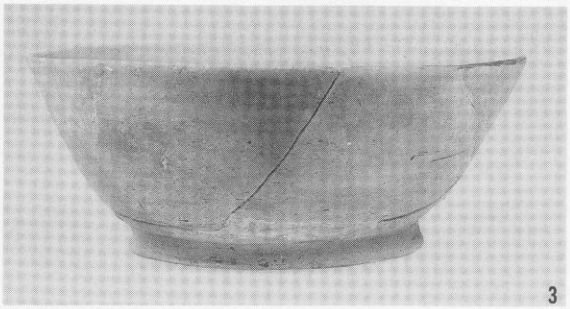

8

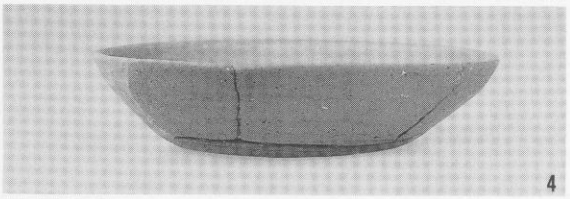

12

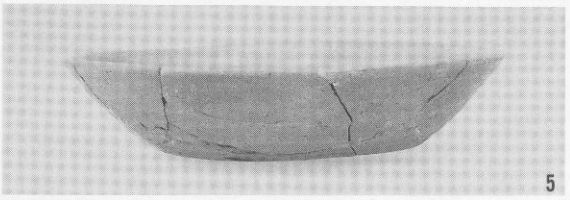

15

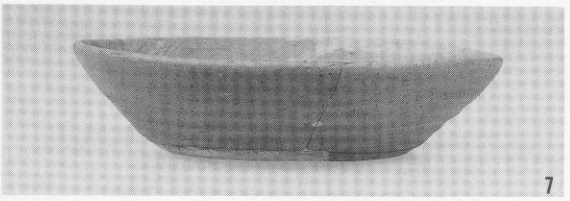

SK22— 1

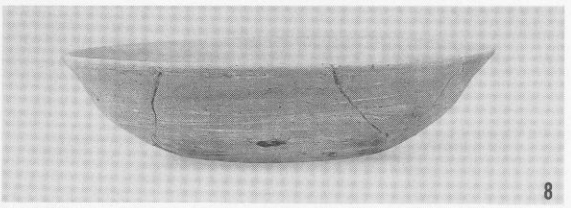

2

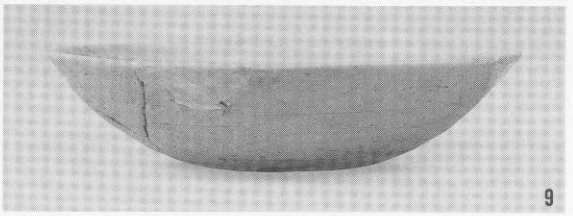

3


4


5


7

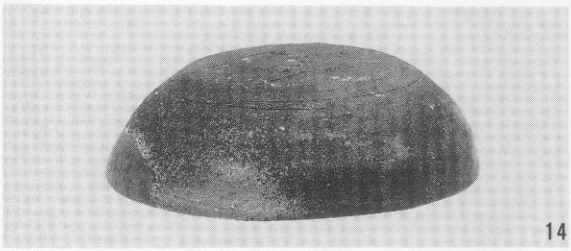

8


9

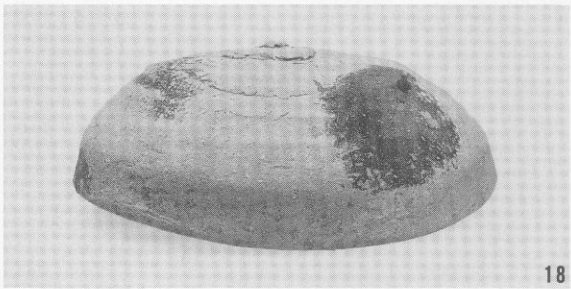

11

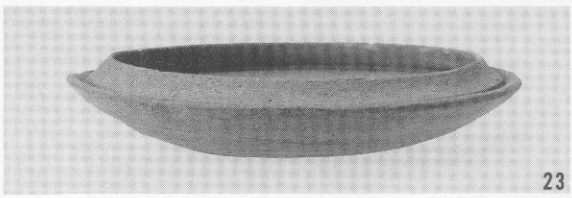
SK21・SK22出土土器

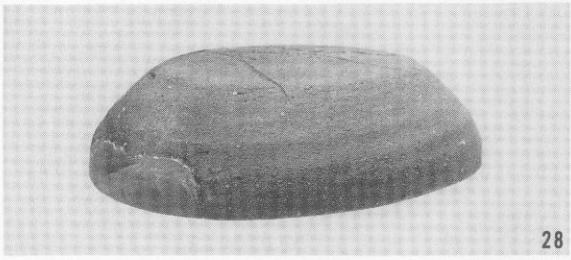

溝— 6

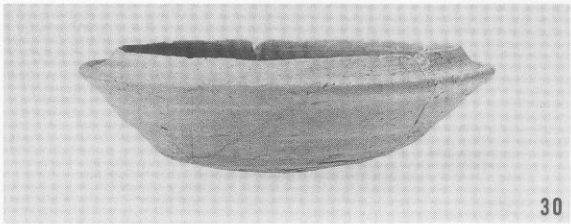

14


15


18

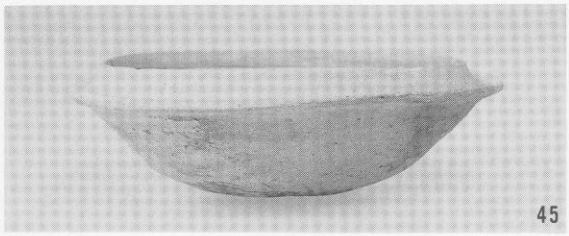

23

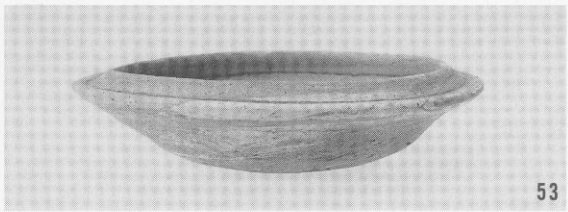

28


30


42


44

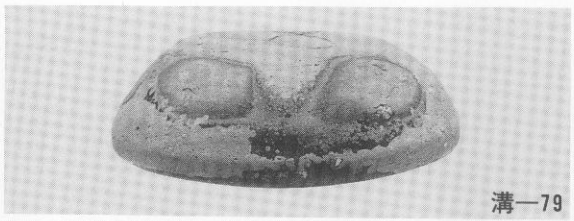

45


53


65

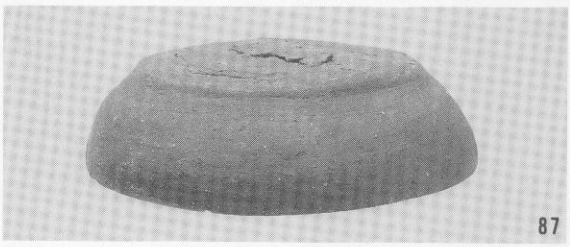

74

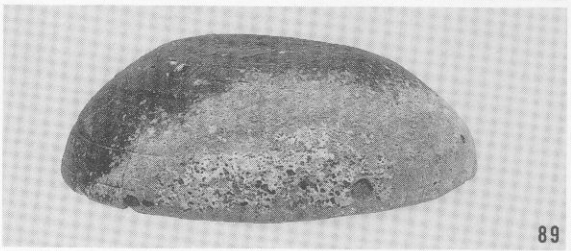
大溝出土土器

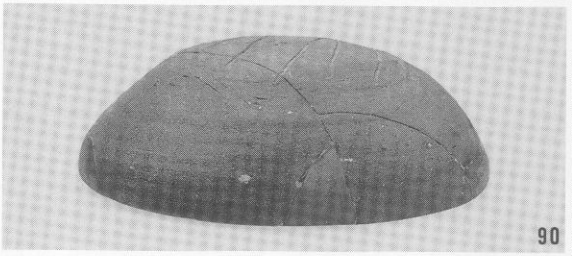

溝—79


81


85

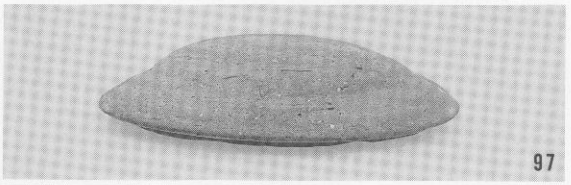

87

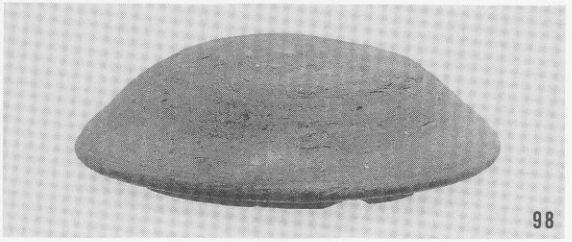

89

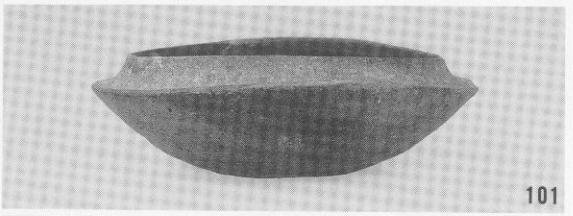

90

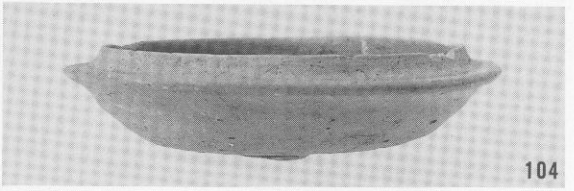

91

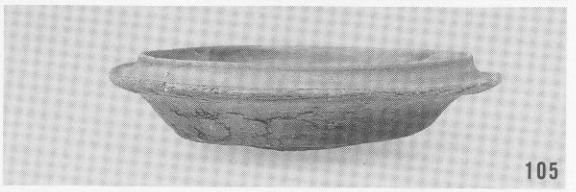

95

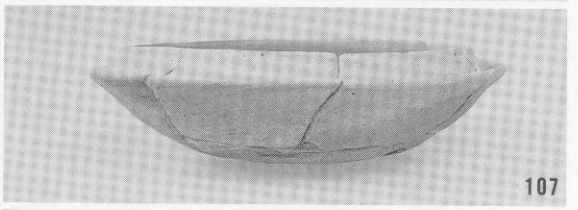

97


98


101

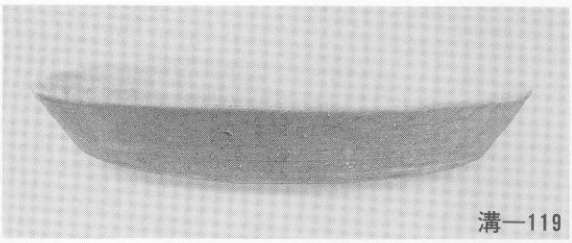

104


105


107


117

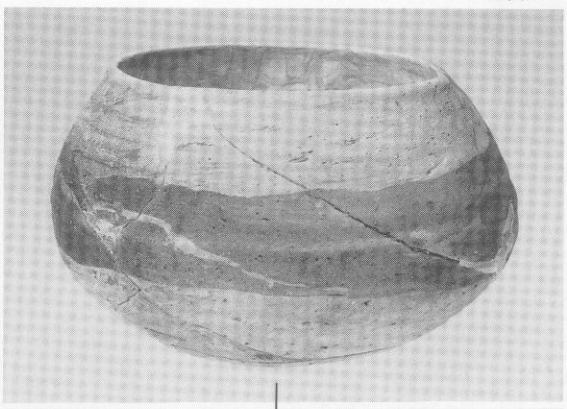
大溝出土土器


溝—119

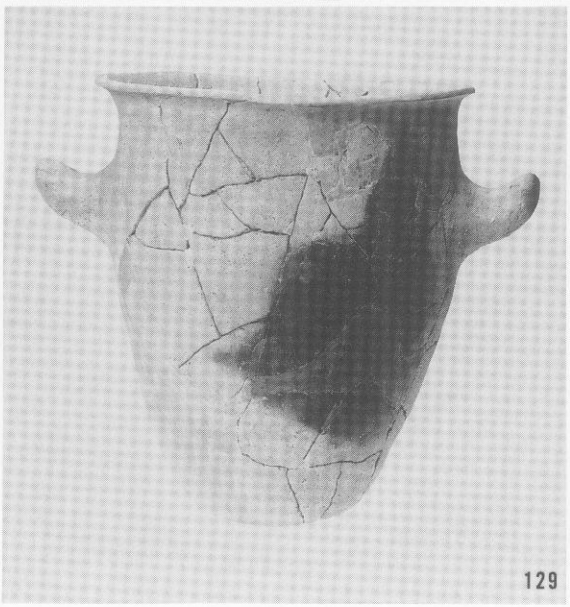

122


124

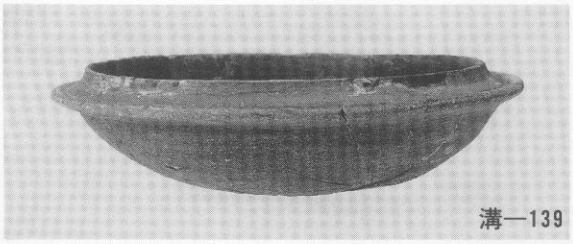

125

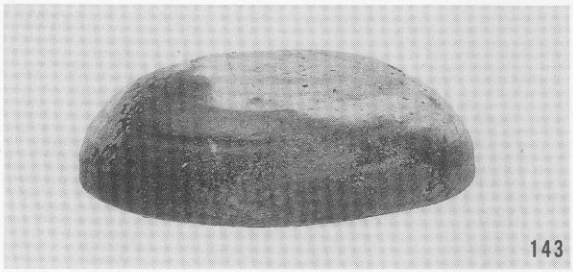



126

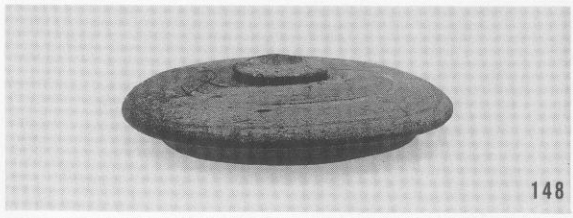

129

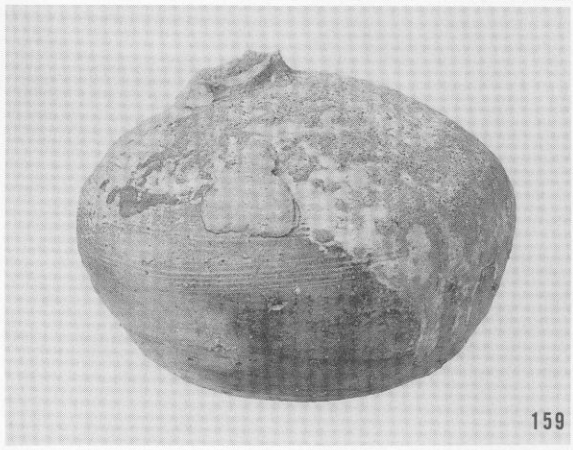
大溝出土土器

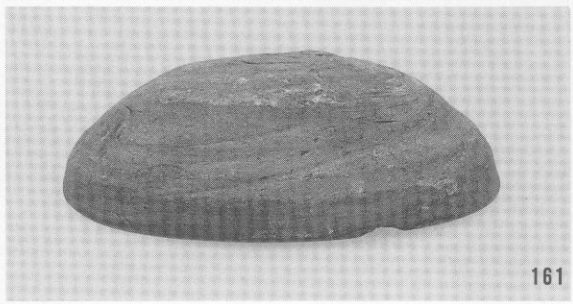

溝—139

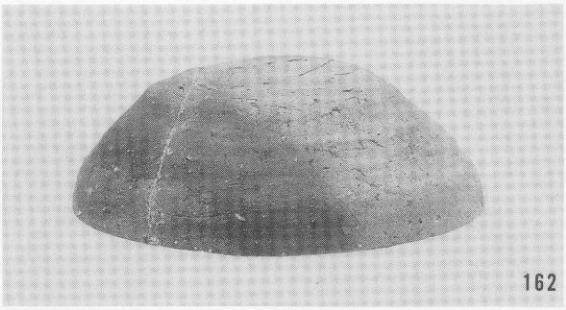

143

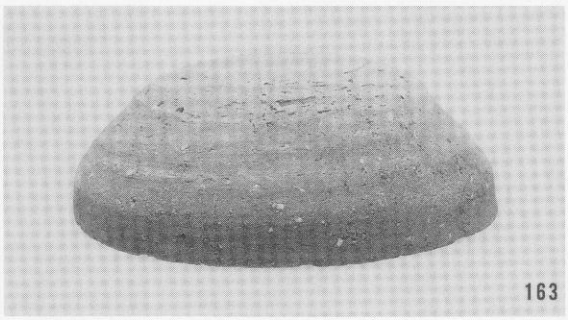

147

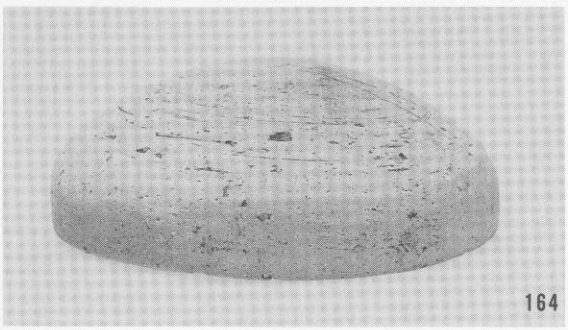

148

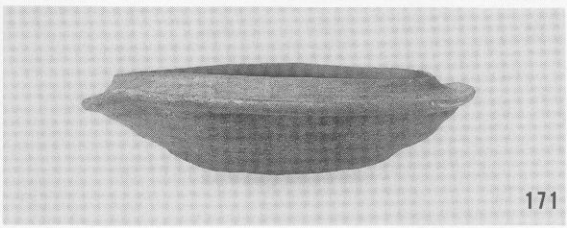

159


161


162


163


164

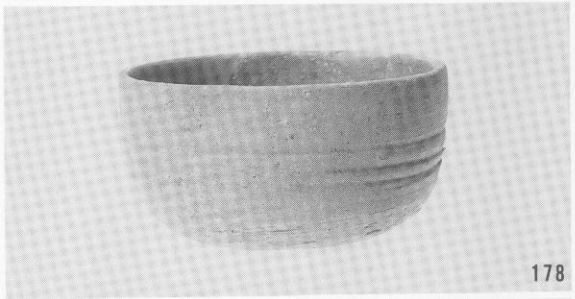

171

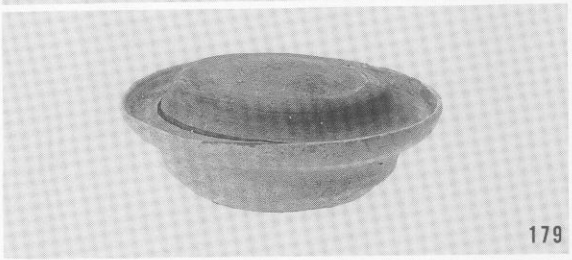

174

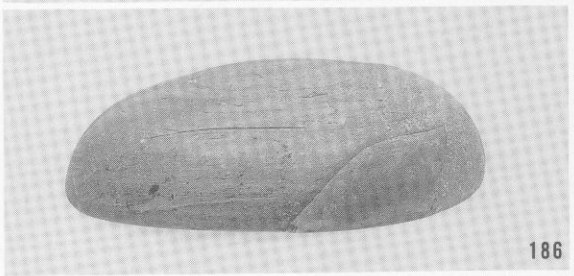

176

大溝出土土器


溝—177


178


179

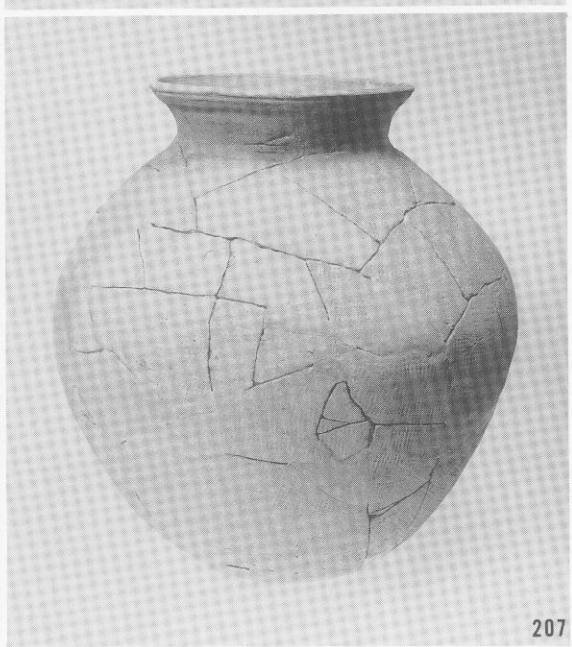

186


188


196

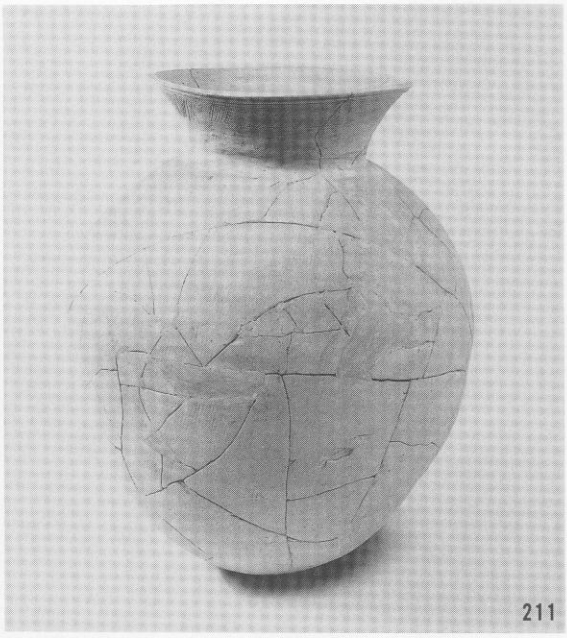

197


201

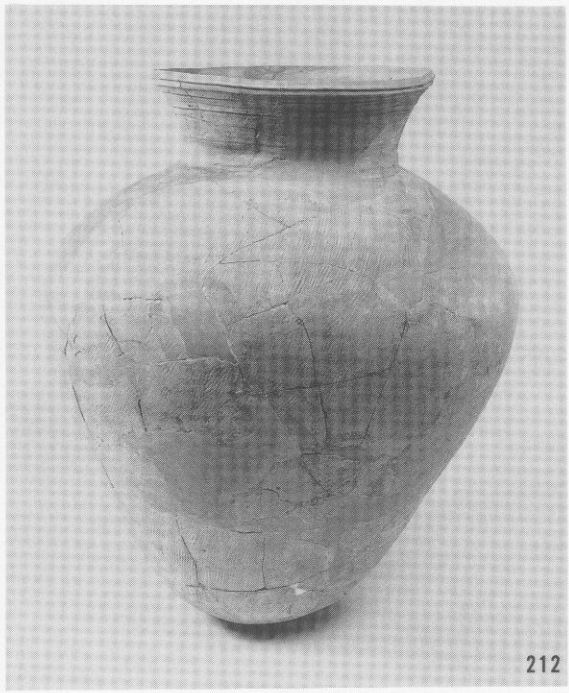

207

大溝出土土器







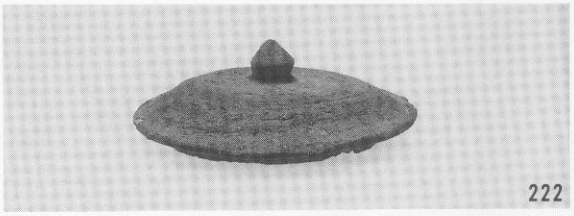


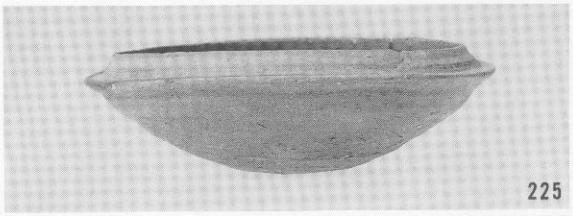


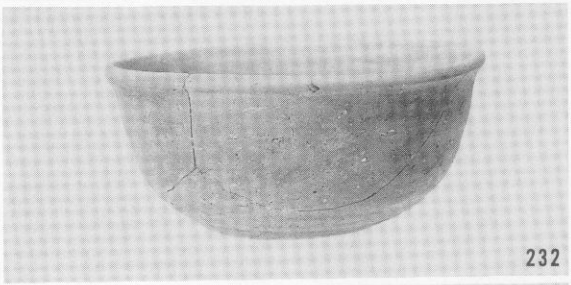


大溝出土土器


溝—215

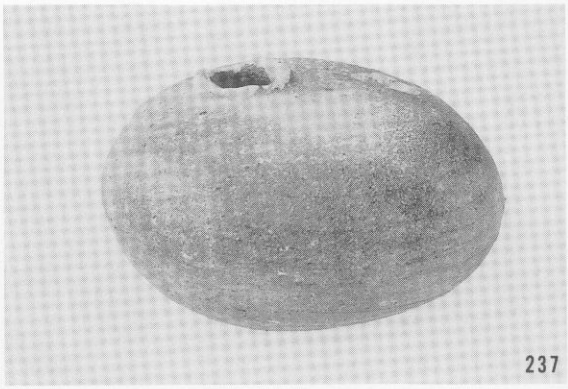

222


225


232

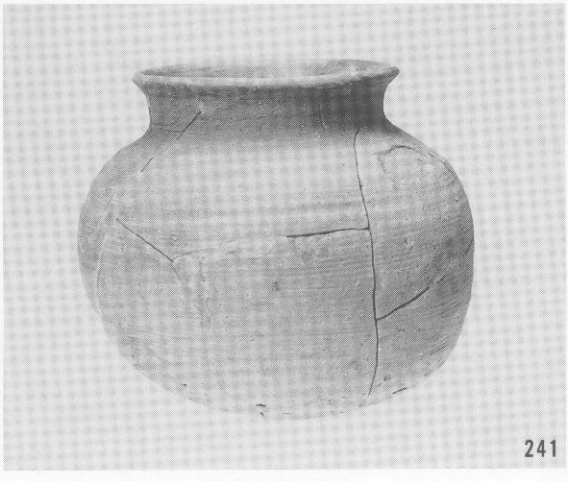

233


234


237


238


239


241

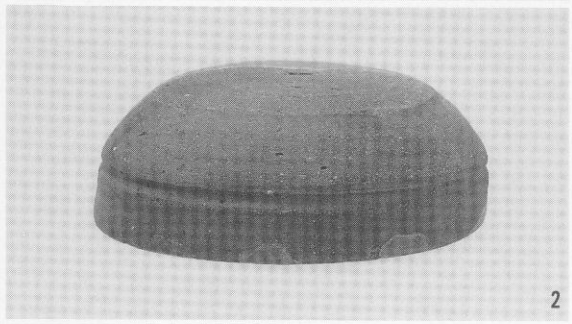
大溝出土土器


243


244


245


1竪—1

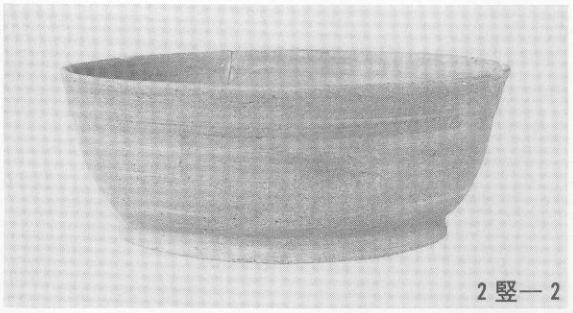

2

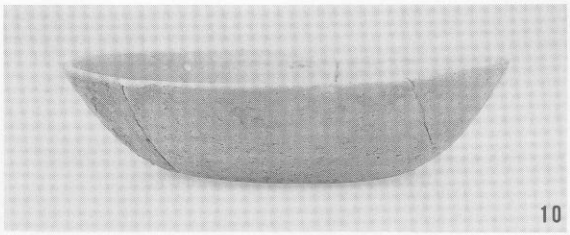

3

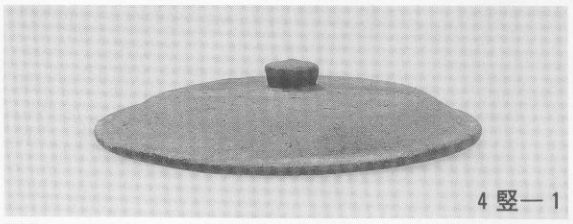

5

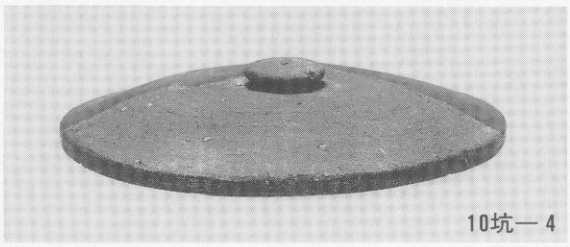

15

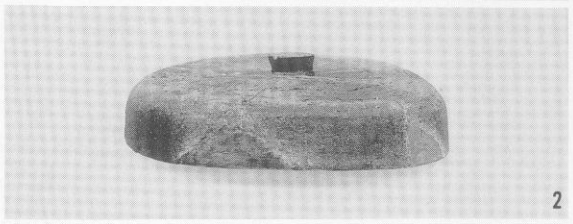
大溝・1号竪穴状遺構出土遺物

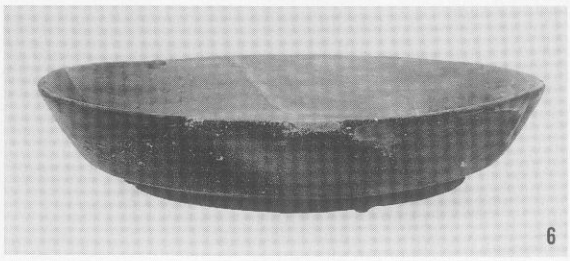

2竪—2


10

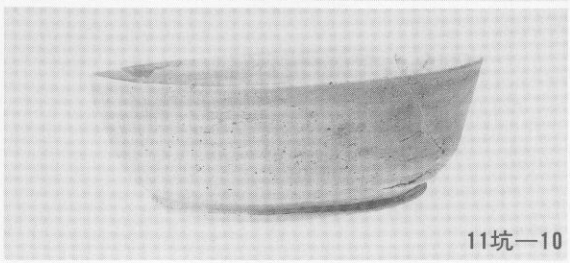

4竪—1

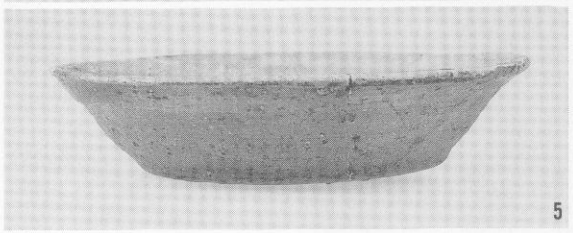

10坑—4

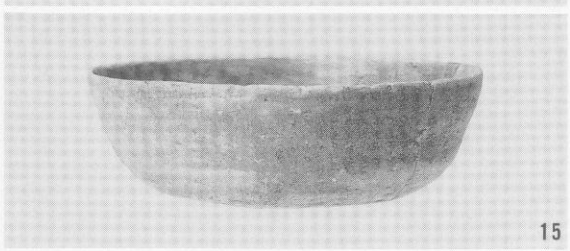

2

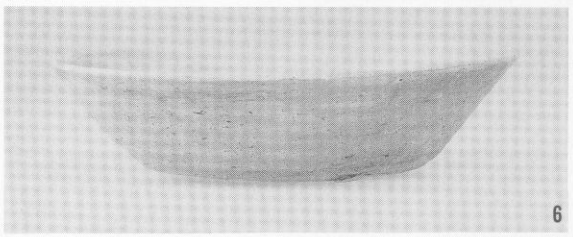

6

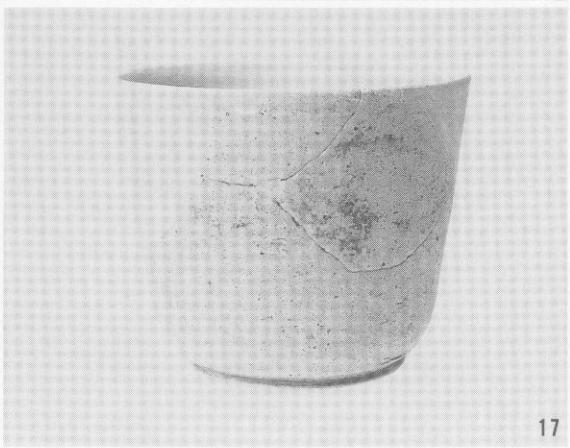

3

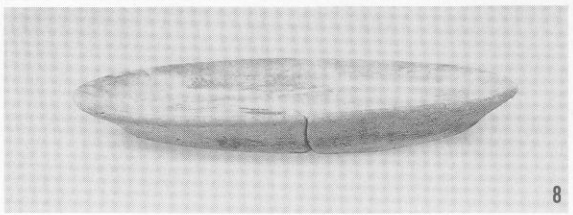

11坑—10


5

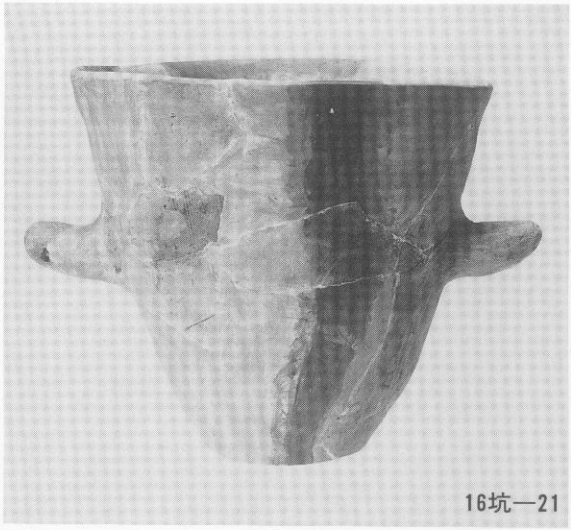

15


6


17


8

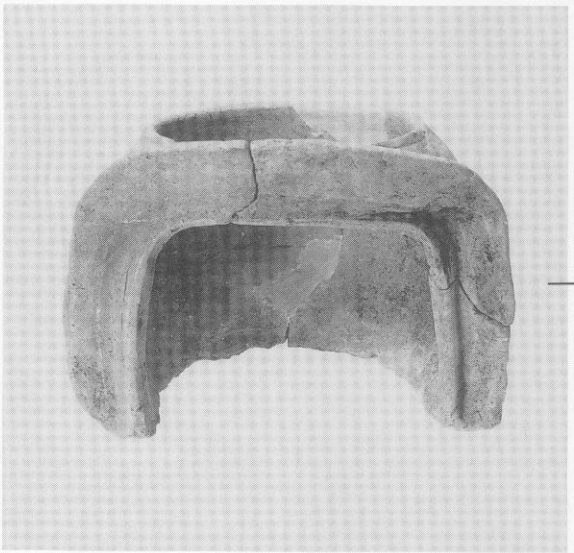
2号・4号竪穴状遺構出土土器、10号・11号土坑出土土器

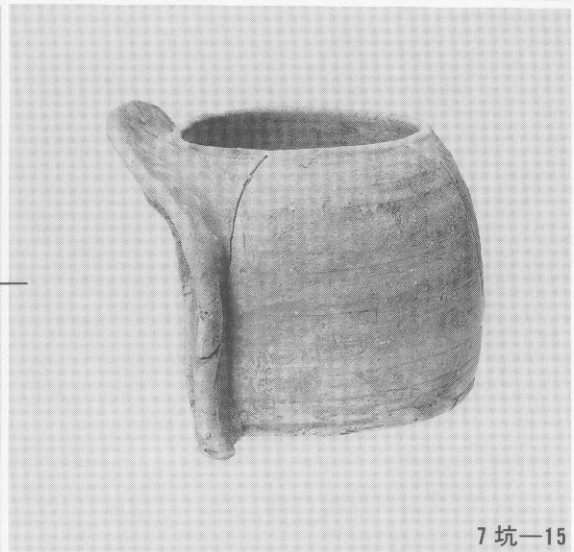


16坑—21

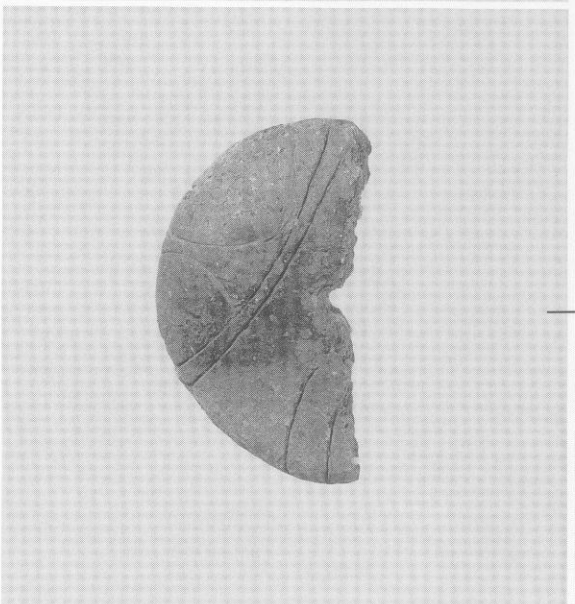


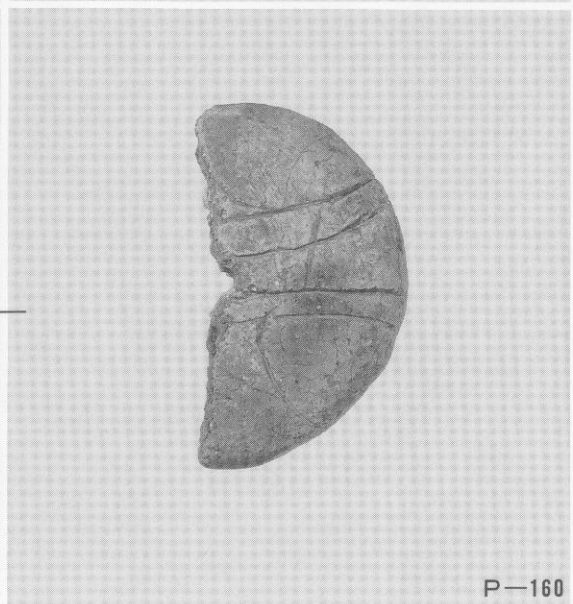
7坑—3





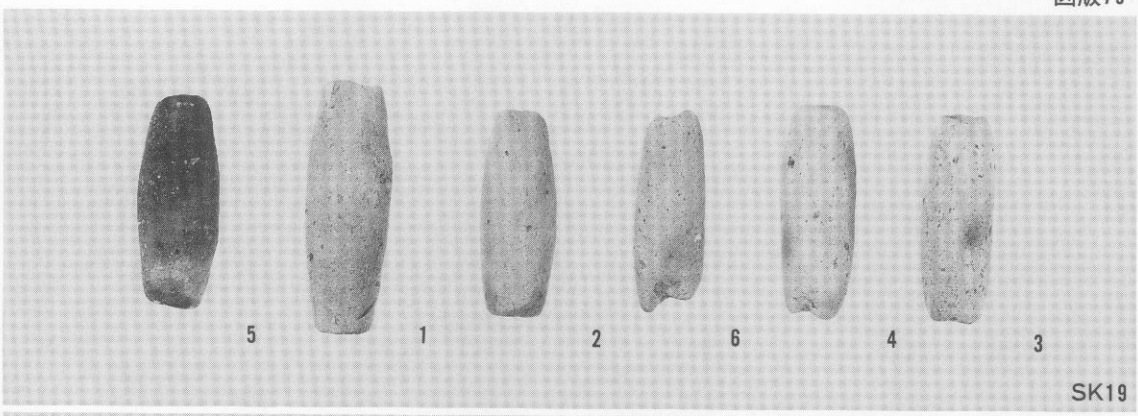
7坑—15





P—160

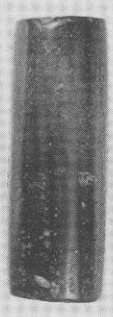
7号・16号土坑出土土器・竈、ピット出土土製品



SK19



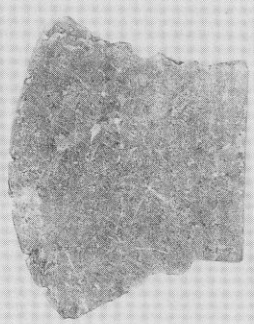
SK04—1



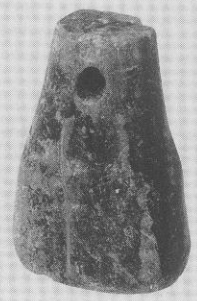
SK16—4



1竪—2



SK16—5



SK05—3



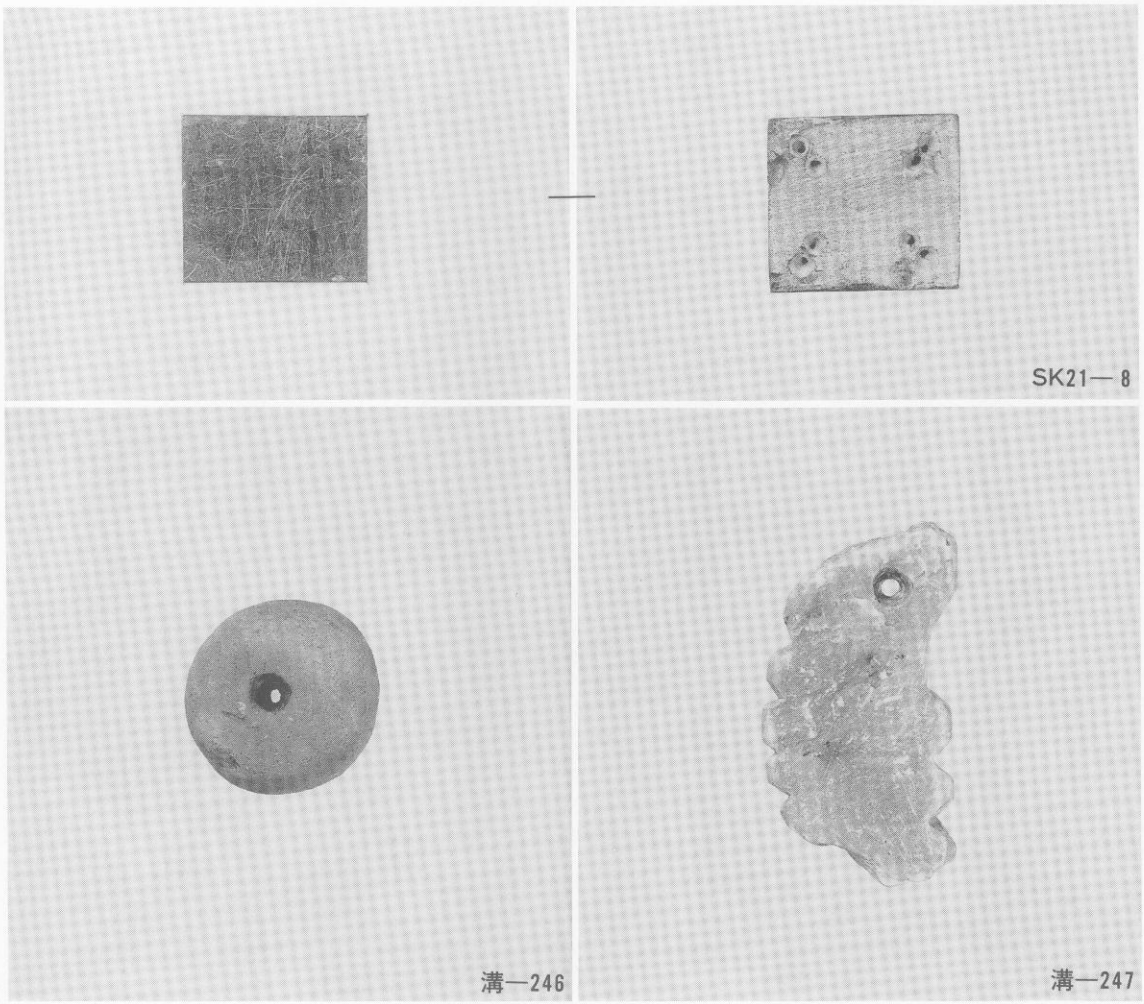
SK17—6



SK17—7

SK19出土土製品

SK04・SK05・SK11・SK16・SK17・SK21、1号竪穴状遺構出土土製品

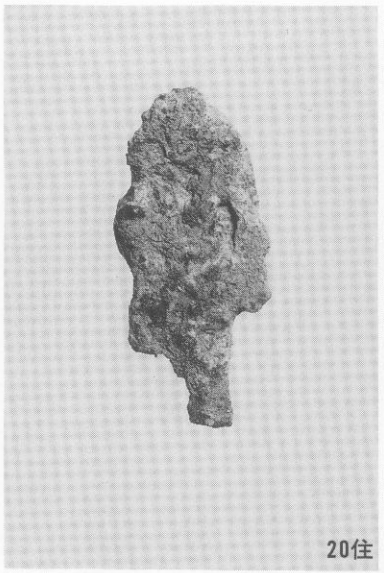


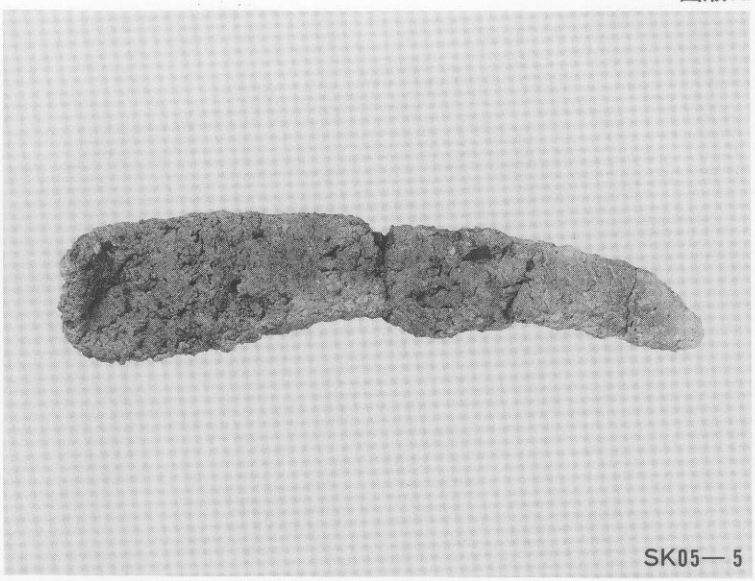
SK21出土石製品、大溝出土土製品・石製品

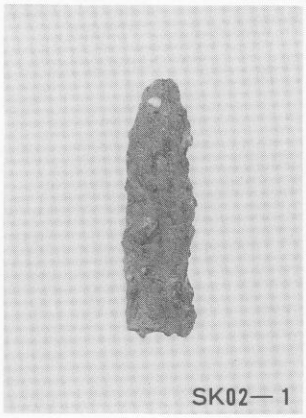




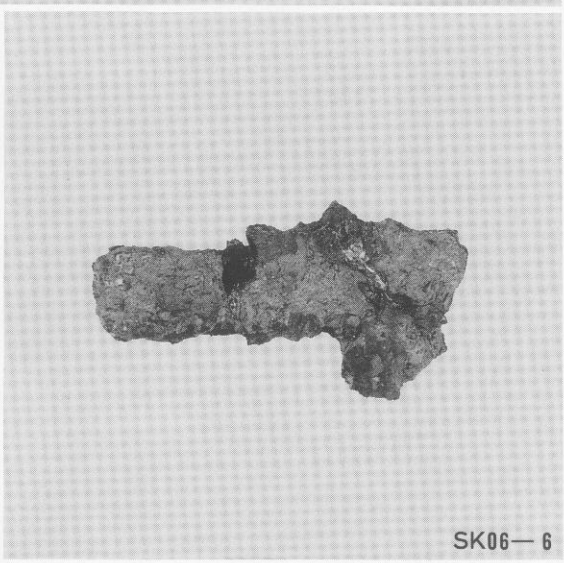
1号住居跡、SK04出土鉄器


20住

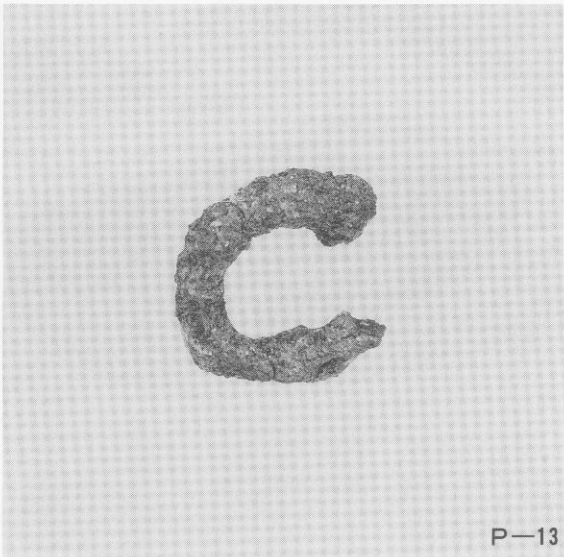

SK05— 5


SK02— 1

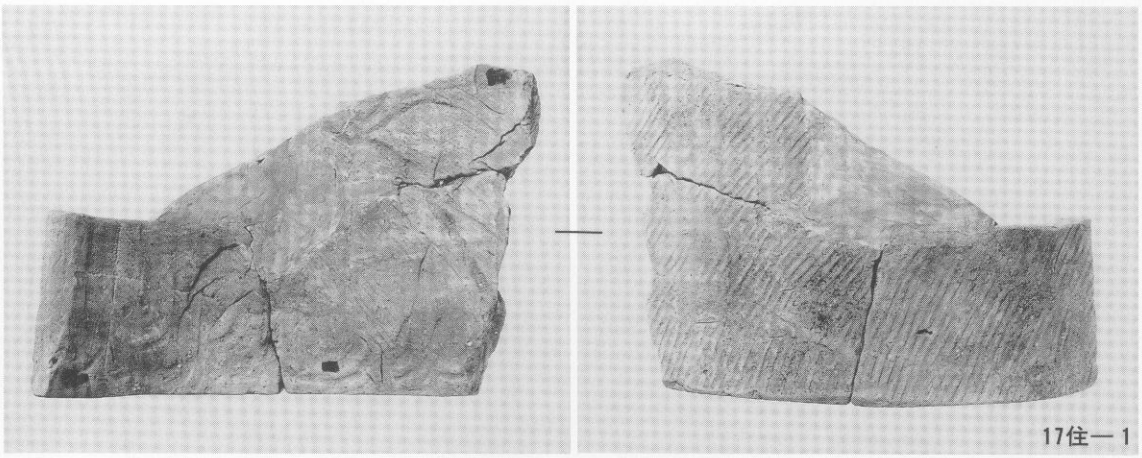

SK02— 2


SK06— 6

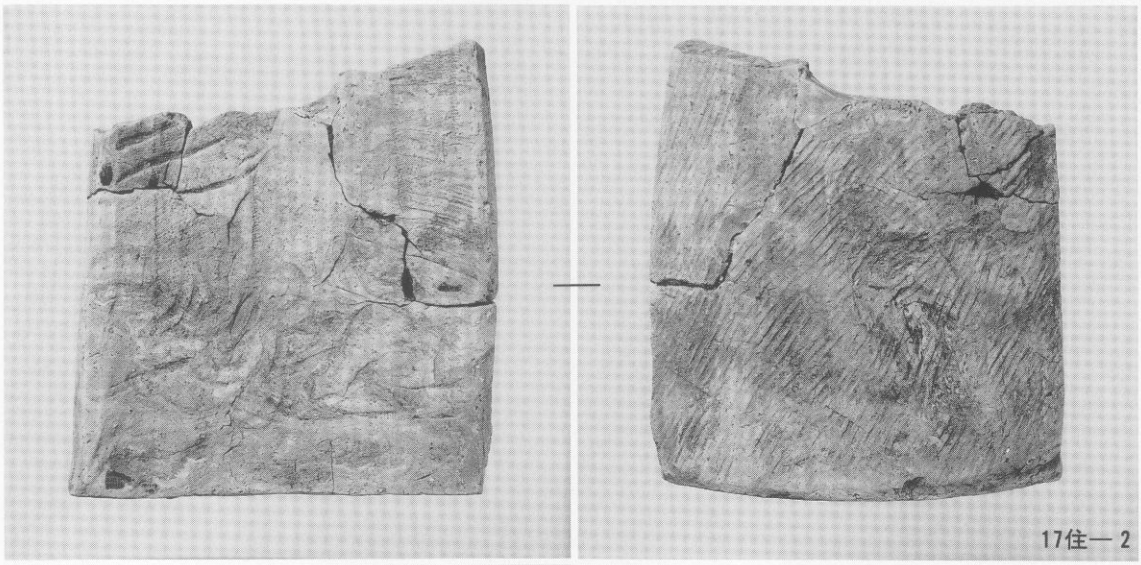

SK07— 3


P—13

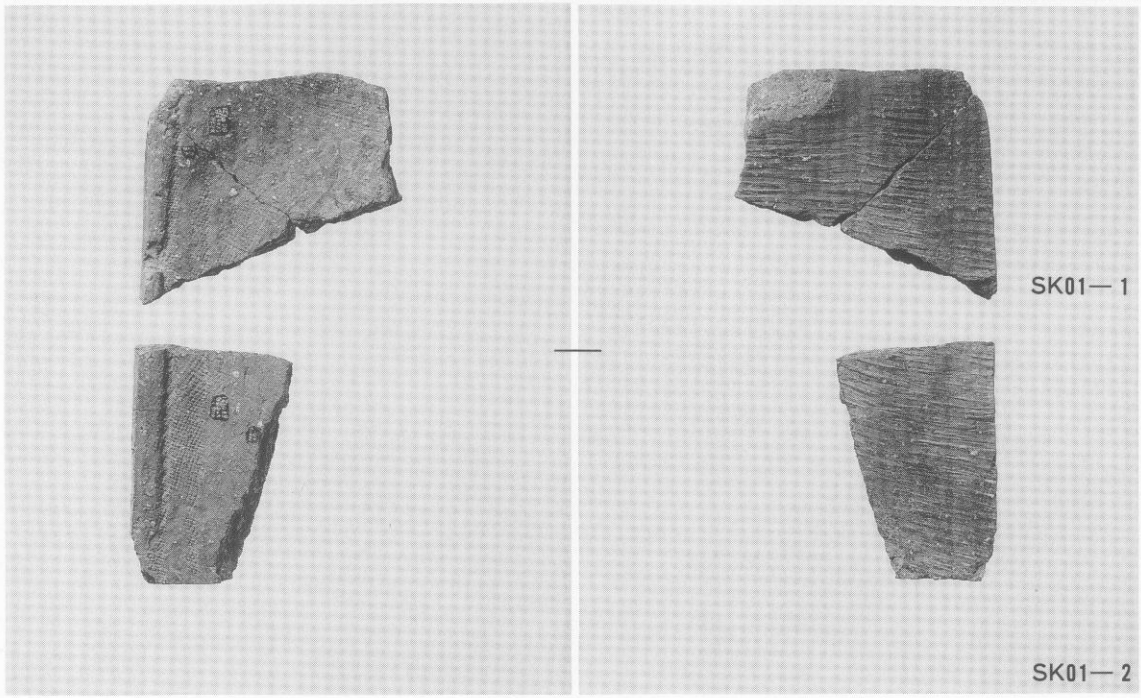
20号住居跡、SK02・SK05・SK06・SK07、ピット出土鉄器



17住—1



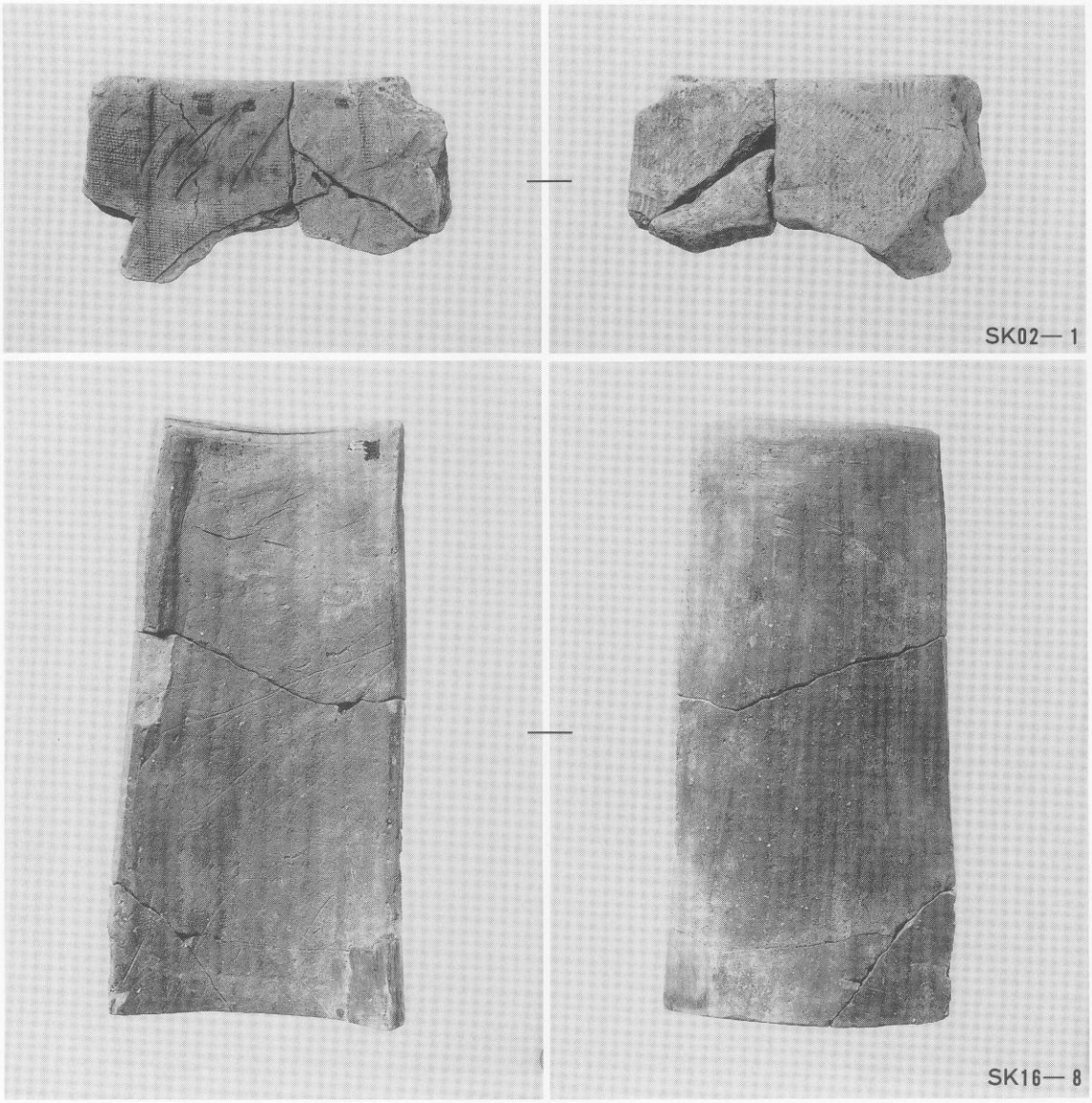
17住—2



SK01—1

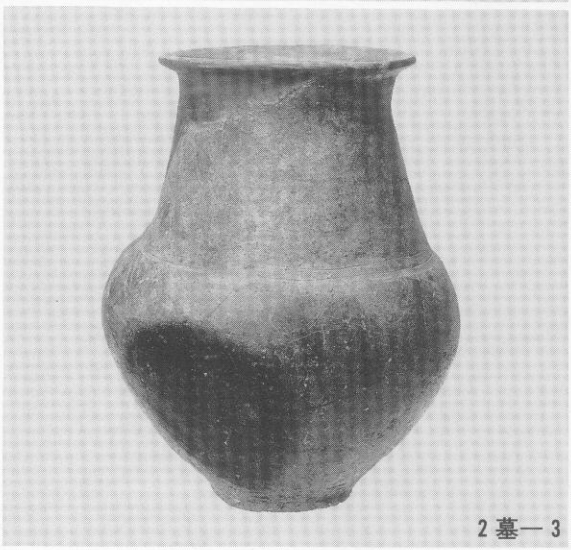
SK01—2

17号住居跡、SK01出土瓦

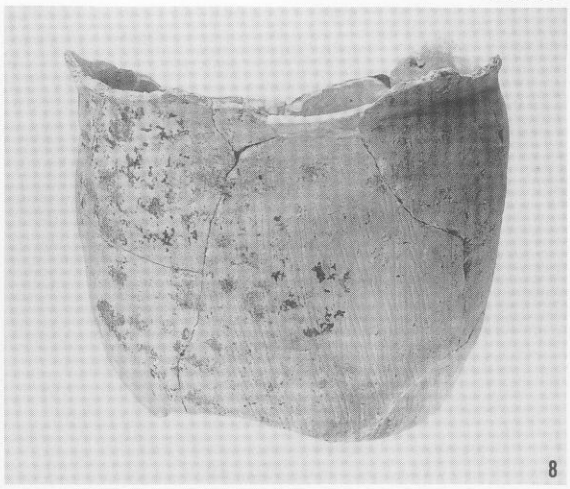


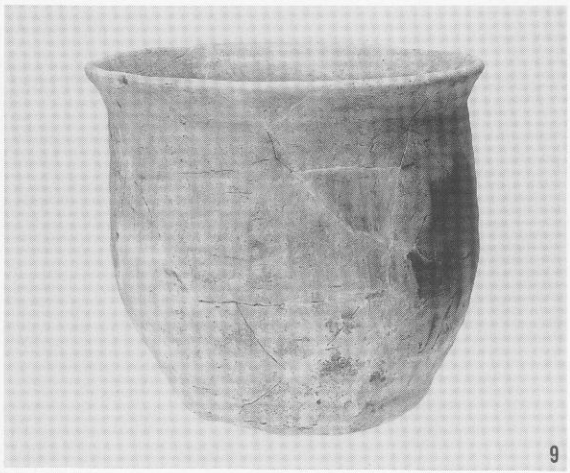
SK02・SK16出土瓦

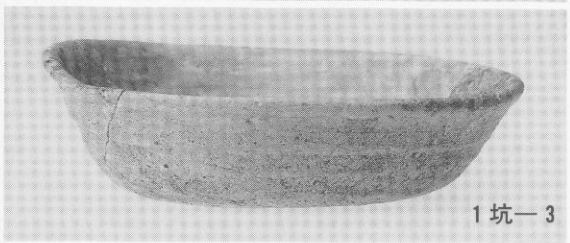

1 墓— 2

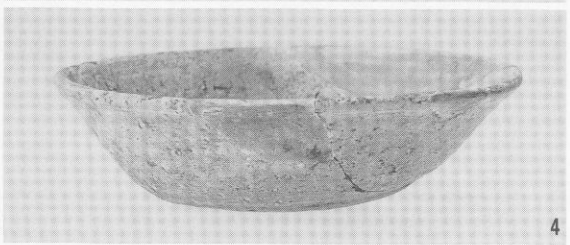

2 墓— 3


1 号墳— 3


8


9

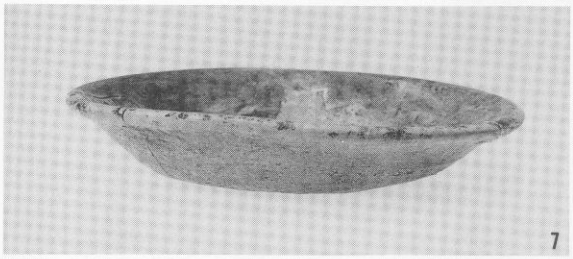

1 坑— 3

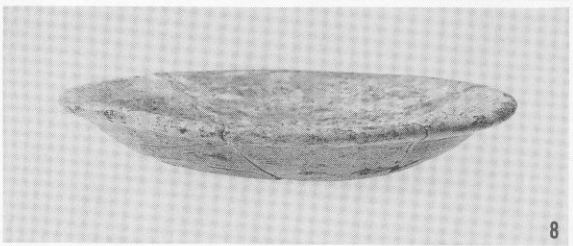

4

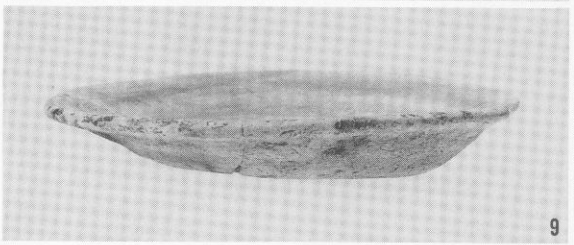

5

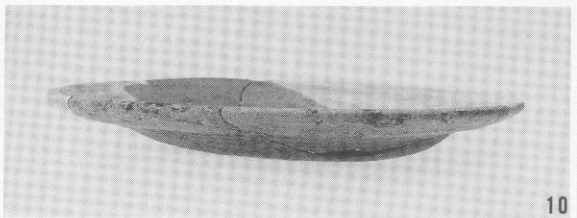
1 号・2 号土坑墓、1 号墳、1 号土坑出土土器

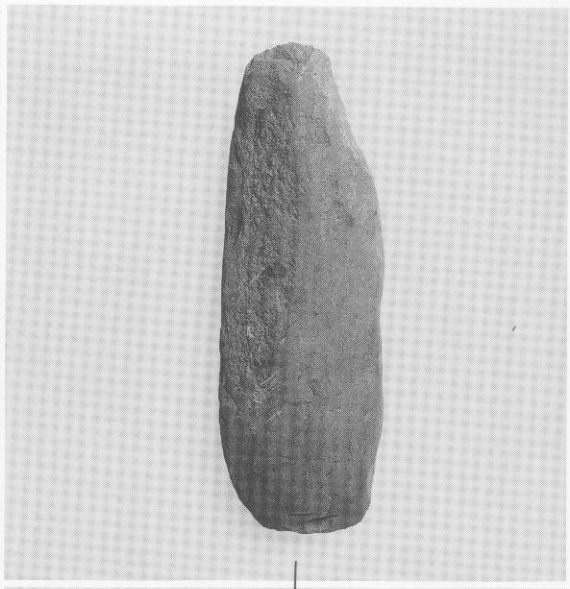

1坑—6


7

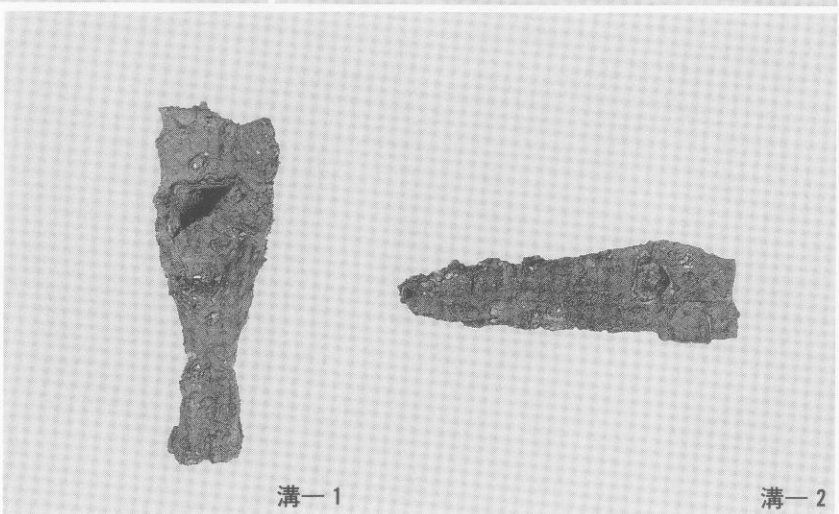

8


9


10

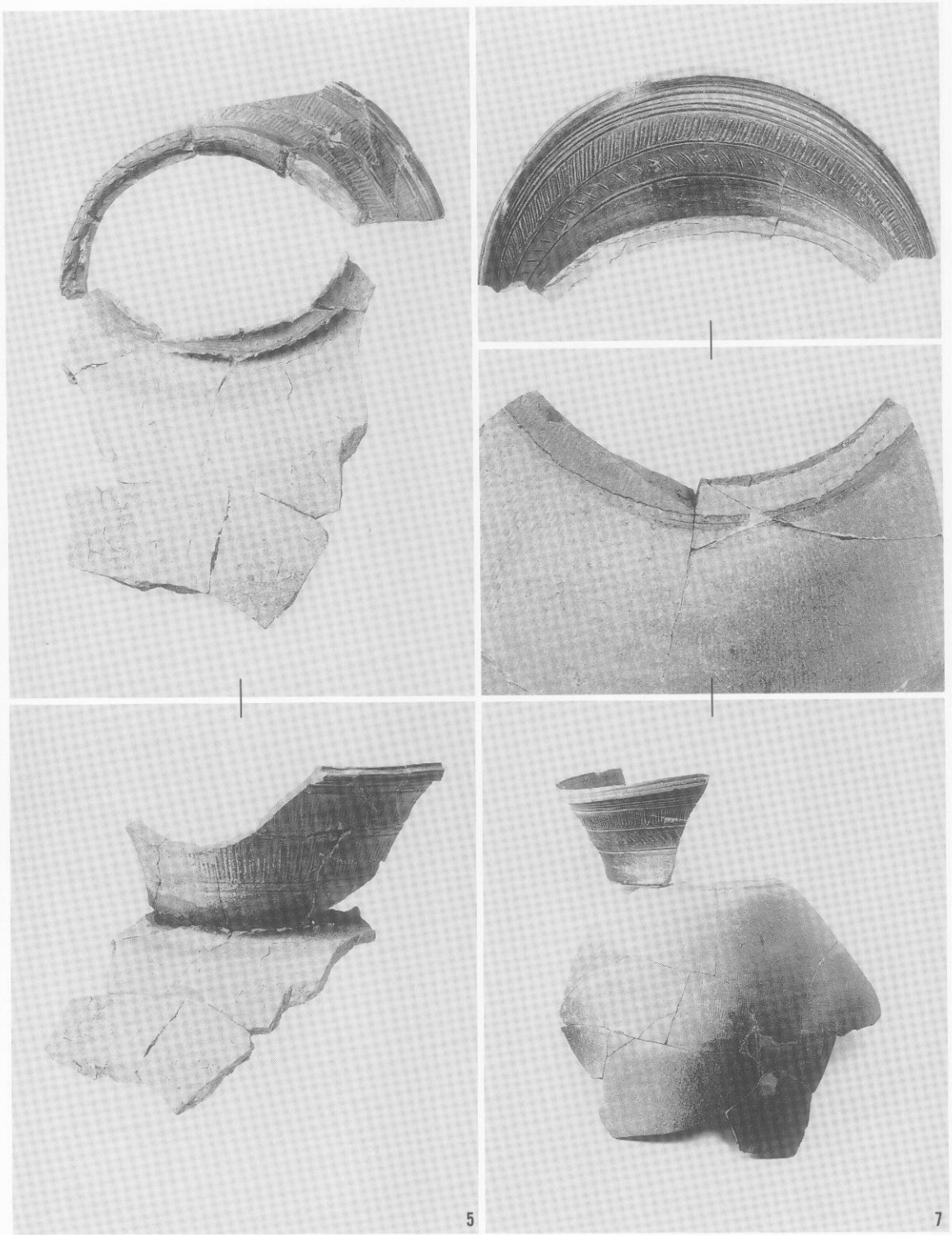



1号墳


溝—1

溝—2

1号土坑出土土器、1号墳出土石器、南西隅出土鉄器



1 号墳出土土器

報告書抄録

ふりがな	うしくびひのうらいせきぐん
書名	牛頸日ノ浦遺跡群
福書名	牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻次	6
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第42集
編著者名	舟山良一・向直也・徳本洋一・秀嶋和子
編集機関	大野城市教育委員会
所在地	〒816　福岡県大野城市曙町２－２－１　ＴＥＬ092－501－2211
発行年月日	西暦　1994年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
日ノ浦（ひのうら）	福岡県（ふくおかけん） 大野城市（おおのじょうし） 大字牛頸（おおあざうしくび）			33°30′12″	130° 28′21″	1988 09 07 〜 1990 02 08	4,100m²	区画整理 事業
日ノ浦II（ひのうらつー）	福岡県（ふくおかけん） 大野城市（おおのじょうし） 大字牛頸（おおあざうしくび）			33°30′16″	130° 28′20″	1988 11 18 〜 1989 06 21	1,800m²	区画整理 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日ノ浦	集落	古墳・奈良	竪穴住居23軒 廃棄土坑20基 溝　2条	縄文土器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦、円面硯鉄器、石器、土製品、石製品	縄文晩期から9世紀までの複合遺跡
日ノ浦II	墓 古墳 集落	弥生 古墳 平安	甕棺墓　2基 土坑墓　2基 古墳　1基 土坑　2基	弥生土器 須恵器、土師器 鉄器、石器	弥生前期から平安時代までの複合遺跡

大野城市文化財調査報告書

第 42 集

平成6年3月31日

発　行　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町二丁目2-1

印　刷　㈱昭和堂印刷
福岡市博多区榎田二丁目2-52